Dobutsugaku Zasshi

The monthly publication

of

The Zoological Society of Japan

Vol. 3

明治二十四年

# 動物學雜誌

第參卷總目錄

# 動物學雜誌第參卷自第廿七號至第卅八號總目錄


| | |
|---|---|
| 緒言 | 一 |
| 日本産蝶類(石川千代松)(挿畫)(第一第二第三回)(第一、二、三、五、九圖版) | 一、五四、九五 |
| 日本産ノ蝸牛科(飯島魁)(第二、第三、第四、第五回)(四版、七版) | 六、六〇、一一八、一九八 |
| 相州三浦三崎近傍に於て獲たる Hydroidea(稻葉昌丸)(挿畫) | 九、三〇一 |
| 海産動物保存法(丘淺次郎)(第三、第四回) | 一三、六三 |
| 理科大學標本日本頭脚類目錄(池田作次郎)(第三、第四、第五、第六、第七、第八) | 二三、六〇、一四四、二三九、二九二、三二四 |
| 動物解剖手引草(岩川友太郎)(挿畫) | 三〇、九八 |
| 動物解剖手引草(岩川友太郎)(挿畫)(鳥類ノ部) | 一五三、一八五、二二八、二八一、三二一、三六八、四〇八、四四二、四七七 |
| 動物彩色の起源及び効用(宍戸一郎) | 三五、六六、一〇四 |
| 普通動物學講義(箕作佳吉) | |
| 第五門　蠕蟲第一綱扁蟲類 | 三八 |
| 第一目　渦蟲(第一版) | 六八 |
| 第二目　吸蟲(第三版) | 一〇七 |
| 第三目　絛蟲(第五版)(挿畫) | 一五六 |
| 第四目　紐蟲(第六版) | 一九九 |
| 第二綱　圓蟲類第一目線蟲(挿畫) | 二五六 |
| 第一目　線蟲(第八版) | 四一二 |
| 第二目　鉤頭蟲(第九版) | 五〇〇 |
| 遺傳(はいすまん氏演説)(石川千代松譯) | 三九、一一四、一九二、二九三、三五〇、三八五 |
| 備前くらげ(岸上鎌吉) | 五三 |
| 東京市民ノ食膳ニ供スル動物ニ就テ(波江元吉) | 七二、三一七、四九〇 |
| ゆふれいくらげ(岸上鎌吉)(第二版) | 九三 |
| 冬季六足採集の必要(名和靖) | 一〇二 |
| 日本鳥類ノ分布ニ付キ(飯島魁) | 一四一、一八三 |
| 三月下旬高知近傍ニ於テ採集セシ蝶類(吉永虎馬) | 一九一 |
| 對馬採集日記(波江元吉、土田兎四三) | 二二五、二八四 |
| 島雜記(飯島魁) | 二三二、二七二、三〇九、三五七、四〇一 |
| かぶとがにノ位置(岸上鎌吉) | 二三六 |
| 蟬の採集法(名和靖) | 二四四 |
| 島根縣下鳥類目錄第一回報告(渡邊盈作) | 二四六 |
| 靜岡縣ニ發見スル鳥類目錄(丹羽甲子郎) | 二五〇 |
| 蚯蚓ノ解剖(松井敬勝) | 二六七 |
| みづくらげ(岸上鎌吉)(第七版) | 二八九 |
| 三崎ノ櫛水母(中西準太郎)(挿畫) | 三五三 |
| うみがめノ産卵ニ就キテ(箕作佳吉) | 三六二、三九七 |
| 日光産さんせうをノ卵並ニ産卵期(池田作次郎)(挿畫) | 三九五 |
| 蟬に就きて(田中勝之亟) | 三九八 |
| からむくどりニ就キテ | 四〇八 |
| かりぶであ屬ノ二種ノ新くらげ(岸上鎌吉)(木版圖六個入) | 四三七 |
| こきくがしらかはほりニ就テ(波江元吉)(挿畫) | 四四〇 |
| あまがひる(Hyla arborea, L.)ノ卵並ニ産卵期(池田作次郎)(挿畫) | 四四五 |
| 鷸ノ話(飯島魁) | 四四八、四九三 |
| 最下等ノ生物(石川千代松)(挿畫) | 四三一、四五八 |
| 鳥日記(丹羽甲子郎) | 四七七 |
| 動植物共棲之話(石川千代松)(挿畫) | 四八三 |

# 動物學雜誌

第參卷總目錄

...ra - Hydroidea obtained in Misaki, Miura
+ Soshu
pp. 9-13, p 301-309
Continued from vol. 2
" in " 4

べりかん鳥を獲たり(渡邊鉞作) 二〇六
たちのうを族に就て(仝上) 二〇六
鱘を用て絲蟲の驅蟲劑となす(仝上) 二〇七
カマキリの孵化(名和靖) 二〇七
正雪とんぼ(小笠原利孝) 二〇八
靜岡縣下ノ蝶類 二〇八
帝國大學紀要理科第四冊第一號 二〇九
ひがいノ說(松原新之助) 二〇九
うみやなぎ(仝上) 二一〇
てながざる 二一一
蠟敵の觸角の用に就て 二一二
Nippon no torimokuroku. 第卅一、二、四、五、六、七號
鳥信り 二五三
又鳥 二五九
川越ノ蝶類(大西靜) 二六〇
靜岡縣下蝶類 二六一
ヒオドシノ發生 二六二
桃醱漿(松井敬勝) 二六二
ピュチュリー氏ノバクテリヤ及ビ是ニ類似シタル生物ノ構造ニ就キテノ研究 二六三
島根縣松江市近傍ニ於て採集せし蝶類 二九六
鳥取縣下ノ大山椒魚 二九六
北海道鰊漁場ノ概況 二九七
飛鳥ニ就テ(挿畫) 二九八
Limnaea pervia ニ就テ 二九九
明治廿四年夏期三崎帝國大學臨海實驗場ニ在リテ研究セル模樣ヲ報シ併セテ地方臨海ノ同好諸君ニ一言ス(大作宗次郎) 三三一
相州三浦三崎採集動物 三三五
北海道沿海產板鰓類 三三八
北海道ニ新種ノ蝶 三四〇
あひるトかもノ躰重ト腦量トノ割 三四〇
動物の群体 三四〇
Hydroxylamin ノ收縮組織ニ對スル痲痺力ニ就キ 三四六
臨汀採集者ニ寄語ス(長濱策吉) 三七六
あさけとんぼ(梅村甚太郎) 三七八
蛙が蛙を呑む(仝上) 三七八
福島近傍產蝶目錄ノ正誤(仝上) 三七八
相州三崎帝國大學臨海實驗所概況 三七八
　實驗所室內ノ水族館 三七九
　ウエスト氏ノ厚情
　べんたくらいなを採集法 三八〇
いとひきぼて 三八一
くらげノ子供 三八一
いぼくらげ 三八一
脚氣病人日記拔萃 三八二
三崎ニ於テ獲タル外部寄生吸蟲 三八三
新刊書二三
本邦珊瑚ノ產地(松原新之助) 四二五
土佐に於て新に發見せし蝶類(黑岩恒) 四二六
伊勢菰野山ノさんせうを(梅村甚太郎) 四二七
同山ノかはがらす(仝上) 四二七
蠵龜 (Chelonia)ノ產 (仝上) 四二七
鮎の食物 四二七

しーめんつ氏つめた貝穿孔ノ説(藤田生)(挿畫)　四八六

## 寄書

甕牖雜記(上田英吉)
鯨ノ噴潮及ヒ拜風(挿畫)　四三
鱣魚　四五
牡蠣ノ中毒　七五
さびはぜ　七六
かいらせゑび　七七
水母目蝦瑣蛣腹蟹　一二五
鰹魚ハ火光ヲ忌ム　一二六
ひきノ燐光　二〇二
動物聲音考(野村彥太郎)
鹿、豚　七四
猿、羊、蝙蝠　一二三
蟲類　三七二
蟬、寒蟬、みんみん、かなかな　四一六
蟋蟀、螽蟖　五〇四

## 雜録

佐太神社の龍蛇　四六
同蛇に就て　四八
ダーウヰン氏ノ自傳　四八、八〇、一三三、一七三
とんぼとか(瑠璃仙)(挿畫)　七八、一二九、三四一
三重縣下ノ永良部鰻　八四
十二月ノ蝶　八四
白魚トぎやふノ漁獲　八五
生物學ト教育令　八五
十二月中蝶の捕獲　八五
ブラキストン線　八六
うなぎノ秀物　八八
種類亡滅の兆　八九
札幌博物學會　九〇
日本重要水產動植物圖　九〇
進化新論　九一
單細胞蟲ノ排泄器　九一
とうきん　九一
鳥類ノ体重ト腦重ノ割合　九二
外國ヨリ來狀(Wasserstoff Supraoxyd)(Hydroxylamin)　九二
甲殼類ト蜘蛛類ノ頭胸部ハ相同ナルカ(岸上鎌吉)　一二八
Rhabdnema nigrovenosum ノ内皮ニ於ケル核ノ直接分裂　一二八
Ascidiaus, Worms, Echinoderms. 等の幼蟲飼養法　一二九
北海道產鮭族(野澤俊次郎)　一六四
北海道ノ魚類(仝上)　一六四
地名ト魚類(仝上)　一六四
しゆしやも(仝上)　一六四
北海產あわび(仝上)　一六五
原形質運動ノ實驗的類似　一六五
人工溫度によれる蟻の單爲生殖　一六七
アナビナーゼ　一六九
貝殼中ノ貝　一六九
小昆蟲ヲ採集スル簡便法　一七一
蠅ノ恐ルベキヿ　一七一
セームボーム氏著日本帝國ノ鳥　一七二
電信柱ト動物　一七三

# 動物學雜誌第廿七號

明治廿四年一月十五日發兌


## 緒言

回顧スレバ本誌第一號ヲ發兌セシハ實ニ明治廿一年十一月ニシテ今ヲ去ルヿ二年餘ナリ爾來毎月號ヲ逐ヒテ續々發刊シ來リ本號ニ至リテ其第廿七號ニ及ビ第三卷ヲ始ムルニ至ル當初我輩ノ本誌ヲ發行スルノ目的ハ二ツナリキ一ハ即チ斯學ニ從事スル者ニ知識ヲ交換スルノ機關ヲ與ヘンヿ一ハ即チ斯學ヲ世上ニ擴メンヿ是ナリ

第一ノ目的ニ付キテハ案外ナル好結果ヲ呈シタルヿ毫モ疑フベカラザルナリ學者諸君ノ寄セラル丶論說ハ意外ニ多ク且ツ有用ニシテ實ニ日本ニ在リテ日本ノ動物學ヲ修ムルニハ本誌ヲ措キテ決シテ他所ニ之ヲ得ベカラザル貴重ナルモノ多シトスル是ナリ

第二ノ目的ハ達シ得タルヤ否ヤ其目的ノ性質ヨリシテ未タ之ヲ確言シ得ベカラズ然レ𪜈幾分カハ世人ニ動物學ノ何モノナルヤ理學トハ如何ナルモノナルヤヲ敎ヘ其有用ナルヿヲ感セシメタルヿハ我輩ノ信ズル所ナリ

當初ノ目的二條ハ尙ホ今日我輩ノ依然トシテ有スル所ナリ今後學者諸君ノ寄稿ハ益多ク益貴重ナランヿハ我輩ノ保證スル所ナリ全國中我輩ト感ヲ同ウスル人ハ我輩ヲ賛助セラレンヿヲ偏ニ我輩ノ希望スル所ナリ

## ●日本產蝶類

石川千代松

余ハ次號ヨリ日本產ノ蝶類 Rhopalocera ノ圖畫幷ヒニ名稱ヲ出スヿト致セリ而シテ本誌ニハ先ツ其緒言トシテ蝶類ノ採集法仔蟲ノ畜養法及ヒ其硏究法等ヲ簡單ニ記述セントス

### 一、採集器具藥品幷ヒニ採集法

蝶類ヲ採集スルニ必要ナル器具ハ掬網、採集箱及ヒ Cyanide potassium（サヤナイド ポタシウム）入ノ瓶ナリ、

掬網ハ通常魚ヲ捕フルニ用ユルモノニ西洋ノ蚊帳ノ巾チ

トリストマ科寄生蟲ノ感觸器　四二八
評判ト事實(名和靖)　四二九
小蛾の群集
小蛾とは蜉蝣なり
三浦三崎ニ付テ　四六三
うみがめノ新産地　四六六
ぎふてふ及他二種ノ新産地　四六六
ちやたてむし　四六七
昆蟲頭部ノ發生　四六八
にこちんト下等動物　四六八
帝國博物館天産部動物標本目錄　四六九
處カヲレハ品カヲル　四七一
かはがらもノ報　四七三
益鳥保護
蝙蝠通信(久松開孝、增田勇次郎)　五〇七
ひくらげ(岸上鎌吉)　五〇八
海苔　五〇九
石蟶　五〇九
カハチズミノ產地ニ就テ　五〇九
カハガラスノ產地　高松榮太郎　五一〇
叉かはがらす　五一〇
さなだむし　五一〇
モンシロテフの睡眠(名和靖)　五一〇
蚜虫の產卵(仝上)　五一一
ミノムシ木芽に類似す(仝上)　五一一
Melanites n. sp ノ新產地　五一二
靜岡ノ Papilio (丹羽甲子郎)　五一二
双尾ノ蜥蜴　五一四
六足蟲類の觸鬚の用　五一五
うみがめ　五一七
綠色はいごら蟲　五一八

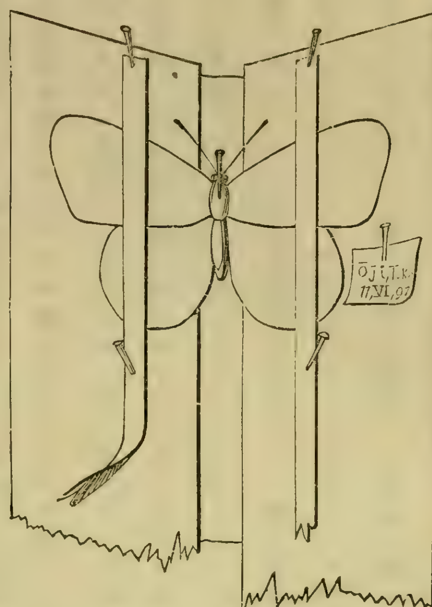
## 學會記事

東京動物學會　五二、九二、一四〇、一八一、二二四、二六四、三〇〇、三九三、四三四、四七六、五一八
三重動物學會第三例會　九二

# 總目錄終

キ箱ヲ二個カブセ合シタルモノニシテ其內面三側ニ於テ別ニ板ヲ付ケ一側ニ蝶番ヲ附シ以テ自由ニ開閉セシム、其長サ幅ハ持チ運ヒニ便ナル樣ニ餘リ大ナラス又餘リ小ナラサル樣ニ致シ其深サハ蟲針ノ長サニ關係アレハ餘リ深カラス又餘リ淺カラヌ樣ニ造リ各箱ノ深サ一寸モアレ

第五圖



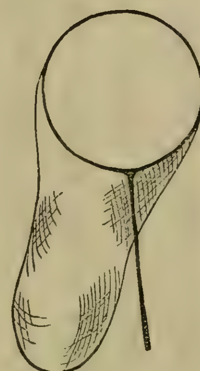
ハ澤山ナリ、箱ノ底ニハ二分位ノ薄キこるくヲ張リ付クヘシ、こるくハ板ナレハ結構ナレ圧之ハ容易ニ得ラルヽモノニ非サレハ通常ノ德利ノ口ノこるくヲ用ヒテ宜シ、

德利ノ口ノこるくヲ切ルニハ先ツ之レヲ温湯ニ入レテ充分ニ濕ラセ、薄キ及ノ小刀ヲ以テ縱ニ之レヲ切リ膠ヲ以テ箱底ニ張リ付クヘシ、又蝶番ノアル側ニ反對セル側ニ於テ小形ナル鉤ヲ付ケ箱ヲ閉チタル時無暗ニ開カサル樣ニ致スヘシ、又箱ヲ持運フニ便ナルカ爲メニ箱ノ側ニ環ヲ付ケ紐ヲ通シテ肩ヨリ掛クル樣ニ致スヘシ、

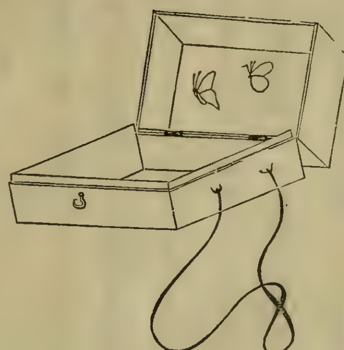
毒瓶(第三圖)ハしやみてふノ如キ小形ナルモノヽミヲ捕フル時ニ用ユルモノナレハ通常ハ之レヲ用ユル丁ナシ、然レ圧小形ナルモノハ之レヲ用ヒサレハ其羽翼ヲ損スルノ恐アレハ蝶ヲ採集スルニ於テ又必要ナリ、小生ハ通常ノ無型ノ水飮こっぷヲ用ヒ其底ニCyanide potassiumヲ少シク紙ニ包ミテ入レ厚キ洋紙ヲこっぷノ底ノ周圍ヨリ少シク大形ニ丸ク切リ其縁ヲ鋏ニテ少シツヽ中央ニ向ケテ切目ヲ付ケ此處ヲ一方ニ向ケ折リ返シ茲ニ糊ヲ付ケ紙面ニ多クノ小孔ヲ穿チ毒包ノ上ニ載セ糊ヲ付ケタル縁カ毒包ノ上ニ於テ調度こっぷノ內側ニ付着スル樣ニ致スヘシ、又こっぷノ口ハこるくヲ以テ最上等トナス、而シテ茲ニ又一

張リタルモノヲ便利トナス、網ノ長サハたまノ直徑ノ二倍半位ニ致スヘシ又網巾ヲ綠色ニ染ムルコヲ宜シトス之レ蟲類ヲシテ餘リ驚カサラシムレハナリ、(第一圖)

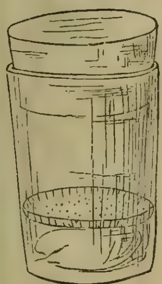
第一圖



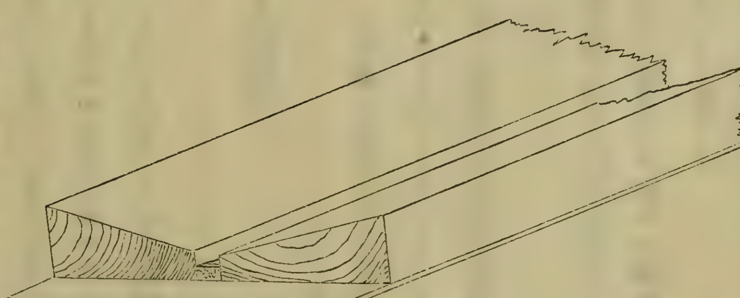
第二圖



第三圖



第四圖



採集箱ハ網ニテ蝶々ヲ捕ヘタル後之ヲ自宅迄持參スルノ便ニ供スル者ナレハ成可ク丈簡便ナルモノヲ宜シトス、余カ通常用ユルモノハ第二圖ニ示スカ如キ通常ノ蓋ノナ

面ヲ斜メニ鏟リタル板ヲ二枚用ヒ之レヲ圖ニ示スカ如ク中間ニ細キ溝ヲ殘シテ併列シ其間ニ細長ク切リタルこるくヲ張リ付クルヘシ、溝ノ深サハ蝶ヲ刺ス蟲針ノ長短ニ由リ異ルモノナリ而シテ蟲針ハ短キモノヨリ長キ方ヲ宜シトス、余モ從前ハ英國製ノ短キ蟲針ヲ用ヒタレトモ其蟲ヲ害スルノ憂アルヲ以テ近來ハ獨逸形ノ針ニシテ長サ一寸二分位アルモノヲ用ユ、故ニ溝ノ深サモ之ニ相應シテ四五分位トセリ、溝ノ底ニ張リ付ケルこるくハ厚クナクトモ宜シ、只タ蟲針ノ尖頭カ容易ニサヽリサヘスレハ宜シ、又溝ノ幅ハ幅ノ大小ニ由リテ異レハ廣キモノモ狹キモノモ造リ置クヿ必要ナリ、溝ノ兩側ノ板ノ勾配ハ銘々ノ好キ好キナリ、

偖テ前述ノ如クシテ殺シタル蝶ヲ取リ其胸側ヨリ刺シタル蟲針ヲ取リ去リ左手ノ拇指ト食指トノ間ニテ蝶ノ胸部ヲ柔カニ摑ミ新タニ其胸ノ背面ノ中央線ヨリ腹面ニ向ケテ刺シ通シ擴ケ板ノ中央ニ刺シ込ミ注意シテ翅ヲ左右ニ擴ケ第五圖ニ示ス如ク細長キ紙片ト止メ針ニテ之レヲ壓ヘ尖頭ノ鋭キ針ニテ翅ノ脈ノ處ニ引掛ケ翅ノ位置ヲ正スヘシ、翅ノ位置ハ乾キタル後成ル可ク丈ケ見場ノ宜シキ樣ニナスヿハ無論ニシテ昆蟲學者ハ通常前翅ノ後縁カ一直線ヲナス樣ニ致スナリ、

翅ヲ擴ケタル蝶ノ側ニハ必ス小紙片ニ其產地月日ヲ記シ止メ針ニテ止メ置クヘシ、必ス忘ル可ラス

右ノ如クシテ一枚ノ擴ケ板ニ數個ノ蝶ヲ擴ケ得ルモノナリ而シテ此板ハ可成丈安全ノ場處ニ置クヘシ、又蝶ノ翅ノミナラス其體、觸肢等ノ位置モ亦正シク致スヘシ、就中蝶ノ腹部ハ下ニ屈曲セサル樣ニ注意スヘシ何ントナレハ腹端ノ下方ニ屈曲シ藏蟲箱ノ底ニ觸ルヽヿアレハ此處ヨリ多ク蟲及ヒ菌類ヲ生スルノ恐アレハナリ、擴ケ板ヲ立テヽ置カハ之レヲ防クヿヲ得ヘシ、

擴ケ置キタル蝶ハ四五日間ノ後ニ至リ充分ニ乾キタルトキ丁寧ニ之レヲ取リハヅシ貯蟲箱ニ入レ貯ヘ置クヘシ、此時又其側ニ付ケ置キタル產地月日等ヲ記セル紙片ヲ各蝶ニ刺シ付ケ置クヘシ、

言シ置カサルヲ得サルモノハ此さやないとハ大毒ナレハ之レヲ用ユルトキハ必ス注意シテ其毒氣ヲ受ケサル樣ニ致スヘシ、

偖テ此諸器具ヲ以テ採集ニ出掛ケ向フノ方ヨリ大形ナル蝶ノ一疋飛ヒ來ルモノアレハ網ヲ張リテ之レヲ待チ之レヲ網中ニ入ルヽヲ得レハ其網ノ袋ノ底ニ近ク入ルヤ否ヤ網ノ柄ヲ横ニ振リ先ツ蝶ノ網口ヨリ外ニ逃ケ出サヾル樣ニ致シ置キ網ノ柄ヲ股間ニ挾ミ左手ニ袋ノ先ヲ持チ蝶カ翅ヲ縱ニ疊ムヲ待チ右手ノ拇指ト食指トニテ蝶ノ胸部ヲ左右ヨリ押シ潰シテ之レヲ殺シ袋內ヨリ取リ出シテ採集箱ノ內ニ入レ蟲針ニテ蝶ノ胸部ニ側面ヨリ箱底ニ刺シ付ケ置クヘシ、

若シ蝶カ飛ヒ居ラスシテ地上ニ止マリ居ルトキハ左手ニ網ノ下端ヲ取リ袋ヲ倒シマニシテ蝶ノ上ヨリ之レヲ覆ヒ蝶ノ飛ヒ上カルヲ待チテ之レヲ掬フヘシ

小形ナル蝶類ニシテ指ヲ以テ容易ニ殺スコトヲ得サルモノハ網ノ中ニ入レタル後右手ニ毒瓶ヲ取リ左手ニ其蓋ヲ取リ右手ヲ網ノ內ニ入レ蝶ヲ毒瓶ノ內ニ入レ蓋ヲ致シ二三分ノ後之レヲ取リ出シ採集箱ノ底ニ止メ付クルコト前述ノ如シ

採集シテ右ノ如ク一度殺シタルモノモ時ニ因リ亦蘇生スルコトアレハ歸宅ノ後充分ニ之レヲ殺スコト肝要ナリ而シテ之レヲ殺ス爲ニ用ユル藥品ハ種々アレトモ通常をくざりっく酸ノ結晶物ヲ水ニ溶解セルモノヲ宜シトナス、余ハ此毒藥水ヲ小形ノ瓶中ニ入レ置キ通常ノぺんニテ蝶ノ胸部ノ側面ヨリ體內ニ刺シ込ミテ殺スナリ、後蟲針ヨリ取リ翅ヲ擴クヘシ、

## 二、翅ヲ擴クル器具幷ニ其方法

蝶ノ翅ヲ擴クル爲メニ用ユル板ニ種々アリ或ハ蒲鉾形ノ板ノ中央ニ溝ヲ穿チタル樣ナルモノアリ或ハ全ク平坦ナル板ヲ用ユルモノアリ又或ハ溝ノ左右ノ板面ハ上方ニ上カル者アリテ皆人々ノ好ム所ニ由リ異ルモノナレトモ余ハ實驗上ヨリ板面ノ少シク左右ニ斜上スルモノヲ用ユ、之レヲ造ルハ最モ簡單ナリ即チ第四圖ニ示スカ如ク一方

十六) **Helix luhuana**, Sowerby.

第十版八圖

今第十版八圖ニ出シタルハ本種ノ最モ純粹形ナル者ナリ色ハ黃角色或ハ茶褐色ニシテ一條乃至三條(多クハ一條)ノ黑色帶アリ而メ臍モ亦黑シ、臍孔大、殼口廣シ圓ク半月形ヲナシ唇外折ス、楷數六ナリトス

本種ハ本ト琉球ニテ發見セラレタルモノナルガ日本至ル所ニ產シ最モ普通ナル蝸牛種ノ一ナリ但シ北海道ニモ產スルヤ余知ラズ、琉球產ノモノハ大徑四十一ミメ、小徑三十五ミメ、高サ二十ミメ、內地ニ產スルモノハ稍々大ニシテ大徑四十八ミメ　ニ達スルモノアリ本種ノ變形甚ダ多クシテ一方ニハ Senckenbergiana ニ又一方ニハ peliomphala(十七)ニ混同スルモノナリ、即チ讀者若シ許多ノ蝸牛殼ヲ集メナバ其種果シテ(十五)ナルカ、(十六)ナルカ、將タ(十七)ナルカ到底判斷シ得ベカラザル者ヲ發見スルナラン、本種ハ殊ニ peliomphala ニ近シ然リト雖モ此種(即チ peliomph.) ノ純粹ナル者ハ螺楷ノ稍々平カナルト殼口ノ餘リ斜ニ横ニ擴ガラザルトニヨリ純粹ノ Luhuana ト異ルアリ(八圖及ビ九圖ヲ比較シ見ルベシ)且ツ又甲ハ乙ヨリモ殼質薄ク平滑ナリ理科大學蒐集中ニハ本州諸所ヨリノ標品アリ

十七) **Helix peliomphala** Pfeiffer.

第十版九圖

是又本邦中最普通ノ一種ナルガ其形狀ハ大ニ變化スルモノナリ、今第十版九圖ニ示シタルハ最モ純粹ノモノニシテ前種ニ甚ダ近似ス然レ𪜈形狀上既ニ陳述シタル差異アリ、大サ前種ニ等シ、楷數五半ナリ而シテ其色ハ黃色ニシテ、少シク綠色ヲ帶ブモノアリ、黑色ノ條帶三アリテ臍黑シ、是最モ通常ノ有樣ナリ、時ニ上黑帶ヲ欠キ、時ニ上下帶トモニ欠キテ唯中帶ノミヲ存ス、又稀ニハ全ク條帶ナキヿアリ、啻ニ條帶ノ點ニ於ケルノミナラズ又形體上種々ノ變化アリテ已ニ述ベタルガ如ク H. Luhuana ト混同ス、第十圖ニ示シタルガ如キハ純粹形ト甚ダシク異ナリト雖モ中間形アリテ相連續スルガ故ニ之ヲ一變種ト看做

貯蟲箱ハ如何ナル箱ニテモ充分ニ密閉セル箱ナレハ宜シキモノナレ圧內ニ入レ置ク蝶ヲ容易ニ見ルノ便ヲ得セシメンカ爲メニ一方面ヲ硝子張リニ致スヘシ、箱ノ底ニハこるくヲ張ルヲ最上等トスレ圧こるくハ通常得難キモノナレハ疊ノ表ヲ張リテ其上ニ白紙ヲ張リ付ケテモ宜シ、又貯蟲箱ハ如何程密閉スト雖圧容易ニ蟲類菌類等ヲ生スルモノナレハ蝶ヲ入レタル時ハ必ス共ニなふさりん或ハ樟腦ヲ入レ置クヘシ、

（以下次號）

## ●日本產ノ蝸牛科　（第二回）

飯島魁

前號ニ附シタル第十版中、一、二、三及ビ十四圖ハ少シク廓大シタルモノナレバ其自然ノ大サハ本文ニ就キテ知ラルベシ自餘ノ諸圖ハ皆凡ソ自然大ナレバ其ツモニリテ參照アレ

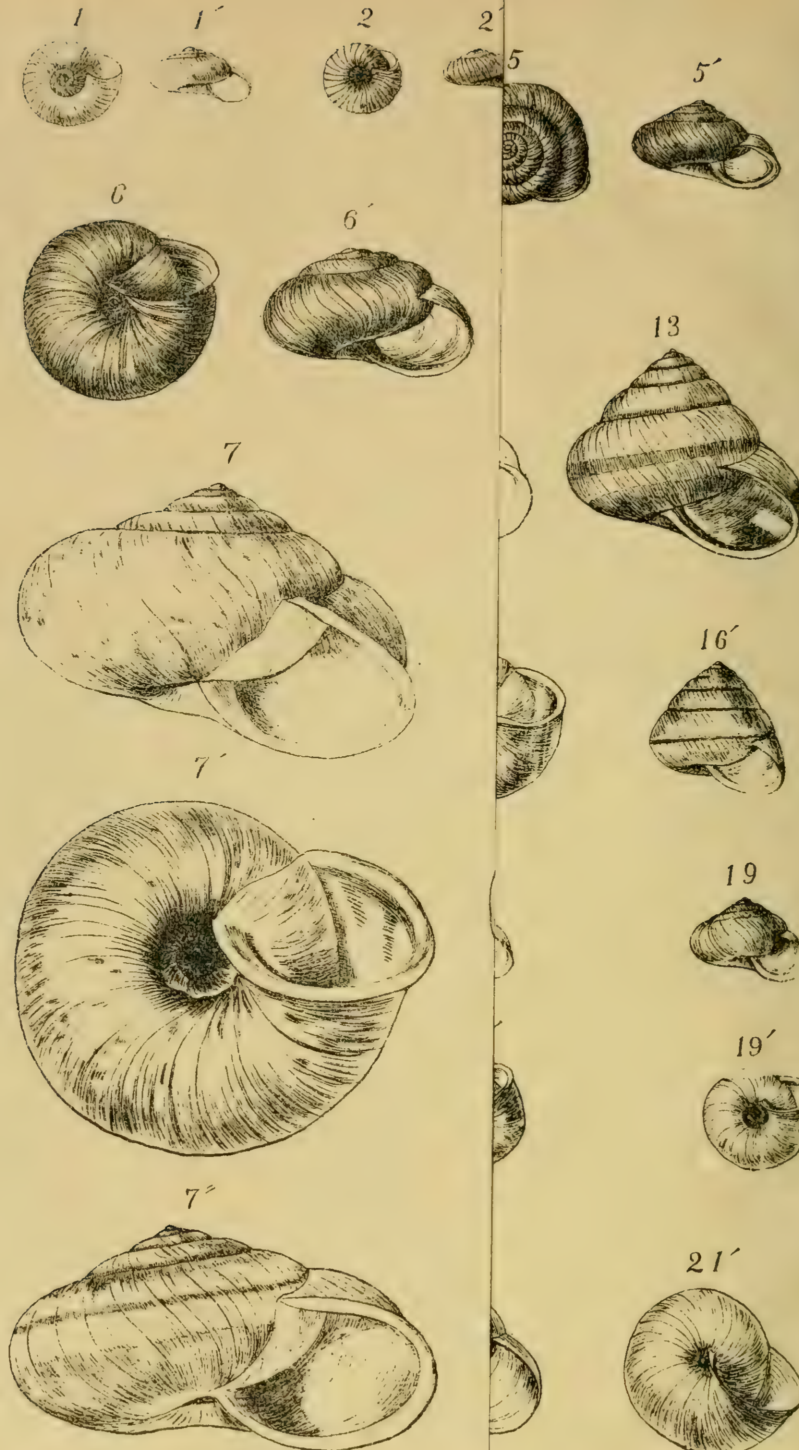
十五）**Helix senckenbergiana**, Kobelt.

第十版七圖

是ハ圖ニテ見ラル、如ク甚ダ大形ノ種ナリ臍孔廣ク殼質堅固ニシテ粗糙且ツ不規則ナル條線ヲ示シ此表面ヲ蟲眼鏡ニテ觀レバ誠ニ細小ナル螺旋線ノ爲メ微カニ顆粒狀ナルガ如シ、色ハ一樣ニ鮮明ナル赤褐色（7及ビ7′圖）ナルカ或ハ又暗色ノ三條帶アリ其內中程ノ一條帶ハ細クシテ赤褐色部ハ其上ト下トニ帶ヲ成シテ存生ス（7″圖）時トシテ中程ノ暗色條帶ノミヲ有シテ自餘ノ部ハ總テ鮮明赤褐色ナルナリ、楷數ハ五半、殼口斜ニシテ廣ク略ボ半月形ヲナス、脣ハ厚ク外折シ汚紫色ヲ呈ス薄キ硬皮アリ、殼口內ヲ見ルニ暗色條帶透ケ見ユ

殼ノ大幅五十六ミメ、小幅四十七ミメ、高サ三十ミメ

產地ハ加賀國白山近傍一ノ瀨ナリ、尙ホ他ニモ此種ヲ產スルノ地アルナラン又多クノ變種アルナルベシ、實際其二三變種ハ世ニ知ラレ居リテ H. Luhuana.（十六）トノ分界判然セズ、要スルニ Senckenbergiana ハ Luhuana ノ一大變種ト看做スモ不可ナキナリ、余未ダ本種ヲ實見セズ、理科大學ニ其標品ナシ



1
1′
2
2′
5
5′
6
6′
13
7
16′
7′
19
19′
7″
21′

シ H. peliomphala vor. Hickonis ノ名ヲ以テ知ラル、此者大ニ H. nipponensis（十二圖）ニ類似セリ、其他尚ホ第十三圖ニ出シタル H. amaliæ 若クハ H. eoa（此種ノ圖ハ次號ニ出ス）ニ似タル者アルナリ、抑モ生物ノ種ト名ヅクルモノハ決シテ明瞭ニ定マリタル範圍アルモノニ非ザルヿハ蝸牛種ヲ定メントスルニ際シ忽チニシテ之ヲ曉ルナルベシ

理科大學蒐集中本邦數ケ所ヨリノ標品アリ

十八）**Helix nimbosa,** Crosse.

第十版十一圖

形狀ハ H. Luhuana 並ニ H. peliomphala ノ兩種ニ似タル所アルガ如シ、臍ハ廣ク開クト雖モ忽チニシテ狹ク細孔トナル、殼ハ中々堅固、光澤少クシテ相交叉セル細線ノ爲メニ顆粒狀ヲ呈スルヿ通常ノ如シ、螺旋部僅カニ凸マリ六楷アリ、殼口前種ノ如ク斜ナラズ、唇ハ殼內面ト共ニ暗紫色、大ニ外折セリ、外面ノ着色ハ淡黃、黑色臍點ノ外ニ三條帶アリト雖モ各屢々間絕シテ連續セズ

本邦中此種ヲ產スルノ地詳ナラズ、理科大學ニ其標品ナシ

十九）**Helix nipponensis,** Kobelt.

第十版十二圖

其殼低キ圓錐形、臍孔中大、殼質堅固ニシテ規則正シク斜ニ細線ヲ呈ス、該線ハ縫合線ニ近ヅキテ最モ著明ナリ、臍紋ナク一面淡黃色ニシテ只唇ノミ淡紅色ナリ、楷數五半アリ、殼口斜ニ傾キ、圓キ半月形ヲナシテ横ニ延擴ス、唇大ニ外折シ薄キ硬皮アリ

大徑三十六ミメ、小徑三十ミメ、高サ二十二、五ミメ、殼口ノ幅二十ミメ此種ハ純粹ノ H. peliomphala トハ甚ダ形狀ヲ異ニスト雖モ然レド其一變種ナリト看做スモ敢テ不可ナキナリ、其主ナル特徵ハ一色ナルヿト殼口ノ形狀ニアリ、本邦諸所ニ產ス、理科大學ニハ東京、西京、神戶等ヨリノ標品アリ

二十）**Helix amaliæ,** Kobelt.

第十版十三圖

殆ド圓錐狀ニシテ臍孔狹ク、殼ハ薄ク半透明ニシテ光澤アリ、細密ノ線アリ、蟲眼鏡ニテ觀ルトキハ微カニ顆粒狀ヲ呈ス、色ハ赤色ヲ帶ビタル茶褐色ニシテ暗褐色ノ臍紋及ビ同色ノ二條帶アリ其上帶ハ細ク下帶ハ太シ、時ニ下帶ハ臍紋ト合シアリ又時ニ條帶及ビ臍紋ヲ全ク欠キテ一色ナルアリ、楷數五アリ、口ハ斜向シテ畧ボ圓形ナリ、外縁及ビ下縁ハ外折シ、薄弱ナル硬皮アリ大徑二十四乃至三十一ミメ、高サ十九乃至二十七ミメナリ、

此種ハ H. peliomphala ノ純粹ナル者トハ頗ル異ナレドモ兩種ノ變種中ニハ大ニ相近似スルモノアリ

余未ダ此種ヲ見タルコナシ、理科大學之ヲ藏セズ、外人嘗テ此種ヲ出雲、日本本州ト四國ノ間ナル島等ニ於テ採集シタリト云フ

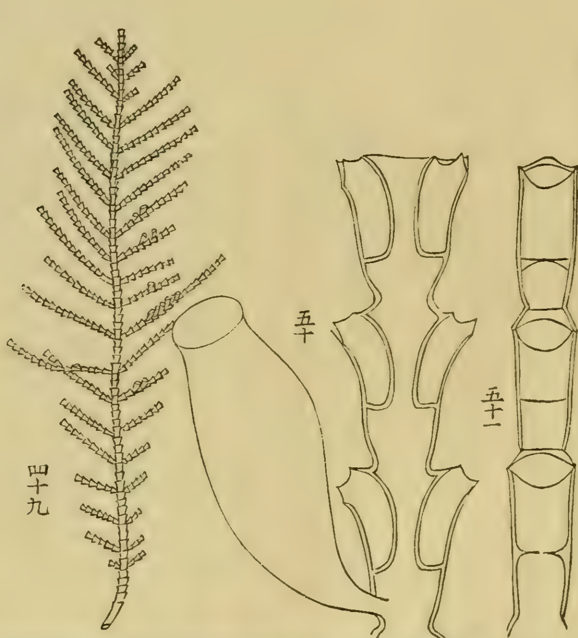
（以下次號）

## ●相州三浦三崎近傍に於て獲たる Hydroidea.（第二卷四三二頁の續き）

稻葉昌丸

18. Sertularia sp.（第四十九、五十、五十一圖）

第四十九圖。Sertularia sp. ノ軸一本、自然大。
第五十圖、仝上ノ枝、廓大圖、生殖器ヲ擔フ。
第五十一圖。仝上ノ枝ノ側面、廓大。



第十版



1
1′
2
2′
2″
3
3′
3″
4
4′
4″
5
5′
6
6′
8
11
12
12′
13
7
8′
14
14′
14″
15
15′
16
16′
7′
9
9′
17
18
19
10
17′
17″
18′
19′
7″
9″
10′
20
20′
21
21′

Troph.――軸ノ高サ一せめ半ニ達ス、纖弱ニシテ、通常少數ノ枝ヲ有ス。枝ハ對生シ、軸ヨリ上斜向ニ出ヅ、其數一又ハ二對ナリ、三對已上アルコハ稀ナリトス。はいどろせうハ軸及ヒ枝ニ於テ共ニ對生ニシテ相接セズ、其形管狀、全長ノ三分二許ハ軸ニ附着シ、其端ハ斜ニ軸ヲ離レ、圓口ニ終ル、口緣直シ。

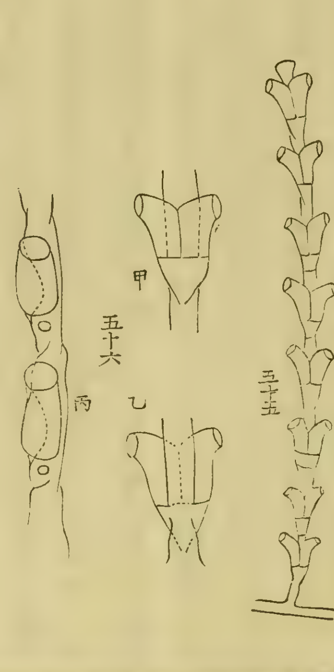
Gon.――未詳。

色。　透明。

場所。　獅子鼻、三ひろ許、海藻ノ枯根ニ附着ス。

此種ハ明治廿二年一月に採集したるものなれども生殖器を有せず。枝を擔へる軸の形狀矢に髣髴たるを以て認め易し。枝の下部、軸に附着せる所にてはハイドロセカが半對生の觀を呈せるとあり、されど枝の末端に至ては正しく對生せり。猶は軸に枝の附着せる其間は定まりなし、二枝間に一對のハイドロセカあるとあり、二對あるともあり。此種の軸は叢生せず、其間相距れり。

20. Sertularia sp.　（第五十五、六圖）




第五十五圖。　Sertularia sp. ノ軸一本、廓大圖、
第五十六圖。　全上ノはいどろせか廓大圖、甲ハ前面、乙ハ後面、丙ハ側面ヲ示ス。

Troph.――軸ノ高サ二せめニ達ス、細小ニシテ枝ナク、匍匐根ヨリ叢生ス、毎關節ニ一對ノはいどろせうヲ擔フ、はいどろせかハ對生ニシテ兩々相接シ、軸ノ一面ニ附着ス。其形管狀ニシテ、上端外方ニ彎シ、圓口其終ニ開キ外方ニ向フ、口緣ハ直クシテ少シ外ニ彎開ス。

Gon.――未詳。

場所。　三崎、Diphasia sp. (12) ニ着生ス（第二卷二九六頁第三十二圖を見よ）

此種は明治十五年七月の採集にかゝり、此頃ハ見當りた

Troph.——軸ノ高サ十せめニ達ス、匍匐根ヨリ叢生、丈夫ニシテ比較上太シ、數多ノ枝ヲ擔フ。枝ハ對生ニシテ斜出シ、皆一平面ニアリ。はいどろせかハ對生ニシテ相接セズ、其形管狀ニシテ、全部軸ニ附着シ、上部少シ外方ニ彎ス。口ハ上斜向ニ開キ、口縁左右ニ一箇宛ノ歯狀突起アリ、口孔ハ弓狀ヲ呈ス。主軸ノ二枝間ニハ三又ハ四對ノはいどろせかアリ。

Gon.——ごのせかハ長手ノ壺形ニシテ、枝ノ側面ニ附着シ、五六箇相繼デ並ベルヿアリ。附着點ヨリ斜ニ彎出シ、次第ニ太クナリ、上端ニ至リテ再ビ細シ、壺口圓形ニシテ、之ニ同形ノ蓋アリ。

色。 被膜ハ褐色。

場所。 三崎ノ西手、四ひろ許、巖石ニ附着ス。

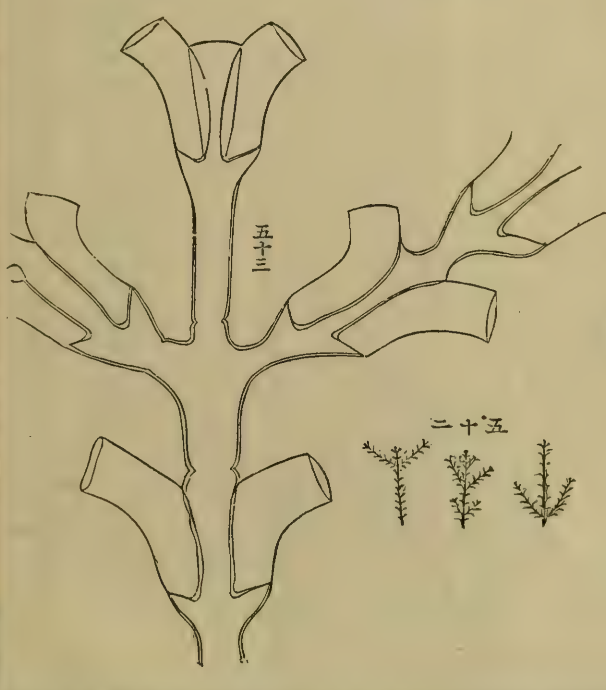
時日。 明治廿二年一月。

此種ハ大形なるを以て認め易し。被膜甚だ厚けれバ顯微鏡下に驗するも含有物を看難し、但しゴノセカの被膜ハ薄しとす。

19. Sertularia sp. （第五十二、三、四圖）

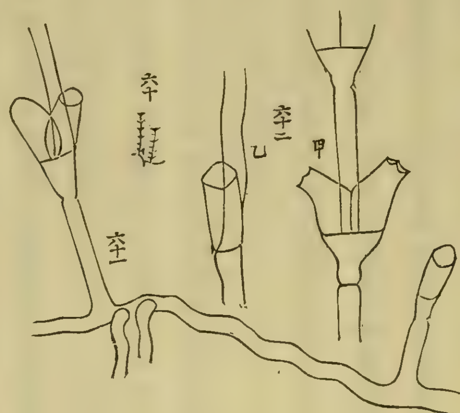
第五十二圖。 Sertularia sp. ノ軸三本、自然大。
第五十三圖。 同上軸ノ末、廓大。
第五十四圖。 同上枝ノ末端、廓大。


五十四


五十三
五十二

22. Sertularia sp. （第六十、六十一、二圖）

第六十圖。Sertularia sp. ノ軸二本、自然大。
第六十一圖。仝上、廓大圖。
第六十二圖。仝上ノはいどろせか、廓大。甲ハ前面、乙ハ側面ヲ示ス。




Troph.——軸部甚ダ細小、高サ一せめニモ達セズ、枝ナシ、毎節ノ下部ニ一對ノはいどろせかヲ擔フ。はいどろせかハ對生ニシテ相接シ、軸ノ一面ニ附着ス、其形管狀ニシテ、下半ハ軸ト對手ノはいどろせかトニ着生シ、上半ハ斜ニ外方ニ彎シ、其端稍窄クナリテ四角形ノ口ニ終ル、口縁ノ左右上下ニ一箇宛ノ齒狀突起ヲ有ス。

Gon.——未詳。

色。透明。

場所。獅子鼻、四ひろ許、海藻ノ枯根ニ着生ス。

此種ハ廿三年七月末の採集にかゝる、生殖器を具へず。

此種の特徴はハイドロセカの着生にあり。毎關節の上下端ニ於て細大の別を見ざれども、ハイドロセカの上端より立てる軸部ハ其下端ニ在る軸部に比して、甚た長しと云ふべし。又ハイドロセカの口縁には四箇の突起を有し、從て口孔の形ハ Spherical rhombus なり、眞の四角ニは非ず。已上二點を以てせば、容易ニ前二種と區別し得べし。

## ●海産動物保存法（第三回）

丘淺治郎

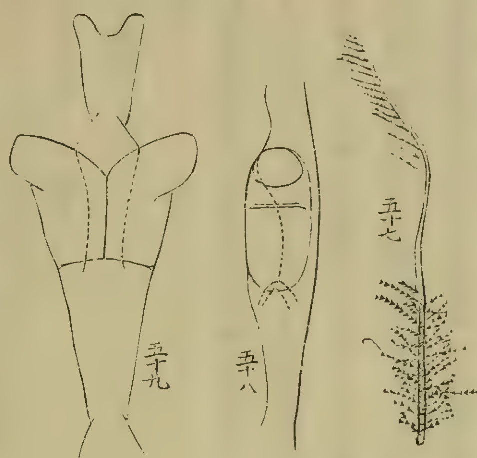
アカレフェー(Acalephæ)

Charybdæa は第二號クローム酸混合液にて速に固め、直ニ半％のクローム酸に浸し、半時間を歷てアルコールニ

るとなし。生殖器を具へず。

21. Sertularia sp.　（第五十七、八、九圖）

第五十七圖。Sertularia sp. ノ一結合体、自然大。Aglaophenia sp. ニ着生ス。
第五十八圖。仝上、はいどろせか側面、廓大。
第五十九圖。仝上前面、廓大。




Troph.——軸部甚ダ繊弱ニシテ、其高サ一せめニ達ス、匍匐根ヨリ叢生ス、枝ナシ、毎節ノ上部ニ一箇ノはいどろせかヲ擔フ。はいどろせかハ管狀ニシテ對生シ、軸ノ一面ニテ互ニ相接シ、背面ニテハ相觸レズ。管ノ上端ハ百二十度許ノ角度ヲ以テ急ニ外方ニ曲リ、其內彎ニ褶襞ヲ有ス、端ハ次第ニ窄マリテ圓口ニ終ル、口緣直シ。

Gon.——未詳。

色。透明。

場所。獅子鼻、四ひろ許、Aglaophenia sp. ニ着生ス。

此種ハ廿二年七月末に採集せり、生殖器を具せず。軸の或るものも其上端長く延て卷き、而もハイドロセカを具せず、時としては岐分せるとあり、其形狀植物の卷鬚(Tendril)に似たり。

此種と前種とハ記述上大に相似たる如くなれども、實物にては大に異れり。此種にて特に著るしきハハイドロセカの內彎面にある褶襞なりとす、口孔開ける方角より看れは一字形を呈せるを見るべし。尚一事ハ關節の形狀なり。細き下端より次第に太くなりて、二箇相對せるハイドロセカに連り、連綴の所に凸凹あるを見ず、而してハイドロセカの上端より出たる短かき軸部は甚た細し。前種にありては每關節の上下端共に同じ太さを有せり。

器より器へ注ぐべからず、必ず兩器とも水中ニ浸し靜ニ移し器の中より動物の浮べる丈の水を殘し、暫時其延るを待つべし、

Physophora, Agalma, Halistemma, Forskalia の諸屬は硫酸銅と猛汞の混合液を以て殺す、其分量ハ海水と同量或は二倍にして動物へ直に掛らぬ樣其居らざる所へ急ぎ注ぐべし、一二分を歷て動物既に死したる時、角の匙を用ひて固め藥の内に移すなり、固め藥ハ種屬によりて同しからず、

(い) Physophora, Agalma, 及び Halistemma ハ直に三十五%のアルコールを以て固め恰も二時間を過て七十%のものに移す、Ph. を三十五%アルコールに入れたらば、紐の固まらぬ中細きピンセットを以て出來るだけ之を引延すべし、鐘形内の液を換るにはピペットにて一々注射する事宜し、大抵鐘内に小さき泡生じ、之が爲に表面に浮び上りて天然の形狀を損する事あれど、斯る時は鐘を少し壓せば泡ハ去るべし、

(ろ) Forskalia 屬は硫酸銅と猛汞の混合液より取出しフレムミングの液ニ移し、動物の大小ニ依り二—六時間置きたる後淡水にて善く洗ひ順々に七十%のアルコールまで持行くべし、大なるものを固むるにハ重クロ—ム酸カリ及びオズミユム酸の混合液を用ゆるも宜し、此藥の内ニは二十四時間以上捨置くも固まり過る憂なければなり、されど重クロ—ム酸カリは組織内ニ結品を生じ、不透明ならしむる恐あれバ純粹なるアルコールへ入るゝ前に、純硫酸一二滴を加へたるものを置きて結品を溶解せしむるを要す、

Physophoridæ を終に保存するには七十%のアルコール中に二日置き、硝子管を其中に沈めて、體の前端より靜水と共に管中に入る樣取扱ふべし、小なる Agalma, 及び Halistemma はピンセットにて體の後端を摘みアルコールより取出して、七十%アルコールの滿ちたる管の中へ鐘より先に入るべし、管ハ餘り太からず動物の餘り屈曲するを得べからざる位のものを善とす、管の口ハ綿を用

移し觸角の爲ヨ之を倒に懸くべし、

Nausithœ, Pelagia のエフヒ゜ラ(ephyra)及びRhizostoma ハ之等の游ぎ居る海水の中へ一%のオズミユム酸溶液を加へて殺し、少し茶色に成り初むるや否や直に淡水ヨて二分間洗ひ三十五%のアルコール中に置くなり、R.の傘の偏平となるを防くには口廣き瓶中にて殺し、アルコールを入れたる後、栓を去り膀胱にて口を包み、瓶を倒にして、傘の緣が瓶の口と胴との境の所ヨ懸り、傘の凹みたる部分は瓶の頸の中ヨ何にも觸れず在る樣ヨ爲すべし、七十%のアルコールヨ換へ、體に浸込みたる頃瓶を原の位置に置くなり、

Pelagia noctiluca. 之れは恰ど一時間計りクローム、オズミユーム液中に置きて後、淡水にて洗ひ、觸角の一本を柔に糸にて結び弱きアルコールに移す頃、鐘が瓶の平たき底ヨ觸れぬ樣ヨ懸くべし、充分固まりたらば糸を取る、」

Cotylorhiza tuberculata (Cassiopeia.) ハ Rhizostomaの如くオズミウム酸を以て固め少し茶色に變じゝりたらば、五%の重クローム酸カリに移し、二日を過ぎて新きものと取換へ少くも二週間其儘に置き……長く置くとも害なし……後三十五%のアルコールヨ移すべし、但し組織内に結晶生じ又瓶の底に沈澱出來る事ある故、最初純硫酸一二滴を落したるアルコールを用ゆる方善き事あるべし、

Acalephæ の larve (Scyphistoma, Strobila) 等ハ熱したる猛汞飽和液を以て殺すべし、Strobila は純醋酸(九分)と一%のオズミユム酸(一分)とを混じたるものにて固め直ヨ淡水にて洗ふも宜し、

シフオノフオラ (Siphonophora)

ヒドロメヅサ類の如く、捕へたらば直に製すべし、手間取れば倒底六ヶし、且器を注意して洗ふ事を忘るべからず、少しにても酸或ハアルカリ性のもの附き居らば壞るゝ事屢なればなり、Athorybia rosacea は甚ぞ稀なるものなり、依て畧之、

極て柔き種類 (Physophoridæ. Agalmidæ等) と水と共に

十分の間置きて、後漸次七十%のアルコールまで持行くべし、

B. ovata をアルコールにて固むる時に當りて適當なる大さのガラス管を口より差込み置きて偏平となるを防くべし、且 Beroe は、管中に少許の空氣を吹き込みて液內に懸くるを要す、七十%のアルコールニ漬たる後一二日を經て管を取去るべし、動物は既ニ固まり居りて偏平となる氣遣なし、

Beroe Forskalii ハ初より偏平なるものなるが、之を廣がりたる儘殺すには硫酸銅と猛汞の混合液の中ニ入れ、死するや否や取出し少くとも一時間クローム、オズミユム液にて固む、此種はガラス管を差込むに及ばず、

Callianira. 前法の外左の混合液を用ひて固むるも宜し、

| | |
|---|---|
| 純ピロリグノス酸 | 一量 |
| 飽和猛汞 | 二量 |
| 半%クローム酸 | 一量 |

Cestus Veneris 少許の水中に置き急に第一號クローム、醋混合液を多量に上より注ぎ口のなき緣を下ニして渦線形に曲げ、十分の後淡水にて洗ひ、非常に注意してアルコールに換ゆべし、此類を製するにハ最初極めて完全なるものを撰ぶべし、然らざれば膨張して形を損する事あるべし、クローム、オズミユム酸ニて固むるも善けれど屢々偏平となり且色着きて前法には及バず、

Vexillum. 製法前に同じ

エキノデルマ(Echinoderma)

Crinoidea. Antedon rosacea (Comatula) は直に七十%のアルコールに投ずべし、A. phalangium ハ此法を用ゆれバ壞る、故九十%ニて殺す事必要なり、

Pentacrinoid の幼きものは一‰の抱水クロラール內に二乃至四時間置きて痲醉せしめ、次にアルコールニて固む、少し生長したるものは猛汞飽和液ニ一二秒浸すべし、

Asteroidea. Stelleridi 類の步足を延したる儘保存するには、步足溝を上にして、二十—三十%のアルコール中に殺すべし、Luidia ハ步足最も發達したるものなるが、之

ひて之を閉ぢアルコールの蒸發を防ぐ爲め他の少し太き管の内へ差し込み其口はコルクにて閉づべし、此管二本を用ゆる法は柔き動物を保存するには非常に都合よきものなり、

Apolemia uvaria, 殺し方前種に仝し、固め方も硫酸銅と猛汞の混合液をサイホンにて流し出し、其跡へ一%のクローム酸を注入す、二十分の後淡水にて洗ひ、サイホンを用ひて漸次アルコールと換ゆべし、

Rhizophysa 少量の水中に延ばしめ、熱したる猛汞飽和液を以て殺し、直に洗ひて之を低度のアルコールに移し觸角及び紐を出來るだけ整理すべし、

Physalia caravella ポリポ及び附屬物を延ばさしむるには清き海水に盛りたる高きガラス器に移し充分延びたる時を見計らひ猛汞と醋酸の混合液（海水の四分一）を注ぎ、死するや否や半%のクローム酸を盛りたる仝形の器に移し、二十分を歴て五十%のアルコールに入れ終に七十%の内に保存すべし、

Hippopodius, Galeolaria, Abyla. 硫酸銅と猛汞の混合液を以て殺し直に弱きアルコールに移すべし、Abyla の鐘ハクローム、オズミユム液を用ひて製するも宜し、

Praya の固め方ハ Hippopodius に仝し、然れども其後重クローム酸カリ及びオズミユム酸の混合液にて固むるを要す、時間は一日或ハ二日入れ置くべし、

Diphyes. 熱したる猛汞を用ゆ、

Velella はクローム、ピクリン混合液或ハ猛汞クローム酸混合液を以て殺し、一二分の後弱きアルコールに移す、

Porpita ハピペットを用ひてクライチンベルヒの液數滴を落し、酸の働にて美しき青色の稍赤く成り初むるを見、之をクライチンベルヒの液中に移し、十五分の後弱きアルコールに入る、

テノフォラ (Ctenophora)

Berœ ovata, Hermiphora, Callianira, Lampetia, Euchlora 及び Cestus, Eucharis, Bolina の若きものはクローム、オズミユム混合液中に落し體の大小に隨ひ十五分より六

すや否や二本の指或はピンセントにて觸角の少し下の所を強く縊め水中より取り出し、體の前端を飽和醋酸を盛りたる稍深き器に入れ、仝時に他の一人動物の肛門よりシリンヂを用ひて靜にアルコールを注入す、死したりと思はゞ肛門にコルクを差して直に七十%のアルコール中に投すべし、

H. Poli の如き類は皮膚甚た弱けれは極めて注意を要す、アルコールを換ゆる度毎に注射すべし、

H.impatiens は體長くして脆きものなるが、先づ觸角を縮ましめぬ爲め頸を縊め、體を縮めぬ爲體の後端を摘みて引延し、飽和醋酸中に入るべし、死したらハ直にアルコールに移す、但し注射を要せず、

Thyone, Thyonidium, Phyllophorus. 此等ハ柔に頸を縊め全體を醋酸中に入れ直に弱きアルコールに移す、標本若し小ならは指を用ひず、ピンセットを以て頸を壓すべし、

Cucumaria Plancii は大なるナマコの如く製す、唯口より注射し、栓をなすに及ばず、C. の他の種類も同法を用ゆべし、小なるものは注射に及ばず、

大なる Synapta は壞れ易くして保存六かしけれど、海水とエテルを同量に混じたるものをガラス管に盛り其中に入るれば充分延びて死す、暫時の後淡水にて洗ひ注意して漸次にアルコールに移し收縮を防ぐべし、エテルの代にクロヽホルムを用ゆるも宜し、

此類の動物を固むるには、洗ひ用ひたる淡水に一%クローム酸二三クセ、を落し、二三分を過て弱きアルコールに移すべし、

Molpadia musculus 及び Chirodota venusta も前法に依りて固むべし、

Auricularia ハ硫酸銅と猛汞の混合液或は猛汞のみを用ひて殺す、

エンテロプテウスタ(Enteropneusta)

Balanoglossus はクライネンベルヒの液或は半%のクローム酸を用ひて固む、アルコール入の海水を用ひ魔醉せ

を殺すには脊を下にして海水中に置き、上より第二號クローム酢混合液を注ぎ、直に取出して弱きアルコールに入るべし、

Brisinga は腕の甚た離れ易きもの故直に無水アルコールに投すべし、

Bipinnaria は第一號クローム酢混合液或はクローム、オズミユム液にて固め一二分の後取出すべし、他の幼蟲は猛汞の飽和液にて處分すべし、

Ophiuroidea は淡水に入れ殺すべし、小なるもの (Amphiura, Ophiactis)ハ直に弱きアルコールに投するも宜し」Ophiomyxa pentagona ハ體柔きものなるが、半%のクローム酸にて固むべし、Ophiopsila annulosa は淡水に入るれバ壞るゝ故直に無水アルコールにて殺すべし、

Echinoidea. ガゼ類を歩足を延したる儘にて保存するには少許の海水中に置き、上より第二號クローム酢混合液を注ぎ、酸のカルクを犯さぬ樣急き取り出すべし、唯形狀を保存するか、又ハ粗き解剖を爲す積りならは體の兩端に穴を穿ちアルコールの善く浸入する樣にすべし、小なるものハ穴を穿つに及バす直に七十%のアルコールに投すべし、

ガゼの乾きたる標本を造るには體内の水分を去りて七十%のアルコールに一日或ハ猶長く浸したる後日向、或ハ影干にすべし、

Holothuroidea. 此類は體柔にして甚た縮み易ければ、他のエキノデルマよりハ一層の注意を要す、特に觸角の如きは試藥に觸るれば直に體内に引込みて仕方なきものなり、又或る種類は試藥中に入るれバ腸を吐き出して始末惡し、海水の少し腐敗しかゝりたる中に置くも仝じ顯象を見る事往々あり、

斯く種々の不都合あれど左の法によりて防くを得べし、先づ第一に動物を淸き海水中に入れて充分に延バさしむべし、一寸注意すべき事は其後若し酸類を用ゆるならバ、成るべく短くしてカルクを犯さしめぬ事なり、

Holothuria 及び Stichopus, の大なるものは觸角を充分延

き、次に長き亞鉛箱の內よてアルコールを以て固ためたり、魔醉する事久し過ぎされば、海水中に出せバ、蟲ハ再ひ蘇生す、

此法を用ひて Cariuella, Cerebratulus, Drepanophorus, Nemertes, Polia 等を製したるよ何時も好き結果を得たり、猶丈夫なる屬(Langia, Amphiporus及びDrepanophorusも)は一‰の溶液にて魔醉せる後猶一度二‰のものを用ゆるを要す、Pilidium ハ猛汞と硫酸銅の混合液或ハ猛汞のみを用ひて殺すべし、

自活或ハ寄生の Nematodi ハ猛汞飽和液或ハクライチンベルヒの液を以て殺すべし、

Chaetognatha. は硫酸銅と猛汞の混合液或ハクローム、オズミユム混合液を用ひて好結果を得、

Gephyrea. Sipunculus ハ半%或は猶弱きクローム酸を用ゆれバ大抵ハ延て死すべし、一‰の抱水クロラールにて魔醉すれは、延て死す、されば、何れの法を用ゆるも體の一部分收縮し、或ハ苦痛の餘り皮破れて體內の液流れ出で、大に形狀を損する事多し、

Phascolosoma は死する迄アルコール入り海水の中よ置くべし、(三乃至六時間)

Phoronis も二時間アルコール入り海水の中に置き、沸騰せる猛汞飽和液を以て殺すべし、

大なる Bonellia を殺すには、延ひたる時手にて動物の體を取り、吻を延す爲にピンセットを以て吻端を引張り、底よ蠟を敷きたる長き箱にクライチンベルヒの液を盛り、其中に入れ、收縮せさる樣常に延バし置き、猶一時間を經てアルコールに移すべし、小なる B. はアルコール入海水にて魔醉せしめ弱きアルコールにて固む此ゲフィリヤの色素ハ熱したる猛汞を用ゆれハ善く保存す、

Echiurus の幼蟲ハ硫酸銅と猛汞との混合液に二三分浸せは善く固まるべし、

Hirudinei. Pontobdella 及び Branchellion は半%のクローム酸を以て殺すべし、アパチ(S. Apathy)の Pseudobranchellion と名けたる新屬を製するには熱したる猛汞飽和

しむれバ善く延びたる標本を得、Tornalia ハ硫酸銅と猛汞の混合液を用ゆ、猛汞飽和液又ハクローム、オズミユムを用ゆるも宜し、

ヴェルメス(Vermes)

Cestodi は冷き猛汞飽和液を以て固め、Trematodi ハ熱したるものを用ゆ、若し顯微鏡に用ゆる爲偏平なる標本を得んと欲せバ、ガラス板二枚を取り、蟲を其間に挾み絲を以て縊むるか或ハ小き重りを以て壓すべし、充分偏平となりたる時海水を減じ沸騰せる飽汞和液を注ぎ、最早縮まぬに及びガラス板を離し冷き猛汞飽和液中に入るゝなり、

右の法を用ひて Tristomum, Acanthocotyle, Distomum, Calicotyle 及び他の Distomi と Polistomi の善き標本を得べし、

Rhabdocoela と Dendrocoela 少量の海水中に充滿延ひたるを見、直に沸騰せる猛汞飽和液を以て殺し、次に淡水を盛りたる器内に注ぎて之を冷すべし、扨次に淡水に移し、二三分を經てアルコールに入るべし、或る Policladi (Eurylepta, Pseudoceros) より、猛汞を餘り熱し過ぎる樣注意すべし、否らざれバ體壞るゝ事あり、

ミユレルの幼蟲ハ又冷き或ハ沸騰せる猛汞飽和液を以て殺すも宜し、

Nemertini. 此類の蟲を保存するは非常に難事なり、何となれば少し惡き有樣に到れバ直に收縮し且其吻を吐きて屢切れて數片となる事あれバなり、最初は海水中に少許のアルコールを加へ徐々に働かしめ殺せしが、此法も非常なる注意を要し、其上動物最早死したりと安心して試藥に入るれバ、急に收縮して折角の骨折も水の泡となる事あり、Cerebratulus marginatus の如き此法にては到底覺束なければ、ミュレルの液(七分)と純鹽酸(一分)と混じたるものゝ中に入れ一二分の後に取出せり、

種々の困難を經過し、漸くの事にて(千八百八十四年六月)ネメルチニを魔酔するに一%の抱水クロラールの海水溶液を用ゆる事を思ひ付き、其中に六乃至十二時間置

Hermionidæ, は直ヨ七十%のアルコールヨ入れ出らぬ様ヨ注意すべし、

Chaetopteridæ, sternaspidæ, 大なる Spirographis 及び Protula と云ふ大なる Serpulinæ（此内にて終の二は注意して先づ管より引出すべし）は一%のクロームム酸にて殺し、少くも半時間置きて善く洗ひ、七十%のアルコールに移し、終ヨ九十%のものに入るべし、

冷き猛汞飽和液中に十五分内置きて左のアネリド類を殺すべし、…總てのAmphictenidæ, Hermellidæ, Serpulidæ, 此内或るものハ一%抱水クロラール溶液に一二時間入れ管より引出すべし; Aphroditidæの内にては或るPolynoinæ, Polyodontes maxillossus; Eunicidæ の内にては總ての Eunicinæ 此中の或る類、例令ハ Diopatra の如きものはアルコール水より海水にて魔醉せしむれバ善く固むるを得、

Alriopidæ は硫酸銅と猛汞の混合液にて殺して宜し但五分を越ゆるべからず、淡水にて善く洗ひて後アルコールヨ移すべし、

Tomopteridæ は前法ヨ依り、或は冷き猛汞飽和液を用ゆるも宜し、

---

## ●理科大學標本日本頭脚類目錄（第三回）

池田作次郎

體形ハとらいをん氏ノきよぴーり、をるとまん氏ノまくろぷす、ぷしらす、うごしめんしすニ合スレド、皮膚ノ狀態並ニ體色ハはいれー氏ノじやにゆあり、をるとまん氏ノぷしらす、うごしめんしすニ合ス、又頭小サク眼球ノ大ナルコトナド相互ニ通合スト雖モ眼上ニ突起ヲ有セズ或ハ之レアル哉ト思ル、者アレド甚ダ不分明也、脚長順式ハをるとまん氏ノまくろぷす、ぷしらす、はいれー氏ノじやにゆあり、とらいをん氏ノきよぴーり等ト通合スルモ吸盤ノ狀態ハ單ニとらいをん氏ノきよぴーり、をるとまん氏ノまくろぷすニ合スルノミ、交接器ハ凡テニ通合ス、夫レ斯ノ如キ異同交叉ノ有様其他六個ノ標本ニ

液を用ひて好き結果を得たり、アパチ氏の蛭を保存するに用ひし法は蠟底の箱の內に固め藥を盛り、其內に蛭を置き針を以て延し刺すなり、

Chaetopoda 此類の多くハ强き試藥中に入るれば非常に收縮し、蜿曲し壞るゝ事ありて天然の形狀を想像する能はざらしむるに到る、之を防ぐにハ、海水の表面にグリセリン(一分)七十%のアルコール(二分)及び海水(二分)を合して製せる液を流し、漸々溶解するに隨ひ動物を魔醉する樣にすべし、斯くなせバ充分延び、且吻を出して死す、

經驗によりて、前の混合液を造らずとも、五%のアルコール海水溶液を用ゆべきを知り、其中に殺すべき蟲を入れ、全く動かぬに到る迄捨置けり、但此時間ハ種類により長短あり(二—十二時間)全く死に切らざる方宜き樣なるが、扨次に蠟底の長き箱の內に七十%アルコールを以て固め針を以て整理し、二時間置きたる後管に入れ初め一兩日間水平に置き七十%にて體內まで充分浸入せざる故九十%のものゝ中に保存すべし、大なる種類は小さき浮泡に結び付け管中に釣るべし、

右に述べたる法に依りて善く保存し得るハ左の諸族に屬するものなり、……Polygordiides, Opheliadæ, Capitellidæ, Telethusidæ, Maldanidæ, Ariciidæ, Cirratulidæ, Spionidæ, Terebellidæ 但し Polymnia 及び Lanice を除く、此二屬ハ猛汞とクローム酸の混合液にて殺すべし; Aphroditidæ の中にて或る Polynoinæ 及び總ての Sigalioninæ; Amphinomidæ 之は猛汞飽和液を用ゆるも宜し; Eunicidæ の內にて Staurocephalinæ, Lysaretinæ. 及び Lumbriconereinæ. 同じ法によりて總ての Nereidæ, Glyceridæ, Syllidæ. Hesiocidæ, 及び Phyllodocidæ.

Chlorhaemidæ の中にて Stylarioides と Trophodia の二屬ハアルコール入り海水にて魔醉す、此族の Siphonostomum diplochaitos ハ五%の抱水コロラール溶液にて殺し一%のクローム酸にて固む、通例の法に依れバ破れ易し、

異名 (Synonym)

O. Areolatus, *De Haan.*

O. Sinnensis, *D. Orb.*

O. Menbranus, *Quoy.*

O. Brocki, *Ortm.*

所載書目 (Literature)

Hoyle, chall. P. 86, pl. III, Fig. 6, 7.

Gray, B. M. Cat. P. 15.

D. Orb., Ceph. Acet. P. 68.

Appl., P. 8, pl. 1, Fig. 1.2. 3.

Ortman, Zool. Jahrb. S. 645, T. XXI, Fig. 4, T. XXII, Fig. 1.

Quoy, Voy. Astrol. II, 89, pl. 6, Fig. 5.

Tryon, P. 124, pl. 28, Fig. 20, 21, pl. 29, Fig. 28, pl. 38, Fig. 57.

此種ノ特性第三脚基部ニ於テ兩側各青黒色ノ眼球形ノ斑紋ヲ有シ且ツ頭背面兩眼ノ間ニモ淡青黒色ノ斑紋一個ヲ有ス而シテ其他ノ狀態ハ前述さよびーれート殆ンド相比シ然レモ第一脚對ハ彼ガ如ク甚ダ長カラズ否却テ短カシ傘膜ハ寧ロ廣大ノ方也左第三脚ニ溝形ノ交接器ヲ具フ

標本第一(四個♂〇二、♀二) 明治十五年十二月七日東京市場ヨリ買上グ全長一個ハ十三、五せめ一個ハ十八せめ一個ハ十五せめ又他ノ一個僅カニ七せめ位也其内大ナル二個ハ雄ニシテ交接器ヲ具フ

標本第二(一個雌) 同十七年八月丹後國宮津ニ於テ岡田氏ノ採集ニ係ル全長十八せめ體稍ヤ圓形也而シテ表面ニハ幾數ノ小腫起ヲ有ス是レ火酒ノ主働強キガ爲メナラン

標本第三(♀一個) 本年八月三崎ニ於テ諸氏ノ採ル所也蓋シ十四五せめモアル可シ

標本第四(一個) 十五年十二月七日なべちニ於テ得ルトアリ標本甚タ不完全也全長凡ソ五六せめニ過ギズ

他書所載産地

きょおいらんど、ほんこん、よくいにあ、支那、日本南部、及ビ鹿兒島トス

於テモ若精細ニ之ヲ探求スレバ皆ナ同様ノ成蹟ヲ呈ス可シ然レ圧今繁ヲ厭ヒテ此處ニ之チ畧シ置クナリ若シ夫レ之ヲ皆ナ個々新種トセンカ新種又新種殆ンド際限ナキニ至ン況ンヤ其異同重ニ機械的ノ主働ニ依リテ生ジタル者ヲヤ且ツをるとまん氏ノかでしめんしそノ特性トシテ其體表面ノ斑紋ニ付キ云々スルコト差シテ價直ナキコト、思ハル其故とらいをん氏ノこんころじー第百二十三項さよびーりニ附記シタル一文アリ今左ニ摘要意譯ス

（前略）此種（さよびーりヲ指ス）ハ一般頭脚類ノ相互ニ區別ス可キ特性ノ甚ダ不定ナルコヲ證明スルニ足ル其故既ニふゑらにー氏ガ概形上ニ附キ記述スルコアリ曰ク生キ居ル内ハ體卵狀形ニメ後端少シク尖リ居レ圧死後ハ變シテ圓クナル、之ヲ憤起セシムル時ハ體表面小腫起ニ富メド然ラザル節ハ細粒狀トナル、體形ヲ自ラ伸張スル儘ニ任セバ其表面圓滑トナルト云フ然ラバ體表面狀態ノ變スルト同時體色モ變ス可シ云々（後畧ス）ト說ク其義或ハ理アルコト、余モ信スレバ也

是故ニ余ハ以上列記セシ數種ヲ皆ナ此をくとぱす、まくろぷすノ同種異名トスルモ差シテ誤謬ニモ非ザル可ク考ラル、而シテ此種ノ特性ヲ左ノ如ク決定ス……漸カ重複ノ患アレ圧念ノ爲メ……曰ク

體ハ長圓或ハ楕圓形、脚長順式ハ一、二、三、四、而シテ第一脚對ハ常ニ長シ……但シ雌性並ニ幼キ者ニ於テハ其割合少キ者アリ、交接器ハ右第三脚ニ在リテ溝形也、頭ハ小サク、目ハ大ク、傘膜ハ常ニ巾廣ク少クモ第三脚三分一ニ下ラズ

然レ圧をるとまん氏ノかでしめんしすニハ傘膜第一對脚ノ間ニ於テ短縮ストアルニはいれー氏ノじやよわりニハ第四對脚間ノ者短縮ストアリ此相違如何アルヤ暫ラク後日ノ考定ヲ待ツ

他書所載產地

地中海、紅海、印度洋、大平洋、かなりす、大西洋、日本長崎、横濱、かづしまトス

4. **Octopus ocellatus**, *Gray.* （いひだこ）

水孔アリトモ云ハズシテ別屬とれもをくとぱす中ニ入ル
コト其意果シテ如何ン願クハ後日幾多ノ標本實物ノ手ニ
入ルヲ待テ之レヲ詳ニセン

他書所載産地　地中海トアルノミ

Family. Argonautidæ.

Genus. Argonauta.

**1. Argonauta hians,** *Solander.* (たこぶね)

所載書目 (Literature)

Ortman, Zool. Jahrb. B. 3, S. 641.

Solander, Port. Cat. 44, 1055.

Tryon, P. 136, pl. 46, Fig. 100,—102.

標本第一　所採地名年月日共不明貝殼三個一個ハ其高サ
九、五せめ他ハ七せめノ者ト六ト三分一せめノ者也

標本第二　同シク不明貝殼一個高サ五、五せめ

標本第三　同シク凡テ不明ナレド肉體ヲ具備ス雄ナルガ
如ク見ヘテ右第二脚ハ其交接器ナルガ如シ而シテ貝殼ノ
高サ六、五せめ也

他書所載産地

日本江ノ島、南方太平洋、及ビ支那トス

**2. Argonauta argo,** *L.* (たこぶね)

所載書目 (Literature)

Ortman, Zool. Jahrb. B. 3, S. 641.

Linn., Syst. hat. ed. X. P. 708.

Tryon, P. 138, pl. 47, Figs. 111,—115, Pl. 48, Figs. 116,—119, pl. 48, Figs. 120,—123.

標本(一個)　産地年月日共不明貝殼ノ高サ十五せめ也

他書所載産地

まだいら、東部米合衆國、喜望峰、かりふほるにあ灣、
地中海、太西洋、太平洋、印度洋、等也

**3. Argonauta fragilis,** *Parkinson.* (たこぶね)

所載書 (Literature)

Tryon, P. 139.

標本(貝殼二個)　産地年月日共不明一個ハ高サ三ト三分
ノ一せめ一個ハ同一、八せめ也

Family. Tremoctopidæ.

Genus. Parasira,

**Parasira catenulata,** *Ferb, and Blainville.*

異名 (Synonym)

P. Pictus, *Brock.*

所載書目 (Literature)

Tryon, P. 132, pl. 45, Fig. 95,—98.

Hoyle, chall. P. 93.

此種ノ特性トスル處體ハ甚タ大キク形長楕圓、背面稍ヤ圓滑ナレモ腹面ハ網狀ノ凸皺ノ外ニ最ト荒々シキ腫起アレバ外見甚タ粗剛也、外套膜開口ハ濶ク、頭ハ小サク且幅狹ク殆ンド不分明ナリ、眼球ハ小サシ、呼吸水管 (Siphon) ハ太ク且ツ長シ其基部兩側ニハ各一個ノ水孔 (Aquafer-aus pore) アリ、脚ハ細ク圓ルク末端ハ尖リ居ル而シテ之レニ附着スル所ノ吸盤ハ割合ニ大キクシテ柄無ク間ダ互ニ相隔リテ二列ニ並ビ居ル、脚長順式ハ一、四、二、三也、傘膜ハ全ク欠除ス

標本第一(雌一個)　房州深浦ノ產年月日不明全長三十せめ第一脚對ノ長サ二十せめ体ハ巾六せめ長サ八せめ也

標本第二(雌一個)　同シク房州柏崎ノ產十八年九月坂本福治ヨリ買ヒ入ル全長二十四五せめ也

一昨年夏頃ノ日本新聞ニ記載セシ房州九十九里濱ニ於テ夜海中ヨリ怪物現ハレ出デ行人ト角觝セシトカニテ一時世ニ名高カリシ者ハ即チ此種也余ハ其實物ノ日本水產會ヨリ宍戸一郎氏許ニ送附シアルヲ見テ幸ニ之ヲ知ルチ得タリ

又此種ハ同一物ト思ハルヽ者チをるとまん氏ハとれもをくとばす、でうでるらいに (Tremoctopus döderleini, Zool. Jahrb. S. 642, T. XX.) トシテ全ク別屬ノ者トス (產地東京市場トス蓋シ矢張リ房州近邊ノ產ナラン) 其記スル所……圖版モ共ニ……此種ニ甚タ能ク符合ス然レモとらいをん氏ノ記セル此兩屬ノ區別ノ要點ヲ見ルニ頸部ニ於テ更ニ二個ノ水孔ノ有無ニ在ル如シ即チとれもをくとばすニ之在レモばらしらニ無シ然ルニをるとまん氏ハ別段此

ハ差シテ常狀ト異ナル無シ唯之レニ附着スル吸盤ノ……其柄モ共ニ……縮小シテ稍ヤ球形トナリ僅カニ突出シ居レバ外見一寸圓滑ノ如ク見ユル也、而シテ肉鰭(Fin)ハ巾寧ロ廣ク體ノ後部凡ソ二分一ヲ占メ居テ總形殆ンド四角ナレドモ外緣角ハ尖リ居ラズ、角質貝殼(Horny Shell or pen 或ハ Gladius トモ云フ)ハ細ク薄ク稍鎗狀也此處ニ又此種ノ特性トモ云フ可キ者ハ此奴充分發育ストモ體並ニ頭部ノ總長僅カニ六七せめニ過ギザルコト即チ是也

標本(七個)　明治十八年十二月一日東京市場ヨリ買上グ大ナル者ノ全長十四せめ位内六せめハ觸脚ノ長サニシテ體並ニ頭部ノ長サハ僅カニ七せめ也小ナル者ハ全長十二せめ位雄三個雌四個也

他書所載產地

すまとら、日本長崎トス

**2. Loligo edulis,** *Hoyle.* (やりいか)

所載書目(Literature)

Hoyle, Diagnosis, II, P. 186.

" Prelin. Rep. II, P. 289.

" Chall. P. 152, pl. XXIII, Figs. 1—9.

此種ノ特性前種ト差シテ異ナラザルモ全體大キク體形ハ圓柱狀ニシテ後端尖リ稍ヤ鋭角ヲ爲ス、頭部ハ寧ロ小サク、脚長順式ハ三、四、二、一、也而シテ第一對ハ第三對ノ半ニ過ギズ、傘膜ハ全ク欠除スト雖モ第三脚ト第四脚トノ間ニ於テ僅カニ之ヲ有ス、吸盤ハ凡テ二列ニシテ、角質環ハ上半緣ニ於テ八個ノ鋭牙ヲ具フ、觸脚ハ其長サ體頭兩部ノ總長ノ一倍或一倍半ニ達ス、脚頭ニハ四列ノ吸盤ヲ有ス内中央ニ位スル二列ハ大キク側面ノ一列ハ各小サク、角質環ハ何レモ總シテ九乃至十一個ノ潤牙ヲ有スル者ノ如シ、肉鰭ハ左右合セテ殆ンド四角形ニ見ヘ體長ノ半ニ達シ居也、交接器ハ現品ニ見ザルモ左第四脚ニ於テ之ヲ有スト云

標本第一(雌一個)　廿年四月伊豆大島ニ於テ岡田信利氏ノ採集ニ係ル全長三十二せめ體長十六せめ也

標本第二(雌一個)　相州江ノ島ノ產年月日不明全長二十

**4. Argonauta owenii,** *Adams.* (たこぶね)

所載書

Tryon, P. 137, pl. 46, Figs. 13,—105, pl. 47, Figs. 106, 107.

標本(貝殻四個)　二十年四月岡田信利氏伊豆七島中新島ニ於テ獲ラレタル者三個ハ高サ五せめ一個ハ三せめ也

他書所載産地　太平洋

Family. Loliginidæ.

Genus. Loligo.

**1. Loligo sumatrensis,** *Eer, and Orb.* (ひいか)

異名(Synonym)

Teuthis sumatrensis, Gray.

所載書目(Litelature)

Tryon, P. 145, pl. 58, Figs. 190, 191.

Appl., P. 32, pl. I, Fig. 11, pl. III, Figs. 11,—15.

D. Orb., Hist. nat. des ceph. S. 317.

Gray, Cat. Moll. Brit. Mus. P. 1.

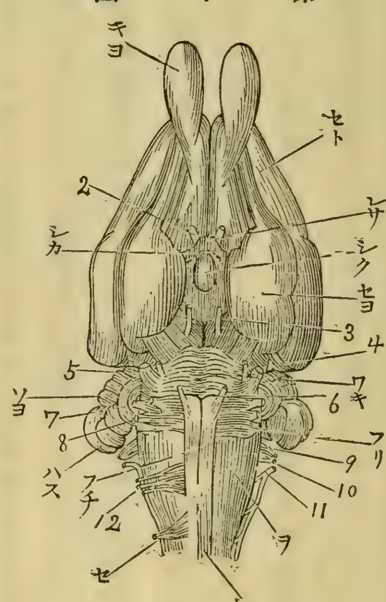
此種ノ特性トスル所體形稍ヤ長ク尾端細ク狹マリテ遂ニ鈍角ヲ爲ス、頭部ハ寧ロ大ナル方ニシテ眼球ハ差程大ナラザルモ高ク突出ス、口ノ其周圍ニ在ル唇瓣膜ハ五個乃至七個ノ突起ヲ有ス且各突起ニハ二三個ノ最ト小サキ吸盤ヲ具備ス然レ𪜈其形極メテ微細ナル故甚ダ不分明ナリ中ニハ全ク欠除セル如ク見ユル者アリ、腕脚ハ三、四、二、一ニシテ各二列ノ吸盤ヲ具フ、而シテ各吸盤内ニ在ル被ノ角質環 (Horny ring) ハ全緣ニ八乃至十個ノ濶牙ヲ有ス、傘膜ハ啻ニ第三ト第四脚ノ間ニ於テ僅カニ在ルノミ、第三脚ノ其腹外側面ニハ稍ヤク認メ知ル可キ縱起アリ、二本ノ觸脚(Tentacular arm)ハ長サ大概體長ニ等シクシテ鎗狀ノ稍ヤ巾廣キ脚頭(Club)ヲ有ス、脚頭ニハ四列ノ吸盤ヲ有ス其内中央ノ二列ハ大キク兩側ノ一列ハ小サシ、大ナル者ノ角質環ハ其上半緣……又或ハ全緣……ニ於銳キ牙凡ソ八乃至廿餘個ヲ有スレ𪜈小ナル者ハ何レモ皆ナ全緣ニ之ヲ有ス然レ𪜈稀ニハ甚ダ不分明ノ者モアリ、雄ハ左第四脚ノ末端凡ソ三分一程交接器トナリ居ル、交接器

リ(ヲヒ)是高等ナル哺乳類ノ頭腦ニ存スル Olivary body ト符合スル部タリ背溝ノ各側ニ狹小ナル背尖柱(Dorsal pyramid)アリ但シ目下ハ其一小部ヲ認ムルニ過キス(第十一圖ハチ) 其外側ニ於テ延髓ノ背緣部ヲ成セル者ハ之ヲ索狀體(Corpus restiforme)(サタ)ト稱ス

(二八二)小腦(Cerebellum)(シノ)ハ延髓ノ背側ニ當リ外面灰白質ヨリ成レル皺襞體ニシテ一個ノ中葉タル蟲樣上垂(Superior vermes)(チヨ)二個ノ側葉(Lateral lobes (ソス)及二個ノ不正形ナル球圓體即チ肺胃神經垂(Flocculi)(ハス)ノ五部ヨリ成立シ各球圓體ハ同側ノ側垂ヨリ外側方ニ突出シ園耳骨ノ頭蓋壁ニ存セル深窩中ニ篏在セリ」

(二八三)ワロリ氏橋(Pons varolii)(ワキ) ハ腹尖柱及富稜狀體ノ直前ニ當リ延髓腹面ノ前部ニ橫走セル白色纖維ノ大把束ニシテ前端ハ卷緣ニ終リ延髓ノ腹溝ト連續シテ基礎動脈ヲ含セル一縱溝ヲ出現セリ側緣ニ於テハ橋ノ纖維上方ニ屈曲シ小腦ニ進入シテ所謂其中脚(Middle peduncle)ヲ成セリ

第十圖




(二八四)大腦脚(Crura cerebri)(タキ)ハ腦ノ腹面ニ於テワロリ氏橋ノ前緣ヨリ前外方ニ向ヒ放射セル白色纖維ノ二大把束ナリ

(二八五)大腦半球(Cerebral hemispheres)(タハ)ハ頭腦ノ大部ヲ領セル二大塊ニシテ其扁平ナル內面ヲ以テ互ニ相接觸シ後部ハ廣大且ツ稍楔狀ヲ成シテ小腦ト相接シ之ヲ顱頂垂(Parietal lobes)ト云フ前部ハ鈍端ヲ以テ終レリ之ヲ前葉(Frontal lobes)(セト)ト名ツク側部ハ著シク下方ニ膨出シテ稍大腦脚ヲ陰蔽ス之ヲ顳顬葉(Temporal lobes)

せめ譜十せめ也

ちやれんじやノ産地日本横濱トス

**3. Loligo Bleekeri,** *Keferstein.* （やりいか）

所載書目 (Literature)


Bronn, Cl. U. Ordn. der. Thierreich B. 3. 2.

Brock, Z. F. W. Zool. B. 36 1,882, S. 604.

Appl. P. 31, pl. 1, Figs. 7,—6.

Tryon, P. 148, pl. 57. Figs. 185, 186.


此種特性ニ於テ前種ト甚ダ異ナラズ唯ダ體形前種ヨリ細ク長ク其後部即チ尾ノ方甚ダ鋭ク尖リ居ル、觸脚ハ短カク其脚頭前種ト異ナリテ小サク殆ンド不分明也而シテ之レニ附着スル吸盤モ甚ダ細カク他脚ノ吸盤三四分一ニ過ギズシテ敢テ大小ノ差アル無シ、肉鰭ハ總形四角ニシテ體ノ半バ以上ニ達ス、雄ハ常ニ左第四脚ニ交接器ヲ具フ其長サ脚全長ノ殆ンド二分一ヲ占メテ形狀前種ひいかノ交接器ノ如シ

標本第一（雄一個） 十五年十二月七日東京市場ヨリ買上グ全長五十四せめ内體長二十四せめ也

標本第二（雌雄各一個） 東京市場ヨリ買上グ二月一日トアレモ年號不明全長各二十二せめ也

標本第三（雌二個雄一個合セテ三個） 十八年十二月二十日東京市場ヨリ買上グ體長各二十三せめ位也

他書所載産地　日本及ビ長崎トス

## ●動物解剖手引草（承前）

岩川友太郎

（二八一）延髓（Medulla oblongata）ハ後頭孔ニ由テ直ニ脊髓ニ連續シ頭蓋腔中後頭基底骨ノ上ニ居ヲ占メ外面ハ白色質ヨリ成リテ上下兩面ニ各一條ノ縱行ヲ存シ名ツケテ背溝腹溝ト稱シ是脊髓ノ同名溝ト接續スル者ナリ腹溝ノ各側ニ狹長ナル一縱起アリ之ヲ腹尖柱（Ventral Pyramid）ト名ツケ（第十圖ッチ）其前端ノ直外側ニ横行纖維ノ把束アリ之ヲ富稜狀體（Corpus trapezoideum）（フリ）ト稱ス各富稜狀體ノ直後ニ當リ内側ハ腹尖柱ニ界シタル一面ア

束アリ其凸隆セル前面ヨリ二大神經發出セリ是第二腦神經即チ視神經(Optic nerves)ナリ彼ノ横走把束ハ二個ノ視神經幹(O. tracts)(シカ)ニ由テ成立スル者ニシテ視神經ト共ニ視神經交叉(O. chiasma)(シサ)ヲ構成ス

(二一九一)乳頭體(Gorpus mammillare)(ニタ)ハ漏斗ノ直後ニ當リ大腦脚間ニ存セル一小圓突起ナリ

(二一九二)動眼神經(Oculator nerves)(トシ)ハ第三腦神經ニシテ乳頭體ノ稍後方ニ當リ各大腦脚ヨリ發出ス

(二一九三)滑車神經(Pathetic nerves)ハ第四腦神經ニシテ延髓背面ノ前部ヨリ起リ大小兩腦ノ間ニ於テ外下方ニ移行シテ頭腦ノ腹面ニ達ス

(二一九四)三叉神經(Trigeminal n.)ハワロリ氏橋ノ後外部ヨリ起ル所ノ第五腦神經ニシテ各〻外大ノ知覺根ト內小ノ運動トノ二根ヲ以テ該部ヨリ發出ス

(二一九五)牽引神經(Adducent n.)ハ橋ノ直後ニ當リ延髓ノ前尖柱ノ外緣ヨリ發出セル第六神經ナリ

(二一九六)顏面神經(Facial n.)ハ第七腦神經ニシテ第五腦神經ノ直後ニ當リ延髓腹面ノ側緣ヨリ起リ其纖維ハ直ニ外方ニ移行セリ

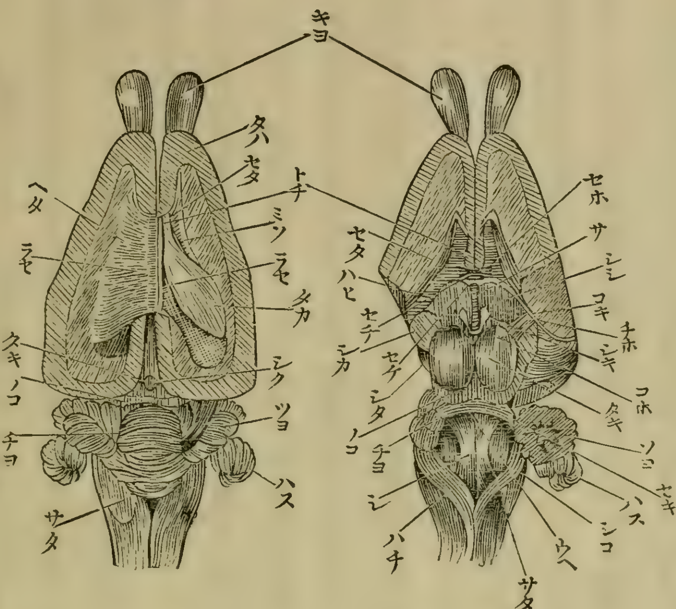
(二一九七)聽神經(Auditory n.)ハ第八腦神經ニシテ顏面神經ノ後方稍其外部ヨリ起リ直ニ岐レテ二大枝ト成リ第七腦神經ト並行シテ外方ニ移行ス

(二一九八)舌咽神經(Glossopharyngeal n.)(第九腦神經)肺胃神經(Pneumogastric n.)(第十腦神經)及副行神經(Accessory n.)(第十一腦神經)ハ小腦ノ直後ニ當リ延髓ノ側緣ヨリ順次ニ發出シ互ニ密接シテ一神經ノ狀ヲ爲ス腦ト共ニ脊髓ノ一大部ヲ除却スレハ副行神經ハ第五脊髓神經ノ稍後方ニ當リ脊髓ヨリ起ル所ノ一細長神經ヨリ成リテ最初ノ五脊髓神經ノ背腹兩根ノ間ヲ通過シ行々脊髓ヨリ纖維ヲ受ケテ前方ニ移行スルヲ視ルベシ

(二一九九)舌下神經(Hypoglossal n.)ハ最終ノ腦神經ニシテ前位ノ三腦神經ヨリ稍後方ニ當リ延髓前柱ノ外側ヨリ起リ各自數纖維束ヨリ成リ其狀恰モ脊髓神經ノ腹根ノ如シ

（セヨ）ト云フ顳顬葉ガ腹面ニ於テ前葉ト接スル處ニ幽微ナル渠溝アリ以テ不完全ナルシルヴイ氏溝（Sylvian fissure）ヲ成ス

第十一圖




（二八六）胼胝體（Corpus callosum）（ヘタ）ハ上面ヨリ半球ヲ左右ニ少シク離開スレハ認ムベクシテ其全長ノ中央三分一ニ沿ヒ之ヲ互ニ結合セル横走白纖維ノ一大把束ナリ

（二八七）松脂體（Pineal body）（シセ）及視神經葉（Optic lobes）（シケ）ノ一部ハ腦ノ背面ニ當リ大小腦ノ間ニ之ヲ認ムベシ

（二八八）嗅神經葉（Olfactory lobes）（キヨ）ハ半球腹面ノ前部ヨリ前方ニ突出セル灰白質ノ二個ノ棍棒狀體ニシテ一強白帶ニ由リ顳顬葉ノ前端ト結合シ頭蓋ノ嗅神經窩中ニ占居シテ其ノ下面及前面ヨリ第一腦神經即ハチ嗅神經（Olfactory nerve）ノ纖維ヲ發出セリ

（二八九）腦底ノ中央部ニ當リ顳顬葉ノ間ニ一小孔ヲ穿テル突起アリ是即チ漏斗（Infundibulum）ニシテ頭腦ノ發育完全ナル者ニ在ツテハ是ニ松菓腺（Pituitary body）（シク）ト稱セル楕圓形ノ一小體アリ全腦ヲ除却スルトキハ常ニ土耳格鞍（骨格部四八ヲ見ヨ）中ニ遺留ス

（二九〇）漏斗ノ直前ニ白色纖維ヨリ成レル横走ノ一大把

ノ前葉（セヨ）顳顬葉（ニタ）乳頭體（フリ）宮稜狀體（ハス）肺胃神經垂（エ）延髓（シサ）視神經交叉（ヲ）Olivary body（キヨ）嗅神經葉（シカ）視神經幹（シク）松菓腺（ワキ）ワロリ氏橋（フチ）腹尖柱 2–12 腦神經根（セ）第一脊髓神經（セホ）前縫（セチ）穹窿體ノ前柱（セキ）小腦ノ前脚（キタ）穹窿体（チヨ）小腦ノ蟲樣上垂（シダ）膝狀體（タハ）大腦半球（ミソ）脈絡叢（ヘタ）胼胝體（セタ）線狀體（サタ）索狀体（ハチ）背尖柱（タカ）大海馬（ナホ）中縫（タキ）大腦尻（ノコ）腦睾（シシ）視神經室（コホ）後縫（コキ）穹窿體ノ後柱（シキ）松菓腺脚（シコ）小腦ノ後脚（フ）小腦ノ中脚ヲ成セルワロリ橋ノ纖維（トチ）透明中隔（ラセ）覽西氏縱線（ハヒ）半月紐（ウヘ）洳須設尼氏瓣（サ）第三室（シ）第四室

## ●動物彩色の起源及び効用（承前）

宍戸一郎

### 誘惑彩色

以上論じたるが如く六足蟲類は其の棲息せる周圍に存する天然物に類似し以て保護を得るのみに非ずして全く異なりたる目的を以て發達せし色を有する者あり此は隱匿の用を爲すにあらず却て敵の注意をひき之に近より以て之を捕ふの用に供するなりかゝる種の彩色は今日に於ては蜘蛛及びカマキリ屬に於て二三の實例を知るのみなれども熱帶地方に於て此の事に注意するあらば猶數多の實例を發見し得べしとは信じて疑ざる處なり H. O. Forbes 氏はジャバに於て實見せる此種の最も有益なる例を記載せり叢莽中に蝶を追擊しをりたる時密叢なる倭樹の爲に阻遏せられ停立せしに葉上鳥糞に止り蝶一疋を見たり氏は記して曰く予は小さき綠蝶の屢々地上の如此所に停止しをるを見たれども Lycaenidæ 屬の如き美麗なる者のかゝる不合理なる食物の上にあるを見て驚怪せり。予は採集網を持ち極めて靜かに蝶に接近し其如何なる事を爲し居るやを見んと欲したり。予は充分接近し指を以て之を捕ふるを得たり。然るに驚くへし蝶體の一半は予のさき

第四十四項　今腦ヲ反上シ其一半球ヨリ表面ニ並行セル切片ヲ徐々ニ除キ去リ胼胝體ニ至リテ止ムベシ必ス是ヨリ深入シテ側空中ノ搆造ヲ亂雜ニスベカラス

（三〇〇）各半球ノ中心ヲ領セル白色質ト外面ノ灰白質トノ關係ヲ注目スベシ

（三〇一）胼胝體ノ纎維ハ各側ノ外方ニ向テ水平ニ擴カリ但シ前ニ位スル者ハ稍前方ニ彎曲シ後ニアルモノ後方ニ彎曲シテ半球ノ實質ニ入ル、（第十一圖ヘタ）又胼胝體面ノ中央ニ二條ノ白色ナル縱行線アリ之レヲ覽西氏縱線(Striæ longitudinales Lancsii)（ラセ）ト云フ

第四十五項　胼胝體ヲ露出セントスル際ニハ一ノ腔洞即チ腦ノ側室ニ誤テ截リ入ルヿ多シ否ラスンハ胼胝體後端ノ外部四分ノ一「インチ」許ニシテ各半球ノ中心ニ近ク腦室ヲ徐々ニ切リ去リ以テ側室ヲ捜索スベシ是ニ於テ其切口ノ縁ヲ提ケ剪刀ヲ以テ側室ノ屋壁ヲ胼胝體ト共ニ除去シ以テ一方ノ側室ヲ充分ニ呈出スベシ

（三〇二）側室（Lateral ventricles）（第十一圖甲ノ左側）ハ大腦半球ノ腔洞ニシテ中央ハ廣大（側室體ト名ツク）前方ハ尖リ（前角 Anterior cornu）後方ハ鈍端ニ終レリ

（三〇三）大海馬（Hippocampus major）（タカ）ハ側室體ノ床底ヲ成セル半圓形狀ノ白色ナル大隆起ニシテ外後方ニ擴カリ內端ハ對側ノ者ト相結合セリ

（三〇四）透明中隔（Septum lucidum）（トチ）ハ外面灰白質ヨリ成レル三角狀體ニシテ胼胝體前端ノ下部大海馬前端ノ直前ニ位シ以テ側室前角ノ內壁ヲ成セリ

（三〇五）脈絡叢（Choroid plexus）（ミソ）ハ大海馬ノ直前ニ當レル溝中ニ位スル所ノ脈管織膜ニシテ胼胝體ノ下ニ移行シ腦ノ第三室ヲシテ左右ノ側室ト交通セシムルモンロ氏孔（Monro's foramen）ニ由テ對側ノ同名膜ト結合セリ

（三〇六）線狀體（Corpus striatum）（セタ）ハ側室前角ノ床底ヲ成セル灰白質ノ突起ニシテ脈絡叢ヲ含セル渠溝ニ由テ透明中隔及大海馬ヨリ相隔離セリ

第十圖及第十一圖ノ解　（ソヨ）小腦ノ側葉（セト）大腦

tive) 色て白色なるべし此色今日にありては鳥類に限らず他の產卵獸トカゲ、クロコダイル、カメ、ヘビの類に於ても亦多く見る處なりされば此白色は其白色なるがため不便危害を喚起する樣の事あるに非ざれば變ずることなく永く引續き白色なる者と推論するを得べし。事實を研究するに木の洞地下の穴屋根付の巢其他隱匿せる所に巢を營む鳥類の卵は純白なるか或は甚だ淡き平等なる色を有する者たるを知る例はカハセミ、Bee-eater (ハチクヒ) モクリの類、Penglims) カモメの類 (Puffins) 等の如く地下よ穴を穿ちて產卵する者鸚鵡類キツヽキ、ヤツガシラ、孔雀フクロ等の如く木の洞穴其他隱れたる所に巢を營むものツバメ、ミソサヾイ、ノジコ類アウストラリア產ウツの類等の如く覆ひ即ち屋根を有する巢を製造する者等にありては皆通常純白の卵を有す

然れば四方廣開にして隱匿し能はざる所に巢を營み白色の卵を產む鳥類も數種あり此類の内には二三の面白き例ありて如何に種々の方法によりて隱匿の効を奏する者なるやを知るに足るべし

アヒル、ムグリ、キジ等皆此類に屬す然れども此等鳥類は皆其巢を離れ他所に赴んと欲するに當りて枯葉其他の物質を以て充分卵を蔽ひ全く之を隱匿しをくの慣性を有す。ヨタカの類アウストラリア產ドバトの一種等は草木なき平地に白色卵を產す然れども此等の鳥體は極て完全なる保護色を有するものにして若し蟄巢し居る時にあたりては全く鳥體をも認むること能はざる者なり、而し其慣性として巢を離るゝこと少く殆と引續き巢の中にあるを以て其卵を隱匿すること實に完全なりと云ふべし

鴿鳩類に於ては猶ほ一層奇なる現象を發見すべし此類の巢は通常小枝棒等を以て造りたる者にして薄弱疎粗を極め巢下よりすかして巢上の光線を望むべし然れども一般に巢の上部は樹葉鬱蒼として能く之を隱蔽し居るものなり○卵は白色にして光りあり。然れども下より之を望むに當りて其果して卵なるや或は巢の間隙なるやを識別することは甚だ困難なり又上部よりは數層の樹葉にさへぎら

に鳥糞なるべしと思考せし者に附着し地上に殘れり。猶は能く之を熟視し終に其粘軟なるや否を撿せんとて指を以てふれたり。予ハ喫驚せり予の眼ハ全く惑されたり。予の鳥糞と信せしハ全く一箇の蜘蛛にして背面を下にし脚を折りて體に接し居りしなり。氏は猶ほ如此糞の景狀を細記し蜘蛛の體各部の糞汁と全く同樣なる色を要することを說明せり。かゝる周密なる類似ハ一部蜘蛛の其體を葉面に固定せんため紡たる蜘蛛網よりなるなり。實に此ハ蝶類其他の六足蟲は勿論注意して之を驗查せる人間の眼をも惑わしむるに足るべき生活せる好飼料なり

此種の保護色中にて最も奇にして美麗なる例は蘭花等の如き奇怪なる花形花色を摸せる印度地方に產する無翅のカマキリの類なるべし蟲體は全部鮮明なる淺紅色にして大なる卵圓形の腹部は蘭花の下唇の如き觀をなし側面に於てハ二本の後脚非常に張濶し且つ其腿部扁平となりて花瓣の如き蟲脛及び前脚ハ蘭花の上萼等の如き觀を呈すされバ勿論非常に顯明にして且つ其花に摸することと實に完全なるを以て蝶に生活せるワナと云ふ可きなり

## 鳥卵の色

鳥類卵殼の彩色ハ永く保護色論者を苦めたりき、何となれば鮮明顯著なる種々特異の彩色は陰蔽の効を奏せすして、反て他の注意を喚起するが如くなるを以て其効用の有る所を知る能はされハなりし然とも猶ほ一層注意して鳥卵を其周圍との關係等に就き考察を下せバ、此の所に於ても亦保護色のためなるもの多きを見るべし。此を以て考ふるに吾人の全く彩色の効用を發見し能ハさる者は其祖先の世にありては保護の爲め缺く可らさりしも其慣性を變せしか爲め無用に屬したりされども其有害ならざるを以て消滅するに至らず猶は今日に至るまで在留し居る者なりと考察して可なるべしと信ず

今茲に便利の爲め鳥類の卵を二種に區分すべし則ち白色或ハ殆と白色なる者及び確然たる斑點或は彩色を有する者是なり

鳥卵は主として炭酸石灰より成る者なれは其元（Primi-

則チ其體ノ中央線ヲ通シテ縱ニ切斷スレバ其左右ニアル兩半相對シテ均シキナリ

蠕蟲ノ體ハ數多ノ關節(Segments)ニ分カルヽコト數ナリ殊ニ高等蠕蟲ニ於テ然リトス

蠕蟲ニハ關節アル肢脚ナシ

蠕蟲ニハ固有ナル排泄器アリ高等蠕蟲ニアルモノヲ關節器(Segmental Organ)ト稱シ每關節ニ一對ヲ備ヘ外界ト體腔ヲ連絡スル特性ノ器官ナリ

蠕蟲ヲ分類シテ左ノ四綱トナス

第一綱　扁蟲類　Plathelminthes.
第二綱　圓蟲類　Nemathelminthes.
第三綱　輪蟲類　Rotatoria.
第四綱　關節蟲類　Annelida.

第一綱　扁蟲類　Plathelminthes.

扁蟲ハ其體常ニ平扁ナリ關節ナキモノアリ又外見ヨリスレバ關節アルガ如ク見ユルモノアリ則チ縧蟲ノ如シ然レドモ是ハ眞ノ關節ニ非ズシテ多數ノ個蟲ガ直線ニ連ガリテ結合體ヲ成シタルト見做スベキナリ

扁蟲ノ中ニハ寄生動物甚ダ多シ

扁蟲ヲ分類シテ左ノ四目トナス

第一目　渦蟲　Turbellaria.
第二目　吸蟲　Trematoda.
第三目　縧蟲　Cestoidea.
第四目　紐蟲　Nemertini.

右ノ講義ハ甚ダ短カケレドモ新年慶賀ノ意ニテ少々ナガラ揭クルコトセリ

---

Ueber die Vererbung. Ein Vortrag von Dr. Aug. Weisman. Jena, 1883.

## ●遺傳　ばいすまん先生演說

一千八百八十三年六月廿一日ふらいぶるぐ大學副總長トナリタル時ノ演說

石川千代松譯

貴重ナル會議ヨ！

れ全く之を發見すること能はさるなりアウストラリアの Podarge と亦同樣なる巢を造り同法に據りて保護せらるゝなり。强大なる鳥類、例ハハクテウ、アヲサギ、カランテウ、ツル等の如き々廣濶なる場所に白色の卵を産す然れど能く注意して之を看守し又其害敵を驅逐するの力を有するなり。然らば則ち白色卵ハ顯著なるを以て食卵動物の害を受くること特に多き者なれど種々多般の方法を以て容易に發見せられさる樣隱れ居る者たるを知るべし。故ょ若しかゝる隱匿法の全く無きか如き觀をなすものあらバそも確然たる判定を下すへき材料即ち諸般の關係事狀等に就き吾人智識の未だ充分其度ょ達せざるを以てなりと專斷を下して可なる可し

# ●普通動物學講義第拾九

## 第八章

箕作佳吉述

### 第五門　蠕蟲　Vermes.

蠕蟲トハ甚タ大ナル區分ナリ其中ニ含有サルヽ動物ニシテ相互ニ異ナルノ度甚タ遠キモノアリ例ヘハ高等ナルごかい及ヒ下等ナル蛔蟲ノ如シ又蠕蟲ハゑきのでるま蟲ノ如ク其境界判然タルモノニアラズ他ノ諸門ニ近接スルノ點多シトス是蠕蟲ト名ツクルモノヽ中ニハ古元ノ性質 (Primitive characters) ヲ多ク保存スルモノアルガ故ナルベシ畢竟今日蠕蟲ト稱スル門ハ未タ開墾セサル土地ノ如ク其分類頗ル混雜ニシテ我々ノ知識ノ進ムニ從ヒ何回トナク之ヲ變改スルノ必要起ルベシ他ヨリ移リ來ルモノアルベシ他ヘ移サヽル可ラザルモノアルベシ又其門中ニテノ列次モ大ニ改良スベキ所アルベシ中ニモ或學者ハ既ニ高等蠕蟲 (Annelida) ト下等蠕蟲 (Vermes = Scolecida) トヲ全ク別ナル區分トナス者アリ

此ノ如ク雜沓ナル區分ナレバ其全體ニ普ク及ホス可キ一般ノ標徵ヲ擧グルハ容易ノ事ニアラズ先ツ左ニ掲グルモノヽ如シ

蠕蟲ノ體ハ概チ多少延長セリ

蠕蟲ノ體ハ左右對均式ニ傚フ (Bilaterally Symmetrical)

ス、然レ𪜈此研究ハひどらくらげ、蠕蟲、及ヒ節肢蟲等ノ如キ下等ノモノ丶神經ノ構造幷ヒニ作用ヲ知ルニ於テ始メテ完全スルヿヲ得ルモノニシテ遺傳ノ作用ヲ研究スルニ於テモ亦高等ナルモノニアル所ノ至テ込入リタルモノ丶ミヲ見スシテ下等動物ニアル所ノ簡單ナルモノヲモ研究シテ之レヲ説明セサル可カラス、

偖テ遺傳ト稱スルモノ丶何タルヤハ世人ノ能ク知ルモノニシテ其何レノ生物ニアリテモ其形質ヲ次代ノ生物ニ遺傳スルヿヲ云フナリ、例之ハ鷹ノ卵ヨリハ鷹ヲ生スルノミナラス同種ノモノヲ生シ又同種ノモノ丶内ニテモ動物學上ニテ云フ所ノ種ノ特質ノミヲ遺傳スルニ非ス其個體ノ形質ヲモ遺傳スルモノナリ、而シテ子カ親ニ似ルト云フヿハ唯人類ノ間ニノミアルヿニ非スシテ又他動物ニテモ同シクシテ既ニやこぶカ一ノ雄羊ト白色幷ヒニ斑紋アル雌羊トヲ交尾セシメタル實驗アリテヨリ能ク世人ノ知ル所ノモノナリ、

然レ𪜈此等生物一般ノ事實ハ何ニ由リテ生スルモノナルヤ、

へっける氏ハ始メテ生物ノ生殖ヲ以テ個體ノ增大シテ其生存シ得ルノ量ヲ越エタルモノナリトシ遺傳ヲ以テ單ニ增大ノ繼續ナリト云フテ説明セリ、或ハ之レヲ以テ言語上ノ戯ナリト云フモノモアランガ此言タルヤ若シ眞ノ方向ニ向ケ考フル𬼀ハ遺傳ヲ説明スルノ唯一ノ眞路ナリト思考セサルヲ得ス、

根足蟲、浸滴蟲ノ如キ單細胞生物ハ分體ニヨリテ增殖シ又生シテ一定ノ大サニ達シ又分離シテ二個躰トナリ各躰ハ單ニ同大ナルノミナラス其形質モ相互ヒニ全ク同シクシテ誰レモ何レカ幼ナルヤ何レカ長ナルヤト云フヿヲ得ス而シテ此等ノ生物ハ其高等ナル同胞兄弟カ非常ニ熱望スル所ノ不死ノ質ヲ有スルモノニシテ之レヲ滅シ得ルヿハ無論ナレ𪜈若シ不時ノ死ヲ免カル丶ニ於テハ何時ニ至ル迄モ生キ延ヒ絶エス增大シ時々二分シテ又小トナルモノナレハ今日此地球上ニ住スル所ノ單細胞生物ハ吾人々類カ地球上ニ現出セシヨリ今日ニ至ル迄ノ年限ヨリ久シ

是迄ノ習慣トシテ副總長トナリタルモノハ其事務ヲ始ムルノ前ニ於テ一場ノ演説ヲナスヿニシテ其演題ハ講演者ノ自由タル可キモノタリ故ニ余ハ今日諸君ニ向ヒ生物學上ノ一般ノ問題ナル遺傳ノ事ニ付キ御話ヲ致サウト思ヒマス、遺傳ハ實ニ諸生物ニ欠ク可カラサルモノニシテ通常人ニハ實ニ明白ニシテ別ニ説明ヲ要セサルカ如クナレ𪜈是レヲ思考スルニ及ンテハ其顯象ノ非常ニ込入リ其性質奇々妙々實ニ以テ容易ニ解ス可カラサルモノナリ、而シテ或ル有名ナル生理學者ハ近時之レニ付キ左ノ如ク云ハレタリ、云ク「遺傳ニ關シタル理論ハ實ニ多クシテ從來幾人トナク之レヲ説明セント欲シタレ𪜈其研究ノ結果ハ實ニ僅少ニシテ余輩ハ此疑問ニ就キ新ナル研究ヲナスノ望ハ既ニ盡キタルモノヽ如ク見ユレ𪜈何程迄深ク我々カ達シ得ルヤヲ知ル爲メニ時々之レヲ研究セサルヿヲ得ス、

余輩ハ實ニ此疑問ニ就キ絶エス新ナル研究ヲナシ之レヲ解明スルヿヲ務メサルヲ得ス何ントナレハ其性質タルヤ吾人々類ノ到底達シ得サルモノニ非スシテ只其現象ノ非常ニ込入リ居ルカ故ニ今日迄ハ之レヲ解スルヿ能ハサリシモノニシテ余輩ハ未タ余輩カ爲シ得サルノ點ニ達スルノ路猶遠シト思フナリ、

斯ク云フ𪜈ハ遺傳ハ人類ノ腦ノ構造及ヒ生理ノ如キ解剖生理上ノ問題ト幾分カ類似セル所アルカ如シ、即チ吾人人類ノ腦ノ構造ノ如キハ無數ノ纖維幷ヒニ細胞ヨリ成立スルヲ以テ非常ニ込入リタルモノニシテ縱令其一本々ノ纖維ハ能ク研究シ得、時ニ依リテハ某纖維ト其近傍ニアル所ノ神經細胞トノ關係ヲ知リ得ルノミナラス又余輩ノ出來得ル丈ハ多ク其作用ヲモ知ルモノナレ𪜈多クノ細胞幷ヒニ纖維ノ非常ニ込入リタルヲ以テ腦内ニアル總テノ細胞幷ヒニ纖維ノ作用ヲ知ルヿハ實ニ余輩ノ急ニ望ム可キヿニ非ス、然レ𪜈余輩ハ今日ニ至リ既ニどんどん氏ノ球チ解キ始メ其結果ハ隨分美ナレ𪜈今日ヨリ若干年ヲ經テ腦ノ機官ノ作用ヲ充分ニ知リ其數萬ノ構造作用ヨリ全腦ノ作用ヲ知リ一ノ定説ヲ案出シ得ルヤハ實ニ知ル可ラ

ヲ說明スルノ一助トモナルヘシ而シテ僅少ノ動物ニ於テハ實ニ此連繼アルカ如シ、例ヘハ或ル六肢蟲ニ於テハ卵カ分裂シテ生長スルニ際シ卵細胞體ヨリ一個ノ小細胞ヲ發スルモノナリ、之レ即チ生殖細胞ニシテ後又成長スル所ノ幼蟲ノ體内ニ入リ變シテ生殖細器トナルモノナリ、又我淡水中ニ多ク生スルみじんこト稱スル小甲売蟲類ニ於テハ生殖細胞ハ卵ノ分裂ノ極初ニテハアラネ其其分裂ノ際分裂球ノ未タ三十個迄增加セサル時ニ於テ他細胞塊ヨリ分離シテ同シク其生殖器トナルナリ、海上ニ浮游スルぎったト稱スル蟲類ニ於テハ此分離ハ尚ホ遲クシテ卵ノ分裂ノ全ク終リタルトキニアリテ遂ニ脊椎動物ニ至リテハ此分裂ハ幼仔カ全ク其形チヲ成シタルノ後ニ於テ始メテ起ルモノナリ、然リ而シテ發生學ノ證スルカ如ク不死ノ生殖細胞ト死スヘキ形成細胞ノ物質即チぷらずまノ間ニ一大差違アルヲ以テ余輩ハ生殖細胞内ニハ此二類ノぷらずまアリテ生物ガ發生スルノ間ニ於テ各々分レテ生殖形成細胞トナルモノナリト云ハサルヲ得ス

# 寄書

（說ノ可否ハ本誌編輯者其責ニ任セズ）

## ●甕牖雜記

上田英吉述

### ○鯨ノ噴潮及ビ拜風

鯨鯢ノ族ハ時々水上ニ出沒シテ大氣ヲ呼吸シ永ク水中ニ潛ムヲ得ス其噴水孔ヨリ呼出スル大氣忽チ外氣ノ寒冷ニ觸レ凝縮シテ煙霧ノ狀ヲナシ又トモニ周圍ノ海水ヲ飛散シテ細雨ノ倒灑スルガ如シ俗ニ之ヲ鯨ノ潮ヲ噴クト謂フ而シテ其噴潮ノ狀ハ各種ノ鯨皆之ヲ異ニセリ故ニ肥前紀伊等ノ捕鯨地ニテハ善ク海色チ觀ル者山ニ登リ海面數里ノ外ヲ望見シ鯨ノ來ルヤ其噴沫ヲ相シテ目標ヲ揚ケ或ハ狼煙ヲ上ケ以テ其何種タルヲ報ス毫モ誤ルコトナシ蓋其識別ノ法ハ多年ノ經驗ニ在リテ筆舌ノ能ク盡クスベキニアラズ先輩嘗テ鯨ノ噴潮ヲイヘル者二三アリ左ニ之ヲ抄錄シテ以テ考鏡ノ一助トス

クシテ生物カ初メテ此地球上ニ現ハレタル時ヨリ今日ニ至ル迄ノ年限ト同様ナル壽命ヲ具フルモノナリ、

而シテ斯ノ如キ單細胞生物ニ於テハ何故ニ次代ノモノカ先代ノモノニ類似スルヤト云フヿヲ幾分カ容易ニ解シ得ルモノナリ何ントナレハ次代ノモノハ只其先代ノモノヽ一片ナレハナリ然レトモ何故ニ其一片カ此レヲ生シタルモノニ類似スルヤト云フ問ニ至リテハ余輩カ未タ充分ニ説明シ得サル所ノ同化力ナル新問題ニ移リ入ルモノナリト雖トモ生物ハ一定セル他ノ物質即チ特別ニ之レヲ云ハヽ食物ナルモノヲ取リ之レヲ己レノ躰質ニ變スルノ力アルヿハ確然タルカ如シ、

故ニ單細胞生物ニアリテハ遺傳ハ個躰ノ續キニシテ其躰ノ物質ハ同化力ニ由リ絶エス增加スルモノナリ、

然レトモ多細胞生物ニ於テハ其生殖ハ單ニ分躰ニ起ラス又其增殖スルニ當リ全躰ノ形質ハ直チニ次代ノ個躰ニ遷リ行クモノニ非サルモノナレハ遺傳ハ如何シテ生スルヤ、

多細胞生物ニ於テハ有性生殖ハ多ク其增殖ノ基本ニシテ何レノモノニ於テモ全ク之レヲ欠クモノナク多クノモノニ至リテハ實ニ此レニノミヨリテ增殖スルモノナリ、又其增殖ハ體內ニアル所ノ生殖細胞ト名ケ體ノ他細胞トハ全ク異ナリタル細胞ナリト思考シ得ルモノ又其全ク異ナリタル作用ヲナスカ爲メニ斯ク思考セサルヲ得サル所ノ一定セル細胞ニノミヨリテ成ルモノナリ而シテ此細胞ナルモノハ其之レヲ有スル所ノ個體ニ取リテハ別ニ作用ヲナサヾルモノナレトモ種類ヲ維持スルニ於テハ大要アルモノナリ何ントナレハ此細胞ハ各個皆一定セル塲合ニ逢フトキハ又發生シテ其之レヲ生セル所ノ種ノ生物トナルノミナラス其之レヲ生セル所ノ個體ト多少同シキ形質ヲ具ヘ來ルモノナレハナリ、然ラハ如何シテカ此ノ塲合ニ於テハ親ノ形質カ子ニ遺傳スルヤ、如何シテカ只一個ノ生殖細胞カ其之レヲ生セル所ノ全體ノ全形質ヲ再ヒ現出シ得ルヤ、

然レトモ若シ茲ニ於テ一代ヨリ次代ニ移リ行ク所ノ生殖細胞ノ物質カ連繼シ行クモノナレハ之又幾分カ遺傳ノ現象

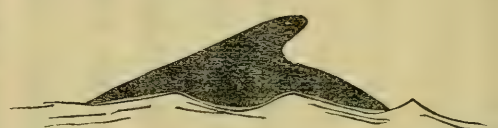
丙圖



丁圖



戊圖



(甲)脊美鯨(黒色)　(乙)小鯨(鼠色ニ黒色ヲ帯ブ)
(丙)座頭鯨(黒色)　(丁)長簑鯨(鼠色)
(戊)鰯鯨(Balaenoptera arctica)(黒色)

ルニ際シ僅ニ背ノ一部ヲ現ハスモノハ(甲圖ヨリ戊圖ヲ参看ス可シ)復タ出デ、游泳スト雖圧其全尾ヲ翻展シテ波ヲ皷スルトキハ暫ク海底ニ潜ムノ徴ナリトス是レ余ガ親シク撿スル所ナリ

○鱣魚

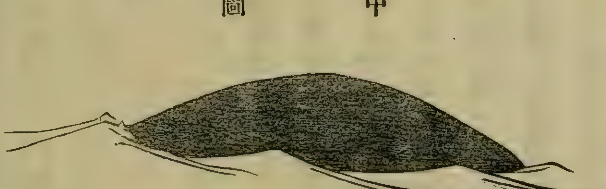
鱣魚ハ蝶鮫(Accipenser)ニシテ古來「ふか」トスルハ非ナリ栗本丹洲翁既ニ之ヲ辨セリ陳藏器曰鱣長二三丈純灰色體有三行甲逆上龍門能化爲龍也マタ陸機曰鱣出江海三月中從河頭來上鱣身形似龍銳頭口在頷下背上腹下皆有甲縱廣四五尺今於盟津東石磧上釣取之大者千餘斤可蒸爲臛又可爲鮓魚子可爲醬詩衛風碩人云鱣鮪發々是也マタ李時珍曰鱣出江淮黃河遼海深水處無鱗大魚也其狀似鱘其色灰白其背有骨甲三行其鼻長有鬚其口近頷下其尾岐其出也以三月逆水而生其居也在磯石湍流之間其食也張口接物聽其自入食而不飲蟹魚多誤入之昔人所謂鱣鮪岫居世俗所謂鱘鱑魚喫自來是矣其行也在水底去地數寸漁人以小鉤近千沈而取之一鉤着身動而護痛諸鉤皆着船游數日待其困憊方敢掣取其小者近百斤其大者長二三丈至一二千斤其氣甚腥其脂與肉層々相間肉色白脂色黃如蠟其脊骨及鼻幷鬐鰓皆脆軟可食其肚及子鹽藏亦佳其鰾亦可作膠其肉骨煮炙及作鮓皆美トソノ蝶鮫タルヤ以テ證スル可シ抑モ鱣魚ハ又タ鰉魚ト

| | |
|---|---|
| 脊美鯨(Balaena antarctica.) | 海上に間もなく浮み出潮を吹上る時海中より一二間ハ一筋と見へ二三間にてハ二ッに分れ見ゆる(西海鯨圖) 英吉曰脊美鯨ハ海面ニ浮ヒ游泳スルノミニシテ其噴潮ヲ認メザルコトアリ紀伊ノ漁人之ヲ「からふき」トイフ蓋空吹ノ謂ナリ |
| 小鯨(? Rhachianectes glaucus.) | 多く磯に沿ひ通り浮出ることも潮吐ことも少く潮の内にて潮吐こと多くして難見出(太地詳傳集) 英吉曰此鯨ノ噴潮高ク騰飛セザルヲ以テ上記ノ說アルナラン |
| 座頭鯨(Balaenohtera antarctica) | 潮を吹上る時上細く三筋に見へ云云(西海鯨說) 座頭鯨ハ脊美より息際長く潮を吹こと一筋にて海底深く游なり(勇魚取繪詞) |
| 長簀鯨(? Sibaldius sulfureus.) | 長鬚ハまたこれに(座頭鯨ヲ指ス)增りて深くおよぎ息際いと長くて潮を一筋にいさいさ高く吹切やうに吹上るなり(勇魚取繪詞) |
| 抹香鯨壺魚 (Physeter macrocephalus.) | 頭圓項出上に潮穴あり潮を吹くこと他鯨こ違ひ向へ吐出して直上せず(鯨記) |

按ニ諸鯨ノ噴潮各自異ナレルハ職トシテ其噴水孔ノ形狀ニ由レリ乃チ有鬚鯨族(Mystacoceti)脊美鯨、小鯨等ノ如シノ如キハ二噴水孔アリテ長楕圓形ヲナシ中隔俗ニ障子ト云兩孔ノ間ニ在リ故ニ其噴潮二列ニ騰上シテ空ニ散スルモ特ニ有歯鯨族(Odontoceti)抹香鯨、巨頭鯨、海豚等ノ如シハ一孔ニシテ圓形若クハ半月狀ヲナセリ故ニ直上セズシテ飛洒ス又拜風モ鯨ノ種類ニ由リ長短及ヒ多少アリ抹香鯨ハ一浮一沒約子二十八回乃至三十回ニシテ海中ニ潜ミ脊美鯨ハ九回ヨリ拾一回ニ至ル其他尙ホ少キハ三四回ナルアリ紀伊牟婁郡太地ノ漁人ハ之ヲ稱シテ「一浮き(ヒトウ)」ニ幾頭(イクカシラ)ト云フ蓋シ一浮きトハ其水上ニ出沒游泳スルノ間ニシテ即チ五浮五沒シテ潜ムトキハ一浮きニ五頭トイフガゴトシ且ツ其將サニ沒セントス

鯨ノ沒セントスル圖
(但左行スル者)

甲圖



乙圖



たる依頼書をたのみ之を持ちて去る六日晝後早々勇にいさんで校を出てたり。午後三時頃神社へ到着の上神官へ依頼状を出し一見を乞へり。神官ハ心よく之を領し先つ我々一行に神酒一杯つゝをあたへ頓て美麗なる高き三寶を出し拜せしむ。これなん例の龍蛇の上りたる三寶にして余ハ先つ瞳孔を定め御尊躰を熟々拜するに其形質ハ紛ふ方なき（Hydrophis）屬なりき

先つ形質の大體を述へんに神蛇ハ三寶上に蟠屈し居りて「ヌンダ」とり云へる海藻を敷き其長さハ慥かにわからざるも一尺餘、横徑中央の部にて一寸五分許、背部深黒色に少しく藍色を帶び腹部ハ橙黄色にして光澤あり誠に奇麗なり（あまり奇麗過ぎるを以て少しく疑ひあり）鼻孔楕圓にして嘴上ニ開き脊腹共に細鱗を被り全身頗る側扁して脊腹の界ニ稜あり尾部扁平橈状をなし色は前身と異りて淡黄色の不正形龜甲紋の如き斑點あり紋の內ハ灰色なり頭首長楕圓ニして鱗稍大なり（何分三寶の周圍にハ金網を張りつめたれば手に取り見ると能ハず故に其形質中洩れたる點も多かるらん乞ふ察せよ）以上の標徴を考ふるときは或は夫の印度洋に產すると云ふ（Pelamis bicolor, Dand.）にも非る乎（?）練木氏の書によれバ本邦にハHydrophis）ニ四種ありと、若し此內のもの乎（?）尙識者の高敎を待つ茲ニ謹で佐太神社龍蛇の本體を報告すると此の如し

附言當地杵築（出雲大社のある處）邊の海中よりも龍蛇上る由之れハ前と異りて白蛇なりと。之れも衆人のたうとむ神蛇なりと。他日實見の時ハ委細御報致すべし本体を彼れ是れ云ふは神に對し恐れ多きとかは知らされども學問發達上どうも致方なし宍賢々々

當中學校、師範學校の御雇敎師にて米國人「ラフカヂオ、ヘルン」（Lafcadio Hern）なるものあり氏は中々面白き人ニて生徒ニ對する敎授も信切にして自己の著書もあり文學者通信者としては隨分價直ある人なり氏は熱心に當地の風土習慣等を取調ふる樣子なるが夫の龍蛇の上ると聞き即日拜見に出掛け其奇なるものニ驚け

イヒ數種アリ其支那ニ產スル者ハパシレウスキー氏之ヲAccipenser Mantschuricus. ニ充テタリ滿洲地方就中吉林省烏蘇里河及ヒ其支流ニ多ク又楊子江、黃河等ニモ出ヅ其大ナル者重サ一千封乃至一千八百封ニシテ往々二千封ニ及ブモノアリ其游行スルヤ遲緩ニシテ春月河流ニ遡ル吉林省三姓ノ魚皮韃子（滿洲ノ一酋族ニシテ常ニ魚皮ヲ衣トス故ニ此名アリ）專ラ之ヲ捕獲スルヲ以テ業ト爲シ之ヲ捕フルニ鈎ヲ以テシ或ハ鏢鎗ヲ用ウルコトアリ其肉潔白ニシテ味佳ク骨鰭共ニ食フ可シ淸人ハ殊ニ其頭骨及ヒ軟骨ヲ賞シテ珍味嘉殽ニ列セリ故ニ其價最モ貴シ吉林省ノ官吏ハ年々之ヲ氷結シテ北京ニ致シ以テ皇帝ノ御膳ニ供スト云フ又コノ骨ヲ細截乾晒シテ明骨トナシ俗ニ之ヲ鰉魚腦トイヒ鐘鳴鼎食ノ家常ニ其羹獻ヲ儲ケ以テ賓客ヲ饗ス

## 雜錄

●**佐太神社の龍蛇**　當松江市より二里ほどもある處に佐太神社と云ふ尊き縣社あり古より大祭の時には必す龍蛇と云ふものを衆人にをがましむ。此ものは右佐太村より程遠からぬ日本海に沿ひたる七ヶ浦の內孰れかの浦にて年々大祭に當る月の內に上ると云ふ。又此蛇はいと神聖なるものにて土地の者に聞けば龍宮よりの特命全權公使なりと云へり。先月下旬より本月上旬にかけ丁度祭禮にて近鄉近在よりの參詣人實に夥しく貴き人も賤きものもだれかれを論せず此社へまゐれば先の神蛇に對して三拜九拜す。本年も新鮮なる龍蛇上りたりとて當地の新聞は左の通り報せり

龍蛇上る　去る廿七日午前十時一人の漁夫か魚瀨村の海邊にありしに見る間に沖合の海面瀾波を起し寄來るものあれば漁夫は龍蛇神ならんと待ち居たるに果して黑背金紋の龍蛇神岩上に上れり漁夫は之を一器に入れ佐太神社に捧けたる由云々

右の報告により上りたると慥かなれば一度拜見せばやと思ふ折柄余か受持つ級の學生は動物學硏究旁々共に行かんとを乞ひて止まず余も之に同意し校長に右神官へ宛て

メ起ル所ノ危難ハ其時ニアリテモ左程ニ思ハザリシニ後ニ至リテハ固ヨリ尠シモ意ニ介スル所ナカリキ又航海中余ノ爲シタル學術的ノ仕事即チ珊瑚島ノ問題又セントヘレナノ如キ島ノ地質的構造ヲ明ニシタルヿヲ回顧スル卄ハ實ニ滿足ニ堪ヘザルナリ又ガラペーゴス群島ニ棲息スル所ノ動植物ノ互ノ關係及ビ其南米ノ生物トノ關係ノ奇異ナルヿヲ謂ハザル可ラズ

余自ラ判斷スル所ニ由レバ余ハ此ノ航海中タヾ研究チ好ミ又博物學ノ無數ノ事實ニ幾分カヲ加ヘントノ欲望ヨリ勉强シタリ然レ圧余ハ又學者間ニ可ナリノ位地ヲ得ントノ欲望モアリタリ——余ハ同好者ヨリ欲望甚ダ盛ナリシカ或ハ然ラザルカハ判ズルヿ能ハザルナリ

St. Jago ノ地質ハ實ニ著シケレ圧甚ダ簡單ナリラバノ一流ハ近代ノ貝及ビ珊瑚ヨリ組成サレタル海底ニ流レ込ミテ是ヲ白色ノ堅鞏ナル岩石ニ變ジタリ其ノ後全島ハ高マレリ然レ圧白岩ノ線ハ余ニ新奇ノ肝要ナル事實ヲ示セリ即チ午後常ニ働キテラバチ流出シタル火山穴ノ周圍ハ下落セリトノ事是レナリ余ノ旅行シタル種々ノ國ノ地質ニ就テ書ヲ著サントノ考ノ浮ビ出テタルハ始メテ是ノ時ノ事ナリキ而シテ余ハ是ヲ考ヘテ深ク悦ビタリ是ノ時ハ實ニ余ノ記念スベキ時ナリキ而メ余ハ余ノ息ミ居タル低キラバノ岸炎々トシテ是ヲ輝シタル大陽、又二三ノ奇異ナル砂漠ノ植物ノ傍ニ生ジタルモノ及ビ余ノ足許淺瀨ニ棲ユル所ノ珊瑚蟲ヲ記憶スルヿノ明細ナルハ實ニ愕クベキナリ其ノ後フヰツロイ氏ハ余ニ日記ノ或部分ヲ朗讀センヿヲ乞ヒテ是ヲ公ニスベキヿヲ公言シタリ故ニ又是ニモ新著ヲナスノ望アリタリ

余ノ航海ノ終ニ近ヅキアツセンションニ在リタル卄ハ余ハ一書ヲ姉妹ヨリ得タリ其中ニ曰ク「セヂウヰク氏ハ余ノ父ヲ問ヒタル卄余ノ將ニ學者中ノ錚々タル者ニナラントスルヿヲ公言シタリ」ト余ハ當時如何ニシテセゲ氏ガ余ノ爲セル事ヲ知リタルヤ解セザリキ然レ圧余ノ(後ニ)聞キタル所ニ由レバヘン氏ハ余ノ氏ニ與ヘタル手紙ヲケムブリッヂ哲學會ニテ朗讀シ且是ヲ會員ニ頒タン爲メ出版

りと云ふ其熱心感ずるにあまりありと云ふべし

明治廿三年十二月　松江　會員　渡邊盈作報

●同蛇に就て　明治廿三年十一月廿八日新潟市近傍松ケ崎濱に於て前種と同一ならんと推察する海蛇を漁獲し當時該縣尋常師範學校に於て之を購求せられたる由槇忠一郎氏より圖畫を添へ本誌へ通報せられたり因て之を左に抄錄す

體ノ背部黑色腹部クローム黄色橈狀ノ尾端ハ鷄卵色ニシテ鱗ハ又昔蠶種大ノ圓形ニテ前後共ニ一樣ナリ全體縱扁シ倒膀狀ヲ爲シ游泳ニ便ナリ肛門ハ橈尾下部最上ノ黑斑點中ニ開在スクロースノ動物學ニハ頭部甚タ小ニシテ認識スベカラズトアレ𪜈私ノ見ル處他ノ有毒類ノ頭ト同大ナリト存ズ又 bicolor トアレ𪜈 tricolor ノ方正シカラン

全長六四、五セメ頭ノ長サ四セメ喙端ヨリ口裂マテ二、七セメ頭ノ周圍六、八セメ頭ノ周圍五、五セメ腹部七、七セメ尾ノ長サ七セメ尾ノ周圍五セメ

編者曰頭部ノ形狀ニ就キくらうす氏ノ動物書ヲ引證セラレタレ𪜈該書中ニハ頭部甚タ小ニシテ認識スベカラズ等ノ語ヲ記載セザルヨウナリ又種名ニ就キ云々セラレタレ𪜈 Daudin 氏ノ命名セル種トハ別種ナラントノ謂ハル丶ナラ兎モ角動物ノ種名ガ外貌ニ不合格ナリトテ之ヲ是非スベキモノニアラサルナリ

●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）　余ハ此處ニ航海中起リタル諸ノ事柄—何處へ行キ何ヲ爲シタルカナゾ—ヲ記スルニ及バズ何トナレバ余ハ余ノ公ニシタル日記中充分委シク記述シタレバナリパタゴニヤノ大砂漠及ビテラデル、フェイゴーノ蒼々タル山脈ハ余ノ心ニ深ク高大ノ考ヲ惹起シタリト雖𪜈熱帶地方ノ鬱蒼タル森林程今日ニ至ルマデ明活ニ余ノ心中ニ浮出ルモノハ非ザルナリ裸體ノ野蠻人ガ其ノ國土ニ流浪タルハ實ニ忘ル可ラザルノ觀ナリ馬上或ハ小舟ニテ時トシテハ數週間モ不墾ノ地ヲ旅行シタル𪜈余ノ愉快ハ實ニ深キモノナリキ此等ノ旅行ノ爲

考シ且是ノ後二十年間ハ斷間ナク此ノ問題ニ就テ研究シタリ

此等ノ二年間余ハ又社會ニ出タルヿアリ又地學會ノ名譽書記ノ一名トシテ働キタルヿアリ余ハ度々ライエルニ面會シタリ氏ノ特質ハ他人ノ仕事ニ深ク同情ヲ現ハスヿナリキ英國ニ歸リタル時余ノ珊瑚礁ニ就テノ意見ヲ述べタル時氏ノ深ク是ニ興味ヲ表セシハ余ノ實ニ愕キ且悦ビタル所ナリ又是ノ事ハ余ニ大ニ勇氣ヲ與ヘ且氏ノ忠告及ビ模範トスベキ擧動ハ余ヲ深ク影響シタリ是ノ時余ハ又ロバート、ブラウンヲ見タリ余ハ常ニ日曜日氏ヲ訪ヒ其ノ朝飯ノ時共ニ談話シタルニ氏ハ眞ニ面白キ觀察及ビ鋭敏ナル批評ヲ滔々ト吐出シタリ然レ圧是等ハ概子細小ノ事ニシテ余ト共ニ學術上ノ大問題ヲ討議シタルヿナシ

又此二年間余ハ數多ノ遠足ヲナシタリ其中一ハ稍長クシテグレン、ロイニ行キタルヿアリ此ノ行ノ記ハ哲學雜誌ニ出版サレタリ此論文ハ大失策ニシテ余ハ深ク是ヲ愧ヅ余ノ南米ニ於テ觀察シタル陸地ノ高マリハ深ク余ニ感動ヲ與ヘタレバ余ハグレン、ロイノ平行線ヲ海水ノ働ナリトセリ然レ圧アガシーノ其ノ氷河説ヲ公ニセルヤ余ノ説ハ維持ス可ラザルニ至レリ當時吾人ノ知識ニテハ他ノ説明ハ爲シ能ハザリシ故余ハ海水ノ働ヲ主張シタリ而メ余ノ誤謬ハ學術ニ於テハ排弃主義ハ恃ム可ラサルモノナリトノ訓トナリテ余ノ爲メニハ益アリタリ

余ハ終日理科學上ノ問題ニ就テ研究スルヿ能ハザリシカバ余ハ此ノ二年間ニ於テ種々ノ問題ニ就テノ書ヲ讀ミ其ノ中ニハ形而上學ノ書モアリタリ然レトモ余ハ此等ノ研究ニハ眞ニ不適當ナリキ此ノ時余ハウオヅウオース及ビコールリッヂノ詩ヲ深ク嗜ミタリ且余ハ Excursion ヲ二度モ讀ミ通シタリト誇ルヿヲ得ルナリ是ヨリ先ミルトンノ Paradise Lost ハ余ノ最モ愛シタルモノナリキ而シテ余ノビーグル號航海中遠行スル時タヾ一冊ノ書ヨリ外ニ持帶スルヿ能ハザリシ時余ハ必ズミルトンヲ擇ビタリ

（未完）

シタリト又余ノヘン氏ニ贈リタル化石ノ骨ハ古生物學者中大ニ注意ヲ惹起シタリ余ハ此手紙ヲ讀ミタル後雀躍シテアッセンションノ山ニ登リ是ガ火山石ヲシテ余ノ槌ノ下ニ震動セシメタリ此等ノ事ハ總テ余ノ大望ヲ懷キシヿヲ現ハスナリ然レ𪜈余ハ後年ニ至リテ余ノ友ナルライエル及ビフッカーノ如キ人ノ可認ヲ得ンヿヲ深ク勉メタレ𪜈一般ハ公衆ノ余ニ就テノ說ハ差程心ニ介セザリシト謂フモ決シテ自ラ欺カザルヿヲ信ズルナリ余ノ著ニ就テ是ヲ可トセル批評又余ノ著ノヨク賣捌ケタルヲ尠シモ悅ハザリシト云フニ非ズ然レ𪜈斯ノ如キヿヨリ得タル快樂ハ決シテ永ク續カズ又余ノ行クベキ道ト思考シタルヿヨリモ一歩モ迷ヒタルヿナシト確信スルナリ

余ノ英國ヘ歸リタルヨリ余ノ結婚ニ至ルマデ（一八三六十月二日ヨリ一八三九一月二十九日マデ）

此等ノ二年ト三ケ月ハ余ノ生涯中最モ有爲ノ時ナリキ然レ𪜈又時々病ニ罹リタルヲ以テ時間ヲ失ヒタルヿアリシュリューースベリーメアー、ケムブリッヂ、及ビロンドンノ間ヲ度々往復シタル后遂ニ十二月十三日ケムブリッヂニ居ヲ定メタリ余ノ採集シタルモノハ總テ是處ニテヘン氏ニ委托シタリ余ハ是處ニ三ケ月間止マリ余ノ採集シタル鑛物及ビ岩石ヲ敎授シミラー氏ノ助ヲ以テ總テ調査シタリ

余ハ「旅行日記」ノ稿ヲ起シタリ是ハ甚ダ六ケ敷仕事ニ非ザリキ蓋余ノ原稿ハ隨分注意シテ認メタレバ其中ヨリ學術上面白キ事柄ヲ拔萃スルニ止マリタレバナリ余ハ又ライエル氏ノ忠告ニ由リチリ海岸ノ高マルヿニ就テ余ノ少々觀察シタル所ヲ地學會ヘ贈リタリ

一千八百三十七年三月七日余ハロンドンノ Great Marlborough 街ニ居ヲ定メ是處ニ余ノ結婚マデ即チ殆ド二年間止マレリ此ノ二年間ニ余ノ日記ヲ終ヘ地學會ニ於テ種々ノ論文ヲ朗讀シ余ノ「地質上ノ觀察」ノ原稿ヲ始メ又「ビーグル號航海ノ動物編」ノ出版ニ就テ相談ヲ調ヘタリ七月ニ至リテ余ハ始テ種ノ起元ニ就テノ事實ヲ集メンガ爲メ記簿ヲ始メタリ是ヨリ先余ハ是ノ問題ニ就テ久ク熟

動物學雜誌第廿八號
明治廿四年二月十五日發兌

## ●備前くらげ

岸上鎌吉

此くらげノ構造ハ去年今月ノ本誌(第二卷四七一五七頁圖第二版)ニ載セタリ、其記事中肩板及ビ下腕ニてんたくる澤山アリトアレド、てんたくるノ語ハ妥當ナラズ、他ノくらげノてんたくるト異ニシテ寒天ノ細キ棒寧ロ紐ニテ毒絲胞ニテ包マレ收縮セズ、故ニ爰ニ正誤ス。

今へっけるノくらげ譜ヲ見ルニ備前くらげハRhopilema rhopalophora, Haek. ニ似タリ、此くらげハ印度洋やゞがるかーノ東ニ産スト云フ、備前くらげト異ナル所ハ口腕上ニアル寒天棒ノ造構ニアリ、其寒天棒ハ三角ノ横斷面ヲ有シ其中心ニアル空洞ハ三角ノ端ニ開ク、備前くらげノ寒天棒ハ圓形ノ横斷面ヲ有シ其中心ノ空洞ハ枝ヲ出サズメ直チニ其尖端ニ開ク、此外備前くらげニハ細長キ寒天紐アリ(先キニてんたくるト稱セシモノ)此寒天紐ニハ空洞ナシ。

印度洋ノ該くらげト備前くらげトノ差ハ甚シキモノニ非ザレバ別ニ新屬ヲ設クル要ヲ見ズ、又Rhopilema屬ニハrhopalophoraノ外ニ種類ナキト信ズ、故ニ備前くらげハ該屬ノ新種ト認メR. esculentaト命名シ其diagnosisヲ作ルコ左ノ如シ。

### RHOPILEMA ESCULENTA, n. sp.

*Species-Diagnose*: Schirm hutförmig, mit 130-180 Randlappen (in jedem Octanten 14-20 schmale, spitzige, dreieckige Velar-Lappen, zwischen 2 kürzen, lanzetlichen Ocular-Lappen). Oberarm eben so lang als der Unterarm. Unterarm so wohl als auch Scapületten, zwischen den Saugkrausen zahlreiche, lange, mit Nesselzellen bedeckte Gallert-Filamenten tragen; ferner die 3 lappenreiche Flügel des Unterarms an ihren Saugkrausen zahlreiche, Kegelförmige, unten zugespitzte Gallert-Anhänge (ungefähr 500 in der Zahl, 10-300 Mm. lang) tragen.

*Farbe*: Indigo-blau, Gonaden gelblich, Saugkrausen braun, Gallert-Anhängen weiss.

*Grösse*: Schirmbreite 350 Mm., Schirmhöhe 270 Mm.

*Fundort*: Japan; Inländische Meer, Schimidu Hafen.

# 東京動物學會記事

●例會　去明治廿三年十二月廿日午后二時ヨリ帝國大學動物學教室ニ於テ月次會ヲ開ク箕作佳吉君水龜(イシカメ)ノ胚葉ニ就テ元來中葉ハぶらすとぽわノ前ニ於テ單體トシテ發生スト云ヒ或ハ雙體トシテ啓發スト云ヒ其孰カ是ナルヤ未其歸着スル所ヲ知ラスト雖今此水龜ノ中葉ヲ撿スルニ其發生雙體ヨリ起リ鼈ニ於テハ細胞亂雜不正ニシテ層ヲナサザレ𪜈水龜ニ於テハ細胞正列セルヲ以テ內葉ヨリ萌生スルノ狀ヲ明瞭ニ視察セラルヽナリト其せくしよんヲ示サレ說明セラレタリ當日出席員十九名午后三時散會ス

●寄贈書目　先月中本會ニ領収シタルモノ左ノ如シ

| | |
|---|---|
| 大日本水產會報告第百三號 | 大日本水產會 |
| 牧畜雜誌第四十五、六號 | 牧畜雜誌社 |
| 東京醫學雜誌第四卷第廿三、四號 | 東京醫學會 |
| 植物學雜誌第四十六號 | 植物學會 |
| 大日本農會報告第百拾貳號 | 大日本農會 |
| 日本蠶業雜誌第三十五號 | 日本蠶業雜誌社 |
| 東洋學藝雜誌第百拾壹號 | 東洋學藝社 |

## 正誤

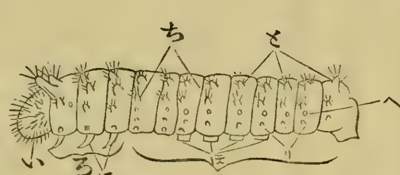
第二十六號　五四四ページ　二行　ウニはユムシの誤

蝶類ノ仔蟲ハ頭ヲ除キ十二個ノ環節ヨリ成立ス、其第一、第二及ヒ第三節ヲ胸節ト云ヒ四ヨリ十二ニ至ル九節ヲ腹節ト云フ、故ニ仔蟲ノ体ヲ分チテ頭胸腹ノ三部トナス、頭ハ通常大ニシテ堅ク、其兩側ニ各々六點ノ單眼幷ニ一本ノ三節ヨリ成立セル感觸肢ヲ具フ、其口部ハ物ヲ嚙ムニ適シ、上下ノ二唇、及ヒ三對ノ顎肢アリ、其第一對肢ハ强剛ニシテ草木ノ葉ヲ嚙ムノ用ヲナシ、第三對肢ハ左右ノモノ合一シテ管狀ヲナシ吐絲器トナル、胸節ハ各々一對ノ步肢ヲ具フ、各肢ハ五節ヨリ成立ス、其体ニ箇節スルモノヲ腰節(Coxa)ト云ヒ之ニ次クモノヲ複股節(Trochanter)ト云ヒ次ノ一節ヲ股節(Femur)ト云ヒ次キヲ脛節(Tibia)ト云ヒ終リノモノヲ趾節(Tarsus)ト云フ、趾節ノ尖頭ニ鉤狀ノ爪アリ、第一及第二ノ腹節ハ肢ヲ欠ケ圧第三、第四、第五及ヒ第六ノ四節ニ又一對ノ肢アリ然レ圧此肢ハ別ニ箇節ヲ具フルコトナク只タ腹節ノ側ニ當リ皮膚ノ突起ヲ生セルモノナリ故ニ此四對ノ肢ハ胸肢トハ全ク異リテ眞ノ肢ニ非ス、之ニ次ク所ノ二節ハ又肢ヲ欠キ最後ノ腹節ハ又其兩側ニ突起ヲ生シ肢ノ作用ヲナス、

胸部ノ第一節及ヒ腹部ノ第一ヨリ第八ニ至ル九節ノ側面ニ一對ノ氣門アリテ大氣ヲ流通シ呼吸ノ作用ヲナス、

全体背面ノ皮膚ハ全ク裸ナルコハ稀ニシテ多クハ粗毛乳狀突起、棘狀突起等ヲ生ス、又縱線、橫線、環狀、眼狀等ノ斑紋アリテ皆体上ニ一定セル位置ヲ有スルモノナリ、其

圖七圖




あげはてふノ幼キ仔蟲ヲ左側面ヨリ寫ス、廓大圖、(い)頭、(ろ)胸、(は)腹、(に)胸肢、(ほ)腹肢、(へ)氣門、(と)背列突起、(ち)氣門上列突起、(り)氣門下列突起、

背ノ中央線ニ沿フテ存在スルモノヲ背列(Dorsal row)ト云ヒ氣門ノ上ニ位スルモノヲ氣門上列(Supra-spiracular row)ト云ヒ其下ニ列スル者ヲ氣門下列(Infra-spiracular

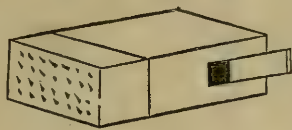
## ●日本産蝶類（第二回）

石川千代松

次ニ蝶類ノ仔蟲ヲ採集シ其卵ヨリ成蟲トナル迄ノ變体ヲ驗スヘシ、蝶類ハ總テ卵ヲ産ムモノニシテ卵ハ孵化シテ仔蟲トナル、其生長ノ際數面脱皮ス、其時彩色斑紋等ヲ變スルヲ常トス

仔蟲ヲ採集スルニモ亦成蟲ヲ採集スルト同シク採集器ヲ要ス而シテ此器ニモ亦種々アルベケレ𪜈とたん板ニテ第六圖ニ示スカ如キ小形ノ箱ヲ製リ其一側面或ハ二側面ニ數多ノ小孔ヲ穿チ置キ仔蟲ヲ尋テ當リタルトキハ其食スル所ノ植物ト共ニ之レニ入レ持チ歸ルヘシ、箱ノ大サハ如何ニテモ宜シケレ𪜈持チ運ヒニ便ナルカ爲メニ小形ノモノヲ宜シトス、且ツ採集スルトキハ一箱中ニ幾種モ入ルヽヿハ便ナラス、必ス一種ツヽ入レ置クヘシ、又箱ノ一側面ニ小孔ヲ穿チ茲ニ小形ナル戸ヲハメ此處ヨリモ蟲ヲ箱中ニ入ルヽヿヲ得ル樣ニ致シ置ヿ最モ便ナリ、

第六圖



仔蟲ヲ採集シテ歸宅シタルトキハ之ヲ畜養シ其脱皮ノ模樣、食物ノ食ヒ方等總テ其居動ヲ細カニ探究シ各々手帳ニ控ヘ置クヘシ又其全体ノ形狀、大小、彩色、斑紋等ヲ總テ細明ニ記載シ且ツ其圖畫ヲ取リ置キ其食スル所ノ植物ノ名稱ヲモ記シ置クヘシ、其脱皮ハ蝶類ニテハ四回アルモノナレハ脱皮間ノ期ハ五期アリ即チ卵ヨリ孵化シテ第一回ノ脱皮ニ至ルヲ第一期トシ、第一回ノ脱皮ト第二回トノ間ヲ第二期、第二回ト第三回トノ間ヲ第三期、第三回ト第四回トノ間ヲ第四期トシ第四回ノ脱皮後ヲ第五期ト云フ、故ニ仔蟲ヲ採集シタル時ハ固ヨリ其第何期迄生長セルモノナルヤヲ知ルヿハ難シト雖𪜈其充分ニ成長スル迄ノ脱皮ノ數ヲ知ルニ於テハ容易ニ其第何期ナルヤヲ知リ得ヘシ然レ𪜈多クハ脱皮ノ時直チニ其脱セル皮ヲ食盡スルモノナレハ注意シテ脱皮スル時ヲ見過ルヿ莫レ、余ハ左ニ仔蟲ノ形狀ヲ簡單ニ述ヘ以テ讀者諸君カ仔蟲ヲ記載セントスルニ當リ幾分カノ便宜ヲ與ヘントス、

端ヲ他物ニ附着シ絲ヲ吐キテ其胸部ノ周圍ニ半環ヲ張リ自己ノ体ヲ之レニ掛ケ其皮膚ヲ脱シテ蛹化スルモノアリ(あげはてふ、ゑろてふ等ノ類)或ハ又体ノ周圍ニ不完全ナル繭ヲ製ルモノアリ、

(以下次號)

## ●日本産ノ蝸牛科 (第三回)

飯島魁

左ニ記スル諸種ノ圖ハ一版トナシ本號中ニ出ス筈ナリシモ畫工ノ流行感冒ニ侵サレタルヲ以テ調製間ニ合ハズ依テ次號ニ譲ルコトセリ讀者幸ニ之ヲ諒セヨ

二十一) **Helix callizona**, Crosse.

次版二十二圖

此種ハ恐ラクハ前種(二十)ト同一ナルベシ、然レドモ一説ニ全ク別種ナリト云フ、形ハ殆ド相彷彿タリ即チ第十版十三圖ト比較シテ知ルベシ、大サハ較小ナリ、大徑二十二、小徑十九、高サ十五ミメ、殼口ノ長十ミメ幅六ミメアリト云フ、圖ノ示ス所ニヨレバ二條帶アリ、其下ナルハ幅廣ク、上ナルハ狹且ツ不明ナリ、臍紋ノ記載ナシ依テ之レナキナルベシ、原標品ハ本邦何レノ地ニテ採集セラレタルヤ知ラズ、余未ダ曾テ其標本ヲ見ズ

二十二) **Helix Brandtii**, Kobelt.

次版二十三圖

殼堅固ナルモ厚カラズ、成長線粗糙ナリ、臍孔狹シ、黃色ナリ、臍紋ナシ而シテ殼ノ下面ニ長方形ナル黑褐色斑紋ノ列ヲ爲セルアリ、之ヲ口内即チ殼ノ裡面ニ觀ルトキハ連綿タル條帶トシテ見ユ、是ヨリ上ニ尙ホ一條帶アリ同シク殼裡ニテハ連綿タルモ外面ニ見ルトキハ不分明且ツ切レ〳〵ト成リテアリ、楷數ハ五、口ハ圓シ、唇ハ白ク光澤アリテ彼ノ二條帶ハ唇面ニ明カニ現ハル、下唇ノ臍ニ接スル所ハ擴ガリテ此所ニ茶褐色ノ斑點アリ、硬膜ナシ、大徑二十六、小徑二十三、高サ十七ミメ

コベルト氏僅ニ一標品ヲ得テ此種ヲ作レリ、産地ハ單ニ日本内部ト記シアルノミ、余ハ未ダ本種ノ記述並ニ其圖ニ符合セル蝸牛ニ出會シタルコトナシ、

row)ト云フ、又背列ノ下ニ位シ氣門上列ノ上ニアルモノヲ背下列(Subdorsal row)ト云フ、

仔蟲ヲ採集シ歸リタル後ハ養蟲箱ニ入ルヽコト肝要ナリ、此養蟲箱ノ製リ方ニ種々アレモ余ハ第八圖ニ示スカ如キモノヲ用ユ、其製法ノ委細ハ圖ニ於テ明白ナレハ別ニ說明スルコトヲ要セス、只其上及ヒ左右兩側面ニ細目ナル金網ヲ張リ前面ヲ硝子張ニ致シ其底ハ引出ニ致シ其内面ニとたん板ヲ張ルヲ宜シトス、然レモ蝶類ノ仔蟲ハ通常泥土中ニ入ラサルヲ以テ之レヲ張ラサルモ宜シ、

第八圖



仔蟲ノ食物ハ瓶ニ挿シテ箱ノ中ニ入レ置クヘシ、茲ニ最モ注意スヘキコトハ植物ヲ挿シタル器ノ口ヲ綿或ハ紙ニテ能ク塞クコトナリ、然ラサレハ仔蟲ハ能ク水中ニ落チテ死スルコトアリ、余ハ通常西洋紙ヲ以テ水瓶ノ口ヘ蓋ヲ致シ此紙ヲ通シテ植物ヲ挿入ス、

仔蟲ヲ尋ヌルモ宜シケレモ猶一層宜シキハ蝶ノ卵ヲ尋ヌルニアリ、然レモ蝶ハ通常卵ヲ個々別々ニ產ミ付クルモノナレハ卵ヲ附着セル植物ヲ其マヽ取リ來リ之レヲ瓶中ニ挿入セントスルニ於テ時ニ依レハ非常ニ澤山植物ヲ集メ置カサルヲ得ス、之レハ甚タ多ク場處ヲ要スルヲ以テ卵ヲ採集スル時ニ唯タ其附着セル葉或ハ莖ノ小片ノミヲ集メ歸宅ノ後之レヲ他ノ新ナル草或ハ木ノ枝上ニごむヲ以テ張付クヘシ、又卵ノ附着セル小片ヲ竹筒ノ内ニ入レ其一方ヲ綿或ハ紙ニテ塞キ遠國ヘ運送スルコトヲ得ルモノナリ、尤モ卵カ產卵ノ後孵化スル迄ノ時ヲ知リタル後ノコトナリ、わいすまん氏ハ常ニ右ノ如クニシテ歐洲ノ各地方ヨリ蝶類ノ卵ヲ求メ之ヲ實驗室ニ於テ孵化セシメテ研究セラル、

仔蟲ハ第四回ノ脫皮ヲ終リ第五期ニ達シ充分ニ生長セル後其消化器内ニアル食物ヲ悉皆脫糞シ其吐絲器ヨリ絲ヲ吐キ或ハ体ノ後端ヲ以テ箱ノ上面等ニ附着シ其皮膚ヲ脫シテ蛹蟲トナルモノアリ(ひよどしてふノ類)或ハ体ノ後

二十三) **Helix hitachi,** (Provisionary name假名)

次版二十四圖

此種ハ常陸地方ニ多ク產スル者ニシテ、一特種タルノ價直アルモノ、如シ、或ハ歐米ノ介學者中既ニ此種ヲ認定シ且ツ命名シタル人アランカナレド差當リ參考書ノ不充分ナルニヨリ確乎知ル能ハズ依テ少シク違例ニハアレドバ其產地ノ名ヲ取リテ仮ノ種名トナシ茲ニ掲ゲヌ、(此等ノ仮名ハ後來ノ學者「リテラチユール」中ニ入レルニ及ズ)一般ノ狀ハ(十六)(十七)若クハ前種ニ類似セリ大サ前種ト殆ド同一ニシテ大徑廿七ミメ、高サ十五ミメチ以テ度トナス、螺旋部ハ著シク圓錐塔狀ニ凸マリ山形ナリ、楷數五半臍孔ハ小ニシテ單ニ穴ヲ穿チタルガ如クニ見ユ、色ハ白ミヲ帯ビタル角黄色ナリ、而シテ臍紋アリ其他黑褐色ノ條帯三アリ然レドモ皆連綿タラズシテ不正形ノ小斑ニ切レテアリ成長線ハ明カニ現ハレ條目規則正シキ方ナリ」其大サノ等シキヿ、臍孔ノ小サキヿ、並ニ條帯ノ切レ〳〵ト成リアルヿハ大ニ前種ノ記述ニ適スルガ如シト雖モ臍紋ノ必ズ存在スルヿ、條帯三アルヿ、螺旋部及ビ殼口ノ有樣(圖ヲ比較スベシ)等ノ諸點ニ於テ著シク異ナルモノ、如シ

理科大學蒐集中ニハ常陸國霞ケ浦近傍(大山村)ヨリノ標品數多アリ又神戸產ノモノ三個許リアリ」此神戸產ノモノハ蓋シ一變種ト看做シテ可ナリ其故ハ形狀ハ常陸產ト一モ異ナル點ナキモ只上皮ノ性質ヲ異ニセリ、即チ神戸產ノ者ニ在テハ上皮甚ダ厚ク乾燥スレバ剝脱シ易シ、黄色ニシテ白色ヲ帯ビズ且ツ三條帯及ビ臍紋ヲ透通セズ故ニ此等ハ上皮ノ剝ゲタル所若クハ殼ノ裡面ニ於テノミ見ルヲ得ルナリ

二十四) **Helix sandai,** Kobelt.

次版二十五圖

此種ニ最モ奇ナル一點ハ諸螺楷ノ楷子段狀ヲ爲スヿ是レナリ即チ各楷面ハ縫合線ヨリ暫クノ間平カニ走リ然ル後ニ下方ニ曲ルガ故ナリ、殼質甚ダ堅固ニシテ重シ、成長線ノ條目分明ナリ、黄褐色ニシテ鮮明ナル條アリ、下部ニ甚

ダ幅廣キ連綿タル條帶アリ、上部ニハ一ノ暗色帶ニヨリ連續セラレタル頗ル不明ノ二條帶アルヲ見ル、臍紋ハ存在セズ、臍孔ハ嶮シク落チ入リ直チニ甚ダ狹キ小穴トナル、殼口ハ圓方ノ卵形、唇ハ厚ク白色ニシテ光澤アリ、等ヲ以テ此種ノ主ナル徴候トス、大徑三十五、小徑三十、高サ二十ミメ

コベルト氏西京産ノ僅一標品ヲ見テ此種ヲ立テラレタルナリ

二十五）**Helix sapporo,**（Prov. n. 假名）

次版二十六圖

形前種ニ近シ、然レドモ螺旋部楷子段狀ヲ爲サズ、尖頭ハ（理科大學所藏ノ三標品共ニ）欠損シテアリ、殼堅固ナルモ重カラズ成長線粗ナリ、臍穴中大ニシテ嶮シク落チ入ル、殼口圓形ナリ、色ハ黄、左レド所々不規則ニ剝ゲテ白色ヲ呈ス、臍紋アリ、其他幅廣キ上下二條帶アリ、其上ナル一條ハ上部外緣ニ沿フテ走リ而シテ螺旋部ニ入リテモ縫合線上ニ廣ク現ハル、右ノ臍紋及ビ條帶ハ屢々黄色條ノ爲メ切ラレテ連綿タラス且ツ不明ナルヲ常トス大徑二十八、小徑二十五高サ（尖頭ノ闕損シタル儘）十七ミメ」

理科大學所藏ノ三標品ハ北海道札幌ノ産ナリ

二十六）**Helix shirawoi,**（Prov. n. 假名）

次版二十七圖

螺旋部高ク全体ノ形圓錐狀ナリ、楷面甚ダ圓ク膨ラミアリ、口ハ楕圓形臍孔狹ク深シ、殼薄輕シ成長線甚ダ細ナリ、色ハ淡薄ナル角黄、光澤アリ、臍紋ナシ、赤褐色ノ狹キ條帶二アリ、其中上ナル一條ハ螺旋部ニ入リテ縫合線ヲ少シク離レテ走レリ、大徑二十、小徑十九、高サ十五ミメ

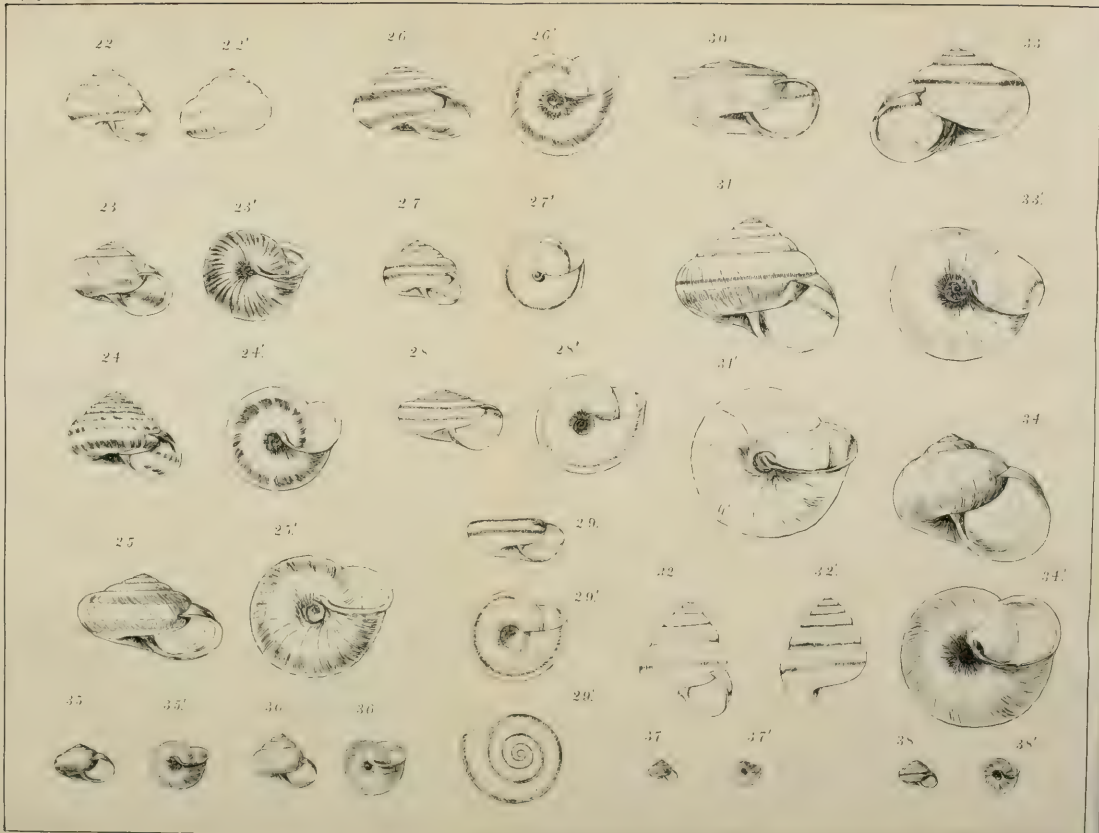
理科大學蒐集中此種ノ三標品アリ、産地ハ北海道「シラオイ」トアリ

二十七）**Helix pallida,**（Prov. n. 假名）

次版二十八圖

前種ヨリモ著シク扁平、楷面餘リ膨ラマズ、形狀本州産ノH. peliomphala ニ最モ近シ、臍孔廣ク深シ、殼面上皮擦レ落チテ暗白色ヲ呈シ、黄ロミ頗ル淡ナリ、光澤甚ダ少ク、

第四版


22
22'
26
26'
30
33
23
23'
27
27'
31
33'
24
24'
28
28'
31'
34
29
25
25'
32
32'
34'
29'
35
35'
36
36'
29''
37
37'
38
38'

脚全長ノ殆ンド二分一ヲ占ム形ハひいかノ交接器ノ如シ
肉鰭ハ總形四角ニシテ体ノ半以上ニ達ス

標本第一（雄一個） 十五年十二月七日東京市場ヨリ買上グ全長五十四せめ內體眞長三十四せめ也

標本第二（雌雄各一個合セテ二個） 東京市場二月一日トアレド年號不明全長各二十三せめ也

標本第三（雌二個雄一個合セテ三個） 十八年十二月廿日トアレモ產地不明

他書所載產地　日本及ビ長崎トス

Genus. Sepioteuthis.

**1. Sepioteuthis lessoniana,** *Fer. et D. Orb.*

所載書目 (Litereture)


Tryon, P. 152, pl. 62, Fig. 212, pl. 64, Fig. 213.
Appl., Ceph. Japan. P. 31.
Hoyle, Chall. Ceph. P. 151.
Gray, Brit. Mus. Cat. P. 80.
D. Orb., Ceph. acet., P. 301, pls. I, VI, Figs. 9—14.
Lesson, Voy. "Aequilla." Moll. P. 241, pl. XI.
Ferussæ, Am. Sc. Nat. T. 7, 1826, S. 155.
Ortmann, Zool. Jahrb. B. 3. H. 5, S. 657.


此種ノ特性體形長楕圓ニシテ外見一寸はりいかノ如ク見ユ然レモ肉鰭ハ甚ダ巾廣ク脚長順式ハ三、四、二、一左第四脚末端ニ交接器ヲ具フ觸脚ノ長サハ體長ニ比シク角質環ハ何レモ殆ンド同形ニシテ同樣ノ鋭牙ヲ有ス也貝殼ハ角質ニシテ薄ク稍ヤ巾廣キ鎗尖ノ如シ

標本第一（雄一個） 越中なめり河トアリ年月日共不明全長九十一せめ體ノ長サ三十七せめ幅十四せめニシテ一側ノ肉鰭ノ其中央ノ横徑十せめ也亦タ甚ダ廣シト云フ可シ念ノ爲メ尙頭部後端ヨリ第三脚末端マデノ長ヲ算シ見ルニ實ニ二十八せめ餘モアリタリ

標本第二（雄一個） 東京灣羽田ヨリ獲ルモ年月日共不明全長七十五せめ也

標本第三（雌一個） 東京市場ヨリ買上グ年月日不明全長二十八せめ餘

標本第四（雄四個雌一個合セテ五個） 十八年九月東京市

上部ハ殆ド無光澤ト云フベシ、臍紋ナシ、赤褐色ノ狹キ條帶ニアリテ上帶ハ縫合線ヲ離レテ走リ此點前種ニ似タリ、大徑二十六、小徑二十二、高サ十三ミメ

產地ハ北海道「シラオイ」ナリ、理科大學ニ二標品アリ

二十八) **Helix plana**, (Prov. n. 假名)

次版二十九圖

前種ニ近シ然レモ螺旋部少シモ凸マラズシテ平カナルガ故ニ直チニ識別シ得ベシ、臍孔至テ廣ク深シ、殼ノ色ハ極メテ淡ナル角黃、少シク光澤アリ、臍紋ナキヿ及ビ赤褐色ノ二條帶ノ有樣ハ前種若クハ前々種ト異ナル所ナシ、大徑二十四、小徑二十、高サ僅ニ十ミメ

產地ハ同ク北海道「シラオイ」、理科大學其二標品ヲ藏ス

二十九) **Helix eoa**, Crosse.

次版三十圖

形狀、大サトモニH. peliomphala (十七)ニ甚ダ近シ、殼薄クシテ黃色、上部ト下部ノ界ニ稜アリ是レ此種ノ特徵トス、該稜ニ沿フテ狹キ條帶アリ、臍紋アリテ孔廣シ、大徑三十七、小徑三十一半、高サ十六ミメ

產地ハ只日本トアリテ地方ヲ示サズ、余未ダ此種ヲ見タルヿナシ、恐ラクハH. peliomphala ニシテ有稜ノ變化物アルヿアルベシ

(以下次號)

## ●理科大學標本日本頭脚類目錄（第四回）

池田作次郎

3. **Loligo bleekeri.** *Keferstein.* (やりいか)

所載書目 (Literature)

Bronn, Rl. U. Ordn. der Thierreich III, 2.
Brock Z. F. W. Zool. Bd. 36, 1882, S. 604.
Appl, P. 31, pl. 1, Figs. 7—10.
Tryon, P. 148, pl. 57, Figs. 185, 186.

此種其特性ニ於テハ前種ト甚ダ異ナル無シ唯ダ体形前種ヨリ細ク長ク且ツ其後端甚ダ鋭ク尖リ居テ觸脚ハ短カシ而シテ其脚頭ハ前種ノ如ク著ジルシク大ナラズ之レニ附着シ居ル吸盤モ細カク他脚ノ吸盤三四分一ニ過ギズシテ皆ナ同形同大也雄ハ常ニ左第四脚ニ交接器ヲ具フ其長サ

郡洲本產トス多分岡田信利氏ノ採集ニ係ル者ナランニ個共体、頭、脚三部ノ總長六せめ也

標本第四(二個) 相州三浦郡三崎ノ產年月日不明大ナル者雄ニシテ体、頭、脚ノ總長四、五せめ一個ハ幼キ者ニシテ僅カ二せめニ過ギズ

標本第五(二個) 共ニ雌ニシテ前同上三部ノ總長四せめ位ナリ然レモ年月日產地共不明

他書所載產地

ほんこん、鹿島、長崎、神戸市塲、東京市塲トス

## ●海產動物保存法 (第四回)

丘淺治郎

甲殼類(Crustacea)

海產のクラドツェリ(Podon, Evadne)ハ猛汞飽和液或は一%のオズミュム酸二三滴を以て、殺すべし、

Ostracodi は直に七十%のアルコール中に投ずべし、

總て此類は保存法割合に易き故以下畧之、

パントポダ(Pantopoda)

生たるものを取り二三日飼ひ置き身体奇麗になりたる時殺す事宜し、薬は半%のクロームト酸を用ゆべし、

軟体動物(Mollusca)

殼を開きたるまゝ双殼類(Lamellibranchi)を保存するにはアルコール入りの海水にて魔酔せしむ。但し体の大小によりて六—十二時間又は猶多くの時を要す、

Limaの外套(Mantello)の緣にある多數の觸角は前法を用ゆれバ落去る故四分一%のクロームト酸にて殺すべし、

Scaphopoda, Dentaliumは十二—二十四時間二%の抱水クロラールの中に置きて之を魔酔せしめ、後七十%のアルコールに移すべし、

Gasteropoda Prosobranchia・Placophora 及び Patellidæ, Fissurellidæ, Haliotidæ の諸屬はアルコール入り海水を以て魔酔せしめ保存す、

Natica Josephinia は時々少許の七十%アルコールを加へ二日或は三日を歷れは如何程突きても感せぬ樣になる故

場ヨリ買上グ大ナル者二十九せめ小ナル者二十六せめ也

標本第五（雌一個）　全長四十二せめ産地年月日共不明

標本第六（雄一個）　廿年四月伊豆七島中大島はぶ港ニ於テ岡田氏ノ採集ニ係ル全長二十三せめ也

標本第七（一個）　東京市場体長八せめ也

他書所載産地

によぐいにあ、じやば、けーぷふあぶれ、とりんこまれ、によせぃらんど、かんたぶ（ひーじあいらんど）、てるなーて、日本長崎、及ビ鹿兒島トス

Family. Sepiolidæ.

Genus. Inioteuthis.

**Inioteuthis morsei,** *Verrill.*

異名 (Synonym)

Sepiola bursa, *Pfeffer.*

所載書目 (Literature)

Appl, Ceph. Jap. P. 15, pl. II, Figs. 15, 16.

Hoyle, Chall. Ceph. P. 112, pl. XIV, Figs. 1.—9.

Pfeffer, Ceph. D. Hamb. Mus. P. 6, Fig. 6.

此種ノ特性頭部ハ割合ニ大キク体形稍ヤ圓ルク肉鰭ハ其前縁基部即チ体ト相附スル所ニ於テ少シク凹入ス脚長順式ハ第三ト第二トハ相比シク第一ハ第四脚ニ比シ吸盤ハ何レモ四列也觸脚ハ長サ体長ニ比シ然レ𪜈少シク長キ者モアリ而シテ其脚頭ハ太クシテ極小ノ吸盤無類ヲ具フ此吸盤形甚ダ微細ナレバ外見宛モけえつぶノ之レニ附着シ居ル如ク見ユル也交接器ハ左第一脚ニ在リテ二列ノ細小圓柱形ニシテ且管狀ノ吸盤ヲ有ス貝殼即チぐらぢあすハ全ク欠除ス

標本第一（六個内雌四個雄二個）　十八年十月一日東京市場ヨリ買上グ大ナル者体、頭、脚三部ノ總長九せめ小ナル者同上三部ノ總長五、五せめ也

標本第二（一個雌ノ如シ）　十七年四月駿州江ノ浦ニ於テ箕作石川諸先生ノ獲ラレタル者ニシテ体、頭、脚三部ノ總長二、五せめ也

標本第三（雌雄各一個）　年月日共不明ナレトモ淡路津名

Umbrella はアルコール入リ海水にて漸々に殺すべし、

Elysiidæ 及ビ Aeolidiidæ ハ少許の海水中ニ入れ置き急に全量或は二倍の飽和醋酸を投じ直に弱きアルコールニ移すべし

Phyllirrhœ bucephalum は一二分間クロモ、オズミュム混合液ニ入れ、或ハ第一號クローム酸混合液を用ひて殺す、

Doris, Chromodoris, 等の大なるものは七十%のアルコールを少しづゝ加へて魔酔せしめ背部の鰓ニ觸るゝも之を縮めぬを見たる後飽和醋酸或は沸騰せる猛汞飽和液を以て殺すべし、小なるものは魔酔に及ばず、

Triopa, Idalia 及ビ Polycera は飽和醋酸を用ゆ、

Tritonia の大なるものハ淡水中に投し、醋酸一二滴を加へて殺し半%のクロミユム酸にて固む、此法を用ゆれハ少しも變化して延びたるまゝ保存さる、Marionia はアルコール入り海水にて魔酔せしめ醋酸を以て殺すべし、

Tethys の背部の附屬物を其儘保存さるにハ大なる平たき器の中に成るべく少許の海水中ニ置き、少なくも海水と全量の飽和醋酸を投じて殺す、次にサイホンを用ひて液を流し出し之に代ふるに一%のクロミユム酸を以てし動物を能く延し、半時を過ぎて後又々サイホンを用ひて弱きアルコールと入れ換ゆべし、

Pteropoda. Hyaleidæ は少許の海水中に置き翼を展げたる時猛汞飽和液を投じ二分の後洗ふべし、Creseis acicula はアルコール入リ海水を用ひ殺して宜し、

Cymbuliidæ ハペレニイの液に十五分許り浸けて固め、五十%のアルコールに移すべし、

Gymnosomata は六－十二時間一‰の抱水クロラール中に入れ醋酸或は猛汞を以て急ニ殺すべし、Cliopsis は四分一%のクロミユム酸にて殺すもよし、

たこ、いかの類は畧之、

Bryozoa, Brachipoda, Tunicata, 及び魚類等の保存法は今まで左程ニ困難もせざりし故此所には暫時畧する事となせり、知らんと欲する方は宜しく原書に附きて見るべし、

（をはり）

其時急に醋酸飽和液を注きて殺し、次に弱きアルコールに移すべし、

Natica millepunctata 及び Hebrea も前法の外、兩三日間海水淡水全量の混合液の中に置き、後醋酸を以て之を固むるも好し、

Nassa, Columbella, Conus 及び Trochus の諸種は前法を用ひて宜し、

Heteropoda. Atlantidæ はアルコール入り海水の中に六時乃至十二時間置きて之をアルコールに入る、

Pterotracheidæ は第一號クロー厶醋酸中に体の大小により十一十三分間入れ置き、次に淡水にて洗ひ順次にアルコールに入れ換ゆ、此動物はクロモ、オズミュム混合液を用ゆるも宜し、Carinaria の小なるものは硫酸銅及び猛汞の混合液を用て最も好し、大なるものは鼻の先を糸にて結び引懸け置くべし、

Opistobranchia. Bullidæ は海水淡水全量の混合液中に入れ漸々に魔醉せしめ飽和醋酸にて殺し直にアルコールに移すべし、

Gasteropteron Meckelii はクライチンベルグの液にて固むべし、此藥を用れば天然の赤色を能く保存す、

Doridium 及び Scaphander もアルコール入り海水にて魔醉せしめ醋酸にて殺しアルコールに入れ置くべし、

Philine も少許の海水中に入れ善く延びたる時を見計らひ急に飽和醋酸或は飽和ピロリグノス酸を注くべし、

Pleurophyllidia もアルコール入り海水にて魔醉せしめ醋酸にて殺す、

Aplysialimacina 及び Punctata は大小により十五分より六十分間一%のクロミユム酸中に入るべし、A. depilans は一‰の抱水クロラール中に十二時間置きて後前法に依るべし、

Pleurobranchea Meckelii 及ビ Testudinarius は五%のクロミユム酸にて殺し、死したらは直に一%のものに移し大小に隨ひ十五乃至六十分間据置くべし、小なる者は抱水クロールを用ひ一%のクロラミユム酸にて固むるも宜し、

れ、而して此實驗は左程困難にも非さるべし、即ち鳥卵の位置を變し畫具を塗り以て其結果を觀る可きなり。此のGotch氏の說は天然の產卵塲に於てウミガラスの卵數多を實見して案出せしものなり。此說はWallace氏の說卽ち「ウミガラス卵の驚く可き彩色斑點の差は其產卵塲の危險にして到る可からさる巖石上にあるを以て害敵より充分保護せられ居るに歸依せるならん」との說より一層信に近さか如し。

普通の黑色オホバン(Fulica atra)の卵も亦特異なる保護色を有す。Dr. William Marshall氏の記述によれは、此種は一種の大なるヨシ(Phragmites arundinacea)の群生する塲所に限りて產卵す、而して其卵は帶黃灰色の上に黑色の斑紋を有し、ヨシの枯葉も亦同色にしてUredo屬の寄生菌附着し以て黑斑を現す、此等の枯葉は則ち產卵塲の床を構成するなり、故に遠くより枯葉と卵とを識別すると頗る困難なるなり、玆に猶は附記すへきとハオホバンの決して其近屬の者に於けるか如く卵を覆散せさると是なり。

ツグミの類(Turdus musicus)、Accentor modularis(Hedge-sparrow)及び時としてハヒヨドリの類(Black-bird)等の美麗なる藍色或ハ綠色の卵ハ特に注意を引くか如く思量さるべし、然れと平常其存在する自然の塲所にありてハ若し少しく距りて之を見れハ左程顯著なる者なるや否疑なき能ハさるなり、何となれハ此類の鳥ハ常綠樹の間或は早春綠色の軟葉を以て圍繞されたる中ょ其棨を營む者なれば其彩色相類似し居るを以てなり。我國に產する小鳥の卵は過半種々なる色の內に褐色或は黑色の斑點紋理あり、而して其巢中にありては種々異樣なる色を有する樹皮、蘚苔或は綠、黃色の嫩葉紫色の嫩芽等を以て圍繞され春陽の煌々たる光線に照され雜駁なる陰影を受くるの時に當りては自然の地位より取り去られたる卵殼をのみ見る者と全く別種の光景を呈するや疑なきなり。天然の巢中に存する卵殼は美麗なる白色或は紫色の紋理斑點を有し單獨に之を見れハ實に驚く可き程顯著なる六足蟲類

# ●動物彩色の起源及び効用（承前）

宍戸一郎

## 鳥卵の色（八三頁の續き）

是より有色の卵に就て論すべきなるか之は一層困難なるとなり、或る數種にありては其保護色なると顯然として疑ふ可からさる者あり、コアジサシ及びシユズカケチドリ（義譯）(Ringed plover)の二種は砂地の海岸に巣ひ、共に砂色をなしたる卵を產す、されど前者は粗大の塊石に類する様、後者は微細の砂石に似る様各鳥の巣を營むに當て常に撰擇する地面の形狀によるなり。チドリの類 (Common Sandpiper) の卵の彩色も亦其存在地の周圍と全く同化しをるを以て之を發見するの非常に困難なるは集卵に心懸けたる人の皆な知る所なり。ケリの卵は本來黑色にして粗大なる紋影を有し能く土色と同化す、之れ實に荒田曠野の中にありて發見せられさる唯一の源因なり。モグリの卵も亦保護色の一例なるべし、此鳥ハ波打ちぎわの巖石上に產卵するを以て其黑色黑斑を有するは則ち其周圍の色を摸するなり。シギ、チドリの類に於ても亦數多の保護色卵の例証を見るなり。何れの場合に於ても卵を菴ひをる鳥は巣を離るゝ時に當り卵を覆蔽するとなし故に其安全は卵殼の彩色に一任するの外なきなり。ウミガラス卵の驚くべき彩色斑點の差は其產卵場危險にして容易に到る可からさる巖石上にあるを以て害敵より充分に保護せられ居るに歸依する者ならん、故に此種に近きウミスヾメの類 (Auk) エトピリカ (Puffin) 等の卵は其本色著白或は藍色にして最も驚く可き種々の形狀をなせる濃厚の斑紋を有す、是れ各箇の變化を防遏すべき淘汰力の行はれざるによるなり、

Poulton—The Colours of Animals. P. 212. に曰く。

互に相接近して非常に數多の卵を產をる鳥類にありて其卵の彩色斑紋に種々の變化あるは同群の鳥中自己の卵と他鳥の卵とを識別するか爲めなりとの說は恐くは信を置くに足るべし。此の解說は吾か友 Francis Gotch 氏の考案にして、猶は實驗上立証せんとこそ望ましけ

### 第一目　渦蟲（うづむし） Turbellaria

渦蟲ハ淡水鹹水中及ヒ陸上濕地ニ住スル扁平ナル蠕蟲ニシテ其形概ネ楕圓或ハ延長シタルヲ常トス」其色ハ透明ナルアリ暗黑色ナルアリ（淡水産ニ多シ）美麗ナル彩色アルモノアリ（鹹水産ニ多シ）」其大サハ一二分ノ小ヨリ數寸ノ大ニ至ル概シテ曰ハバ淡水産ハ小ナルモノ多ク鹹水産ニハ大ナルモノアリ」其体ハ一面ニ氈毛ヲ生シ以テ這行ス」其皮膚ニハ眞正ノ毒糸胞アルモノアリ是ちれんてら蟲ノ他ニ毒糸胞ヲ有スル唯一ノ塲合ナリ又其皮膚中ニらぶだいと（Rhabdite）ト稱スル一種固有ノ小サキ棒狀ノ物アリ或人ハ之ヲ毒糸胞ニ類シタルモノナリトス

腹面（即チ匍匐スル面）ニ口孔アリ其位置ハ全面ノ中央線ニアリテ其中點ニ近キヿアリ（第一圖）或ハ中點ヨリ前ナルヿアリ後ナルヿアリ口孔ヨリ直ニ內ニ筋肉ノ善ク發達シタル吻（Proboscis第二及七圖）アリ之ヲ口孔ヨリ突出シテ食物ヲ取ルノ使ニ供ス消化腔ハ單一ナル腔ヨリ成ルモノアリ（第一圖）複雜ニシテ數個ノ枝ニ枝分スルモノアリ第二類ノ中ニテモ其重ナル枝ガ三個ナルモノアリ（三枝類第七圖）數個ナルモノアリ（多枝類第八、九、十、十一圖）重ナル枝ハ又數多ノ第二次ノ枝ヲ突出シ此枝又枝分スルヲ以テ遂ニ樹形ノ腔ヲ生ス（第七、九圖）蓋シ此ノ如ク數多ノ枝アリテ消化腔ヲ複雜トナスハ消化腔ノ面ヲ增シ其作用ヲ充分ナラシムル爲ナルベシ」渦蟲類ニハ肛門アルヿナシ

消化腔ト体壁トノ間ニハ腔ナクシテ筋肉纖緯、神經、生殖器及ヒ其他ノ組織ヲ以テ充滿ス故ニ体腔ト稱スベキモノナシ

筋肉纖緯ハ多ク皮下ニ發達シ体ヲ横ニ圍繞スル横筋纖緯アリ体ヲ縱ニ走ル縱筋纖緯アリ又体中ヲ背面ヨリ腹面マテ直線ニ或ハ斜ニ走ル纖緯アリ此等ノ收縮ニヨリ柔軟ナル体ハ自在ニ伸縮スルヲ得

神經系統ノ中叢トモ稱スベキ部ハ体ノ前端ニ近ク位スル一對ノ神經節ナリ（第一圖）之ヨリシテ体ノ前後ニ向ヒ多ノ神經ヲ射出シ就中後方ニ向フ一對ノ大ナル神經アリ

の幼蟲も其食餌とせる樹葉間にありて複雜なる光線物影を受くる時に當てハ發見し能ハさると多きと同一の現象を現すなるべし。

カッコーに有りては種々異種の巣中に産卵するを以て其卵色も自ら多般の變色を受く、而して其最も普通の彩色はセキレイ、ノジコ等の卵の如き其常に多く産卵する巣中に存する者に類似す。數多の鳥學者の説に、カッコーの各雌ハ各同色の卵を産む者にして可成的類似したる色の卵を産する鳥類の巣を撰みて其中に産卵す、然れとも皆な盡く然りとも言ふ可からすと。又カッコーの爲に卵を孵されたる鳥類は其彩色の異なるか爲め之に意を用ひさる樣のとあるを見すと雖とも恐くハかゝるとあるべし、若し各種の卵ハ其彩色の周圍と同化するを以て全巣の安全を得る者なりとすれは、巨大なる異色の卵巣中に存在せハ爲に危險を生し以て全巣を毀損するに至るへけれはなり、茲を以て他の鳥卵と其色の最も類似したる卵を産するカッコーは長日月間に最多の子孫を生し以て卵色の合和をも遺傳すべきなり。

或人ハ鳥卵の色は主として菢卵前雌鳥の周圍の有色物に感應して生する者なりとの説を提出し非常の技倆を以て一種ハ藍色他種ハ褐色他ハ桃色の卵を生する物体を説明せり、然れとも此原因より如何なる結果の生せへきやを証明す可き確實なる事實を掲載するとなく、又自然淘汰説によりて同事實を説明し能はさる困難にも會せさるなり、鳥類の生存中には種々の變化も起る可けれは嚮往充分完全なりし隱匿法も不充分となるとあるへく、爲めに若し危險を來すとあらハ卵色に變化を生じ或は巣の造搆位置を變し或は親鳥の非常なる注意を巣に加ふる等の事と喧起し以て之に備ふ可きなり、此れ今日屢々吾人を迷亂せしむるヶ如き種々なる異色を生せる所以なるべし。

## ●普通動物學講義第貳拾（附圖第一版）

### 第八章

箕作佳吉述

（第五門蠕蟲　第一綱扁蟲類ノ續キ）

殆ント無シ蓋シだーうゐん氏等ノ試驗ヲ見レバ其不利ナルヿ明瞭ナルベシ

渦蟲ノ中ニハ雌雄生殖ノ外ニ尚ホ分裂ノ方法ニ依リテ繁殖スルモノアリ第六圖ニ其模樣ヲ示ス

渦蟲ヲ分類スルヿ左ノ如シ

第一亞目 **Rhabdocoelidea** 單腸類

概ネ小ニシテ腸ハ簡單ナル腔ヨリ成ルモノ淡水鹹水ニ產ス

例

*Monotus*, *Plagiostomum*, *Allostomum*

*Vortex*, *Mesostomum* (第一圖) *Microstomum* (第六圖)

*Macrostomum*, *Prorhynchus*

此亞目ニ屬スル類ニシテACOELAト稱スルモノアリ是ハ極メテ小ナルモノニシテ判然タル腸壁ナク体內ノ細胞一般ニ消化スルノ力アリ排泄器等ヲ欠ク

第二亞目 **Tricladidea** 三枝類

腸ハ三ノ重ナル枝ヨリ成ル(第七圖)其枝ノ位置ハ常ニ圖ニ示スガ如シ口孔ハ腹面ノ中央ヨリ後ニアリ唯一屬(*Gunda*)ノ外ハ皆ナ淡水或ハ陸上ニ產ス

*Planaria* (第八圖)山中ノ淡流等ニ多ク產ス *Dendrocœlum*, *Polycelis*, *Gunda*(此一屬海產)

*Bipalium* B. Fuscatum, *Stimp.* かうがいびる本邦各所ニ產ス

第三亞目 **Polycladidea** 多枝類

体ノ中央線ニ一ノ重ナル腸腔アリ之ヨリ多數ノ枝射出ス(第九圖)皆海中ノ產トス

*Planocera* (第九圖), *Leptoplana* (第十圖) *Thysanosoon* (第十一圖), *Eurylepta.*

第二及第三亞目ヲ併稱シテ Dendrocœla 樹狀腸類ト稱スル事アリ

(飯島魁氏ハ歐洲滯在中特ニ歐洲產三枝類ヲ研究サレ其結果ハ一ノ論文トシテZeitschrift f. Wissenschaftliche Zoologie. Bd. 40 ニ揭載セラレタルヲ以テ普ク人ノ知ル所トナリ此類ニ付テノ最モ肝要ナル著述ノ一トス是

(第一圖)之ヨリシテハ數本ノ小神經枝分ス」神經節ノ背面ニ極メテ簡單ナル眼一對アリ

体中ニ別ニ呼吸器及ヒ循環系ナシ体ノ全面ヨリ幾分カ酸素ヲ取ルモノカ又次ニ述ル排泄器ニ外ヨリ水ノ入リテ幾分カ呼吸ノ作用ヲナスモノカ又滋養液ハ種々ノ組織ノ隙間ヲ定リナク循回スルモノカ

排泄系ハ善ク發達シ下等蠕蟲ノ特徴トスベキ搆造ヲ有セリ通常体ノ兩側ニ一對ノ縦管アリ此管ハ其內面ニ顫毛アリ透明ナル液ヲ含ミ一對或ハ數個ノ(第四圖甲乙)孔アリテ外界ト通ス縦管ヨリ小ナル枝管アリ毛細管ニ至リテ終ル毛細管ノ末端ハ稍膨張ス(第三圖)毛細管ハ數個ノ細胞連續シテ糸ノ如クナリ其中ヲ穿チテ生シタルモノナレハ第三圖ニ示ス其末端ハ唯一個ノ細胞ヨリ成ルモノナラン核ノ位置ヲ見ルベシ此細胞ハ即チ排泄ヲ司ル細胞ニシテ其周圍ニアル液ヨリ排泄物ヲ分泌シテ之ヲ毛細管ニ送出スルナルベシ此細胞ハ管中ニ大ナル顫毛(第三圖)ヲ有シ不絶震動セシムル故顯微鏡ヲ以テ見ル時ハ大ニ認ムルニ易スシ

生殖器ハ甚タ複雜ニシテ其形狀モ種々アレバ茲ニハ唯其一例ヲ揭ケ渦蟲ハふたなりナリ即チ雌雄ノ生殖器ヲ全個ノ蟲中ニ備ヘタルモノナリ(Hermaphrodite) 第五圖ハMesostomum Ehrenbergii(第一圖ニ示ス蟲)ノ生殖器ヲ示ス

生殖器孔(g)ハ口孔(h)ノ直ニ後ニアリ此種ニ於テハ雌雄生殖器共ニ同孔ニ開クモノトス先ツ雄器ノ分ヲ揭クレバ体ノ兩側ニ一對ノ睪丸(e)アリ之ヨリ出ル輸精管(f)アリ兩側ノ管相合シテ一ノ交尾器ニ入ル此交尾器ハ生殖孔ヨリ外ニ突出スルヲ得」雌器ハ先ツ卵巢(a)アリ之ヨリ起ル卵ニ滋養質ヲ與フル爲メ一對ノ大ナル腺(c)アリ卵黃巢ト云フ卵及ヒ卵黃合〆一ノ完全ナル卵ヲ組成シ子宮(b)ニ入リ此處ニテ發生ノ途ニ上ル尤モ其前ニ受精スルナルベシ精蟲ハ己ノ精蟲ニアラズシテ他ノ蟲ト交尾シタル際其精蟲ヲ受ケ之ヲ受精囊(d)ニ納メ置キ之ニ依リテ受精スルナリ抑モ生物界中全体ニ雌雄生殖器ヲ備フルモノニシテ己ノ雄素ニ依リテ己ノ雌素ヲ受精セシムルモノ

シ回游魚鳥ノ族ハ漁獵ニ期節アルヲ以テ殊ニ然リトス故ニ其種族ノ夥多ナル刻合ニハ四時魚市ニ來ル所ノ魚鳥ハ其種類多カラズ仮令其種類ハ多カラザルモかつをノ如キ回泳魚族ハ群ヲナシテ來襲スルヲ以テ捕獲販賣ノ高ハ却テ夥多ナリ今東京市民カ常ニ食膳ニ供スル魚鳥蝦貝等ニ就テ多額ニ消費スルモノハ如何ナル種類ニ屬スルカヲ調査スルハ敢テ徒事ニアラザルベシ左表ハ余カ五六年前ニ取調ベタルモノニシテ固ヨリ精細ニ調査セシニアラス且當時ト今日トハ産額ニ相違スル所尠カラザルベシ又販賣高ノ夥多ナル種類ニシテ尙此表中ニ漏ルモノ蓋シ鮮少ナラザルベシ讀者諸君乞フ之ヲ諒セラレンコヲ

東京市民ノ動物質食物中日本橋魚市ニ於テ販賣高ノ多額ナルモノヲ四季ニ分類ス

## BIRDS.

*Winter and Spring* 冬季及春季

NATATORES

1. Anser segetum, Gm. ヒシクヒ
2. ,, cygnoides, Linn. サカヅラヒシクヒ
3. Anser albifrons, Gm. カリカネ
4. Anas boschas, Linn. マガモ
5. Chaulelasmus streperus, Linn. ヲカヨシ
6. Querquedula circia, Linn. ヨシカモ
7. Dafila acuta, Linn. ヲナカヽモ
8. Querquedula crecca, Linn. コガモ

GRALLATORES

9. Scolopax rusticola Linn. ボトシギ
10. Gallinago scolopacina, Bonap. デシギ
11. Rhynchæa bengalensis, Linn. タマシギ
12. Rallus indicus, Blyth. クヒナ

GALLINACEI

13. Phasianus versicolor, Vieillos. キジ
14. ,, sœmmeringii, Temm. ヤマドリ
15. Gallus domesticus, Briss. ヂトリ
16. ,, ,, ,, シヤム

COLUMBINÆ

17. Turtur gelastis, Temm. キジバト
18. ,, risorius, Linn. シラコバト

PASSERES

19. Turdus fuscatus, Pall. チヤウマツグミ
20. ,, chrysolaus, Temm. アカパラ

本邦人ノ名譽ナレバ併セテ茲ニ記ス余上ノ講義ヲ記スルニ當リテモ大ニ氏ノ助ヲ得テ益スル所アリタレバ茲ニ之ヲ謝ス飯島氏數年前ヨリ本邦産ノ渦蟲類ヲ蒐集シ居ラルレバ遠カラズシテ我邦ニ産スル此類ノ動物ヲ詳知スルニ至ルベシ）

第壹版圖解 Lang, Leunis 等ヨリ引用ス

1. Mesostomum Ehrenbergii, Osch.
　a 神經節、b 兩側ノ神經、c Proboscis 吻、d 消化腔
2. 渦蟲ヲ縱斷シタル圖式
3. 排泄器毛細管ノ末端
　n 核、v 液胞、f 細胞突起、wf 顫毛、
4. 排泄器系統 甲 Mesostomum ノ、乙 Dendrocœlum ノ
　o 外界ニ通スル孔
5. Mesostomum Ehrenbergii ノ生殖器系統
　a 卵巣、b 子宮、c 卵黃巣、d 受精嚢、e 睪丸、f 輸精管、g 生殖孔、h 口孔及ヒ吻
6. Microstomum Lineare, *Oerst.* ノ分裂生殖ヲ為ス様
　a 口孔、b 新ニ開ク口孔、c 消化腔、I-IV 分裂シツヽアル四個ノ動物
7. 三枝類ノ消化器幷ニ神經系
8. Planaria.
9. Planocera ノ消化器幷ニ神經系
　t 觸手、g 神經節、ph 吻、o 口孔、hd 消化腔ノ後部
10. Leptoplana tremellaris *Oerst* 4/1
11. Thysanozoon Brocchii, *Grube.* 1/1

## ●東京市民ノ食膳ニ供スル動物ニ就テ

波江元吉

我國ハ四圍環海加之地勢南北ニ延長セルヲ以テ動物ノ種族ニ富饒ナルハ既ニ邦人ノ普ク知ル所ナリ然レトモ動物ハ緯度ノ高低潮流ノ寒温ニ因リ其棲息スル所ノ種族ニ差違アリ四時ノ順環ニ隨ヒ移動スルモノ亦尠シトセス吾人カ日常食膳ニ供スル所ノ魚鳥ノ如キモ四時其種族ヲ異ニ

舟わたす磯山本の曙にをのれも鹿のかひよとぞ鳴

また砂石集に

　誰かきく妻よぶ鹿の聲にても皆與實相不相違背

とあり此句より考ひ合せばかひよハカイヨと同音なると明けしされども鹿の鳴聲をカイヨと呼ぶハきこえがたし若しカイヨのカを省くときハイヨの音ハ漢音の呦に似たりとするも實地鹿の鳴聲をきくときハヒヨ或ハヒユときこゆるやうなり彼の獵夫が用ふる鹿笛といふものあり此器巧みに同音を發するを見ればカヒヨハ字音の儘にて呼ふべき處を音便相通なればカイヨといひ習せしなるべし獨國の詩家 Uhland が白鹿の詩中にも鹿の鳴聲に Piff paff の句を用ひたり此ノ Piff paff といへるも固有の鳴聲をいへるなるべし

散木集に遊びあるきけるに鹿のひしる聲のきこえければ

　かせうけてひしるを鹿の聲きけば

　　ねらふ我身そ遠かりぬ

嬉遊笑覽にハヒシルは車などのきしるをるシルにて鹿の聲を云といへり此説いかゞにやあらん二條中納言宣高卿の歌にもひしりこきとは何をなくらむの句あり此ノ事につきてハ既に桑扈の條に記しをけり此ノヒシリハ下のコキとつゞきて固有の鳴聲をいへるものにて嬉遊笑覽にいへる如く車のきしる聲をいへるにハあらさるべしさらば散木集に鹿のひしるといへるハ其聲のヒヨ或ハヒユといへる固有の鳴聲より起りしものにハあらさる歟

### 豚

英國にてハ小兒豚の鳴聲を呼て Wee, Wee といへりこれより考ひ合せば猪を井と訓み豕、豚をみな井ノコといへるも其固有の鳴聲より導きたるものならん歟もと井の字ハウとイとの中間の音をあらわすものにして即ちウイの短音なり予ハ未た野猪の聲をきゝたるとなしといへども野猪と豚とハもと同一種なりといへば其聲も自ら似よりたる處あらん歟さらば猪をいへるは其鳴聲より導きたるなるべし

## ●甕牖雜記　○牡蠣ノ中毒

21. Hypsipetes amaurotis, Temm, ヒヨドリ

*Summer.* 夏季

NATATORES

22. Anas boschas domestica. アヒル

GRALLATORES

23. Ardea cinerea, Linn. アヲサギ
24. Nycticorax griseus. ゴ井サギ又セクロゴ井
25. Herodias garzetta, Linn. シラサギ
26. Gallinula chloropus, Linn. バン
27. Fulica atra, Linn. オホバン

GALLINACCI

28. Coturnix japonica, Schleg. ウヅラ

COLUMBINÆ

29. Columba livia domestica. ドバト

*Autumn.* 秋季

GRALLATORES

(12) Rallus indicus, Blyth. クヒナ

(9) Scolopax rusticola, Linn. ボトシギ

COLUMBINÆ

(29) Columba livia domestica ドバト

*All seasons* 四季

(28) Coturnix japonica, Schleg. ウヅラ

30. Passer montanus, Linn. スヾメ

（以下次號）

# 寄書

說ノ可否ハ本誌編輯者其責ニ任セズ

## ●動物聲音考第十四　野村彥太朗

### 獸類　鹿

毛詩に呦々鹿鳴食野之苹とあり其後段に呦々鹿鳴食野之蒿とも或は呦々鹿鳴食野之芩などゝもあり說文に據れば呦々鹿鳴也とあり廣韻、集韻に據ればみな呦は於虯切とあり韻會に據れば幺虯切とあり幷ニ音幽なり英譯詩經には支那音を載せて Yĕw ともあり、されば呦々は支那人がことさらに鹿の鳴聲に名つけしものなるべし紀のとしひとの歌に

秋の野に妻なき鹿の年をへて
なぞ我戀のかひよとぞ鳴

この句を本居宣長が古今集遠鏡に妻を失ひたる鹿が年經て何程戀ひしたふとて甲斐のあるべき筈なきに何とて甲斐よ／＼とぞ鳴との意に寄せたる也といへりこれを考ひ合せばいひよのヒハイと同音に訓ミカイヨトよむべき歟また爲尹の歌に

記云跳魚長二三寸形如土鮒而細長頂高而方兩眼生頂上身有細綵點能跳躍又名花魚炙食佳亦可作羹トアリペキュエールヽルチスクヲ氏嘗テロアンゴ沿岸クサル河口ニテ親シクコノ魚ノ性狀ヲ視タリシ記ニ曰ク泥猴ハ唯タ河口或ハ其支流ノ淡鹹相交ハル水中ニノミ産シ決シテ純然タル鹹水ニアルコトナシ晴朗ノ日退潮ノ後千百群ヲナシテ塗泥ノ上ニ遊ビ殊ニ好テ瀕崖ニ鬱茂セル紅樹(Rhizophora)ノ蔭ニ聚リ往々蒹葭水草ノ生セル乾土ニ升ルコトアリ靜ナルトキハ其尾ト鰭トニテ泥土ヲ支ヘ體ヲ屈伸シテ以テ跳躑進行ス故ニ泥土ニ其蹟ヲ印セリマタ忽然躍リテ紅樹ノ根ニ攀緣スルノ性アリテ斯クノ如ク水外ニ在ルコト凡一時間ノ久シキニ耐ユト云フ泥猴ハ其性怯懦ニシテ人聲ヲ聽カバ乍チ頭ヲ上ゲ四顧警戒スルノ狀ヲナス故ニ之ニ近クコト數歩ニシテ靜止沈默シ其放心スルヲ窮テ突然一聲大喝セバ愴惶狼狽シ躍テ水中ニ入リ潜匿ス其跳躍スルヤ體ニ二倍若クハ三倍スルノ距離ニ及ベリ童幼戲レニ射テ之ヲ捕フト云フ

一種むつごろうアリ畔田翠山水族志曰クムツ五郎大サ四五寸形狀「メクラハゼ」ニ似テ背淡黑色腹色淺ク背ニ白星點アリ腮ト脇翅ノ間ニアル星點微大ニメ中淡黑色脇翅淡黑色ニメ淡藍色ヲ帶腹下ノ鰭同色ニメ圓ク「ハゼ」ノ如シ背鬣長ク寸餘淡黑色ニメ淡藍色ヲ帶黑星點アリ腰下鰭及ヒ尾同色ニメ尾ノ末尖リ腰下鬣淡藍色眼高ク出口ニ近シ」ト即チ是ナリ然レ𪜈泥猴ト其性狀相似タリト雖𪜈異屬ニシテ Boleophthalmus boddærtii トイヒ九州西岸ニ多ク殊ニ有明海ノ名産トス(栗本丹洲ガ皇和魚譜ニ此二種ヲ一物トセルハ非ナリ)

## ○かゝらせゑび

海鰩魚ハ交接器ヲ具ヒ以テ牝遊成孕スルモノナリ備前兒島郡沿海ノ漁人夙ニ之ヲ知リ凡此魚ヲ捕獲スルニかゝらせゑびノ漁法アリ其法恰モ囮ノゴトシ七八月延嗣ノ期ニ方リ先ヅ其雌魚ヲ生獲シテ尾邊ニ索ヲ穿チ之ヲ海底ニ放チテ以テ雄魚ヲ誘フ而シテ其相交ハルヲ候ヒテ徐々索ヲ收メ既ニ海面ニ至レバ器ニテ之ヲ捕フルモノトス日ニ獲ル所ロ百ヲ以テ數フ可ク遙カニ釣漁ノ法ニ優レリト云フ

魚介中毒ノコトハ屢々聞見スル所ナリ然レ𪜈其原因ハ種々ニシテ未ダ明晣ナラザル者多シ明治廿二年十月廿六日三河渥美郡中山村字中山川口某ノ長女(六歳)晩餐ニ新鮮ノ牡蠣三枚ヲ生食セシニ同夜十時頃ニ至リ心下苦悶大ニ發熱シ翌朝顔面胸背及ビ腹部ニ皮疹ヲ發シ脈搏頻數體溫三十八度半ヲ示シ結膜充血肌熱亢進苦悶增惡煩渴ヲ訴ヘ嗜眠昏睡シ吐嘔下利ナシ而ルニ服薬ノ後翌日ニ至リ惡心吐逆シ發疹大ニ減少シテ諸症モ次第ニ輕快セリト今歳尾參漫遊ノ際知ル人之ヲ語リキ唯タ其牡蠣ノ形狀産地等ヲ聞キ洩セシハ遺憾ナリシ

## ○とびはせ

江海接畛ノ處若クハ鹹水常ニ來往スルノ沼澤ニ一種ノ魚アリ其名ヲとびはせ又めくらはせ(Periophthalmus)ト云コノ魚ハ阿非利加東西兩岸及印度洋中ノ島嶼ノ如キ熱帶地方ニ多ク産スレ𪜈吾國ニテモ亦之ヲ産シP. modestus, *Schl.*ト云ヒ東京品川灣洲崎木場等ニ於テ屢々群游セルヲ視シコトアリ支那ニモ閩胡。彈塗。泥猴。跳魚等ノ稱呼有テ諸書ニ散見セリ其形蝦虎魚(はぜ)ニ似テ大サ四五寸アリ色澤斑文産地ニ由テ各同シカラサレ𪜈概スルニ其背淡黑色ニシテ銀色ト褐色トノ斑點アリマタ腹部ハ白色ヲ呈スルヲ常トナス而シテ其第二ノ背鰭ノ上半ハ黑帶一條有テ其邊縁白ク尾ト他ノ鰭トニハ唯タ斑文ノ點布スルアルノミ其眼ハ頂上ニ在テ突出シテ天ヲ刺シ其鰓ハ特異ノ作用アリテ久シク水ヲ離レ大氣中ニ在ルモ敢テ死スルコトナク干潮ノ後數多群ヲナシテ泥土ノ上ニ匍匐偃行ス其狀宛然蜥蜴ノ行クニ似タリ小蟹昆蟲ヲ食トシ之ヲ視レバ則チ蹶起跳躑シテ而シテ捕フレ𪜈人聲ヲ聽カバ輙チ泥中ニ入リ水ヲ溷ラシ以テ自ラ覆フテ其害ヲ防ゲリ泥猴ノ胸鰭ハ其構造作用マタ異ニシテ恰モ手足ノ用ヲ爲スモノヽ如ク以テ木石ニ登リ或ハ能ク泥上ヲ跳躍スルニ堪エタリ是レ泥猴、彈塗等ノ名アル所以ナリ小野蘭山(本草啓蒙)ガ曰ク一種目高ク出靜ナレバ水ヲ出デ木石ニ登リ人ヲ見レバ前鰭ヲ以テ水中ニ跳入リ蛙ガ跳ガ如キ者ヲ「トビハゼ」ト云トマタ閩書云彈塗魚大如拇指登如猴又名泥猴矣ハマタ嶺南雜

し、而して其如何に不愉快なるやは諸君の既に已よ熟知せらるゝ所なり。學者の研究は結核病眼病等の患者より健全者へ蠅の媒助よよりて病毒の移傳すとの說を助くる者の如し。又獨乙の實驗家は恐るへき血液病の蚊の媒介によるとを論せり。

されは是等害蟲の數を減し或は剿滅するの方法考案はたとへ如何程迂遠なるよもせよ、吾人の出し得へき伎倆と忍耐とを以て研究すへきとに非すや。予は Minnesota に於て蚊を食んと欲して予等の營所近傍よ群集せる蜻蛉數多を見たり。予は又近頃三十疋以上の蠅を貪食し厭くとなくして猶ほ數多を請求するが如き蜻蛉を實驗せり。昆蟲學士は又蜻蛉幼蟲の未た發育せさる蚊を數多呑食するを實驗せり。さらは活發無害にして飽くこと知らぬ蜻蛉の幼蟲は細小なる蟲類の數を減殺するの効大なるに非さるか。Prof. Baird 氏の二三實驗所々用の器具を以て數百万の健全なる魚兒を發育せしめし事、全地球を半周し伊太利國までも輸送されたる蠶卵の無事安全に數十百万と孵化生長すると、Australasia に於て Red clover（チランダゲンゲの類か）を受胎せしむるか爲め外國種のベボバチ（Humble bee）を蕃殖せしめ大に好結果を得たる事、其他近來發見の諸件は實に學術的研究の果實れ擴大にして豫め瞰視すへからさる者なりとの証例ともなるなれハ、世に所謂有害蟲類なる者も無害蟲類の人爲蕃殖によりて或は滅滅し得へき方法の發見なきにしもあらさるべし。

予は自ら昆蟲學を專修する者に非さるを以て此學の諸大家と謀りて、上に掲けたるか如き目的を達せんかため、實行し得へき樣なる結果を得んには次の如き方法を用ゆるの便利なるへきに決定せり。則ち此問題に就て昆蟲學士の注意を喚起せんが爲め、予は紐育市米國博物學博物館々長 Morris R. Jesup 氏へ金二百弗を送りたき、同氏は蚊と蠅の他昆蟲の力によりて戮殺さるへき實地の經驗觀察を基礎として論究せる文を募集し、其中三篇を撰ひ、第一等百五十弗第二等三十弗第三等二十弗と三級に別

是法未ダ他國ニ行フコトヲ聞カズ

## 雜録

●とんぼトか　Dr. Robert H. Lamborn 氏甞て鐵道工事の爲め、米國大湖邊の澤地中に夜營を結びし時、夕影蜻蛉の夥多樹間を剽飛するを見、其毎飛蚊一疋を喫し以て吾人の苦難を減ずと土人の揚言するを聞き、又其後昆蟲學士の蜻蛉を餌養するに蚊及び蠅を以てするを見、大に感ずる所ありて米國諸大動物學家と謀り、終に「蚊ハ撲滅シ得ベキヤ否」との懸賞文を博く國中に募集するに至れり。而して米國の諸新聞雜誌等は各々想像の説を揭載し一時甚だ喧しかりしが、期に至り撰に當り賞を得るもの三名、即ち一等賞 C. B. Aaron 女史、二等賞 Archibald C. Weeks 氏及び Wm. Beutenmuller 氏なり。（賞金は始め一二三の三等に區別して之れを附與するはづなりしか、後者兩名の答案は互に甲乙なきを以て二等三等の賞金を兩氏に平分せしなり）此三文殊に一等賞を得たる者は、今日まで世界各國に於て諸學士か研究實驗せし事項を極て簡短に記載し一も漏すとなけれは、此有益なる問題に明答を與へたるは勿論、蚊蜻蛉等に就て先輩諸士の研究未だ及ばざる所は何れなるや、其明確にして動かす可からさる諸點は何々なるや等の事を知り、是より研究をなさんと欲する諸士の參考ともなると僅々に非ざるべしと信ずるを以て、廻らぬ筆をも顧ず予は之より片言まじりに此論文を譯出して貴重なる動物學雜誌の餘白を借らんと欲す。予は祈る、編輯員諸君の予に贈るに沒書箱の餘白を借すの榮譽を以てせざらんことを。

瑠璃仙稿

Aaron 氏の文を譯出するの前、先ッ Lamborn 氏の國中に配附したる告白文を揭け、以て此問題の範圍如何を知らしむべし。

國内昆蟲學實驗家諸君

人類の幸福と健康とを阻害する動物類多しと雖も蚊と蠅とほど其數多く其蕃布廣く且止む時なきものなかるべ

結婚シタル后ノ幸福及ビ其子供等ニ就テ記シ而後曰ク余等ノロンドンニ住シ三年ト八ケ月ノ間余ハ出來ルダケ勉强シタルニモ拘ハラズ余ノ生涯中他ノ時ト比スレバ同日月ノ間ニ斯ノ如ク少ノ仕事ヲ爲シタルヿハ非ズ是ハ全ク度々病ニ罹リ又一度ハ久シキ間病ミシニ原因スルナリ余ノ仕事ヲ爲シ得ルトキハ重ニ「珊瑚礁」ニ從事シタリ此書ハ余ノ結婚前ニ始メ最終ノ校正ハ一千八百四十二年五月六日ニ終タリ此書ハ誠ニ小ナレドモ余ハ是ガ爲メ二十ケ月間孜々トシテ勉强シタリ何トナレバ太平洋諸島ニ就テノ書ハ總テ之ヲ讀ミ又數多ノ地圖ヲ引照スルヿ必要ナリタレバナリ此書ハ學者間ニ珍重サレタリ又書中述タル所ノ說ハ今日ニ至リテハ確定サレタリト余ハ思考スルナリ余ノ諸ノ著述中此書ノ如ク演繹法ニ依テ考出シタルモノハ非ザルナリ何トナレバ此書中ニ述タル說ハ全ク余ノ南米ノ西海岸ニアリテ未ダ嘗テ珊瑚礁ヲ實見シタルヿナキトキ既ニ考ヘタレバナリ故ニ余ハ生活セル所ノ礁ヲ注意シテ觀察シ以テ余ノ說ヲ實証シ且是ヲ擴張スルニ止リタルノミ然レドモ此處ニ左ノ事ヲ記セザル可ラズ即チ余ハ是ヨリ先二年間ハ斷間ナク陸地ノ高マルヿ及ビ是ト同時ニ水ノ働ニ因テ陸地ノ洗ヒ去ラレ且水中ニテ新ナル地層ノ積ルニ因テ南米ノ海岸ガ受ケタル所ノ變化ニ深ク注意シタリ余ハ是ニ因テ又止ヲ得ズ陸地ノ下落スルヿニ就テ思想ヲ廻ラスニ至リタリ而シテ水中ニ於テ積堆スル所ノ地層ノ代ニ珊瑚ノ漸次上方ニ向テ生長スル者アリト想像スルハ至易キヿナリキ余ガ Barrier-Reefs 及ビ Atolls ノ起原ニ就テノ說ヲ唱ヘタル此ヲ爲シタルニ外ナラザルナリ」

余ノロンドンニ住ミシ間珊瑚礁ニ就テノ書ヲ著シタル他ニ又地學會ニ於テ南米ノ迷走石、地震、及ビ細土ノ蚯蚓ノ作用ニ因テ生ズルヿニ就テノ諸論文ヲ朗讀シタリ又余ハビーグル號航海ノ動物編ノ編輯ヲ指揮シタリ且又種ノ起原ニ就テ諸ノ事實ヲ蒐集スルヿヲモ决シテ怠ラザリキ而シテ余ノ病ノ爲メ他ニ何事ヲモ爲シ能ハザリシ時ニ於テモ此事ハ爲シ得タリ

一千八百四十二年ノ夏余ハ少シク壯健ニ感ジタルガ故獨

ち賞金を附與すること。

此募集に應して實驗を爲し論文を起草せんとする者の爲に次の如き注意をも發したり。

第一　蚊及び蠅を滅滅すへき諸六足蟲類の試驗及び觀察。其滅滅の方法及び成否。

第二　上に揭けたる目的を達せんか爲め人爲繁殖を謀るに最も適せる蜻蛉―恐くは *Æschna, Libellula, Diplax* 屬の者か―を定むべき實驗觀察。

第三　各自注意したる實驗觀察を施し、前項に於て撰擇したる種類の慣性發育を詳記する事。

第四　極て饒多の六足蟲を餌育する方法案。　其の之に使用する器具及び千足宛に付き其の餌育に要する費金概算。

第五　室內、市中、近郊と區別し、昆蟲の幼蟲、蛹或は成蟲を活用すべき考案表式。

此募集文はフヒラデルフヒア博物學校副長兼米國昆蟲學會副長 Dr. Henry C. Mccook ニューヨルク理學學校々長コロンビア大學地學教授 Dr. I. S. Newberry 諸士の明細なる判定を經たる後賞金を附與する者とす。行文の明了流暢、Libellulidæ 科の發生に關する新き動物學上の事實等れ判定員の最も意を注く處なりと知るべし。又募集に應して送りたる論文れ悉く委員の識別を經て後ち其全文或は、拔抄を出版する者と心得べし、而して其記事の信疑は署名せる各實驗家の責任を擔ふへき者とす。

論文は紐育米國博物學博物館々長ウィンチル氏宛にて千八百八十九年十二月一日までに送るべし、總て他の文書類も亦同氏へ宛つべし。

千八百八十九年七月十五日

紐育那叟街三十二番　羅、朗膜暴倫

## ●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）

余ノ結婚シテアッパー、ガワー街ニ住居セシヨリロンドンヲ去テダウンニ定居セシ迄（一八三九、一月廿九日ヨリ一八四二、九月十四日マデ）

ヲ謂ヒタリトテ余ニ告タリ曰ク「若シ總テノ學者ガ六十歳ノ時ニ死スルヿナラバ何ト幸ナルヿナラン如何トナレバ六十歳以後ニ至リテハ必ズ新説ヲ拒ムヿ確ナレバナリ」ト然レ圧今ニ至リテハ尚ホ死セサランヿヲ望ムト謂ヘリ

ライエルハ地質學ニハ實ニ大功アリト謂フベキナリ一余ノ考ニテハライエル程是ノ學ノ爲メニ功アル人ハアラザル可シ余ノ將サニビーグル航海ノ途ニ就ントセシ時賢明ナルヘンスロー氏ハ當時始メテ出版ニナリタル「地學原理」ヲ購求シテ是ヲ熟讀スベシ然レ圧決シテ書中ニ唱ヘタル説ヲ信ズルヿ勿レト余ニ忠告シタリヘン氏ハ當時一般ノ地學者ト同ジク變災説ヲ信ジタリ今日トナリテハ誰ニテモ「地學原理」ニ就テ此ノ如キ事ヲナス人ハアラザルベシ余ノ始メテ地質調査ヲナシタル所即チ Cape de Verde 群島中 St. Jago ハライエルノ地學ヲ論ズルハ當時余ノ知リタル他ノモノヨリ遙ニ優レリトノ事實ヲ余ニ覺ラシメタルハ實ニ余ノ今日ニ至ルマデ記シテ愉快ヲ感ズル所ナリ

ライエルノ著ノ影響ノ大ナルヿハ以前此學ノ佛英兩國ニ於テノ進歩ノ異ナリタルニ由テ明ニ見ルベシエリー、ド、ボーモン「高マリニ因テ生ジタル火山穴」及ビ「高マリノ線」ノ如キ乱暴ナル假規定ノ今全ク消滅シタルハ葢大ニライエルノ力ニ依レリ（余ハセヂウヰクガ地學會ニ於テ彼ノ「高マリノ線」ナル假説ヲ甚ク稱揚シタルヲ聞キタルヿアリ）

余ハフムボルトガ Facile Princeps Botanicorum ト呼ビタルロバート、ブラウンニ會シタリ氏ノ著シキヿハ主トシテ其觀察ノ細密ナルヿ及ビ其觀察ノ誤ナキヿナリト見ヘタリ氏ノ智識ハ非常ナリシモ其ノ誤ヲナスヿヲ甚ク恐レシガ故ニ大部分ハ氏ト共ニ死シタリ氏ハ余ニ對シテハ包マズ其知識ヲ吐露セリ然レ圧或點ニ於テハ奇怪ニ匿ス所アリタリ余ハビーグル航海前二三度氏ヲ訪ヒタルヿアリシガ一日氏ハ余ヲシテ顯微鏡ヲ覗カシメ而シテ余ノ見ル所ノモノヲ説明セヨト云ヘリ余ハ顯微鏡ニ覗シガ今考

ニテ北ウエールスニ短キ旅行ヲ為シ昔時總テ當所ノ大ナル谿谷ヲ充物シタル所ノ永河ノ為メニ生ジタル結果ヲ觀察シタリ余ハ聊カ實見シタル所ヲ哲學雜誌ニ出版シタリ此短キ旅行ニ余ハ深ク興味ヲ感ジタリ而シテ余ガ地質學上ノ研究ニ必要ナル所ノ山頂ニ登リ或ハ長キ徒行ヲナス丈ノ氣力ヲ有シタルハ此ヲ以テ最終トナスナリ

余ノロンドンニ住シタル最初ノ間ハ可ナリ壯健ニシテ一般ノ社會ニ出デヽ交際スルヿヲ得タリ斯クシテ余ハ數多ノ理學者及ビ其他多少有名ナル人々ニ會シタリ余ハ今其等ノ中或者ニ就テ余ノ感覺ヲ述ン固ヨリ價値アルヿヲ曰フヿ能ハザレ𪜈

余ハ結婚前モ結婚後モライエルニ最モ聚々面會シタリ氏ノ心ノ特質ハ明白ナルヿ、物事ヲ輕卒ニセザルヿ、健ナル判斷、及ビ新奇ナル思想ヲ廻ラスニ可ナリノ技倆アルヿナリト余ハ考フ余ガ地質學ニ就テ如何ナルヿニモ言タル𪜈氏ハ必ズ其事ノ全体ヲ明白ニ見ルニ至ルマデハ決シテ止マザリキ而シテ氏ハ余ヲシテ余ノ觀タルヨリモ一層明白ニ之ヲ觀セシメタルヿ度々アリタリ氏ハ余ノ言出シタルヿニ對シテ出來ル丈ノ反對説ヲ持出シ又總テ是等ノ反對説ヲ盡シタル後ト雖𪜈久シク疑ヲ霽ラスヿナカリキ又氏ノ他ノ特質ハ他ノ學者ノ仕事ニ深ク同情ヲ表スルヿナリキ

余ノビーグル航海ヨリ歸國シテ間モナク余ハ氏ニ余ノ珊瑚礁ニ就テノ考ヲ説明シタリ余ノ考ハ氏ノ考ト異ナリタルモ氏ノ深ク是ニ興味ヲ表シタルハ余ノ實ニ愕キ且奬勵サレタル所ナリ氏ノ學ヲ好ムハ實ニ熾ナリト曰フベシ而シテ氏ハ又人類將來ノ進歩ヲ思フヿ最モ鋭カリキ氏ハ實ニ親切ナル心ヲ有シ宗教上ノ信仰否寧ロ不信仰ニ就テハ完ク寛大ナリキ然レ𪜈氏ハ確乎タル有神論者ナリキ氏ノ公平ナルヿハ實ニ著シキモノナリキ此ハ氏ノラマルクノ説ヲ攻擊スルニ因テ大ニ稱セラレシニモ拘ハラズ進化説ヲ信ズル者トナリタルニ依テ明ナリ剩ヘ氏ノ進化説ヲ信スルニ至リタル老年ノ事ナリキ氏ハ一日余ノ先ニ昔ノ地學流ノ者ガ氏ノ説ニ反對セルヿニ就テ談話セシ際左ノ言

10. Pamphila guttata, Brem.
11. Amblypodia japonica, Mur.
12. Curetis acuta, Moore?

予ハ是マデ十二月ニハ1 2 3 4 5 6 7 8ノ外三重縣下ニ於テ採集セシコトナカリシハ探索ノ不行屆キカ抑モ亦タ氣候ノ然ラシムルトコロカ

●**白魚トぎやふノ漁獲**　世人ノ普ク知ル如ク桑名四日市邊ノ白魚(Salanx microdon, Blker.)ハ產額モ多ク非常ニ有名ナルモノニテ東京佃島ノモノハモト桑名ヨリ移殖セシモノトサヘ稱ヘタリ每年北伊勢內海ニテハ多ク之ヲ漁獲スルヿナルガ本年ハ十一月下旬ヨリ既ニ其漁得アリシモ未ダ其体軀稍ヤ小ニシテ多額ニ至ラズ又一寸見ルトキハ外見頗ル白魚ニ似タル伊勢方言ぎやふ(Leucopsarion Petersii, Hilgd.)ト稱スル者ハ伊勢ニテハ桑名富田四日市邊ノ河口ニノミ限リ產シ其量白魚ノ十分ノ一ニモ足ラザルモ十二月下旬ニ至レバ是マデ隨分捕漁スルヿアリシニ本年ハ其尤モ多ク產スル四日市三瀧川ノ下流ニ於テモ未ダ更ニ漁網ノ利ナシト云フコレ本年氣候ノ暖カナルニヨルカ

●**生物學ト教育令**　博物ノ學ト云ヘバツマラヌモノナリト誤認スルハ田舍ノ慣ヒニテ予ハ近頃或ル高等小學校ノ教員ガ線蟲(Gordius)ガ化シテ蝶ト成ルト主張シテ止マザル奇談ヲ實見シタル節ニハ教育者ガ如何ニモ理學思想ニ乏シキヲ歎ジタリシガ今度三重縣朝明郡ニ設ケタル教員講習會ニ於キテ數多ノ學課中ヨリ投票多數ニヨリ四課ノ科目ヲ時々講習スルヿニ決シタリシガ其中ニテ生物學ガ最多數ニテ其講習ノ任ヲ予ニ依賴セリ玆ニ於キテカ予ハ嚮キノ歎息ヲ較々醫療シタリト雖博物智識ニ暗キモノガ人類ノ兒供ヲ仕立上ゲントスルハ實ニ不都合千万ニアラズヤ

以上四件　三重縣伊勢　梅村甚太郎

●**十二月中蝶類の捕獲**　昨年十二月六日より同十六日迄十日の間當岐阜市及び近傍の山野に於て次に記す所の蝶類十種を採集し得たり元來十二月は寒冷にして

フルニ其時見タルハ或植物細胞ノ原形質中ノ愕クベキ流レナリシナリ余ハ見タルモノハ何ナリヤト問ヒシニ氏答テ曰ク「此ハ余ノ大切ナル秘密ナリ」ト

氏ハ深ク慈善ノ行ヲナスノ心アリタル人ナリ氏ノ老年ニ至リ身体衰フルニ至リテ可ナリ遠方ニ住居シテ氏ノ扶助シタル僕ヲ日々（フッカーノ言ニ由バ）訪ヒ且是ガ爲メニ書ヲ朗讀シタリ斯ノ如キ行爲ハ如何程學術上ニハ吝嗇ナルモ或ハ人ニ匿スノ癖アルモ之ヲ贖フニ足ルナリ

余ハ是處ニ余ノ時々會シタル所ノ名士ニ就テ曰フベシ然シ余ハ益アルコハ謂フコナシ余ハサー、ジヨン、ハーシエルニ對シテハ深ク敬虔ノ心ヲ懷ケリ而シテ喜望峰ニ於ケル氏ノ美シキ家ニ於テ又后氏ノロンドンノ家ニ於テ招待ヲ受ケタルハ實ニ余ノ樂ミシ所ナリ余ハ此外數度氏ニ會シタリ氏ハ寡言ノ人ナリキ然レモ氏ノ語ル片ハ必ズ注意シテ聽クベキコヲ言ヘリ

余ハ一度サー、ロ、マーチソン氏ノ許ニテ有名ナルフムボルトニ會シタリ氏ハ余ヲ見ント欲トノ望ヲ公言シタリシナリ余ハ此人傑ニ就テハ少シク失望シタリ然レモ是余ノ豫想ガ高スギシニ因ルナラム余ハ此應接ニ就テハ別ニ記憶スルコナシタヾフムボルトノ實ニ快活ニシテヨク談話シタルヲ記スルノミ（未完）

●**三重縣下ノ永良部鰻** ヲ去十一月北牟婁郡尾鷲浦ノ漁民之ヲ海中ニ網セリ最初ハ蠕々焉トシテ蜿蜒セシガ伊勢ノ安濃津ニ持チ來リ遂ニ死セリ殆ント六七尺アリタリト云フ

●**十二月ノ蝶** 本年ハ非常ニ暖氣ナルガ故ニ十二月中ニ左ノ各種ノ蝶ヲ北伊勢ニ於キテ見タリ

1. Pieris rapae, Linn.
2. Terias biformis, H. Pryer.
3. Polyommatus phlæas, Finn.
4. Lycæna 2 sp.
5. Libythea sp?
6. Vanessa cardui, Linn.
7. 〃 callirhoe, Fab.
8. 〃 Charonda, Drury.
9. Argynnis sagana, Doubl.

謂古北界(Polaearctic region)中ニ在ルヿ學士ノ容ルス所ナリ而シテ全國ヲ更ニ若干ノ小區域ニ區分シ得ルヤ疑ヲ容レズ、對島ハ內地ニ野生セザル所ノ朝鮮雉子、野猫ナドヲ產スト云ヘバ大ニ朝鮮ニ近似シ以テ本邦中ノ一ふをうな區ト看做スニ足ランカ、又琉球諸島、小笠原島ナドハ多分ニまれい(熱帶)原子ヲ含ミ內地ふをうなトハ大ニ異ナル所アレバ別區ナリト看做シテ不可ナカルベシ又北海道ハ頗ルしべりあニ近似スルヲ以テ是又一區域ト爲シテ可ナルベシ、然レ圧此等區域ノヿハ尙ホ詳細ノ調査ヲ要スルナリ、帝國本部即チ內地ハ以テ一區ト看做スベキカ將タ小分スベキ乎、一說ニ敦賀ト尾張灣ヲ連續セル線ノ南ト北ハふをうな上異ナル所アリト云フト雖モ証跡未ダ充分ナラズ、獨リ北海道ト本州ノ間ナル津輕海峽ハ隨分際立チタルふをうな上ノ分離線ナルヿ吾人ノ深ク信ズル所ナリトス、此事ヲ初メテ日ヒ出ダシタル人ハ我國鳥類學ニ頗ル功績アルブラキストン氏ナリ、故ニ爾來本邦ノ動物地理ヲ論ズル人ハ津輕海峽ノヿヲブラキストン綿トハ云フナリ、氏ハ鳥類ヲ研究シタルヨリ此結果ニ至リタルニテ氏ノ經驗ニヨレハ北海道ニ固有ナル鳥(北海道ノミニ產スル者)トテハ一種モナシ而シテ該道ニ見ル所ノ鳥類中多數ハ津輕海峽以南ニモ產シ又少クモ七種ハしべりあニモ產ス、其七種トハ左ノ如シ

一) Picus minor　しべりあこげら
二) Dryocopus marsius　くまげら
三) Gecinus canus　やまげら
四) Garrulus brandtii　みやまかけす
五) Acredula caudata　しまえなが
六) Tetrastes bonasia　ゑぞらいてう
七) Bubo blakissoni　大みゝづく

右七種ノしべりあ鳥ハ津輕海峽以南ニ見ルヿ決シテ無シ而シテ面白キヿニハ七種中一ヨリ五ニ至ル五種ハ津輕海峽以南ニ在テハ同屬ニシテ性質甚ダ近キ別ニヨリテ代表セラル、ナリ、其海峽以南ノ代表者トハ左ノ如シ

一) Picus kisuki　こげら

蝶類の飛揚すると極めて少けれバ是迄十二月中に於ては殆んど採集したるとなし然るに昨年十二月は平年に比して温暖なるを以て斯くは多く捕獲したるものならん是等の種に於ては大概冬眠を爲し春暖を待ちて再び飛揚するものならん

(一)モンシロテフ　Pieris rapae, Linn.
(二)モンキテフ　Colias hyale, Linn.
(三)キテフ　Terias multiformis, H. P.
(四)ツマグロキテフ　T. biformis, H. P.
(五)ルリシジミ　Amblypodia japonica, Murray.
(六)ベニシジミ　Polyommatus phlæas. Linn.
(七)ウラナミシジミ　Lycæna bætica, Linn.
(八)ヤマトシジミ　L. argia, Mén.
(九)ヒメアカタテハ　Vanessa cardui, Linn,
(十)ルリタテハ　V. charonia, Drury.

次に群馬縣南勢多郡富士見村の友人羽鳥重良氏より本年早々左の如く報知ありたり

昨年十二月七日より十六日迄九日の間當地に於て次の蝶類を採集したり

(一)モンキテフ　十二日
(二)キテフ　十六日
(三)ツマグロキテフ　七日
(四)ルリタテハ　八日
(五)Vanessa sp?　八日

其他 Lycaena sp? もありしが時日を記さゞ

との報知に接したれバ小生の採集したる種類と比較するに恐くは悉く同種なるとを深く信じたり然れども只此地より彼地に於て種類の少きは種々源因もあるなれども多分寒冷の強き爲ならんか聊か記して該學者の參考に供す

(岐阜市京町　名和　靖報ず)

●ブラキストン線　我ガ帝國内ニ如何ナル動物種ガ存在スル乎吾人ノ之ヲ知ルハ實ニ小分數ニ過ギザルノミ況ンヤ國内ノ動物地理(Zoogeography)ニ於テオヤ、併シナガラ其ふをうなノ全体ニ就キ觀ルトキハ我國ハ所

魚ヲ捕獲セントテ簗ヲ置キシニ彼ノ鰻之レニカヽレリ其懸リシ當時ハ恰モ大木ノ簗ニ落チタル如クナレバ一時ハ恐怖セシモ四五年前此下流さんやういんノたるニ於テ大鰻ヲ捕獲セシ例アレバ(當初ハ人皆さめナラント思ヒシ)其確カニ鰻ナルヿヲ察シ遂ニ捕獲スルノ勇氣ヲ出シタリ當地川漁ニ功者ナルモノヽ說ニ川津川ニハ二種ノうなぎヲ産ス一ヲまうなぎト云フ体黒クシテ斑點ナシ一ヲごまうなぎト云フ先日ノ大鰻ハごまノ一種ナリトノ話シナリ云々

編者曰畔田翠山翁ノ水族志ニ本草啓蒙本朝食鑑等ヲ引証シテごまうなぎ、すじうなぎ、かにくひ、大うなぎ、等數種ヲ擧ク然レ𪜈唯其記載ノミヲ以テ右ノ大鰻ヲ鑑査スルヿ難シ幸ヒ帝國博物館ニ數種ヲ所藏セラルヽニ因リ其標品ニ就テ比較セシ日向那珂郡飫肥産(目下陳列セラルヽモノ)及阿波海邊郡母川産ノおほうなぎハ共ニ偉大ノモノニテ斑紋ノ狀トイヒ喙ノ形トイヒ或ハ近似ノモノナラン然レ𪜈此二品ハ剝製ニテ充分ニ比較スル能ハズ明治十年小花氏ノ寄贈ニ係ル小笠原産ノかまくひうなぎハアルコール漬ニシテ較々元ノ容姿ヲ存シ伊豆産ノ大鰻ニ類似スル所甚タ多シ或ハ同種ナランカ左ニ各部ノ大サヲ揭ケテ參考ニ供フ又英國博物館ノ目錄ニ Anguilla marmorata, Quoy and Gaim. ナル種ハ亞細亞地方ニ廣ク散布シ特色ノ斑紋ニ因テ容易ニ他種ト識別セラルヽ由記載アリ姑ク記シテ識者ニ質ス

| | 鮮魚 | 酒精漬 |
|---|---|---|
| 喙端尾末 | 132セメ | 104セメ |
| 肛門尾端 | 71 ,, | 51 ,, |
| 喙端口裂 | 6 ,, | 6 ,, |
| 喙端胸鰭 | 18 ,, | 15 ,, |
| 胸鰭背鰭 | 19½ ,, | 15 ,, |
| 胸鰭ノ長サ | 6 ,, | 4½ ,, |
| 尾鰭ノ長サ | 25 ミメ | 20 ミメ |
| 眼ノ直徑 | 15 ,, | 13 ,, |
| 産地 | 伊豆 | 小笠原島 |

右ノ表中小笠原島かまくひノ寸法ハ酒精漬ノ標品ニ就テ測リシタメ多少收縮セルナルベシ

## ●種類亡滅の兆

生物の生存する限りは生活の競争止むときなきは事實にして競爭の結果は勝敗を釀し適

二) Dryocopus richardsi　くまげら一種

三) Gecinus awokera　あをげら

四) Garrulus japonicus　かけす かしどり

五) Acredula trivirgata　ゑなが

此五種ハ皆日本々部ニ特殊ナル者ニシテ北海道ハ更ナリ外邦ニ見ザル所トス　尚ホ此ニやまどり(Phasianus sœmmeringi)、きじ(Ph. versicolor)、及ビからすばと(Carpophaga ianthina)(孰レモ北海道ニナシ)ヲ加フルトキハ實ニ我全邦ニ特殊ナル鳥ハ盡セリ但シ Picus Seebohmi モ同シク日本固有ノ一種ナルガ此者ニ限リ津輕海峽ノ南北共ニ存在ス

上述ノ事實ハ津輕海峽即チ所謂ブラキストン線ノ本邦動物地理上ノ一分界線タルヲ示スモノニシテ其レヨリ以北ハしべりあ、ふぁうな性質ヲ具フモノナリトス、只鳥類ノミナラス又ふろら上ニ於ケルモ哺乳動物ニ於ケルモ其實証アルナリ

●うなぎノ秀物　去明治廿三年十二月靜岡縣伊豆國賀茂郡稻取村醫學士加藤吉忠氏ヨリ大學ヘ寄贈セラレタル鰻ハ頗ル偉大ノモノニシテ体ノ全長四尺三寸五分太サ壹尺壹寸四分其量二貫目滿身黑色ノ斑紋アリ斯ル大鰻ヲ如何ナル塲所ニ於テ捕獲セラレシヤト尋チシニ川津川ニ於テ漁セシモノナリト左ニ其通報ヲ抄錄ス

川津川ハ天城山ヨリ出テ南流シテ海ニ入ル長サ三里餘川幅ノ廣キ處二十間以上ニ至ル急流激湍大石横ハリ其上流ニハ高五丈前後ノ瀑布多ク其著名ナルモノヲ大だる釜だる等トス(たるトハ方言たきノ異名ナリ)年魚、うぐひ、やまべ、はせ(土俗ぼち)蝦、龜、鮒、鰻、川口ニ至レバすゞき、ぼら等ヲ産ス川ノ深サ大抵淺クシテ一二尺ヨリ三尺許リ深キ處凡二丈許ナリ曩ニ寄贈セル大鰻ハ川津筏塲字天川ト稱スル處ニ於テ捕獲セリ(川口ヨリ凡壹里許ノ上)其住ミタル處ハ確定セズト雖モ其上流二十町許ノ地ニ小鍋ノ渡ト稱スル深サ一丈前後ノ處アリ此處ニ棲息セシモノカ或ハ其上流大たる(高五丈許ノ瀑布ニシテ天川ヨリ壹里上ナリ年魚ハ此處ヨリ上ニ上ラズ)ナルベシ去月上旬(明治廿三年十月ヲ云フ)年

ヲ驚カス程ナリシニモ拘ハラス原圖ニ誤謬ノ點少カラザリシヲ以テ見ル人ヲ〆實ニ遺憾トノ念ヲ起サシメシガ昨年來大日本水產會ニテハ其第二版ヲ出版スルヿニ着手シ此頃成就〆豫約者ニ配付シタリ之ヲ見ルニ印刷ハ矢張印刷局ノ擔當ニテ先年ノ版ニ勝ルトモ劣ルヿハナク實ニ見事ナル出來ナリ原圖モ此度ハ重ニ實物ニ依リ寫生シタルモノナレバ誤謬ナク實ニ完全ナルノ感ヲ與フ編輯ニ從事シタル者ノ苦心思フベシ」此ノ如キ良好ノ圖出來シタルハ實ニ祝ス可キヿナリ

●進化新論　石川千代松氏著進化新論漸ク上梓シタリ斯學ニ志ス者ハ兼テヨリ待チ居タルヿナレバ我輩モ急キテ之ヲ披見スルニ動植物ノ大意ヨリ説キ起シテ進化論ノ原理ヲ説明シ之ヲ動植物ノ構造動植物ノ慣性及其他ノ現象ニ照シテ其實確ナルヲ證シ遂ニ近來生物學ノ一大進歩ヲ記ス最モ新シキ遺傳説ニ論及シ終ニ自然ニ於ケル人類ノ位置ト題セル一章ヲ以テ完了ス我輩ハ此書ノ良好ナルヲ披露スルニ及バス是ハ勿論ノ事ナリ石川氏歐洲滯在中現今進化學ノ泰斗ナルわいすまん氏ト共ニ汲々研究セラレタル事項ハ皆遺傳ノ説ニ大切ナル關係ヲ有シ近頃此説ノ大ニ進歩シタルモ二氏ノ研究與リテ大ニ力アレバ石川氏ニシテ遺傳説ヲ説クハ氏ノ最モ得意ナル所ヲ講スルモノナレバ讀者ニ滿足ヲ與ヘンヿハ無論ノヿナリ」動物學ヲ專門トスル者ハ己ノ學ニ付キ此ノ如キ有用ナル書ノ出版ヲ悦ブハ當然ノヿナレ𪜈哲學ニ志ス者或ハ一般世ノ進歩ニ後レザラント欲スル者ハ一讀スベキノ書ナリ

●單細胞蟲ノ排泄器　ぐりっふぃす氏ハあみーば、ぼーちせら、ぱらみーしあむノ伸縮腔ニ尿酸ノ存在スルヲ証明セリ。其方法ヲ問フニ先ヅ覆がらすノ下ニアルあみーばヲ弱キあるこーるヲ以テ殺シ、次ニ硝酸ヲ入レテ臺がらすヲ暖メ而〆あんもにあヲ入ルレバ Murexide ノ結晶シテ伸縮腔ノ内及ビ其排泄液ノ内ニ顯ハル。是ヲ以テ之ヲ見レバ伸縮腔ト窒素ヲ含ム不用物ノ排泄ヲ司ルヿ明カナリ。

●とうきん　ノ學名ハ元ト Physalia ト呼ビ來リシガ、

者は存し不適者ハ亡ぶると已ふ爭ふ可からず此の如き事實の例は實に枚擧に暇あらず特に近歳著しき事柄として我々が聞き及ぶは或る鳥種類の亡滅是なり今ま玆に兎や角云ふに及ばざることながら或る種の動物特に高等なる鳥類が其種族に限り擧て亡滅するとは抑も驚かずして止むべきか今ままた我々は此事實を我邦に於て目擊すること遠きにあらざるべし余は肥前鳥の標品を得る爲め去る明治二十二年より以還冬期彼の鳥の多く顯るゝ肥後に於て諸方の銃獵者に捕獵を依賴し置きしに皆な動物に際會することの希なるの故を以て斷り來れり實に余が幼年の頃までは其處此處に數多見受けし鳥が僅二十年足らすの間に此くも希になり行きしハ抑も奇怪のことなり我邦にありて近世大分希になり行きつゝある鳥は外にもあり鶴の如きは蓋し其例なり然れども鶴にありては銃獵者の付け睨むると其原因の重なるものなるべくも肥前鳥の如きに至りてハ素ト獲物として價直なきのみならず土地の習慣によりて獵狩の爲めに苦めらるゝこと更になかりし是によりて觀るときは其事由愈々他に需めざるべからずして興味益々其中にあり然れども斯る錯雜の間に夾まる現象ハ今ま俄かにこれが說明を得べきにあらず暫く他日を待つのみ

（な、さ、）

●**札幌博物學會**　會員某氏ヨリノ來狀ニ今回有志者相計リ題號ノ如キ學會ヲ札幌ニ設立シ第一回ノ集會ヲ去ル十七日ニ催ス筈ナリシト同會ハ動物學植物學地質學人類學等凡ソ博物學科ト稱スルモノハ凡テ之ヲ硏究シ北海道ノ天產物ノ如キハ特別ニ注意ヲ加フル目的ナリト而シテ其集會ヲ二種ニ分チ一ハ通常會ト稱シテ會員ノ硏究觀察等ヲ演シ或ハ會員分擔シテ雜誌及新著ノ書籍ノ要畧ヲ報告スル爲ニ開キ今一ハ有名ナル學士ノ來札シタル時ニ開ク講談會ナリト」本會會員宮部金吾野澤俊次郎氏モ全會々員ニシテ盡力セラルヽ由」此ノ如キ會ノ續々各地方ニ起ルハ實ニ祝ス可キ事ナリ

●**日本重要水產動植物圖**　ノ第壹版ハ先年佛國博覽會ニ際シ出版ナリシモノナルガ其印刷ノ美ナルハ人

動物學雜誌第廿九號
明治廿四年三月十五日發兌

# ●ゆふれいくらげ（第二版）

岸上鎌吉

## Cyanea nozakii, nov. sp.

von
Kamakichi Kishinouye.

夏時瀬戸内海ヲ渡レバ美麗ナルくらげノ彼處此處ニ浮游スルヲ見ルベシ、其數ハ多ケレ𪜈其屬スル屬ニ至リテハ僅少ナルガ如シ、其中ノ多數ハ備前くらげ及ビゆふれいくらげナリ、此二種ハ直チニ區別シ得ラル、備前くらげハかさ大ニシテ深ク其色青シ、ゆふれいくらげハかさ扁平ニシテ其色白シ。ゆふれいくらげハ大サニ於テハ備前くらげニ劣ルト雖モ形ノ秀雅ナル點ニ於テハくらげ中第一ト稱スルモ敢テ過言ニ非ズ、始メテ見ルモノハ勿論能ク見馴レタル漁師ト雖予等ノ採集セシモノヲ近ヨリテ見ルニ及ンデハ感歎ノ聲ヲ發セザルモノナシ。

ゆふれいくらげハ全体乳白色ナリ、故ニ又しろくらげノ名アリ、然シ海中ニ浮游シ居ルヲ遠方ヨリ見ルトキハ中央部少シ淡紅色ヲ帶ビ周圍部ハ少シ青色ヲ帶ンデ見ユ、ゆふれいくらげノ名ハ重ニ此周圍部ノ色ヨリ來リタルモノナラン。昨夏中國旅行ノ際此くらげニ就キ少シ取調ベ新種ナリト判定シタリ、不充分ナル點多ケレ𪜈爰ニ其造構ヲ畧記ス。

かさ（Schirm）ハ白色扁平ニシテ中央部少シ窪ミ居リ盃狀ヲナス、上面ハ殆ンド平滑ナリ、只中央部ニ非常ニ低キ突起少シアリ。かさノ邊緣ハ十六ノ切レ込ミニヨリテ十六ノ瓣ニ分タル、之ヲゑふぃら瓣ト云フ、ゑふぃら瓣ノ輪廓ハ圓形ナリ。かさヲ作ル寒天ハ隨分丈夫ニシテ堅シ（然シ備前くらげノ堅キニハ及バズ）、中央ノ部ニテ厚ク周邊ニ至レバ急ニ薄シ、故ニ游泳スル際水ノ抵抗力ニ打勝ツヿ能ハズシテ上方ヘ折曲ゲラル。かさノ下面（Subumbrella）ハ四個ノ同心ナル帶ニ分タ





13

へッける氏ハ之ヲ Caravella ト改メタリ、此動物ハ亦かつをのゑぼしト稱シ彼ノ黒潮ニ住ム Siphonophora ナリ。びげろー氏ハ此動物ノ習性ヲ研究セリ、氏ニ從ヘバ此動物ハ小魚ヲ取テ食物トナス、此等ノ小魚ハてんたくるニ觸レ其爲ニ捕ヘラル、此時苦ンデ体ヲ跳ラシてんたくるヲ引ク、てんたくるハ爲ニ收縮シテ鐘狀營養体ニ食餌ヲ與フ、魚若シ苦シミ爭ソハザレバてんたくるハ收縮セズ。營養体ハ魚ノ体ヲ覆ヒテ之ヲ消化ス。

●鳥類ノ体重ト腦重ノ割合　すゞめ、みそさゞゐ、しゞゅーからノ如キ小鳥ノ体重ト腦重トノ表チ見タルニ腦重ヲ一トスレバ体重ハ平均二十六ナリ、其中体重ノ最モ重キモノ四十二、最モ輕キ者十六ナリ。當時鳥類採集ノ好時節ナリ、採集者少シ面倒チ見テ雌雄性、採集時等ヲ明記シ、体重、腦重ノ表ヲ作ルモ面白カルヘシ。

●外國ヨリ來狀　在獨乙國理學士佐々木忠二郎氏ヨリ會員某氏ニ向ケ左ノ如キ書狀アリ

前畧……昨年來動物ノ組織ニ着色シ其色濃ニ過ル時ハ Wasserstoff Supraoxyd($H^2O^2$) ノ溶液ニ侵シ色抜ヲ爲セリ小生モ此法ヲ試ミタルニ頗ル功能アリ又 Protozoa, Actinia Annelida, Rotifera, Mollusca 等ヲ殺スニ Hydroxylamin ヲ用ユレバ收縮ノ患ナク組織程能ク固マリ切斷スルニ良シ云々

## 東京動物學會記事

●三重博物學會第三例會　ヲ去ル十二月七日伊勢朝明郡ノ事務所ニ開キ避債蟲實驗說(梅村甚太郎)員辨郡十一月發生ノ蝶類ニ就キテノ談話(岡田松之助)アリ其餘植物ニ關スル講話等モアリ夜ニ入リテ散會セリ同會ハ時々通信ヲ發スルノ規則ナリシカ明治廿四年一月ヨリ愈々通信チ出スコトトナリタリ

●東京動物學會　去一月ハ都合ニ因リ月次小集會ヲ開カス

●會員死亡　本會々員柳楢悅君ハ去月逝去セラレタリ

ル。第一ハ中央ノ帯ニシテ胃腔ノ天井ニ當ル、此帯ヨリ八個ノ褶襞多キ能ク發達シタル器官垂下ス、即チ四個ノ美麗ニシテ窓掛ケノ如キ唇瓣（Mundarme）ト四個ノ曲折、纏繞セル生殖腺是レナリ、中央帯ハ更ニ又三ノ同心帯ニ分タル、中央ノ圓形ノ部分、次ニ溝ニ因テ十六ノ劍形片ニ分レタル部分、次ニ十六ノ將棊ノこまノ如キ片ニ分タレタル部分、第二ハ環狀筋帯ナリ、環狀筋ハ五本ノ環狀隆起ヨリナル、十六ノ射出寒天隔障ニ因テ十六ニ切ラル（ハ狹クシテ感觸器ノ内ニアルモノト廣クシテ觸手ノ内ニアルモノト入リ違ヒナリ）、第三ハ觸手帯ナリ、觸手ハ澤山U字狀ニ adradius ノ上ニ集マレリ、此等ノU字狀ノ觸手束ハ八對ノ射出筋ニテ隔テラル（各射出筋ハ五本ノ隆起ヨリナル）、第四ハ瓣帯ニテ八個ノ感覺器ヲ有ス。

觸手（Tentakeln）ハ其數非常ニ多シ、U字形ニ排列セラル、U字ノ両端ニテハ觸手短カク且ツ少ナシ、中間ニテハ觸手長ク且ツ多シ、觸手ハ伸縮スルヿ他ノくらげノモノヨリ甚ダシク充分伸ビタルトキノ十分一位ニ縮ム。

消化循環系（Gastrocanal-System）ハ大ナル圓形ノ胃腔ト太クシテ互ニ相通ゼザル十六ノ射出嚢トヨリナル。感覺器ノ下ノ嚢（Ocular-Taschen）ハ殆ンド長方形ナリ、其前端ハ感覺器ノ所ニテ左右二ツニ分レ夫レヨリ數多ノ小枝ニ分支シテ終ル、觸手ノ下ノ嚢（Tentakel-Taschen）ハY字形ナリ、其長サノ二分一ノ邊ニテ左右二ツニ分レ夫ヨリ嚢ノ幅少シ廣クナリ其先端ハ數回分支シテ終ル。

色ハ全體乳白色ニシテ華美、鮮明ニハアラザレ𪜈秀雅高尙ナリ。只觸手ノ基部ノ少シク褐色ヲ帯ブルモノヲ見シコトアルノミ。

大サハかさノ直徑一六〇乃至二六〇みめ、觸手ノ長サハ充分伸ビタルトキハ一間程ニ達ス。北米ノゆふれいくらげノ一種 Cyanea arctica ハかさノ大サ一間餘、觸手ノ長サ二十間餘ニ達スルモノアリト云フ、くらげノ中ニテハ最大ノモノナリ。

ゆふれいくらげハ七、八、九月ノ頃瀨戸内海ニ多ク產ス。

ゆうれいくらげハ Discomedusæ, Semostomæ ノ中 Cyaneidæ 科 Cyanea 屬ニ屬ス、へっける氏くらげ譜ニハ Cyanea 六種ヲ載ス、皆北半球ニ產ス、其後余ノ知ル所ニテハ南半球ヨリ二新種ノ發見アリシノミ、一ハれんでんふゑるど氏ノ C. annaskala、一ハれーけ氏ノ C. müllerianthe ナリ。而シテゆふれいくらげハ此八種ノ中何レニモ符合セズ、ゑふぃら瓣ノ圓形ナル、生殖腺ノ無色ナル、胃腔ノ天井ノ三帶ニ分レタル等ハ他種ニ見ザル所ナリ、他種ニテハ生殖腺ハ大概赤色或ハ黄色ナリ、ゑふぃら瓣ハ C. müllerianthe ヲ除ク外或ハ三角形或ハ四角形ヲナシ、又或ハ二ツニ分レタルアリ、胃腔ノ天井ハ C. annaskala ニテ二帶ニ分タレタレ压他種ニ於テハ如何ニアルカ圖ニモ記文ニモ見ヘザレバ多分只一帶ノミナラン。故ニゆうれいくらげハ新種ナリト判定シタレバ C. nozakii ト命名セン、予ノ中國旅行ノ際常ニ大ニ採集ヲ助ケラレタル野崎續太郎君ノ名ヲ取リタルモノナリ。

**Cyanea nozakii, n. sp.**

*Species-Diagnose:* Schirm flach, scheibenförmig, 5 mal so breit als hoch. Schirm-Radius 3 mal so gross als der Radius des Central-Magens. 16 Ephyra-Lappen abgerundet, doppelt so breit als lang. Ocular-Taschen fast rechteckig. Tentakel-Taschen an der Basis doppelt so breit, in der Höhe der Sinneskolben, 2½ mal so breit als die Ocular-Taschen.

*Farbe:* Milchweiss.

*Grösse:* Schirmbreite 160—260 mm.

*Fundort:* Japan; Inländisches Meer.

第二版圖解

上圖ハ觸手ヲ伸長シテ游泳セル樣ヲ示ス。

下圖ハかさノ下面ヲ示ス。上ノ左半分ハ唇瓣、生殖腺ヲ示シ、右半分ハ生殖腺切取ラレ觸手ノ附着部ヲ示ス、下ノ左半分ハ胃腔ノ下壁切取ラレ消化循環系ヲ示ス、右半分ハ中央胃部ノ下壁及ビ觸手切取ラレかさ下面ノ四帶、筋肉、觸手、附着ノ跡等ヲ示ス。

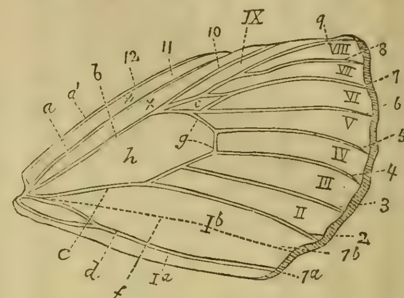
上下二圖共ニ原形ノ凡ソ四分一。

## ●日本產蝶類(第四回)

石川千代松

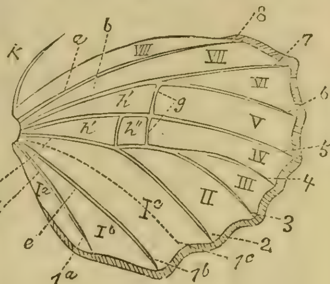
蛹蟲ハ通常堅固ナル皮膚ヲ具ヘ死物ノ如ク餘リ動クヿナク皮膚内ニ成蟲即チ蝶ノ體形ヲ見ルヲ得ヘシ、然レ压其腹部ノ環節ハ動クヲ常トス故ニ頭部ニテ之ヲツカムトキハ

第九圖　蝶ノ前翅、摸型圖



a胸脈、a'外胸脈、b下胸脈、c中脈、d背脈、g、横脈、h中室、i複室、1……12第一ヨリ第十二ニ至ル脈、I……XI第一ヨリ第十一ニ至ル側室、

第十圖　蝶ノ後翅、摸型圖



a、b、c、d、f ハ前圖ニ於ケルカ如シ、h' h'中室、h'' 複室、k 掛毛、1……8脈、I……VIII 八個ノ側室、

テ之レヲ行フヘシ、蝶ノ類ニハ時ニ依ルト一種ニシテ二様モ三様モ異リタル形状ヲ有スルモノアレバナリ、而シテ此レヲ知ルハ只ダ一ケ年ニ幾度モ續ケテ蝶ヲ養ヒ之レヨリ生スル所ノ蝶ヲ能ク比較シ見ルニ於テ明カナルモノナリ、又一種ノ蝶ガ二様モ三様モ異リタル形状ヲ呈スルモ單ニ變形ナリト思ヒ見過ス𪜈ハ別ニ面白キヿナシ然レ𪜈゙此異状ニ遇フニ於テ其原因ヲ尋子見レバ大ニ面白キヿヲ發見スルニ至ル可シ、余ガ師わいすまん氏ハ歐洲ニ於テ二形、三形ヲ呈スル蝶類ヲ研究シ學問上實ニ有益ナル事實ヲ發見セラレタリ、其要點ヲ掲グレバ即チ左ノ如シ、玆ニ一種ノ蝶アリ、此者ハ春ニ出ヅルモノト夏ニ出ヅルモノトアリテ二者大ヒニ異レリ、然レ𪜈゙春ニ出ルモノヽ卵ハ孵化シテ夏ノモノヲ生シ夏ノモノヽ卵ハ冬ヲ經テ春ニ出ヅ、而ルニ同氏ハ此二者ノ内孰レガ先祖ナルヤヲ知ラント欲シ種々實驗致サレ、春ノモノヽ産シタル卵ヲ寒室ニ入レ、夏ノモノヽ卵ヲ暖室ニ入レタルニ二者共ニ春ノモノヲ生ジタリ、餘リクドケレトモ春ニ羽化スルモノハ寒キ冬ヲ經過シテ來リタルモノニシテ其生ズル卵ハ通常ナレバ暖キ夏月ヲ經羽化シテ夏ノモノヲ生ズルナリ、故ニ若シ此二者ヲ生ジタルノ理ガ全ク氣候ノミニ關スルモノナレバ春ノモノヲ寒室ニ入ルレバ又春ノモノヲ生シ、夏ノモノヽ卵ヲ暖室ニ入ルレバ又夏ノモノヲ生ズ

其腹ヲ左右ニ動カスモノアリ、童幼ハ斯クノ如ク之ヲ指間ニ持チテ「西ハドッチ」ト問フナルヘシ、蛹蟲ヲ時々「西ハドッチ」ト稱スルハ或ハ之レ等ヨリ來リシ名ナラン、蛹蟲ハ日月ヲ經テ後成蟲トナル、是レ即チ蝶ト稱スルモノニシテ其口部ハ仔蟲ノ時ノ口部トハ大ヒニ異リ長キ管狀ヲナシ其食物モ從テ變シ木葉ノ如キ堅固ナルモノヲ嚙ムヿナク單ニ花蜜ヲ吸收シ、頭胸腹ノ三部ハ明白ニ區分シ、頭ニ一對ノ複眼、尖頭ノ太キ感觸肢及ヒ管狀ノ口部ヲ具ヘ、胸ニ二對ノ翅及ヒ三對ノ步肢ヲ具フ、各翅ハ上下共ニ鱗ヲ以テ蔽フ、其上面ニアルモノハ多ク下面ニアルモノニ比スレバ美麗ナリ、前ノ一對ヲ名ケテ前翅ト云ヒ後ノ一對ヲ後翅ト云フ、其ニ三緣アリ、其翅ノ付ケ根ヨリ翅端ニ達スルモノヲ前緣ト云ヒ之レニ反セル緣ヲ後緣ト云ヒ後緣ノ終リヨリ翅端ニ至ル緣ヲ外緣ト云フ、又前緣ノ尖端ト外緣トノ角ヲ前角ト云ヒ、外緣ト後緣トノ角ヲ內角ト云フ、翅上ハ脈狀ノ線ヲ以テ區畫サル、之レヲ總稱シテ翅脈ト云ヒ、其前緣ニ沿フテ走ルモノヲ胸脈ト云ヒ、之レヨリ內ニアルモノヲ下胸脈ト云フ、下胸脈ノ尖端ハ通常多ク分岐シテ翅端ニ至ル、次ニ位スルモノハ中脈ト云フ分レテ三枝脈トナリテ外緣ニ至リテ終ル、中脈ニ次ニ來ルモノヲ背脈ト名ク、

下胸脈ノ第三枝ト中脈ノ第一枝トノ間ニ一本ノ横行脈アリテ此ノ二脈ヲ結連シ其間ニ中室ヲ生ス、又横行脈ヨリ外緣ニ向フテ走ル脈アリ名ケテ間脈ト云フ其他脈間ニアル室ヲ翅ノ後緣ヨリ始メ番號ヲ以テ之レヲ數フ、即チ背脈ト後緣トノ間ニアルモノヲ第一室ト云ヒ之レニ次クモノヲ第二室ト云ヒ、第三、第四、第五等ト云フ、

腹部ノ環節ハ皆同樣ナル太サナルヿアリ或ハ又其始メノモノハ細キモノアリ、其全數ハ仔蟲ニ於ケルカ如ク九節アルモノナレ𪜈通常ハ單ニ六、七節アルノミ而シテ最後ノ節ハ雌蟲ニ於テハ產卵器トナリ雄蟲ニアリテハ交尾器トナル、

右ニ述ヘシ如クシテ蝶ヲ卵ヨリ養ヒテ羽化セシムルニ於テモ只タニ一ケ年中ニ一度ノミ之レヲナス、幾度モ續ケ

神經床ノ間ヲ經テ腦ノ下面ニ達セリ

第四十八項　モンロー氏孔ノ直上ニ於テ穹隆體ニ横斷ヲ施シ其深サヲ同孔ニ達セシメ次ニ此截口ノ中央ヨリ大海馬ノ連合部ヲ通シテ縱斷ヲ施シ是ニ於テ全ク分離セル半球ノ後部ヲ側方ニ押シ除ケ左ノ諸部ヲ撿スベシ

(三一四)海馬溝(Hippocampal sulcus)ハ顳顬葉ノ內面ニ於テ大海馬ノ突隆部ニ應ゼル一深溝ナリ

(三一五)中間埀(Velum interpositum)ハ連合セル脈絡叢ヨリ後方ニ擴カリ第三室ノ屋壁ヲ成セル薄弱ノ脈織膜ナリ

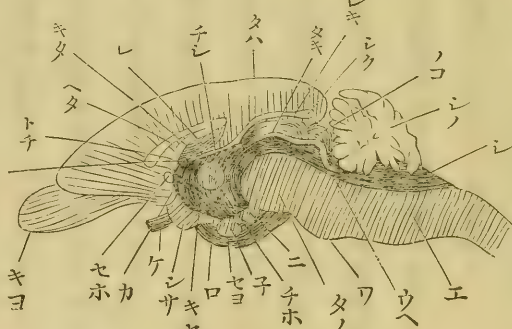
(三一六)視神經室(Optic tharami)(第十一圖シシ)ハ前面ニ於テハ半月紐ヲ保藏セル渠溝ニ由テ線狀體ヨリ分離セラレ背側ハ中間埀ニ由テ被覆セラレタル白色質ト灰白質トノ混合ヨリ成リタル大塊ナリ

(三一七)中間埀ヲ切除シテ第三室(Third ventricle)(全圖サ)ヲ露出スベシ該室ハ一個ノ中央縱溝ニシテ其前端ハモンロー氏孔ニ由リ側室ト交通セリ

(三一八)前縫(Anterior commissure)(セホ)ハ第三室ノ直前ニ於テ胼胝體ノ間ニ横亘セル白色纖維ノ一狹帶ナリ

(三一九)穹隆體ノ前柱(Anterior pillar of the fornix)(セチ)纖弱ナル一對ノ白色縱帶ニシテ前縫ノ直後ニ當リ下方ニ直行ス

第十二圖




(三二〇)中縫(Middle commissure)(チホ)ハ灰白質ノ一塊ニシテ視神經ノ背壁ト殆ント水平ニ兩室ノ間ニ移行シ上方ヨリ見下スレハ第三室ヲ殆ント充塞セリ

(三二一)各視神經室ノ後半部ノ上面ニ松脂腺脚(Peduncle of the pineal body)(シキ)ト名クル一小白帯アリ兩脚ハ

ルナルベシ、然ルニ夏ノモノヽ卵ヨリモ春ノモノヲ生シ、春ノモノヽ卵ヨリモ又春ノモノヽ生セリ、故ニわいすまん氏ハ此現象ヲ見テ春ノモノハ先祖ニシテ夏ノモノハ全ク氣候ノ變化ヨリ新タニ生セル者ナリト思考セラレタリ、我日本ノ蝶ニ就キ右ノ如キ實驗ヲ施サハ實ニ以テ面白キヿ山ノ如クナルベシ、余ハ次回ヨリ可成丈盡力シテ日本ノ蝶ノ名稱、仔蟲、蛹蟲等ノ記事ヲ試ミント欲ス

（以下次號）

## ●動物解剖手引草（承前）

岩川友太郎

第四十六項　他ノ半球ヲ同前ニ解剖シテ觀察ヲ反覆シ更ニ左ノ諸點ヲ撿スベシ

（三〇七）胼胝體ト腦ノ床底部トノ結合即チ前方ノ透明中隔及後方ノ大海馬連合部トノ結合ヲ撿スベシ

（三〇八）胼胝體ヲ横斷シテ其切離端ヲ床底部ヨリ分離シ其前端ノ少シク下曲シテ前節（Anterior genu）ヲ成セル狀ト後端ノ鋭ク下曲シテ後節（Posterior genu）ヲ成セル狀トヲ視ルベシ

（三〇九）胼胝體ヲ除去スレハ透明中隔ハ左右二枚ヨリ成リテ其間ニ高等哺乳類ノ第五室（Fifth ventricle）ニ應ゼル一室ノ存在スルヲ明視スベシ蓋シ此室ハ左右兩半球ノ間ニ成立セル間隙ノ一部タルニ過ギズ

第四十七項　顳顬葉ノ外部ヲ徐ニ切除シテ大海馬ノ進路ヲ探求シ以テ次ノ諸點ヲ觀察スベシ

（三一〇）顳顬葉ノ外壁ヲ除去スレハ側室ノ下角（Descending cornu）ハ露出シテ初メハ殆ント外方ニ直行シ續テ下方ニ向ヒ最後ニハ前内方ニ移行セリ而シテ大海馬ハ其内壁ニ沿フテ走行ス

（三一一）穹隆體ノ後柱（Posterior pillar of the fornix）（第十一圖コキ）ハ扁平ナル白條ニシテ大海馬ノ前緣ト成リ之ト結合シテ下角ニ移行シ前方ニ至リテハ透明中隔ノ直後ニ於テ對側ノ後柱ト結合シ以テ穹隆體ノ要部ヲ成セリ

（三一二）半月紐（Tœnia semicircularis）（全圖ハヒ）ハ後柱ノ直前ニ存スル白色質ノ纖條ニシテ脈絡叢ノ爲ニ床底狀ヲ成セリ

（三一三）ビシヤ氏裂口（Fissure of Bichât）ハ半月紐ト後柱ノ間ニ存スル裂口狀ノ間隙ニシテ顳顬葉ノ前内緣ト視

於テワロリ氏橋ト接續シ後脚ハ延髓ノ背側ニ結合セシム」

(三二九)活樹(Arbor vitas)ハ小腦ノ白色質ト灰白質トノ交錯ニ由テ其切斷面ニ出現スル樹枝狀ノ紋理ナリ

第五十項　第四室ヨリ沕須設尼氏瓣ノ下面ニ存スル孔ノ中ニ標毛ヲ挿シ込ミ視神經葉ヲ除去シテ標毛ノ上部ヨリ切開ヲ施シ以テ左ノ諸部ヲ露出セシムベシ

(三三〇)シルヴィ氏導管(Aqueduct of Sylvius)(第十二圖)ハ第三室ト第四室トノ間ニ位シ之ヲ互ニ連合セシムル所ノ狹小ナル溝道ニシテ上部ハ視神經葉ニ界シ下部ハ大腦脚ニ界セリ

第五十一項　第三室ノ三縫接チ切離シ視神經室ヲ徐カニ離シテ左ノ諸部ヲ撿スベシ

(三三一)漏斗(Infundibulum)(ロ)ハ第三室ノ下方ニ接續セル漏斗狀ノ腔洞ニシテ粘液膜ヲ除去スレハ腦ノ下面ニ存スル一小孔ニ由テ外部ニ開通ス(二八五ヲ參考セヨ)

(三三二)灰白板(Lamina cinerea)(カ)ハ第三室ノ前方ニ位セル薄キ縱壁ナリ

(三三三)視神經室ノ內面ヲ徐カニ搔擦シテ穹隆體前柱(Anterior pillar of the fornix)(キセ)ノ進路ヲ踪跡スベシ該柱ハモンロー氏孔ノ上チ迂回スルノ後下後方ニ移行シテ乳頭體ニ終止ス

第五十二項　他ノ頭腦ヲ取リ中央線ヨリ少シク側方ニ沿ヒ(例ヘハ左方)之ニ縱直切斷ヲ施シ其儘ニテ腦室、漏斗、胼胝體及第三室ノ諸縫接等ヲ撿スベシ

第五十三項　充分ニ硬化セル第三頭腦ヲ取リ之ニ連續橫斷ヲ施シ以テ既ニ剖見セル諸部ノ關係ヲ更ニ調査シ而シテ其橫斷チ施スベキ諸點ハ左ノ如シ

(一)胼胝體及透明中隔ノ前部
(二)前縫
(三)モンロー氏孔及視神經交叉
(四)中縫
(五)後縫及漏斗
(六)大腦尻及乳頭體
(七)腦罣、沕須設尼氏瓣及ワロリ氏橋

同室ノ後縁ニ於テ互ニ結合シ長サ大凡四分一「インチ」ナル扁帯ニ續キテ大腦半球ノ後縁ニ至リ脈質ノ一圓塊ヲ以テ終レリ是レ松脂腺ニシテ視神經葉ノ背面ニ安置セリ

(三二二)後縫(Posterior commissure)(コホ)ハ前縫ヨリモ稍々小サク松脂腺脚結合部ノ直下ニ於テ視神經室チ互ニ結合セル白色纎維ノ一小横帯ニシテ松脂腺ノ莖ヲ側方ニ押シ除ケハ初メテ露出ス

(三二三)視神經葉(Optic lobes)一名四疊體(Corpora quadrigemina) ハ大腦脚ノ直上ニ位セル二對ノ圓塊ニシテ外面ハ灰白質ヨリ成リ而シテ前方ハ視神經室ニ界シ後方ハ小腦ニ界セリ前方ノ一對ハ稍々大キク正楕圓形ニシテ之チ大腦尻(Nates)(タキ)トイヒ後方ノ一對ハ之ヲ腦睪(Testes)(ノコ)ト稱シ横長ニシテ前者ヨリモ少シク低面ニ位セリ

(三二四)一方ノ顳顬葉ヲ全ク除去スレハ視神經幹(Optic tract)(シカ)ハ視神經交叉ヨリ視神經室ノ前外角ヲ迂回シテ大腦尻ニ向ヒ後内方ニ移行スルノ狀ヲ明視スルヲ得ベシ

(三二五)膝狀體(Corpus geniculatum)(シタ)ハ視神經幹ノ直後ニ當リ視神經室ノ外面ニ存スル一ノ圓小突起ナリ

第四十九項　小腦ノ中央部ヲ全ク除去シ側面ニ於テ延髓ト結合セル部分ノミヲ殘シ以テ次ノ諸點ヲ檢セヨ

(三二六)第四室(Fourth ventricle)(シ)ハ扁平ナル菱形ノ腔洞ニシテ側面ハ延髓ノ背柱ニ由テ圍マレ上側ハ小腦及軟腦膜ヲ以テ被覆セラレ床底ニハ一條ノ縦溝アリテ其後端ハ脊髓ノ中心溝ト連絡セル一鋭窩ニ終レリ此窩ヲ寫翮(Calamus scriptorius)ト稱ス

(三二七)沕須設尼氏瓣(Valvula Vieusseni)(ウヘ)ハ第四室ノ前端ニ横ハレル横帯ニシテ其前縁ハ腦睪ト結合シ其上面ヨリ第四腦神經ヲ發出セリ其下ニ存スル一小孔ハシルヴィ氏導管(三三〇)ニ連續セリ

(三二八)小腦ノ前、後、中三脚(Anterior, セキ Middle, & Posterior シコ Peduncles)ノ中前脚ハ小腦ヲ腦睪ト結合セシメ以テ側面ハ沕須設尼氏瓣ニ界シ中脚ハ左右各側ニ

る事を得るなり之を行ふにも新聞廢紙成るべく白紙を廣げ樹皮蘚苔落葉砂土等を該紙上に載せ少しつゝ動して注視すれバ微小の六足蟲ハ運動を始むるを以て容易に捕獲し得るなり此際グラス小瓶幷にグラス小管を用意して其內に容るべし此採集法は極めて小形の六足蟲を得るものなれば是非共蟲目鏡を携帶すべし

以上の法を以て採集せば夥多の六足蟲を各の形狀に於て發見する事を得べし是れ冬季に於て如何なる種は如何なる形狀にて如何なる場所に經過するやを研究するは學術上幷に實業上最も愉快にして最も必要の件なれば余は不學を顧みず聊其理由を左に記さん

實業上冬季害蟲の經過を知るときは容易に驅除する事を得るの利あり例へバウメケムシは前にも記す通り樹枝にドンガテの有樣をなして薔薇科植物稀にハ楊柳に附着し居る卵子を冬季落葉の際に取り盡せバ春季一も害を受くる事なし又イナゴの如きも土中に產卵するものなれバ冬季土壤を耕鋤して凍殺せしめ又落葉間に潛伏する者は悉く是を集めて燒却する等其性質と場合に從て便法を行ふ事を得るは全く冬季採集の結果と云ざるを得ず今尚其卑近なる一例を示せバ玆に一農夫あり本年は氣候不順爲に害蟲發生せしも氣候本順に復すれハ自ら消滅せんと稱へ少も驅除豫防に注意せざるも是れ決して偶然に害蟲の塵芥等より生ずるものにあらず只氣候如何に由りて害蟲の發生を助くる迄にて其原因即ち最初より卵子のあらざるはなし其卵子あればこそ親蟲生ずるなりたとへは蠶卵紙を求め初めて蠶兒あり蠶兒ありて繭を造り其內に於て蛹となり後化して蛾となる此の蛾ありてこそ初めの蠶卵紙に皈るも一般普通の順序なり當時誰ありてろ蠶卵紙を求めずして蠶兒を養ふ者あるか此一例を見ても偶然に害蟲の發生せざる事ハ自ら明了ならん尙是れ等の疑ひを解くにハ冬季に於て此害蟲も彼の場所に斯の如き有樣にて經過すれは必ず春暖を俟て再び發生する趣きを示せは直に了解せしむる事を得るなり又害蟲發生の原因を知らざるより神に祈りて御札を田中に建てゝ安心する者あり或は

（八）肺胃神經垂及延髓ノ後部

第十二圖ノ解　（キク）穹隆體（レ）大海馬ノ連合部（チシ）中間垂（シノ）小腦（ヱ）延髓（ワ）ワロリ氏橋（タノ）大腦脚（ニ）乳頭體（チホ）中縫（テ）粘液腺（セヨ）顳顬葉（ロ）漏斗（キセ）穹隆體前柱（シサ）視神經交叉（ケ）視神經（カ）灰白板其他ノ符合ハ十一圖ニ均シ

（完尾）

## ●冬季六足蟲採集の必要

名和靖

六足蟲を採集するには春夏秋の三季最も便利なれども冬季も亦充分に注意して採集せば實に愉快の事多し而て春夏秋の三季は氣候温暖にして六足蟲發生の時期なれば容易に人目に觸るゝを以て注意する人多けれども冬季は寒冷の爲或は卵或は幼蟲或ハ蛹或は親蟲の有樣にて或は土中或は落葉或は石礫或は樹皮等の間に於て必ず經過するも常に人目に觸れざるより多くの人ハ此季に於て六足蟲の全く消滅するものゝ如く感ずる事あり然らざるも少數にして殆んど採集に効なしと考ふる者あり今余の採集したる結果を記すに幼蟲の塲合に於てマツケムシの如きは松樹の皮間に潜伏するものありクワノシヤクトリムシの如きハ桑樹に附着して枯枝狀を爲すものありクワノカミキリムシの如きは桑樹幹内に又多くのコガチムシハ土中に經過せり蛹の塲合に於てハタバコノアオムシの如き土中に入る者ありアゲハノテフの如きハ糸にて其体を纏ひ樹枝に懸る者あり月蛾の如きハ繭中にて枝上に經過する者あり親蟲の塲合に於てはモンキテフの如き樹葉の間に棲息する者あり各種の椿象の如きは草間に又ゴミムシの如きハ石礫間に居る者あり多くの小形甲蟲ハ樹皮間に經過する者あり卵の塲合に於てウメケムシの如きは樹枝にドンガチの有樣に附着する者ありイナゴの如きは土中に埋藏して冬季を經過する等是なり

之を採集するにも山林原野に於て或は樹皮を剝ぎ或は蘚苔落葉を去り或は石礫を起し或ハ土壤を穿ち或ハ樹枝莖幹等の外面を精密に注視せば意外に多數の奇種を採集す

けるが如く左右同しからすして且種々異樣なる彩色を有するとあらは、原野中にありて數多の相類似せる種屬中ゝ其友を認識すると容易ならざる可けれバなり。新種の出來たる時其第一に緊用なる諸點の一は、其最も類似せる種より之を識別し得る事なる可し、而してそは或る外部の見易き所に彩色の差異を生するとこそ最も手近き方法なる可し、是れ特に鳥類六足蟲類等に普通なる彩色斑文の驚く可き差異を生せし源因なる可し。二三の實例は自然界に於て此理如何を説明するに足る可し。

予の此事ゝ氣付きしはダーウィン氏の左の記事ゝよるなり。

山兎の其毛色の爲に容易に草間ゝ隱匿し得る事ハ、人々の能く知る所なるが、其近種なる家兎ゝありては然るとと能ハざるなり、何となれバ其急ぎて穴の方に走る時ゝ當り、白色の尾を反轉するを以て、獵夫にも又疑もなく肉食獸にも反て目たつものなれバなり。

然れども其慣性を考察せば此の反轉せる白色の尾ハ非常に須用の者にして、實に The Field 著者の言ひし如く「危險の表旗」たるを知る可し。此種ハ通常夕刻後に穴を出て、日沒後或は月夜に食を求る者なれば、若し危險の事に遭遇し其居穴の方に逃げ行くに當り、前に在る者の反轉せる白尾は、後方の猶は遠くに出てをるもの、或は幼き者等の爲めに指導表旗となり、以て二三前者の所爲に隨行し、忽ちにして安全の地に到るを得可し、故に一見危險なるが如き彩色も其實反て之を避け安全を得るの道たるを知る可し。

數多の群棲草食獸ゝして全体より言へバ保護色を有する者も、種々の奇ゝして顯明なる斑文を存するあり、こも亦此原理を以て説明するを得可し。例は亞米利加のProng buck (Antilocapra furcifera)は後方に白斑ありて口喙黑色なり、タルタリー羚羊、亞細亞のOvis poliジャバの野羊、鹿類の數種、羚羊類の數多も亦同しく後方に目立つ白色の斑文を有し、稍暗黑なる体色と相對し顯明なれバ、其友遠く離れ居るも能く之を見之に從ひ行くを得可し。

余の實驗する所に依れば去る明治十八年八月某日美濃國武儀郡州原神社境内の土を掘り袋に納る者あり親しく尋るに愛知縣人にして本年は害蟲の發生したれは此土を持ち皈り田中に散布せは害蟲自ら消滅せんと答へし事あり是れ學理に乏き者は其原因を知らざるより大なる損害を招く事あり以上は多く農家の間に行るゝ説なれども抱腹絶倒に堪へざるは往々中等以上の人にして害蟲の偶然發生する樣に思ひ居る事にて實に殘念極まると歎息するのみなり

## ●動物彩色の起源及び其効用（六八頁の續き）

宍戸一郎

### 認識の用を爲す彩色

過半の草食獸、或る種の肉食獸、夥多の鳥類等に於けるか如く多少群栖する動物の慣性と發育の歴史とを考察せは其遠距離にありたる時或は半は遮蔽せられ全體の見へざる時等に當り、同種の動物を容易に認識し得るの方法あられ非常の便益を得へく、又屢々不慮の難を逃るゝとある可し。此の如く群を爲し居る動物と通常他種の其群中に混ずるを許さす。而して其相叢聚し居る間は一般に他の侵撃を受くるとなしと雖も、若し散逸し孤獨となりたる時は敵手の中に落ると容易なる者とす。故にかゝる時に當りては遨遊せし者も其限界の中にありては遠方より判然其友を識別し得るの方法を有すると非常に肝要なるべし。

容易に相認識し得る或る方法は各群中の幼者にして未た充分經驗のなき者には殊に生存上缺く可からさるとなりとす。而して又雌雄其匹偶を識り受胎し能はざる如き交尾を爲すの害を避く可きなり。予は信す、此の須用なる事件は總て他の源因よりも複雜數樣なる動物彩色を發達せしむるに大なる影響を及せしを。自然に生存せる動物に在りては其彩色殆と普く左右相同しと雖も、人類の豢養せる者に在りては數々然らさるとあるを見る、此も恐くは同源因に歸依するなるべし。何となれは畜養動物に於

と胸部に白斑（認識色）あり。Wood's Natural History其他圖書を掲けたる書籍よつきて羚羊其他の獸類の圖を一覽せは、只に記述と通讀せんより實意のある所を容易に想見す可きなり。

麝羊（譯義）馴鹿等の暗黒色なるも亦此種の彩色の例なる可し。此等の動物は積雪の中にありて害敵多からされは遠くより互よ識認し得ると甚た必用にして、隱匿を要すると少し。マダラムマや此に類する Asinus quagga 等の目立つ線紋、或る猿類の顏面よ存する模樣等も、亦恐くは同理によるものなり。

（ツヾク）

## ●普通動物學講義第貳拾壹（附圖第三版）

第八章　　箕作佳吉述

（第五門蠕蟲　第一綱扁蟲類ノ續キ）

### 第二目　吸蟲（すひむし） Trematoda.

吸蟲ハ總テ寄生蟲ニシテ他ノ水陸產動物ノ內部或外部ニ附着シテ生計ヲ營ムナリ中ニハ我々人類ヲモ害スル恐ルベキ種類アリ又一時ニ夥多ノ家畜獸ヲ斃シテ大ニ牧畜事業ヲ害スルモノアリ醫學上、衛生上、經濟上我々人類ニ容易ナラザル關係ヲ有スル動物ナリ

吸蟲ハ其大サ顯微鏡的ノ者ヨリ一二寸程ノ間ニアリ其形狀ハ概ネ皆ナ平扁ニシテ多少楕圓ナル形ヲ有シ恰モ木葉ノ如シ其一面ハ背面ニシテ今一面ハ腹面ナリ体ニ關節アルヿナシ又生長シタル者ニテハ外面ニ顫毛ヲ有スルヿナシ

吸蟲ハ概ネ宿主（ヤド）ノ体ニ附着スルノ用ニ供スル器官ヲ有ス卽チ吸盤及ヒ鉤ノ類ナリ（諸圖ヲ見ヨ）宿主ノ（肝、肺ノ如キ）內部器官ニ寄生スルモノハ落チ離ルヽノ恐少キヲ以テ附着器ハ左程ニ發達セズ唯ニ吸盤ノミヲ備フ之ニ反シテ外部（魚ノ鰓ノ如キ）ニ寄生スルモノハ落チ離ルヽノ恐多ケレバ自然附着器ノ發達モ盛ニシテ吸盤ノ如キモ其數多ク之レニ加フルニ鉤モアリテ其附着ヲ堅固ナラシム（第五圖）

內部寄生蟲（Endoparasite）ハ概子腹面ノ前端ニ稍小ナル吸盤ヲ有ス（第一、二、三、五、八圖）口孔ハ其中心ニアリ

殆と同大同形の者數種同一の地方に棲息する時ハ、――例は亞弗利加の羚羊の如き――前に記せし者の如く互に相識別すへき種々の斑文を見る可し。Gazzelle よハ臀部と腹部に白色の所ありて面部に種々の腺條あり。Spring-buck(Antilope Euchore)には面部と側面よ各一ヶ所の白斑あり尾上にも亦奇よして特異なる白條を有す、然れとも其安靜に爲し居る時は皮膚の褶襞殆と之を覆ひ隱すを以て其移動する時に非されは判然之を認むる能はす、此れ兎の反轉せる白尾と全く其作用を同す。Pallah にては白き臂斑に黒き縁あり且、其角は一種奇異の形狀を爲すを以て前方より見るも直よ識別し得へし。Sable-antelope, Gems-bok, Oryx, Hartbeest, Bonte-bok, Addax 等各特異の白斑を有し加之各種固有にして甚た目立つ形狀の角を存するを見れハ、其長さ、捩れ方、曲り方等の相異なるは相互に其同類を認識するか爲め特化したる者よして、此種の慣性より考ふるも、防禦法の異なるか爲に發達せし者にはあらさる可し。

玆よ附記せさる可らさる肝要の事あり、則ち此等の認識用の斑文は森林濕澤の內に住する羚羊類にハ能く發育し居らさると是なり。例ハ樹木鬱葱たる山地よ住するGrys-bok は長き耳の尖端に黒き所あるのみにして他ハ殆と平等の彩色を有す。Duyker-bok 及び Rhoode-bok ハ注意して樹林の中をあさる者なるか、極て小さき白斑の後部に存するのみにして他よ斑文あるとなし。森林中よ棲息する Booch-bok は雌雄相伴ふものよして、全體暗き栗色を爲し一も特異なる斑點あるとなし、其雌雄相異なる所ハ只雄の角を有するにあるのみ。巨大にして美麗なる Koo-doo ハ叢樹間を來往し全體縱の白條を有す、之れ疑もなく保護色にして、其認識の用をなすは其巨大なる螺線狀の角にありとす。Eland ハ平地に住し其體巨大にして形狀辨別し安きを以て彩色は全體一樣なり、然れとも Der-byan eland ハ林中に棲息するを以て保護の爲め條紋を有す。又可憐なる Specke's antelope は終始沼地の蘆中に生活する者よして、體側よ蒼白色の横線、(保護色)顏面

りナリ其形狀ハ種々アレモ大同小異ナレバ玆ニハ綿羊肝臓ぢすとま(肝蛭 D. hepaticum)ヲ記スベシ(第三圖)先ツ雌性生殖器ヨリ始レバ體ノ中央ニ体ノ後ノ半分以上ヲ充タス大ナル一對ノ樹形器官(h)アリ是卽チ睪丸ナリ各睪丸ヨリ一ノ輸精官(i)出デテ前部ニ走リ第二吸盤ノ邊ニテ兩側ノ管相合シ一ノ稍太キ管トナリ(k)ニ至リテ外界ニ開ク此外口ニ近キ管ノ部ハ外界ニ突キ出スヲ得蓋シ交尾器(陰莖)トシテ作用スルモノナリ雌性生殖器ハ渦蟲ニ於テノ如ク卵巢ト卵黃巢トノ別アリ卵巢(e)ハ體ノ中半ヨリ前ニアル不對ノ樹形器ニシテ睪丸ヨリハ甚ダ小ナリ是原形質ノ卵ヲ生スル所ナリ卵黃巢(c)ハ體ノ兩側ニ非常ニ大ナル一對ノ腺ナリ寧ロ無數ノ腺ノ結合ト云フ方可ナリ此腺ノ分泌スル營養分ハ漸々ト大ニナル管ニヨリテ集マリ遂ニ(d)(d)ナル横管ニヨリテ兩側ノモノ體ノ中央線ニテ相合ス相合シタル共同管ハ前ニ向ヒテ進ミ卵巢ヨリノ輸卵管ト合ス此遭合ノ所ニ一ノ腺(f)アリ殼腺ト云フ蓋シ卵巢ヨリ出來リタル卵ハ卵黃巢ヨリ來ル養分ト合シタル後ニ殼腺ノ分泌スル殼ニ圍繞サレ完全ナル卵トナリテ子宮(g)ニ入ルナルベシ尤モ殼ヲ受クル前ニ受精スルナルベシ精蟲ハ何處ヨリ入リ來ルヤ明ナラザレモ卵黃共同管ヨリ一ノ小枝アリテ背面ニ至リ外界ニ開ク管アリ Laurer's Canal ト云或學者ハ精蟲ノ入リ來ル途トナス此管一部膨張シテ受精嚢トナル(第八圖リ)子宮(g)ハ非常ニ迂廻スル稍太キ管ナリ通常多數ノ卵ヲ含有スル爲メ暗黑色ヲ帶ルヲ以テ直ニ之ヲ知ルベシ子宮ハ遂ニ雄生殖器ト同所(k)ニ開ク」外部寄生蟲ノ生殖器ハ其上ニ記シタルぢすとまト餘程異ナル所アリ例ヘバ精蟲ノ入リ來ル處ハ體ノ各側ニ一個ヅヽアルガ如シ(第五圖g)

發生ハ卵ヨリ漸々ト生長シ直ニ成蟲トナル者アリ(外部寄生蟲)或ハ甚タ複雜ナル世代ノ変代ヲ經テ漸クニ成蟲ニ發達スル者アリ(内部寄生蟲)是ハ甚タ面白キ點ナレバ今少ク說明スベシ元來内臓ニ寄生スル動物ハ其發達シテ成長ニ至ルマデニハ其宿主ヲ二度乃至數度變スル者多トス故ニ中間ノ宿主ト最後ノ宿主トヲ區別スベシ中間ノ宿

附着器ハ唯此一吸盤ノミナルモノ(Monostomum)アレ圧多クハ第二ノ吸盤ヲ備フ而シテ其位置ハ腹面ニシテ多少口盤ニ近キモノ(Distomum 第一、二、三、八圖)アリ或ハ体ノ後端ニアルモノ(Amphistomum)アリ」外部寄生吸蟲(Ectoparasite)ハ吸盤ノ數多キヲ以テ Polystomeæ ト稱スルヿアリ

体ノ皮膚下ニハ環形筋卽チ横筋ノ外層及ヒ縦筋ノ内層アリテ体ノ伸縮ヲ司ル又別ニ背面ヨリ腹面ニ達スル斜ノ筋纖維アリ」渦蟲ト同シク体腔ト稱スベキモノナリ体内ハ組織諸系統ヲ充滿ス

口孔ハ概子体ノ前端ニアリ通常前吸盤ノ中心ニアリ(第一圖)口孔ノ内ニ喉頭(Parynx)アリ其ノ壁ニ筋肉纖維多ク發達ス喉頭ニ次キテ短キ食道アリ食道ヨリ後ニハ腸アリ二枝(c)ニ枝分シ体ノ兩側ヲ沿フテ後ニ走ル此二枝ハ全一ニ發達セザルヿモアリ或ハ其外側ヨリ多數ノ樹形ノ枝ヲ枝出スルヿアリ(肝蛭Distomum hepaticum 第三版第二圖 i、d、)或ハ二枝後端ニ至リテ互ニ相連絡スルヿアリ(Distomum hæmatobium ノ雌)或ハ後端ニ達セザル前ニ數個ノ横管アリテ相結フヿアリ(Polystomum 第五圖)肛門ハ一切ナク口孔ガ其用ヲ兼ヌルモノナリ

神經系統ハ喉頭ノ背面ニアル一對ノ神經節アリ(第二圖 cg・)之ヨリ〆數本ノ神經ヲ前後ニ枝出ス中ニ就キ一對ノ大ナル神經(n)後方ニ向ヒテ走リ數々小神經ヲ枝出ス」幼蟲及ヒ外部寄生蟲ニハ体ノ背面前部ニ一個乃至數個ノ單ナル眼アリ

排泄系統ハ渦蟲ノ排泄系統ニヨク似タリ體中ニ數多ノ有顫毛排泄細胞(第一版第三圖)アリ體中ノ液ヨリ排泄物ヲ分泌ス是ヨリ出ル毛細管ハ相合シテ漸々大ナル管トナリ遂ニ體ノ各側ニ於テ一ノ大ナル管(第一圖d)トナル兩側ノ大管ハ稍迂回ナル途ヲ取リ後端ニ至リ相合シテ一ノ胞(c)ニ開キ是ヨリシテ外界ニ開ク」或ル塲合(Distomum hepaticum)ニ於テハ後端ノ胞(c)非常ニ延長シテ體ノ前端近クニ達ス數多ノ排泄管直ニ此胞ニ開クヿアリ

生殖器ハ非常ニ複雜ニシテ唯一種ヲ除クノ外ハ皆ふたな

達シテ第二代ノれぢやトナルヿアリ然レ𪜈れぢやハ早晩 Cercaria（さるかりや）ヲ生ス（第四圖戊c、及ヒ己）せるかりやノ吸盤及ヒ腸ハ生長シタルぢすとまニ全シ第二代れぢや及ヒせるかりやハ共ニれぢやノ體側ニアル小孔（戊b）ヲ經テ外ニ出ヅせるかりやハ遂ニ宿主ノりむにやヲ出デ其尾ヲ以テ水中ヲ游泳ス暫時ニシテ其吸盤ヲ以テ草ノ葉等ニ附着シ尾ヲ失ヒ白色角質ノ被嚢ヲ作リ其中ニ蟄居シテ好機ノ至ルヲ待ツ綿羊來リテ不幸ニモ其草葉ヲ食スル時ハせるかりやハ今ヤ時來レリト動キテ肝管ニ溯リ此處ニテ成熟シ生殖器モ發達シテ卵ヲ生ムニ至ル此複雜ナル經過ヲ約言スレバ

第一代
- 一、卵　孚化スレバ
- 二、有纈毛幼蟲　トナリりむにやニ入リテ變レバ
- 三、すぽろしすと　トナリ體中ノ細胞發達シテ

第二代
- 四、れぢや　トナル是ハ第二代ノれぢやヲ生スルカ或ハ直ニ
- 五、せるかりや　トナル是ハ綿羊ノ肝臟ニ入リテ

第三代
- 六、成蟲　トナル

此場合ニ於テハ中間宿主ハりむにや最後ノ宿主ハ綿羊ナリ

吸蟲ヲ分類スルヿ左ノ如シ

第一亞目 **Polystomea** 外部寄生吸蟲　發生ハ直達、附着器多ク發達ス多ク魚等ノ外部ニ寄生ス

FAM. TRISTOMIDÆ 口ノ左右ニ吸盤二個尾端ニ大ナル吸盤一個、海水魚ノ皮上又ハ鰓ニ寄生ス

*Tristoma, Calicotyle.* etc.

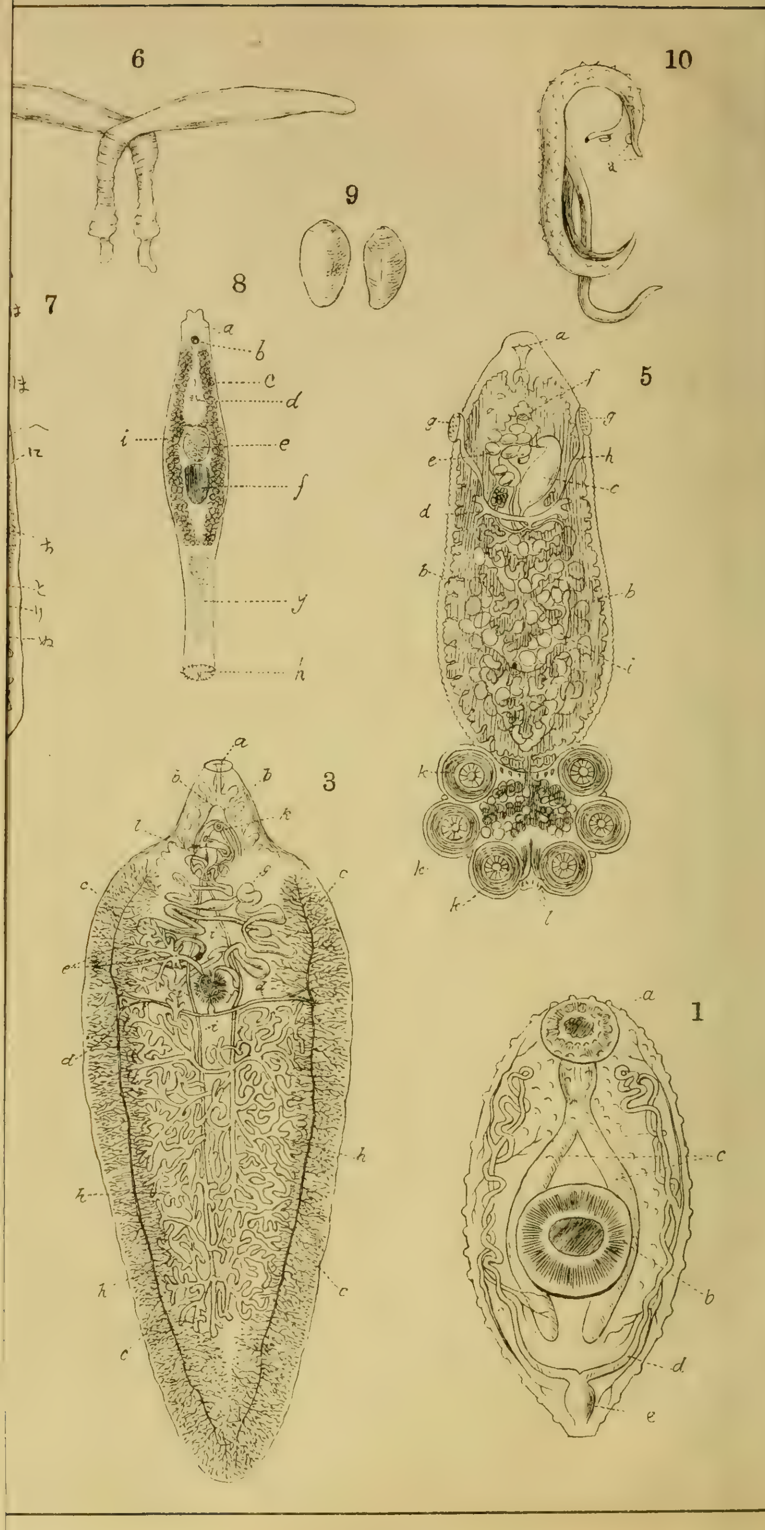
FAM. POLYSTOMIDÆ 體ノ尾端ニ數個ノ吸盤アリ又數個ノ鉤ヲ備フ魚ノ體面、蛙ノ膀胱、龜ノ口腔等ニ寄生ス

*Polystomum*（P. integerrimum, *Rud.* 第五圖蛙ノ膀胱 P. ocellatum 龜ノ喉頭）*Onchocotyle, Octobothrium.*

*Diplozoon*（第六圖）ふたごむし淡水魚ノ鰓ニ寄生ス是ハ實ニ奇ナル動物ニシテ幼時ハ別々ニ生活スル Diporpa ト稱スル吸蟲ガ二個ヅヽ×字形ニ結ビ付キテ成ルモノナリ D. paradoxum, *Nordm.* 歐洲產淡水魚ノ鰓ニ寄生ス

圭ハ唯生長スル際ニ居ルモノニメ最後ノ宿主ニ至リ初テ成熟スルモノナリ而メ寄生蟲ハ如何ニシテ中間宿主ヨリ最後ノ宿主ニ移轉スルヤト云フニ概子自己ノ働ニヨラズ中間宿主ト最後宿主トノ關係ニヨリ移轉スルモノナリ例ヘバ猫ヲ以テ最後宿主トスルモノハ鼠ヲ以テ中間宿主トナス故ニ自ラニ移ラズトモ中間宿主ナル鼠ノ體中ニ蟄居シテ待チ居ラバ長キ月日ニハ其鼠ハ猫ノ爲ニ食ハルベシ然ル時ハ鼠ノ體中ニアリシ幼キ寄生蟲ハ己ノ時至レリト此度ハ猫ノ體中ニ寄生シテ遂ニ成熟ニ至ル其他水禽ヲ最後ノ宿主トスルモノハ水禽カ食スル介類（田螺等）ヲ中間宿主トナスヿアリ以上ハ寄生蟲ニシテ間接發生或ハ世代交代ヲナスモノノ概則ナルガ内部寄生吸蟲モ此概則ニ反カズ中ニハ甚タ複雜ナル經過ヲナスモノナリ今綿羊肝臟寄生吸蟲肝蛭（D. hepaticum）ノ例ヲ取リテ之ヲ說明セン」

此蟲ノ成熟シタルモノハ無數綿羊ノ肝臟ニ寄生シ綿羊ヲ斃スヿ夥シク一流行期ニ數百万ニ及ブヿアリ肝臟ニ寄生スル蟲ハ一個每ニ凡ソ三万七千ノ卵ヲ生スト云フ此無數ノ卵（第四圖甲）ハ肝管ヲ經テ綿羊ノ腸ニ入リ其糞ト共ニ外界ニ出ヅ卵ハ極メテ小ナルヲ以テ風ノ爲ニ飛散セラルヿ容易ナリ此等ノ卵ニシテ幸ニ水中ニ入リタルモノハ孵化シ卵ノ上端ナル蓋開キテ幼蟲（乙）ハ外ニ出ヅ幼蟲ハ其體ノ前部ニ一對ノ眼ヲ有シ前端ニアル小突起ノ外ハ盡ク顫毛ヲ生シ自由ニ水中ヲ徘徊ス然レドモ何時マデモ此ノ如クニ爲スモノニ非ズ其遊泳ノ際有肺單殼類ノ一種（Limnæa truncatula）ニ遇スレバ其前端ノ小突起ヲ以テ體内ニ侵入シ此軟體動物ノ呼吸室（或ハ体腔）中ニ寄宿ス然ル時ハ幼蟲ハ顫毛ヲ失ヒ一ノ袋ノ如キ體トナル（第四圖丙）之ヲ Sporocyst（すぽろしすと）ト云フすぽろえすとノ袋内ニハ多ノ細胞アリすぽろえすとガ漸々大トナルニ從ヒ（丁）其中ノ細胞ハ發達シテ第二代幼蟲數個トナル此二代ノ幼蟲ヲ Redia（れぢや）ト云フれぢや充分ニ發達シタル時ハすぽろえすとノ體壁ヲ破リテ外ニ出デ宿主ナル軟体動物ノ組織内ニ侵入シ肝臟ノ如キ稍同形ノ器官内ニ入ルれぢやハ口孔、喉頭及ビ簡單ナル胃（戌ｓ）ヲ有スれぢやノ體内ニアル細胞ノ塊ハ發


6
10
9
8
7
5
3
1

近頃理學士五島清太郎氏本邦ふなノ鰓ニ寄生スル一種ノ Diplozoon ヲ發見シ之ヲ D. nipponicum ト命名シタリ第六圖ハ即チ同氏ノ好意ニヨリ此處ニ出スモノナリ尙委キハ帝國大學紀要理科第四卷ノ一五島氏ノ論文ヲ見ルベシ

FAM. GYRODACTYLIDÆ 尾端ハ圓盤狀ヲナシ許多ノ鈎ヲ備フ特別ナル吸盤ヲ見ズ魚類ノ鰓鰭ニ寄生スル小ナル蟲ナリ

*Dactylogyrus* (第七圖ハをやきノ鰓ニ寄生スル一種ナリ五島學士ノ好意ニヨリテ此處ニ出ス)

*Gyrodactylus.* 同ジク魚ノ鰓ニ寄生ス

第二亞目 **Distomeæ** 內部寄生吸蟲　吸盤二個ヨリ多カラズ發生ハ直達ナラズシテ世代ノ交代アリ

FAM. MONOSTOMIDÆ 口吸盤ノ一個ヲ有スルノミ主トシテ鳥類ニ寄生ス

*Monostomum.* M. mutabile, Zeder 水禽ノ體腔及ビ眼球內ニ寄生ス M. flavum, Mehlis 水禽中ニ、幼蟲ハ Planorbis ト稱スル有肺軟體動物ニアリ M. lentis, Nordm. 幼蟲ハ人類眼球中ノ結晶體中ニ寄生ス

FAM. DISTOMIDÆ. 吸盤二個後吸盤多少前吸盤ニ近シ脊椎動物ノ腸肝等ニ寄生ス

*Distomum.* D. hepaticum, L. 肝蛭 (第二、三、四、圖) 綿羊ノ肝臟ニ住ス D. crassum, Busk. 東洋人ノ腸內ニ寄生ス D. spathulatum. Lkt. (=D. endemicum, Bälz 第八圖) 東洋人ノ肝臟ニ住シ恐ルベキ病ヲ生ズ岡山縣下及ビ宮城縣下ニ最モ盛ナリ中間宿主ハ未ダ明ナラズ家猫ノ肝臟中ニモ產ス D. pulmonale, Bälz (=D. Ringeri, Cobb. 第九圖) 東洋人ノ肺臟ニ寄生シテ恐ルベキ病ヲ起ス D. hæmatobium, Bilh. (第十圖) 吸蟲中雌雄ヲ區別スル唯一種ナリ雌蟲ハ細クシテ圓筒形ナリ雄ノ腹ニアル溝中ニ包マレテ共ニ生活スあびしにやニ於テ人類ノ門靜脈、腸及ビ膀胱ノ靜脈ニ寄生シ血液ヲ食シ又血尿ヲ起ス

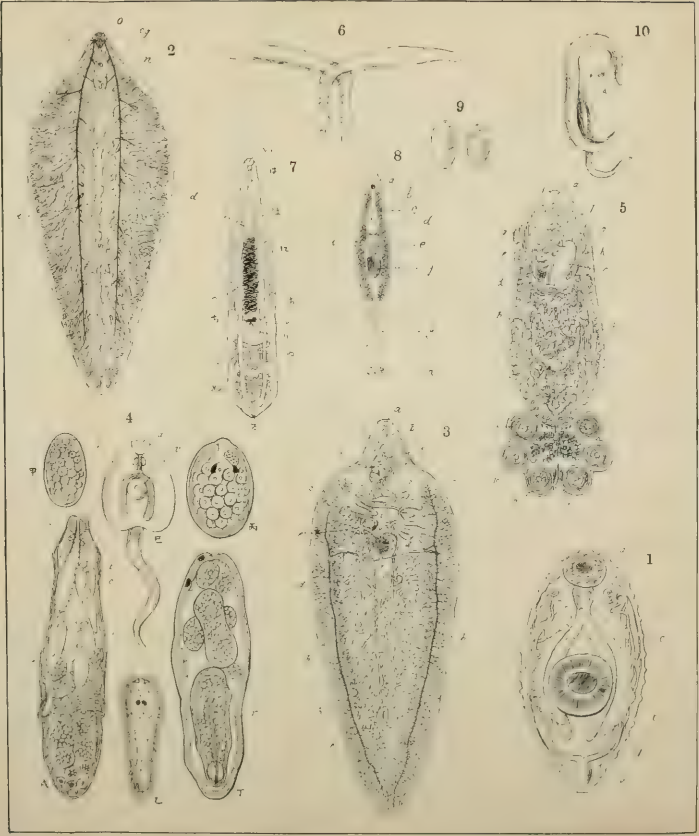
(吸蟲ニ就キ尙ホ委キハ飯島魁氏著人體寄生動物編ヲ參

考スベシ）

## 第貳版圖解　諸書ヨリ引用ス

1. ぢすとま幼蟲（郭大シタルモノ）
   a前吸盤口孔ヲ圍繞ス、b後吸盤腸、cノ二枝、d排泄系統ノ重ナル管、e排泄胞、
2. Distomum hepaticum ノ消化及ヒ神經系統（郭大シタルモノ）
   o口孔及前吸盤、cg神經節、n神經、s後吸盤、g生殖孔、i腸、d腸ノ樹形枝
3. 仝上ノ生殖系統　$^{4}/_{1}$
   a口孔及前吸盤　b腸ノ両枝、c卵黄巢、d卵黄管、e卵巢、f殼腺、g子宮、h睪丸、i輸精管、k生殖孔、l後吸盤、
4. Distomum hepaticum ノ發生
   甲卵、上部ニ蓋アリ、乙有顫毛幼蟲、丙すぽろしすと(Sporocyst)ノ幼キモノ、丁すぽろしすとノ成熟シタルモノrれぢや、戊れぢや(Redia)ノ生長シタルモノせるかりや二個(c c)第二代れぢや一個(r)及ヒ多ノ細胞塊ヲ含有スs腹、己せるかりや(Cercaria) a前吸盤、i腸ノ兩技、v後吸盤
5. Polystomum integerrimum *Rud.*　$^{15}/_{1}$
   a口孔、b腸、c卵巢、d卵黄管、e子宮、f生殖孔、g交尾孔、i睪丸、k吸盤、l鉤
6. Diplozoon nipponicum, *Gotô*
   五嶋清太郎氏ノ好意ニヨリ此處ニ出ス
7. Distomum spathulatum, Lkt. 肝臟ヂストマ　$^{6}/_{1}$
   飯嶋氏教科書ヨリ引用ス
   い口孔及前吸盤、ろ後吸盤、は食道、に腸、ほ生殖孔、へ子宮、と卵巢、ち卵黄巢、り受精囊、ぬ睪丸、る排泄孔
8. スバキノ鰓ニ附着スル Dactylogyrus　$^{16}/_{1}$
   五嶋清太郎氏ノ好意ニヨリ此處ニ出ス
   a眼、b喉頭、c陰莖、d殼腺、e卵巢、f睪丸、g腺、h鉤、i卵黄巢、
9. Distomum pulmonale, Bälz 自然大
   甲腹面ヨリ、乙横面ヨリ
10. Distmum hæmatobium. Bilh.　$^{4}/_{1}$
   a吸盤

第三版



此ノ疑問ニ關係アル問題ハ單細胞動物ヨリ多細胞動物ノ起リト云フカ如キ定マリアル例ヲ以テ之レヲ答ヘント欲スルトキハ明カニ之レヲ解スルヿヲ得ルモノナリ、而シテ多細胞動物カ單細胞動物ヨリ起リ來リシト云フヿハ實ニ疑ヒヲ容レサル所ナリ、之レニハ又分業ト云フ生理上ノ理由アリテ生物ノ系統發生中ニ多クノ單細胞蟲ノ個體カ分裂後直チニ分レテ個々別々ニナラス、皆相互ヒニ同樣ニ動物的ノ作用――即チ生殖作用モ――ヲ有スレドモ群ヲナシテ生住セル期ノアリタルナラン、而シテ此ノ如キ全ク同樣ナル細胞ヨリ成立セル群ハ今日モ尚ホへっける氏ノまごすふぇら、ぷらぬらニ於テ見ルヿヲ得、次ギニ斯ノ如キ群體內ニ各細胞ノ分業ヲ始メ或ハ榮養ト運動ノミノ作用ヲ掌ドリ或ハ單ニ生殖ノ作用ヲナスニ至リ斯クシテ始メテ成形及ビ生殖細胞ヨリ成立セル細胞群ヲ生ジ生殖細胞ハ單細胞生物ヨリ遺傳シ來リシ不死ノ質ヲ具フルモ成形細胞ハ定時ノ後ハ消滅シ死ト云フヿ始メテ起リシナラン、如何シテカ此ノ如キ細胞群ニ於テ一種ノ細胞ハ其分裂ニ依リテ他種ノ細胞ヲ生ジ得ルヤ、又此ノ細胞ハ是迄ハ分裂シテ同樣ナル細胞ノミヲ生ジタルニ如何シテカ其分裂シテ生ジタル細胞ノ一ガ其質ヲ變ジタル後ニ於テ自分自身ノ質迄モ變ジテ異リタル細胞ヲ生ズルニ至リシヤ、

此ノ謎ヲ說クニ二樣アリ、一ツハ昔時ニ行ハレテ今日ハ既ニ消亡セル所ノ生殖力即チ今日デハ世人ガ系統發生力ト云フモノニヨルモノニシテ此說ニ依レバ生物ハ其生活ノ模樣ニハ少クモ關係ナシニ其生活力ニヨリ時々變化スルモノニシテ此變化ニ因リ全ク異樣ノモノトナルナリト云フニアリ、而シテ此說ハ余輩ガ實ニ感心スル所ノ應化ト云フモノヲ少シクモ說明スルヿ能ハズ且ツ理學上ノ說明ト云フヿヲ得ザルモノナリ、

或ハ又應化ノ爲メニ變セル所ノ成形細胞ハ他ノ細胞即チ生殖細胞ニ其體內ノ小分子ヲ送與シ爲メニ其性質ヲ變ジテ分裂ノ時ニ當リ異ナリタル細胞ヲ生ゼシムルニ至リシモノナラント思フヿモ出來得ルモノヽ如シ、

## ●遺傳（第二十七號ノ續キ）

生殖分子ガ形成分子ヨリ分離スルヿハ生物發生ノ際ニ於テ遲ク起ル𪜈早ク起ル𪜈遺傳ノ問題ニハ別ニ關係ナカルベシ、余輩ハ何レノ生分子ナリ𪜈理論上ヨリ推考スレバ皆生長スルモノ即チ滋養分ヲ同化シ分裂シテ增殖スルモノナリト思考セザルヿヲ得ザルガ如ク生殖分子モ亦好都合ニ遇フ時ハ生長シテ增殖スルモノナレ𪜈其生長增殖スルニ當リ其原質即チ遺傳質ヲ變スルヿナシト信スルヿヲ得ルモノナリ、故ニ時ニ由レハ生殖細胞ガ左ニ述ベタル諸例ニ於ケルヨリ猶ホ一層遲ク成形細胞ヨリ分離スルモノアリテ或場合ニ於テハ動物ガ充分ニ成長セル後ニ於テ分離スルノミナラズ此分離ガ一世代ヲ經テ二代目ニ至リ、其體ノ出芽內ニ始メテ起ルモノアリ、而シテ此ノ如ク生殖分子ガ成形分子ヨリ遲ク分離セルト雖ヘ𪜈其遺傳質ガ幾分ナリ𪜈變シタリト思考スルノ理由ナシ又此理論ノ正シキヿヲ證スルノ事實アリ是レ他ナシひどら形體ヨリ出芽シテ生セル海月形體內ニ生セシ卵ヨリ海月形體ヲ生セズシテ又ひどら形體ヲ生スルモノナリ、即チ此ノ場合ニテハ卵內ニアル生殖分子ハ卵ガ發生シテひどら形體トナリ海月形體ヲ出芽セル時之レニ入リ茲ニ於テ始メテ成形細胞ヨリ分離セルモノナレ𪜈猶未ダひどら形體トナルノ傾向アリ、

斯ノ如クナルカ故ニ多細胞動物ノ生殖モ亦單細胞動物ノ生殖ニ於ケルト同シキヿ明ナリ、即チ生殖細胞ノ絶エスニ分裂スルヿナリ而シテ此二者ノ間ニ僅カニ別アルヿハ多細胞動物ニアリテハ生殖細胞カ全動物體ナラスシテ數千或ハ數萬ノ成形細胞アリテ之レヲ圍繞シ込ミ入リタル動物個體トナルモノニアリ故ニ先キニ如何ニシテカ生殖細胞カ非常ニ込ミ入リタル個體ヲ造リ出シ得ルヤト述ヘタル疑問ハ今少シク境界ヲ付ケ生殖細胞ノぷらすまハ如何ニシテカ定リアル形質ノ成形細胞ぷらすまヲ含有スルヤト問ハサルヲ得ス

生殖細胞ニ送ルヲ以テ一生物ノ生存中ニ起リタル變化ハ皆其生殖細胞ニ達シ得ル者ナリト、故ニだるうゐん氏ハ他人ニ先達チテ成形部上ニ起リタル變化ノ遺傳ヲ説明シ得ル者ナリト思考シ之レヲ以テ氏ハ種ノ變化ヲモナシ得ルモノナリトナセリ、然レ𪜈氏自カラモ氏ノ此ノ假説ヲ以テ眞ノ假説トナサヾ只ダ一時ノ用ニタツモノニシテ決シテ此ノ類ノ遺傳ノ充分ナル説明ナリトハセザリシ、總テ從來知レ居ル所ノ力ヲ以テ鳥渡解明シ得ザルノ現象ニ相遇スルニ當リ全ク新ナル力ヲ用ヒテ之レヲ説明セントスルヿハ實ニ宜シカラザルヿナルヲ以テ他ノ路ヨリ此現象ヲ説明センヿヲ試ムルモ亦惡キヿニ非ラザルベシ、

余ノ考ニ依レバ生物體ノ成形部ニ生ズル所ノ變化ノ遺傳スルヿハ生物界ニ於テ決シテ無キヿニシテ生物ノ變異ハ總テ皆生殖分子ノ變異ヨリ來ルモノナルヲ承知スルニ於テハ又説明シ得ルモノナラント思考ス、

前ニ述ベシ成形細胞ト生殖細胞トニ分離セル群ニ於テモ尙ホ第三ノ假説ヲ建テ得ルモノナリ、即チ余輩ハ成形細胞ノ出來スルハ成形細胞ヨリ起因スルニ非ラズシテ群ヲ生ズル所ノ生殖細胞分子ノ構造内ニ變化ヲ起セシニ因ルモノナリ、

若シ概シテ外界ノ變遷ガ生物上ニ淘汰ヲ生シ次第ニ變遷ヲ起スモノナレバ此ノ變遷ハ複細胞生物ニ於ケルト同ジク單細胞生物ニモ亦一樣ノ細胞ヨリ成立セル多細胞生物ニモ同樣ナルベシ、故ニ先キニ假リニ申シタル同樣ノ細胞ヨリ成立セル細胞群ガ何ニカ外界ノ部分ニ由リテ其生殖細胞ガ分裂增殖スルニ當リ同樣ナル細胞ヲ生ズルヨリハ異樣ノ細胞ヲ生ズルニ於テ能ク生活シ得ルヿアラバ前ニ述ベシガ如ク異樣ノ細胞ヨリ成立スル群ヲ生ズルノ結果ヲ來スベシ、然ラハ其群ヲ成立スル細胞分子ノ變化セルヲ以テ其群ノ細胞ハ異樣ナルヤ明カナリ、而シテ此變化ト共ニ其分子ノ一部ノ性質ハ尙ホ變ジタリト思考スルモ敢テ空考ニ非ザルベシ何トナレバ分子ナルモノハ集合物ナレバ或ハ合シ或ハ離レ得ルモノナレバナリ、

然レ𪜈生殖細胞ノ變化ヨリ其分裂生殖スルニ當リ異樣ノ

此ノ説タルヤ表面ヨリ之レヲ見レバ實ニ斯クアリサウナルヿナリ、實ニ此ノ成形細胞ノ小分子ガ生殖細胞ニ行クヿハ單ニ考ヒ得ルノミナラズ生殖細胞ハ成形細胞ニ依リテ養ハルヽモノナレバナリ事實誠ニ然ル可シト思考シ得ルモノナリ然レヒ少シク委シク考フル片ハ直チニ大困難ニ遇フモノナリ、何トナレバ第一ニ先キニモ既ニ述ベシ如ク一個體ノ分子ナルモノガ單ニ其マヽ他個體ノ分子中ニ入ルヲ得ベキモノニ非ラズシテ余輩ガ知ル所デハ他體ニ入リテ同化即チ其新ナル體ノ分子ニ變化スル者ナリ、」又一歩ヲ譲リテ成形細胞ヨリ生殖細胞ニ其分子ヲ少シクモ變セズニ送リ次ノ代ニ於テ又再ヒ分ルヽモノナリトナナスモ又大困難ナリ、何ントナレハ一ツノ非常ニ多クノ成形細胞ヨリ成立シ非常ニ込ミ入リ其ノ高度ノ分業ニヨリ全ク異リタル細胞或ハ組織トナリタルモノカ又唯一ノ生殖細胞ヨリ發生スルモノナレバナリ、然レハ其細胞ナルモノハ各々皆其特有ナル分子ヲ生殖細胞ニ與ヘザルヲ得ス、此時ニ於テ生殖細胞ノ近所ニアルモノハ容易ニ之レヲナシ得テ其近所ニアルモノハ難キヲ感ズベシ、而ルニ之レニ關セズ各成形細胞ガ生殖細胞ニ同數ノ分子ヲ送ルモノトスレバ余輩ハ實ニ從來余輩ガ知ル所ノ理化學的及ビ生理的ノ諸現象ヲ離レ余輩萬一之レアルトスルモ其起因、形質ハ申スニ及ハス徹頭徹尾少シクモ知ラザル所ノ分子ノ關係ト云フモノヲ思考セサルヲ得ザルヿヲ以テ全ク不明ニ屬スルモノナリ、加之生殖細胞ニ集リ來ル所ノ分子ハ皆互ヒニ列ヲ正シテ玆ニ止マリ其分裂シテ異ナリタル細胞ヲ生ズルニ當リ前生物内ニアリシ列ヲ以テ生セザルヲ得ズ、故ヲ以テ余輩ハ實ニ基礎ナキ假説中ニ運動スルモノナリ、

だるうゐん氏ハ世人ノ能ク知ル如ク遺傳ノ現象ヲ説明スルニ當リ余ガ只今述ベシ所ノ假説ト大概符合スル所ノ假説ヲ提出セラレタリ、只ダ余ガ前ニ用ヒタル分子ナル語ノ代リニ微芽子(Gemmule)ヲ用ユレバだるうゐん氏ノぱんじゑねしす説ノ大要トナルベシ、同氏ノ説ニ依レハ一生物體内ノ各細胞ハ絶エズ細微ナル分子ヲ出シテ之レヲ

長崎、相州大山等ニ產スト云フ理科大學ニハ對州、豐前及ビ美濃ノ三ヶ所ヨリノ標品アリ、山地ノミニ產シ平地ニハ產セザルガ如シ

三十一）Helix papilliformis, Kob.

第三版三十二圖

是ハ螺旋部圓錐形ニ凸マリタル甚ダ丈ケ高キ一種ニシテ殼薄ク、絹ノ光澤アリ、其色黃或ハ赤灰色、幅狹キ赤色帶一條アリ、嶺數六ナリ、臍穴ナシ或ハ之レアルモ狹キ小裂タルニ過ギズ、大形二十三ミメ、小徑二十一半ミメ、高サ二十七ミメ、形狀 H. japonica（後出）ニ似タリ本邦內地ニ產スト云フ、其地方ヲ知ラズ

三十二）Helix quæsita, Fer.

第三版三十三圖

殼大形ニシテ左リ卷キナルガ故ニ他種ト混ズル憂ナシ、黃色ニシテ一條帶アリ且ツ臍部黑シ大徑三十八ミメ、小徑三十ミメ、高サ二十六ミメ、但シ大サ一定セズ、本邦至ル所普通ニ產ス

理科大學ニ數ヶ所ヨリノ標品アリ、就中日光產ノ一個ハ著大ナリ

三十三）Helix scævola, v. Mart.

是ハ大サ形狀共ニ前種ニ似タル同ク左リ卷キノ一種ナルガ稍々扁タク且ツ表面彫刻ノ粗ナルニヨリ識別スルヲ得ルト云フ

箱根山ニ產スル由、余ハ未ダ實物ヲ見ズ

三十四）Helix miranda, Ad.

黃色、縫合線ト周緣ニ赤褐色ノ二條帶アリ、横幅一、三インチ、高サ〇、九インチ」アダムス氏リフンシリ島ニテ得タリ、其記載甚ダ簡單ナルガ故ニ詳細ノ性質分明ナラズ、世ニ圖ナシ

三十五）Helix serotina, Ad.

黃色或ハ橙色、幅〇、九インチ、高サ〇、七インチ、アダムス氏樺太ノトロ岬ニテ藪中ニ發見ス、前種共ニ性質不分明、圖ナシ、次ノ三種（三十八番ニ至ル）ニ於ケルモ亦同樣ト知ルベシ

細胞群ヲ生セシナレバ次代ニ於テモ其生殖細胞ハ同シク異樣ノ細胞ヲ生ズルナラン、何トナレバ次代ノ生殖細胞ハ單ニ前代ノモノヽ一部ニシテ彼レト同一ノ原形質—同一ノ生殖ぷらすま—ヨリ成立スルモノナレバナリ、

右ノ如ク考フルニ於テ細胞中ニ異同ヲ來スコハ生殖細胞内ニ前ヨリアルモノトスルモ生殖細胞分子ノ列ノ變シタルヨリ生ズルトスルモ、其化合ノ變セルヨリナリトスルモ或ハ又分子並列ト化合トノ共ニ變シタルヨリ來リシ者トスルモ個體發生ニ於テ明カニアル如ク生殖細胞内ヨリ變化ヲ來シタル者タルコハ皆同シキコナリ、誰レモ又異リタル卵子ガ彼レ是レ異樣ノ分裂ヲナシ異リタル種ノ生物トナルコハ異リタル卵子ノ生殖細胞ノ細微ナル構造ニ由ルモノナルコヲ疑フモノナカルベシ、又茲ニ於テ分子ノ差異—此差異ハ始メヨリアリトスルモ或ハ又發生中ニ生スルトスルモ—幷ヒニ其特殊ノ並列ハ特ニ肝要ナリト云フコハ卵ノ分裂ノ始メニ於テ一半球ノ透明ニシテ他半球ノ不透明ナルモノヲ生スルモノ或ハ又多クノ海月類ニ於テ見ル如ク細胞内ニ内胚葉細胞トナル可キ部分ト外胚葉トナルベキ部分トヲ生スルモノニ於テ殆ンド直接ニ見ルコヲ得ベシ、斯ノ如キ差違ハ固ヨリ此等細胞ノ非常ニ込ミ入リタル分子ノ構造中ノ最モ粗大ナルモノナルベシ然レモ余輩ハ若シ生物ノ個體發生中ニ生スル所ノ變化ヲ以テ皆理化學的ノ變化ヨリ生スルモノナリト思考スルニ於テハ余輩ハ正確ナル路ヲ踐ムモノト信スルナリ

(以下次號)

## ●日本産ノ蝸牛科(第四回)

第三版附　　　　飯島　魁

三十) **Helix myomphala,** v. Mart.

第四版三十一圖

是ハ大形ノ美シキ一種ニテ螺旋部膨ラミタル方ナリ、赤褐色ノ幅狹キ帶一條アリ、臍孔ハ全ク埋マレテナキガ故ニ直チニ他種ト識別シ得ベシ、大徑三十三乃至四十ミメ、小徑三十乃至三十六ミメ、高サ二十五乃至三十二ミメ

口及ビ神戸ニテ採集セリト

四十三) Helix peculiaris, Ad.

是レ甚ダ疑ハシキ種ナリ、高サハ少シク幅ニ超過ス、其外前種ニ彷彿タルガ如シ、世ニ圖ナシ

四十四) Helix cardiostoma, Kobelt.

本誌二卷、第十版、十八圖(二十六號ニ出ヅ)

四十二番ニ能ク似タレ𪜈臍孔全ク無シ、大徑十四、五ミメ、小徑十三ミメ、高サ十二、五ミメ

ライン氏僅數チ京都ニテ採集セリ

四十五) Helix milgendorfi, Kobelt.

本誌二卷、第十版、十九圖 (二十六號ニ出ヅ)

形狀圖ニ就テ見ルベシ、殼薄シ、臍孔深シ、角褐色ニシテ帶ナシ、口形圓シ大徑十五ミメ、高サ十一ミメ產地不詳

四十六) Helix macrocycloides, Kobelt.

本誌二卷、第十版、二十圖(二十六號ニ出ツ)

前種ニ似タレ𪜈一層扁平、且ツ臍孔ノ至テ廣濶ナルヲ以テ識別ス、大徑十七ミメ、高サ七ミメ、ライン氏本邦中數ケ所ニテ採集シタルモノナリ

四十七) Helix Sieboldiana, Pfr.

本誌二卷、第十版、二十一圖 (二十六號ニ出ツ)

圓形ナリ、殼至テ薄クコハレ易シ、臍孔殆ド全ク無シ、角色ニテ帶ナシ、大徑二十乃至二十四ミメ、高サ十九乃至二十一ミメ、

東京、長崎、等諸所ニ產ス、理科大學ニ數個ノ標品アリ

四十七) Helix læta, Gould.

第四版、三十四圖 (本號ニ在リ)

殼ノ形狀、性質共ニ前種ニ似タルモ、著シク大ナリ、即チ大徑三十五ミメ、高サ二十八ミメニ達ス

北海道ニ產ス、理科大學ニ箱舘ヨリノ數標品アリ

四十八) Helix similaris, Fér.

第四版、三十五圖 (本號ニ在リ)

小形ノ一種ニシテ形狀圖ニ就テ知ルベシ、大徑十六ミメ、高サ九、五ミメ、本邦諸所普通ニ產ス理科大學ニ數多ノ標品アリ

三十六) Helix Editha, Ad.
アダムス氏ウラヂミル灣ノリジリ島ニ發見セリ、左レバ前種ト共ニ本邦外ノ一種ト看做シテ可ナルベシ、縱令ヒ本邦ニ發見スルヿアルモアダムス氏記載ノ簡單ナルガ爲メ同認スルヿ或ハ困難ナラン

三十七) Helix Weyrichii, Schrenk.
其簡略ナル記載ヨリ見レバ三十五番ト同一ナラントノ説アリ

三十八) Helix Herklotsi, v. Mart.
是又形狀判然セズ H. Peliomphala ニ近シ、或ハ之ト別ツベカラザルモノナラン

三十九) Helix Verrucosa, Reinh.
本誌第二巻、第十版、十四圖(第二十六號ニ出ヅ)
圓錐形、臍孔小サシ、灰褐色ナリ、小形ニシテ徑ハ五、五ミメ、高サ五ミメ、東京上野公園ニ產スト云フ

四十) Helix Japonica, Pfr.
本誌二巻、第十版 15 及ビ 16 圖(二十六號ニ出ヅ)
圓錐狀、臍孔蔽ハレテナシ或ハ小裂ヲ餘マス、周圍鈍稜ヲナス、底ハ扁シ、殼厚カラズ、黄角色ノ薄キ上皮ヲ以テ覆フ、赤色ノ細キ一帶アリ、唇緣厚ク白色或ハ淡紅色ヲ呈ス、徑ハ十七乃至二十一ミメ、高サ十二乃至十六ミメ、本邦中廣ク分布シ普通ニ見ル所ナリ、理科大學ニ數ケ所ヨリノ標品アリ

四十一) Helix patruelis, Ad.
本誌二巻、第十版、15、及ビ 16 圖(二十六號ニ出ヅ)
大小形狀共ニ前種ニ甚ダ似タレド一層薄ク而シテ周緣ノ稜ハ目立チテ角ヲ爲セリ、アダムス氏之ヲたぶ島(?)ニ採集ス、又京都邊ニモ產スト云フ

四十二) Helix sphinctostoma, Ad.
本誌二巻、第十版、十七圖(二十六號ニ出ヅ)
四十番ニ似タレド圓ミアリ、黄角色、帶ナシ、最大ノ一楷ハ口ノ直後ニテ少シク縊レアリ、唇ハ白ク外折ス大徑十四、五乃至十六ミメ、高サ十一、五乃至十二ミメ」アダムス氏たご(田子浦? 丹後?)ニテ採集ス、ライン氏ハ瀨

四十九）**Helix conospira**, Pfr.

第四版、三十六圖（本號ニ在リ）

螺旋部圓錐狀ニ高シ、臍孔狹シ、殼薄シ、黃角色ニシテ光澤アリ、大徑凡八、五ミメ、高サ六、五ミメ、東京、九州、下總等ニ產ス、大學ニ標品ナシ

五十）**Helix conulina**, v. Mart.

第四版、三十七圖（本號ニ在リ）

甚ダ小形ナリ H. Goodwini ニ能ク似タレド周圍ニ角稜アルヲ以テ別ナリ、臍孔狹ケレド深シ、殼薄シ、黃角色ニシテ絹ノ光澤アリ、大徑七ミメ「高サ四ミメ」アダムス氏たぶ島ニテ得タリ、他地方ニモ在ルナラン

五十一）**Helix Lischkeana**, Kobelt.

第四版、三十八圖

形狀、色合共ニ前種ニ似タルガ螺旋部稍々膨ラミテ赤色ノ帶一條アリ、又少々大ナリ、即チ大徑十ミメ、高サ七ミメ、或人長州萩ニテ採集ス、余見タルコトナシ

---

以下五十二番ヨリ五十八番ニ至ル七種ハ皆アダムス氏ノ命名シタル所ナルガ記載簡略ニ過ギ、圖モ無ク後來同認ノ出來ルコト甚ダ疑ハシキ者共ナリ、故ニ只名稱ト大サト發見地ヲ出ダスノミニ止ム

五十二）**Helix commoda**, Ad.

幅ハ〇、三インチ、高〇、二五インチ、產地ハ日本もそせき（?）トアリ、H. Hilgendorfi ニ近似スル者ナランガ大サハ半分ナリ

五十三）**Helix despecta**, Ad.

產地、大サ共ニ前種ト同ジ

五十四）**Helix gibbosa**, Ad.

幅〇、六五インチ、高サ〇、五インチ、日本田邊トアリ

五十五）**Helix proba**, Ad.

幅〇、〇五インチ、高サ〇、〇二五インチ、日本きのおほしま（紀州大島ナランカ）トアリ

五十六）**Helix craspedocheila**, Ad.

幅〇、四五インチ、高サ〇、三インチ、きのおほしまト

アリ

五十七）**Helix concinna, Ad.**

幅〇、六インチ、高サ〇、四インチ、日本たご（田子ナルカ或ハ丹後ナランカトノ疑アリ）

五十八）**Helix collinsoni, Ad.**

幅〇、五五インチ、高〇、五インチ、同シクたごトアリ

余ノ名ヲ知リタル日本産蝸牛屬ハ右ニテ終レリ、讀者自ラ見ラルヽ如ク其種類別ケ甚ダ紛雜ヲ極メリ其所以ハ通過ギノ旅行者ガ此所彼所ニテ拾ヒ得タル僅數ノ殼ヨリシテ種ヲ作リ別ケタル故ナレバナリ、地方有志者ノ續々此類ヲ採集シ我理科大學ヘ寄送アランヿ實ニ希望ニ堪ヘズ

（終）

## 寄書

說ノ可否ハ本誌編輯者其責ニ任セズ

## ●動物聲音考第十五

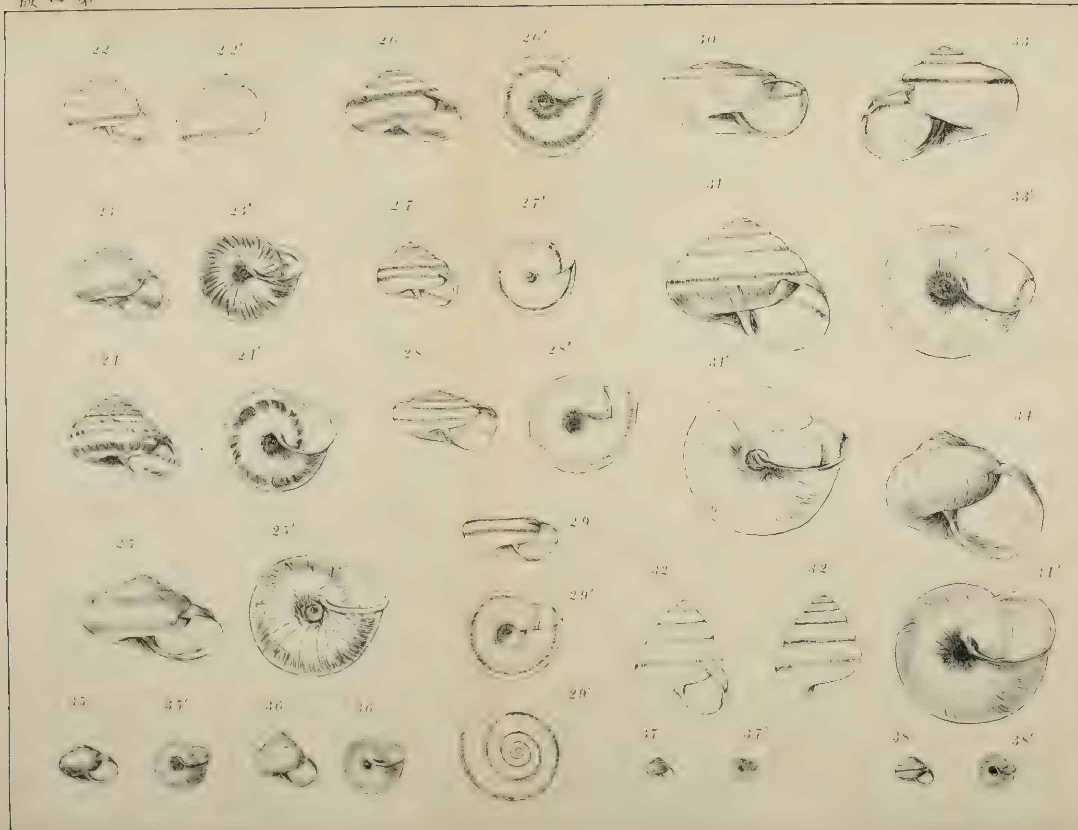
野村彥太郎

### 獸類

猴（さる）

英國にては猴の鳴聲を呼で Chatter といへり三才圖繪、猴の條に其聲猶喞々とあり、さきにのべし如く古より喞々は鼠、雀の兩聲に幷用し來りたるをみれば、猴の聲は鼠、雀兩種に似て其急激なるを以ての故にやあらん歟、英華字典（香港板による）によれば Chatter の條ミ英文にて鵲、猴の如き紛れしき急聲をいふとあり、また其聲を漢譯して吱々啁々 Chi-Chi Chau-Chau ともあり集韻によれば吱章移切音支、吱々聲也とありまた啁張流切音輈ともあり康熙字典によれば禮三年問を引用して曰至于燕雀猶有啁噍之頃焉ともあり廣韻に啁噍鳥聲とあるを見れば吱々は何の聲たるを分ち難けれども啁噍を燕雀の聲に用ひたるを見れば啁々といへるも其聲に用ひ得へきとしろし、これより考ひ合せば猴、鼠、雀の三種は其聲急激ミして相似よりたればかくは類似の語を用ひしものならん歟また喞（支那音 Tseih）、吱（chi）、啁（Chau）の三音相似によりたるを見れば猴の聲をChatterといひ喞々（Tseihtseih）といへるを其固有の鳴聲を呼びしものならん歟」彼の山谷が詩に猿嘆山々の句あり此の山々の音は Chatter 或は喞

第四版



は後には訛りたるなり」犬筑波集活字板おぼろ月夜にわたるかうもり照もせず曇もやらずにむせて古くれみな酢といへり咽ばせむとて山椒くりよ水飲しよといふなるべし守武千句に山しよとにむせわたりはやかうもりのすものかたりのつれ〲にかうもりに酢山椒をいへると古し百物語に山椒にむせてはわかゞねにかぶりつきてなどなどみえ和漢三才圖會云蝙蝠性好山椒包椒於紙拋之則伏翼墮落竟捕之といへるは非なり紙につゝむに山椒には限らず何にてもおなじ事なり酢も山椒も彼が好惡によるにあらず

## ●襞膈雜記

### ○水母目蝦瑣蛣腹蟹

上田英吉

水母目蝦瑣蛣腹蟹ハ郭璞ガ江賦ニ見エテ古來人口ニ膾炙セリ陳藏器曰蛇生東海狀如血䘓大者如牀小者如斗無眼目腹胃以蝦爲目蝦動蛇沈故曰水母目蝦亦蛩々之與駏驉也マタ時珍曰水母形渾然凝結其色紅紫無口眼腹下有物如懸絮群蝦附之咂其涎沫浮汎如飛爲潮所擁則蝦去而蛇不得歸ト按ニ水母目蝦ハ Phrosina 屬及ビ Hyperia 屬ニ隸スルモノニシテ數種アリ其形皆纖小ニシテ爲メニ大魚ノ吞噬ヲ免カレ難シ故ニ有刺水母ニ寄居從伴シ其刺毒ヲ籍テ以テ自ラ弱肉ノ難ヲ防グリ古人ガ水母ノ目ト爲スノ說虛妄ナルヤ明ナリマタ瑣蛣腹蟹ハ Pinnotheres ナリ時珍曰居蚌腹者蠣奴也又名寄居蟹ト同物ニシテ諸種蚌蛤ノ殼内ニ寄居ス往年東京ニテ鹽吹介ノ殼内ニ一枚ヲ得マタ下總千葉郡撿見川村ニテハ鳥介ニ在ル者數枚ヲ酒浸セシコトアリ又伊豆君澤郡長濱村ニ遊ビ方言うじこト稱スル海鼠ニ寄居スルヲ視タリキコノ蟹ハ數種アリ形狀楕圓ニシテ豆ノ如ク白色ニ較々赭色ヲ帶ビ大サ四五分ヨリ寸許ニ至ルモノアリ蘭山曰ク蠣奴ハ蠣蛤中ニ寄居スル蟹ナリ甲ノ形圓ニシテ三四分足ト共ニ白色春時生文蛤中稀ニアリ土州宿毛浦大サ寸餘ノ文蛤中ニ小キ八九アリテ蛤肉ナシ肥前ノ文蛤中ニ小蟹アルモノニハ肉モアリト云フ」ト然レドモ去歲土佐ノ海鄉ヲ歷遊シ宿毛ニ至リテ海錯ヲ採集シヽニ

々の音に較や似よりたる處なきにしもあらざれども吾等の耳には猴の鳴聲はキツ〳〵或はキヤ〳〵とは聞ゆなり本艸綱目猴の條に尻無毛而尾短手足如人亦能竪行聲嗝々如欬とあり廣韻によれば嗝古核切とあり集韻によれば各核切、ともに音隔ともあり支那音によればKehともあれば此嗝々といへるは其固有の鳴聲といへなるべし毛詩草蟲經に猿獮猴也楚人謂之沐猴老者爲獑猴獑猴駿捷也其鳴嗷々而悲ともあり唐韻、正韻によれば嗷古弔切とあり說文によれば吼也一曰嗷謼聲響高急如叫如號呼也とあり、また一音に吉歷切、音激、聲之激也ともあり支那音にもKéaou或はKeihの兩音あり此嗷々といへるも能く猴の聲に叶へり泰西の字典を按ずるに荷蘭(をらんだ)語にてKwetterenといへるは英語のChatterに適應せりといへばChatterといへるも固有の鳴聲ならんも知るべからず

## 羊(ひつじ)

英國にては羊の鳴聲を呼でBäaといへり又兒女羊を呼でBäa-lambといふ由字典に見えたればBäaといへるも固有の鳴聲をいへるなるべし說文によれば咩音弭羊鳴也とあり五車韻府によれば弭、咩ともに支那音meとあり獨國のグリンム氏が小說中に山羊(やぎ)の鳴聲にmeh! meh! ともあり尤も山羊の鳴聲は大抵羊に似よりたるやうなりさらば羊の鳴聲は其きゝやう如何によりてはBäaともme(meh)とも聞ゆなるべし

## 蝙蝠(かうもり)

蝙蝠の聲はちう〳〵といへり英書中にも其鳴聲に往々Charpの語を用えたり左に揭ぐるものは嬉遊笑覽より抄出せしものにして其說の當否に至りては江湖諸君子の判定如何にまかすのみ

蝙蝠の飛を見てかうもり〳〵山椒くりよ柳の下(した)で水飲(のま)しよと呼ぶとは彼よく噎(む)せる物とするによれり、おもふに鳴聲のちう〳〵といへるは噎ぶさまに見ゆるをいふなり可笑記(をかしき)にぶをとこのさたの限りかうもりの唾(つ)にむせたるやうになきつらなる侍けり云云按ずるに唾にむせると

火光ヲ忌ム以テ其一斑ヲ證ス可シ嘗テ聞ク紀伊熊野西部ニ於テ鯖魚(サバ)ヲ釣獲スル爲メ點火漁法盛ニ行ハレ之ニ從事スル者年ヲ追テ增加セリ而シテ近海魚類ハ其火光ニ怖レ遠ク外洋ニ遁迯シ鰹魚ノ如キ環游魚類ハ避ケテ群寄セサルニ至リ一般ノ漁業之カ爲メニ著大ノ障害ヲ蒙リシヲ以テ遂ニ點火漁禁止ノ議ヲ和歌山縣廳ニ愁訴哀願スルコト數回ニ及ビシトゾ然ルニ當時水產學者ノ說ヲ爲セシ者アリ曰ク鰹魚ノ骨格ハ鯖魚ト粗相同ジキモノナレバ其氣力ニ强弱アルモ固有ノ性質ニ於テ相異ナル所アラザル可シ此同種族中ニ於テ一ハ火ヲ好ミ一ハ之ヲ嫌フ是レ理ニ於テ解スル能ハザル所ナリト牽强附會マタ極マレリト謂フ可シ抑鰹魚ノ沿海ニ群寄セザルハ潮流ノ變調、水温ノ違和等ニ原因スルアリト雖モ點火漁ノ障害ニ影響スル蓋シ鮮少ナラザル可シ鰹魚ト鯖魚ハ與ニ其族ヲ同フスルヲ以テ其性質相異ナラザル可シト言フガ如キハ必竟臆斷タルヲ免レザルナリ往時藥物學家ノ說ニ曰ク同一種族ニ隷スル植物ハ同一ノ齊効ヲ奏スト時人敢テ之ヲ疑フモノナシ然レモ汎ク之ヲ千萬ノ植物ニ諭證スルニ譬バ繖形科ノゴトキ同科ノ諸種ニシテ効能同ジカラザル者有ルヲ奈ニセン即チ滋養性ノ胡蘿蔔(Daucus carota)アリ芳香性ノ渴泥子(Pimpinella anisum)及ヒ小茴香(Eoniculum officinelle)アリ而シテ葛縷子(Carum carvi)ハ之ヲ服スルトキハ轉矢氣ヲ發シ洋芹(Petroselium sativum)ハ利尿ノ効アリ矢鳩苔(Conium maculatum)ハ神經ヲ麻痿セシメ芹葉鈎吻(Cicuta virosa)ハ腸炎及ビ實性痙攣ヲ發スルノ性アリ又稻麥稷粟ハ禾本科ノ植物ニシテ人畜繫命ノ本ナリ其効能顯著須臾モ之レ無カル可カラスト雖モ歐洲ニ產スルLolium temulentumハ毒質アリテ麻醉ノ症狀ヲ發セシメFestuca quadridentataハ熱帶地方ニ生ジ峻毒ニシテ家畜ヲ傷害シBromus purgans及ビB. catharticusハ加奈太及ビ智利ニテ其根ヲ用テ瀉下劑トセリ其他曼陀羅華。莨菪。菲沃斯。煙草。蜀羊泉。番藷。洋茄。茄ノ諸種ハ等シク茄科ニ屬スト雖モ皆其性効ヲ別ニス就中曼陀羅華、莨菪、菲沃斯及ビ煙草ハ神經中樞ヲ浸シ麻醉性アリ而シテ前三種ハ瞳孔ヲ散

蘭山所言肉ナキ蛤中ニ絶テコノ蟹アルヲ見ズ按ニしはまねきノ如キ小蟹爛殼中ニ潜居セルヲ誤認シテ蠣奴ト混同セシナルベシ抑モ蠣奴ノ蚌蛤海鼠等ニ寄居セルハ條蟲蛔蟲ノ如ク其養分ヲ攝取センガ爲メニアラズ其匡殼脆弱ニシテ波流ニ游泳スルニ堪エズ且ツ弱肉ノ難アリ故ニ蚌蛤海鼠等ノ腮邊ニ寄居シテ之ニ流入スル水中ノ小動物ヲ取リ以テ其食餌ト爲スニ過ギザルナリ是ヲ以テ古來誤テ蚌蛤ノ幼子トナスモノアリ相摸横須賀ニテハ牡蠣ニ棲居スルヲ以テ俚人目シテ其胚卵トナセリ支那ニテハ南越志ニ瑣蛣長寸餘大者長二三寸腹中有蟹子如楡莢合体共生倶爲瑣蛣取食ト見エ又西洋ニテモ古昔ハ同樣ノ妄説アリテ蟹ハ蚌ノ爲メニ出デヽ食ヲ求メ蚌マタ蟹ノ爲メニ其ノ弱肉ノ難ヲ防ギ共ニ因緣綢繆シテ恰モ兄ノ如ク弟ノ如シト希臘羅馬ノ詩人騷客詩ニ賦シ歌ニ詠ジテ其ノ名高カリシトゾ是ノ説固ヨリ荒唐無稽ニシテ齊野ノ言ニ過ギズト雖トモ東西綿遠古今杳邈タルモ同一ノ觀念ヲ抱キシハ亦一奇ト謂フ可シ

○鰹魚ハ火光ヲ忌ム

鰹魚ノ性火光ヲ忌ム故ニコノ魚ノ漁期中點火漁ノ害ヲ爲ス之ヨリ甚シキハナク凡鰹魚漁ニ從事スル海人郷ニテハ其害ヲイフモノ皆萬口一談ナリ紀伊西牟婁郡周參見浦井上善助氏ノ説ニ今ヲ去ル凡三十餘年前五月頃志摩崎島ノ大尾崎ヨリ十二三里沖合ニ於テ周回壹丈餘ノ松ノ大樹根引ノ儘流レリ其枝梢ニ綠藻生茂シ宛然青葉ノ存スル如シ鰹魚及ビ他ノ沖魚多ク之ニ附游セリ鰹漁船之ヲ見テ漸次相集リ百有餘隻ニ及ビ毎船皆多分ノ漁獲アリ積載ニ堪ヘズ翌日ヲ期メ一同歸帆ス是時同所ナツタ浦ノ漁船壹隻遲レテ之ヲ聞キ樹邊ニ來リシ頃ハ日既ニ沒セルヲ以テ明旦ヲ待テ釣獲セント欲シ船ヲ流樹ニ繋ギ徹夜セリ然ルニコノ夜炊飯ノ爲メ火ヲ船内ニ焚キシカ魚群其火光ニ恐レテ悉ク遁逃シ翌朝ニ至リ各漁船マタ前日ノ如ク艤裝シ來リシニ樹邊一尾ノ魚影ヲ見ズコヽニ於テ前夜焚火ノ害ヲ嘖々シ大ニ物議ヲ起セシコトアリ其後近隣各浦協議シ沖合ニ於テ夜中火ヲ焚カサルコトヽ定メシト云フ鰹魚ノ

タ以テ直接分裂ノ定着的證据トスルニ足ラサルコトヲ許セリ

氏ハ「クルツィツキー」氏ノ法ヲ用井タリ、即チ「子マトーデス」ヲ強性「アルコホール」ニテ殺シ「アルコホリック、ボラックス、カーミン」ニ二十四時間浸シ、酸性「アルコホール」(強性「アルコホール」十I%HCl.)ニ一時間浸シテ退色セシメ、之ヲ純性醋酸ニ十五分時間浸、シ、次ニ純性醋酸ト「クレオソート」トノ等分混和液ニ入レ、然後純粋「クレオソート」ニ移シ、終ニ「クレオソート、バルサム」ヲ以テ硝子板ニ粘付スルナリ、此ノ方法ニ由レバ直接分裂ヲ目撃スルヿヲ得ルナラン、

「ホーエル」氏モ云ヘル如ク此事ニ就キテハ猶一層ノ研究ヲ要スベシ

● Ascidians, Worms, Echinoderms. 等ノ幼蟲飼養法　「ドクトル、シヤ、ジユラン」ハ「ジァール」敎授ノ囑附ニヨリテ種々ノ幼蟲ヲ飼養スルニ甚タ有用ナル方法ヲ發見セリ、此方法ヲ用井ルトキハ複合「アッシヂアン」ノ複合体ノ成形ノ研究ニ要スル材料ハ容易ニ得ラルベシト云フ、

其方法ハ先ツ孵卵スルトキニ際シ、浮遊セル幼蟲ノ硝子管ニ集メ、之ヲ清淨ナル海水ヲ盛リタル時計皿ニ入レ、之ニ蓋ヲ施シ、然後日光ノ中ラサル樣防キ置ベシ、(半闇ニテヨシ)

氏ハ此ノ方法ヲ用井テ「アッシヂアン」ノ研究ニ要スル最良ノ材料ヲ得タリト云フ、又タ種々ナル「アンテリッド」ノ幼蟲ヲモ試ミタルガ、是レ亦タ良結果ヲ得タリシトゾ、

(Am. Nat. 抜萃、)

● とんぼトか (八〇頁の續き)　瑠璃仙

人体に有害なる雙翅類　アーロン女史著

學術上の發見發明の續々限りなく出て來るの時代に當り歷史紙上に特筆大書すべき事件多しと雖とも、人類の六足蟲界を制服し其種々なる種屬の强弱に順して、之を己の用に供するとの如きは、實に其第一位に居るなるべし。

大シ蠕動機ヲ遲緩ナラシムルモ煙草ハ瞳孔ヲ縮小シ蠕動機ヲ亢進セシム無情ノ植物其族ヲ同フシテ其性ヲ異ニスル夫レ斯クノ如シ況ヤ鰹魚鯖魚ノ如キ有情動物ニ於テ其性質均一ナラザル豈ニ怪ムニ足ランヤ

## 雜録

### ●甲殼類ト蜘蛛類ノ頭胸部ハ相同ナルカ

甲殼類ニテハかにノふんどし、えびノをハ通常腹部ト云ヒ、夫ヨリ上部ヲ頭胸部ト云フ、蜘蛛類ニテハくもノ歩足ナキ部分ハ腹部ト云ヒ、夫ヨリ上部ヲ頭胸部ト云フ。然ラバえび、かにノ頭胸部トくもノ頭胸部ハ相同ナルカ、予ハ相同ナラズト考フ、甲殼類ノ所謂頭胸部ハ蜘蛛類ノ頭胸部ト腹部ニ當ル如シ、其所謂腹部ハ蜘蛛類中ノすこるぴをんノ腹部ノ後端數節ノ細クナリテ尾狀ヲナス部分ニ當ル如シ。　昆蟲類及ビ蜘蛛類ニテハ頭胸部ヲ作ル環節ノ數ハ十ヲ越ヘズ、臟腑ハ重ニ腹部ニ在リ、呼吸器及ビ生殖腺ノ開ク孔ハ腹部ニ在リ、えび、かにノ所謂頭胸部ハ少ナクモ十三環節ヨリナル、臟腑ノ在ル所、呼吸器及ビ生殖腺ノ開孔スル所皆所謂頭胸部ニアリ。えび、かにノ呼吸器ヲ具フル第二對ノ Maxillipede 以下ハ腹部ニ當ルト思ハル、然ルトキハ夫ヨリ以上ノ眞ノ頭胸部ヲ作ル環節ハ八或ハ九ニシテ昆蟲類蜘蛛類ノ頭胸部ノ環節ノ數ニ同ジ。以上枚擧セル甲殼類、蜘蛛類ノ頭胸部ノ差ハ隨分大切ナルモノト思ハル、蜘蛛類、昆蟲類ノ腹部ニ歩足ナキニ今予ノ云フ如クナラバ甲殼類ニテハ頭胸部ニ歩足ナクシテ腹部ニ歩足アルハ大ニ不都合ナルガ如シト雖、此差ハ餘リ大切ナルモノニハ非ザルベシ、蜘蛛類ノ腹部ニモ歩足ト相同ナル附器アリ、只甲殼類ノ頭胸部ノ附器ハ全ク食物ヲ取ル用ヲナスモノトナリ、歩行ノ用ヲ腹部ノ附器ニ依托シタルモノナリ。

岸上鎌吉

### ●Rhabdnema nigrovenosum ノ內皮ニ於ケル核ノ直接分裂

「ホーエル」教授ハ夫ノ核ノ直接分裂ヲ證スル好材料ナ「ラブドネマ」ノ營養管ノ內面ヲ蔽フ皮層中ニ發見セリ、然レトモ氏ハ自カラ其ノ用意ノ未

二　醫學上の問題
三　成し得べき考案及其費用
四　此問題に關する諸書目錄

下　略

## 第一章　蚊(Culex)屬の發育及び造構

Culicidæ 科のものは多く喜て死水を撰び其生育の所とす此水世人の信するか如く水中に食餌の多か故に非すして、其最も恐る可き害敵は清水中に非されは棲息する能はさるを以てなり。鑄鐵所に於て鐵の滑車に雨水のたまりて廣さは英寸平方深さ一英寸程なる所ゟ、極て幼なる者より蛹に至るまで総の發育狀態ゟ於ける蚊の非常ゟ數多群棲せるを實見せり。又澤地の牧場に於て蹄痕の内ゟ紛々團聚し、水幼蟲を以て滿つるに至るを見たり。されと小流の注入ゟより時々漲溢盛滿するに至る濕地の水淺き所、流出するの路なき死水溝渠、及び何れの所ゟても其數最も多き水草の繁茂ある暗晦なる池澤等ハ、田畑間に最も普通なる生育の所とそ。村落寺院等に在りても水槽、水の換らさる溝、鋪石の不完全ゟして水の溜りし處、庭園の水溜等蚊軍を募集するに最も適當なる所なり。蚊の卵より孵化し蛹に達するまで三四週日を要するを以て、其間蒸發し或は地中ゟ浸入し去る水分を雨水或は近傍よりの漲溢を受け補充するゟ足る可きを見計ひて雌蚊のかゝる地を撰擇せし者なり。此は實ゟ六足蟲類に最も著明なる普通の天性を顯すものと云ふ可し。E.A. Butler 氏ハ「池中の六足蟲」と題せる論文中に蚊屬の產卵方法を記述し置られしか、明細確實ゐるを以て玆ゟ之を拔抄せざるを得す。

藁、棒、草莖其他支柱となる可き切片の水上ゟ浮漂しをるを見出せバ、雌蚊ハ其上ゟ二本の前脚を置き、次の一對を輕く水面ゟ觸れしめ、第三對ハ後方ゟ出して互叉し、卵を放下する時に當りて之を保持するか爲めヤットコふ類する作用を爲す。玆に於て長卵圓形の卵を產出し、其長軸を垂直の位地ゟ保ちて互叉せし脚の角頭に置く、夫より引續き產出する卵ハ前と同位地を爲し、漸

各種の强剛なるシンジゲート組織によりて或る有力家の間に富の漸々集合することは、年々此米國大陸に於て害蟲發生の爲め空しく消亡し去る幾多の財產に比すれバ實に言ふに足らさる者なり。

米國人の回復力に富みたると、反別を廣く植付け以て每年の損失をあがのふとの容易なるとも、其損失を國民全体に向て訴ふるに至らず、只各自の日記簿へ記入せらるゝに過ぎざるのみ。應用昆蟲學家は大に玆に注意し、既に成功せし實驗は數大册をなし、今日も猶ほ各州の實驗所に於ても華盛頓の National Depratment of Entomology に於ても孜孜試驗中なりと雖とも一般人民の眼光は未た其何たるを曉らす、數多の昆蟲學士と雖とも猶ほ其緊要なるを知らず、僅に新種新屬等を論して得意とせる者あり。實驗委員の報する所によれバ、今日の所にて一万五千種以上の人類に有害なる六足蟲の豫防試驗は漸く有効の成績を得るに至れりと。數千の効果なき實驗は最後の一有効法を得んか爲め必要不可缺のものなりと雖とも之を記述することなければ其結果を得るに至りし勞苦は幾何はかりなりしや得て知る可からさるなり。我合衆國に於ては人々政府に依賴するの念慮少きを以て、保護金等は元來不必要にして實に緊要なる結果の最大部はさる組織の實驗所より得たる者にあらさるなり。

各箇人の公義心は今日世に有害蟲の發生史として知られをる事實の多分を生するに至りしなり。今回の募集文及他の經濟的研究も多くは此種の精神より出たるものなり。人類の幸福を損害する者なりとて蚊及び蠅に就ては既に數多の論說諸書に記載しありと雖とも、其有益なることに就ては未た之を論したる者あることなし。ランボルン氏の俠豪心は此等の諸點を論定すべきか如し。若し有益なる新知識の發見せらることあらは此れ實に同氏の名譽なり、本年七月十五日氏の發布したる告白文は數多の有要なる論說を喚起し此問題の明解を得るに至るや必せり。

予は此問題を論するに當り左の順序によらんと欲す。

一　發生及構造

全く前と反對なる體端に移りて、巨大なる頭部より突出せる二箇の小さねじれたる角の如き觀を呈す……故に水中にありてデングリカヘシを打ちて浮上るを得るなり。(第三圖)

此の如き變態は二時間以内を費し、水面に於て起るものとす。幾日間蛹の狀態にて生存する者なるや。諸説未た一定せす。當地方に普通なる Culex damnosus に於て予の實驗せし所によれは、八月の好時節にありては僅々二日間にて成蟲に羽化す、然れとも春秋冷氣の時にありては恐くは猶は長時日を要する者なるへし。

成蟲に羽化する前に當りては、大氣を要すると多さを以て上面より擾亂さるゝとあるに非されは、絶へす水面よ浮ひ居るなり。其沈むや甚た急速なりと雖も永く水中に止まると能はす殆と直に浮ひ上るものなり。(つゞく)

## ●ダーウヰン氏ノ自傳(承前)

ハ余ヲメバクッルヲ記憶セシム余ハ氏ニヘンスレー、ウェヂウードノ家ニ於テ出逢ヒ其事實ヲ蒐集スルノ方法ヲ聞キテ甚ダ悦ベリ氏ノ余ニ語リシ所ニ由レバ氏ハ其讀ミシ書籍ハ皆之ヲ購求シ各々ニ就テ其用ニ立ツベキ事實ノ充分ナル見出シヲ成セリ又就レノ書中斯々ノ事實ヲ讀メリヤ是ヲ常ニ記憶セリト蓋氏ノ記憶力ハ實ニ愕クベキ者ナリタレバナリ余氏ニ問テ曰ク如何ナル事實ガ有用ナラムト初ヨリ如何ニシテ知リ給フヤト氏答テ曰ク知ラズ然レドモ天心ノ如キモノアリテ余ヲ導クト斯ノ如ク見出ヲ成スノ習慣ニ依テ氏ハ其文明史中ニ見ルガ如キ總テノ問題ニ就テ愕クベキ多數ノ引照ヲ揭グルヲ得タルナリ余ハ氏ノ書ヲ最モ面白ク感ジ是ナ二度モ讀ミタリ然レドモ氏ノ概括ハ實ニ價値アル者ナリヤ余ハ甚ダ之ヲ疑フバックルハ實ニヨク談話セリ而シテ余ハ殆ント一言モ言ハズシテ其言フ所ヲ聽ケリ又余ハ言ハント欲スルモ能ハザリシナリ何トナレバ氏ハ埒シモ漏スヿナケレバナリファラー夫人ノ唱歌ヲ始メタルトキ余ハ突然起立シテ其歌ヲ聽ント曰ヘリ余去リタル后バックルハ或友人ニ謂テ曰ク(是ハ余ノ兄ガ漏レ聞キタル所ナリ)「ダーウヰンノ書ハ氏ノ談話ヨリ遙カ優レリ」ト

次前者の側面に膠附す、かくして二三百粒も筏形、或は寧ろ、卵塊の兩端少しく上方に彎曲せるを以て、救助船の如き形狀に貼緊す。爾後此の小船は風と波のまに〱數日間水面を浮泛し、日光大氣の作用を受けて發育し、卵内の幼蟲は其居室の狹隘なるを以て卵の底部に存する門戸を推開し、直に水中に投し泳き去るに至る。

孵化せし後ち幼蟲は池澤の縁邊にて水の淺き處に游泳す。其常に深所に在らさるは、時々水面に出て空氣を呼吸せさる可からさると其食餌を深水に求めさるとによるなり。

幼蟲は常に水面に浮ひ居りて其氣管の口孔を正に大氣に接觸せしむ。如此位置にありては上より水の動搖攪亂によりて容易に驚愕し得へしと雖も、水中よりは危險に接するも恐怖すると少し。他の六足蟲成は小魚の迫近するも其安靜をさまたくるとなきか如し。

幼蟲の食餌を求る慣性に付ては吾人の知り得たる處甚た僅少し。死水中に生する腐敗物を食し以て水中の掃除者さりとは、普通の書籍に散見する所なれとも、其事實を確定するに足る可き證跡充分ならさるか如し、而して予の觀察せし所も亦增益するに足る可き事實を發見すると能はざりし。幼蟲の Cyclops cypris 等の如き小蟲を食するは予の實驗せし所なり、又幼き鱒を害するとはWestwood 氏其他の證明せる所なり。

幼蚊の外呼吸器は、體の後端に近く鈍角を爲して歧出せる正直の管にして、(第一圖)（圖は次号に出す）體内の氣管系統と相通す。此の呼吸管を使用せんには幼蟲水面に浮ひ頭部を下になし管口を大氣に接せしむるなり。三四回の變態後幼蟲は蛹と化し、(第二圖)大に其外觀を變す、頭胸脚翅悉く一塊に疊摺し、腹部の關節は水中駛行の爲め展舒し放釋自在なり、故に蛹は頭重く甚た見惡き形狀を爲すと雖とも其輕快にして活潑なると幼蟲の時に於けるか如し、只其異なる所は食物を攝取せざるにあるのみ。

Butler 氏は此時期の形狀を左の如く記述せり。

玆に最も驚くへき變化は呼吸器の變にして、其口孔は

悉ク信ジタリ公一日余ニ謂テ曰ク「何故汝ハ地學ヤ動物學ノ如キ無用ノ贅物ヲ棄テヽ秘學ヲ修メザルヤ」ト當時マホン公ナリシ歷史家ハ其父ノ余ニ此ノ如キ言ヲナスヲ驚キ而シテ氏ノ令夫人ハ甚ク是ヲ愉快トセリ

終ニ余ノ記セントスル人ハカーライルナリ余ハ度々余ノ兄ノ家ニ於テ會シ又余ノ宅ニ於テモ二三度會シタルコアリ氏ノ談話ハ其書籍ノ如ク快活ナリシモ時ニハ餘リ久シク同一ノ事ヲ談ズルノ癖アリタリ余ハ一度余ノ兄ノ家ニ於テ珍ラシキ食事ニ列席シタルヲ記ス客ニハバッベーヂモカーライルモアリキ此兩人ハ談話ヲ好メリ然ルニカーライルハ食事ノ終ルマデ沈默ノ利益ニ就テ演說シ他人ノ言フコヲ許サヽリキ食事ノ終リシトキバッベーヂハ意地惡クカーライルノ沈默ノ演說ヲ謝セリ

カーライルハ殆ンド誰ヲモ皆罵リタリ一日氏ハ余ノ園ニ於テグロートノ歷史ヲ誹テ「汚穢ナル濁水ニシテ其中ニ秋毫モ神靈ナルコ非ズ」ト曰ヘリ氏ノ Reminiscences ノ公ニセラルヽマデ余ハ氏ノ罵詈ヲ以テ幾分カ滑稽ナラムト思ヒタレドモ今日ニ至リテハ是ヲ疑フ氏ノ言語ハ恰モ落膽否全ク失望シタレド心ニ慈悲アル人ノ言ノ如クニ見ヘタリ而シテ氏ノ心一杯ニ笑ヒタルハ誰レモ熟知スル所ナリ余ノ信ズル所ニ由レバ氏ノ慈悲ハ實ニメ虛ナルモノニ非ザリシ但幾分カ嫉妬心ノ其中ニ混ジタルモノアリシナランム氏ガ事物及ビ人物ニ就テ記述スルニ非常ノ力ヲ有セシコハ誰モ疑ハザルベシ余ノ考フル所ニ由レバ氏ノ記述ハマコーレーニ比スレバ遙カ明活ナリ然レド氏ノ人物ニ就テノ記述ガ正當ナリヤ否ヤ是ハ全ク別ノ問題ナリ」氏ハ或道德上ノ廣大ナル思想ヲ人心ニ與フルニ於テハ大ニ功アリタリ是ニ反シテ氏ノ奴隷ニ就テノ說ハ實ニ甚シキモノナリキ余思フニ氏ガ常ニ卑メタル總テノ科學ヲ指テ問ハザルモ氏ノ心ハ實ニ狹小ナルモノナリトキングスレーガ氏ヲ以テ科學ヲ進ムルニ適シタル人ナリト言ヒシハ實ニ余ヲシテ愕ロカシム氏ハ余ニ反シテヒユーエルノ如キ數學者ガゴエテーノ光ノ說ヲ評スルコ能ハズトテ甚ク是ヲ誹リタリ氏ハ氷河ガ少シ速ニカ又ハ遲ク動クヤ又

其他ノ文學大家ノ中ニテハシドニー、スミスニ一度ザーン、ミルマンノ家ニテ會シタルヿアリ氏ノ言フ所ハ一言々々實ニ言フ可ラザル程人ニ快樂ヲ與フルモノアリ此ハ恐ラクハ幾分ガ人々ノ若思フニモ因ルナラム氏ハ當時既ニ老耄シタルコーク夫人ニ就テ語テ曰ク「此貴婦人ハ一度余ノ說敎ニ甚ク感動シ或友人ヨリ一ギニーヲ借テ盆ニ入レタリ現今人々ノ信ズル所ニ由レバ余ノ舊友ナルコーク夫人ハ見漏ラサレタリ」ト而シテ氏ハ是ヲ言フニ際シテ一種特別ノ意ヲ含マセ聽ク者皆コーク夫人ハ惡魔ニ見漏ラサレタルナリト解スル樣シタリ氏ハ如何ニシテ此ヲ爲シ得タルヤ余ハ知ラザルナリ

余ハ又一度スタンホープ公(史學家)ノ家ニ於テマコーレーニ會シタリ而シテ其時同坐シタル者ハ余ノ外タヾ一人ナリタレバ余ハ氏ノ談話ヲ聞クニ最モ好機ヲ得タリ氏ハ實ニ愉快ナリキ氏ハ餘リ澤山談話セザリキ實ニ氏ノ如キ人ハ他人ヲシテ其談話ノ方向ヲ變ゼシムルヿヲ容セルヲ以テ自ラ餘リ澤山談話スルヿヲ爲サヾリキ

スタンホープ公ハ一度マコーレーノ記憶力ノ精密ニシテ缺點ナキヿニ就テ余ニ一證ヲ語リタリ數多ノ史學家ガスタンホープ公ノ家ニ於テ集會シ種々ノ問題ヲ討議スルニ際シテ或ハマコーレート說ヲ異ニスルヿアル時初ノ中ハ孰レカ正シキカ書籍ニ質シタリ然レ𪜈後ニ至リテハ誰レモ是ヲ爲サズマコーレーノ言フヿハ皆確ナリト信ズルニ至レリト

又他日スタンホープ公ノ家ニ於テ氏ノ朋トセル史學家ニ會シタリ而シテ其中ニモツトレー及ビグロートヲ見タリ晝飯後余ハグロートト共ニチブニング公園ヲ散歩シ其談話ヲ甚ク悅ビ且其擧動ノ實ニ質朴ニシテ毫モ裝飾ナキヲ悅ビタリ

是ヨリ久シキ以前余ハ歷史家ノ父ナル老公ト時々會食セシヿアリ公ハ奇人ナリキ然レ𪜈公ニ就テ余ノ知リタル限リニ於テハ余ハ公ヲ愛シタリ公ハ公明柔和ニシテ且快活ナリキ公ノ顏貌ハ著シク色黑ク而シテ其衣ハ余ノ見ル時ハ常ニ總テ褐色ナリキ公ハ他人ニ完ク信ズ可ラザルヿヲ

ベキヿハ余ノ種々ノ著述ヲ除テ他ニ何モ有ラザルトリ此等ノ著述ハ如何ニシテ起リタルヤ是ヲ少々記スルハ全ク無益ニ非ザルベシ

余ノ諸ノ著述――一千八百四十四年ノ初ニ當テ余ガビーグル號航海中見分シタル火山島ニ就テノ觀察ヲ出版セリ一千八百四十五年最初一千八百三十九フヰツロイ大佐ノ記述ノ一部分トシテ出版サレタル余ノ「探究日記」ノ新版ヲ校閲スルニ骨折リタリ此余ノ最初ノ著述ノ成功ハ總テ其他ノ著述ノ成功ヨリ最モ余ノ虛榮心ニ媚フ尙ホ今日ニ至ルマデモ此日記ハ續ケテ賣捌カレ獨乙語ニハ二度モ譯サレ又佛語及ビ其他ノ國語ニモ反譯サレタリ此ノ如ク旅行記特ニ科學的ノモノガ其初版后多年ヲ歷タルモ尙ホ賣捌カルヽハ愕クベキナリ此書ノ第二版ハ英國ニ於テ二千部賣ラレタリ一千八百四十六年「南米地質觀察」出版サル余ノ常ニ記シタル小ナル日記余ハ左ノ事ヲ記セリ曰ク余ノ三ノ地學上ノ著述（珊瑚礁ヲ含有シテ）ハ余ヲシテ四年ト半ケ年間斷ナク勉強セシメタリ而シテ今ハ余ノ英國ニ歸リシヨリ既ニ十年ナリ余ノ病ノ爲メニ失ヒタル時日ハ實ニ如何ゾヤト余ハ此等ノ三書ニ就テ別ニ言フベキヿナシタヾ近頃ニ至リテ新版ノ要求アリタルヲ記スルノミ

一千八百四十六年十月余ハ「蔓脚類」ニ就テノ著述ヲ始メタリチリノ海岸ニアリシ𪜈余ハコンコレパスノ貝殼ニ穴棲セルモノヲ發見シタリ此種ハ總テ他ノ蔓脚類ト大ニ異ナル所アリタレバ余ハ是ガ爲メ新シキ部門ヲ造ラザルヲ得ザルニ至レリ近頃ニ至リテ此ニ類シテ穴棲スル一種ハポルトガル海岸ニ於テ發見サレタリ余ノ發見シタル種ノ搆造ヲ了解セン爲メニ餘ノ他ノ種ヲ數多解剖スルヿ必要トナレリ斯クシテ余ハ遂ニ全部類ヲ研究スルニ至レリ余ハ次ノ八年間此部類ニ就テ間斷ナク研究シ終ニ當時知ラレタル總テノ種ヲ記載セル厚キ書二卷ト化石トナリタル種ヲ記載セル薄キ書二卷ヲ出版セリサーエ、リツトン、バルウアー其小說中敎授ロングナルモノガ蔓脚類ニ就テ大ナル書二卷ヲ著シタルヿヲ記セシ𪜈余ヲ想像シタルヿ疑ナシト信ズ

毫モ動クモノニ非ザルヤ是等ヲ骨折リテ研究スルハ愚ノ至リナリトセリ余ノ判斷ニヨレバ余ハ氏ノ如ク科學上ノ研究ニ不適當ナル人ヲ見タルヿナシ

ロンドンニ在リシ間余ハ可成丈種々ノ學會ニ規則正シク出席シ又地學會ノ書記ヲ勉メタリ然レ𪜈此等ノ會ニ出席スルヿ及ヒ普通ノ交際ハ余ノ健康ニ甚ダ不適當ナル故終ニ田舍ニ住居スルヿニ決シタリ而シテ我等ハ爾後常ニ田舍ヲ好シ且都ヲ去タルヿヲ後悔シタルヿナシ

ダウンニ定居セシヨリ現今ニ至ルマデ—一八四二、九月十四日ヨリ一八七六マデ

我等ハサレー州及ビ他ニ於テ種々無益ニ穿鑿セシ後遂ニ此家ヲ見出シテ是ヲ購ヒタリ余ハ白石灰岩ヲ以テ成レル地ニ固有ナル植物ノ種々異ナリタル樣貌ヲ呈シ余ノ中州ニ於テ常ニ見タルモノト大ニ異ナル所アルヲ悅ビ加之此處ノ實ニ閑靜ニシテ且田舍風アルヲ一層悅ベリ然レ𪜈此處ハ或獨乙ノ記者ガ述ベタルガ如キ僻地ニ非ザルナリ此記者ノ言ニ由レバ余ノ家ハタヾ小馬ノ通ヒ得ル道ニ由テノミ達スルヲ得ルトハサテモ我等ガ是處ニ居ヲ定メタルハ我等ノ豫想セザリシ一ノ便利ヲ有セリ即チ小供等ガ面會ニ來ルニ甚ダ便利ナルヿ是ナリ

我等ノ如キ閑靜ナル生涯ヲ送リタル人ハ數多アラザルベシ時々親戚ノ家ヲ訪ヒ又ハ海瀕及ビ其他ニ出行ク外我等ハ何處ヘモ行キシヿナシ我等ガ是處ニ來リシ後漸時ハ我等モ交際ニ出行キ又朋友ヲ招待シタリ然レ𪜈余ノ健康ハ此等ノ騷擾ニ因テ大ニ害ヲ受ケタリ蓋是ニ因テ甚シキ振ヒヤ吐出ヲ催シタレバナリ故ニ余ハ止ヲ得ズシテ多年間總テノ交際ヲ辭セリ而シテ是等ノ交際ハ常ニ余ニ愉快ヲ與ヘタレバ斯ノ如ク交際ヲ辭スルハ實ニ余ヲシテ不自由ヲ感ゼシメタリ又同一ノ理由ニテ余ハ友人ヲ此處ニ招クヿ甚ダ稀ナリキ

余ノ第一ニ樂トナシ又余ノ生涯中唯一ノ仕事ハ即チ科學上ノ研究ナリキ而シテ是等ノ研究ニ由テ得ル所ノ愉快ハ暫時ハ余ノ日々感ズル不愉快ヲ全ク忘却セシムルカ或ハ全ク是ヲ霧散スルニ至ルナリ故ニ余ノ遺レル生涯中記ス

シタルヿヲ說明シ能ハザルヿモ又同ジク明白ナリキ—例ヘバ啄木及ビ樹上ニ棲息セルかへるノ樹ニ登ルニ適シ數多ノ植物ノ種子ノ鈎或ハ羽ヲ有シテ風ノ爲メ散布サルヽニ適シタルガ如シ余ハ此等ノ適應ヲ常ニ賞歎シタリ而シテ總テ是等ガ說明サルヽニ至ルマデハ間接ノ證據ヲ擧ケテ種ノ變遷シタルヿヲ證明セントスルモ殆ンド無益ナリト余ハ思考シタリ

余ノ英國ニ歸リタル後余ハ斯ク思考シタリ曰クライエルガ地學ヲ硏究シタル例ニ倣ヒ且家畜及ビ培養植ノ變化及ビ自然界ニ於ル生物ノ變化ニ關シタル事實ヲ總テ蒐集シルトキハ此全問題ヲ幾分カ明ニスルニ至ルベシト余ハ一千八百三十七年七月始メテ記錄ヲナセリ余ハ正シクベーコン主義ニ從ヒ尠シモ自己ノ說ヲ立ルヿナク特ニ家畜及ビ培養植物ニ就テ版ニシタル問、熟練シタル家畜師及ビ植木屋ト談話スルヿニ由テ又廣ク讀書スルヿニ由テ大ニ事實ヲ集メタリ今余ノ讀ミ且抜粋シタル書籍ノ目錄ヲ見ルトキハ其中ニ雜誌及ビ記事ノ引續キタルモノモアリテ實ニ愕クニ堪ヘタリ余ハ久シカラズシテ人類ガ動物及ビ植物ノ有用ナル種ヲ造ルハ全ク陶汰ナル秘密ニ因ルヿヲ發見シタリ

一千八百三十八年十月即チ余ノ規則正シク硏究ヲ始メタル後十五ケ月ニ至リテ余ハ偶然樂ノ爲メマルサスノ「人口論」ヲ讀メリ而シテ余ハ是ヨリ先久シク動物及ビ植物ノ習慣ヲ觀察シタル故生存競爭ノ重要ナルヿハ熟ク之ヲ悟ルヿヲ得タレバ余此時以爲ラク斯ノ如キ場合ニ於テハ有益ノ變化ハ保存サレ有害ノ變化ハ消滅スルノ傾向アルベシ斯ノ如クナルトキハ遂ニ新種ノ起ルニ至ルベシト左レバ余ハ此ニ試ムベキ說ヲ得タリ然レドモ余ハ癖見ナキヿヲ甚ク勉メタレバ暫時ノ間ハ余ノ說ノ大構ダモ決シテ認メザルベシト決心シタリ一千八百四十二年六月ニ至リテ余ハ鉛筆ニテ三十五頁ニ余ノ說ノ概畧ヲ記スノ愉快ヲ自ラ許シタリ此ハ一千八百四十四年ノ夏二百三十頁ニ擴張シテ可ナリニ寫シタルガ余ハ今ニ尙ホ此ノ寫ヲ所持セリ

（未完）

余ハ此部類ニ就テ八年間研究シタルモ日記ニ由レバ其中殆ンド二年間ハ病ノ爲メ全ク消失シタリ余ハ此病ノ爲メ一千八百四十八年數ケ月間水浴ノ爲メマルバアンニ赴キタリ余ハ是ガ爲メ大ニ快復シ歸リタル後又再ビ余ノ研究ヲ續クルヲ得タリ余ハ當時實ニ不快ナリシ故一千八百四十八年十一月十三日親父ノ死去サレタル時其葬式ニ伴フコトヲモ得ズ又其遺言ヲ行フモノノ一人タルコトヲモ得ザルガ如キ有樣ナリタリ

余ノ思フ所ニ由レバ蔓脚類ニ就テノ書ハ大ニ價値アリト信ズ何トナレバ余ハ數多ノ新奇ナル種ヲ記載セシノミナラズ種々ノ部分ノ相同ヲ證明シタレバナリ余ハ粘着器ヲ發見セリ但余ハ最初粘着腺ニ就テ甚シク過チタリ又是ニ加ヘテ或屬ニ於テハ雌雄兩性ノ動物ニ寄生セル所ノ補充ノ小ナル雄ヲ發見セリ此終ノ發見ハ今日ニ至リテ遂ニ充分証明サレタリ然レドモ一時ハ或獨乙ノ著者ガ此ヲ以テタヾ余ノ甚シキ空想トナセシコトアリキ蔓脚類ハ種々其形狀ヲ變ジ且分類スルニ甚ダ難キ種ヲ含有ス故ニ余カ是ヲ研究シタルハ後「種ノ起原」中自然分類ノ原理ヲ講論スルニ際シテ余ニ大益ヲナシタリ然レドモ此著述ハ左程時日ヲ消費シタル丈ノ價値アリシヤ余ハ之ヲ疑フ

一千八百五十四年九月ヨリ余ハ全キ時ヲ費シテ種ノ變遷ニ關シテ余ノ夥シク蒐集シタル記錄ヲ整頓シ又觀察實驗ヲ爲シ始メタリビーグル號航海中余ハパンパス地層中現今棲息スル所ノありくひノ如ク甲ヲ以テ蔽ハレタル化石動物ヲ發見シ第二、又大陸ヲ北ヨリ南方ニ向テ行クトキハ類似シタル動物ガ互ニ交代スル其模樣ヲ見第三、ガラペーゴス群島ノ動植物ノ多分ガ南米ノ動植物ノ性質ヲ具有シ且又島々幾分カ其生物ヲ異ニセル其模樣ヲ考ヘテ大ニ感ズル所アリタリ蓋此等ノ群島ハ地學上甚ダ古シト謂フ可ラザレバナリ

斯ノ如キ事實及ビ其他ノ事實ハタヾ種ナルモノハ漸次變遷シタリトノ假定ニ由テノミ說明シ得ルコト明ナリ而メ問題ハ常ニ余ノ腦裡ニ浮ビタリ然レドモ外界ノ作用モ又生物ノ意志モ（特ニ植物ノ塲合ニ於テ）其妙ニ各々ノ習慣ニ適

動物學雜誌第參拾號
明治廿四年四月十五日發兌

## ●日本鳥類ノ分布ニ付キ

飯島魁

此編ハ余ガ去月ノ動物學會ニ於テ標品ヲ示シナガラ演シタル者ニシテ原料ハセーボーム氏ノ新著 The Birds of the Japanese Empire 中ノ一章ヨリ取リタルモノナリ本邦ニ見ル鳥類ノ地理的分布ニ面白キ點尠カラズ、其鳥類ヨリ推スニ我國ハ純粹タル古北區域(パレアークチック)ノ性質ヲ示スモノナリ、目下學士ノ確認スル所ニテハ國内ニ分布スル鳥類ノ種數ハ三百八十一種ニシテ中凡ソ七十五%ハ古北種ナリ而シテ殘リノ二十五%ハ熱帶種並ニ日本外ニテ生殖スルモ未ダ發見セザル種ナリ、左ニ之ヲ詳記ス

古北區域ニ屬スル種、〆二百八十五種 ＝ 七十五%

- 古北全域共有ノ種 〆百四十七＝三十九%
  - ○北極周圍ニ分布スル種ニシテ日本ニ見ルモノ……四十九種
  - ○古北區域ノ東西共ニ見ルモノ……七十一種
  - ○古北種ナルモ東西部ニテレースヲ異ニスルモノ……二十六種
- 古北區域東部ノミニ見ル種 〆百三十九＝三十六%
  - ○玄べりわ及ビ歐洲東部ニ屬スル種ニシテ日本ニ在ルモノ……十七種
  - ○玄べりわ東部ノミニ屬スル種……九十五種
  - ○大平洋兩岸ニ見ル種……二十七種

此外

- ○熱帶種ニシテ日本ニ見ルモノ……四十七種＝十二%
- ○日本ノミニテ生殖スト知ラレタルモノ……四十九種＝十三%

（以上）二十五%

總數三百八十一種

# 東京動物學會記事

●會員彙報

入會

農科大學動物學室　落合總彥君
理科大學簡易科　伊藤知二君
仝　大作宗二郎君
福島縣尋常師範學校　根本莞爾君
靜岡縣尋常師範學校　小笠原利孝君
農科大學乙科生徒　仲吉朝助君
仝　町田永五郎君
醫學士　鶴田禎次郎君
理科大學簡易科　山崎治太郎君

會員丘淺次郞氏ハ動物學研究ノ爲メ去ル二月十五日獨國ヘ向ケ出發シタリ

會員波江元吉及ヒ土田兎四三ノ二氏ハ動物採集ノ爲メ去ル二月十三日對馬島ヘ向ケ出發シタリ

●寄贈書目　一、二ノ兩月中本會ニ領收シタルモノ左ノ如シ

東京醫學會雜誌第五卷第一第二第三第四號　東京醫學會
牧畜雜誌第四十七、八、九、五十號　牧畜雜誌社
日本園藝會雜誌第廿號廿壹號　日本園藝會
擴農會雜誌第十七、十八、十九號　擴農會
植物學雜誌第五卷第四十七、四十八号　植物學會
北水協會報告第五十九、六十號　北水協會
東洋學藝雜誌第百拾貳、百拾三號　東洋學藝社
成醫會月報第百八、百九號　成醫會
大日本水產會報告第百五、百六號　大日本水產會
日本博物學年表　白井光太郎君

正誤

前號五三頁下段三行目甚シノ下キモノニノ四字ヲ脫ス。
九一頁下段最後ノ行學者ハ學名ノ誤

〆三十六種

右ノ表ニヨルニ凡ソ特有種ノ最モ多キハ地理上位置ノ孤立シタル地方ナリトス、蓋シ種ハ年ヲ經ルニ從ヒ種々ノ原因ヨリシテ變化スベケレドモ種數ノ增加スルハ孤立スルニ非ザレバ起ルノ理アラザレバナリ、甲乙ノ二地方ガ相隔タリテ交通ヲ許サヾルコソ本ト同一種ナリシ者ガ甲ニテハい種ニ乙ニテろ種ニ分化スルヲ得ルナリ

今又從來日本ニテ發見シタル總テノ鳥種ヲ其國內分布ノ範圍ニヨリテ分類スレバ左ノ如シ

○留鳥及ビ候鳥ニシテ未ダ曾テ千島以南ニ發見セザルモノ……二十種

○北海道以南ニ發見セザルモノ（留鳥七、冬來者二十五）……三十二種

○北海道及ビ日本南部ニ共有ナルモノ（留鳥百八、冬來者八十三、夏來者四十七）……二百三十八種

○日本南部ニ發見スルモ北海道ニ見ザルモノ……六十一種

此他

○琉球諸島ニ見ルモノ……十七種

○小笠原諸島ニ見ルモノ……九種

○朝鮮海峽諸島ニ見ルモノ……三種

○伊豆七島ニ見ルモノ……一種

〆三百八十一種

以上ノ數ハ勿論大凡ノ勘定ニテ目下北海道以南ニ來ラズトスルモノモ稀ニハ南部ニ渡ルコアルベシ又反對ニ日本南部ノモノヲ後來北海道ニテ發見スルナキヲ保シ難シ

爰ニ面白キ一事アリ、ソハ或ル種ノしべりや東部及ビ日本本島ニハ在ルモ北海道ニ無キコナリ、例ヘバをながどりハ黒龍江地方及ビバイカル湖ノ地方ニ居リ、日本々島ニモ稀ナラザル鳥ナルガ北海道ニハ未ダ之ヲ發見シタルコナシ、尙ホ此類ノ種ハいぬわし、はちくま、さしば、まぐそだか、みやまはゝしろ、しろまゆしなひ、ぬへじなひ、いわひばり、らいふり、とらふもづ、みやまがらす、こくまろがらす、くろつる、しろつる、なべつる、こうの

熱帶種ニシテ日本ニ見ルモノヽ%ハ古北區域ノ西部即チ歐洲ニテ見ルエチヲピア種ノ%ニ殆ド等シ、而シテ日本鳥界ノ七十五%ガ古北種ナル上ハ之ヲ古北區域中ニ入レテ當然ナリトス、然ルニ玆ニ奇態ナルハ日本ノ植物、蝶類、爬蟲類、兩棲類等ハ反テ近古(チアークチック)區域即チ北米ノ東部ト近緣ヲ示スヿ是ナリ、北米西部ヲ隔テタル日本ト北米東部間ニ如何ナル關係ノアルヤ想像スルニ難シ、勿論斯ノ如キヿハ他ノ世界部ニモ在リテ後來ノ研究ヲ待チテ説明シ得ベキノミ、例ヘバマダガスカルノ爬蟲類ガ亞弗利加ニハ似ズシテ反テ南亞米利加ニ似ルハ其一例ナリ

日本ハ古北區域中ニテ滿州部ニ屬シ此部ノ大陸トハ對島ニヨリ連續セリ、北ニハ樺太及ビ千嶋ニヨリ古北區域ノシベリヤ部ト連リ又南ニハ琉球諸嶋及ビ臺灣ニヨリ東洋(オリエンタル)區域(リジヨン)ノ印度支那部ト連レリ、左レバ日本ニ古北種ト共ニ幾分カ熱帶種ヲ見ルヿ了解シ易シ、

日本外ニテ未ダ曾テ生殖スルヲ知ラザル種ハ前表ニモアルガ如ク四十九種アリ、此中數種（例ヘバくろつぐみ、めぼそ、やまがら、のじこ、みそさい、ひよどり、ゑなが、大ゑぎ等凡ソ十三種）ハ候鳥ニシテ秋ニ至リ西ハ朝鮮、南ハ濠洲ニ至ルマデ旅行スルモノナリ、此等ハ後來或ハ外邦ニテモ生殖スルヲ發見スルヿアルベシ、依テ之ヲ四十九種中ヨリ除去スルモ猶ホ少クモ三十六種ノ日本固有ノ鳥アリ、今後研究ノ進ムニ從ヒ日本特有ノ鳥種カ增ストモ減ズルヿハ決シテアラジ、今右ノ三十六種ヲ各地方ニ割付クレバ左ノ如シ

○北海道ニ特有ナルモノ……………………一種
○北海道及ビ南部ニ特有ナルモノ……………八種
○日本南部ノミニ特有ニシテ北海道ニ在ラザルモノ……………………八種
○對島ニ特有ナルモノ……………………一種
○伊豆七島ニ特有ナルモノ……………………一種
○琉球ニ特有ナルモノ……………………九種
○琉球及ビ小笠原島ニ特有ナルモノ……………一種
○小笠原島ノミニ特有ナルモノ……………………七種

ヲ爲シテ肉鰭外ニ突出ス故ニ今全形ヲ見亙スニ宛モ三角錘ヲ遠見スル如シ外皮面ハ圓滑ニシテ背中線ニ僅少紫斑ヲ有ス肉鰭ハ甚ダ廣ク全ク体ノ細キ部分ノ兩側ニ附着ス左右兩鰭ノ概觀稍ヤ圓形ヲ爲ス頭部ハ割合ニ大キク且ツ大ナル眼球ヲ具フ口縁傘膜(buccal menbrane)ハ七個ノ突起ヲ有ス脚長順式ハ四、三、二、一ニシテ第四脚ハ第一脚ノ三倍位也而シテ第四脚ノ背外側面ニハ能ク發達シタル鰭様膜ヲ有ス腕脚吸盤ハ何レモ二列ニシテ有柄歪形ニシテ角質環ハ其上半縁ニ細キ牙ヲ有ス觸脚ハ非常ニ長ク且ツ細クシテ其横斷面ハ圓ルク處々二三せめ位相隔テヽ一種異様ノ吸盤ヲ有ス脚頭ハ長ク之レニ附着スル吸盤ハ二列ナレ圧却テ腕脚ノ者ヨリ小サク長キ柄ヲ具フ其角質環ハ鋭キ牙ヲ有ス牙モ上半縁中央ニ位スル者ニ限リ甚ダ長クシテ内ニ曲リ居ル交接器ハ不明呼出水管ノ基部兩側即チ其外套膜ト相接合スル處ニ於テハ各一個ノ丸ルキ凹斑アリ斑内各更ニ一個ノ軟骨牙アリ是レ外套膜ニ在ル所ノ軟骨突起ト喫ミ合ヒ以テ其接合ヲ堅固ニスル爲也ト云フ

介壳ハ角質ニシテ薄ク細ク概形鎗尖ノ如シ然レ圧後ノ方二分一程ハ管狀トナリ居ル也

標本二個(共ニ雌性ナルガ如シ)　此怪物二十年九月相州三浦郡三崎ナル帝國大學實驗場ノ賜モノ也体、頭脚、三部ノ總長三十六せめニシテ内体眞長十四せめ内……六せめハ内臓ヲ含ム部分ニシテ次ノ六、五せめハ其管狀部殘ル一、五せめハ尾端嚢狀部也肉鰭ノ長徑七せめ左右兩鰭ヲ通ジタル横徑モ七せめ也第四脚ノ長サ二十一、五せめニシテ其横斷面一せめ位也傘膜ハ全ク欠除ス觸脚ノ全長九十六せめアリテ其脚頭ハ四せめ位之レニ附着スル吸盤ノ柄ノ長サハ五せめ位也尤モ此柄脚頭兩端ニ進ムニ從テ漸々短ク遂ニハ無柄ノ如クナル也

他書所載產地　地中海

Family, Ommastrephidæ.

Genus, Ommastrephes.

**1. Ommastrephes Pacificus,** *Appellöf.*　(するめひか)

とり、こしやくしぎ、はくがん、はくてう等數多アリ、此事奇ナルニ似タレド之ヲ說明スルヿ難事ナラズ、此等諸種ノ一部分ハ冬來者ニシテ冬北ヨリ南ニ渡ルモノナルガ北海道ノ冬ノ餘リ寒キガ故ニ此ニハ止マラズ、只通リ過ギルノミニテ日本本島ニ至リテ冬ヲ超過スルモノナラン、又一部分ハ日本南部ニテ生殖スルモノナルガ夏時ノ同温線ヲ案スルニ日本々島ト黑龍江地方ハ凡ソ同季候ナルモ北海道ハ兩地方ヨリモ温度低シ、是ニ依テ觀ルニ兩地方ニ共通ナル種ガ北海道ニ渡ラザルモ了解シ難キニ非ズ、季候ノ異同ハ鳥類分布ヲ定ムルニ甚ダ力アルモノナリ、彼ノ津輕海峽ヲブラキストン線ト名ヅケテ鳥類分布上一ノ區劃線トスルノ價値アルハ海峽ノ幅ニ原由スルニ非ズ、又海ノ深キガ故ニ非ズ、只ニ數多種類ノ分布範圍ヲ區界スル或ル同温線ガ該海峽ヲ通過スルガ故ナリ

しべりあ及ビ北海道ニ共有ナル留鳥ニシテ津輕海峽以南ニテハ甚ダ近似セル異種ニヨリ代表セラルヽノ例三アリ即チ

○やまげらノ代リニ日本々島ニハあをげらアリ

○みやまかけすノ代リニ本島ニハかけすアリ

○しまゑながノ代リニ本島ニハゑながアリ

（完カラズ）

# ●理科大學標本日本頭脚類目錄

Family, Chilotuthidæ.

Genus, Chilotuthis.

**Chilotuthis Veranyi,** *Fer.*

所載書目 (Literature)

Tryon, p. 165, pl. 70, Figs. 265.—271.

D. Orbigny, Ceph. Acet. 1835.

F. E. Weiss, Q. J. Micr. Sc. Vol. 29, p. 77, pl. VIII, Figs. 4.—7.

Brook, morph. Jahrb.

此種ノ特性体ハ圓錐形ニシテ甚ダ長ク其後部二分一程ハ細ク稍ヤ管狀トナリ居テ內臟ヲ含ムヿナク單ニ一種粘質物ヲ以テ滿サレ居ルノミ而シテ其最尾端ハ急ニ太ク嚢狀

頭部ハ大キク腕脚モ太ク長ク体長ノ三分二ニ及ブ其内第二第三ノ二ケ對脚ハ稍ヤ扁平クシテ其外側面ニハ舟形ノ肉鰭ヲ具フ腕脚吸盤ハ何レモ二列アレ𪜈兩側ヨリ壓迫サレテ一列ノ者ノ如ク見ユ角質環ハ全縁ニ鋭芽ヲ有ス牙モ上半縁ヨリ生ズル者(七個乃至九個)ハ太ク長ク且内方ニ彎曲シ居ル也觸脚ハ甚ダ長ク腕脚ノ二倍半ニ達ス而シテ脚頭モ順シテ大也吸盤ハ四列ナレド側列ハ甚ダ小ニシテ長キ柄ヲ具フ小ナル吸盤ハ腕脚ト同様ノ角質環ヲ有スレ𪜈大ナル者ハ甚ダ異様ノ角質環ヲ有ス則チ全縁相對シタル處ニ四個ノ稍ヤ大ナル鋭牙ヲ有ス其間ダニ亦七八個ノ極メテ小サキ鋭牙有リ此小牙モ吸盤ノ前外縁ニ當ル處ニ生スル者ハ他部ニ生ズル者ヨリ常ニ少シク大ナル如シ

標本(二個♂一♀一) 十八年九月得相州小田原邊ノ産二個共同大体長二十四せめ体巾廣キ處ニテ八せめ肉鰭ハ長サ十せめ巾十八せめ第三脚ノ長サハ十四、五せめ觸脚ノ長サハ三十八せめ位而シテ總長實ニ六十八せめ也

4. Ommastrephes, *Sp.*(するめいか)

標本第一(四個) 東京市場年月日不明体長十四せめ肉鰭長サ六せめニシテ巾ハ八、五せめ也觸脚ハ長サ二十四せめ也

標本第二(五個) 同ジク東京市場十八年九月得タル者ナレ𪜈標本甚ダ不完全ニシテ其何レニ近キ種ナルヤヲモ判シ兼ヌル有樣也

此者等其概形ニ於テ前種ニ能ク相近似スト雖𪜈觸脚大吸盤ノ角質環ハ全邊ニシテ單ニ上半縁中央ニ一個小牙ヲ有スルノミ又肉鰭ハ扇子形ヲ爲サデ稍ヤ三角形ヲ爲ス也

## ●遺傳(前號ノ續キ)

石川千代松

前ニ述ヘシ所ノ簡單ナル場合ニ於テハ生殖細胞ノ分裂スルニ當リ成形及ヒ生殖ノ二細胞類ヲ生スルモノニシテ其生殖細胞ハ母ナル生殖細胞ト全ク同一ナル分子的搆造ヲ具ヘ全ク同一ナル發生順序ヲ經過セサルヲ得ス、而シテ多細胞動物變遷進化ノ順序ハ其初メニ起リタル變化ノ繼

146

異名 (Synonym).

Todarodes pacificus, *Steentrap*.

所載書目 (Literature).

Hoyle, chall. p. 163, pl. XXVIII. Figs. 1,—5.

Steentrap, Ommat. Blackspr. pp. 83, 90, etc.

Appellöff, Jap. Ceph. p. 35, pl. III, fig. 8,—10.

此種体全形細ク長ク殆ンド眞正ノ圓柱形チ爲ス其尾端ハ漸次尖リテ他種ノ如ク急ニ尖リ居ラズ頭部ハ大キク腕脚ハ其長サ何レモ殆ド比シク二列ノ吸盤ヲ有ス而モ第二第三脚ニ附着スル者稍ヤ大也角質環ハ其上半縁ニ於テ七、八或ハ九個ノ鋭牙ヲ有ス觸脚ハ寧ロ短カク体長二分ノ一前後也脚頭ハ大ナル方ニテ觸脚全長ノ殆ンド二分一ヲ占ム吸盤ハ四列ニシテ中央ノ二列ハ甚ダ大也大ナル者ノ角質環ハ全縁ニ鋭牙ヲ有ス其内上半縁ニ生ズル七八個ハ稍ヤ大也

標本(二個)　明治十五年九月東京市場ニテ得二個共同大ニシテ体長二十、五せめ第三脚ノ長サ十一せめ觸脚ノ長サ十五、五せめ肉鰭ハ長サ八せめ巾十二せめ也

備考　ほいれー氏ハすてーんとらっぷ氏ノとだろょです、ぱょーひかすトおぺるょふ氏ノをますとれふゑす、ぱょーひかすトハ異名ト爲ス如シト雖モ兩氏ノ擧グル腕脚角質環ニ於テ異ナル所アル如シ

## 2. Ommastrephes, *Sp.* (せるめひか)

此種恐ラク前種ト同一種ナル可ク思ルレモ体形前種ヨリモ細ク觸脚モ短カク之レニ附着スル吸盤角質環ハ全邊ニシテ牙片ヲ有セズ故ニ別種ナルヤ否ヤ未ダ詳カナラズ

標本(七個内雄二個)　産地年月日ノ記入ナシ七個共同大也体長二十一、五せめ肉鰭ハ長サ七、五せめ巾十一せめ第三脚ハ九、五せめ觸脚十二、五せめ也

## 3. Ommastrephes insignis, *Gould.?* (せるめひか)

Tryon, p. 181, pl. 81, Figs. 369,—371. 參照ノ事

体形稍ヤ圓柱形ナレモ其中央ニ於テ巾少シク廣シ而シテ尾端ハ寧ロ急ニ尖リ居ル方也肉鰭ハ稍ヤ扇子形ニシテ体長三分一ヲ占ム呼出水管ハ巾廣クシテ大ナル横孔ヲ有ス

アルヤ否ヤヲ確實ニ知ラサルヲ得ス、
然ルニ此二者共ニ今日迄存セサリシ、——成形部ニ外界ノ刺擊ヨリ生セル所ノ變化カ遺傳セシト云フノ證據モアラサレハ又生物界ノ變遷新化ハ此類ノ遺傳ニ依リテ解明シ得ルモノナリト云フヿモアラス、

此ノ類ノ遺傳ノ存在スルヿハ今日迄觀察上ヨリモ亦實驗上ヨリモ證セラレタルヿナシ、固ヨリ屢々書物ニハ指ヲ失ヒタルヿ及ヒ瘡痕等ノ後裔ニ遺傳セシト云フ例少シトセサレトモ是レ等ハ皆其遺傳セシト云フ時ヨリ前ノ事實明カナラサルヲ以テ理學的ノ評ヲ下スヿハ實ニ難シ、

此類ノ一例トシテ眞ニ理學上ノ價直アルモノトシ多ク引キ出サレタルモノハ何カノ源因ニヨリテ左角ニ膿ヲ生シ爲メニ之レヲ失ヒタル牝牛ヨリ生セル二牛ハ其角ノ甚タ不完全ニ發達セルモノヲ有セリト云フヿナリ、然ルニへんせん氏ハ正シク此事實ヲ評シテ血緣中ノ不具即チ既ニ生殖細胞內ニアルモノナリト云ヘリ、而シテ理學上ニ於テ彼是議論ヲ受ケタル唯一ノ例ハ佛國ノ生理學者ぶらうん、せかまあ氏ノもるもっと獸ニ施行セル彼ノ高名ナル實驗ナリ然レトモ此實驗モ其解說ニ到リテハ攻擊ヲ受クルヿヲ免カレサルモノナリト信ス、

借テ彼ノ實驗ハ如何ナルモノナルヤト問フニ該動物ノ一大神經枝又ハ脊髓神經或ハ腦ノ一部ヲ切斷シテ生セル所ノ不具カ次代ニ遺傳スルト云フ人工ヲ以テ起生セシメタル不具ハ遺傳ナリ即チ一大腰神經枝ヲ切斷スルニ於テ癲癎病ヲ生シ頸部ニアル大ヒナル交感神經ヲ切斷スルトキハ耳ノ形狀ヲ變シ腦ノ一部ヲ切取スルニ於テ眼球ニ變化ヲ生スル等ハ皆次代ニノミナラス五六代ニ至ル迄遺傳スルモノナリト云ヘリ、

然レトモ此等諸例ハ實ニ遺傳ナルヨリハ猶簡單ナル傳染ナラサルヤヲ問ハサルヘカラス而シテ癲癎病ノ例ニ於テハ實ニ黴毒ニ於ケルカ如ク有機体ノ毒質カ生殖細胞ニヨリテ次代ノ動物ニ傳染サル丶モノナランヤト思考シ得ルモノナリ、何ントナレハ余輩ハ此ノ病源ニ付キ未タ少シクモ知識ヲ有セサルモノナレハナリ、然レトモ他ノ例ニアリ

續ニシテ生殖細胞分子内ノ變異ハ何レノ動物ニモ不絶アルヿナルヲ以テ其變化即チ其レヨリ生スル所ノ成形細胞ノ内ニアルモノヽ變化カ有益ナル時ハ淘汰ニ由リテ益々變化スルノ理ナリ、而シテ此變化ノ遺傳スルニハ其生殖質ノ一部分カ卵ノ分裂並ヒニ体ノ發生中ニ用ヒラルヽヿナク即チ少シクモ變スルヿナクシテ次代ノ生物体ニ遷リ行キ早晩生殖細胞トナリテ再ヒ現出スルニアリ、唯タ斯ク考フルニ由テノミ余輩ハ系統發生中ニ起リタル變化カ個体發生中ニ現出スルヿヲ幾分カ説明シ得ルモノナリ、唯タ斯ク考フルニ依テノミ余輩ハ成形細胞カ逐次ニ增加シ逐次ニ分業シテ逐次ニ變遷シ遂ニ又次代ノ生殖細胞ノ分裂增加等ニ於テ又同シキ分業變遷ヲナスヿヲ解シ得ルモノナリ、

何レニ致セ余輩ハ成形細胞上ニ起リタル所ノ變化即チ外界ノ刺撃ニ由リテ生セル變化ノ遺傳スルト云フヿハ考ヒ得能ハサルヿナリ、

實ニ今日明ニ世上ニ識ルヽ所ノ物力ヲ以テ成形部ニ外界ノ刺撃ヨリ生スル變異ノ遺傳ヲ説明スルノ難キヿ否出來得ヘカラサルヿニ付キ度々人ノ思考スル所タリキ然レ𪜈未タ此ノ類ノ遺傳説ヲ到底信シ得ヘカラサルモノナリトナセルモノナシ、

余ノ考ニ依レハ茲ニ此ノ事ニ就キ二個ノ道理アリ、其一ハ右ノ如キ遺傳ノ存在セルカ如キ實驗ノアルアリテ其二ハ此ノ類ノ遺傳ハ種類變遷ノ説明ニ於テ非常ニ有力ナルモノナルヲ以テ之レヲ信セサルヲ得サルカ如クニ思考セルヿナリ、

固ヨリ余輩カ今日世上ニ於テ識ル所ノ物力ヲ以テ説明シ得サルノ現像アリト雖ヘ𪜈必スシモ此レヲ以テ出來得ヘカラサル現像ナリト説明スルヿ能ハザルナリ何ントナレハ余輩ハ猶ホ未タ自然界ニ動ク所ノ物力チ皆識リ盡セリト云フヲ得サレハナリ然レ𪜈他方ニ於テハ又若シ今日迄識レ居ラサル新ナル物力アリテ此現像ヲ起生スルモノトナスニ於テハ余輩ハ注意ニ注意ヲ加ヘ其現像ハ眞ニ存在スルモノナルヤ或ハ之レアルヲ信セサルヲ得サルノ必用

此假説ヲ信スルノ必要ナキコヲ示サントス

余輩ハ生物体ノ諸部ヲ用ユルカ用ヒサルカニ由リテ大變化ヲ生スルコヲ見ルニ於テハ成形部ニ起ル所ノ變化ノ遺傳ヲ信セサルコハ實ニ難ク或ハ出來得ヘカラサルコノ樣ニ見ユルコヲ信ス、世人ノ既ニ能ク知ル如くらまるく氏ハ此説ニ由リテ生物界ノ變遷進化ヲ説明セラレタリ、氏ノ説ニ依レハ麒麟ノ頸ノ長延ナルハ高キ木ノ葉ヲ喰ハントシテ頸ヲ伸延セシニ由リ水禽ノ趾間ニ蹼アルハ其水中ヲ游泳スルニ當リ足ノ趾ヲ廣ケタルニヨルモノナリ、實ニ筋肉ヲ強ク使用スレハ其太サヲ增シ其仕遂ル力ノ增加スルコ、腺モ數々汾泌スルトキハ收縮セスシテ增大シ其汾泌量モ增加スルコハ明白ニシテ誰レモ疑フモノナク余輩ノ体ニテモ多ク使用スル部分ハ大ニナリ其作用モ增加スルコハ余輩ノ能ク知ル所ナリ、用不用ノ結果ハ体ノ他部ニ於ケルト同ク神經系ニモ働クモノニシテぴあのヲ彈スルモノカ手及ヒ指ノ筋肉ヲ速早ニ且ツ非常ニ込入テ働カスルカ如キハづ、ぼわ、れいもん氏カ正シク云ヒタル如ク單ニ此レニ關スル諸筋ノ動作ヲ使ヒ馴ラシタルノミナラス此動作ヲ生セシメル所ノ腦ノ特別ナル神經細胞ヲ使ヒ馴ラシタルカ爲メナリ、此レト同シク腦ノ他ノ作用譬ヘハ記憶ノ如キモ亦用不用ニ由リテ強弱ナラシムルコヲ得ルモノナリ、唯々玆ニ問フ所ノモノハ斯ノ如ク用不用ニ由リテ強弱ナラシメタル變化カ次代ニ遺傳スルヤ否ヤト云フニアリ、らまるく説ニ由レハ無論此遺傳アラサルヲ得ス何ントナレハ此等變化ノ遺傳セサルニ於テハ用不用ノ結果モ後世ニ至リテ疊積スルコヲ得サレハナリ、

然レ圧之レニ反シテ若シ自然ニ於テ一機官カ其使用ニ由リテ能ク發達スルコアラハ該機官ハ之レヲ具フル所ノ生物ノ生存ニ必用ナルコハ通常ノ事實ニシテ然ル時ハ自然淘汰ハ此ノ機官上ニ作用シ其最モ能ク發達セルモノヲ淘汰スルノ理ナリ、然リト雖圧其能ク發達スルノ度ハ決シテ該機官ヲ一生中ニ使用スルノ度ニ關係スルモノニ非スシテ第一ニ該機官ノ生スル所ノ生殖細胞内ニ關係スルモノナリ、又一機官カ一生中ニ發達スルノ度モ決シテ無根

テハ恐クハ生殖細胞ノ傳染ト云フヿヲ得サルヘシトハ云フモノノ前ニ述ヘシ如ク神經枝ニ大變化ヲ生シタルノ動物ハ既ニ病理的ノ有樣ナルヲ以テ其生殖スルヿアルト雖𪜈必ス病理的ノモノニシテ容易ニ感シ易キモノナルヘシ、斯クアリトスルモ固ヨリ何故ニ人工ヲ以テ親動物ニ起生セル變化カ同シ樣ニ子孫ニ現出スルヤト云フヲ解明スルヿ能ハス然レ𪜈是又決シテ然ラサルカ如シ何ントナレハぶらうん、せかまあ氏自カラモ「眼球ニ生スル所ノ變化ハ實ニ種々樣々ニシテ唯一二度ノミ親動物ニ生セシモノト同樣ナリタリ」ト云ヘリ然レ𪜈此等實驗ハ固ヨリ思考中ニ注メ置カサルヘカラス然レ𪜈又其實驗幷ヒニ其是非ヲ判斷スル所ノ實驗、此諸實驗ヲ助クル人ノ性質等ニ至ル迄一々委細ヲ知ラサル上ハ學問上ノ價直ナキモノナリト信スルナリ、

然ルニ今日迄ハ此等ノ事實未タ明カナラス、其後又施サレタル實驗モアレ𪜈此等ハ皆簡單ナル記述ノミニテ其確實ナルヤ或ハ誤解ニ歸スルヤ又其實驗セシ動物ノ子孫等ニ就キテモ充分ニ明白ナラサレハ此等事實ノ明白確實ナルニ至ル迄ハ余輩ハづぼあ、れいもん氏ト共ニ「余輩ヲシテ篤實ナラシメン乎成形部ニ外界ノ刺擊ヨリ生セルノ遺傳ハ唯々或ル事實ヲ解明スルカ爲メニ用ヒタルモノニシテ未タ全ク不解ナル假說ト云ハサルヘカラス」ト云ハントス

然レ𪜈此假說ハ必シモ事實ヲ解明スルニ必要ナルヤ、表面上ヨリ一寸見ルトキハ其實ニ必要ナルカ如クシテ此レナシニ事實ヲ解明セント欲スルハ狂氣ノ如ク見ハル丶モノナリ、即チ玆ニ非常ニ多クノ現像アリテ其全ク此ノ假說ニノミ由リテ解明シ得ルカ如キモノアリ譬ヘハ用不用ヨリ生スル所ノ變化或ハ氣候ノ刺擊ノ爲メニ直接ニ生スル所ノ變化及ヒ習慣ノ逐次ニ疊積シテ生セルカ如クナル本能ノ如キハ實ニ皆一代ニ使用シタル体部等カ次代ニ遺傳スルニ非サレハ變化或ハ本能ヲ後世ノ生物ニ生スルヿヲ得サルモノナリ、

余ハ此ノ諸例ニ於テモ事實ノ明白確實ナルモノニ至テハ

# ●動物解剖手引草(鳥類ノ部)

岩川友太郎

余ハ昨年來動物ヲ實地ニ解剖セント欲スル初學者ノ便ニモガナト思ヒ豫テ高等師範學校博物科生ノ爲ニ編述セル解剖案内ノ中哺乳類ノ部ヲ本誌ニ連載セリ、蓋シ解剖ノ事實タルヤ理論上ノ事ト異ナリ實物ト對照セザルニ於テハ興味薄ク通讀ノ價値ナキ者ナレバ或ハ讀者ノ厭倦ヲ來タスガ如キ虞ナキニアラザレドモ本誌ハ他ニ高論卓説ノ所載アリテ讀者ノ愛讀ヲ購フニ足ルベキハ言ヲ俟タス然リ而シテ特リ解剖ノ事ニ拘ラズ實驗指導ノ道ヲ講スルハ亦本誌發刊ノ目的中ニ在ルヲ信ズルカ故ニ余ハ更ニ本稿ヲ繼續セント欲スルナリ、知ラズ有志ノ諸君刀ヲ執リテ實地ニ就キ手引草ノ手引草タル所以ヲ翫味スルアラハ余ノ幸甚之ニ過キザルナリ、行文中眼目タル名稱ニハ環点ヲ附シテ讀者ノ注意ニ供フルヿ哺乳動物ノ部ニ於ケルト一徹ニ爲セリ、然レドモ既ニ前文ニ掲ゲタル原語ハ之ヲ省畧セリ、讀者幸ニ之ヲ諒セヨ

## どばと(Columba domestica, Gmel)ノ解剖

### (甲) 骨骼ノ部

第一項 骨骼ヲ滿足ニ研究セントスルニハ全成セル鳥ノ骨ト二三週日モ經タル雛ノ骨ト二個ノ骨骼ヲ準備スベシ、特ニ雛ノ骨ヲ要スル所以ノモノハ頭骨、薦骨、骨盤等ヲ搆成セル諸骨全成ノ後ハ互ニ密着シテ其區域ヲ明視スルヿ能ハザルヲ以テナリ、骨ハ豫メ肉ヲ取リ去リタル後冷水ニ漬ケ置キ或ハ暫時煮テ後ニ肉ノ細片ヲ除クベシ、但シ成鳥ト雛トニ隨テ其時間ノ長短ヲ斟酌スルヲ要ス、而シテ頸椎骨ハ之ヲ分離シタル後糸ヲ以テ連繫シ肢骨ハ一側ノ者ノミ分離シ他側ノ者ハ靱帶ニテ繫留セラレタル儘之ヲ保存スベシ、其他肋骨ハ椎骨部ト胸骨部トノ間ヨリ分離シテ椎骨部ハ椎骨ニ附着セシメ胸骨部ハ胸骨ニ附着セシムベシ又頭骨ハ細鋸ヲ以テ之ヲ縦截スベシ

第二項 第一着ニ左ノ述ブル所ノ骨骼全般ノ搆造ヲ預

ナルモノニ非スシテ該機官ノ始メヨリ定限アルモノナリ、身ノ丈ケノ小ナル質ノ人ヲ何程能ク養フト雖ヘ𪜈通常人ヨリ長大ナラシムルヿ能ハサルカ如ク小弱ナル質ヲ始メヨリ具フル人ノ筋肉ハ幾何程使用スル𪜈へるきうるノ力ヲ生スルヿ能ハス或ハ又性質愚鈍ナル人ノ脳ハ幾何程多ク使用スル𪜈らいぷにっつ或ハかんとノ思想力ヲ生スルヿ能ハス、而シテ同シ使用ノ仕方ニテモ其質ノ始メヨリ宜シキ機官ハ其悪シキモノニ比スレハ其發達ハ宜シキモノナリ、故ニ淘汰力カ小弱ナル個体ヲ淘汰スルニ當リ其性質即チ既ニ其生殖細胞ノ性質ノ小弱ナルモノヲ淘汰シ去ルモノニシテ一個一個ノ一生中ニ得ル所ノ使用ノ結果ハ此淘汰ノ算用中ニ入リ來ラサルナリ何トナレハ一種生物中ノ各個体ノ其機官ヲ使用スルノ度ハ互ヒニ同様ナルモノナラサルヲ得サレハナリ、故ニ又一機官カ世代ヲ經テ漸次ニ發達スルヿハ該機官ヲ一生中ニ使用セルノ結果ノ疊積セルヨリ生セルモノニ非スシテ宜シキ性質ヲ具フル所ノ生殖質ノ疊積セルニヨルモノナリ、

右ニ述ヘシヿニ付キ或ハ又一種動物カ外界ノ變セルカ爲メニ其体部ヲ同様ニ使用スルト云フ事ヲ疑フモノモアラン然レ𪜈此疑ヒモ一二ノ定リアル例ヲ示サハ直チニ解クルナラン、譬ヘハ野鴨ヲ畜養スルニ當リ何レノ鴨モ皆歩行スルノ必用ヲ感シ爲メニ其脚筋ヲ從前ヨリ多ク使用セルナラン、此レト全ク同シク自然ニ於テモ何ニカノ源因ヨリシテ一種動物ノ生活上ニ變化ヲ生シ爲メニ或ル一機官ヲ多ク使用セサルヲ得サルノ必用ヲ生シタル𪜊ハ何レノ個体モ皆其具フル所ノ質ニ任セテ該機官ヲ使用シ變シタル有様ニ應化スルモノナリ、然レ𪜈其多ク使用シ得ルヤ否ヤノ度ハ各個体ノ生殖細胞質ニアルモノニシテ淘汰ノ各個体間ニ生スルニ於テ各成長セルモノニ淘汰ヲ起生スルカ如キハ單ニ表面上ノヿニシテ其實ハ各個体ノ生殖細胞質ノ強弱ニ關スルモノナリ、

然レ𪜈体ノ一部ヲ使用スルニ由テ其部ノ發達ヲ促スヿハ又其之ヲ使用セサルニヨリ發達ヲ止ムルヿ即チ其退化ヲ導クヿニ於テモ同理ナラサルヲ得サルナリ、(以下次號)

(九)前關節突起ハ各神經突起ノ前面ヨリ前進セル强大ノ突起ニシテ其平坦ナル關節面ハ上内方ニ向ヒ以テ前位椎骨ノ後關節突起ニ由テ蓋ハレリ

(十)後關節突起ハ右神經突起ノ後面ヨリ起レル同樣ノ突起ニシテ其關節面ハ下外方ニ向ヒ以テ次位椎骨ノ前關節突起ヲ被覆ス

(十一)横突起ハ各神經突起ノ外側面ヨリ外方ニ向ヒ突出セル突起ニシテ其末端ノ下面ニ一ノ小ナル結節關節面ヲ具ヘ以テ肋骨結節ノ關節ニ供フ

(十二)肋骨頭關節面ハ椎体ノ側面前部ニ存セル小關節面ニシテ肋骨類ヲ接セシム

(十三)下突起ハ椎体ノ下面中央ヨリ突出セル一突起ナリ

(十四)肋骨ハ椎骨ノ左右各側ニ關節セル小弓狀骨ニシテ末端ニ至ルニ隨ヒ細弱ト成リ、上端ハ岐レテ背腹ノ二部ト成リ腹部ハ肋骨頭ト名ツケテ椎体ノ肋骨頭關節面ニ接シ背部ハ之ヲ結節ト名ツケ横突起ノ結節關節面ニ接ス

(十五)鈎狀突起(Uncinate process)ハ各肋骨ノ後緣ヨリ後上方ニ向テ突出セル小篇突起ナリ

第四項　其他ノ頸椎骨ニ就テハ左ノ事項ヲ撿スヘシ

(十六)棘狀突起、横突起及ヒ下突起ハ前方ニ進ムニ從ヒ漸々其大サヲ減ジ而シテ椎体ハ第三若クハ第四椎ニ至ルマテ逐次其長サヲ增ス

(十七)最末ノ二頸椎骨ノ中前者ノ肋骨ハ後者ノ肋骨ヨリモ短小ニシテ鈎狀突起ヲ缺キ且ツ其上端ノ肋骨頭ト結節ハ不分明

(十八)自餘ノ頸椎骨ハミナ特立ノ肋骨ヲ有セス然レドモ外觀的ノ横突起ニハ椎動脈ヲ通過セシムル爲ノ一孔即チ椎動脈溝(Vertebrarterial canal)ヲ有シテ此孔ノ外方ニ存スル横突起ノ部分ハ頸肋(Cervical rib)ヲ代表シ而シテ其頭ト結節ハ椎体及ヒ横突起ト互ニ相密着セリ

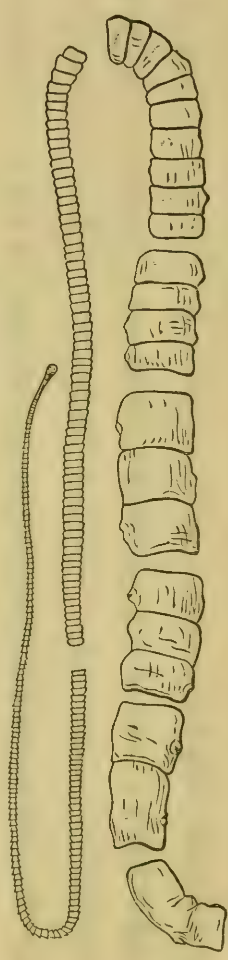
(十九)第二頸椎骨一名樞軸ハ著シク其大サヲ減ジ、前關節突起ハ甚タ小サクシテ神經弓ノ頗ル下方ニ存シ、椎体ノ前面ハ稍々凹陷シテ其背側緣ニ圓椎形ノ齒狀突起一個ヲ具ヘ此突起ノ遊離端ノ腹面ニ傾斜セル一ノ關節面アリ

メ査察ベシ
(一)脊柱ニ於テ頸部ハ十三或ハ十四個ノ頸椎骨ヨリ成リ其最末ノ二個ハ能ク發達セル肋骨ヲ具フレモ胸骨ト結合ヲ爲サス、胸椎骨中前方ノ四個ハ互ニ固着シテ其肋骨ハ胸骨ト關節シ、薦骨ハ著大ニシテ骨盤ニ堅固ナル基礎ヲ附與シ數多ノ椎骨ヨリ成リ最初ノ一個ハ胸椎骨ニ屬スベキ者ニシテ胸骨ト結合セル肋骨ヲ有シ、次ノ二三個ハ腹椎骨ニ相當シ、尚ホ次ノ三四個ハ眞ノ薦椎骨ニシテ其他ノ六個ハ尾椎骨ニ屬シ以上ノ椎骨ハ悉ク膠着シテ薦骨ヲ構成セリ、可動的ニ關節ヲ爲セル尾椎骨ハ六個アリテ最末ニ側扁セル一大骨ヲ具フ是レ尾椎骨ノ變体ニシテ之ヲ鋤骨(Ploughshare bone)ト云フ
(二)頭骨ハ頭腦腔ト上下兩顎骨及ヒ舌骨ヨリ成レリ
(三)胸骨ハ濶大ニシテ前面ニ大ナル縱隆起ヲ具ヘ而シテ五對ノ胸肋骨ト關節ヲ爲ス
(四)翼即チ前肢ノ骨ヲ關節セシムル所ノ肩帶ハ左右各々二骨ヨリ成リ其下方ニ位スル者ハ胸骨ト關節シ而シテV字形ノ叉骨(Furcula)ハ肩帶ノ左右兩半ヲ互ニ結合セシム
(五)後肢骨ハ骨盤即チ腰帶ト關節ヲ爲ス、腰帶ノ左右兩半ハ全成ニ至リテ薦骨ト密着ス

第三項　最末ノ頸椎骨ニ就テ左ノ部分ヲ檢スベシ

(六)椎体ハ前後ニ向テ稍々延長シ其前端ニ於テハ上方ヨリ壓平セラレ後方ノ横斷面ハ殆ント四角形ナリ、前後ノ椎骨ト關節ヲ成ス所ノ前後兩面ハ圓形ニシテ前面ハ左右ニ向テ凹陷シ上下ニ向テ凸隆シ後面ハ其反對ニシテ左右ニ向テハ凸隆シ上下ニ向テハ凹陷セリ
(七)椎体ノ背面左右ヨリ上方ニ向テ突出セル神經突起ハ背面ノ正中ニ於テ互ニ結合シ神經弓ヲ成シテ脊髓ヲ貫通セシムル所ノ髓孔ヲ成ス、各神經突起ハ前面少シク凹ミ後面ハ更ニ深ク凹ミテ脊柱ノ兩側ニ各々一列ノ椎間孔ヲ形成シ以テ脊髓神經ノ發出ニ供フ
(八)神經棘狀突起ハ神經弓ノ背面ヨリ突出セル一個ノ縱扁突起ナリ

第一圖　無鉤絛蟲自然大ノ圖
（ロイカルト氏原圖）



第二圖　有鉤絛蟲ノ頭ヲ凡ソ七倍廓大シタル圖



第三圖　裂頭絛蟲ノ頭（七倍大）



ノ外ニ鉤ヲ備フルモノアリ（第二圖）即チ人類ノ有鉤絛蟲ノ如シ或ハ平低ナル頭ノ各側面ニ一ノ淺キ溝アリテ吸着スルモノアリ（第三圖）即チ人類ノ裂頭絛蟲ノ如シ或ハ四個ノ吸盤ノ變化シタルモノニシテ時トシテハ其上ニ數多ノ鉤ヲ有スルモノアリ（Tetraphyllidæ）或ハ四個ノ吸溝ノ外ニ尚ホ四個ノ出入シ得ル圓筒狀体ニ多鉤ヲ備ヘタルモノヲ有スルアリ（第十圖　Tetrarhynchiæ）

頭ノ次ニ頸ト稱スル稍細キ部アリ（第一圖）頭及ヒ頸ヲ合稱シテScolexト云フ

絛蟲ノ体（第一圖）ハ此すこーれっくすヲ根基トシテ生長シ前ニ述ヘシ如ク數十尺ニ達ス其幅ハ頭頸ノ近傍ニテハ甚タ小ナレドモ他端ニ近ツクニ從ヒ漸々大トナル絛蟲ノ体ハ凡テ片節（Proglottis）ニ分カル而シテ其片節ノ形ハ体ノ諸部分ニ於テ異ナレリ先ツ頭頸ノ近クニテハ片節ハ極メテ小ニシテ且ツ其長サ其幅ニ比シテ短ナレドモ他端ニ至ルニ從ヒ漸々ニ延長シテ幅ト仝シ位ニナリ他端ニ達スレバ遂ニ幅ニ二三倍ス

各片節ノ内部ニハ常ニ雌雄兩生殖器ヲ備フ而シテ此生殖

テ載域(二〇)ト關節ス、雖ノ樞軸ニ於テハ齒狀突起ハ獨立セリ

(二〇)第一頸椎骨一名載域ハ更ニ小サク椎体ハ神經弓ト殆ント同厚ニシテ一ノ環狀ヲ爲セリ、椎体ハ新月狀ニシテ其凹側ハ上方ニ向ヒ椎軸ノ齒狀突起ノ爲ニ一ノ關節面ヲ具ヘ後頭骨ノ髁狀突起(三五)ヲ受容スベキ一ノ關節窩ヲ成ス前關節突起ハ之ヲ缺如シテ後關節突起ハ小ナリ

(二一)椎体ハ環狀軟骨ニ由テ互ニ結合セラレ其間ニ一ノ閉塞セル關節液囊(Synhvial capsule)ヲ存ス、各環狀軟骨ハ其內部ニ突出シテ中心ニ一孔ヲ開ケル軟骨ノ一薄片ヲ成ス之ヲ關節間軟骨(Meniscus)ト名ツケ以テ關節液腔ヲ前後ノ二部ニ區分ス、又細紐ノ如キ椎間靱帶ト稱スル者アリテ關節間軟骨ノ中心孔ヲ通過シ以テ椎体ヲ互ニ結合セリ

（ツヾク）

## ●普通動物學講義第貳拾貳(附圖第五版)

### 第八章(第五門蠕蟲第一綱扁蟲類ノ續キ)

箕作佳吉述

#### 第三目　絛蟲(さなだむし)　Cestoda

絛蟲ノ事ハ本誌第二巻中ニ飯島教授ガ數號ヲ逐フテ記サレタレバ此處ニ委シク述ブルノ必要ナシ唯講義中此目而已ヲ欠クモ体裁上面白カラザレバ大略ヲ左ニ述ブ

絛蟲ハ皆ナ寄生蟲ナリ而シテ人類ニ寄生スルモノモ數種アルヲ以テ其形狀ノ如キハ人ノ普ク知ル所ナリ其構造上寄生慣性ノ結果トシテ大ニ退化ヲ顯ハス處多シ即チ消化器ノ全ク欠乏セルガ如キハ其最モ著シキ点ト云フベシ

絛蟲(さなだむし)ハ其名ノ示ス如ク其形狀概子平低ニシテ非常ニ延長シ且ツ數多ノ片節ニ分カル、ヲ常トス其大サハ僅ニ數み、め、ノ小ヨリ數十めーとるノ大ニ達スルモノアリ第一圖ハ人類ニ寄生スル無鈎絛蟲ノ圖ナルガ之ニ依リテ其外見ヲ知ルヲ得ベシ先ツ体ノ一端ニ頭ト稱シテ凡ソ止針ノ頭ホドノモノアリ此處ヲ郭大シテ示ス時ハ稍第六圖甲ノ如シ即チ宿生ノ腸壁ニ附着スベキ器ヲ備フ無鈎絛蟲ニハ四個ノ吸盤アリテ此作用ヲ爲ス其他ノ絛蟲ニ於テハ吸盤

排泄縱管ハ頭端ニ至リ回轉シテ再ヒ後方ニ向ヒテ走ル縱管トナル但シ前ノ縱管ヨリハ小ナリ又尾端ニ至リテ外界ト通セズ(三版一圖ヲ見ヨ)縱管ヨリ數多ノ小枝枝出シ數回枝分シテ遂ニ毛細管トナリ各毛細管ノ終ニハ氈毛排泄細胞(第一版三圖)アルヿ吸蟲渦蟲ニ異ナラズ

循環系統更ニナシ

体内ノ結組織中ニ固有ナル石灰ノ小粒アリ其何ノ爲メナランヤハ未タ明ナラズ

生殖器ハ体中甚タ大切ナル器官ナリ前ニ述シ如ク各片節ハふたなりニメ雌雄兩性ノ生殖器ヲ備フ其形狀甚タ複雜ニメ種々アレモ皆大同小異ナレバ此處ニハ Tænia 屬ノ一種ニ就キ之ヲ説ク(第四圖)他ノ扁蟲ニ近キヿ明ナルベシ先ツ雄性生殖器ヨリ始レバ片節結組織中至ル所ニ存在セル圓形或ハ梨子形ノ小胞數多(第四圖f)アリ是則チ睪丸ナリ各睪丸ハ小管ヲ送出ス數多ノ小管相合シテ漸々大トナリ遂ニ片節中央點近クニ輻集ス此處ヨリシテ一ノ輸精管(g)起リ片節ノ側緣ニ向ヒ迂廻シテ進ミ此處ニ達シタル時外界ニ開ク輸精管ノ外端ニハ一種筋質ノ嚢アリテ其働ニヨリ輸精管ノ一部外界ニ突出シ以テ陰莖ノ作用ヲナス蓋シ絛蟲各片節ハ雌雄生殖器ヲ備フレモ一節ノ雄素ハ全節ノ雌素ヨリ早ク成熟スルヲ以テ之ト接合スルモノニ非ス一節ノ卵ハ他節ノ精蟲入リ來リテ受精スルモノナリ故ニ交尾器ノ必要アルナリ雌性生殖器ハ第一ニ一對ノ樹形卵巣(a)第二ニ一個ノ卵黄巣(b)アリ兩側ノ卵巣ヨリノ管相合メ一ノ輸卵管トナル處ニ側緣生殖孔ヨリ來ル細キ膣(e)來リテ亦相合ス膣ハ輸卵管ニ開ク少シ前ニ膨大シテ一ノ受精嚢ヲナス輸卵管ハ膣ト相合シタル後ニ尙ホ後方ニ向ヒ走リ卵黄巣(b)ヨリ來ル管ト相合ス此處ニ殼腺(c)アリ之ヨリシテ回轉シテ前方ニ向ヒ遂ニ子宮(d)ニ至ル故ニ一卵粒ノ經過ヲ云ヘバ卵巣ヨリ輸卵管ニ出テ交尾ノ際他節ヨリ入リ來リ受精嚢ニアル精蟲ト相合シテ受精シ卵黄巣ヨリ來ル卵黄ト相合シ殼線ノ分泌スル殼ヲ受ケテ完全ナル卵トナリ子宮ニ入ルナリ成熟シタル片節ニ於テハ子宮ニアル卵粒ノ數非常ニ多クシテ最初ニ於ケ

器ノ充分ニ成熟シタル時則チ外部ヨリ見テ片節ノ長サ其幅ノ二三倍ニ達シタル時ハ各片節ハ分離シテ暫時ノ間ハ獨立ニ生活スルヲ得是即チ絛蟲ヲ宿ス人ノ大便中ニハ成熟シタル片節ノ混シ居ル理ナリ甚シキ場合ニテハ獨立シタル片節ハ活潑ニ運動スルヲ以テ自ラ肛門ヨリ匍匐シ出ルヿアリ此等ノ事實ヨリ考フル時ハ絛蟲ノ片節ハ蝦(エビ)或ハ昆蟲ノ關節トハ全一視スベカラズシテ一個ノ動物ト見做スベキナリ然ル時ハ絛蟲ノ体ハ結合体(コロニー)ニシテ之ヲ組成セル個蟲ハ鎖ノ如ク一線ニ連續シ居ルモノトナサザルベカラズ是則チくらげノ發生中すとろばいら(Strobila 本誌第一卷四四七及ヒ四五〇ノ五圖丁ヲ見ヨ)ト全一性ノモノナレバ絛蟲ノ結合体ヲ稱シテすとろばいらトナシテ可ナル理ナリ他語之ヲ云ヘバ絛蟲ノすこーれっくすハ結合体ノ根基ニシテ体ノ片節ハ總テ之ヨリ出芽シタルモノナリ故ニ將ニ分離セントスル片節ハ最モ生長シタル子蟲ニシテすこーれっくすニ近キモノハ最モ幼ナルモノナリ其中間ニアルモノハ漸々ニ生長シツヽアルモノナリ

絛蟲ニハ消化器ハ一切ナシ蓋シ宿主ノ腸内ニテ既ニ消化サレタル榮養物ノ中ニ住居スルモノナレバ別ニ消化スルノ必要ナク滋養物ヲ体ノ全面ヨリ吸收スルナルベシ

絛蟲ノ体ハ別ニ体腔ナク皮膚ノ内ハ總テ結組織ヲ以テ充滿シ其中ニ生殖器、神經、排泄器等散在セルナリ皮膚下ニハ縱(外)横(内)ノ筋纖緯アリ是レ体ノ自由ニ伸縮シ得ル理ナルベシ

神經系統ハ体ノ兩側ニアル一本ヅヽノ神經ヨリ成ル(第四圖m)頭部ニ至リ兩側ノ幹一ノ横神經(腦)ニ依リ連絡ス感觸器ハ一切ナシ

排泄器系統ハ他ノ扁蟲ノ排泄器ニヨク似タリ則チ体ノ兩側ニ於テ各一條ノ排泄縱管(第四圖k)アリ各片節ノ後緣ニ近ク兩側ノ管横管(l)ニ依リテ連絡ス故ニ此排泄管ハ恰モ梯ノ如シ成熟片節ノアル端ニ至レバ左右ノ兩管中央線ニ近ヅキテ相合シ一ノ胞ヲナシテ外界ニ開ク(廿九號三版一圖d、eヲ參考セヨ)是排泄器ノ外口ナリ成熟シタル片節分離シタル後ニハ各管別々ニ外界ニ開クモノトス

ノ一ケ所ニ小凹所ヲ生ス(五圖丁)此凹所ハ漸々深ク陷下シ(五圖丙)其底ニ吸盤ヲ發生シ且ツ有鉤絛蟲ナレバ鉤ヲモ生ス(五圖戊)故ニ此凹所ヲ裏反(ウラカエ)シテ嚢胞ヨリ突出セシムル時ハ五圖己トナル則チ凹所ハ未來ノ頭頸部(スコーレックス)ナリ嚢胞中ニハ常ニ反轉(ヒックリカヘリ)テ納(オサマ)リ居ルモノト知ルヘシ幼蟲ノ此有樣ニ達シタルモノヲ Cysticercus ト云フ有鉤絛蟲ノ豚肉中ニアル Cysticercus ヲ Cysticercus cellulose ト云フ蓋シ其有鉤絛蟲ト如何ナル關係アルヤヲ知ラザリシ頃ニ別種ノ蟲ト信シテ與ヘタル名ナリ中間宿主ノ体肉ニテハ Cysticercus ヨリ進ムコトナシ尤モ或種ニテハ Cysticercus ノ嚢内ニ無數ノ頭頸部ヲ芽出スルヿアリ(第八圖乙)此ノ如キ嚢ヲ echinococcus ト云フ語ヲ換ヘテ之ヲ云ヘバ此等ノ種ニテハ其卵ガ Cysticercus ノ樣マデ發達シ未タ生殖器ノ如キハ影ダニモ見ザル時ニ既ニ出芽ノ無性生殖方法ニ因リテ無數ノ子或ハ孫すこーれっくすヲ作リ繁殖スルナリ」Cysticercus アル中間宿主ハ最後ノ宿主ニハ食物トナルノ關係ヲ有スルモノナリ例ヘバ Cysticercus cellulose ノアル豚肉ハ最後ノ宿主ナル人類ノ好ミテ食フナレバ Cysticercus ハ豚肉ト共ニ人類ノ胃ニ入リ此處ニテ其嚢部ハ消化シ去ラレすこーれっくすノミ殘リ腸ニ入リテ出芽ノ方法ニヨリ數多ノ片節ヲ芽出シ成熟シタル絛蟲トナル中間宿主ヨリ最後ノ宿主ヘノ移轉ハ概シテ此ノ如キ方法ニヨル

驅蟲劑ヲ用井テ絛蟲ヲ除去シタル時片節ノミ驅除シテすこーれっくすヲ殘ス時ハ暫時ニシテ再ヒ片節ヲ出芽シ元ノ長サニ達ス

以上述ヘタル所ニヨリ絛蟲ニハ世代ノ交代アルヿ明ナリ成熟シタル絛蟲ノ片節(Proglottis)ハ有性蟲ニシテ雌雄ノ元素相合シテ卵ヲ成ス此卵ノ充分ニ成長シタルモノハすこーれっくす(頭頸部)ナリ此すこーれっくすハ無性生殖則チ出芽ノ方法ニヨリ再ヒ片節ヲ生ス此循環則チ左ノ如シ

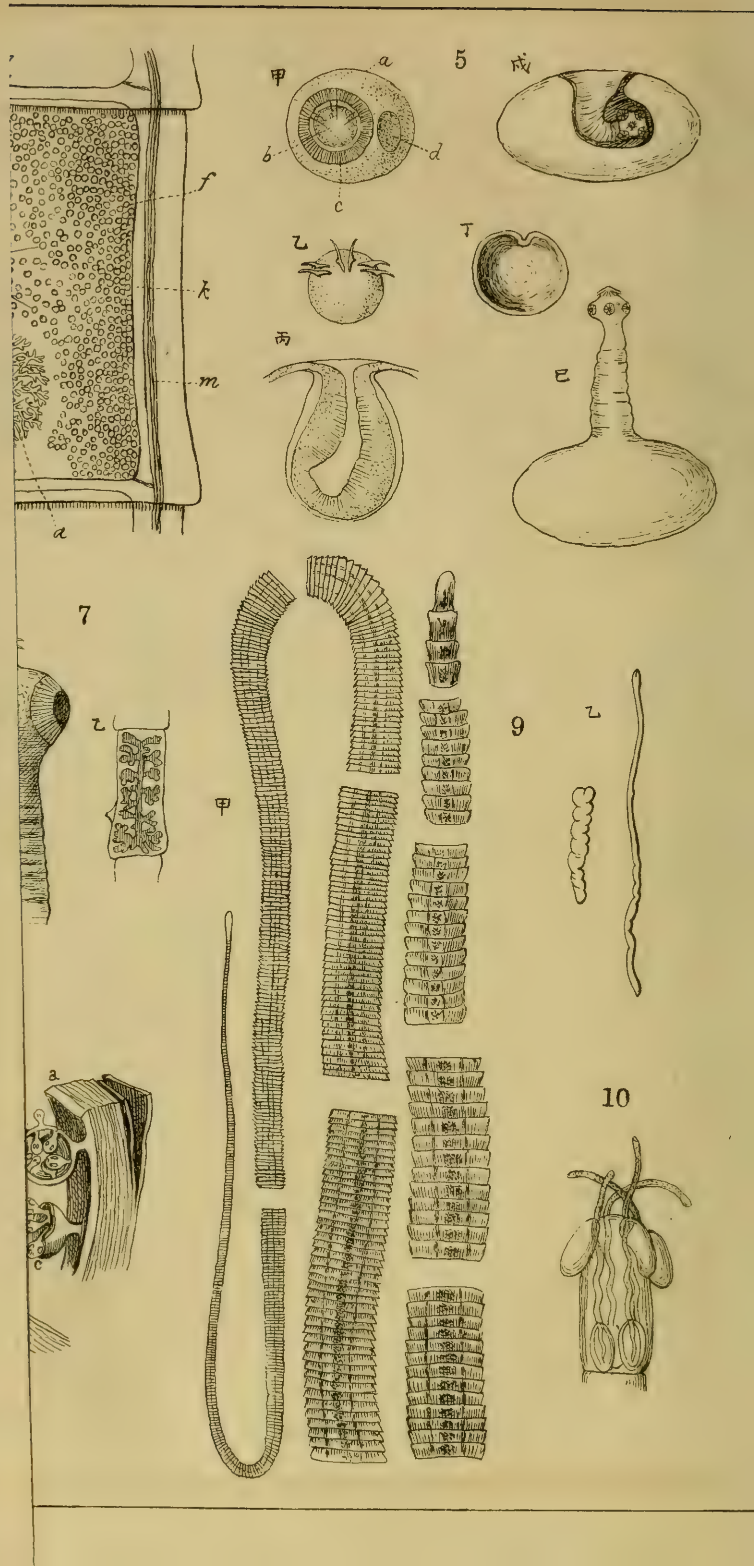
Proglottis—scolex—proglottis—scolex—etc

絛蟲ノ重ナル例ヲ擧クレバ先ツ左ノ如シ

FAM. TÆNIIDÆ 頭ハ通常四個ノ吸盤ヲ有ス中ニハ

ル如キ單一ノ管（第四圖d）ニテハ到底總テヲ含有スル能ハサルヲ以テ多ノ種ニ於テハ枝ヲ生シ樹形トナル（第六、七圖）而シテ其形各種ニ固有ナル所アレバ宿主ノ大便ト共ニ出來ル分離片節ヲ撿スレハ絛蟲ノ何種ナルヤヲ識別スベシ但シ此ノ如キ片節ニハ子宮ヲ除キ生殖器ノ他ノ部ハ大ニ退化シ居ルモノナリ

此ノ如ク外界ニ出タル片節ハ前ニ述タル如ク多少ノ時間獨立ニ生活シ得ルモノナレ𪜈早晩破損腐敗シ去レバ其時ニハ其子宮中ニアリシ卵ハ風雨其他ニヨリテ四方ニ飛散ス卵ノ構造ハ固ヨリ種ニヨリテ多少ノ差異アレ𪜈概ネ大同小異ナリ第五圖甲ハ一例ニシテ人腸ニ寄生スル有鉤絛蟲ノ卵ナリaハ殼腺ノ分泌セル殼ニシテ其質透明柔軟ナリbハ原形質卵ノ孚化シタル幼蟲ニシテ三對ノ小鉤ヲ備フ（五圖乙）cハ幼蟲ヲ圍繞スル硬キ石炭質ノ殼ナリ石灰殼ト腺殼トノ間ニ腔アリテ卵黄ノ幾分（d）尚ホ存在ス扨此ノ如キ構造ノ卵ガ如何ニシテ成長シタル絛蟲ニ化スルヤ又如何ニシテ宿主ノ腸內ニ入ルヤト云フニ絛蟲モ他ノ內臟寄生蟲ト均シク（二十九號一〇九、一一〇頁ヲ見ヨ）甚タ複雜ナル經過ヲナシテ成長スルモノナリ先ツ上ノ如キ卵ハ直ニ其成蟲ノ住居スル宿主ニハ入ラズ〆一度中間宿主ニ入リ或ル度マデハ生長ス然レ𪜈此處ニテハ決シテ成熟スルヲ得ス種々ノ困難ヲ經テ最後ノ宿主ニ達シ初メテ成熟ニ至ルナリ今一例ヲ擧ケテ之ヲ說明センニ第五圖甲ニ示シタル有鉤絛蟲ノ卵ハ風雨ニヨリテ此處彼處ニ吹キ廻サレ中ニハ遂ニ是ヨリ一歩モ進ム能ハザルモノ多カルヘシ然レ𪜈絛蟲ノ一片節內ニアル卵ニテモ其數非常ニ多ケレバ數百數千ノ片節ヨリ出ル卵ノ數ハ實ニ計算スベカラザルノ多キニ達スベシ故ニ卵ノ多數ハ無益トナルモ多キ中ニハ中間宿主ノ腸內ニ入ルモノモアルベシ有鉤絛蟲ノ中間宿主ハ豚ナリ故ニ第五圖甲ニ示シタル卵ガ如何ナル機（ハヅミ）ニテカ豚ノ消化器內ニ入ル時ハ兩殼共ニ消化シ去ラレ幼蟲初テ孚化シ出ツ是則チ第五圖乙ナリ幼蟲ハ活潑ニ運動シ其鉤ヲ以テ消化器ノ壁ヲ破リテ体ノ諸部殊ニ筋肉中ニ侵入ス此處ニ於テ生長シ一ノ囊狀ノ胞トナル囊胞


5
甲
a
b
c
d
乙
丙
丁
戊
己
f
k
m
a
7
乙
甲
9
乙
10
a
c

鈎ヲモ兼有スルモノアリ生殖孔ハ片節ノ側面ニアリ鳥及ヒ、哺乳獸ニ寄生ス

**Tænia mediocanellata**, Küchenmeister 無鈎絛蟲(第一圖第六圖甲乙) 成熟シタルモノハ人類ノ腸内ニ住ス中間宿主ハ牛ナリ故ニ人類ハ牛肉ノ熟煮セザルモノヲ食シテ之ヲ得是ハ甚タ大ナル絛蟲ニシテ長サ四乃至八めーとるニ達シ關節ノ數千二百乃至千三百アリ此種ハ分離片節中樹形子宮(六圖乙)ノ枝細クシテ多キヲ以テ容易ニ次ノ種ヨリ區別スベシ

**T. solium**, Rud. 有鈎絛蟲(第圖甲乙)成熟シタルモノハ人類ノ腸内ニ寄生ス中間宿主ハ豚ナリ長サ二乃至三半めーとるニ達シ片節ノ數八百乃至九百、樹形子宮ノ枝太クシテ其數少シ(第七圖乙)、

以上二種及ヒ下ニ記ス裂頭絛蟲ヲ以テ人類ニ寄生スル普通三種ノ絛蟲トス尤モ有鈎絛蟲ハ我邦ニテハ未タ確認ノ場合ナシ

**T. echinococcus**, v. Siebold 狗絛蟲(第八圖甲乙) 此絛蟲ハ長サ僅ニ四、五み、め、片節ノ數モ三乃至四個ナリ成熟シタルモノハ犬族(家犬、狼、狐等)ノ小腸ニ寄生ス中間宿主ハ牛、豚、綿羊、馬、等ニシテ其肝臟ニ寄生ス又人類ヲモ中間宿主トス其 cysticercus 中ニハ無數ノ頭出芽スルヲ以テ所謂 echinococcus ニシテ其大サ甚シキ時ハ人頭大トナル我邦ニテハ甚タ稀ナレドモ歐洲ニテハ隨分多クシテ之ガ爲メニ斃ルヽモノモ少シトセズあいすらんどニテハ人口ノ二乃至三% (疾病者ノ十二乃至十六%) ハ此寄生蟲ノ爲ニ惱ミ之ガ爲ニ死スルモノ毎年千人ニ及ブト云フ

**T. crassicollis** Rud. 成熟シタルモノハ家猫及ヒ其他ノ猫族ニ寄生シ cysticercus ハ鼠ノ肝臟ニアリ **T. sesrata**, Goeze 犬ノ小腸、cysticercus 兎ノ肝臟、此ノ他此屬ノ種甚タ多シ

FAM. BOTHRIOCEPHALIDÆ 頭ハ平低ニシテ其各側面ニ一個ツヽノ吸溝アリ生殖孔ハ側縁ニナクシテ腹面ニ開ク食肉魚類及其他ノ食魚脊椎動物ニ寄生ス

**Bothriocephalus latus Brems.** 裂頭絛蟲（第九圖甲乙）成熟シタルモノハ人類ノ腸ニ寄生ス幼蟲ハ魚ノ肉中ニアリ全長五乃至九めーとる、片節三千乃至四千是ハ我邦ニテモ最モ普通ナル種ニシテ往時未タ牛豚肉ヲ食セザリシ時ヨリアリシ絛蟲ハ此種ナルヘシ幼蟲（丙）ハ我邦ニ於テ鱒ニアルヿハ飯島氏ノ研究ニヨリテ明ナリ其他鮏モ中間宿主ノ一ナルベシ我邦ノ北國ニ此絛蟲多キハ蓋シ仝地方ノ人ハ鱒鮏ノ刺身ヲ多ク食スルニ因ルナルベシ

**Schistocephalus solidus** 成蟲ハ水禽ノ腸内ニ幼蟲ハとげ魚ノ体腔内ニ（殆ント之ヲ充タス）

此ノ外ニ尚ホ LIGULIDÆ, TETRARHYNCHIDÆ, TETRAPHYLLIDÆ, CORYOPHYLLÆIDÆ, AMPHILINIDÆ ノ數族アリ或ハ魚類或ハ鳥類ニ寄生ス

かつをノ肉内ニアルさしハ Tetrarhynchus ノ幼蟲ナリ

烏賊ノ体面ニ附着スルモ仝屬ナリ

絛蟲ニ付キ尚委キハ飯島氏寄生動物編ヲ見ルベシ

---

**第五版圖解**（第三圖マデハ本文中ニアリ）ロイニス等ヨリ引用ス

4. Tænia mediocanellata （無鉤絛蟲） ノ成熟シタル一片節（廓大圖）

a 卵巣、b 卵黄巣、c 殻腺、d 子宮（未タ枝ヲ發生セズ）e 膣、f 睪丸、g 輸精管、h 筋質囊、i 生殖孔、k 排泄縦管、l 排泄横管、m 神經

5. Tænia solium（有鉤絛蟲）ノ發生（廓大圖）

甲卵、乙三對ノ鉤ヲ備ヘタル幼蟲、丙嚢胞ノ凹所、丁嚢胞、戊嚢胞 Cysticercus ノ完全シタルモノ、己嚢胞ヲ反轉シタルモノ

6. Tænia mediocanellata 無鉤絛蟲ノ（甲）頭部及ヒ（乙）成熟シタル樹形子宮ヲ含ム片節

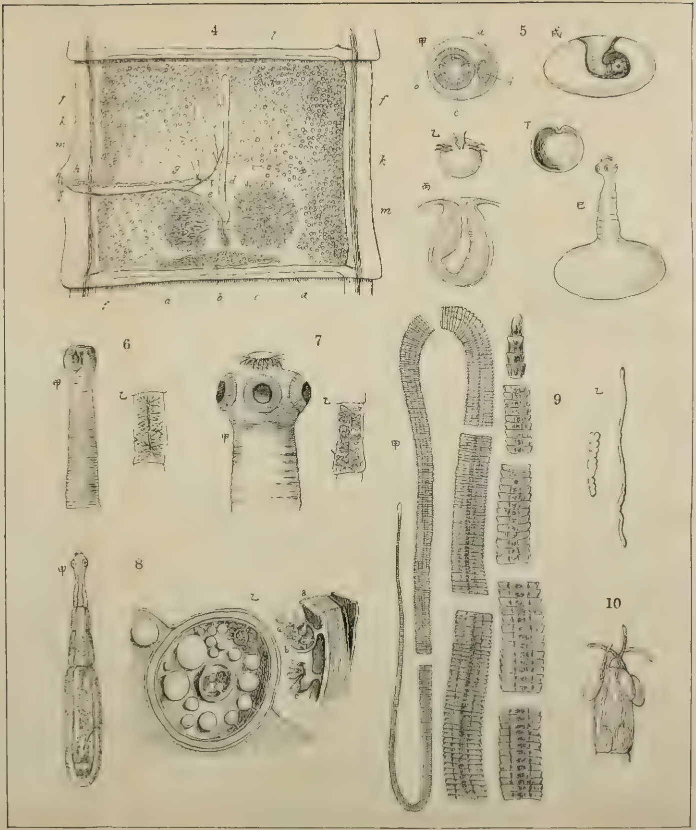
7. Tænia solium 有鉤絛蟲ノ（甲）頭部及ヒ（乙）成熟シタル子宮ヲ含ム片節

8. Tænia echinococcus ノ（甲）成蟲（乙）嚢胞（cysticercus）

9. Bothriocephalus latus 裂頭絛蟲ノ（甲）成蟲（乙）幼蟲（鱒ノ肉内ニアルモノ）

10. Tetrarhynchus ノ頭（廓大圖）

第五版



フ古昔遊樂部川ニ絶テ鮭魚ノ泝上セサリシ年アリシカ土人憂ヘテ之ヲ神ニ祈レリ神乃チ柳ノ葉ヲ採テ之ヲ河中ニ投シケレハ忽チ夥シク此小魚ヲ産シタリ故ニ名ケヌト此魚ハ遊樂部、釧路、大津、鵡川、ノ四川ニノミ特産スルモノヽ如ク從來世人ノ思意セシハ誤ニシテ本道所々ニ之ヲ産ス即チ今日マテ全ク別種類ナリトセラレタル所ノ彼ノちかハ實ニしゆしやむノ同物異名タリシナリ

●北海道産あわび　漁民傳ヘ云フ往古あわびハ全道ノ沿岸ニ至ル所ニ捿息セシモ嘗テむい(Chiton)トノ戰爭ニ於テ大敗シ遂ニ之カ爲メニ追ヒ郤ケラレ「むい」岬以東復タ一鮑ヲ止メサルニ至レリト今あわびノ分布ヲ見ルニ實ニ此言ノ如ク全ク「むい」以西増毛間一帶ノ沿岸ニ限テ捿息スルヿヲ認メタリ是レ西海岸ハ黒潮ノ一派ナル對島海流ノ趨ク所ナルカ故ニ能ク其蕃殖ニ適スレトモ東海岸ニ在テハ則チ彼ノ寒冷ナル千島海流ノ洗フ所ナルカ故ニ其捿息ニ適セスむいハ之ニ反シ好ンテ寒流ニ蕃殖スルカ故ニ此方面特ニ多キヲ致シ乃チ敵手ノ覷ヲ呈スル所以ナリトス

（以上五件野澤俊次郎）

●原形質運動ノ實驗的類似　「ビュッチュリー」教授ハ近頃「アミーバ」ノ形狀及運動ヲ眞似スル物体ニ於テ甚面白キ觀察ヲナシタリ、此問題ハ實ニ興味アルモノニシテ原蟲ノ生活ノ顯象及一般生キタル原形質ノ研究ニ於テ閑暇ト味トヲ有スルモノ、猶進ンテ研究スルニ好適シタルモノナリ、今之ヲ實驗スル方法ヲ左ニ記スベシ

普通ノ橄欖油少量ヲ取リテ時計皿ニ入レ之ヲ凡ソ攝氏五十度位ノ湯ニテ温メ少シク温度ヲ高メルトキハ油ハ漸々其黄色ヲ失ヒ濃厚トナルベシ、此時ニ當テ濃粘ノ適度ノ瞬間ヲ捉ムヿ緊要ナリトス、然トモ此事タルヤ所謂以心傳心ニテ今明カニ示ス能ハズ、只幾度カノ實驗ヲ經テ知ルノ外ナシ、扨油ヲ濃厚ニスルヿ三四日間ニシテ下ニ述ブル如ク試ミルベシ、即油滴細泡ヲ含メルカ又流動スルカヲ見ルベシ、若斯ナラザレバ猶温メテ次日ニ至ルベシ、油濃厚ニ過ルトキハ假令ヒ細泡ヲ含ムモ流動スルヿナシ、此時ニハ通例ノ橄欖油少量ヲ混和スレハ少シ淡クスルヲ得、

# 雜録

●北海道產鮭族　前キニ本誌第八號ニ鮭族ノ九種ヲ掲載シアリシカ今余カ北海道ニ於テ採收シタル鮭族ノ十有二種ヲ擧クレハ左ノ如シ

| 學名 | 方言 | 產地 |
|---|---|---|
| Salmo macrostoma, Stur. | やまべ | 全道諸川 |
| S. pluoius, Hilgd. | いはな | 北部諸川 |
| S. leuconomis, Pallas. | あめます | 全道諸川及沿海 |
| S. Perrgi, Brevoort. | いとう | 全 |
| S. sp. | かばちえつぷ | 釧路國阿寒湖 |
| Onchorhynchus Perrgi, Hilgd. | さけ | 全道諸川及沿海 |
| O. Haberi, Hilgd. | ます | 全 |
| Onchorhynchus sp. | べにます | ゑとろふ島 |
| Plecoglossus altivelis, Schleg. | あゆ | 西南部諸川 |
| Hypomesus olidus. Cud. | わかさぎちか | 全沿海 |
| Osmerus eperlanus, Lacep. | きうり | 東南兩沿海 |
| Galaxx microdon, Bleek. | しらうを | 函館灣內 |

此他猶ホますのすけ、らしやうを、をべらえべ、しろこつぷ、等ノ種類アル由聞ケ𪜈未タ標品ヲ採收セサルヲ以テ其果シテ別種ナルヤ否ヤ判明セス更ニ後日ヲ俟テ再報スル所アルヘシ

●北海道ノ魚類　昨年來東南海岸ニ於テ採集シタル魚類標品ト札幌函館兩博物場ニ就キ取調ヘタル所ニ依レハ其數凡ソ百六十有餘種アリ今假カニ之ヲ以テ北海道ニ魚族寡シトハ斷言シ難ケレ𪜈概シテ之ヲ本邦西南部ニ比スレハ其種類太ク繁カラス然レ𪜈其種類ノ多クハ大抵巨額ノ產アルモノナリ

●地名ト魚類　火山灣沿岸ノ中央ニ位スル「をしやまんべ」ト稱スル一村落アリ春季融雪ノ際山間ノ殘雪恰モかれい即チ土語ノ所謂しやまんべノ形狀ヲ顯ハスヲ以テ如此名ケタリト言ヒ傳フルモアレ𪜈思フニ該地方ハ春期產卵ノ爲メ灣內ニ入リ來ル所ノかれいノ時ニ夥多ナルヲ以テ斯クハ名ケシモノナランカ

●しゆしやも　ハ土人語譯シテ柳葉ノ義ナリ傳ヘ言

量ス、然モ其運動ハ其構造如何ニ由リテ起ルモノナレバ原形質自体ノアメーバ的運動ハ其之ニ對スル性理的組織ニ起因スルト云フヲ得ヘシ、

又此等ノ油滴ハ數日間運動ヲナスニ足ルヲ以テ有機物ニ類セリ、是其理化學的搆造ニ屬スル内因ニ歸スルナリ、余ハ此時迄搆造及運動ノ二點ニ於テ斯クマデ原蟲ニ類スルモノヲ人工ヲ以テ製スルヲ得ルトハ信セザリシ、故ニ余ハ此ノ發見ガ理化學上ヨリ生活ノ問題ニ近寄ル第一着歩タランコ及理化學的性質ノ定考ニ付キ分子組織ノ漠然タル假説ヲ去テ更ニ確カナル基礎ニ達センコヲ期望スルモノナリト、

(Am. Nat. ヨリ抄譯)

●**人工温度による蟻の單爲生殖**　をワスマン(W. Wosmann)氏ハ觀察して曰く蟻の勞働者が追々單爲生殖的に産卵し其卵より常に雄蟲が生れ出ることは已にフオレル、ラボック兩氏によりて知られたり尚ほまた天然に成熟平常なる雌蟲なき巣に在りては働者と雌蟲との中間形のものありて單爲生殖を爲すことも屢〻見る所なり

余が觀察を遂げたる巣に在て平常温の時單爲生殖的（パルセノゼチシス）に卵を産めるものハ Polyergus rufescens, Formica sanguinea, rufibarbis, fusca 及び Myrmica scabrinodis の諸種なりし然れども此塲合にありて卵を産める蟲ハ甚だ僅かに止る(一種中の各動物皆産めるにあらす)而して其卵よりは常に雄蟲の孵化するを見るべし

人工に温度を上昇し單爲生殖を一巣内働者多數に超さしめたる有樣を次に述ふべし

千八百八十五年より六年に渡れる冬余ハラボック法に從ひ多くの硝子巣を供へ之に F. sanguinea の數多の働者と補助蟻(F. fusca)を入れて觀察せり蟻をして活潑なる擧動をなさしめんが爲め温めたる硝子板片を巣の上板の上に置きたるに蟻は左ながら狂氣の如く活動し活潑に振動する角を上けて温めたる上板の下面に回奔し好んで最温の所に集る斯く日々數時間同法を以て温めしに多くは一

含泡油滴ノ製法ハ左ノ如シ、小サキ「アゲート」擂鉢ニテ乾燥シタル純粋ノ炭酸加里($K_2CO_3$)ヲ細末ニシ、呼氣ニテ食塩ヲ少シ濕ラシ、之ニ硝子棒ニテ油滴ヲ加ヘ、此二物ヲ混和シテ濃糊トナスヘシ（實驗ノ成否ハ此二物ヲ混和スル分量ヨリハ寧ロ油ノ性質ニ由ル）、今硝子棒ニテ濃糊ノ針頭大數滴ヲ蓋硝子ニ落シ、又硝子板ニ一水滴ヲ落シ、此上ニ前ノ蓋硝子ヲ取テ反覆シ、其油滴ノ水滴ニ浸入スル様ニ置クヘシ、但シ蓋硝子ノ角隅ヲ臘ヲ以テ支ヘ油滴ヲ餘リ壓セサル様スヘシ、斯クシテ深キ箱ニ入レ凡二十四時間放置スベシ、然後吸取紙ヲ以テ蓋硝子ノ一隅ニ着ケ他隅ニ細管ヲ以テ水ヲ供シ、以テ「プレパラート」ヲ洗フベシ、右ノ方其宜ヲ得レハ油滴ハ直ニ運動ヲ始メ絶ヘズ其形狀ヲ變化ス、今蓋硝子下ノ水ヲ排除シ「グリスリン」ヲ以テ之ニ代ヘ同量ノ水ヲ以テ稀薄ニスルヲ要ス、斯クスレハ油滴ハ漸々透明ニナリテ烈シキ前進運動ヲ始ムベシ、油滴ヲ少シ壓スレハアミーバ的運動ハ益著ルシクナルナリ、若シ油滴ノ流動ヲナサヾルトキハ蓋硝子ヲ輕打スルカ或ハ軟ラカク壓スルカ、又ハ油滴ヲ破碎スレハ其目的ヲ達スルヲ得、又油滴ノ表面ニ時々上皮ノ生シテ流動ヲ妨クルコトアリ、是亦右ノ方法ニテ（少ナクモ一部分ハ）除去スルヲ得、

斯ノ如ク水中或ハ半稀「グリスリン」中ニ壓迫ヲ用ヰザルモ油滴カ速ニ且ツ美事ニ流動スルヲ見ハ實ニ面白キコトナリ、若シ油滴ニ壓迫ヲ加フレハ其運動ハ猶著ルキ、之ヲ爲スニハ程能キ厚サノ蓋硝子ノ碎片ヲ取リ蓋硝子下ニ挿ミ臘片ヲ取去ルヘシ、斯クテ要スル壓度ヲ得ルマデ蓋硝子下ノ水ヲ吸取ベシ、流動ハ「グリスリン」ヲ加ヘタル後二十四時間ヲ經レバ益明カニ證スルヲ得、蓋シ油滴ノ全ク透明ニナルヲ以テナリ、

終ニ臨テ氏ハ云ヘリ、余ハ此ノ原形質的運動ヲ呈スル油滴ヲ以テ原形質ニ直比スルニ足ル者ナリトノ考意ヲ辨護スル最終者ナルコトヲ喜テ公言セントス、固ヨリ油滴ハ其物質ノ原形質トハ全然相異ナルコトハ明カナレドモ、余ハ其搆造及運動ノ二點ヨリ論スレハ原形質ト比スルヲ得ト考

屬にありては通常の働者に單爲生殖を喚起し或は少くも其方へ傾かしむる原因の一なることを知るへし又た斯の如き實驗に際し卵巢の解剖的研究をなし以て此熱度合により其發育上に幾何影響せしかを確認することは未た爲さゞる所なり(ナ、サ、)

●アナビヲーゼ　プライエル(prof. w. preyer)氏ハ動物の無生の事を深く研究せられ其狀態を分て二つとなせり

第一、無生にして蘇生し得るもの…………アナビヲーゼ(Anabiose)

第二、無生にして蘇生し得ざるもの…………死

而して通常假死と稱するものは生活作用未だ全く斷絕せざるものとし以て無生と區別せり氏ハ此ことを記述するに當り全文を二項に分ち第一項には凍餒によりて固塊となり以て生を奪はれさる動物か一旦温を受るときハ蘇生し得へきとを自己の試驗と歷史的の實驗事實に照して證し第二項にハ乾枯して生を奪はれたる動物か水を與ふるときハ同しく蘇生し得るとを自己の試驗及ひ歷史的の甚だ多くの實驗例を擧げて證明せられ終りに至りて曰く体內には汁液の運動少しも見るべからざるに至る迄乾枯或ハ凍凝したる動物は死したるに非ず只生活せさるのみアナビヲーゼ的無生になりしのみと斯の如く食物、水の欠乏、極寒、極熱の結果は多くは動物を死する迄ハ殺さゞるも空氣の欠乏ハ眞の死を導くものなり先是屢〻眞空中に動物を養ひたる人あれども其人工の眞空は恐くは充分なる眞空にあらずして幾分か空氣の殘れることありたるべしと云ふ(ナ、サ、)

●貝殼中ノ貝　先頃友人あわびノ殼及ビ其中ヨリ取リタル貝一個ヲ送リテ其ノ貝ノ如何ニ〆あわびノ殼ノ中ヘ入リシヤヲ問フ。先ヅあわびヲ取リテ見ルニ貝殼非常ニ厚ク、表面ニハふぢつぼ、あみがひ、Serpula、珊瑚等附着シ、所々ニ穴アリ、是レ寄留セル貝ノ住家ノ門ナリ、表皮ハ剝脫シテ表面全体腐蝕サレテかるいしノ表面ノ如シ、又鰓孔ハ只三個アルノミニテ其他ハ皆塞ガレリ。裏

周日遲くも十四日後よは一般に卵を産み初めたり而て其成果を見るに産卵の勢通常の雌蟲に於けるよりも余程高度に及べるが如しまた二三の働者あり其後足をチヂ開き腹部を遠く前上方に曲げて立つ而して其体の尖端より直に卵の現れ出るを見るべし此等の蟻ハ其角を以て頻りに出てつゝある卵をイヂリ以て引き出さんとを勉む（中には角の代りに顎を用ゐるもあり）一般に動物体の小なるに從ひ産卵益々困難に益々徐々に行ハる最小なるものに至りてハ一卵を産出するに少くも十分間を要す

八十六年一月二十六日午前八時より十一時の間に formica sanguinea の一巢内に働者十二疋が産卵しつゝあるを見たり多くハ大形のものなりしが希よハ甚だ小なる者もありたり周圍に立ち廻れる働者及び補助蟻（F. fusca）ハ生れ出てたる卵を集め互に粘着せしめ温暖なる硝子壁の所に運搬するに孜々たり此時に當りて一卵未た全く母体を離れさるに他の蟻來りて其顎牙を以て助けて引き出さんと勉むるもの往々これあり

八十五年と八十六年、八十七年と八十八年、八十八年と八十九年に渡れる冬斯の如くにして産み落されたる數百の卵ハ一も充分の發育を達したるものなし或ハ卵の儘或ハ幼蟲となりし後其成蟲自身よよりて食ひ盡されたり斯の如く成蟲の貪食に陷りし原因は恐くは温度の加減なるべし甚しきに至りては一疋の蟻が口に含める卵を他の蟻之れを引出さんと試み其間に卵を破屑し口口相接し遂に跡なく食ひ盡すに至る

Formica sanguinea の種々の巢に就て色々の年人工的温度上昇をなし其影響によりて通常の働者に單爲生殖を生せしむる試驗の効果は常に正しく同一なりし温度を上昇すること適度なるときは卵數左程急劇に增加せざりし又た其れ丈け多く食ひ亡されざりし

Formica fusca に在りては（尤も補助蟻としてあり）同し温度の上昇も前者に比して其影響は弱し又た産卵も多分ハ困難にして其卵は直に再び亡せたり

此試驗によりて見るときは異常の温度ハ少くも多くの蟻

ベシ。

之ニ類シタル貝ニテ珊瑚ニ穴居スルモノアリ、とれどト稱スル貝ハ材木ニ穴ヲ穿ツ、又貝ニハ非ザレドモうよノ類ニテ岩ノ内ニ穴ヲ穿ツモノアリ、いそぎんちゃくノ内ニモ岩ニ穴ヲ穿ツモノアル如シ、此等ノ動物ノ穴ヲ穿ツモりそふぉーがト同樣ノ方法ニ因ルモノナラン。

●小昆蟲ヲ採集スル簡便法　蠅、蚊、微小ノ蛾ナドヲ採集シ之ヲ生活ノ儘實見スルニハ左ノ仕掛ガ最モ簡便ナルベシ、用器ハ尋常ノ試験管トブリキニテ製シタル一ノ漏斗狀物ナリ、試験管ハ底ノ平カニシテ能ク透ケ見ユルモノヲ最モ好シトス、漏斗ハ餘リ圓錐ナルヲ要セズ、徑四五寸ナルヲ便利トス其管狀部ハ太ク長サ一寸許デ宜シ、此部ニ紙ヲ捲キ試験管ヲ插込メバ仕掛ケ完ク調ヘリ、漏斗ハブリキニ非ズトモ少シク工夫ヲ凝ラシ竹ヲ骨トシ紙ニテ張リテ製スルトキハ輕クシテ反テ便ヲ覺ユルナラン、席上或ハ壁上ノ昆蟲ハ右ノ器ヲ單ニカブセルナリ、樹葉ニ止マリ居ル蟲ナレバ右ノ手ニテ此器ヲソツト蟲ノ上ニ持チ行キ、左ノ手ヲ擴ゲテ他ノ方向ヨリ逐ヒ込ムベシ、蟲ハ必ズ試験管ノ底ノ方ニ進入スベシ」斯ク捕ヘタル蟲ヲ直チニ殺サンニハタバコノ煙ヲ吹込ミテ麻痹セシムルヲ好シトス或ハエーテルナドノ發氣ニテ殺スモ宜シ」又活キタル儘實見センニハ末端ニ紙ヲ張リタル棒ヲ試験管ニ插入シ蟲ノ居ル場所ヲ狹クシテ外ヨリ蟲眼鏡ニテ見ルヘシ、背部ヨリ見ントスルモ又腹部ヨリ見ントスルモ蟲ヲ隨意ノ位置ニ居ラシムルヿ强チ難事ニ非ズ

●蠅ノ恐ルベキヿ　夏月貴賤ヲ問ハズ誰レノ家ニモ群飛スル蠅ハ只ニウルサキモノタルノミナラズ甚ハダ恐ルベキモノナリ、蠅其物ガ怖キニアラズ、傳染病ヲ漫延シ寄生蟲ヲ人々ニ移傳セシムルニ力アル媒介者ナルガ故ナリ、肺病患者ノ痰ニ或腸窒扶斯患者ノ糞便ニ或ハ疱瘡病ミノ体ニ止マリタル蠅ガ飛ビ去リ忽チニシテ飛ビ來リ何心ナク晝寢シテ居ル健康人ノ唇又ハ其他眼ノ如キ濕氣アル所ニ止マリテ毒ヲ傳フルヿアレハ甚ダ考ヘ易キヿナリ豈危險ト云ハザルヲ得ンヤ、加之蠅ハ寄生蟲ヲ傳播

面ノ中央部著シク窪ミテ不規則ナル小キ眞珠樣ノ突起多ク、又周圍部ニハ褐色ノ斑紋澤山アリ、寄留貝ノ住家ノ直後ニ當ル所ハ常ニ此褐色紋ヲ見ル。一見シテ其病貝ナルヲ知ルニ足レリ。

寄留貝ノ數ハ殼ヲ破リテ取出サレタルモノ五ツ、尚ホ穴ニ在ルモノ二ツ、都合七個ナリ、尚此外元ト貝ノ住居シ居リ今ハ腐蝕ノ爲ニ破レタル穴五ツアリ、則チ此あわびノ貝殼中ニハ少ナクモ十二ノ貝ノ生活セシヲ知ル。此貝ハ多分Lithophaga zitteliana ナラント云フ、其貝殼前後ニ長ク(大ナル標品ニテ三十みめ)、高サハ凡ソ其三分一ナリ、りがめんと內側ニアリ、びっさすヲ有ス、表皮ハ茶褐色ナリ、外面ニ炭酸石灰ノ被ヒアリテ密ニ殼ヲ覆フ。貝ノ住ム穴ハ口狹ク內廣ク、丁度貝ヲ容ルヽ丈ケノ大サニテ貝ノ其中ニテ動クヲ許サズ(勿論貝ハ動ク必要ナシ)、穴ノ壁ハ次第ニ厚サヲ增セシ殼ノ層ヲ明カニ示ス。

今りそふぁーがガ如何ニシテあわびノ殼中ニ入リシカヲ考フルニ二樣ニ考フルヿヲ得、一ハ小キりそふぁーがガあわびノ貝ノ上ニ附着シあわび貝ノ厚クナルニ從ヒ其中ニ埋メラルヽト考フルノト、又一ハりそふぁーがガあわびノ殼ニ穴ヲ穿ツト考フルノナリ、則チりそふぁーがノ働ヲ前ニテハ passive ト考ヘ後ニテハ active ト考フルナリ。りそふぁーがノ体ノ堅キ部分ハ薄クシテ邊緣圓キ外殼ノミナレバ其働ノ active ナリトハ一寸考ヘラレチドモ passive ニ非ザルヿハ明白ナリ、若シりそふぁーがガ初メあわび貝ノ內面ヘ附着スルヿ出來テ附着スレバ、或ハあわび貝ガ外面ヘ漸々厚サヲ增スモノナレバ、兎モ角、りそふぁーがハ外面ヘ附着シ、あわび貝ハ內面ヘノミ厚サヲ增スモノナレバ到底埋メラルヽヿナシ。穴ノ壁ニ貝ノ成長セシ層ヲ見、又貝ノ大小ニヨリテ穴ニ大小アル等ヨリ見レバ貝ノ穴ヲ穿ツト考ヘルヨリ外ニ考ヘ樣ナシ、貝ハ別ニ穴ヲ穿ツ器械ヲ有セザレバ化學的作用ニヨリテ穴ヲ穿ツモノナランヽ、此方角ニ於テ予ハ全ク無學ナレバ別ニ何トモ云フヿ能ハズ、只寄留貝ハ自分ノ殼ヲ損セズシテ他ノ殼ヲ溶解スル一種ノ液ヲ分泌シテ穴ヲ穿ツモノナル

ザリシ爲メ確乎日本ニ在ルヿアリト知ラレタル鳥種ヲ脱漏シタル例アリ(例ヘバゑまいかる、やいるつぐみ、黄鳥、ゑまひよどり、あねはづる等)然レ圧此等ハ問フニ足ラザル瑕瑾タルニ過ギス、吾人誰カ間違ナキヲ得ンヤ、セーボーム氏ノ此著ハ實ニ後來皇國ノ鳥學攻究ニ基礎ヲ與ヘタルモノナリト云ハザルヲ得ズ

## ●電信柱ト動物

數年前ニ諾威國電信總長ニールソント云ヘル人ハ電信ト動物ノ間ニ奇妙ナル關係アルヿヲ述ベタリ曰ク森林中ニ立テル電信柱ハ啄木鳥ノ爲メニ痛ク穴ヲ穿タルモノニテ硫化銅ヲ木質ニ含マスルモ猶ホ其攻撃ヲ免レズ、恐ラクハ張金ノ震動シテ發スル音ヲ昆蟲ト誤リテ斯ク電信柱ニ聚マリ來ルナラン、熊モ又屢々電信柱ノ根基ノ土ヲ堀リテ害ヲナスモノナルガ是ハ張金ノ音ヲ蜂ト思ヒテ其窟ヲ堀出サンガ爲メニスルナルベシ、之ニ反シ張金ノ音ハ大ニ狼ヲ恐ラシメテ之ヲ驅逐スルノ効能アルモノニシテ國會ノ一議員ハ或電信線ノ架設ヲ電線其物ノ有用ナルヨリモ寧ロ狼ヲ退去セシメントテ贊成シタリト云フ、果シテ斯ルヿノアルニヤ

## ●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）

然レ圧是時余ハ極メテ緊要ナル一問題ヲ見遺シタリ如何ニシテ余ハ此問題ト其解釋ヲ見遺シタルヤコロンブスノ卵子ト同一ノ理ニ非ザル圧ハ實ニ愕クベキヿナリ此問題ハ即チ同一ノ種ヨリ出タル生物ガ其形狀ノ變ズルト共ニ其原種ト愈々異ナルニ至ルヿ是ナリ實際生物ハ斯ノ如ク其原種ト異ナルニ至リタルヿハ總テノ生物ノ種ガ屬ニ含マレ屬ハ部ニ部ハ亞門ニ含マルニ由テ證明サルナリ而シテ余ノ車ニ乘リテ道ヲ行ク際偶然此問題ノ解釋余ノ心中ニ浮ビ出タリシハ余ノ實ニ悅ビタル所ニシテ今ニ至ルマデ余ハ其場所ヲ精密ニ記憶ス而シテ此事ノ起リシハ余ノダウンニ來リシ後久シキヲ經タル時ナリキ此解釋ハ余ノ信ズル所ニ由レバ總テ勢アリテ且其數ヲ增ス所ノ生物ノ種ハ自然界ニ於テ數多ノ異ナリタル位地ニ適スルニ至ルノ傾向アルヿ是ナリ

一千八百五十六年ノ始ライエルハ余ノ說ヲ可ナリ充分ニ

スルノ危險アルヿグラッシノ試驗ニテ明ナリ、氏ハ伊多利國寄生蟲學者ニシテ或時氏ノ實驗室ニ毛頭蟲（Trichocephalus）ノ卵ヲ皿ニ入レテ置キタリ、同室内ニ多クノ蠅アリテ試ニ其白紙上ニ落シタル糞塊ヲ顯微鏡ニテ撿シタルニ計ラズモ彼ノ皿ニ入レ置キタルト同ジ蟲卵ヲ發見シタリ、又實驗室ヨリ遙カ離レタル臺所ノ蠅ヲ取リテ研究シタルニ多クハ何ツノ間ニカ實驗室内ニ在リタルモノト見ヘテ腸内ニ毛頭蟲卵ヲ藏シタリト此等ノ卵ハ消化液ノ爲メニ死セズ有生ニテ蠅腸ヲ通過スルモノナレバ其蠅糞若シ食物ノ上ニ落チタランニハ之ヲ食スル人毛頭蟲患者トナルノ恐レアリ、又試ニ絛蟲卵ヲ水ニ浸シ置キシタルニ蠅ハ忽チ來リテ之ヲ腸中ニ取入リタリト、病因ト成ル或ル菌類ノ胞子ガ蠅ノ腸内ニ在ルヲ見ルハ決シテ稀ナラザル事ナリトス、因ニ云フ社會流通ノ紙幣、貨幣ナドニモ有害種子ノ附着シアリテ病ヲ蔓延セシムル媒介ト成ルヿアルハ疑ヲ容レザル事實ナルガ如シ

●セーム ボーム氏著日本帝國ノ鳥

英國ノ有名ナル鳥學者 Henry Seebohm 氏ハ去年 The Birds of the Japanese Empire ト云ヘル一卷ヲ著述セラレタリ、頁數三百八十六、數多ノ木版圖ヲ挿ミ、價ハ二十五シルリングニシテ頗ル有要ノ書ナリトハ曰フ迄デノヿナシ、凡ソ我國ニ産スル動物ノ特部類ヲ深ク研究シ之ヲ一書ニ纏メルヿヲ企テタルハ此書ヲ以テ殆ド嚆矢ナリトス、氏ハ十年以來殊ニ日本ノ鳥ニ熱心シ未ダ曾テ自ラ日本ノ地ヲ蹈タルヿナキニ既ニ二千有餘ノ日本鳥標品ヲ所持セラレ啻ニ撿査シタルノミノ數ハ實ニ數千ナリト云フ（我ガ帝國大學ニハ自國ノ鳥標品千四百個アルカナシ）、今爰ニ同氏著書ノ体裁ヲ記センニ先ツ第一ニ日本鳥ニ關スル書目皆歐米人ノ著ニ係ルヲ掲ケ次ギニ日本鳥分布ノ一章アリ、次ニ從來學士ガ學術的ニ驗査シタルヿアル種數三百八十一ヲ列記セリ、其記載甚ダ簡單ナリト雖モ亦各種ヲ差別スルニハ充分ナリ、書中一二ノ誤謬ナキニ非ズ（例ヘバめじろノ巣ハ主トシテ苔蘚ヨリ成リテ地上ニ在ル樣ニ述ベタルガ如キ）又氏ハ日本ノリテラチュールヲ利用シ能ハ

「種ノ起原」ト題シテ一千八百五十九年十一月出版サレタリ再版以後ニハ數多ノ増補及ビ訂正ヲナシタレドモ是ガ爲メ書ノ性質ヲ變ジタルヿナシ

此書ハ余ノ生涯中最モ大切ナル仕事ナルヿ疑ナシ且其始メテ出版サレタルヨリ以來常ニ世評宜カリキ一千二百五十部ノ第一版ハ出版ノ即日賣切レ又三千部ノ第二版ハ其後久シカラスシテ賣切レタリ今日(一千八百七十六年)ニ至ルマデ英國中ニ賣捌カレタル部數ハ一萬六千部ナリ而シテ其議論張リタル書ナルヿヲ考フルトキハ斯ク賣捌ケタルハ大ナリト謂フベシ此書ハイスパニア語ボヒミア語ポーランド語及ビロシヤ語ノ如キ語ニ至ル迄總テ歐洲ノ國語ニ譯サレタリ又バード孃ノ言ニ由レバ日本語ニモ譯サレ彼邦ニテハ連リニ讀マルト(此ハ誤ナリト箕作教授ヨリ聞キタリF.D.)ヒブライ語ノ如キニ於テモ此書ニ就テノ一論文現ハレ余ノ説ハ舊約聖書ニ包含サレタルヿヲ證明セリトハサテモ余ノ書ニ就テノ批評ハ實ニ數多アリキ一時ハ「種ノ起原」及ビ余ノ是ニ關シタル書ニ就テノ論文ヲ集メシニ是等ハ(新聞紙ノ批評ヲ除テ)二百六十五ニ至レリ然レドモ暫時ノ後余ハ失望シテ是ヲ止メタリ此問題ニ就テハ數多ノ論文及ビ著書現ハレタリ而シテ獨乙ニ於テハ「ダーウヰン説」ニ就テノ書目毎年或ハ二年毎ニ現ハレタリ

「種ノ起原」ガ斯ク世評ヲ廣フシタルハ多分余ノ是ヨリ前二度モ簡畧ナル概搆ヲ認メ又遂ニ拔キ縮メタル原稿ヲ再ビ拔キ縮メテ小ニナシタルニ由ルヿト余ハ信ズ是ニ由テ余ハ特ニ著シキ事實及ビ論局ヲ撰擇スルヿヲ得タリ又余ハ多年ノ間一ノ大切ナル規則ヲ守レリ即チ余ノ論局ノ一般ニ反シタル事實ノ公ニセラルヽモノアルカ或ハ新奇ナル觀察又ハ思想ノ是ニ反スルモノ腦中ニ浮ヒ出タルトキハ必ズ直ニ是ヲ記シ置クヿナリ何トナレバ余ハ經驗ニ由テ斯ノ如キ事實及ビ思想ハ他ノ都合ヨキモノヨリ容易ニ忘失スルヿヲ發見シタレバナリ余ハ此習慣アリタルニ由リ余ノ説ニ反對スル説ノ中余ガ少ナクトモ既ニ察シテ是ガ答辨ヲ試ミザリシモノ殆ンド鮮カリキ

記述センコヲ勸メタリ是ニ於テ余ハ直ニ余ノ後實際「種ノ起原」ニ於テ爲シタルヨリ三四倍モ大ナル計畫ニテ書キ始メタリ然レ𪜈是ハ余ノ蒐集シタル材料ヲ拔萃シタルモノニシテ余ハ以上ノ計畫ニテ殆ド半ヲ終ヘタリ然ルニ余ノ計畫ハ壓倒サレタリ何トナレバ一千八百五十八年ノ夏當時マレー群島旅行中ナリシウォレス氏ハ「變種ノ元種ヨリ無限ニ變スル傾向ニ就テ」是ノ論文ヲ余ニ贈リタリ而シテ此論文ハ恰モ余ノ說ト同一ノ說ヲ包含セリウオレス氏ハ余若シ其論文ヲ可トスル𪜈ハライエルニ贈テ熟讀ヲ乞ハンコヲ余ニ乞ヘリ

ライエル及ビフッカーノ願ニ由リ余ノ原稿ヨリノ拔萃及ビ一千八百五十七年九月五日附ノエーサ、グレーニ贈リタル余ノ手紙ヲウォレス氏ノ論文ト共ニ出版スルコヲ承諾シタル其事情ハ一千八百五十八年ノリンチ學會記事第四十五頁ニ記シアリ余ガ是ヲ爲スヲウォレス氏ハ不正ナリト思考スルナラント思ヒシ故余ハ初メ是ヲ承諾スルヲ欲セザリキ何トナレバ余ハ此時氏ノ性質ノ實ニ寛大ニシテ卑シキ所ナキコヲ知ラザリシナリ余ノ原稿ヨリノ拔萃モ又エーサ、グレーニ與フル手紙モ決シテ公ニスル積ニ非ザリシ故拙ニ記サレタリ是ニ反シテウォレス氏ノ論文ハ其言語實ニ感服スベク其論ズル所明晰ナリキ然レ𪜈二人ノ共ニ爲タル仕事ハ學者ノ注意ヲ喚起スルコナク余ハタヾタブリン府ノホートン教授ガ是ニ就テ批評シタルヲ記憶スルノミ氏ハ二人ノ著作中新奇ナルコハ皆不正ニシテ不正ナラザルコハ皆温シト判斷シタリ是ニ由テ觀レバ總テ新奇ナル說ヲ以テ一般ノ注意ヲ喚起セント欲セバ縷々ト是ヲ說明スルコ至テ必要ナリトノコ明白ナラム

一千八百五十八年ノ九月ニ至リテ余ハライエル及ビフッカー兩氏ノ切ナル忠告ニ由リ「種ノ變遷ニ就テ」ノ書ヲ著スコニ掛リタリ然レ𪜈度々病氣ノ爲メ又ムアー、パークニ於ル醫士レーン氏ノ水治療所ヘ赴クコニ由テ妨ゲラレタリ余ハ一千八百五十六年一層大仕掛ニ始メタル原稿ヲ拔キ縮メ遂ニ全書ヲ斯ク減ジタル仕掛ニテ終ヘタリ此著ノ爲メ余ハ十三ヶ月ト十日間孜々トシテ勉强シタリ書ハ

ナシ

余ガ「種ノ起原」ヲ起稿セル際左ノ事ノ如ク余ニ滿足ヲ與ヘタルコ殆ドナシ即チ種々ノ部類ニ屬スル動物ノ成熟シタルモノト其胎兒ノ大ニ形狀ヲ異ニシ同部類内ニ於テハ胎兒ノ互ニヨク似肖ストノ事實ヲ説明スルコ是ナリ余ノ記憶スル丈ニテハ「種ノ起原」ノ批評中其先ナルモノハ此點ニ就テ一言モセザリキ而シテ余ハエーサ、グレーニ與フル書中此事ニ就テ怪ミタルコアリキ近年ニ至リテ數多ノ批評者ハ此事項ニ就テ全ク功ヲヘッケル及ビフリッツミュラーニ歸シタリ此兩氏ハ疑ナク余ヨリ一層充分ニ又或點ニ於テハ正シク論究シタリ余ハ此問題ニ就テ別ニ一章ヲ成ス丈ノ材料ヲ有シタリシ故一層委シク是ヲ論ズル筈ナリシ何トナレバ余ハ讀者ヲシテ此問題ヲ覺ラシムルコ能ハザリシコ明ナレバナリ而シテ誰ニテモ讀者ヲシテ覺ラシムル人ニ總テ名譽ヲ歸スベシトハ余ノ説ナリ

此序ニ謂フベキコアリ曰ク總テ科學上ノ知識ナキ批評者ハ論ズルニ足ラズトスル𪜈ハ余ハ常ニ批評者ヨリ正直ナル取扱ヲ受ケタリ余ノ説ハ度々甚シク誤解サレ又苦々シク抵抗或ハ冷笑サレタレ𪜈此等ヲナシタル人ハ皆信實ニナシタリト余ハ信ズ概シテ曰フ𪜈ハ余ノ書ハ幾度モ々々大ニ過稱サレタリト余ハ信ズ余ハ又評論ヲ避ケタルヲ喜ブ是ハ全クライエルニ因レリ氏數年前余ノ地學上ノ著述ニ就テ話セル𪜈切ニ余ニ評論ヲ避クベキコヲ忠告シタリ何トナレバ是ニ由リテ善ヲナスコナクタヾ甚シク時ト氣ヲ損フノミナレバナリト

余自ラ過チシカ或ハ余ノ仕事ノ不充分ナルコヲ發見シタル𪜈又批評者ニ卑メラレタル𪜈又或ハ人ヨリ過稱サレテ悼メル𪜈ト雖𪜈幾百度トナク左ノ言ヲ自ラ誦ヘテ大ニ慰トナセリ曰ク余ハ力ノ及ブ丈勉強且懇ニ仕事ヲナセリ誰モ是ヨリ多ク爲スコ能ハザルヘシト余尚ホテラデル、フュイゴーノグード、サクセス灣ニ在リシ𪜈余ノ生涯ヲ博物學ノ爲メ幾分カヲナスニ費スコ最良ナラムト自ラ考ヘ且其事ヲ余ノ家族ニ報ジタリト信ズ余ハ力ノ及ブ丈此ヲ爲シタリ批評者ハ其欲スル所ヲ如何ニ言フモ此確信ヲ決シ

「種ノ起原」ノ成功ハ該問題ガ既ニ一般ノ人々ノ脳中ニ浮ビ居タルヿ又ハ人心ガ既ニ是ニ適シタル有様ニアリタルヿヲ証スナゾ謂フ人アリ余ノ考ル所ニ由レバ此言ハ極精密ニ正シト謂フ可ラズト何トナレバ余ハ前既ニ隨分數多ノ博物學者ノ心ヲ扣キタルヿアレ𪜈其中種ノ不變ヲ疑フ者一人ダモ非ザル樣見エタリライエル及フツカー兩氏ノ如キモ余ノ説ヲ聽テ興味ヲ表シタレ𪜈決シテ余ト説ヲ同フスルヿナカリキ余ハ又一二度有識ノ人々ニ余ノ所謂自然淘汰ナルモノヽ如何ナルモノナリヤ之ヲ説明セント試ミタレ𪜈著ク失敗シタリ實際當時ノ事情ナリト余ノ信ズル所ハ即チ左ノ如シ曰ク總テ博物學者ノ脳中ニハ既ニ數多ノ精密ニ觀察サレタル事實無數ニアリテ是等ヲ總テ包含スベキ説ノ一朝充分ニ明白ニナリタルトキハ直ニ各々其處ニ就キ得ル有樣ナリシト又余ノ書ノ成功シタルハ其餘リ大ナラザリシニ由レリ而ノ此ハ全クウォレス氏ノ論文ノ現ハレタルニ因レリ若シ一千八百五十六年ニ始メタル仕掛ニテ全巻ヲ出版シタリシニハ「種ノ起原」ヨリ四倍或ハ五倍ノ大ニ達シ是ヲ讀ム人モ實ニ少數ナリシナラム

余ハ一千八百三十九年即チ余ノ説ヲ明瞭ニ考案シタルトキヨリ一千八百五十九年マデ書ノ出版ヲ延引シタルニ由テ大ナル益ヲ得タリ又是ニ由テ損シタルヿハ毫モナシ何トナレバ此説ヲ考出シタルニ就テ世人ガウォレス氏ヲ以テ第一トスルモ余ヲ以テ第一トスルモ余ハ意ニ介スルヿ至テ鮮ケレバナリ且又同氏ノ論文ガ世人ヲシテ此説ヲ受容スルニ至ラシムルニ與リテ大ニ力アリタリ余ハタヾ一點ウォレス氏ニ及バザリシ所アリテ余ノ虚榮心ハ余ヲシテ常ニ是ヲ悔ヒシメタリ即チ北極地方ト是ト大ニ距リタル高山ノ頂ニ同一ノ植物ノ種及ビ少數ノ動物ノ種ノ棲存セルヿヲ氷時代ニ依テ説明スルヿ是ナリ余ハ此説ヲ深ク悦ビタレバ是ヲ委シク記述シタリ而シテ此説ハイー、フォーブスガ此問題ニ就テ其有名ナル論文ヲ著セシ前既ニフッカー氏ガ讀ミタリト信ズ余等兩人ガ互ニ其説ヲ異ニシタル點ニ就テ余ノ説ノ正シキヿヲ今ニ至ルマデ信ズ余ハ固ヨリ余自ラ獨立ニ此説ヲ考案シタルヿヲ公言シタルヿ

三形花ニ就テ五ノ論文ヲ著セリ余ハ余ノ學術上ノ仕事ノ中是等ノ構造ノ意味ヲ明ニシタルヿ程自ラ滿足ヲ感ジタルヿ非ザルナリ余ハ一千八百三十八年或ハ三十九年既ニLinum flavum(亞麻ノ種)二ノ異ナリタル形狀アルヿヲ見タレ𪜈最初是ハタヾ意味ナキ變化ナリト思考シタリ然レ𪜈普通ノさくらさうノ種ヲ研究シタルニ二ノ異ナリタル形狀ハ實ニ規則正シク且常アリテ決シテ意味ナキ變化ト見做ス可ラザルヿヲ發見セリ是故ニ普通ノきりんさう及ビさくらさうハ雌雄異株トナラムトスルモノナリト余ハ殆ンド確信スルニ至レリ即チ甲ノ短キ雌蕋及ビ乙ノ短キ雄蕋ハ兩ナガラ滅亡ニ近ヅケルモノナリトノヿナリ余ハ斯ク思考シテ該植物ニ實驗ヲナシタリ然レ𪜈短キ雄蕋ヨリ花粉ヲ取リテ短キ雄蕋ニ附着セシムルトキハ是ガ爲メ結ブ所ノ種ハ他ニ出來得ヘキノ四ノ方法ニ由テ得タルヨリ數多ナルヿヲ發見シタヤ彼ノ滅亡說ハ直チニ撲滅サレタリ其後種々實驗ヲナシタル後遂ニ左ノ事實明白ニナリタリ即チ該植物ノ二ノ形狀ハ孰レモ皆雌雄兩性ノモノナリト雖𪜈其相互ノ關係ハ恰モ通常ノ動物ノ雌雄ノ如シトノヿ是ナリみそはぎニ至リテハ一層愕クベキヿニハ三ノ異ナリタル形狀アリテ其相互ノ關係恰モさくらさうニ於ルガ如シ其後余ハ左ノ事ヲ發見セリ曰ク二ノ形狀ヲ異ニシタル同種ノ植物ノ交合ニ由テ得タル種ハ二ノ異リタル種ノ交殖ニ由テ得タルモノニヨク類似スト

一千八百六十四年ノ秋余ハ「攀援植物」ニ就テ長キ論文ヲ終ヘ是ヲリンネ學會ニ贈リタリ此論文ノ爲メ余ハ四ケ月ヲ費セリ然レ𪜈其校正ノ來リタルトキ余ハ甚ク不快ナリタレバ是ヲヨク爲スヿ能ハズ又數多文意ノ曖昧ナル所モアリタリ此論文ハ尠シモ人ノ注意ヲ惹カザリキ然レ𪜈一千八百七十五年是ヲ訂正シ別冊トナシテ出版シタルトキハヨク賣捌ケタリ余ノ此問題ヲ研究スルニ至リシハ一千八百五十八年出版ニナリタルエーサ、グレーノ短キ論文ヲ讀シニ因レリ氏ハ余ニ種ヲ贈リシ故其內ヨリ二三ノ植物ヲ培養シタルニ卷纏スル所ノ卷鬚及ビ莖ノ運動ハ之ヲ一見スルトキハ實ニ複雜ナルガ如シト雖實ハ甚ダ簡單ナルモノ

178

テ亡ボスヿ能ハザルナリ

一千八百五十九年ノ終ノ二ケ月間余ハ「種ノ起原」ノ第二版ノ支度ノ爲メ及ビ通信ノ取遣ノ夥シキ爲メ全ク時日ヲ費セリ一千八百六十年一月一日余ハ「動物及ビ植物ガ飼養或ハ培養ニ由テ受ル變化」ノ爲メ余ノ扣ヲ整頓シ始メタリ然レモ此書ハ一千八百六十八年ノ始ニ至ルマデ出版サレザリキ斯ク出版ヲ延引シタルハ蓋度々病ニ罹リタルト(其中七ケ月間病ミタルヿモアリ)其時々ニ余ヲシテ面白ク感ゼシメタル事項ニ就テ著作セント誘道サレタルニ因レリ

一千八百六十二年五月十五日「蘭ノ受精」ニ就テノ余ノ小著出版サル此書ノ爲メ余ハ十ケ月ヲ消費シタリ該書ニ載セタル事實ノ多分ハ是ヨリ先多年間集積シタルモノナリ

一千八百三十九年及余ノ信スル所ニ由レバ前年ノ夏期間余ハ植物ノ花ガ昆蟲ノ扶ニ由リテ互ニ其花粉ヲ交換スルヿニ就テ觀察スルニ至レリ蓋種ノ起原ニ就テ思想ヲ廻ス中余ハ左ノ論局ニ至リタレバナリ曰ク種ノ形狀ヲ變ゼザルハ大ニ生物ガ互ニ交殖スルニ因レリト爾後余ハ夏期多少此問題ニ注意シタリシガ一千八百四十一年十一月ロバート、ブラウンノ忠告ニ由リツェー、カー、スプレンゲルノ Das entdeckte Geheimniss der Natur ト題セル嘆賞スベキ書ヲ需メテ是ヲ讀ミタルニ由テ大ニ興味ヲ増加シタリ一千八百六十二年ヨリ前數年間余ハ特ニ英國ノ蘭ノ受精ニ注意シタリ而シテ余ノ他ノ植物ニ就テ徐々ニ蒐集シタル夥多ノ事實ヲ用ヒンヨリ寧ロ蘭科ノ植物ニ就テ余ノ力ノ及ブ丈完全ナル書ヲ著スヿ最良ナラムト思考シタリ余ノ決心ハ無益ナラザリキ何トナレバ余ノ書ノ公ニサレテヨリ以來種々ノ植物ノ受精ニ就テ實ニ愕クベキ程夥多ノ論文或ハ書籍現ハレタレバナリ而シテ是等ハ皆余ノ爲シ能ヒシヨリ遙カ優レリスプレンゲルハ實ニ憐ムベシ氏ノ功績ハ久シキ間人ニ知ラレザリシモ其死後多年ヲ歷タル今日ニ至リテ充分人ノ識認スル所トナレリ

同年中余ハ又リンチ學會紀要ニ「さくらさうノ二ノ形狀ニ就テ」ノ論文ヲ出版シ又此外次ノ五年間ニ二形花及ビ

ガ人類ノ起元ニ就テ確信スル所ヲ列擧スルガ如キハ無益ニシテ且該書ノ成功ヲ妨ゲタルナラム

然レモ數多ノ博物學者ハ種ノ變遷ヲ固ク信ゼルヲ見ルニ至リテ余ノ所有セル丈ノ記錄ヲ集メ此問題ニ就テ特ニ論ゼル書ヲ著ス方宜シカラント思考セリ余ハ是ニ由テ雌雄淘汰ヲ充分ニ論ズルノ機ヲ得タレバ殊ニ悅ンデ是ヲ爲シタリ此雌雄淘汰ナル問題ハ常ニ余ノ面白シト思ヒタルモノナリ余ノ蒐集シタル材料ヲ總テ用ヒル丈充分余ノ論述シ得タル問題ハ此雌雄淘汰ノ問題ト家畜及ビ栽培植物ノ變化ト生物變化ノ原因及ビ法則ト遺傳及ビ植物ノ交殖ノミナリキ余ハ「人類ノ祖先」ノ爲メ三ケ年ヲ費シタレモ其中幾分ハ常ノ通リ病氣ノ爲メ失ヒ又或部分ハ再版ノ爲メ又ハ他ノ小冊子ヲ著ス爲メ費シタリ「人類ノ祖先」ノ大ニ訂正ヲナシタル第二版ハ一千八百七十四年現ハレタリ(未完)

## 東京動物學會記事

●東京動物學會　三月廿八日午後二時ヨリ動物學教室ニ例會ヲ開ク會スルモノ十三人飯嶋魁氏ハ本邦ノ鳥ニ就テ石川千代松氏ハ細胞分裂ノ事ニ就テ演説アリ畢テ四時頃散會セリ。

●寄贈書及ビ交換圖　三月中本會ニ領收シタルモノ左ノ如シ

| | |
|---|---|
| 東京醫學會雜誌第五卷第五號、六號 | 東京醫學會 |
| 牧畜雜誌第五十一、五十二、五十三號 | 牧畜雜誌社 |
| 大日本農會報告第百十五、十六號 | 大日本農會 |
| 日本園藝會雜誌第廿二號 | 日本園藝會 |
| 日本蠶業雜誌第三十七號 | 日本蠶業雜誌社 |
| 植物學雜誌第四十九號 | 東京植物學會 |
| 北海之殖産第七、八號 | 勸農協會 |
| 北水協會報告第六十一號 | 北水協會 |
| 北海道殖民地撰定報文、完一部 | 北海道廳第二部 |
| 全附屬圖、五葉 | 仝 |
| 北海道廳第四回勸業年報、一部 | 仝 |

ナレバ余ハ甚ダ之ヲ悦ビ且怪ミタリ余ハ是ガ爲メ他ノ攀援植物ヲ數多需メテ總テ是等ヲ研究スルニ至レリ余ハヘンスローガ其講義ニ於テ卷絡植物ニ就テ與ヘタル説明即チ此等ノ植物ハ自ラ螺旋ヲナスノ傾向アリトノ説明ヲ以テ決シテ滿足セザリシ故一層此問題ニ興味ヲ感ジタリ此説明ハ全ク不正ナルヿ明ニナリタリ攀援植物ノ呈セル適應ノ或モノハ其妙ナルヿ蘭ノ交殖センガ爲メノ適應ニ毫モ劣ラザルナリ

「動物及ビ植物ガ飼養或ハ培養ニ由テ受ル變化」ハ既ニ記シタル如ク一千八百六十年ノ始ニ始メタレ𪜈一千八百六十八年ノ始ニ至ル迄出版サレザリキ此ハ大ナル書ニシテ余ハ是ガ爲メ四年ト二ケ月間甚ク勉强シタリ此書中ニハ吾ガ英國ノ家畜及ビ栽培植物ニ就テ總テ余ノ觀察セシ所及ビ種々ノ源ヨリ蒐メタル夥多ノ事實ヲ記載セリ第二卷ニ於テハ生物變化ノ原因及ビ法則及ビ遺傳等ノ事項ヲ當時吾人ノ智識ヲ以テ爲シ得ル丈充分論ジタリ全書ノ終ノ部分ニ於テ余ハ充分世人ノ愚弄ヲ受ケタルぱんぢぇねしすノ假定ヲ陳述セリ證據ナキ假定ハ實ニ其用尠ク或ハ全ク其用ナカラム然レ𪜈此後誰ニテモ觀察ヲナシテ余ノ假定ノ如キモノヲ確定スルニ至ラバ余ハ善キ事ヲナシタルナラム何トナレバ現今互ニ關係ナキ夥多ノ事實ハ是ニ由テ纏メラレ且理解シ易キニ至レバナリ一千八百七十五年大ニ訂正ヲ加ヘタル第二版出版サル余ハ是ガ爲メ中々骨折シタリ「人類ノ祖先」ハ一千八百七十一年二月出版サレタリ余一タビ一千八百三十七年或ハ一千八百三十八年種ナルモノハ變遷スルモノナリト確信スルニ至リシヤ人類モ又此法則ノ支配ヲ受ケザルヲ得ズトノ信仰ヲ止ムルヿ能ハザリキ故ニ余ハ此問題ニ就テ記錄ヲ集メタリ此ハタヾ自ラ滿足スル爲メニシテ久シキ間ハ是ヲ公ニスル念ナカリキ「種ノ起原」ニ於テハ或一定ノ種ノ如何ニシテ出來セシヤ是ヲ論ジタルヿナケレ𪜈然レ𪜈余ハ其説ヲ匿シタリトノ誹ヲ一人ノ君子ヨリモ受ケザランガ爲メ該書ニ由テ「人類ノ起元及ビ其來歷モ幾分カ明ニナルベシ」トノ言葉ヲ加フルヲ善トセリ若シ夫レ證據ヲ擧ゲズシテ徒ニ余

動物學雜誌第參拾壹號
明治廿四年五月十五日發兌

## ●日本鳥類ノ分布ニ付キ（前號ノツヾキ）

飯島魁

又日本ノ鳥族ト大ブリテンノ鳥族トヲ比較シ見ルニ大ニ相似タル所アリ、即チ左ノ表ニテ明ナルベシ

| | 大ブリテンニ在ル種數 | 日本ニ在ル種數 |
|---|---|---|
| ツグミノ類 | 二七 | 二八 |
| ヒヨドリノ類 | 〇 | 五 |
| ウグヒスノ類 | 二〇 | 一五 |
| シヤウカラノ類 | 一五 | 一一 |
| カラスノ類 | 一〇 | 一二 |
| モズノ類 | 五 | 七 |
| ムクドリノ類 | 三 | 四 |
| セキレイノ類 | 一二 | 七 |
| ヒバリノ類 | 六 | 二 |
| スヾメノ類 | 三二 | 三二 |
| ツバメノ類 | 四 | 五 |
| キツヽキノ類 | 四 | 一一 |
| ヤツガシラ | 一 | 一 |
| ハトノ類 | 四 | 九 |
| ホトヽギスノ類 | 三 | 四 |
| カハセミノ類 | 二 | 三 |
| ヨタカノ類 | 七 | 四 |
| ヅクノ類 | 一〇 | 一一 |
| タカノ類 | 二五 | 二一 |
| ヘラサギノ類 | 二 | 四 |
| サギノ類 | 一二 | 一五 |
| ウノ類 | 三 | 八 |
| アホウドリノ類 | 八 | 一一 |
| カモノ類 | 四四 | 三七 |
| カモメノ類 | 三七 | 三五 |
| シギ、チドリノ類 | 四八 | 五〇 |

速記社號外　壹部　　速記社
帝國大學一覽表　壹部　　帝國大學
成醫會月報第百九號　　成醫會

## 公告

本號ニ掲グル Papilio machaon 成蟲及ヒ仔蟲ノ圖版ハ石川千代松氏稿日本產蝶類ニ附屬スルモノナルガ本誌ハ之ヲ始メトシテ蝶類諸種ノ圖ヲ順次ニ掲載シテ有志諸君研究ノ便ニ供セントス」圖版ノ屬スル本文ハ數種ノ分ヲ纒メ追テ登載スベシ

ト結果ナリト看做スモ誤ナキニ似タリ、此事ヲ辨ヘルニ於テハ左ニ述ルきまわりノ一例モ怪ムニ足ラザルベシ」、きまわり(Sitta)ハ全古北區域ニ擴ガル種ナルガ西歐及ビアルジリアニ產スル者ハ全下部ノ羽色茶褐色ニシテ喉部ニテ少シク色淡シ、是ヨリ東北ノ方向ニ進ミ東海（ボルチック）ニ達スレバ其地方ニ產スル者ニハ喉部白色トナリ、尙ホ進ミテダンチッヒニ至レバ此白斑漸々大キク成リテ胸部ヲ蔽フ而シテセントペテルスブルグニ至レバ白色ハ腹部マデモ擴ガリアリ、是ヨリ東方ニ向ヒシベリアニ至レバ殆ド全下面純白トナリ、茶褐色ハ僅カニ腹側ト下尾筒ノミニ殘レリ、然ルニ黑龍江地方並ニ南日本ニ至レバ腹部再ビ茶褐色ト成リダンチッヒ地方ノ羽色ヲ再出シ尙南ニ向ヒ支那南部ニ至レバ茶褐色部大ニ加ハリテ恰モアルジリア產ノ者ニ異ナラズ」此外ニモ同樣ナル例ノ世ニ知ラレタルモノ尠カラズ、詳細ハセーボーム氏原著ニ就キテ見ルヲ要ス

（完）

## ●動物解剖手引草（鳥類ノ部）（ツヾキ）

岩川友太郎

第五項　胸椎骨ニ就テ注意スベキ事ハ左ノ如シ

（一二）前方ノ四個ハ椎体、關節突起及ヒ橫突起ヲ以テ互ニ相結合セリ

（一三）第五ノ胸椎骨ハ複性薦骨ト結合シテ其大ナル橫突起ハ腸骨ニ銜着シ其肋骨ノ末端モ亦之ト結合セリ

（一四）第一胸椎骨ノ大ナル下突起ハ末端ニ至リテ二分セリ

（一五）胸椎骨ニ附屬セル肋骨ハ各々背腹兩片ヨリ成リ背片ヲ椎肋（Vertebral rib）ト名ツケテ其形質ハ最末ノ頸椎骨ニ附屬セルモノト同一ナリ（十四、十五）腹片ヲ胸肋（Sternal rib）ト名ツケ鉛直ナル扁骨ニシテ椎肋ト鈍角ヲ成シ而シテ其下端ハ胸骨ト關節セリ

第六項　複性薦骨ノ搆造ニ預カル諸椎骨ニ就テ觀察スベキモノハ左ノ如シ

（一六）第五胸椎骨ノ次ニ位セル二個若クハ三個ノ腰椎骨

| | | |
|---|---|---|
| ツルノ類 | 二 | 六 |
| クヒナノ類 | 一〇 | 九 |
| カヒツムリノ類 | 九 | 七 |
| キジ、ウヅラノ類 | 九 | ・ |
| 合 | 三七四 | 三八一 |

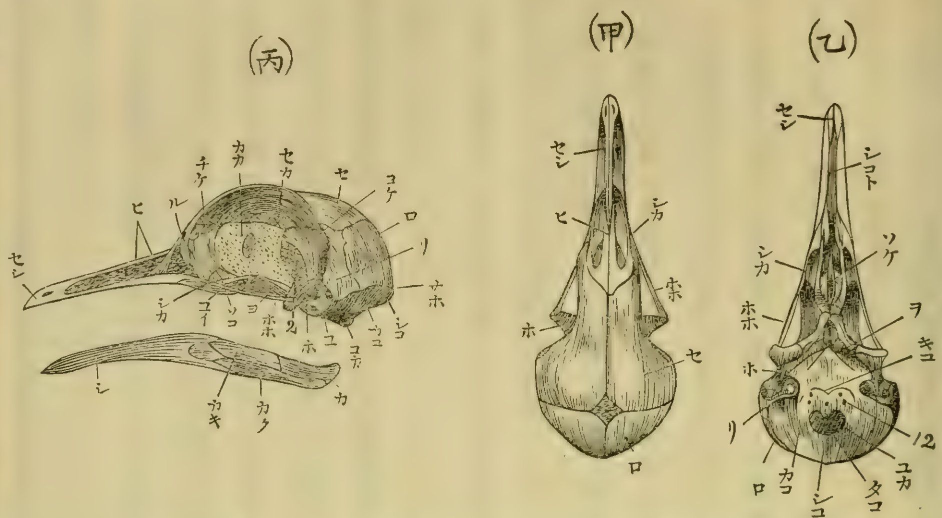
兩國ニ在ル鳥類中大凡ソ百三十種ハ全ク同物ナルカ或ハ甚ダ近似シテ唯ニ變種タル差異アルノミ、又兩國ノ鳥類種數ハ前表ニアル如ク畧ボ同ジ（三七四ニ對スル三八一）ナルモ日本ノ方少シク多シ、抑モ日本ノ國柄ハ南北ニ長ク兩端ニテ温度ノ異ナルヿ英國ノ比ニ非ズ、故ニ種數ノ多キハ當然ナリ、英國ニテハ數十年以來無數ノ鳥學者ガ探求ニ探求ヲ重ネタル次第ナルガ日本ニテハ未ダ然ラズ僅數ノ好鳥家ガ僅カノ場所ニテ探求シタルノミ、左レバ後來ノ研究ニヨリ日本ニ見ル鳥種ノ增加スルヤ必セリ、蓋シ國ノ位置、形狀、季候ニヨリ説明シ得ベキノミ

日本ノ古北區域東部ニ對スル地理的關係ハ恰モ大ブリテンノ同區域西部ニ於ケルト同一ナリ、兩國鳥類ノ相似タル所ハ此地理的相似ニ關係アルナルベシ、

古北區域ノ東西部ニ同種ノ鳥アレバ中間部ニモ同種アリテ連續スルモノナリ而シテ中間ニ無クシテ東西種ヲ同フスル隔絶分布ノ例ハ殆ドナシト云フモ可ナリ、但シをながどりハ破格ノ一場合ナリ、此鳥ハ日本、支那及ビシベリア東部ニ在リテ古北區域ノ中央部ニハ居ラザルモ隔絶シタルスパニア國ニハ普通ニ見ル所ナリ、東洋ノをながどりト異ナル所ハ僅ニ尾羽ノ末端白カラザルニ止マル、此鳥或ハ昔時宣教師輩ノ東洋ヨリ輸入シタル者ニハ非ザルカトノ疑アリ

夫レ古北區域ニハ鳥種ノ隔絶分布ノ例殆ド全クナシ、併シナガラ全區域ニ擴ガル種ニシテ東亞ノ變種ハ中間ナルシベリアノ變種ヨリモ寧ロ西歐ノ變種ニ近似スルノ例ハ許多アリ、此事ハ甚ダ面白キヿナルガ之ヲ説明スルニハ季候ノ異同ヲ以テ足レリトス、凡ソ同種タリト雖モ寒地ニ産スル者ハ羽色ニ白ミ多ク而シテ煖地ニ産スル者ハ黒ミヲ帯ブルヿアルハ普通ノ現像ニシテ寒氣ト白色ハ原因

第二圖




大凡六週日ヲ經タル雛ノ頭骨（自然大）（甲）上面（乙）下面（丙）側面

（ヨケ）翼蝶骨（カク）角狀骨（カ）關節骨（キコ）基底後頭骨（シ）齒骨（カコ）外後頭骨（チ）歐氏管口（タコ）大孔（セ）前頭骨（カカ）眼窩間中隔（ホホ）頬骨（ル）涙骨（サホ）三角狀縫接（チケ）中篩骨（シカ）上顎骨（シコト）上顎口蓋突起（ヒ）鼻骨（コカ）後頭髁（セカ）前頭骨ノ眼窩板（ロ）顱頂骨（ソケ）側蝶蝶骨（コイ）口蓋骨（セシ）前上顎骨（ヨ）翼狀骨（ホ）方骨（カキ）上角狀骨（シコ）上後頭骨（リ）鱗狀骨（コ）鼓室（2－12）腦神經孔

セラレ而シテ前方ニ延長シテ細長三稜形ノ嘴ヲ形成セリ

（三四）大孔ハ一大圓孔ニシテ腦篋後部ノ腹面ニ開在セリ

（第二圖タコ）

（三五）後頭髁（コカ）ハ大孔ノ前縁ニ於ケル半圓形ノ一小突起ナリ

（三六）三角狀隆起ハ大孔ノ上縁ニ位シ之ト並行セル横隆起ニシテ頸筋ヲ附着セシムルノ用ヲ爲ス

（三七）雛ノ時ニハ大孔ハ四個ノ特立セル骨ヲ以テ疆界セラル即チ上縁ノ上後頭骨（シコ）下縁ノ基底後頭骨（キコ）及ヒ左右ノ外後頭骨（カコ）是ナリ右ノ中上後頭骨ハ三角狀縫接（サホ）ニ由テ顱頂骨ト分界セラレ全成ニ至レハ此縫接ハ三角狀隆起ニ由テ表示セラル

（三八）頭蓋背面ノ中央線ニ存スル縱溝ハ後方ニ至リテ三角狀隆起ノ中央ト結合シ之ヲ以テ左右ノ顱頂骨及ヒ前頭骨ノ間ニ存シテ癈滅セル縫接ノ位置ヲ示ス

（三九）雛ノ間ハ顱頂骨（ロ）ト前頭骨（セ）ハ特立セル二對ノ骨ニシテ甲ハ三角狀縫接ノ少シク前方ニ擴張シ乙ハ頭

ハ各々短潤ナル椎体ヲ具ヘ其横突起ハ短大ニシテ腸骨ト連接シ(一〇七)脊棘ハ初的ニシテ下突起ヲ有セス(第一圖)

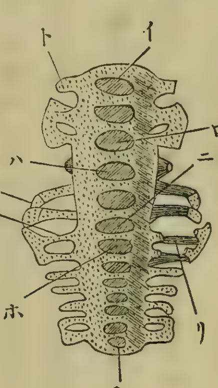
(一一七)三個若クハ四個ノ薦椎骨(仝圖八二)ハ腰椎ニ密似スト雖モ横突起ハ扁平ニシテ神經弓ノ背端ヨリ外方ニ擴張シ而シテ腸骨ト連接セリ全成スルニ至レハ次位ノ諸椎骨ノ横突起ハ悉ク互ニ結合シ其間ニ存在セル從來ノ間隙ハ左右二列ノ小孔ト成リテ遺留ス

(一一八)第一尾椎骨(ホ)ハ薦椎ト同様ナレトモ其神經弓ヨリ發出セル扁平ナル横突起ノ外ニ椎体ヨリ起リテ亦腸骨ニ連接スル所ノ大ナル尾肋(Caudal rib)ヲ有セリ

(一一九)自餘ノ六個ハ赤尾椎骨ニシテ互ニ結合シ椎体ハ漸々細小ト成リテ最初ノ一個(第二尾椎骨)ヲ除クノ外ハ肋骨ト横突起トノ區別ヲ有セス

(一二〇)雛ノ薦骨ハタヽ一片ノ軟骨ニシテ之ヲ搆成セル推骨ハ横突起ト腹面ノ中央線ニ始マリテ後來推体ト成ルベキ化骨點トニ由テ表示セラルヽニ過キス(第一圖)

第一圖




大凡二週日ヲ經タル雛ノ薦骨ノ下面ヲ二倍セル圖
(ホ)第一尾椎ノ化骨セル椎体(ヘ)第七尾椎ノ仝上(ヌ)第一尾肋(イ)第一腹椎ノ椎体(ロ)第三腹椎ノ仝上(ハ)第一薦椎ノ椎体(ニ)第三薦椎ノ仝上(ト)第一腹椎ノ横突起(チ)第二薦椎ノ仝上(リ)第一尾椎ノ仝上

第七項　殘餘ノ脊柱部ニ就テ注目スベキモノハ

(一二一)分離尾椎骨(Free Caudal Vertebra)ハ各々短小ナル椎体ト明亮ナル脊棘及ヒ扁長ナル横突起トヲ具ヘ最末ノ二個ハ亦特別ノ下棘ヲ有セリ

(一二二)鋤骨(Pygostyle or Ploughshare bone)ハ不正形ノ扁大骨ニシテ其中軸ハ分離尾椎骨ノ中軸ト殆ント直角ヲ成シ脊柱ノ末端ト成リテ尾錐(Uropygium)ヲ支持セリ

(一一二)

第八項　頭骨ニ就テ撿スベキモノハ

(一二三)腦筐ハ圓形ニシテ其前面ハ大ナル眼窩ニ由テ横領

ハ之ト全ク結合ス其礎部ノ左右各側ニ一小關節面ヲ具ヘタル基底翼狀突起ヲ有シテ翼狀骨ノ關節ニ供フ

(五〇)頭蓋底(Basis cranii)ハ大孔ノ下緣ヨリ側蝴蝶骨ノ基底ニ擴張シテ外方ハ皷室ノ下緣ニ出テ疆界セラル雛ノ際ニハ其後部ハ基底後頭骨ヨリ成リ其前部ニ基底蝴蝶骨ナル一大骨アレトモ全成ノ後ハ基底顳顬骨ヲ以テ隱蔽セラレ而シテ此基底顳顬骨ハ前方ハ擴張シテ側蝴蝶骨ノ基底ニ至リ外方ハ皷室ノ腹壁ヲ構成セリ

(五一)基底顳顬骨ノ前端ハ薄弱ナル骨板ト成リテ基底蝴蝶骨嘴ノ上方ニ突出シ此骨板ト嘴ノ間ニ一小腔アリテ二個ノ歐氏管(Eustachian tubes)ハ是ニ開在セリ此歐氏管總口(ヲ)ヨリ各皷室ニ向テ一本ノ搜毛ヲ挿入スベシ

(五二)頭骨ノ組織ハ其縱斷面ニ就テ之ヲ明視シ得ベクシテ各骨ハ緻密至薄ナル外層即チ外板(External table)ト之ト同質ノ內層即チ內板(Internal table)及ヒ中間ノ海綿狀組織即チ實弗魯(Diplœ)ヨリ組成セリ而シテ實弗魯ハ前頭骨ノ前部及ヒ基底蝴蝶骨ト側蝴蝶骨トニ於テ殊ニ肥厚セリ

(五三)腦箱ノ內面ハ頭腦ノ諸部ヲ受容スル爲ニ大小數個ノ凹窩ヲ現ハセリ頭蓋底ハ深ク後方ニ凹陷シテ延髓ヲ受容シ腦腔ノ前背部ニハ大ナル大腦窩(Cerebral fossa)アリテ大腦ヲ受容シ其下方ニ當リ明瞭ナル骨隆ヲ以テ分界セラレタル處ニ圓形ノ視神經窩(Optic fossa)アリテ視神經葉ヲ受容シ又視神經窩ノ後下部ニ當リ小腦窩(Cerebellar fossa)ナル者アリテ小腦ヲ受容シ其前面ヲ分界セル幕狀隆起(Tentorial ridge)ハ腦腔ノ床底ヨリ斜ニ後上方ニ移行シ三角狀隆起ノ稍々前部ニ當リ頭腔屋壁ニ於テ對側ノ隆起ト連合セリ

(五四)耳腔ハ大孔ノ直外ニ存スル腦腔ノ最厚部ニシテ視神經及ヒ小腦兩窩ヲ稍々横領セリ其上部ヲ界セル著明ノ半圓形隆起ハ前半規管ノ位置ヲ示シ其前端ニ存セル膨脹ハ其半規管ニ屬セル壼腹ノ位置ヲ表ハシ又此管弓ノ內ニ存スル一ノ隆起ハ後半規管ノ內部ヲ表示スルナリ

半規管ノ位置ト交互ノ關係ヲ明視セント欲セハ預メ小

脳腔屋壁ノ全前部ヲ成シ更ニ眼窩ノ間ニ前進シテ各窩ノ上縁側ヲ構成ス

(四〇)脳腔各側ノ前下部ニ鱗状骨(リ)ト稱スル特立ノ一骨アリテ其上縁及ヒ後縁ハ顱頂骨ト前頭骨ニ界シ而シテ前縁ハ蝴蝶骨下縁ハ外後頭骨ニ界セリ

(四一)名眼窩ノ後縁ニ於テ頭蓋ノ彎曲セル側部ハ鋭ク内方ニ屈曲シテ薄板状ノ眼窩板ト成リ以テ脳腔ノ前壁ト眼窩ノ後壁トヲ形成セリ

(四二)雛ノ眼窩板ハ上下ノ二部ヨリ成レリ上小部ハ前頭骨ノ内曲部ニシテ之チ前頭骨ノ眼窩板(セカ)ト名ツケ下大部ハ特立ノ蝴蝶翼骨(ヨケ)ト成レリ

(四三)眼窩間中隔(Interorbital septum)(カカ)ハ眼窩ヲ分隔セル薄縦骨ニシテ其後端ハ眼窩板ト結合セリ

(四四)眼窩間中隔ノ前部ハ雛ニ在リテハ中篩骨(チケ)ト名ツクル特立ノ一骨ヨリ成リ而シテ其後部ハ前篩骨ヲ代表ス

(四五)乾燥セル頭骨ノ兩眼窩ハ上下ニ並列セル二大孔ニ由テ互ニ相交通セリ之ヲ眼窩間窓(Interorbital fenestra)ト名ツケテ其一部ハ眼窩板ニ一部ハ眼窩間中隔ニ位セリ然レトモ新鮮ナル頭骨ニテハ膜ヲ以テ閉塞セリ

(四六)上方ノ眼窩間窓ヲ閉塞セル膜ノ中央ニ嗅神經孔ト稱スル一孔アリテ頭脳ヨリ發出スル嗅神經ノ移行ヲ便ニス此孔ハ眼窩間中隔各側ノ背側縁ニ並行セル溝ニ續キテ前方ニ至リ鼻腔ニ開通シテ嗅神經ヲ通過セシムル所ノ一孔ト連ナレリ

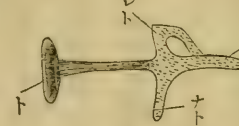
(四七)下方ノ眼窩間窓ヲ閉塞セル膜ノ中央ニ亦視神經孔(2)ナル一孔ヲ穿チ以テ頭脳ヨリ發出スル視神經ノ通過ニ供フ

(四八)皷室(コ)ハ眼窩後下隅ノ直後ニ存在セル不正形ノ凹窩ニシテ上前方ニ向ヒ而シテ上部ハ鱗状骨後部ハ外後頭骨下部ハ基底顳顬骨ニ由テ疆界セラル

(四九)側蝴蝶骨(Parasphenoidソコ)一名基底蝴蝶骨嘴(Basisphenoidal rostrum)ハ前端ニ尖レル長強骨ニシテ眼窩間中隔ノ直下ニ位シ雛ノ間ハ獨立スレトモ全成ニ至レ

外端ハ鼓膜ノ内面ニ全ク密着セリ

第三圖




はとノ耳軸骨(八倍)
(ト)鐙骨
(シト)上鐙骨
(カト)外鐙骨
(ナト)下鐙骨

耳軸骨ハ細小ナル桿狀骨ニシテ其内端ニ鐙骨(ト)ト名ツクル椿圓形ノ一扁骨ヲ具ヘ其外端ニ三歧狀ノ軟骨ヲ有ス三歧中ノ中枝ハ鐙骨幹ノ延長部ニシテ之ヲ外鐙骨(Extrastapedial)(カト)ト稱シ其背部ニ存スル第二枝ヲ上鐙骨(Suprastapedial)(シト)トイヒ第三枝ヲ下鐙骨(Infrastapedial)(ナト)トイフ又上鐙骨ハ軟骨質ノ一斜枝ニ由テ外鐙骨ト結合セリ(ツヾク)

## ●三月下旬高知近傍ニ於テ採集セシ蝶類

吉永虎馬

本年當地ハ餘寒殊ニ酷シク三月ノ初メ猶降雪ヲ見ル有樣ニテ隨テ蝶類ノ發生モ昨年ニ比スレハ大ニ遲シ其最普通種ナルもんしろてふ、しゞみてふ等モ昨今漸ク近郊ニ飛行スルヲ觀ル故ニ余ノ採集セシ品類ノ如キモ僅々十餘ノ少數ニ過ギザレドモ聊カ參考ノ爲メ之ガ名稱ヲ左ニ報告セン

PAPILIONIDÆ.

1. Papilio xuthus. *L.* わげいのてふ

PIERIDÆ.

2. Pieris napi, *L.* すぢぐろてふ
3. P. rapæ, *L.* もんしろてふ
4. Colias hyale, *L.* れつねんてふ
5. Terias multiformis, *H. P.* きてふ

LYCAENIDÆ.

6. Amblypodia japonica, *Murray.* るりしゞみ
7. Polyommatus phlæas, *L.* べにしゞみ
8. Lycœna argiolus, *L.* しゞみてふ
9. L. orgia, *Men.* まやとしゞみ

刀ヲ以テ耳部ニ存スル頭骨ノ外板ヲ削リ徐ニ實弗魯ヲ除去スベシ半規管ハ緻密ナル骨質ヲ以テ包裹セラレ所謂骨質ノ半規管ト成リテ其形狀ノ位置ドハ内部ノ膜質半規管ト更ニ異ナル所ナシ前半規管ハ他ノ二管ヨリ著大ニシテ後半規管ノ平面ハ前管ノ平面ト直角ニ位シ而シテ壺腹ハ其後端ニアリ後半規管ハ斯ク特異ノ位置ヲ占ムルカ故ニ正等ノ位置ヲ有セル水平半規管ヲ直前ニ横亘セリ

(五五)雛ノ際ニハ耳腔ノ要部ハ前耳骨(Prootic)ノ一片ヨリ成ルト雖モ其後二個ノ化骨點ヲ生シテ一ハ其上後方ニ起リ之ヲ上耳骨(Fpiotic)ト名ツケ早晩上後頭骨ト癒着シ一ハ後下部ニ起リテ亦外後頭骨ト相結合ス之ヲ後耳骨(Opisthotic)トイフ

(五六)頭蓋ノ内面ニ於テ前半規管ノ壺腹ニ應スル膨脹部ノ少シク下部ニ當リ二小孔アリ以テ第七(顔面神經)及ヒ第八(聽神經)腦神經ノ通過ニ供フ

(五七)右ノ二小孔ノ下方ニ當リ一隆起ニ由テ之ト分界セラレタル楕圓狀ノ一小窩アリ其窩底ニ開在セル一孔ハ(9-10)直ニ頭蓋ノ外面ニ移行シ以テ第九(舌咽神經)第十(迷走神經)及ヒ第十一(副行神經)腦神經ヲ通過セシム

(五八)前記ノ一小孔ノ後内方ニ亦髁狀孔(Condyloid foramen)ナル一小孔(12)アリ頭蓋ノ外面ニ移行シテ第十二(舌下神經)腦神經ヲ通過セシム

(五九)視神經窩ノ直下ニ當リ互ニ相接セル二孔アリテ眼窩板ノ前面ニ通ジ以テ第五(三叉神經)腦神經ヲ通過セシム

(六〇)短强不正形ナル方骨(ホ)ハ二頭ヲ以テ鼓室ノ背部ニ存スル二關節面ト相關節シ二關節面ノ中上者ハ鱗狀骨ニ由リ下者ハ上耳骨ニ由テ形成セラル此關節部ヨリ方骨ハ前下方ニ移行シ其内緣ヨリ發出セル一大尖頭ノ上昇突起(Ascending process)ハ上内兼前方ニ突出シテ其末端ハ下顎骨ニ向テ横長形ノ關節面ヲ形成セリ

(六一)耳軸骨(Columella第三圖)ハ小長骨ニシテ扁平ナル其内端ハ鼓室ノ内壁ニ存スル卵圓窓ニ附着シ軟骨質ノ

ルノミナラス其出來セル形質ハ保續サルヽモノナリ、生存競爭ハ生物体ノ內外ニ烈シキ競爭ヲ生シ特別ナル種ヲ造リ出シタルヲ以テ止ルモノニ非スシテ反テ又一層烈シク働クモノナリ何ントナレハ形質ノ異同ハ僅少ナル點ニ於ケルモ其之レヲ具フル個体ノ生存上ニ關スルモノナレバナリ、

食肉禽ハ鳥類中最モ鋭キ眼ヲ有スルモノナリ、然シテ若シ眼ノ少シクモ不完全ナルモノヽ生スルモノトセハ他鳥ト競爭中常ニ敗ヲ取ラサルヲ得サルヲ以テ餓死スルヿヲ免カレサルヘシ、

故ニ食肉禽ノ鋭眼ナルヿハ其少シクドモ鋭眼ナラサル者ノ常ニ淘汰サレテ取除サルヽヲ以テ全ク自然淘汰ノ力ニ依リテ絶エス保續サルヽモノナリ、然レドモ此ノ事モ食肉禽ノ種類ニシテ眞暗ノ場所ニ住スルニ到レハ直チニ變スルナラン、何ントナレハ茲ニ於テハ眼ハ既ニ個体ノ生存即チ種ノ保續ニ於テハ無關係トナルヲ以テ恐クハ數多ノ世代ハ鋭眼ヲ遺傳スヘシト雖モ若シ眼力ノ不完全ナルモノヽ現出スルヿアルモ亦同シク遺傳スヘクシテ非常ニ近視ナル眼モ又非常ニ不完全ナル眼モ同シク其子孫ニ其質ヲ遺傳シ種々樣々ノ眼質ノ雜合ニヨリ暗處ニ來リシ前ニ比スレハ眼力ノ平均點ハ餘程低度トナルヘシ、

余輩ハ未タ全ク暗處ニ住スル禽類アルヲ聞カス又之アリトモ思ハス然レドモ余輩ハ盲目ナル魚類及ヒ兩生物アルヲ知ル而シテ其眼ハ深ク皮膚內ニアリテ小ナレドモ未タ全ク消失セスシテ尙ホ存在ス、余ノ思考ニ由レハ此事實ハ實ニ以テ普通唱フル所ノ不用ヨリ退化セリト云フヲ以テ說明スルヿ難キモノナリ、何ントナレハ若シ不用カ一機官ヲシテ全ク消失セシムルノ力アルモノトセハ其痕跡ハ既ニ全ク消失セシモノナルヘシ、然ルニ余輩ハ蛙ノ臭神經ヲ切斷スル由リ充分ニ臭官ノ退化ヲ來スヿヲ知リ人工ヲ以テ眼神經ニ敗損スルニ由リ又眼ヲ退化サセ且ツ之レヲ全ク消失セシメ得ルヲ知ルナリ、而シテ一生中ニ於テ不使用ノ結果カ斯ク大ナルモノナレハ暗處ニ住スルモノニ於テハ若シ實ニ遺傳スルモノトセハ今日ハ既ニ眼ノ痕跡

10. L. argiades, *Pall.*　つばめしゞみ

NYMPHALIDÆ.

11. Cyrestis thyodamus, *Boisd.*　いしがけてふ
12. Vanessa callirhoe, *Fab.*　あかたてば
13. V. c-aureum, *L.*　おほむやば
14. V. charonia, *Drury.*　るりたてば
15. Argijunisniphe, *L.*　つまぐろひやうもん
16. Nisoniades monfanus, *Bren.*　ちやまだらせゝり

## ●遺傳（前號ノ續キ）

石川千代松譯述

だるうゐんモ既ニアル機官ノ退化ハ場合ニヨレハ動物ノ生存上ニ有益ナルコトアリト云ハレタリ、即チ大洋島ニ住スル甲翅蟲類ノ翅ヲ失ヒタル源因―就中までいら島ニ産セルモノニ就キテハ氏ハ其退化ノ反テ有益ナルヿヲ證明セリ、其理由ハ如何ニヤト問フニ茲ニ於テハ不完全ナル翅ヲ有スルモノ或ハ全ク之ヲ欠クモノハ烈風ノ爲メニ海中ニ吹キ飛ハサレヌカ故ニ生存上反テ勝利ヲ得ルモノナリ、又むぐらもち又ハ之ニ近キ哺乳動物ニシテ毛ヲ以テ蔽ハレタル微小ノ眼ハ全ク自然淘汰ヨリ生セルモノナリ、而シテ又蛇類ニ四肢ノ全ク無キヿモ其狹キ孔穴等ヲ通行スルニ於テ大ヒニ便ヲ得ルヲ以テナルヘク駝鳥及ヒぴんぐいん鳥ノ翅翼ノ退化セルモ同シク飛フヘキ機官ガ變シテ空中或ハ水中ノ櫂トナリタルニ依ルナリ、然レトモ使用セサル所ノ機官ノ退化カ直チニ其之ヲ有セルモノヽ爲メニ益アラサルノ場合ニ於テハ其説明ハ實ニ難カルヘシ、例之ハ六肢蟲、甲殼蟲、魚類、或ハ兩生物ナリトモ暗處ニ住セルヨリ其眼力退化セルモノトナスモ此退化カ別ニ此諸動物ニ取リテ益ナキヿナリ何ントナレハ此諸動物ハ充分ニ發達セル眼ヲ有スル𪜈別ニ不都合ナク眼ノ退化セルモノト共ニ同シク生存シ得ル者ナレハナリ、而シテ余ノ考ニテハ茲ニ於テ自然淘汰ノ一大要點―即チ其保チ續ケルノ力ナル事實ニ注意セサルヿヲ得ス、生存上ニ最モ能ク適セルモノハ自然淘汰ニ因リテ單ニ出來セ

(Anlage) ハ余カ信スル所ノ一生中ニ体ノ成形部ニ外界ノ刺撃ヨリ起レル變化ノ遺傳セサルノ點ヨリ見ルモ毎代ニ於テ必ス同樣ナラサルヲ得ス、而シテ退化セル機官ノ全ク消失スルヿハ他ノ有用ナル機官ニ塲處ト滋養分トヲ與フルノ淘汰法ニヨリテノミナルモノナリ、茲ニ於テハ固ヨリ生殖細胞内ニアル該機官ノあんらあげノ弱小ナルモノハ勝ヲ占ムルモノニシテ此類ノ淘汰法ノ働キニヨリテ其全ク生殖細胞内ヨリ除去サルヽニ於テ何物モ之レヲ妨クルモノナシ然レ𪜈其働作ノ實ニ徐々トシテ進ミ退化セル機官ノ實ニ逐次ニ其出來始メヨリ除去サルヽヿハ脊椎動物及ヒ節肢動物ノ肢ヲ見テモ明カナリ、ぶりんどえうろいへ(蜥蜴ノ類)ハ全ク四肢ヲ有スルヿナシ然レ𪜈其完全ナル胸帶ハ其皮膚下ニ存シ晩近ニ至リテ又其胚子ニ於テ前肢ノ痕跡アルヿヲ發見セリ、蛇類ハ多ク四肢ヲ有スルヿナシ然レ𪜈亦其胚兒ニ肢ノ痕跡アルヤ未タ明カナラス(後肢ノ痕跡ハ多クノ蛇類ノ胚兒ニアリ、前肢ノモ亦晩近ニ至リテ發見セラレタリ、|譯者)又さんせうヽを類ノ四肢ノ退化セル樣ニ種々アルヿ幷ヒニ白堊時期ヨリ得ラレタル彼ノ奇異ナル有齒鳥類へすぺろにすハまあしノ說ニ依レハ前肢ハ誠ニ細弱ニシテ小ナル上膊骨ノミヨリ成立セルモノニシテ恐クハ羽皮下ニアリシモノナルヘシト云ヒ、水蚤(みじんこ類)ノ幼子ハ其口部ニ三對ノ同形ナル口肢アレ𪜈其二對ハ退化シテ消失シ、又嚢狀ニシテ無肢ナル蜜蜂ノ仔虫モ其發生ノ始メニ於テ其祖先カ有セル三對ノ肢痕アルヲ見ルヘシ、

然リト雖𪜈茲ニ又一生中ニ得タル所ノ變異カ別ニ自然淘汰ノ力ニ依ラスシテ次代ニ遺傳セルカ如ク見ユル場合アリ、開化人ノ近眼ハ此類ノ一ナリ

近眼ハ固ヨリ一部ハ遺傳スルモノナリ而シテ余ノ知ル所ニ依レハ今日迄ハ近眼ヲ以テ通常一生中ニ得タル所ノ變異ノ遺傳トナシ一生中ニ得タル所ノモノカ少シク次代ニ遺傳シ數代ヲ經テ絶エス近處ヲ見ルヲ以テ次第々々ニ疊積シ遂ニ生レナカラニシテ近眼ナルニ至ルトナセリ、

然レ𪜈人類ノ眼カ光線ヲ屈折スル力ノ差ハ久シキ年月ノ

ドコテハナク全ク消失セサルヲ得サルモノナリ、

盲目ナルさんせうゝを及ヒ數多ノ盲目ナル動物カ住スル所ノくらいん洞ハいうら時代ニ出來セシモノニシテ余輩ハ固ヨリ確乎トシテ其幾何年位前ノコトナルヤヲ知リ得サルモノナレハ其内ニ動物カ居ヲ始メタルハぷろをてうす（此洞ニ住スル盲目ノさんせうゝを）ノ搆造ヲ見テモ其非常ニ古キヿナルヲ示スモノニシテ其頃ヨリ今日ニ至ル迄ハ實ニ數千世代ヲ經過セシモノナルヤ明ナリ、

故ニ此諸動物ノ眼目カ餘程退化シタルモ先ツ自然淘汰カ形質ヲ保續スルコトヲ止メタルニヨリテ起リタリトナシ考フルヿヲ得ルナラン、

此ノ事モ或ハ又無用ナルヘシ何ントナレハ一機官カ不用ヨリ退化スルニ於テハ該機官ヲ支持スル爲ニ用ヒタル勢力ヲ以テ他ノ有用ナル機官ノ發達ヲ促シ或ハ又簡單ニ該機官ノ周圍ニアル体部ノ成大ヲ促カスモノナレハナリ、

而シテ若シ此ノ諸部カ之レヲ具フル所ノ個体ニ益アルモノナレハ此レノミニテモ不用ナル機官ノ場處ヲ奪ヒ其發達ヲ次第々々ニ止ムルモノナルヘシ、

何レニ致セ茲ニこれらちよんノ一種即チ近年ニ至リろをカ体内諸部間ノ競爭ト名ケシモノ、生スルナラン實ニ何レノ場合ニアリテモ一部ノ退化アリテ他部ノ進化アラサルノ例ナキモノニシテ盲目ナル諸動物ハ常ニ能ク發達セル觸、聽、臭官ヲ具ヘ駝鳥ノ翅筋ノ退化ハ其脚筋肉ヲシテ非常ニ發達セシメタリ、若シ一個動物体カ使用スル所ノ滋養部量ニ定リアルモノナレハ——而シテ一定時間ニ於テハ必ス一定セルモノナリ——其一機官ニ多ク行ク片ハ必ス他機官ニ行クモノ少カラン而シテ此事タルヤ自然淘汰カ有用ナル機官ヲシテ發達セシムルカ爲メニ場處ト滋養分ヲ多ク之レニ與フルヿハ毎世代ニ於テ益々增加スルナラン、

然レ𪜈一個体内ノ諸機官内ニ生スル所ノ競爭ハ只タ不用ナル機官ノ發達ヲ止ムル迄ニシテ決シテ該機官ヲ全ク個体内ヨリ除去シ得サルモノナリ何トナレハ其ノ發達ハ一生物内ニ於テ如何樣ニ不充分不完全ナル𪜈其おんらわげ

ヿヲ示スモノナリ何ントナレハ此等家畜禽ハ實ニ其羽翼ヲ使用スルヿ少キニモ關セス其翅ノ筋肉ハ余輩カ燒キ鴨ニテ能ク知ル如ク別ニ退化セル徵候ノアルヿナシ、だるうゐんカ家畜禽ノ骨ノ長短輕重等ニ就キ施行サレタル數多ノ實驗ハ確實ナル事實ナレトモ其說明ニ至テハ余ノ左袒シ能ハサル所ノ點アリ若シ家鴨ノ翼骨ハ野鴨ニ比スレハ其重量輕クシテ其脚骨反テ重キコトハだるうゐんカ正シク云ハル丶如ク羽翼ノ減小セルニ由ルモノニ非スシテ脚ノ增大セルナリトナスモ脚ノ增大セルヿハ決シテ代々多ク脚ヲ使用セルノ結果ノ遺傳ニ非スシテ一方ニハばんみきしいノ爲メニ体ノ他部ニ自然淘汰ノ中止ヲ生シ他方ニテハ一生中脚ヲ多ク使用スルニ由ルモノナラン、余輩ハ未タ脚ニ强ク使用スルニ當リ幾何程ノ點迄該機管ヲ發達セシムルヿヲ得ルモノナルヤヲ知ラス、人若シ使用不使用ノ結果カ淘汰ノ力ニ依ラスシテ遺傳スルモノナリト云フヿヲ證明セント欲セハ野鴨ノ如キモノヲ取リ之ヲ畜養シ其子孫ヲ皆一羽モ殘サスニ養育シテ生長セシメサルヲ得ス而シテ其二代、三代ヨリn代ニ至ル迄全ク使用不使用ノ結果ヨリ生セルモノナリトスルヿヲ得ル所ノ變異ヲ現出シ且ツ其世代ヲ經過スルニ從ヒ逐次ニ疊積スルヿアラハ或ハ之レヲ證明セリト云フヲ得ヘシ然レ𪜈家畜スルヿハ單ニ直接ニ生物体ニ働クモノニアラスシテ淘汰ノ中止ヨリ關接ニ其變異ヲ多ク生スルモノナレハ之レヲ爲シタリトモ猶ホ能ク思考セサルヿヲ得ス然ルニ此ノ類ノ實驗ハ今日迄未タ嘗テ之レアリシヿヲ見ス、

又本能ノ起因幷ニ變化ニ就キテハ通常一生中ノ筋肉及ヒ神經ノ使用ニ基キ其世代ヲ經過スルニ從ヒ逐次ニ遺傳シテ疊積スルニ因ルモノナリトス、然レ𪜈余ハ此ノ說明方ヲ以テ正シキモノナリトセスシテ本能ナルモノハ總テ皆一生中ニ訓練セルノ結果ノ遺傳ニアラスシテ生物体内ニ始メヨリアリタル變異上ノ淘汰ニ由リテ生セルモノナリト信ス

（以下次號）

間既ニ自然淘汰ノ爲メニ止メラレテアリタリ、今日ニテハ盲人ハ固ヨリ生存競爭ニ於テ通常人ニ敗ヲ取ラサルヲ得ス然レ𪜈近眼者ハ食物ヲ得ルニ於テ別ニ不都合ナカルヘシ、近眼ナルりんくす、鷹、かもしか等ハ固ヨリ淘汰ニヨリテ除去サルヘク近眼ナルいんでや人モ同ク死滅スヘシ、然レ𪜈近眼ナル歐洲人ハ少ナクモ上等社會ニアリテハ充分ニ職業モアリ又食物ヲ得ルニ於テ何ノ差シ支ヘモナシ、故ニ茲ニ於テハ又暗洞中ニ住スル諸動物ノ眼ニ於ケルト同シク概シテ視官中ニ遠眼ナルモノト近眼ナルモノトノ差ヲ生シタルモノナラン、故ニ血族中ニ遺傳ノ近眼者アルヿハ多クハ一生中ニ得タル所ノ近眼ノ遺傳ニ非スシテ近眼ノ種ノアリタルニ由ルナラン、然レ𪜈近眼者ノ非常ニ多數ナルハ遺傳ニ由ラスシテ一代中ニ得タルモノナルヘシ、何ントナレハ尋常一樣ノ眼ニシテ別ニ近視眼ノ傾キナキモノニテモ絶エス近キ處ノミヲ見ルニ於テ一生中ニ近眼ニナルコトハ明白ナル事實ナレハナリ、固ヨリ加之ニ尋常ナル眼ニ非スシテ近視眼ノ傾向アルモノニ於テヲヤ然レ𪜈余ハ此傾向モ亦一生中ニ得タルモノヽ遺傳ニ非スシテ自然淘汰ガ之レヲ支配スルヿヲ止メタルヨリ生セル所ノ視力ノ變異ナリト考フルモノナリ、此ノ如ク淘汰ノ保續力ノ不用ニナリタルヿヲ名ケテ或ハぱんみきしい Panmixie （雜合ト云フ字義）ト云ヒ得ヘシ、何トナレハ一種内ノ各個体ハ其全体或ハ單ニ其一部分ノ能ク發達セルモノヽミナラス何レモ皆共ニ交合シテ皆共ニ生殖スルヿヲ得レハナリ、余ノ考ニ依レハ通常外界ノ刺擊ニヨリテ生スル所ノ遺傳ト云フモノヽ多クハ此ノぱんみきしいニ依ルモノナラン、即チ家畜動物ニ變異ノ多キヿノ如キハ正シク此レニ依ルモノナリ、

例之ハ一羽ノ雁或ハ鴨ハ山野ニアリテハ能ク飛翔セサルヲ得サレ𪜈庭園ニ畜養サルヽニ當リ食ヲ求ムルカ爲メニ別ニ飛翔スルヿヲ要セサルヲ以テ從前ノ烈シキ撰擇ハ羽翼ノ點ニ於テハ中止シタルカ故ニ時代ヲ經過スルニ從ヒ飛官ハ逐次ニ退化スルモノナルヘシ、

此ノ例ハ實ニ明カニ一機官ノ退化ハ其不用ヨリ來ラサル

## ●本邦産ノ蝸牛科（Hyalina屬）第七版

飯島魁

Helix 屬ト Hyalina 屬トノ差違ハ去年十二月ノ本雜誌ニ出ダシタル表ニ就キテ見ルベシ

一）**Hyalina nitida**, Müll.

殼ニ凸マリタル螺旋部アリ、臍孔廣ク、微細ノ條線アリ、黄褐色ニシテ透明且ツ光澤アリ、螺楷數ハ五、動物ハ黒青色ナリ、殼ノ高サ三、五ミメ、徑六、五ミメナリ

此種ハ兩半球ノ北部ニ産スル者ニシテ日本ニ産スルヿハ確カナルニハ非ザレドアダムス氏ハ之ヲ對島ニテ發見セリト云ヘリ

二）**Hyalina radiatella**, Reinh.

第七版一圖ニ出ダシタル者是レナリ、殼ハ角黄色、光澤アリ、楷數ハ三半、大徑三ミメ、小徑二ミメ、高サ一ミメ許、ヒルゲンドルフ氏曾テ北海道箱舘ノ近傍ナルもへぢト云ヘル地ニテ此種ヲ發見セリ

三）**Hyalina yessoensis**, Reinh.

第七版二圖ニ出ダシタル者是レナリ、角色ニシテ隨分光澤アリ、楷數ハ四半乃至五、大徑六、七五ミメ、小徑五、七五、ミメ、高サ三、二五ミメ、北海道箱舘ニ産ス

四）**Hyalina hilgendorfi**, Reinh.

第七版十圖ニ出ダシタル者是レナリ、臍孔ナク、白ミガヽリタル色ニテ透明ナリ、楷數ハ四半、大徑、二七五ミメ高サハ凡ソ一、二五ミメナリ、東京ニ産スルヲ知ル

五）**Hyalina microdiscus**, Reinh.

第七版三圖ニ出ダシタル者是レナリ、至テ小形ニシテ白色ナリ臍孔ナク、楷數ハ三半乃至四アリ、徑ハ一、五ミメ、高サ○、六六ミメ、東京並ニ其近傍ニ産ス

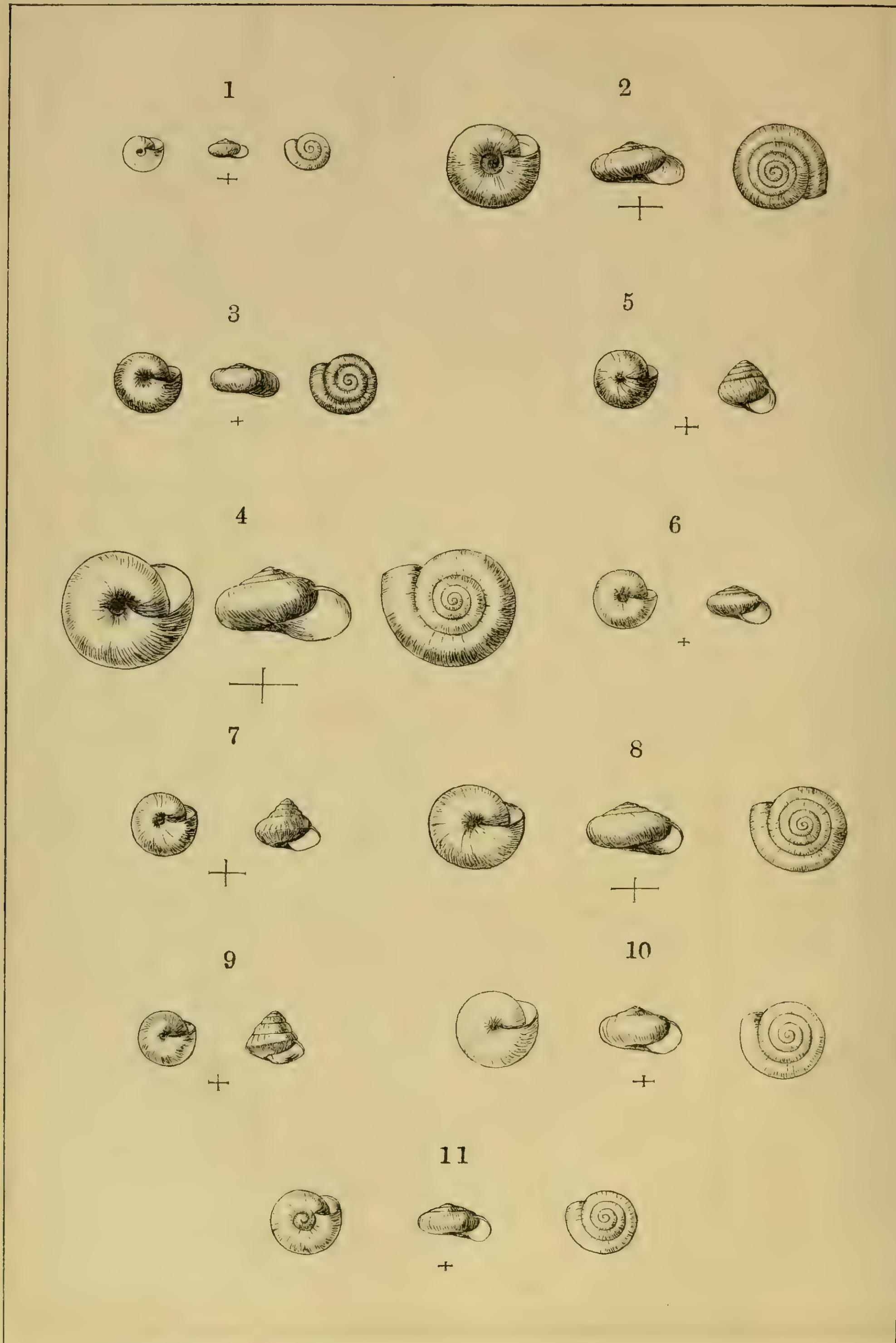
六）**Hyalina minuscula**, Binney.

第七版十一圖ニ示シタル者是レナリ、頗ル小形ニシテ暗色、透明、楷數ハ四、臍孔廣シ、徑二、五ミメ、高サ一ミメ、北米ニ擴ガル種ニテ日本ニテ東京ニテ採集セラレタルヿアリ

七）**Hyalina rejecta**, Pfr.

VII

第七版



第七版四圖ニ出シタル者是レナリ、角黄色ニシテ、薄ク、光澤アリ、臍孔狹ク楷數ハ五、大徑十二ミメ、小徑十ミメ、高サ五ミメ、對島ニ產ス

八）Hyalina Dœnitzii, Reinh.

第七版八圖ノモノ是レナリ、黃色、透明ニシテ甚ダ光澤アリ、下部ハ白色ヲ帶ブ、楷數五半、臍孔アリ、大徑七ミメ、小徑六ミメ、高サ三、五ミメ、東京ニ產ス

九）Hyalina pustulina, Reinh.

第七版五圖ニ出ダシタル者是レナリ、臍孔アレド蔽ハレアリ、角色ニシテ光澤少ク、下部ノミ光レリ、楷數五、徑三ミメ、高サ二、七四ミメ、東京、箱舘等ニ產ス、

十）Hyalina sinapidium, Reinh.

第七版六圖ニ出ダシタル者是レナリ、臍ハ前種ト同ク、角色ニシテ光澤アリ、楷數四、徑一、七五ミメ、高殆ド一ミメ、東京、日光等ニ產ス

十一）Hyalina tenera, Ad.

第七版七圖ニ出ダシタル者是レナリ、殼薄ク、臍孔ナク、黃角色ナリ、楷數六、徑〇、三インチ、高サ〇、二インチ、北海道松前、もへぢ等ニ產ス

十二）Hyalina acutangula, Ad.

第七版九圖ニ出ダシタル者是レナリ、殼薄ク、黃色、透明、臍孔ナシ、楷數五半、徑〇、一五インチ、高サ〇、一七五インチ、東京、四國等ニ產ス

右ノ外此屬ニシテ本邦ニ產スト云ヘルモノ五種程アレド圖ナクシテ形狀審カナラザレバ茲ニ記載ヲ略ス

## ●普通動物學講義第貳拾參（附圖第六版）

箕作佳吉述

### 第八章（第五門蠕蟲第一綱扁蟲類ノ續キ）

#### 等四目　紐蟲（ひもむし）　Nemertini.

紐蟲ハ上ニ述ベタル三目ノ扁蟲ト大ニ異リ之ヲ別ノ綱トナスモ差支ナキ程ナリ陸淡水產ノ數種ヲ除クノ外皆ナ海中ニ產シ自在生活ヲ爲ス唯一屬ガ軟體動物外膜ノ中ニ寄生スルノミナリ

紐蟲ハ其體概子延長シテ紐ノ如ク長サ數尺ニ達スルモノ

フ一ノ神經葉(lso)ト親密ナル關係アリ其感官ナルヿ疑ヒナク多分臭官ナラント云フ

〔循環系統〕(第五圖) 他ノ扁蟲ニテハ循環系ノ如キモノハアラザリシガ紐蟲ニ至リテハ判然タル脈管ヲ發達シ稍完全ナル循環系統ヲ形成ス紐蟲ニハ概子三本ノ縱管アリテ体ノ前端ヨリ後端ニ達シ途ニシテ數多ノ横管ニヨリ互ニ相連結ス血液ハ無色或ハ時トシテハ赤色ニシテ血球ヲ含有ス中央ノ管ニヨリテ後ヨリ前方ニ進ミ二本ノ側管ニヨリテ前ヨリ後方ニ返ルモノトス

〔排泄系統〕(第五圖) 排泄系統ハ種々ノ形狀アリ第五圖ニ示スモノハ唯其一ナリ体ノ前部兩側ニ各一本ノ縱管(n)アリ血液側管ト親密ナル關係チ有ス此縱管ヨリシテ數多ノ枝管(na)アリテ体ノ側面ニ開口ス(np)或ル種ニ於テハ縱管ノ後端或ハ中央ヨリノ枝管ニテ唯一對ノ孔ヲ以テ開クモノアリ

〔生殖器〕(第一圖) 紐蟲ハ雌雄ヲ別ニス生殖器ハ極メテ簡單ナリ胃ノ側突出ノ間ニ袋狀ノ簡單ナル器官(g)アリ各袋別々ニ側面ニ開ク

上ニ擧タル諸系統ガ体内ニ於テ有スル位置ハ体ノ横斷(第六圖)ヲ見テ明ナルベシ

紐蟲ハ卵ヨリ直ニ發達スルモノモアレ𪜈海產ノ或種ハ成蟲ト全ク異ナリタル形狀ヲ有スル仔蟲ヲ生スルモノアリ其仔蟲ノ形ハ第七圖ニ示ス如クニシテ極メテ小ニシテ海面ヲ浮游ス之ヲPilidiumト云フ

〔分類〕

第一亞目 **Hoplonemertini** (=Enopla) 吻ノ尖ニ一個乃至數個ノ針ヲ有ス、

AMPHIPORUS, DREPANOPHORUS, TETRASTEMMA, NEMERTES, GEONEMERTES

第二亞目 **Schizonemertini** 吻ノ尖ニ針ナシ頭ノ兩側ニ深キ縱溝ノ如キモノアリ

LINEUS, CEREBRATULUS.

第三亞目 **Palæonemertini** 吻ノ尖ニ針ナク又頭ノ側面ニ縱溝ナシ

少シトセズ我邦海濱ニ產スルモノノ內全體綠色ノモノニシテ尺餘ニ達スル一種ハ所々ニテ見ル所ナリ
紐蟲ノ全體ハ顫毛ヲ生ス

〔消化器〕（第一圖）　口孔ハ體ノ前部ノ腹面ニアリ短キ食道アリテ胃ニ入ル胃ハ殆ンド體ノ全長ニ涉リ概テ兩側ニ數多ノ小突起ヲ出ス肛門ハ體ノ後端ニアリ

紐蟲ニ付キ最モ固有ナル點即チ其特徵トナスベキ構造ハ其吻（Proboscis）ナリ是ハ平常消化管ト全ク關係ナク其上ニアル一ノ特別ナル管中（第三圖）ニ納メアリテ刺戟ニ應シテ之ヲ射出スルナリ時トシテハ其長サ殆ンド體ト同シ位ナリ吻ハ之ヲ三部ニ分ツベシ第一ニ裏反リテ外界ニ突出スル部（第二圖甲丙r）此部ノ最モ深キ處ニ針ヲ備フルモノ多シ是ハ吻ガ突出シタル時ハ其尖ニアルヲ以テ（第二圖乙）敵ヲ刺スニ便ナリ其兩側ニ貯藏ノ針數本アリ（第二圖丙b）第二部ハ毒腺ニシテ其口ハ中央針ノ根ニアリ第三部ハ筋肉（第二圖甲乙m）ニシテ其收縮ニヨリ一度突出シタル吻ヲ再ビ元ノ管ニ納ムルノ能アルモノナリ

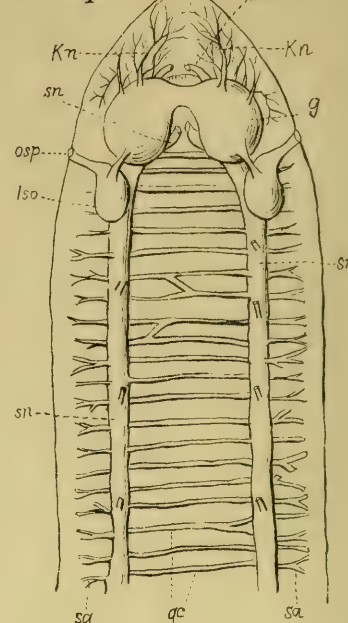
第三圖及ヒ第六圖ニ於テ明ナル如ク吻ハ攻擊防禦或獲食ノ用ニ供スルモノナレ𪜈消化器トハ更ニ關係ナク全ク特別ノ管中ニ納メアルモノニシテ動物界中此目ノ外此ノ如キ吻ヲ有スルモノナシ

〔神經系統〕（第三圖及ビ四圖）　腦ハ食道ノ背面ニシテ吻管ノ下面ニアル一對ノ神經節ヨリ成ル節ハ互ニ相連續スルノミナラズ吻管ヲ越ヘテ一ノ橫神經（第三圖rc）ニヨリテ連結ス故ニ吻管ハ一ノ神經環ニヨリテ圍繞サレ居ルナリ腦ノ後ニ一對ノ神經葉（lso）アリ頭ノ側面ニアル側溝ト稱スル感官ト關係アリ腦ヨリシテ後方ニ向ヒ一對ノ縱神經ヲ送出ス（sn）又吻管ノ上ニ背ノ中央線ヲ走ル一本ノ縱神經（dn）アリ故ニ總テニテ三本ノ縱神經アリトス此三本ハ數多ノ環形神經ニヨリテ連結セラル腦ヨリ前方ニ向ヒ數多ノ小神經出デ以テ頭部ノ眼等ヲ供給ス

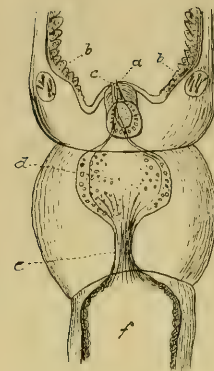
〔感官〕　頭部ノ背面ニ二個四個乃至數個ノ黑色ナル眼ヲ有スル種多シトス

頭部ノ側面ニ顫毛ヲ有スル多少深キ溝アリ（lso）側溝ト云

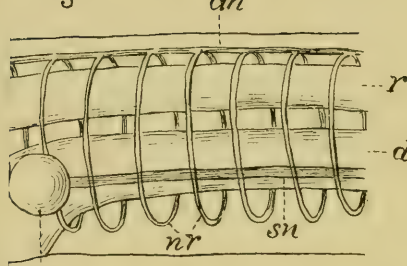
4


rn
Kn
Kn
sn
g
osp
lso
sn
sn
sa
qc
sa

丙

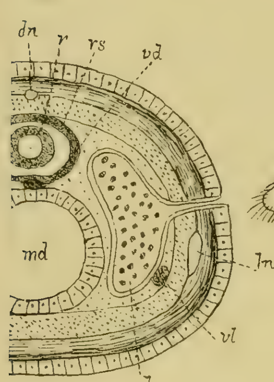

b
a
b
c
d
e
f

3

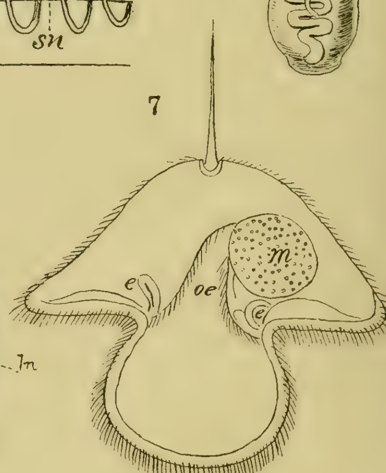

dn
r
d
nr
sn
lso

8




dn
r
rs
vd
md
ln
vl
h

7


m
e
oe
e

CEPHALOTHRIX, CARMELLA, POLIA.

第四亞目 **Malacobdellini** 體ノ後端ニ吸盤アリ恰モ蛭ノ如シ吻ノ尖ニ針ナシ軟体動物諸種外膜ノ中ニ寄生ス

MALACOBDELLA. 本邦産うバ貝ノ外膜內ニ寄生スル一種アリ

第六版圖解 ロイニス、ランゲ、ボアス等ヨリ引用ス

1. 一紐蟲消化器及生殖器圖式

m口孔、a肛門、d胃、da胃ノ突出、g生殖腺

2. 紐蟲ノ吻、甲乙圖式、甲ハ納メアル處、乙ハ突出シタル處

a肛門、da胃、g毒腺、m筋肉、r吻、n吻ノ口、rs吻ノ管

丙 Geonemertes calicophora. ノ吻ノ一部

a針、b豫備針、c毒腺ノ口、d毒液ノ貯藏所、f毒腺

3. 紐蟲ノ前部ヲ側面ヨリ見タル圖式

g腦、re腦ヲ連結スル横神經、dn中央背神經、lso側溝ト關係アル神經葉、sn側ノ縱神經、mo口孔、r吻管、d消化器、nr横神經環、ro吻管ノ口

4. 紐蟲ノ前部神經ヲ背ヨリ見タル圖式

g腦、osp側溝ノ口、lso側溝ニ關スル神經葉、rn腦ヲ連結スル神經ノ始リ、kn頭部神經、sn側神經、qc横神經、sa側神經

5. 紐蟲ノ循環系統及ヒ排泄系統(圖式)

n排泄縱管、na仝上ノ枝管、np仝上ノ口、ud背縱脈管、vl側縱脈管gs横管

6 紐蟲横斷面ノ圖式

ln側縱神經、dn中央背縱神絕、bm Basalmembrane、rm、環形筋層、lm縱筋層、rs吻管、r吻、vd背縱脈管、vl側縱脈管、h睪丸p体質 (Parenchym) md胃

7. Pilidium 仔蟲ノ圖

8. Malacobdella grossa ♀ 1/1 体中ノ彎曲スルモノハ消化器ナリ

## 寄書

### ●甕牖雜記

上田英吉

ひきノ燐光

夜陰海洋ヲ行ク者屢〻水中ニ光物アルヲ見ル熒々燐火ノ如ク波瀾蕩漾ノ間ニ明滅ス近イテ之ヲ擊テバ星點紛飛シ風起リ潮生スレバ浪火爆ノ如ク以テ人目ヲ駭カスニ足レ

リ是レ即チひかり(Noctiluca miliaris.)ノ光氣ヲ發スルナリ又魚族、水母等ノ燐光ヲ放ツコトアレ圧異ナレリ己丑ノ秋余山陽ノ海鄕ニ遊ビ會、水嶋灘ヲ航シテ親シク之ヲ目覩セリ時方サニ初更淡月朦朧トシテ水界漠々タリ幾百ノ漁火ひかりト相照應シテ遠近嶋嶼ノ間ヲ點綴シ一段ノ好景宛然畵圖ニ似タリ傳ヘ云フ昔時此邊戰鬪多シ幾萬ノ甲兵覆沒シテ千載不祀ノ鬼トナリ怨ヲ海底ニ呑ムコト倘シ天陰リ雨濕フ片啾々哭聲アリ又一團ノ鬼火燐々トシテ散テ千百トナルアリひかり即チ是レナリト荒唐無稽齊野ノ言タルノミ

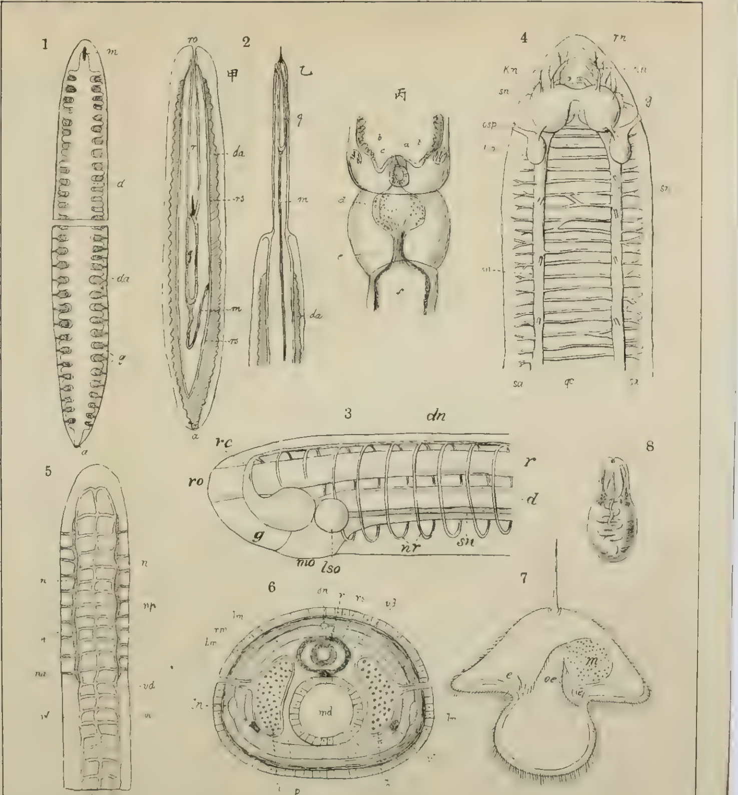
抑ひかりハ海中一種ノ單細胞蟲ナリ諸國ノ海洋ニ多シ形細微ニシテ千萬群ヲ成シ水面ニ泛濫ス薄暮漸ク燐光ヲ放チ愈、黑ケレバ愈、明カナリ其光ヲ發スルハ周緣プラスマ○單細胞蟲類ハ唯ニ一塊ノ原形質ニ過ギザレ圧其組織整然トシテ層次シ以テ之ヲ劃別スベシ即チ核プラスマ(Kernplasma.)營養プラスマ(Ernährungs-plasma.)餌料プラスマ(Nahrungsplasma.)呼吸プラスマ(Athmungsplasma.)動運プラスマ(Bewegungsplasma.)覆蓋プラスマ(Hüllplasma.)是ナリ就中其始三者ヲ中心プラスマ(Centrale plasma.)トイヒ終三者ヲ周緣プラスマ(Peripherische plasma.)トナス倘ホ詳ハ Brass, Biologische Studien, I. 1881, p. 16. ニ見ユ參看ス可シニ在リテ其酸素ヲ攝ルノ力甚強ク多々ノ活力ヲ遊離シ之ヲ光氣ニ變スルガ所以ナリブラースBrass, Die Niedrigsten Lebewesen, 1888, p. 125.嘗テひかりノ發光ヲ論ジテ曰ク

"Das Licht wird in der peripherischen Plasmazone erzeugt. Es ist dies ja diejenige, welche zunächst mit der Athmung, d. h. also mit der Sauerstoffaufnahme in Beziehung steht. Bei einer solchen Aufnahme werden selbstverständlich eine grosse Anzahl von Stoffen umgesetzt, sie werden zum Theil, wie wir zu sagen pflegen, oxydirt. Die einzelnen Vorgänge bei der Oxydation kennen wir in diesem Falle nicht, wohl aber ist ersichtlich, dass auch hier die bei der Verbrennung auftretenden Erscheinungen zu berücksichtigen sind..........Ganz allgemein tritt dann aber bei der Verbrennung eine Schwingung der kleinsten Theilchen ein, die theils als Wärme, theils aber auch als Lichterscheinung nach aussen übertragen werden kann. In gleicher Weise ist es hier in diesem Falle; die peripherischen Schichten nehmen Sauerstoff auf, es findet eine Oxydation statt und ein Product dieser Oxydation, das Licht, wird uns sichtbar gemacht. Darüber, ob gleichzeitig Wärme erzeugt wird, sind die Beobachtungen noch nicht abgeschlossen worden, wenn es auch von vornherein wohl zu vermuthen sein dürfte."



203

第六版


1
m
d
da
a
2
ro
甲
乙
丙
da
rs
m
3
dn
rc
ro
r
d
g
nr
sn
mo
lso
4
Kn
sn
csp
sa
qc
5
n
np
vd
6
md
7
m
oe
e
8

是ヲ以テ原形質ハ生時酸素ヲ貪ルノ力汪盛ナリト雖モ已ニ死スレバ絶テ之ヲ失フト云フ Löw et Bokorny. l. c. 但シ酸素及二價以上ノ諸原素ハ其結合ノ狀異ナレバ隨テ原子ノ容積相同ジカラズ即チ酸素ニ在テハ

| 結合ノ狀 | 原子容積 |
| --- | --- |
| =C=O | 十二 |
| =C—O | 七 |

ナルハ確トシテ眞據アリ易フ可カラサルナリ由是觀此ひきノ燐光ヲ發スルハ其周緣プラスマニ在リト雖モ職トシテアルデヒッド體ノ酸化力甚強キニ由ルナル可シ西言ニ曰ク "Durante causa durat effectus." トひきノ光奇ハ則チ奇ナレトモ豈ニ敢テ聽瑩スルニ足ランヤ

### 文鰩魚ノ卵

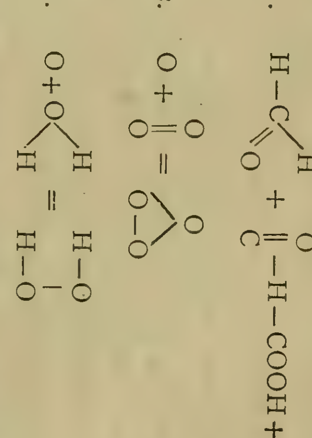
頃者余鳥嶋產文鰩魚(Exocoetus ogoo. Schl.)卵ノ酒浸一瓶ヲ得タリ之ヲ檢スルニ酒浸後既ニ數月ヲ經過シ卵粒爲メニ収縮シ且ツ敗損セル者多ク故ニ其故態ヲ知ル可ラズト雖モ毎粒大サ平均一密迷アリ黃色ニシテ微ニ褐色ヲ帶ビ恰モ栗粒ノ如シ聞クコノ魚ハ初夏卵ヲ海中浮木、樹枝等ニ著ケ累々簇集シ黏粘アリ之チ裹ム五六月ノ交孵化シ其成育頗レ速カニシテ秋時ニ至レバ大サ母魚ニ等シト云フ抑文鰩魚ハ大洋ニ產シ千百隊ヲ結ビ水ヲ掠メテ奮飛ス(畔田翠山(水族志)曰ク(此魚海上チ飛ニ水チ離ルヽヿ不能身ノ半チ水中ニ入半ハ水上ニ出翅チ水上ニ開飛ブヿ箭ノ如シト)誤ナリ文鰩魚ハ飛テ能ク水面チ離ル其飛行ノ理ハモビユース (Möbius, Ueber die Bewegung der fliegenden Fische durch die Luft in Du Bois-Reymond's Archiv f. Physiol. Jahrg. 1889. III. p. 348) 並アマンス (Amans, Annales des Sciences naturelles. Zoologie. 1888. t. VI.) 詳ニ之チ論說セリ參看スベシ) 夏月南洋ヨリ大羣シテ伊豆七島ノ間ニ來リ殊ニ三宅嶋邊ニ多ク以テ同島主要ノ產物トス往時島民之ヲ捕ルニ船ニ篝火ヲ燃キ魚ノ火下ニ集ルヲ窺ヒ魚叉ヲ以テ刺セシガ數年前伊豆村ニテ網ヲ用ユルコトヲ造意シ爾來各村皆之ニ倣ヒ漁類頓ニ增加シテ二三萬尾ニ及ブト云フ醃藏シテ久シキニ堪ヘ味甚美ナリ東京ノ鮓商常ニ之ヲ貯ヘ不漁ノ時水ニ蘸シ其鹹味ヲ去リテ細截シこもくずしニ用ヒ以テこはだ(Clupea zunasi.)ニ僞ル

## 雜錄

ト然モ其光氣ヲ發スルハ必ズ之ヲ化學的成分ノ作用ニ歸セザルヲ得ズ蓋有機化合體中燐光ヲ發スルモノ少シトセズ例之揮發油類アリ脂肪油アリ又ヒヨリン、ノイリン、胆酸、牛胆酸、甘胆酸、亞密爾亞爾箇保兒以上ノモノヽ如キ是ナリ而ルニリヨウ及ボコルニー（Löw et Bokorny, Arch. f. d. ges. Physiol. 1880, 1881.）嘗テ原形質ノアルデヒッド性ヲ論セリ其說未ダ確乎不拔ナラザルモ之ヲ按スルニひきノ燐光ハマタアルデヒッド體ノ作用ニ基因スルヤ疑ナカルベシ

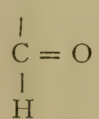
アルデヒッド體ハ多々ナリ即チメチール、アルデヒッド（$CH_2O$）、ロフ井ン（$C_{21}H_{16}N_{12}$）、パラルデヒッド（$C_6H_{12}O_3$）、メタルデヒッド（$C_{12}H_{24}O_6$）、アクロレイン（$C_3H_4O$）、チスアクリール（$C_3H_4O$）$^x$、葡萄糖等ナリトス倶ニ亞爾加里及酸素ヲ資テ攝氏十度或ハ更ニ低温ニ於テ光氣ヲ發シ酸化用ノ酸素（$O_2$）ハ分解セラレテ其一原子ハ各自體ト抱合シ殘ル一原子ハ他ノ酸素分子ト化合シテ阿巽ヲ生ス又水ニ逢フテ過酸化水素（$H_2O_2$）ヲ成ス左ニメチール、アルデヒッドノ化學的現象ヲ擧例シ以テ爾他ヲ推知セシム

1.
2.
3.

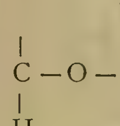


抑蛋白質ハ原形質ノ主成分ニシテ其化合頗ル錯雜スリヨウ及ボコルニーノ說ニ據レバ蟻酸アルデヒッドノ同分異性（CHOH）ノ集合體ニ外ナラザルガ如シト雖モ但ニ窒素ヲ暗母尼亞及他ノ窒素含有物ヨリ資リ硫黃ヲ硫化抱合物ヨリセルナラントアルデヒッドハ生時其酸素ノ振動自適ニシテ多々ノ運動現象ヲ作スト雖モ死スレバ則チ其分子ノ位置ヲ轉換シ運動減殺シテ生活機能ヲ止ム其造構ヲ想像スレバ

生時



死時



長く一尺六寸あり頭部幷に尾部ハいたく損じて齒、尾鰭等の形狀位置充分に分からず以上の形質にありてたちのうを族（Trichiridæ）たるとは判斷のつきたるも其屬名種名に至りては大に迷へり或ひは（Aphanopus）屬ならん乎然しながら「ガンサー」氏の魚譜（Günther's The study Fishes. p. 434）に據れバ同屬にハ（A, Carbo)のみ掲けてありて最も稀れなる魚と記せり而して此種は黒色とあれバ元より同種類にハあらざるべし魚學を專門とせらるゝ我會員諸君に希くは御示敎あらんとを

●鰯を用て絛蟲の驅蟲劑となす　先頃我常尋師範學校の生徒に絛蟲の講義をなしゐる序に夫の飯島先生の實驗せられたると云ふ裂頭絛蟲養成方法に付（先生の著人体寄生動物編二百四十一頁）先生の試驗記事を縷々述へ苟も熱心生物學の研究に從事せんには時としてハ自分のからだも一の試驗物にする位の氣込なからざる可らさるとを話し終りたる所一生徒曰く私の近邊にては鰯を用て絛蟲の驅除物に良しとて古より絛蟲の生長するときは此魚を用ひますが其理由は如何でせうかと云へり此生徒は石見國のものなり尚委細は後日取調て可申上心組なるが一寸耳新しければ不取敢御報道申上候

以上三件　在松江　會員　渡邊　盈作　報

●カマキリの孵化　兼て種々なるカマキリの卵塊を集め來りて貯へ置きたる所四月三十日午前第十時僅か以前より同十一時迄に大形なる卵塊より漸次孚化し出たるを實驗せり今其景況を記すに卵塊にハ豫め規則正しく澤山の開孔あるを以て最初其孔より頭部を出し漸次体の終りに達する時は腹部の末端より一條（顯微鏡下に視るに全く二條より組成す）の糸を引出して卵塊より下垂せる事凡そ一寸に及ぶ其際全体は一の長楕圓形なれども絕ず体を動すの後終にハ六足幷に觸角とも明かに別るゝものなり然る後次第々々に卵塊より出でゝ澤山群集したる所を歩して上行す此際已に腹端の糸ハ全く分離し居れり初め卵塊を離れてより歩行するの時間は凡そ二十分時を費したり而して一卵塊より出でたるカマキリの總數は實

●ぺりかん鳥を獲たり　先頃當地の山陰新聞紙上に縣下神門郡園村に於て力士荒熊なる者奇鳥を獲たる旨記載しありしを以て直に同村尋常小學校在勤の鄉原某氏に其詳細の取調べを依賴せしに過日左の通り報告ありて寫生畫も添へ置かれたり

御書拜閲仕候陳者陰山新聞紙上拙地方の力士荒熊なる者先般打取りたる大鳥問合せ候樣被仰早速問合せ候處珍鳥に有之候へバ先づ見世物に致度候間今日の處では賣却不仕旨(云々)此大鳥取れるや拙宅に持來り鳥名尋ね候に付段々取調候處地中海に産する塘鵞と察し候間畧圖を以て御尋申上候間全く左樣のものに有之候哉御敎示奉願上候也

全身白色にして脊より翼尖處々鼠色を帶ぶ　嘴も雁の嘴に似て太く長さ壹尺五六寸、下嘴の下部に五六升入る程の囊狀のものあり　眼は割合より小なり　頭に長毛五六本あり　頸太く長さ二尺許　翼左右に張りて長九尺　尾短し　足短かくして太し　目方五貫匁餘

以上の報告によりて考ふるときハ「ぺりかん」鳥たると明かにして塘鵞、池鵞、鵜鶘等の支那譯あり其種名は Crested Pelican にして學名 (Pelicanus onocrotalus) なるべしと思はるゝも何分實見したる譯にも無之に付斷定は致しがたく候又夫の支那南海廣東(カントン)河近邊に居る(P. conspicillatus)にてハ無きやと思ハるれど此種の特徴は眼の周圍の皮膚には毫も羽毛なく全く裸出すとあり然る處今獲たるものゝ圖によりて見るときは頸部等にも羽毛の存する樣なれバ此種にてはあらざるべし。ぺりかん鳥を日本にて獲たるとハ一寸珍敷樣考へらるれバ茲に報告いたし候

●たちのうを族に就て　先月上旬頃當縣下美保の關近海にて獲たる由にて同地の神官横山氏より一奇魚を當尋常師範學校へ寄贈せられたり因て熟々之を視るに体軀頗る扁長にして鱗なく全身白色雲母光を呈し處々に暗黑色の斑紋あり(殊に尾部に多し)之を度るに躰長二尺六寸餘。体軀最大の部の直徑四寸餘。腹部に硬棘二個ありて各々三寸五分。脊鰭の針夥多にして前部の二針は頗る

17. Nisoniades montanus, *Bren.*

●帝國大學紀要理科第四冊第一號　ハ今回上梓シタリ之ヲ一見スルニ頁數二百三十七附圖版ノ數三十一中ニハ彩色ヲ加ヘ甚タ美麗ナルモノ多シ全號ハ全ク生物學ニ關スル論文ヲ以テ成リ動物學上ノモノ過半ヲ占ム我學ノ爲ニ祝スベキコトナリ外國人ヲシテ我國學術ノ進歩ヲ知ラシメ日本國ハ裸体ノ野蠻人ノ生活スル所ニアラザルヲ覺ラシムルニハ此ノ如キ出版物ノ續々出ツルニ若クハナシ全號ニ掲クル論文ハ左ノ如シ

1. On the Fœtal Membranes of Chelonia (Contributions to the Emrbyology of Reptilia II.) By K. Mitsukuri, *Pl. D. Rigakuhakushi.*
2. On the Development of Araneina. By Kamakichi Kishinouye, *Rigakushi.*
3. Observations on Fresh-Woter Polyzoa (Pectinatella gelatinosa, nov. sp.) By A. Oka.
4. On Diplozoon nipponicum, n. sp. By Seitaro Gotô, *Rigakushi.*
5. A New Species of Hymenomycetous Fungus Injurious to the Mulberry Tree, By Nobujirô Tanaka.
6. Notes on the Irritability of the Stigma. By M. Miyoshi, *Rigakushi.*
7. Notes on the Development of the Suprarenal Bodies in the Mouse. By Masamaro Inaba, *Rigakushi.*

●ひがいノ説　ひがひはこひ科ノ一種ニシテPseudogobius variegatus, Gthr. ト稱ス從來本邦ニ於テノミ知ラレタルモノニシテ本邦中モ獨リ近江ノ琵琶湖ニ於テ之レヲ產スルガ如シ（他ニ之ヲ產スト云フモノアレドモ就テ之ヲ見ルニ皆もろこ即チ Leuciscus. elongatus. Kirtland ナリ）

該魚ハ從來生活ノ儘京都大津等ニ販賣シテ此等地方人ノ頗ル嗜好スル處ナリシガ去明治十七年宮内省御料局ニ於テ近江ヨリ取寄セラレ新宿御新地ノ池中ニ放養セラレ昨年内國勸業博覽會ニモ出品アリ其水族室中ニ於テ其生活

に一百六十五頭ゟ達せり

（五月一日在岐阜市京町　名和清記す）

●正雪とんぼ（Heptagenia ?）ハ毎年四五月ノ交靜岡ニ多ク發生ス其名ノ起リシハ盖シ慶安ノ昔、由井民部之介橘正雪ガ駿河ニ來リ大ニ謀ル所アリシモ遂ニ成ラズシテ今ノ靜岡梅屋町ニ於テ自刄シ以テとんぼニ化生セシト口牌ニ傳フルニ由レリ本年ハ三月廿四五日頃ヨリ諸々ノ水中ニ其幼蟲ヲ生シ四月二日頃ヨリ其羽化セルモノヲ見ル而シテ昨今ニ至リ益々多ク發生シ梅屋町、新通、東草深西草深、宮ケ崎、安西等ハ殊ニ多シトス朝露ノ乾ザルトキ又ハ雨天ノ日ハ樹枝、板塀、石垣、檐下等ニ靜止スレドモ晴天暖和ノ日ハ午後五時過ヨリ空中ヲ飛翔シテ交尾其數實ニ夥シク爲ニ天暗ク往來モ妨ケラルヽ程ナリ之ヲ捕集シテ家禽及魚類ノ餌トナスニ頗ル宜シト云フ

（在靜岡會員　小笠原利孝）

●靜岡縣下ノ蝶類　本年一月ヨリ三月マデニ靜岡縣下ニ採集シタル蝶類ハ左ノ如シト靜岡丹羽甲子郎氏ヨリ報セラレタリ

1. Papilio xuthus, *L.*
2. Papilio machaon, *L.*
3. Pieris napi, *L.*
4. Pieris rapæ, *L.*
5. Anthocaris Scolymus, *But.*
6. Rhodocera Rhamni, *L.*
7. Colias hyale, *L.*
8. Terias multiformis, *H.P.*
9. Amblypodia japonica, *Murray.*
10. Polyommatus phlœs, *L.*
11. Lycæna argia, *Men.*
12. Lycæna argiades, *Pall.*
13. Vanessa cardue, *L.*
14. Vanessa xanthomelas, *Schiff.*
15. Vanessa callirhœ, *Fab.*
16. Vanessa charonia, *Drury.*

産地ニヨリテ其俗稱一ナラズ三陸ノ『カバ』因州ノ『ウミヤナギ』石州ノ『ウミバセウ』三崎ノ『ワキザシ』紀州ノ『ヘビ』ノ如シ

以上各地ノ産悉ク同種ナルヤ否ハ未ダ之ヲ研究セズ日本海ノ産ト太平洋ノ産トハ自ラ異種ナラン聊カ記臆ノマヽヲ擧ケテ後ノ參考トス　（松原新之助）

●てながざる　てながざるハ東印度及ビ其近傍ノ島嶼ニ産スル類人猴ニシテ Gibbon ト云フ名ニテ古ヨリ廣ク知ラル、學名ヲ Hylobates ト云フ凡ソ七種アリ、前肢ノ非常ニ能ク發達セルヲ以テ容易ニ他ノさるト區別シ得ラル、直立スルトキト雖手ヲ垂ルレバ地ニ到ル、皆其体長凡ソ三尺ニ過ギズ、肩廣ク胸部高ク且ツ强シト雖全体甚ダ瘦セタリ、腰部ハ細シ、後肢ハ前肢ニ比スレハ著シク短シ、前肢ハ或種ニテハひとさしゆびノ及ビなかゆびノ共ニ長クナリタルヲ以テ著ルシキモノアリ、頭ハ小クシテ卵圓形ナリ、顔ハ人ニ似タリ、臀部ノ硬キ所小ク、尾ハ無シ凡テてながざるハ調子高キ聲音ヲ發シ、殊ニ朝ニ於テ其叫喚ノ聲ヲ聞ク。

Hulock ト稱スル一種ノてながざるハ室内ニテモ平地ニテモ直立シテ歩ミ能ク其体ノ平均ヲ保ツ、之ヲナスニハ両手ヲ頭ヨリ高ク擧ゲ腕ヲ臂及ビ手頸ノ所ニテ少シク曲ゲ左右ヘヨロメキナガラ早ク馳ス、人モシ之ヲ追フテ急ガス𪜈ハ両手ノ端ヲ地ニツケ其助ニヨリテ尙早ク走ル。此てながざるハ走行スルヨリ跳躍スルコト多シ、跳躍スル𪜈ニモ胴ヲ直立セシム。

他ノてながざるハ胴長キ上ニ脚ノ細ク短カクシテ前ヘ曲ゲルコト甚ダ難ケレバ歩行スルニハ両手ヲ竹馬ノ棒ノ如クニ用ユ。凡テてながざるハ能ク歩ミ又能ク走ルト雖拙ナルコトヲ免カレズ、然レ𪜀林中ニ在ル𪜈ハ從容トシテ樹ヲ攀チ枝間ヲ渡ル其運動ノ巧妙ナルコト實ニ人ヲシテ驚カシム、又其早キコトハ魔術ヲ以テ飛行スルニ似タリ、獸類中ノ飛燕ナリ。屬名 Hylobates ハ樹間ヲ渡ルノ意ナリ。

一種 Wauwau ト稱スルてながざるアリ、殆ンド信ス可カラザル早サト無難トヲ以テ巧ニ竹幹、樹梢、或ハ枝

ノ狀態ヲ實驗スルノ榮ヲ得タリ由テ左ニ少ク記述スベシ」

琵琶湖中ひがいノ産スル處ハ大津以東ニシテ以西ニハコレナシ而カモ能登川尻ヨリ沖ノ島邊ニ最モ多ク膳所浦ヨリ勢多川之ニ次グ勢多川ニ上リ來ルコトアレドモ時期ニ定リナシ其棲息ノ饒多ナル一人ノ漁夫一日ニ千尾ヲ捕フト云フ好デ砂礫ノ處ニ棲息スレドモ沖島邊ノ泥沙ノ處ニモコレアリ而シテ冬期ニ至レバ石塊又ハ樹枝等ノ間ニ潜蟄ス故ニ春夏ノ候ニハ網獲スレドモ冬期ニハ筒ヲ沈メテ之ニ入ラシム

五六月ノ頃砂礫ノ間ニ産卵ス現ニ博覽會場ニ於テ開會中其雄魚ハ美麗ナル婚姻服ヲ着シ（体色ノ變シテ美麗トナルヲ云フ）雌魚ハ産卵管ヲ延ケリ然レ𪜈産卵ハナサヾリシ成長殊ニ速カニシテ五六月孵化シタルモノ翌年三四月ニ至レバ二寸トナリ二年ノモノ已ニ孕卵ス翌年成長シタルモノハ此圖ノ大サトナル

其産卵期ニ於ケル雌雄ノ裝飾ヲ見ルニ雄ハ目赤クシテ金色ヲ帶ビ全体活潑ナル黄色ヲ呈ス雌ハ目赤カラズシテ背鬣ニ暗色帶狀ノ斑アリ臀鰭ノ前ニ長キ産卵管ヲ延ケリ

（松原新之助）

●うみやなぎ　ハ Pennatulidæ ニ屬スル種ニテ昨年夏季相州三崎ノ沖ニ於テ箕作君ノ鯖繩ニテ得タルわきざしモ此一種ナリ産地ノ最モ著名ナルハ鳥取縣因幡國地方ニシテ殊ニ同國岩井郡網代村ニ於テ採收シタルモノヲ近傍浦留町ニ輸リ之ヲ枝或簪等ノ器具ニ製シテ販賣スルモノ仝地方名産ノ一ニ算セラル

仝地方ニ於テハ陸ヲ距ル五里乃至十里又石見ニ於テハ十里乃至廿里ノトコロニアリ深サハ共ニ五十尋乃至百尋其海底ハ泥濘ニシテ根ハ深ク泥中ニ入リ莖ハ底面ニ沿フテ橫臥ス

此外兩羽、三陸、總房、紀伊等ノ地方ニ於テモ之ヲ採收セシヲ見タリ然シテ之ヲ概評スルニ日本海ノモノハ長四尺乃至六尺ヲ常トスレドモ太平洋沿岸ノモノハ大ナルモ三尺ヲ越ヘズ且其色日本海産ハ黒褐色（莖ノ色ハ白シ）ナレ𪜈太平洋産ハ紅色又ハ黒褐色ノモノアリ

funesta, Humeralis, Cognata, Similis, Lugens, Laticollis 等の蟻敵の生活の事情は余親しく之を觀察して皆一轍なるを見たり是等の甲虫より攻擊を受る蟻族ハ通常 Lacius fuliginasus Latr. なり蓋其体の柔かなること運動の比較的徐々なること等は彼の敵手の襲擊には恰好なるべければなり

抑も此蟻敵が其觸角を失ひし後蟻に對する狀態も如何なる者なるか之を試すは余に取りて甚だ愉快なるとなり余は二つの幅廣き硝子瓶(カメ)を取り底には土を平らにつめ各々其中央に高さ一センメ位のコークの切れを植へ其上面に各々八疋の生きたる Lacius fulisinosus の働者蟻を細き針を以て貫き止めたり其中二三疋ハ此手術の爲めに死したれ共餘は活潑ニ且つ續きて久しくもがき居まり各の瓶の中に十二疋宛の蟻敵を入れたり中六疋ハ cognata 五疋ハ fanesta 一疋ハ latiedlis にして甲瓶中のものハ凡そ觸角を備へて健康なれども乙瓶中のものハ凡て成るべく其根(子)本(モト)より觸角を切り落せり斯くの如くニして觀察せしニ第一ニ眼中に落ちたることは無角の輩は平氣にコーク上にもがける蟻に近より其間を縱橫に奔走せしに有角のもの供は凡そ蟻を距ること五ミメの所に到れバ直ニ立ち止まり觸角を擡けて振ハせ側方に避けたること之れなり凡そ二三時間も經たる頃ニ至れバ有角の輩ハコークよりはひ下り木の葉等の下に匿るゝもあり瓶の椽を去り廻りて立ち去らんとするもありて瓶中の無角の輩ハ之に反して一疋ハコークの上に蟻の間にありて頭殊ニ觸角の切れ殘りの所を撫でつゝあり一疋ハコークの側面にあり近く蟻に接して同しく撫でさすりせりまた一疋ハコークの側面を走り上り蟻が烈しくもがき且つ邊りを噛み廻しある所に殆んど其芽の觸るへき近所に至り蟻に少しも恐を抱かす安閑として前者の如く頭をさすれり其後續く八日間等しく是等の事を目擊し**無角の輩ハ蟻に接近するも全く普通の危懼を失却したるとを認めたり**有角健康の方ニありてハ其行狀全く異る屢ゝ觸々角を奮てコークに近けども忽ち避けて逃げ退く強て蟻のもがける所に近より其足をつ


213

條ヲ攀ヂ、前後或ハ上下ニ鞦韆スルヿ一回ニシテ一躍スレバ瞬時ニ七八間ノ距離ニ達ス、其早キヿ矢或ハ鳥ノ飛ブニ似タリ、此ノ如ク跳リ越ユルヿ續ケサマニ數回ナスト云フ。此無比ノ熟練ハさるノ非常ニ得意ナルモノヽ如シ、必要モナキニ無暗ニ空間ヲ跳リ越ユルヲ以テナリ、又少シク迂回スレバ容易ニ到リ得ル所ニテモ跳躍シテ以テ自ラ樂ムモノニ似タリ。

往年此さるノ牝ヲろんどんヘ携ヘ來リ動物園ニ特ニ大ナル場所ヲ撰ミ所々ニ樹木ヲ植ヘ附ケ其間ニ放チタリ、此處ノ樹間ノ空隙最モ廣キ所ニテ三間餘ニテ此さるニハ狹隘ナリシ、然シ長キ航海ノ疲勞ト食物、氣候ノ變更等ノ爲ニ苦シミ又一身ノ自由ヲ奪ハレタル動物ニハ充分廣キ空間ナリシ。斯ノ如ク種々ノ有樣ノ不適當ナルニ拘ハラズ動物ハ其得意ノ妙技ヲ演ジテ觀覽人ノ眼ヲ驚カシタリ。常ニ用意モ何モナク不意ニ自分ノ居ル枝ヨリ一跳シテ少シモ過タズ他ノ枝ノ方ヘ移リ之ヲ手ニテ攫ミタリ、且ツ最初ニ力ヲ得テ跳ルトキハ間斷ナク永ク續ケ二度目ノ跳躍ヨリハ只枝ニ觸ルヽノミニテ跳レリ、又觀覽人ノ菓實等ヲ投與スルニ跳躍ノ際別ニ其爲ニ止マル等ノヿナク攫ミ去レリ其眼ト手ノ早キ亦驚ク可シ。

●**蟻敵(アリガタキ)の觸角の用に就て**　蟻敵(Myrmedonia)ハ小さき(凡そ五ミメ)甲虫にして能く蟻社會の中に交りてあり何より著しき目標とすべきハ翅の甚た輕少なると是れなりワスマン(E. Wasmann)氏ハ工夫を廻らし其觸角の用を知らんと企て一の試驗をなせり今これを摘譯して左に掲く但し Mirmedonia ハ便利の爲め獨逸の俗稱(Ameisenfeinde)を意譯して蟻敵(アリカタキ)と名けたり

中央及ひ北方歐羅巴に現出する此類の甲虫常に蟻會社を攻撃し純粹なる奪掠動物として蟻及ひ其卵を食て生計を營む故に之れを蟻敵と稱へ若し蟻中間に侵入することあれば烈しく攻撃せられまた追討せらる斯れば可レ成蟻に邂逅することをさけて蟻巢の戸前或ハ小楯に潛みて一蟻の來る每に殊に夜中に襲撃し捕て之を裂き食ふ蟻の死骸其他の六足虫類の片屑もまた拾てこれを食ふ Myrmedonia

| | 甲瓶 | 乙瓶 |
|---|---|---|
| 第一日目 | 6 | 0 |
| 第二日目 | 2 | 1 |
| 第三日目 | 2 | 2 |
| 第四日目 | 2 | 4 |
| 第六日目 | 3 | 5 |
| 第七日目 | 4 | 7 |
| 第九日目 | 5 | 8 |

是れによりてこれを観れハ蟻敵の觸角は敵對に奮怒せる蟻に對して危懼を惹起すが如くは食餌を需めるに當りては緊要ならざることを知るべし故に食餌のある距離上の感觸は専ら或ハ少くも事宜によりてハ觸鬚によることもまた推せ分るへしまた觸角を失却すれば危懼の本能を去りて奪掠に係はる臭覺を混雜せざ從て食慾の度も進みたることも知るべし此甲虫の体の甚微小なるが故に觸角ありて觸鬚なく或ハ兩ながら欠如せるも尚は食物を見出し得る機能を有するヿを試す爲め觸鬚の切斷をなすことハ困難なり或は企て及ばざるべし此兩者欠如すも食餌を見出得ることとは決して出來く可からざることゝ余ハ信す

（ナ、サ、）

## ●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）

余ノ「人類及ビ動物ニ於ル感情ノ現ハシ方」ニ就テノ書ハ一千八百七十二年ノ秋出版サレタリ是ヨリ先余ハ此問題ニ就テ「人類ノ祖先」中ノタヾ一章ヲ貸サムト思ヒタリ然レドモ余ノ記錄ヲ纏ムルニ至リテ直ニ其別册ヲ要スルヿ明ナルニ至レリ

余ノ長子ハ一千八百三十九年十二月二十七日ニ生レタリ而シテ余ハ極始ヨリ其感情ノ現ハレ方ニ就テ記錄ヲナシタリ蓋余ハ當時尚ホ早シト雖モ既ニ左ノ事ヲ信ジタレバナリ曰ク極メテ複雜ナル感情ノ現ハシ方及ビ極小ノ差ヲモ現ハスモノモ其元皆漸次自然ニ起リタルモノナリト次年即チ一千八百四十年ノ夏サー、チ、ベルノ感情ノ現ハシ方ニ就テノ嘆賞スベキ書ヲ讀ミタリシガ是ニ由テ余ハ此問題ニ就テ一層興味ヲ增セリ然レドモ余ハ氏ト共ニ種々ノ筋

まんでは再び急に走り去る思ふに彼の蟻が互に接近して相並び中には隨分氣をいらだてたるものあるは彼等（蟻敵）よハ頗る驚を與へ或ハ少くも危懼の念を惹起すなるへし數日を經て蟻は盡く死し果て或は間に僅かにうごめくものあるに至りて始めて余は所々に（然れども甚た希）一の健康有角の蟻敵が靜に其死骸の間に坐すを見たり

蟻敵の危懼に係る本能は恐くハ觸角の失却と共に全く失せたるべしと雖ども然れども集掠性の本能も尚は依然たるが如し試驗の第二日目の朝まではハ無角の輩を入れたる乙瓶中には未だ一疋の蟻の食せられたる跡なきも甲瓶に在りてハ其夜已に二疋の蟻が其後体を食ひ込まれたるを見たり同日の正午に至ればまた乙瓶中の輩も蟻の後体よ大なる穴竅をあけたり第三日目の夕刻よ他の蟻に穴をあくることよ從事せり此に至りて無角のものは此點に於て有角者に劣る所第四日目の朝よ至りて甲瓶の甲虫ハ先に食ひ掛りし蟻を尚は食ひつゝありしに乙瓶中にハ尚は別に二疋の蟻の後体に穴をあけしを見たり第六日目の朝にハ甲瓶中のものバ漸く三疋の蟻を食ひつゝあり乙瓶中にも五疋中二疋は殆んど全く食ひ盡し只に針の貫ける胸部の一片と頭とのみ殘り居たり同日の朝また食しつゝある無角者を見たり余が瓶を振り動かすまで無頓着に食せり第七日目の朝よは乙瓶中よハ七疋の蟻が或は全く或は一部食せられてあり甲瓶中よは只四疋のみ同日乙瓶中の一疋ハ蟻より其半体を食され死してありたり第八日目には食はれたる蟻の數ハ兩瓶共異なる所なし然れども食はれたる部分ハ餘程進んでありし第九日目に至りて乙瓶中にハ第八日目に穴をあけたる七疋の蟻が全く或ハ幾分を食ひ盡されたり甲瓶中には第五日目にかじり初めたる四疋の蟻が全く或ハ幾分を食はれたり凡そ蟻敵が蟻を食ひ初めるは二三の足或は頭を除くの外凡て後部よりす頭の食ハれたること嘗てなし故に Lasius fuliginosus の巣の入口にハ夥しく蟻頭の散在せるを見ることあり是れ多くの蟻敵が彼處に住ひし跡なりと知るべし試驗成蹟を表よして掲くれバ左の如し但し數字は食せられたる蟻の數なり

欲ス而後余ノ二形花及ビ三形花ニ就テノ書及ビ是ト同時ニ是ニ類シタル事項ニ就テ余ノ觀察シタルヿニシテ未ダ之ヲ整頓スルニ遑ナカリシモノヲ出版セムト欲ス其時ニ至レバ余ノ勢力ハ多分盡キ余ハ悅ンデ「今終リヌ」ト言ハムノミ

一八八一、五月一日記――「他花交接及ビ自花交接ノ結果」ハ一千八百七十六年ノ秋出版サレタリ余ノ信ズル所ニ由レバ此書ニ於テ達シタル結果ニ因テ同種ノ植物中甲ヨリ乙ニ花粉ヲ移運スル爲ノ種々異樣ノ愕クベキ仕掛ヲ皆說明スベシト然レドモ現今ニ至リテ余ハ重ニヘルマン、ミユレルノ觀察ニ由リテ左ノ事ヲ信ズ即チ當時余ノ述ベタルヨリ一層强ク自花交接ノ爲メノ數多ノ適應ヲ記ス筈ナリシ然レドモ斯ノ如キ適應ノアルヿヲ余ハ熟知セリ「蘭ノ受精」ノ大ニ增補シタル新版ハ一千八百七十七年出版サレタリ

同年「同種ノ植物中花ノ形狀ノ異ナリタルヿ」ニ就テノ書現ハレ第二版ハ一千八百八十年ニ出デタリ此書ハ元リン子學會ヨリ出版シタル異形ノ花柱ヲ有スル花ニ就テノ論文ヲ訂正シ且新シキ事項及ビ二ノ異形ノ花ヲ有スル新植物ニ就キテノ觀察ヲ加ヘテ一纏ニナシタルモノナリ既ニ前ニ言ヒシ如ク余ノ小發見中異形ノ花柱ヲ有スル花ノ目的ヲ明ニシタルガ如キ愉快ヲ余ハ他ニ感ジタルヿナシ此ノ如キ花ノ花粉ヲ不當ノ仕方ニ由テ交ヘテ得タル結果ハ異ナリタル變種ノ交接ニ關係アル故甚ダ肝要ナリト余ハ信ズ然レドモ此等ノ結果ヲ觀察シタル人ハ實ニ少數ナリ

一千八百七十九年余ハ博士エルンスト、クラウゼーノ著シタル「エラスマス、ダーウヰンノ傳」ノ譯ヲ出版セシメタリ而シテ余ハ所持ノ材料ヨリ其人ト爲リ及ビ習慣ノ概畧ヲ記シテ是ニ加ヘタリ是ノ小傳ヲ讀デ興味ヲ表セシ人數多アリタリ然ルニ僅八百或ハ九百部ヨリ賣レザリシハ余ノ怪ム所ナリ

一千八百八十年余ハ(兒)フランクノ扶ニ由リ我等ノ合著ナル「植物ノ運動力」ヲ出版シタリ此書ハ中々困難ナル仕事ナリキ此書ノ「攀援植物」ニ於ルハ稍々「他花交接」ノ

肉ハ特ニ感情ヲ現ハス爲メ創造サレタリト信ズルヿ能ハザリキ爾後余ハ時々人類及ビ家畜ニ就テ此問題ヲ研究セリ余ノ書ハヨク賣捌ケタリ發兌ノ即日五千二百六十七部賣レタリ

一千八百六十年ノ夏余ハハートフィールドノ近邊ニ於テ優々ト息ヒ居タリ此處ニハ二種ノどろせら數多アリ而シテ余ハ其葉ニ數多ノ昆蟲ノ捕ヘラレタルヲ見付タリ余歸ルトキ二三ノどろせらヲ持歸リ是ニ昆蟲ヲ與ヘタルトキ觸毛ノ運動セルヲ見タリ余ハ是ニ由テ該植物ガ昆蟲ヲ捕フハ一定ノ目的ノ爲メナラムト思考スルニ至レリ幸ニシテ余ハ一ノ確ナル驗シヲ思ヒ付タリ即チ數多ノ葉ヲ種々密度ノ異ナリタル窒素ヲ含有セル液及ビ是ヲ含有セザル液中ニ置クヿナリ斯ク爲シテ第一ノ液ノミ植物ノ運動ヲ促スヿヲ發見シタルヤ其好キ研究ノ問題ナルヿ明ニナレリ

其後閑暇アルトキ余ハ必ズ實驗ヲナセリ而メ余ノ「蟲食植物」ト題セル書ハ一千八百七十五年七月出版サレタリ―余ノ觀察ヲ始メシヨリ十六年目ナリ此延引ハ余ノ他ノ著述ニ於ケル場合ト同ジク余ニハ大ニ利益ナリキ何トナレバ久シキ時日ヲ經過シタル後ハ自分ノ著作ト雖モ恰モ他人ノ著作ノ如ク批評スルヿヲ得レバナリ植物ニシテ若シ是ニ適當ナル刺激ヲ與フルトキハ動物ノ消化液ニヨク類肖シ酸及ビ釀興力ヲ有スルモノヲ含有セル流動体ヲ泌泌スルモノアリトハ實ニ著シキ發見ナリキ

此ノ一千八百七十六年ノ秋余ハ「植物界ニ於ル他花交接及ビ自花交接ノ結果」ニ就テ著スベシ此ノ書ハ「蘭ノ受精」ニ就テノ書ノ補遺トナスベキモノナリ彼ノ書ニ於テ余ハ他花交接ノ法方ノ實ニ完全ナルヿヲ證明シ此書ニ於テハ其結果ノ實ニ重要ナルヿヲ證スベシ余ガ此書中記載セル數多ノ實驗ヲ十一年間ナセシハ偶然一事ヲ觀察セシニ起因スルナリ而シテ余ガ充分是ニ注意スルニ至リシハ度々是ヲ目擊シタル後ナリキ此事實ハ實ニ著シキヿニシテ即チ自花交接ニ由テ得タル苗ハ第一代ニ於テスラ他花交接ニ由テ得タルモノニ比スレバ高サニ於テモ勢ニ於テモ劣ルトノ事實是ナリ又余ノ蘭ニ就テノ書ヲ再版セムト

可成急ギテ書キ而後徐ニ是ヲ訂正スル方時間ヲ費スヿ少シトノヿ是ナリ斯ク急ギテ書キタル文章ハ余ノ熟考シテ書キタルモノニ優レルヿ多シ

是マデハ余ノ著述ノ仕方ニ就キテ述ベタリ是ニ加ヘテ言ハント欲スルヿハ即チ大ナル著述ノ爲メニハ其材料ノ順序ヲ定ムル爲メ大ニ時日ヲ費スヿ是ナリ最初余ハ極粗ナル概構ヲ二三頁ニ認メ然ル後稍々多數ノ頁ニ一層大ナルモノヲ作レリ是ニハ講論ノ全部或ハ多數ノ連續シタル事實ヲタヾ數言ヲ以テ記セリ充分委シク述ブルマデニハ是等ノ各題目ヲ又擴張シ或ハ其順序ヲ易フルヿアリ余ノ著作ノ中ニハ大ニ他人ノ觀察シタル事實ヲ採用シ又余ハ同時ニ數多ノ問題ヲ研究スルヿ常ナル故左ノ事ヲ記サシ即余ハ三十乃至四十ノ嚢ヲ供ヘ是ヲらべる付ノ箱ニ入レ置クヿナリ斯シテ余ハ如何ナル扣ヘモ此ノ嚢中ニ入レ得ルナリ余ハ夥多ノ書籍ヲ求メタリ而シテ各ノ終ニ余ノ著述ニ關係アル事實ノ見出シヲ作レリ或ハ若シ其書ガ余ノ所有ニ非ザルトキハ別ニ其肝要ナル處ヲ扣ヘタリ而シテ余ハ斯クシテ作リタル扣ヘヲ大ナル引出シ一杯所有セリ一ノ問題ニ就キテ著述ヲ始ムル前余ハ前ニ記シタル短キ見出シヲ總テ穿鑿シテ一般ノ分類シタル見出シヲ作ルヲ常トス而シテ前ニ記シタル嚢ノ中其問題ニ關スルモノヲ開クトキハ余ノ生涯中蒐メタル知識ハ皆余ノ目前ニアリ

既ニ記シタル如ク余ノ心ハ過ル二三十年間ニ於テ變ジタル所一點アリ余ノ三十歳ニ至ルマデ或ハ又其後モ多種ノ詩例ヘバミルトン、グレー、バイロン、ウォヅウォース、コールリッヂ及ビシェレーノ作ノ如キ皆余ノ樂ミシ所ナリ又既ニ余ノ小學校ニ在リシトキシェクスピアー特ニ其歴史的ノ作ヲ深ク樂ミトセリ余ハ又以前深ク畫ヲ好ミ又音樂ヲ大ニ好ミタルヿヲ記セリ然レトモ此多年間余ハ詩ノ一行ヲモ讀ムヿヲ欲セズ近頃シェクスピアーヲ讀マントシ試ミタレトモ面白カラヌヿ此上ナク余ハ是ガ爲メ實ニ不愉快ニ感ジタリ又畫及ビ音樂ニ就テノ嗜好モ失ヘリ音樂ハ余ニ快樂ヲ與ヘズシテ反テ余ノ其時研究セル問題ヲ深考スルニ至ラシム余ハ尚ホ美景ヲ樂ムノ能アレトモ昔日起リタルガ如キ深

「蘭ノ受精」ニ於ルガ如シ何トナレバ進化ノ元理ニ由ル片ハ總テノ植物ガ多少同様ノ運動力ヲ有スルニ非ザレバ攀援植物ガ斯ク異ナリタル部類ニ與リタルヿヲ到底說明スルヿ能ザレハナリ而シテ實際然ルヿヲ余ハ證明シタリ加之余ハ左ノ稍々廣大ナル概括ヲ爲スニ至レリ即チ光、重力等ニ因テ起ル所ノ運動ノ肝要ナル類ハ皆是等ノ基礎トナルベキ圓轉ナル運動ノ種々其狀態ヲ變ジタルモノナリトノ事是ナリ余ハ生物界ニ於ル植物ノ位地ヲ高メルヲ以テ常ニ樂トセリ故ニ根ノ先端ガナス所ノ實ニ數多ノ恰適シタル運動ヲ證明スルヲ特ニ愉快ニ感ジタリ

余ハ今(一八八一、五月一日)「蚯蚓ノ作用ニ由テ植物細土ノ出來ルヿ」ニ就テノ小著ノ原稿ヲ活版屋ニ贈レリ此ハ餘リ重要ナル問題ニハ非ズ又讀者ヲシテ面白ク感ゼシムルヤ否ヤ知ラズ然レ𪜈余ハ是ヲ面白ク思ヒタリ此書ハ四十餘年前地學會ニ於テ朗讀シタル一小論文ヲ完了シタルモノニシテ昔ノ地學思想ヲ恢復シタリ

余ハ此ニテ余ノ出版シタル書ヲ總テ記シタリ是等ハ余ノ生涯ノ一里塚ナリ故ニ尙ホ言フベキヿ鮮シ余ハ過ル三十年間心ノ變ジタルヿアルヲ覺ヘズ、但後記スベキ一點ニ於テハ然ラス、且又一般ニ衰フル外別ニ變化アルヲ望ムベキニ非ズ然レ𪜈余ノ父ハ齡八十三ニ及ビタレ𪜈其心ハ毫モ朦朧タルヿナカリキ而シテ余モ又心ノ著シク衰フル前ニ死ンヿヲ望ム余ハ正シキ說明ヲ推量シ又ハ實驗ヲ工夫スルヿニハ較々功ニナリタリト考フ然レ𪜈此ハタヾ熟練ト知識ノ增シタル結果ニ過ギザルモ知レス余ハ考ヲ簡單ニ明瞭ニ言現ハスニ困難ヲ感ズルヿ少シモ昔日ニ異ナラズ余ハ是ガ爲メ大ニ時ヲ失ヒタリ然レ𪜈又余ハ是ガ爲メ久シク注意シテ各々ノ辭ヲ熟考セザルヲ得ザル故幾分カ余ノ損ヲ贖ヒタリ斯シテ余ハ議論ノ誤レルヲ知リ又自ラ及ビ他人ノ觀察ニ誤レル所アルヲ知ルニ至レリ

余ノ心中ニハ何カ一物アリテ余ノ言ハントスルヿヲ必ズ不當カ或ハ不肖合ニ書キ表ハサシムルガ如シ以前余ハ文章ヲ書ク前ニ是ヲ心中ニ廻ラスヲ常トセリ然レ𪜈此ノ多年間左ノ事ヲ發見セリ即チ余ノ言ハント欲スルヿヲ

神速ナル理解力ヲ有セズ故ニ余ハ批評家ニ非ズ論文或ハ書ヲ讀ムトキ初ハ大抵是ヲ賞揚ス而シテ其弱點ヲ見出スハ久シク是ヲ熟考シタル後ニ非ザレバ能ハズ余ノ長キ全ク無形的ノ思想ヲ廻スハ至テ小ナルモノナリ故ニ余ハ形而上學及ビ數學ニハ決シテ卓ルコト能ハザリシナラム余ノ記臆力ハ廣ケレ圧朦朧ニシテ余ノ將ニ達セントスル論局ニ反スルカ或ハ是ニ符合スル所ノ事ヲ自ラ觀察セシカ或ハ書中ニ讀ミタルヿアルヲ注意スルノミ而メ暫時ノ後余ハ大抵其ノ何處ニアリシヤ是ヲ思ヒ出シ得ルナリ實ニ余ノ記憶力ハ一方ヨリ言ヘバ憐レナル者ニメ年號又ハ詩ノ一行ヲ數日間ヨリ久シク記憶スルヿ決シテ非ザルナリ

余ノ批評者ノ中左ノ言ヲナセル者アリキ曰ク「成程渠ハ觀察ハ良クナセドモ議論ハ毫モ能セズ」ト余ハ此言ヲ以テ當レリトナスヿ能ハズ何トナレバ「種ノ起原」ハ始ヨリ終ニ至ルマデ一筋ノ議論ニシテ隨分有識者ヲ服セシメタレバナリ議論ヲ毫モ能セザル者ニシテ此ヲ著スヿ能ハザルベシ余ハ又可ナリニ工夫力及ビ通常ノ智慧即チ判斷力ヲ有ス然レ圧此ハタヾ可ナリノ法律家又ハ醫士ガ必ズ有スル位ノモノニシテ敢テ是ニ越エタルニ非ズト余ハ信ズ善キ方ヨリ言ヘバ余ノ凡庸ノ人々ニ卓レタル點ハ人々ノ注意ヲ惹カザル事ヲ觀且是ヲ注意シテ觀察スルニアリト事實ヲ觀察シ且是ヲ蒐集スルニ於テハ余ハ出來ル丈精一杯勉強シタリ然レ圧最モ肝要ナルヿハ余ノ博物學ヲ斷ヘズ熱心ニ愛セシヿナリ

然レ圧此ノ潔白ナル愛心ヲ大ニ扶ケシ者ハ他ノ博物學者ニ重ゼラレンヿト欲スル望ナリキ余ノ尙ホ少年ナルトキヨリ余ハ何ニテモ自ラ觀察セシヿヲ理解シ即チ是ヲ説明セントノ欲實ニ強カリキ是ヲ説明スルトハ即チ總テノ事實ヲ一般ノ法則ニ包括セシムルヿ是ナリ是等ノ諸原因相合シテ如何ナル問題ト雖圧其未ダ説明ヲ得ザル中ハ幾年ニテモ是ヲ攻究スルノ忍耐力ヲ余ニ與ヘタリ余ノ判スル所丈ニテハ余ハ其理ヲ知ラズシテ徒ニ他人ノ説ニ從フノ弊ナシ余ハ斷ヘズ如何程余ノ愛スル假説（而シテ余ハ各問題ニ就キテ假説ヲ爲ザヾルヲ得ズ）ト雖圧余ノ心ガ是ガ爲

キ感情ヲ惹起スヿ能ハザルナリ是ニ反シテ矢張想像的ノ作ナル小説ハ極名作ニ非ズト雖圧多年間余ニ休息ト愉快ヲ感セシメタルヿ愕クベキ程ナリ而シテ余ハ如何ナル小説家ノ爲メニモ其幸福ヲ祈ルヿアリ余ノ爲メニ朗讀サレタル小説ノ數ハ驚クベキ程ナレ圧若シ可ナリノ作ニシテ話ノ結局ガ悲シキヿニ非ザレバ余ハ總テ是ヲ好メリ實ニ小説ノ結局ガ悲シキヿニ非ザル爲メニ法律ヲ設クベキナリ余ノ好ム所ニ由レバ若シ小説中讀者ガ全心モテ愛シ得ル人物アルニ非ザレバ上作ト謂フ可ラズト而シテ其人物ガ若シ可愛キ女ナレバ尚更宜シ

此ノ如ク高尚ナル美術的ノ嗜好ヲ失ヒタルハ實ニ奇ニシテ且悲ムベキナリ而シテ一層奇ナルヿニハ歴史、傳記及ビ旅行記(其中科學的ノ事實ノ有無ヲ問ハズ)及ビ種々ノ問題ニ就テノ論文ヲ樂ムヿ毫モ昔日ニ異ナルヿナキヿナリ余ノ心ハ夥多ノ事實ヲ集メテ是ヨリ一般ノ法則ヲ分析シ出ス爲メノ機械ニナリタルガ如シ然レ圧何故是ガ爲メ高尚ナル嗜好ニ關スル腦ノ部分ノミガ衰ヘタルヤ余ハ覺ルヿ能ハズ余ノ心ヨリ一層高等ナルカ或ハ一層良キ搆造ノ心ヲ有セル人ニ於テハ此ノ如キヿハ非ザルベシト信ズ余ニシテ再ビ生涯ヲ送ルヿヲ得ルナラ少クトモ一週ニ一度ヅヽ詩ヲ讀ミ又音樂ヲ聽クヲ規則トナサム何トナレバ今衰ヘタル腦ノ部分ハ斯ク常ニ使用スルニ由テ其勢ヲ保チシナラム是等ノ嗜好ヲ失フハ恰モ幸福ヲ失フニ異ナラズ而シテ或ハ知力ニ損害ヲ及ボシ又人性ノ情ノ部分ヲ弱ナラシムルガ故恐ラクハ德義上ノ性質ヲモ損フニ至ラム

余ノ著作ハ英國ニ於テ多ク賣捌ケ數多ノ國語ニ反譯サレ且外國ニ於テモ度々再版サレタリ余聞ク外國ニ於テ重ゼラルヽハ其書ノ長ク後世ニ遺ル徵ナリト此ハ信ズベキヿナリヤ余ハ疑フ然レ圧若シ此ノ標準ニ由テ判斷ヲ下ストキハ余ノ名ハ數年間遺ル筈ナリ故ニ余ノ因テ以テ成功シタル心質ト事情ヲ分析セムト試ムルハ敢テ無益ノヿニ非ザルベシ固ヨリ誤ナク是ヲ爲スハ誰モ能ハザルハ余ノ熟知スル所ナリ

余ハ或人――例ヘバハックスレー氏――ノ如クニ著シキ

リシト故ニ此ハ一ノ信仰―若シ意味ナキ言葉ヲ信仰ト稱スルコヲ得バ―ガ殆ンド全英國ニ漫延シタル一例ナリ

余ハ生涯中タヾ三ノ故意ニ出デタル詐ヲ知ルノミ而シテ其一ハ或ハ放言（而シテ學術上ノ放言ハ隨分是迄ニアリ）ナリシヤモ知レズ然レ𪜈其ハ遂ニ米國ノ一農業雜誌ヲ取込ミタリ其事柄ハヲランダニ於テ牛ノ全ク異ナリタル種ヲ交殖セシメテ新奇ナルモノヲ造出スルコニ關セリ（牛ノ種ノ中或モノハ全ク交殖セザルヲ余ハ知レリ）而メ記者ハ無禮ニモ余ト書ヲ取遣シ且余ハ氏ノ得タル結果ノ重要ナルコヲ深ク感ゼリト公言セリ英國ノ或農業雜誌ノ編輯者ハ此論文ヲ余ニ贈リ是ヲ轉載スル前余ノ説ヲ聽カント欲スト曰ヘリ

第二ハ記者ガ自ラさくらさうノ色々ノ種ヨリ造出シタル數多ノ變種ニ就キテノ記述ナリキ是等ノ變種ハ親草(チヤクサ)ニ昆蟲ノ近ヨラザル樣注意シテ蔽ヒタレ𪜈其結ビシ實ハ毫モ常ニ異ナリシコトナシト此事述ノ出版サレシハ余ノ異形花柱ノ意味ヲ發見セザリシ前ナリキ此記述ハ全ク詐ナリシカ然ラザレバ昆蟲ヲ遠ザクル爲メ用ヒタル方法ノ方外ニ粗ナリシナラム

第三ハ是ヨリ尚ホ珍シフース氏ハ其「近親結婚」ニ就テノ書中ベルギ國ノ或著者ヨリ長キ抜萃ヲナセリ此ノ著者ハ自ラ兎ヲ近親中ニテ交接セシメテ幾代ヲモ重ネタレ𪜈是ガ爲メ毫モ不良ナル結果ナカリシト曰ヘリ此記述ハ至テ尊敬スベキ紀要即チベルギ王國學士會院ノ紀要ニ出版サレタリ然レトモ余ハ是レヲ疑ハザルヲ得ザリキ―何故ナリヤ余自之ヲ知ラズタヾ此場合ニ於テハ如何ナル事モ起ラザリシト然ルニ余ガ動物ヲ交接セシメタル經驗ニ由レバ斯ノ如キコハ實ニ信ジ難キナリ

故ニ余ハ大ニ躊躇シタレ𪜈遂ニ教授ファン、ベネデン氏ニ書ヲ贈テ前ノ著者ハ信用スベキ人ナリヤヲ問ヘリ後久シカラズシテ答ヲ得タルニ學士會院ハ前ノ記述ノ全ク虛譌ナルヲ發見シテ大ニ愕キタリト著者ハ公然紀要ニ於テ其住所及ビ其試驗ニ用ヒタル數多ノ兎ノ所在ヲ明ニセヨト挑マレタリ此ノ試驗ヲ爲スニハ實ニ多年ヲ要スベシ然ル

メニ箝束サレズ事實ノ是ニ反スルモノアルヲ見タルトキハ直ニ是ヲ棄ル樣勉メタリ余ハ實ニ斯クナサズ〆他ニ方法ナカリキ何トナレバ「珊瑚礁」ヲ措テ問ハザルトキハ余ノ始メテ爲シタル假定ニシテ暫時ノ後全ク弃擲スルカ然ラザレバ大ニ是ヲ變ズルニ非ザレバ用ユルヿ能ハザルモノ殆ンド皆然レバナリ此事ハ余ヲシテ大ニ科學上ノ演繹理論ヲ重ゼザルニ至ラシメタリ然レドモ余ハ懷疑者ニハ非ズ懷疑心ハ科學ノ進步ニ有害ナルモノナリト余ハ信ズ幾分カノ懷疑心ハ科學者ヲシテ其時ヲ大ニ損亡セザラシメテ有用ナルモノナレドモ余ノ會シタル人々ノ中是ガ爲メ實驗或ハ觀察ヲ妨ゲラレタル者アリキ此等ノ人々ガ若シ實驗或ハ觀察ヲナシタラバ或ハ直接ニ或ハ間接ニ其用ヲナシタルヿ疑ナシト余ハ信ズ

是ヲ明ニセンガ爲メ余ノ知レル中其最モ奇ナルモノヲ擧ゲン東部ノ州ヨリ一紳士（同人ハ當地方ニ於テハ中々ノ植物學者ナリト余ハ後聞ケリ）余ニ書ヲ贈テ曰ク今年普通ノそら豆ハ皆其處ヲ誤テ生ゼリト余ハ是ニ答テ君ノ言ハ何ノ謂ナルヤ毫モ解セザル故尚ホ委シク報ゼラレヨト曰ヘリ然ルニ久キヲ經タルニ余ハ是ガ答ヲ得ザリキ其後二ノ新聞紙中左ノ言アルヲ見タリ曰ク「今年そら豆ハ皆其處ヲ誤テ生ゼリ」ト此新聞紙ノ一ハケントノモノニシテ他ハヨーク州ノモノナリキ故ニ此ノ如キ一般ノ事ナレバ余ハ全ク是ヲ無根ト思ハザリキ是ニ於テ余ケントノ老人ナル植木屋ニ行キ該事ニ就キテ何カ傳聞シタリヤト問ヒシニ同人答ヘテ曰ク「否其ハ必ズ誤謬ナラム何トナレバそら豆ノ其處ヲ誤テ生ズルハタヾ閏年ノミ然ルニ今年ハ閏年ニ非ザレバナリ」ト余問テ曰ク然ラズ平年ニハ何處ニ生ジ閏年ニハ何處ニ生ズヤト然レドモ余ハ直ニ同人ノ豆ノ生ジ方ニ就テ秋毫モ知ラザルヿヲ發見セリ然レドモ彼ハ尙ホ其信ズル所ヲ弃テザリキ

暫クシテ始テ余ニ此事ヲ報ジタル人ヨリ書ヲ得タリ氏ハ種々辨ジテ曰ク余ノ此事ヲ君ニ報ジタルハ蓋數多ノ有識農夫ヨリ是ヲ聞キタルニ因レリ然ドモ其後各農夫ニ就テ質シタルニ誰モ自ラ謂ヒタルヿノ何タルヤ毫モ是ヲ知ラザ

動物學雜誌第參拾貳號
明治廿四年六月十五日發兌

## ●對馬採集日記

波江元吉
土田兎四三

此旅行ヲ思ヒ立シハ本年二月十日ニシテ尾張丸（馬關長崎五島對馬釜山仁川天津（夏季）ノ間ヲ往復ス）ノ神戸出港ハ仝月十五日ナリケレバ何ヲ準備スル暇モナカリキ然レ𪜈動物採集ノ爲メ一地方ニ旅行スルニハ豫シメ採集スル目途ヲ定メ其レニ應シタル採集器具ヲ準備セサル可カラズ其目的ニ種々アレ共之ヲ大別スレハ二途ニシテ甲ハ科目ヲ限リテ專ラ其科目ノモノノミヲ採集シ乙ハ其地方全體ノ動物ヲ博ク蒐集スルナリ該島ノ如キ採集者ノ足跡未タ普ネカラザル地方ニ於テハ甲乙孰レノ方法ニ從フ方利益多ラン歟素ヨリ之ヲ豫期スルコ難シト雖モ余等幸ヒ兩人ナレバ一人ハ甲ノ目的ヲ執リ一人ハ乙ノ方法ニ因テ採集セバ一擧兩全ノ計ナラント爰ニ一决シテ先ツ獵銃ドレッヂ捕蟲網海面引網等ヲ準備シ行李モ怱卒ニ脩メ漸ク十三日ニ東京ヲ出發シタリキ横港ニ至リ長門丸ニ乘船シ同所ヲ解纜セシハ十三日ノ正午ニシテ海上頗ル平穩ナリシ翌朝降雨暫時ニシテ晴レ西風起リ寒威凛烈熊野沖ニ至ル波濤較大ナレ𪜈逆風ノタメ幸ヒニ動搖セズ午後六時神戸ニ着岸シ同日午後十二時尾張丸ニ乘船ス西風倍々强ク夜中ハ寒氣一層甚シカリキ

十五日午前七時神港ヲ拔描シ三原沖ヲ經テ夜ニ入ル

十六日午前六時門司ニ投錨ス上陸ヲ許サズ午后四時拔錨ス西風烈シク船体動搖ス

十七日午前七時長崎港ニ入リ始テ喜色アリ上陸ヲ許ス直ニ銃ヲ携ヘ市街ノ近郊ニ出獵セシニ當地方モ銃獵熾ンニ行ハルヽヲ以テ小禽甚タ尠シ山背ヲ降リ歸路ニ就ント欲シ圖ラス一森林中ニ出デシニ小鳥ノ囀聲喧シク兀爾タル枝梢ニ集リ居ル光景ハ恰モ果實ノ

ニ著者ハ遂ニ是ニ答フルコヲ爲サヾリキ
余ノ習慣ハ規律アリ而シテ此ハ余ノ擇ビタル仕事ノ爲メニハ大ニ益アリキ且余ハ活計ノ爲メニ働ク必要ナカリシ故充分ノ時日ヲ得タリ病氣ノ爲メ生涯中ノ多年ヲ消失シタリト雖モ其スラ反テ余ヲシテ交際及ビ遊樂ノ爲メ心ヲ亂ラザラシメタリ

此故ニ余ハ科學上如何程ノ事ヲ爲シタルヤ知ラザレモ余ノ爲シタル丈ハ種々複雜ナル心質及ビ事情アリテ然ラシメタリト信ズ其中重ナルモノヲ擧レバ――科學ヲ愛スルコ――如何ナル問題ニテモ久シク是ヲ心中ニ廻ラスコ――事實ヲ觀察シ且蒐集スルニ惰ラザルコ――且是等ニ加ヘテ可ナリノ工夫力及ビ通常ノ知慧ヲ有セシコナリ余ノ如ギ伎倆ノ人ニ卓越セザルモノニシテ或重要ノ事項ニ就キテ科學者ノ信仰ヲ大ニ影響シタリシハ實ニ愕クベキナリ

（大尾）

## 東京動物學會記事

明治廿四年四月廿五日午後二時例會ヲ理科大學動物學教室ニ開ク箕作佳吉氏ハ爬蟲類中胚葉ノ起原ニ付キ氏カ近頃研究サレタル結果ヲ報告シ次ニ波江元吉氏ハ本年二月ヨリ四月マテ動物採集ノ爲メ對馬隱岐ヲ旅行セラレタル景況ノ大略ヲ述ベラレタリ了リテ午後四時散會

●寄贈交換書目先月中本會ニ領收シタルモノ左ノ如シ

| | | |
|---|---|---|
| 成醫會月報 | 第百十、一號 | 成醫會 |
| 大日本水産報告 | 第百七、八號 | 大日本水産會 |
| 日本蠶業雜誌 | 第三十八號 | 日本蠶業雜誌社 |
| 東京醫會雜誌 | 第五卷七、八號 | 東京醫學會 |
| 植物學會雜誌 | 第五卷十五號 | 植物學會 |
| 大日本農會報告 | 第百十七號 | 大日本農會 |
| 日本園藝會雜誌 | 第二十三、四號 | 日本園藝會 |
| 北水協會報告 | 第六十二號 | 北水協會 |
| 東洋學藝雜誌 | 第百十五號 | 東洋學藝社 |
| 擴農會雜誌 | 第二十、一號 | 擴農會 |
| 水産調査豫察報告 | 第一卷一、四、五冊 | 農商務省農務局 |
| 衞生試驗彙報 | 第六號 | 內務省衞生局 |
| 帝國大學圖書館和漢書目錄一部 全洋書目錄一部 | | 帝國大學 |
| 日本植物志圖篇 | 第一卷七集 | 牧野富太郎 |
| 北海之殖産號外報告一部 | | 勸農協會 |

キジバト ・ Turtur gelastis
カモメ Larus sp.

十八日午前九時出港シ零時五島福江港ニ達ス上陸ヲ許サズ午后四時拔錨ス

十九日午前二時對州嚴原港ニ着船ス然ルニ神戸、崎陽諸港ノ如ク彼ノ周旋家ナル者來リテ船客ヲ誘フヿナク四五名ノ仲仕ト稱フル者來リテ上陸スベキ船客ノ荷物ヲ請取リ周旋ス暫クシテ艇ニ移リ本船ヲ去ル四邊寂トシテ櫓聲高ク凍風膚ヲ犯シ殆ンド堪ヘ難シ漸ク艇ノ埠頭ニ達スルヤ彼ノ仲仕ハ荷物ヲ税關ニ運搬ス余等始メテ此地ニ到ルヲ以テ別ニ知己アルニ非ラズ埠頭ニ立ッテ四顧スレ𪜈夜色濛々トシテ更ニ地理ヲ辨ゼス税關前ハ多少雜踏スレ𪜈旅舍ヲ勸ムル手代モ見ヘズ因テ彼ノ仲仕ニ旅舍ヲ尋スレバ郵船會社支店ニ至レバ可ナラント云フノミ側ラノ者謂フ是ヨリ半町程東ニ行ケバ屋上常夜燈アリ即チ其家ナリト漸ク尋ネテ其家ニ至ル音調較異ナリ言語通セザル所アリ火ヲ乞ヒ暖ヲ執リ再ヒ税關ニ至リ荷物ノ撿査終ルヲ待ツテ仲仕ヲシテ之ヲ運搬セシム夜尚明ケズ因テ暫ラク寢ニ就ク午前八時旅宿ヲ國分町大町東屋ニ移セリ余等東京出發以來殆ンド一週間ニシテ當地ニ達ス(昔時東京(江戸)ヨリ渡航スルモノハ陸行シテ馬關ニ到リ和船ニ乘リ小倉博多壹岐等ニ風待シテ嚴原ニ達スルニ概ネ二ケ月ヲ費ヤセリト云フ)(津志滿日記)余等今採集ノ情況ヲ記スルニ當リテ本島ノ地形山川ノ位置村落ノ所在等ヲ先ツ略記セントス

諸君若シ日本國ノ地圖ヲ繙ヒテ展覽セラルヽトキハ九州肥前ノ西北ニ海ヲ隔テヽ大小二ケノ島ヲ認メラレン其小ニシテ稍々圓形ナルハ壹岐ニシテ其大ニシテ狹長ナルハ即チ對馬(津島)ナリ壹岐ハ北緯三十三度四十五分ヨリ仝五十五分ノ間ニ位シ對馬ハ北緯三十四度五分ヨリ仝五十分ノ間ニ横ハル壹岐ハ平戸ヲ去ルヿ殆ンド十一里長崎ヲ去ルヿ凡四十八里對馬ハ壹岐ノ勝本港ヨリ凡二十五里ヲ距ッ可ク朝鮮ノ釜山港ヲ去ル凡二十五里ト云フ

豐熟セルゴトクナリキ盖シ近郊ノ鳥類ハ野外ニ於テ砲聲ヲ聞キ皆ナ此森林中ニ遁レ來ルモノナランカ斯ク群聚ノ中ニ一擊ヲ試ミナバ必ズヤ數羽ヲ得ル奈ゾ難カランヤト狙ヲ定メ既ニ發セントスルニ當リ腦裡ニ轉タ疑念ヲ生シ四顧スルニ徑路ノ廣クシテ迂回セルサマ通路ノ清潔ナル……今迄經過セル森林トハ較其趣キヲ異ニス然𪜈社祠佛閣ノ境内トモ視ヘズ……頭上ニツクミノ翰飛スルヲ視レバ發砲ノ念愈々切ナリ……發センカ……否々不知案内ノ地ニ來リ猥リニ發砲シテ捉ニ觸ルヽモ好マシカラズ暫ク樣子ヲ見ント徐カニ擊鉄ヲ下シテ銃ヲ荷ヒ徑路ヲ降ル數十歩左ニ平屋アリ右ニ樓屋アリ歩ヲ進ムルニ從ヒ愈々一園中ヲ徘徊スル如キ感情起リテ遂ニ發砲ノ念ヲ止メ雷管ヲ除ヒテ降ル右ニ洋風ノ建家アリ石階アリ級ヲ拾フ數十左ニ高札アリ讀下スレバ豈圖ラン是レ當市ノ公園ナリキ其傍ラニ高島石炭ノ巨塊ヲ排置ス仰ヒテ山上ヲ瞻望スレバ諸鳥ノ鳴聲園中ニ滿チ余等ノ迂ヲ笑フ如シ午后五時旅舍ニ投ズ此ノ日採集或ハ目擊セシ者ハ左ノ如クニシテ蝶類ノ如キハ終ニ其ノ飛影ヲモ視ザリシ

| | |
|---|---|
| トビ | Milvus melanotis |
| カラス | Corvus sp. |
| スヾメ | Passer montanus |
| ジヤウビタキ | Ruticilla aurorea |
| ウグヒス | Cettia sp. |
| ルリビタキ | Ianthia cyanura |
| キセキレイ | Motacilla boarula |
| ピンズイ | Anthus maculatus |
| アヲジ | Eemberiza personata |
| ヒヨドリ | Hypsipetes amaurotis |
| アカハラ | Turdus chrysolaus |
| チヤウマツクミ | Turdus fuscatus |
| モズ | Lanius bucephalus |
| エナガ | Acredula sp. |
| シヾウカラ | Parus minor |
| メジロ | Zosterops japonica |

(六四)鋤骨ハ側蝴蝶骨ノ前端ニ當リテ口蓋骨ノ間ニ存スル小縱扁骨ナリ

(六五)涙骨(ルヽ)ハ各眼窩ノ前壁ト成リ其上緣ハ全側ノ前頭骨ト關節セル一大骨ナリ

(六六)前上顎骨(セシヽ)ハ上嘴ノ大部ヲ成セル對骨ニシテ全成ノ後ハ左右互ニ全ク相結合シ其前端ハ嘴ノ尖端ト成リテ是ヨリ次ノ三突起ヲ出ス(一)鼻突起ハ嘴ノ背側ニ於テ上後方ニ移行シ對側ノ者ト結合シテ前頭骨ノ前緣ト接續ス(二)口蓋突起ハ嘴ノ腹側ニ於テ後外方ニ移行シ全成ノ後ハ同側ノ口蓋骨ト結合ス(三)上顎突起ハ口蓋突起ノ外側ニ當リ後外方ニ移行シテ嘴ノ側緣ヲ成シ其後端ハ上顎骨ト結合ス

(六七)上顎骨(シカ)ハ上顎突起ノ後端ニ續キテ全成ノ後ハ前上顎骨ト結合ス前方ニ於テ各半側ノ內緣ハ內曲シテ海綿狀骨ノ上顎口蓋突起(シコト)ト成リ全成ニ至リテ上顎骨ト結合シ自餘ノ部分ハ甚タ細弱ナリ

(六八)頰骨(ホヽ)ハ上顎骨ノ後端ニ續ケル細小骨ニシテ全成ノ後ハ之ト結合ス

(六九)方形頰骨ハ頰骨ト同形ニシテ其後方ニ連ナリ全成ノ後ハ之ト結合シテ其後端ハ靭帶ニ依リ方骨ノ外緣ニ附着ス

(七〇)鼻骨(ヒ)ハ前頭骨ノ前緣ニ接セル長岐骨ニシテ其短小ナル外突起ハ上顎骨ニ向テ斜ニ下前方ニ擴カリ一個ノ前長突起ハ前上顎骨ノ鼻突起ノ外側ニ並行シテ前方ニ移行ス

(七一)前鼻孔ハ嘴ノ左右各側ニ存スル大孔ニシテ上部ハ鼻骨ノ內突起及ヒ前上顎骨ノ鼻突起ニ由テ界セラレ下部ハ上顎骨後部ハ鼻骨ノ外突起ニ由テ界セラル

(七二)新鮮ナル標品ニ於テハ中篩骨ノ前端ニ鼻中隔ト名ツクル軟骨板アリテ上嘴ノ先端ニ至リ以テ鼻腔間ノ縱壁ヲ成シ而シテ其左右ヨリ甲介骨ナル螺狀ノ軟骨體ヲ突出ス

第九項　下顎ニ就テ撿スベキモノハ

(七三)下顎骨ノ兩半ハ全成ノ後其中央線ニ沿テ互ニ密着

本島ノ地形ハ南北ニ長ク東西ニ狹ク周圍ニ港灣多シ其大ナルモノハ淺海灣ニシテ西岸ヨリ深ク陸地ニ入リ殆ンド全島ヲ横斷ス故ニ宛然二島ニ分レ唯大船越ノ地狹ニ因テ僅カニ相連續セリ然ルニ寛文十二年此地狹ヲ開鑿シ東海ニ通シ以テ船舶ノ往來ニ便ス其間八間許ニ過ギスシテ滿潮ノ時ハ和船ノ通行容易ナレモ干潮ノ時ハ徒歩シテ通行スルヲ得ルナリ此處ヲ大船越ノ瀨戸ト云フ開鑿セザル以前ハ此處ニ一小丘アリテ州人ノ小舟ニ乘シ東西ニ往來セントスル者ハ此處ニ至リ舟ヲ下リ物ヲ負ヒテ之ヲ運ビ虛舟トナシ之ヲ引キテ小丘ヲ越ユ故ニ船越ノ名アリト云フ(津島紀略)淺海灣ノ北ニ在ル島ヲ上島ト稱シ其南ニ在ルヲ下嶋ト稱ス地勢ハ山脈種々ニ斷續スレモ概シテ東西ニ走リ到ル處山嶽起伏シ平地甚タ稀ナリ著シキ高峯ナキモ傾斜鋭キタメ峻坂多シ下島ニ於テ最モ高キハ矢干(立)山久根内山ノ間ニ在リニシテ有明山厳原ノ西ニ在リ龍良(タテラ)山豆酘與良ノ間ニ在リ白嶽賀志、洲藻、佐須ノ間ニ在リ等之ニ次ク上島ニ最モ聳ユル高峯ハ三岳(御嶽)佐護、伊奈ノ間ニ在リニシテ大星山三根ノ東北ニ在リ神山小鹿、志多賀ノ間ニ在リ紺(金)青嶽大船越東北ニ在リ等之ニ次キ其他名アルモノ尚數峯アリ

全島ニ溪流甚タ多シ然レモ大河ヲ成サス名稱アルモノヲ擧クレバ上島ニ佐護川仁田川三根川アリ下島ニ瀨川、小茂田川アリ此五川ハ悉ク西海ニ入ル

上下二島ヲ二郡トナス上島ノ北部大半ヲ上縣郡ト稱シ上島ノ南部淺海灣沿岸ヨリ下島ヲ下縣郡ト稱ス村落ハ概ヲ沿岸ノ谷間ニ在リ上縣郡ニ屬スルモノ四十五ケ村下縣郡ニ屬スルモノ六十四ケ村アリ

(ツヾク)

## ●動物解剖手引草(鳥類ノ部)(承前)

岩川友太郎

(六一)翼狀骨(第二圖ヨ)ハ頭蓋ノ基底ニ存スル一對ノ短強骨ニシテ各自同側ノ方骨ノ内面ニ存スル關節面ト關節シ内前分ニ移行シテ基底翼狀突起ト關節ス(四九ヲ見ヨ)

(六二)口蓋骨(コイ)ハ翼狀骨ノ前端ニ接續スル一對ノ大骨ニシテ其後端ハ螺狀ヲ爲ス前端ハ細クシテ雛ノ時ニハ遊離スレトモ全成ノ後ハ上顎骨ト結合ス

楕圓孔ヲ存シ此孔ハ新鮮ナル標品ニ於テハ膜ヲ以テ閉塞セリ

(八二)劍狀外突起ハ內突起ヨリ稍々大ナルノミ之ト同形ニシテ胸骨体ノ前端ト內突起ノ起始部トノ間其中程ニ當リ胸骨体ノ側縁ヨリ後外方ニ突出セリ

(八三)肋側縁(Costal border)ハ外突起ノ前方ニ當レル胸骨ノ外縁部ニシテ前方ニ突出シテ肋突起トナリ以テ胸肋骨ノ爲ニ四個ノ關節面ヲ具フ

(八四)劍柄(Manubrium)ハ胸骨体ノ前縁ヨリ發出スル中央ノ圓小突出部ナリ

(八五)氣囊孔(Pneumatic aperture)ハ胸骨体ノ前縁ヲ距ル一「センチメートル」許ニシテ胸骨体ノ背面ニ開在セル一小孔ナリ鎖骨間氣囊(一六四ヲ見ヨ)ハ此孔ニ由テ胸骨ノ內部ニ存スル空隙ト交通シ而シテ胸骨ヲ光線ニ向テ透視スレハ此空隙ハ透明ナル薄弱ノ網目狀ヲ呈ス

(八六)烏喙骨溝(Coracoid grooves)ハ胸骨体ノ前縁ニ存スル一對ノ深窩ニシテ劍柄ノ腹面ニ存スル正中線ノ邊ヨリ肋突起ニ向ヒ外後方ニ擴張ス

(八七)龍骨突起(Keel)ハ劍柄ノ礎部ヨリ劍狀中突起ニ至ルマデ胸骨體ノ腹面中央線ノ全長ニ沿走セル縱扁隆起ニシテ其深サハ胸骨體ノ幅ト殆ット同一ナリ

(八八)大凡三四週間ヲ經過セル雛ノ胸骨ハ三個ノ獨立骨ヨリ成レリ即チ胸骨體及ヒ龍骨突起ノ基礎ト成ルベキ中央ノ一片(Lophosteon)ト胸骨ノ側部ト成ルベキ左右ノ二片(Pleurostea)是レナリ

第十二項　肩帶ニ就テ注目スベキハ

(八九)烏喙骨ハ其横扁セル下端ニ由テ胸骨ノ烏喙溝ト關節シ上前兼外方ニ移行セル一對ノ柱狀骨ニシテ各々上方ヨリ下方ニ向テ稍々壓平セラレ而シテ其上端ハ厚強ノ骨頭ヲ成セリ其背側ニ於テ骨頭ノ直下ニ肩胛骨ト關節スベキ二個ノ關節面ヲ存シ之ト水平ヲ成セル內側ニ叉骨頭ヲ受容スベキ一個ノ關節面ヲ存シ又其外縁ニ半月形ノ大ナル關節面アリテ翼骨ト關節スベキ關節窩(Glenoid cavity)ノ前半部ヲ搆成セリ烏喙骨上端ノ內側ニ一條ノ溝アリテ

ス

(七四)下顎各側ノ後半部ハ獨立ノ骨ニシテ凹凸不平ノ縁邊ニ由リ前半部ト接着ス雛ノ時ニハ此骨ハ更ニ三骨ヨリ搆成セリ(一)强大不正形ノ關節骨(カ)ハ方骨ニ關節面ヲ供シ前方ニ延長シテ細弱ナルメッケル氏軟骨(Meckel's cartilage)ヲ成ス(二)角狀骨(カク)ハ一ノ楔狀骨ニシテ關節骨及ヒメッケル氏軟骨ノ腹面ヲ被覆ス(三)上角狀骨(カキ)ハ上側ニ在リテ同前ノ關係ヲ有ス

(七五)下顎各半ノ遊離端ノ内面ニ脾狀骨(Splenial)ト名ツクル細小骨アリテ全成ノ後モ尙ホ獨立シ遊離端ノ其他ノ部分ハ齒骨(Dentary)(シ)ヲ成セリ

### 第十項　舌骨ニ就テ

(七六)舌骨体ハ下ノ三部ヨリ成レリ第一ノ舌硝子部(Glosso-hyal)ハ軟骨質ニメ鏃ノ如キ形狀ヲ成シ第二ノ底硝子部(Basi-hyal)ハ短小骨ニシテ前端ハ舌硝子部ト關節シ後端ハ軟骨ニ由テ第三部ト分界セリ第三ノ基底鰓部(Basi-branchial)ハ細キ桿狀骨ニシテ其遊離端ハ軟骨ヲ以テ終レリ

(七七)前角ハ一對ノ短小ナル桿狀軟骨ニシテ舌硝子部ノ後端ヨリ矢ノ羽ノ如ク後外方ニ擴張ス

(七八)後角ハ底硝子ト基底鰓ノ間ノ軟骨部ヨリ發出スル一對ノ桿狀体ニシテ後外兼上方ニ屈曲シ各々初部ノ角鰓骨(Cerato-branchial)ト末部ノ上鰓骨(Epibranchial)トヨリ成リ此二骨ハ共ニ小桿狀ニシテ上鰓骨ノ末端ハ細尖ノ軟骨ヲ以テ終レリ

### 第十一項　胸骨ノ形質ニ就テ檢スベキハ左ノ如シ

(七九)胸骨体ハ水平ナル船底狀骨ニシテ其左右両半ハ互ニ傾向シテ一鈍角ヲ形成ス之ヲ横胸角(Transverse sternal angle)トイフ

(八〇)劒狀中突起ハ一個ノ狹小ナル中扁体ニシテ胸骨体ノ後端ヲ成セリ

(八一)劒狀内突起ハ胸骨体ヨリ外後方ニ向テ突起セル一對ノ扁体ニシテ中突起ノ礎部ヨリ起リ狹小ナル骨橋ニ由テ其後縁ト結合シ斯シテ中内両突起ノ間ニ二個ノ大ナル

又曰ク「往年(明和ノ始ニヤ有ケン)仙臺ニ在リシキ蒲生濱ニテコノ鳥ヲ鳥銃ニテ打殺セシヲ見シコトアリ、形天鵞(ハクテウ)ヨリ稍大クメ頸長ク毛羽灰白ニメ蒼ヲ帶ビ、翼黑ク、嘴鶻鷲ニ似タリ嘴端下ニ曲ル、其色黃、脚又黃、短クメ蹼アルコト天鵞ノ如シ、喉ニフクロ有、魚ヲ蓄フト云フ、水ヲ容ルコト二三升、容ル丶ニ隨テフクロノ皺ノビテ張大ナリ、翅長ク磬折セルサマ蝙蝠ノ羽ノ如シ、唐山ノ鳥ナレドタマ〳〵吾邦ニモ來ルコトアリト見ヘテ其後文化十二年八月豐前ノ國臼杵(ウスキ)海部郡搔懷郷障子岩川ニテ藩士何某ガ鐵砲ニテ獲タリト云ヲ見シガ形狀前ニ云フ所ノ如シ、コノ翅ノホロヲ羽箒トナシテ玩好ス茶家おほとりノ羽ト云フモノ是也其色蒼褐ニテ緣稍白シ」云々、又同書中芳齊禽譜摘要トテ記スル所ヲ見ルニ曰ク「全身灰色頭背尾ニ淡黑ノ生アリテ翅羽ハ黑シ嘴ハ長クシテ廣ク青黃ニ紫ヲ帶ビタリ、頷下ニ胡アリ、數升ヲ受ル囊ノ如シ魚蝦ヲ水ト共ニ呑テ後水ヲ吐テ魚蝦ヲノミ食ス脚ハ淡黃黑ニシテ蹼アリ大サ鸛ニ三倍ス」云々○重訂本草綱目啓蒙四十三卷ニ曰ク江州攝州ニ偶來ル城州淀川ニモ來ルコトアリ、京師ニテハ每々觀場(ミセモノ)ニ供ス」云々右ノ他ニモぺりかんヲ記スル書アルベケレド此鳥ノ九州ヨリ奥州マデモ稀ニハ來ルコトアルハ充分明ナリ、去レバ學術上ノ種名如何ニト云フニ實物ヲ見ザレバ確カトハ解ラヌド多分歐洲產ノ Pelecanus onocrotalus 若クハ P. crispus ニテハ非ザルベシ、北支那ニハ左ノ二種アリト云ヘバ日本ニ來ルハ其中一ナランカ或ハ雙方共ニ來ルヤモ勿論計リ難シ

1. Pelecanus mitratus, *Licht.*

殆ド純白色ナルモ少シク淡紅ヲ帶ビ、胸ノ邊黃ナリ、但シ幼鳥ハ異ナリタル色ニテ脊腹共ニ灰色ナリ、老幼共ニ翼ハ黑褐色、頭上ノ羽長シ、嘴ハ灰色ニテ赤黃ノ點アリ(?)、喉囊青色ヲ帶ビ(?)脚ハ肉色ナリ(?)嘴ノ根基ナル額羽ノ生際(ハヘギハ)鋭角ヲナセリ、體ノ全長百六十センチメートル許

2. Pelecanus philippensis, (*Briss.*)

銀灰色ニシテ多少淡紅ヲ帶ブ下面ハ白ク同ク淡紅ヲ

骨頭ノ上面ニ當リ肩胛關節面ノ間ニ開在セル管口ニ續キ以テ鎖骨下筋(三二六ヲ視ヨ)ノ腱ヲ通過セシム此管口ハ肩胛骨及ヒ叉骨ト烏喙骨トノ關節ニ由リ完成スル者ニシテ之ヲ三骨孔(Foramen triosseum)トイフ

(九〇)肩胛骨ハ同側ノ烏喙骨ト不動的ニ關節セル劒狀骨ニシテ烏喙肩胛角ト名ツクル稍々鋭角ヲ成シ以テ肋骨ノ上後方ニ移行シ其上端ニ二個ノ關節面アリテ烏喙骨ト關節シ其外縁ニ半月形ノ大ナル半月形ノ關節面アリテ關節窩ヲ形成ス

(九一)叉骨(Furcula)ハv字形ノ骨ニシテ其上端ノ外側ニ存スル一關節面ニ由テ同側ノ烏喙骨ニ存スル關節面ト相接シ後下方ニ移行シテ其下角ハ靭帶ニ由テ胸骨隆起ト結合セリ

(九二)雛ノ叉骨ハ特立セル一對ノ鎖骨ト其中間ニ存セル一小骨(鎖骨間骨Interclavicle)トヨリ成レリ　(ツヾク)

## ●鳥雜記(一)

飯島魁

○ぺりかん　本誌前號ニ此鳥ニ付キ渡邊氏ノ記載アリタレバ聊カ余ノ諸書ニテ見知レル所ヲモ記シテ參考ニ供ス、和名ヲがらんてう又ハこんがらてう又ハゑびすみひ又ハおほとり又ハなつとり又ハれんどてうト云フ由ニテ享和ノ頃薩州ノ御鳥方ヲ勤メシ比野勘六ト申ス人養禽物語中ニ曰ク「總羽薄白ニテ鳥ノ形白鳥ニ似タリ至テ大鳥、咽ニ袋アリテ海中ニテ魚ヲ餌ニシ雜魚鹽水トモ呑喰、咽ノ袋ニ入レ、魚計ヲ呑込ミ鹽ヲバ後チ吹出ス、嘴大ク長ク、……袋ニ水五六升モ入ルホドアリ、……足短ク水カキ有、モットモ南海ノ荒海ニ住鳥」○文化年中水戸ニテ有名ノ本草家佐藤平三郎先生ハ飼籠鳥第十六巻ニ曰ク「先年華舶持來ル又西海ノ沖ニ稀ニ來ルヿアリ」云々○觀文禽譜ニハ和漢ノ名稱ヲ擧ゲタル後曰ク「東海ニ來ルヿアリ、仙台ニテ寶暦ノ末親シク觀ル」トアリ○東京ナル帝國博物館ニ田中芳男先生ノ編輯セラレシ類聚禽譜トテイト貴重ナル原稿アリ、其第九巻中ニ「大キク恐ロシゲナル鳥ナレバ俗ニ伽藍、矜羯羅ナド名ケシナルベシ」トアリ

白ナル名稱ハ琉球ニ普通ナル Zosterops palpebrosa nicobarica ニ當テ而シテ大目白(或ハ島目白)ナル名ヲ Z. stejnegeri ニ充ツルコトセバ大ニ錯雜ヲ防グコト思ハル、ナリ

今余ノ眼前ニ在ル二個ノ大目白標品ハ帝國博物館所藏ニテ一ハ波江氏三宅島(八十七年五月三日)ニ於テ、一ハ岡田氏伊豆大島(八十七年四月十八日)ニ於テ獲ル所ナリ、一見シテ全身殊ニ觜ノ內地產尋常ノ目白ニ比シテ大ナルヲ知ル、左ニ比較ノ爲メ寸方ヲ掲ク

| | 翼長 | 尾羽ノ長サ | 走脚 | 中趾(爪共ニ) | 觜峰 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大目白(三宅島) | 六一、〇ミメ | 四五、〇ミメ | 一九、〇ミメ | 一四、五ミメ | 一三、三ミメ |
| 同(大島) | 六一、〇ミメ | 四五、〇ミメ | 一九、〇ミメ | 一六、〇ミメ | 一四、〇ミメ |
| 東京產尋常目白一標品 | 五九、五ミメ | 四三、〇ミメ | 一八、〇ミメ | 一四、〇ミメ | 一〇、〇ミメ |

大サノ外大目白ノ尋常目白ト異ナル點ハ甲ニテハ胸腹側部ナル灰茶褐色ノ乙ヨリモ一段淡キコトナリ、且又甲ニテハ眼前及ビ眼下ニ黑羽ノ在ルコ乙ニ於ルヨリモ澤山ナリ

序ナガラ余ノ所謂琉球目白(目錄ノ三十三番)ノ形質ヲ記サンニ尋常目白ト同ジ樣ナレド体ハ稍小ナリ、即チ今余ガ眼前ニ在ル八重山島產ノ一標品ニ就キ測ルニ、翼ノ長五五ミメ、尾ノ長四〇ミメ、走脚一七ミメ、中趾一五ミメナリ、然ルニ觜ハ同大ト云ハンヨリモ反テ少シク長(一〇、五ミメ)且太シト云ヒ度キ大サナリ、腹側ハ茶色ヲ帶ブルコ甚ダ少ナク殆ト全ク灰色ナリ、此點ニ於テハ大目白ト差シタル違ヒナキガ如シト雖モ觜及ビ全體ノ大サニ於テ著シク異レリ、此種琉球ニテハ雀ニ尋テ澤山ナル鳥ナリト云フ

是モ序ナガラモ一ツ書キテ置キテ本邦鳥學家ニ質シ度キコアリ、ソハ養鳥家ノ所謂朝鮮目白ニテ、是レハ啻ニ目白ノ變リモノナル哉或ハ一特種ナルヤ、飼籠鳥八巻ニ曰ク「秋に至りて目白と群を同して數百來る內に希に一首出るとあり、其形狀別して異る事なし只翅の裏悉く青(?)色なるを以て異りとす」ト甚ダ不充分ナル記載故ニ辨識シ難シ又類聚禽譜ニ朝鮮目白ノ一節アリ曰ク「諸事和ノ目白ニ似テ奇麗ナリ……脇腹ニカキ色ノ毛アリ」云々、此

帶ベリ但シ幼鳥ニテハ灰褐色ナリ、翼ハ黒褐色ヲ交ユ、嘴ハ黄灰色(?)、喉嚢ハ赤シ(?)、脚ハ黒シ(?)、頷ノ羽ノ生際ハ直線ナルカ或ハ少シク凹メリ、頭及ビ頸ノ羽ハチヂレテアリ、大サ前種ニ等シ此種ハ支那海岸及ビ大河ニ普通ナリト云フ

右二種ノ記載中疑ハシキ所尠カラス宜ク其ツモリシテ用ヒラル丶ベシ、渡邊氏ハ P. conspicillatus ノ事ヲ申サレタルガ余ハ此名種ノ濠洲邊ニ産スルヲ覺ヘ居ルノミニテ今差當リ何書ニ記載シアルヲ發見スル能ハザレバ言フベキヿナシ、同氏ハ又眼ノ周圍ニ羽毛ノ有無ノヿヲ述ベラレタルガ余ノ常々心得居ル所ニテハ此部ハドノぺりかん種ニテモ裸出スル樣ニ思ヘリ」がらんてうノ學名ノ定カナラザル間ハ氣懸リニ堪ヘズ好鳥家ノ注意アランヿヲ希望スルナリ

○大めじろ　本誌前號ヨリ掲出シ始メタル余ノ編纂ニ係ル日本鳥目錄中三頁ニ大めじろ (Zosterops stejnegeri, Seeb.) ヲ脱セリ、即チ刊行後ニ始メテ實物ヲ見且ツセーボーム氏ノ此種ニ關スル說ヲ讀ムヲ得タルガ故ナリ、請フ讀者ハ彼ノ目錄中34ニ次ギ34½ノ番號ニテ此種ヲ書入レラレンヿヲ

抑モ大めじろ一名しまめじろノヿハ兼テヨリ聞及ビタル所ニテ吾邦ノ籠鳥家ハ古クヨリ差別シ居リタルモノ丶如シ關東地方ニテモ稀ニ取レルヿアリトハ或老練ナル捕鳥家ノ話ナリ、佐藤氏飼籠鳥(カヒコドリ)八巻ニ琉球目白一名嶋目白、大目白ト題シテ曰ク「琉球の山南に産す其形尤も大にして一體形も異り第一其目至て大なり、其鳴く聲も高く面白し此說は八丈嶋其外南島には却て産す、是を大目白と云と薩州の某琉球に至り親しく見て來るなり又八丈の人も此說のとし、豆州の邊には八月頃天氣續て後十月暖氣なれば彼の南島をぶん〳〵傳へて日本の地方へも來る、是も其時の時候に誘れて稀に來るなり、常ニ渡り來るものに非ず、是奇品なり」云々

此說ニヨレバ琉球ヨリ伊豆七島ニカケテ同一種ノめじろヲ産スル樣ナレド恐ラクハ誤ナルベシ、何ニセヨ琉球目

Dürkheim 及ビ van Bededen ノ説ヲ擴張セリ、蜘蛛類ノ中ニテすこるぴおんガかぶとがにニ最モ近シト云ヘリ、而ノ外殼、環節ノ數等ヨリ諸種ノ附器、內部ノ器官等ニ至ルマデ一々相同ナルコヲ述ベタリ。此論ハ大膽ナルヲ以テ種々ノ批評ヲ受タリ、又其故ニ有名ナリ。一八八二年ニ Packard ハ早速 Lankester ノ論文ヲ批評シテ之ニ反對ノ意見ヲ述ベタリ。一八八五年ニ Kingsley ハかぶとがに發生ヲ截切法ニヨリテ研究シテ Lankester ノ説ヲ賛成セリ。一八八六年ニ甲殼類專門ノ Claus ハ何故ニカ大ニ後レテ Lankester ノ説ヲ評シ隨分ヒドク攻擊セリ、かぶとがにヲ蜘蛛類中ニ置クニハ賛成セザレモ之ト親密ナル關係アルコハ許ス。一八八六年ヨリ翌年ニ至リ Lankester ト Claus ノ二人久シク互ニ攻擊シタリシガ遂ニ其是非ノ何レニアルカハ世人ノ判斷ニ任ストシテ止ミタリ。

予ノ蜘蛛發生ノ研究ヲ終リタル後かぶとがに發生研究ヲ思ヒ立チタルハ、一ハ出來ルナラバかぶとがにノ分類上ノ位置ヲ確定センタメ、又一ハ今日マデ誰モ手ヲツケザリシ本邦ノかぶとがにノ發生ノ模樣ヲ取調ベンガ爲ナリ。此研究ニ從事シテヨリ殆ンド滿二ケ年、此間ニ得タル事實ハ時々本誌ニ掲載サル、ノ榮ヲ得タリ、今研究ノ結果ニヨリ發生ノ概畧ヲ窺ヒ得、之ヲ根據トシかぶとがに分類上ノ位置ニ就キ予モ亦一己ノ意見ヲ抱クコヲ得テ當初ノ希望ノ幾分カヲ遂ゲタリ。

予モ亦かぶとがにハ蜘蛛類ニ非常ニ能ク似タルコヲ知ル、然レモ大切ナル點ニ於テ異ナル所多シ、其差異ハ左ノ如シ。

かぶとがに及ビ甲殼類ハ複眼ヲ有スレモ蜘蛛類ハ之ヲ欠ク。前者ノ口孔ハ數對ノ附器ニ因ッテ圍マレ居レモ後者ノ口孔ハ二乃至三對ノ附器ニテ圍マル。前者ノ步行用附器ハ Carpodite ヨリ先キハ三節ニ分タル、然ルニ後者ニテハ四節ニ分タル（かぶとがに第六對ノ附器ハ蜘蛛類ノモノヽ如ク四ニ分タル）。後者ニハまるぴぎ管ト稱スル排泄器アリテ營養管ノ後部ニ開ケモ前者ニハナシ。前者ハ概子水中ニテ呼吸ヲ營メモ後者ハ皆空氣中ニテ呼吸

脇腹ノ色ヨリシテ考フルニ支那ニ產スル Zosterops erythropleurus, Sw. ニテハ無キヤトノ感ヲ起セリ、果シテ然ラバ此レヲモ日本鳥ノ中ニ加ヘザルベカラズ、此種ハ即チ尋常目白ニ彷彿タルモ腹側栗色(暗茶褐色或ハカキ色ト云フモ可ナラン乎)ナリ、朝鮮目白ノヿハ實ニ本邦鳥學家ノ探究スベキ一問題ナリトス

## ●かぶとがにノ分類上ノ位置ヲ論ジ、單眼、複眼ノ關係ニ及ブ

岸上鎌吉

節肢動物ノ諸類ハ相互ニ如何ナル關係ヲ有スルカ、又ろぶとがにハ節肢動物ノ何類ニ屬スルカハ昔ヨリ隨分ヤカマシキ議論アリ。一八二九年出板ノ Meckel 比較解剖學ノ佛譯書中ニ Straus Dürkheim ノかぶとがにハ蜘蛛類ニ編入サルベキモノタルヿヲ記入シアルト云フ、是レかぶとがにト蜘蛛類トノ關係アルヲ述ベタル最初ノ人ナリ。一八六九年ニ Huxley ハかぶとがにハ太古ヨリ顯ハレタルすこるぴおんニ能ク似タリトノ意見ヲ公ニセリ。一八七一年ニ Ed. v. Beneden ハ「節肢動物中カブトガニの位置」ト題シテべるぎー昆蟲學會ヨリ出板セリ、而シテ其論旨ハかぶとがにハ甲殼類中ニ置カルベキモノニ非ズ蜘蛛類ニ屬スル動物ナリト云フニアリテ自ラ研究シタル發生學上ノ事實(未ダ此事實ヲ別ニ公ニセズ)ヲ論據トス、則チ發生中のーぷりあす期モさいくろっぷす期モナキヿヲ以テ甲殼類中ニ置クヿニ反對スル眼目トス。又かぶとがにハとりろびたニヨリモすこるぴれんニ近シトノ說ヲ持ツ。一八七一年ニ Dohrn ハゑな博物學雜誌ニかぶとがに發生ノ記ヲ揭ケテ終リニ其位置ニ就テハ大甲類(Gigantostraca)ニ最モ近ク大甲類ト共ニとりろびたニ似タリト云ヘリ、然レ𪜈甲殼類及ビ蜘蛛類トハ如何ニ關係スルヤニ至リテハ一向言ハズ甚ダ曖昧ナリ。一八七二年ニ Packard ハ發生ノ研究ヨリかぶとがにハ甲殼類ニ屬スモノタルヿヲ論ジタリ。一八八一年ニ Lankester ハかぶとがにハ一種ノ蜘蛛類ニシテ甲殼類ニ非ザルヿヲ詳論シ

Lankester 及ビ Bourne ノ兩氏成長セルすこるぴおん及ビかぶとがにノ眼ヲ研究シテすこるぴおんノ側眼ハかぶとがにノ複眼ノおんまちゃあ（複眼造構上ノ原素）ノ數ノ減ジテマバラニ並ビ居ルモノタルコヲ云ヒ初メテ單複兩眼ノ眞ノ關係ヲ發見セリ。然シ此論文ノ公ニナリテヨリすこるぴおん、くも、かぶとがにノ發生ヲ研究セシモノ多クアレドモ皆前ノ二氏ノ說ニ極メテ大切ナル發生學上ノ證明ヲ與ヘザリシ。予近頃蜘蛛類副眼ノ發生ヲ再ビ檢セシニ三對共同ノ一ツノ表皮深厚ヨリ起ルコヲ知レリ、此深厚ニハ初メ淺キ窪ミアリ、此窪ミ後ニ消失シテ其表皮深厚ノ中三ケ所ニ細胞他所ノモノヨリ形大ニナリテ各所ニ一ノ特別ナル細胞塊ヲ作ル、後ニ此細胞塊ノ上ニ陷入生ジテ副眼ヲ作ルナリ、此事非常ニ面白キコナリ、蜘蛛ノ副眼ノ發生ハかぶとがにノ複眼ノおんまちゃあノ發生ニ似タレバナリ。

予ハ蜘蛛類ノ單眼（主眼ヲ除ク）ノかぶとがにノ如キ祖先ノ複眼ノおんまちゃあノ別々ニナリテ變化シタルモノナリト考フ、此變化ハ蜘蛛類ノ生活ノ先祖ノモノヨリ變化セシニ因ルナラン、自ラ奔走シテ食餌ヲ求ムルモノガ暗キ所ニ住シ己レニ近ヅクモノヲ食餌ニスル樣ニナリ、遠方ヲ見ル代リニ近キ所ヲ見ル必要起リ其爲ニ眼ノ造構ニ變化ヲ生ジタルナリ。

予ハ單眼ハ複眼ノおんまちゃあト相同ノモノニシテ、複眼ニ相同ニ非ズ又複眼ハ單眼ノ集マリテ出來タルモノニ非ズト信ズ。

副眼又側眼ノ數ノ一定セズシテ二對乃至八對ノ多キアリ又老大ナルモノニテハ此等ノ眼ノ位置相距タリ居ルモ幼少ナルモノニテハ互ニ密接セル等ノ事實ハ予ノ說ヲ助ク。Parker ノ研究ニカヽル側眼發生ノ圖ヲ見ルニ五對ノ側眼只一對ノ表皮深厚ヨリ生ズルコ判然見ヘタリ。

## ●理科大學標本日本頭脚類目錄（第六回）

池田作次郎

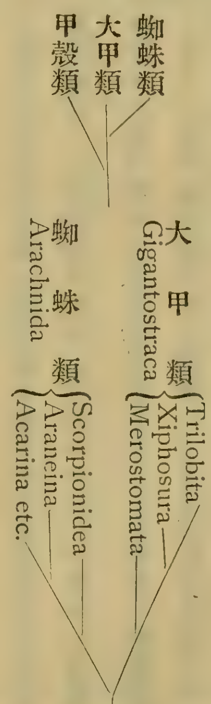
左ニ記スくらげだこ。及ビべにいかノ二種ハ共ニ前

ス。前者ニテハ發生中卵黃ハ体ノ前方ニ最モ多ク且ツ久シク殘リ居レ𪜈後者ニテハ後方ニ最モ多ク且ツ久シク殘リ居ル。後者ニテハ毎環節ニ一對ノ体腔生ジテ足ノ中迄ヘモ入込メ𪜈前者ニテハ然ラズ。

かぶとがにト蜘蛛類ト相似テ甲殼類ヨリ異ナル點ハ、發生中のーぷりわす期ノナキト、腦及ビ視神經ノ各々頭部ノ表皮深厚ノ一對ノ溝ヨリ生ズルト、第一對ノ附器ノ他ノ附器ニ後レテ生ズルト、中胚葉ノ二所ヨリ生ズルトナリ。

以上ノ諸點ヨリ考フルトキハかぶとがにハ甲殼類トハ異ニシテ蜘蛛類トモ同ジカラズ、而シテ兩類ニ共ニ似タル點アリ、而シテ甲殼類ト蜘蛛類トハ大ニ異ナレリ、故ニかぶとがにヲ甲殼類ノ附屬トスレバ蜘蛛類トノ關係餘リ遠クナル樣ニ思ハレ、蜘蛛類トスルモ亦之ニ附屬トスルモ共ニ同ジク面白カラズ、局外中立ノ有樣ニ置クヲ良策ナリト考フ。

昆蟲類、百足類、有爪類等トハ Claus ノ說キタル如ク餘程關係遠キモノナルベシ。予ハ甲殼類、大甲類(かぶとがに、とりろびた等ヲ含ム)蜘蛛類ハ左ノ如キ關係ヲ有スルモノト信ズ。




是レ迄ノ學者ハ兎角 Xiphosura ト Merostomata トヲ近ヅケ Trilobita ヲ遠ザケタリ、然シ予ハ反對ナリ。

予ノ知ル所ニテハ是レ迄單眼複眼ノ關係ヲ充分明ニシタルモノ無キガ如シ、或ハ兩種ノ眼ハ兄弟分ニメ親子ノ關係ハ無シト云ヒ、則チ其起原ハ同一ナレ𪜈一方ノモノヨリ他ノモノヽ變ゼシト考ヘヌナリ(Grenacher等ノ說)、或ハ複眼ハ單眼ノ數多集合セシモノナリト云ヒ、或ハ複眼單眼共ニ形態學上同一ノ價値ノモノニテ只 Lens ヲ數多持ツト只一ツ持ツトノ差ナリト云フモノアリ (Patten等ノ說)。孰レモ其說ク所皆尤ラシク聞ユレ𪜈能ク味フトキハ共立論ノ基礎充分ナラズメ孰レモ疑ハシキ所アリ。只

リテ巾ハ大概子三四せめ位也唇膜ハ内外ノ二枚アリテ外ナル方ハ甚廣濶ニシテ且ツ不分明ナレ𪜈一種軟骨様ノ板帶ヲ以テ保持サルヽ所ノ突起七個ヲ有ス内唇ハ亦タ廣クシテ可ナリニ厚ク宛モ口外ニ垂レ懸リ居ル者ノ如ク見ユ其内面及ビ外套膜ノ遊離縁即チ前端ノ體ト相離ルヽ所ノ内面ハ共ニ黒紫色ニシテ甚ダ美麗也觸脚ハ全ク破損シテ其完形ヲ見ルコト能ハサレ𪜈破損セザル腕脚ハ何レモ皆ナ二列ノ吸盤ヲ有ス吸盤ハ概形殆ンド球ルクシテ圓柱形ノ柄ノ上ニ在リ總シテ小サシ第一脚ノ吸盤ハ特ニ小サシ然レ𪜈第三及第四脚ノ中央部ニ附着スル者稍ヤ大也腕脚吸盤ノ角質環ハ盡ク其前半縁ニ於テ互ニ密接シ居ル所ノ捌牙六個乃至八個ヲ有ス背甲有ル哉無キ哉未ダ之ヲ詳ニセズ果シテ欠除スル者ナル歟此種はいれー氏ノちやれんじやニ載スひすとぷしす、ほむれー（Histopsis Hoyle, Chall. p. 180-183）ニ漸カ相似タル點無キニ非レ𪜈果シテ同一種トモ思ハレザルナリ

Family, Onychoteuthidæ.

genus, Onychoteuthis.

**Onychoteuthis** *sp.* （べにいか）

標本(二十五個内十個ハ英國ニ送ル) 本年二月十六日房洲西岬ニテ獲タル者坂本福治ヨリ買上ゲ二十五個共皆ナ殆ンド同大同狀ニシテ標本甚ダ完全也體形長卵形ニシテ尾端ハ鋭ク尖リ居レバ外見一寸本邦在來ノ漏斗ヲ少シク扁平ニシテ見ル如シ肉鰭ハ割合ニ大キク體後端凡ソ二分一ヲ占ム其前縁ヨリ肉鰭全長ノ大畧五分ノ二位入リタル處ガ巾最モ廣ク復タ急ニ狹バマリテ漸々尖リ末端遂ニ鋭角ヲ爲ス而シテ其前縁ノ體側面ト相接續スル處ハ一直線ニ切リ込ミ居レバ兩半肉鰭ノ前縁各側端ヨリ入ルコト大凡ソ三分二程ノ處ニ直角ノ二分三位ノ角度ヲ爲ス也外套膜前縁即チ遊離縁ハ其背面ノ中央線ニ當ル處稍ヤ尖リ居テ前方ニ突出ス其直下ニハ軟骨様ノ縱起アリテ後頭背面縱溝ニ嵌リ込ム可シ而シテ其腹面ノ前縁ハ廣ク丸ルク入リ込ム也呼出水管ハ圓筒形ニシテ短ク二個ノ肉帶ニテ保持サル其基部兩側ニハ各一個ノ長溝アリテ外套膜ノ軟

號さろてゅうーす、べらにーノ次するめいか科ノ前ニ書ス可キ者ニテ之アリタレ𪜈くらげだこハ相惡ク肝腎ノ手扣帳ヲ理科大學ニ置キ忘レ遂ニ其間ニ合セ兼ネタル儘思ナガラ順載スルヲ得ザリシ又べにいかハ前號原稿差出シタル後ニテ手ニ入リタル者故ニ並セテ此處ニ追記ス看ル人夫レ之ヲ諒セヨ

genus, Histoteuthis, (*Verrany*).

**Histoteuthis**, *sp.*　（くらげだこ）

標本（一個）　廿二年四月四日坂本福治ヨリ買上グ房州よしはまノ産ナリト云フ標本甚ダ不完全ナレバ雌雄其何レナルヤサイモ判シ兼ヌル次第ナレバ詳細ノ點明記シ得ザレ𪜈左ニ此標本ニ付キ余ガ見ル所ヲ示ス可シ但シ此者其名ノ表ス如ク體軀甚ダ柔軟ニシテ之ヲ其儘完全ノ形ニテ捕獲スルコト仲々出來易カラズト云フ福次ノ言ニ捕獲シテ暫時水外ニ置カバ漸々消却ス可シ云々まさか差程トモ思ハレザレ𪜈何ニシロ薄弱ノ者ニ相違ナカル可ク見受ケラルヽ也

体形稍ヤこつぷノ如ク尾端ハ尖リ居ラズ外套膜ハ甚ダ厚ク其前緣ハ殆ンド一直線也呼出水管ハ差程長カラズシテ巾廣ク其基部兩側面ニハ延長シタル隆起ヲ有ス外套膜內面ノ之レニ相當スル處ニ延長シタル凹部アリテ之レト相結合ス可ク見ユ體長十八せめ巾九せめ位也肉鰭ハ形殆ンド球形ニシテ長サ六せめ巾左右通計セバ八せめ位也而シテ其相合スル處前後兩端共少シクくびれ込ミ居ル也頭部寧ロ小サケレ𪜈眼球ハ大ニシテ頭冠（Crown）モ甚ダ大也脚ハ稍ヤ四角形ニシテ基ハ太ケレド末端ハ細ク尖リ居ル左第二及ビ右第一第二第三ハ共ニ傷失シテ其眞狀詳カナラザレ𪜈左第一、第三、第四及ビ右第四ハ殆ンド完全也完全ナル脚ハ何レモ其長サ並ニ太サモ殆ンド相比シキガ如シ蓋シ脚長順式ハ一、二、三、四ナラン乎第一脚ト頭部ノ總長實ニ四十三せめ也今試ミニ第一脚ノ太サヲ計ルニ其基部ニ於テ大凡ソ方十七みめ位モ之レアル可シ又各脚ノ背外及ビ外腹面ノ兩角緣ニハ薄クシテ狹キ膜鰭アリ其基端ハ傘膜ノ緣端ト相通續ス傘膜ハ狹ケレ𪜈各脚ノ間ニ在

ツ降リ突出スロ部唇膜ハ七個ノ突起ヲ有ス内腹面ノ二個ハ末端丸クシテ尖リ居ラズ腕脚ハ多少扁平トナリ居ル特ニ第四脚ハ扁平ク且ツ其中央ノ所ハ巾甚タ廣クシテ外縁ニ肉鰭様膜ヲ具フ脚長順式ハ四、一、二、三或ハ四、三、一、二ニシテ何レモ四列ノ吸盤ヲ有ス傘膜ハ唯僅カニ第二、第三對脚ノ間ニ於テ見ル可キノミ角質環ハ大概全邊ナル如シ若シ牙片ヲ有スル者アリトモ甚ダ細小カクシテ殆ンド不分明也觸脚ハ長キ方ニテ体、頭両部ノ總長以上ニ及ブ其脚頭ハ長ク細小キ吸盤凡ソ九或ハ十列ヲ有ス而シテ其角質環ハ腕脚吸盤ノニ異ナルナシ呼出水管ハ寧ロ巾廣キ方ニテ且ツ長ク第四對脚ノ基部ニマデ達スベシ交接器ハ左第四脚ノ中央ニ在リテ四列ノ小球形吸盤ヲ具フ

標本(四個雌二個雄二個) 明治十四年九月及ビ同十八年九月ノ両度東京市場ヨリ買上グ雌雄各二個ノ内何レモ一ハ大ニシテ一ハ小ナリ大雄ノ體ハ長サ二十一せめ巾十三せめ厚サ八、五せめ也肉鰭ノ巾二せめ頭部ト第四脚ノ總長十四せめ觸脚全長三十せめニシテ脚頭五せめ也小雄ハ体ノ長サ十七せめ巾十一せめニシテ觸脚ヲ損失ス頭部ト第四脚ノ總長僅カニ九せめ也雌ノ大ナル者ハ体長二十二せめ巾十三せめ頭部ト第四脚ノ總長十五せめ觸脚全長三十七せめニシテ七せめノ脚頭ヲ有ス而シテ其小ナル者ハ同シク觸脚ヲ損傷シテ体長十三せめ巾八せめ頭部ト第四脚ノ總長僅カニ八、五せめナリ

### 2. *Sepia, sp.* (はりいか)

此種其概形ニ於テ前種ト甚タ能ク相似居レバ或ハ同一種ニテ之レ無キ哉ト思ハル然レドモ腕脚及ビ觸脚吸盤ノ角質環ハ何レモ其全縁ニ於テ無數ノ細牙ヲ具ヘ且ツ体形皆ナ小サクシテ觸脚ハ割合ニ長シ是レ或ハ老幼ノ差ニテハ無キカト存ズレドモ其果シテ然ルヤ否ヤ未ダ之ヲ詳ニセザレバ此所ニ暫時疑ヲ存シ置ク

標本(雌雄合シテ二十四個) 明治十四年九月及ビ十八年九月ノ両度ニ東京市場ヨリ買上グ大ナル者モ体長十二せめ頭部及ビ第四脚ノ總長八せめ觸脚二十四せめニ過ギル無シ小ナル者ハ体長八せめ頭部及ビ第四脚ノ總長僅カニ

骨縱起ト嚙ミ合フ可ク成リ居ル也
頭部ハ寧ロ大ナル方ナレ圧其巾ハ體ノ巾ヨリモ少シク狹キガ如シ眼球モ大キク外方ニ突出ス涙孔(Lachrymal notch)ハ深ク入リ込ミ居ル腕脚ハ長サニ於テ彼是差シテ大異ナク長順式ハ四、三、二、一ニシテ何レ圧其基部三分二位マテハちどりがけナレ圧兩側ヨリ壓迫サレテ宛モ一列ニ在ル者ノ如ク見エテ短キ柄ヲ具ヒ且ツ一種異樣ニモ各一個宛最ト鋭キ鈎ヲ具スル吸盤ヲ有ス而シテ此鈎ノ在ル處ハ大概吸盤前半縁ノ中央ナルガ如シ然シ殘餘ノ三分一ニハ通常ノ有柄吸盤二列ヲ有ス其角質環ハ前半縁ニ於テ六個或ハ七個ノ細牙ヲ有ス今各腕脚ノ有鈎吸盤ヲ算スルニ第一脚ニ十一個、第二脚ニ十三個、第三ニハ十四個、第四脚ニハ最モ少ナク僅カニ八個ニテアリキ而カノミナラズ第四脚ノ末端ニハ常形ノ吸盤全ク欠除シ居テ各三個ノ長卵形ニシテ且ツ黑キ凸斑アリ蓋シ吸盤ノ變形シタル者ニテ是レ此種ノ交接器ナラン傘膜ハ全ク欠除ス觸脚ハ細クシテ體長ヨリ少シク長ク脚頭ハ其八分一ヲ占ム脚頭ニ附着スル吸盤ハ四列ナレ圧基部ハ二列ニシテ外列ニ腕脚同樣有鈎吸盤三個アリ體色ハ紅色ニシテ體背面ノ中線ト兩眼ノ間ハ一層色深ク少シク黑色ヲ帶ブル者ノ如シ角質売ハ鎗杖也今標本現品ノ内稍ヤ大ナル一個ヲ取リ大サヲ計ルニ體ハ巾二せめ、長サ四せめ、肉鰭ノ通徑巾廣キ處ニ於テ三せめ、頭部ト第一脚ノ總長實ニ三、五せめ第四脚ノ長サ二、五せめ觸脚ノ長サ五、五せめニテアリキ

Family, Sepidae

genus, Sepia.

**1. Sepia esculenta.** *Hoyle.*　(ごとうか)

所載書目 (Literature)

Hoyle, Chall, ceph. p. 129, pl. XVII, Fig. 1—5, pl. XVIII, Fg. 1—6.

Appl., Ceph. jap. p. 28, pl. III, Fig. 1—6.

Ortman, Zool. jahrb. B. 3, H. 5, S. 649.

此種ノ体形卵ノ如クシテ稍ヤ扁平ク外套膜ハ甚ダ厚シ肉鰭ハ長クシテ体両側全縁ニ附着ス而シテ其巾ハ体巾ノ四分或ハ五分ノ一位ナラン頭部ハ大キク眼球モ亦大キク且

原野の松樹に栖居するを以てマツムシの名あり是を採集するには一丈許に成長したる松林に入り徒手にて容易に捕獲したることあり或る場所に於ては毎年群發することあるを見たり

（三）ツクツクボウシゼミ　は八月始めより常に岐阜近傍の樹林及び山間に於て捕獲す其鳴聲はツクツクボウシ、ツクツクボウシと抑揚ある音を發せり

（四）カナカナゼミ（又ヒグラシ）は常に山間の樹間に於てカナカナの鳴聲を發し其聲遠方に達す而して往々樹幹の下部に於て容易に徒手にて捕獲することあり雄も常に雌より腹部大なり

（五）ミンミンゼミ　は七月の末より八月頃山間田野の樹上に於てミンミンの聲を發す

（六）エゾゼミ　は始め北海道に於て採集されたるを以てエゾゼミの名あれども其後東京敎育博物館動物掛某氏嘗て信濃地方動物採集の際偶然エゾゼミを捕獲せられたる由を確かに聞けり而して余は去る明治廿年の夏期御嶽山へ六足蟲採集に飾飛驒國益田郡小坂村（御嶽山麓）の高樹上に於て一種異りたる鳴聲を聞けり是れ恐くはエゾゼミならんことを深く信じたるも採集し得ざりしは實に殘念なり其後御嶽神社代理神官中村平左衛門氏の嘗て信濃國西筑摩郡黒澤村にて採集されたる一頭の蟬を余に贈られたるを以て北海道産のエゾゼミと比較したるに全く同種なることを知れり然るに其形狀大小は實にミンミンゼミに類似すること多ければ一見にては恐く誤まることあるべし

（七）シヤアシヤアゼミ（又クマゼミ）は蟬屬中の最大なるものにして其鳴聲は其名の如くにして又大聲を發せり常に山林田野の樹上に於て捕獲す

（八）アブラゼミ　は其翅赤褐色の不透明質にして世人の常に能く知る所の一種なり

（九）ニイニイゼミ（又ナツゼミ）も亦能く世人の能く知る所の一種にして翅には黒褐色の大斑點あり其他は皆無色透明なり

蟬を採集するには鳥黐を竿端に塗抹して恰も鳥類を捕ふ

六、五せめ位也

## ●蟬の採集法

岐阜市京町　名和靖

動物學雜誌第廿四號並に第廿六號の紙上に於て浪江元吉君ハ蟬の發音器に就て有益なる實驗を世に報告されたるは吾々動物學を研究する者の爲に利益を得たるとハ實に大ひなりと云ふべし故に余は同君に向ひて深く感謝する所なり

余は茲に數年間採集し得たる所の蟬の種と其採集法とを記して聊か該學者の參考に供せんとす

蟬ハ六足蟲半翅類の一種にして蟬屬中余の採集し得たる者は左に記す所の九種なり此の他尚詳細に採集せば岐阜縣下のみにても恐くハ新種を見出すと蓋し是れあらん況んや廣き本邦中夥多の新種あるや明かなる所なり故に地方の諸君新種あらバ速かに御報知あらんとを深く希望して止まざるなり今次に九種の蟬を表示して比較に便せん

| 番號 | 和名 | 漢名 | 翅を擴張したる長さ | 体の長さ | 翅色 | 發生期 | 産地 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | チツチゼミ | | 一寸七分 | 七分 | 無色透明 | 七八月 | 岐阜其他 |
| 二 | ハルセミ | 蝏母 | ♂二〇 ♀一九 | ♂一〇 ♀九 | 仝上 | 五月 | 仝上 |
| 三 | ツクツクボウシゼミ | 寒蟬 | 二七 | 一〇 | 仝上 | 八九月 | 仝上 |
| 四 | カナカナゼミ | 茅蜩 | ♂二九 ♀二六 | ♂一二 ♀九 | 仝上 | 七八月 | 關ヶ原其他 |
| 五 | ミンミンゼミ | 蛁蟟 | 三五 | 一三 | 仝上 | 八月 | 岐阜其他 |
| 六 | エゾゼミ | | 三六 | 一四 | 仝上 | 八月 | 北海道、信濃（飛驒？） |
| 七 | シヤアシヤアゼミ | 馬蜩 | 三八 | 一五 | 仝上 | 七月 | 岐阜其他 |
| 八 | アブラゼミ | 螞蜩 | 三四 | 一二 | 赤褐色不透明 | 七八九月 | 仝上 |
| 九 | ニイニイゼミ | 蟪蛄 | 二三 | 八 | 栗褐色ノ斑點アリ | 七八九月 | 仝上 |

（一）チツチゼミ　は明治十八年八月中旬岐阜縣郡上郡大鷲村原野の松樹に於て始めて採集したり其後岐阜金華山の松樹に於て夏期常に採集す其他去る明治廿一年七月廿三日不破郡宮代村にて鳴聲を聞けり鳴聲は其名の如くチツ、チツ、チツと鳴き續けり其聲ハ恰も直翅類螽斯屬の或る種の者に似たりチツチゼミは蟬屬中最小にして且つ翅の透明なれば採集に最も困難なり

（二）ハルセミ（又マツムシ）は蟬屬中最も早く發生するものにして常に五月始の頃より採集したり此蟬ハ山林

第なれバ余輩ハ此鳥屋よも大義名分のある處（斯く云ふこ何か勤王家の口まねの樣なれども決してそうでハなく只貿易鳥として出す日本産の鳥類中奇種のものあれバ先つ余輩よ示されたし必ず相當の代價にて買ふべきとを鳥屋の主人よ談しつけたる次第而已）を諭したるふ主人も日本禽學發達の爲めと思ひし歟或は買ひ直段のよろしき爲めふ因るか恐くハ後段ならん、俗に符替りと稱し一寸普通のものと異る種は續々余輩に送り越せり之れにて蒐集上の利益を得しと少しとせず

扨て當地ハ隨分小鳥類の澤山に産する處と見へ冬季中は甚た安く處々の八百屋魚屋などには山を爲す程積み置けり當市中にて澤山に見ゆる種類はヒヨドリ、チヤジナイ、モズ、キジバト、キジ、ツグミ、アカハラ、デシギ、スヾメ、カハラヒハ、ヒタキ等にして概して燕雀類と渉水類とに富むものゝ如し又「カハラヒハ」の各体部を測りしが(L...140 mm. St,w...230 W...100 Tar...20 B...10 T...50)にして且つ羽翼の彩色頗る美麗なれバ大カハラヒハ(Chloris Kawarahiba (*T & S*) Sharpe) に非すして小カハラヒハ (Chloris sinica (L) Sharpe) なりと斷定せり（飯島教授の本邦産雀科の論文を見よ）

(甲)鳴禽類

(一)オホルリ (Xanthopygia cyanomelana, *Tem.*)
(二)コルリ (Larvivora cyanea, *Pall.*)
(三)キビタキ (Xanthopygia sp.)
(四)ヒレンジヤク (Ampelis japonicus, *Sieb.*)
(五)チヤウマツグミ (Turdus fuscatus, *Pall.*)
(六)アカハラ (T. chrysolaus, *Tem.*)
(七)シロハラ (T. pallidus, *Gm.*)
(八)クロツグミ (T. cardis, *Tem.*)
(九)ヌエジナイ (Oreocincla varius, *Pall.*)
(一〇)ヒヨドリ (Hypsipetes amaurotis, *Tem.*)
(一一)ヨシキリ (Calamoherpe orientalis, *T & S.*)
(一二)キクイタヾキ (Regulus japonicus, *Bp.*)
(一三)セグロセキレイ (Motacilla lugens, *T & S.*)

る如く其鳴聲を探尋すれバ容易に捕獲する事を得べし其鳥黐の蟬體に附着したるものハ石炭油或ハアルコールを吸收したる紙片にて摩すれば容易に溶解して清淨となるべし

蟬を採集する際常に注意すべきことあり只聲を發するもののみを捕獲すれば悉く雄蟲のみなり故に發聲する蟬を發見せバ其近傍の樹枝等に深く注目して啞蟬即ち雌蟲を捕獲すべし元來蟬にハ雄にのみ發聲器ありて雌ニは是を欠けり其雄の美聲を發するや全く雌蟲の甘心を得るに外ならず而して蟬の雌雄を區別するに生活の際ハ前に記したる如く鳴聲の有無を以て判すべしと雖も死後に於てハ腹部を驗するを以て最も簡便なりとす雄にハ胸部に於て大なる發聲器あり雌に於てハ腹端に附卵針を有すればなり

## ●島根縣下鳥類目錄第一回報告

松江　會員　渡邊盈作　報

左に揭けたる鳥類は去る明治廿三年十一月より本年四月迄に蒐集し得たるものなり爾後獲るに從ひ報道を怠たらざるべし。余輩ハ當縣内の鳥類を蒐集する一方法として左の如き廣告を當地の教育會雜誌等に揭出せしに各小學校の教師などより續々剝製方の依賴あり爲めに蒐集上大に便益を得たるも之れと同時に貴重なる時間をあつたら剝製方に費して大に閉口せしことあり一利一害は數の免れざる所なりと知るべし。

本校博物學標本整頓之爲め先つ手始として當縣内の鳥類蒐集致度見込に付若し會友諸君中に御獲物あるときは何卒御送り被下度尤も二羽以上なれバ一羽丈け頂戴し其代りに剝製となし御回送可仕候又時宜によりては相當の代價差出し候ても宜敷候也（此廣告文に加へて鳥類捕獲上の注意要件五ケ條と記し置けり）

又當地には貿易鳥屋と名け盛んに鳥類の剝製を業とするもの一軒ありこれは御承知の通り神戸港に持ち出し外國行きと爲すものなり其内にハ隨分奇種もある樣なれとそれらに毫も關係せす二束三文に神戸の猾商に取られる次

(丙)搔撥類

(四七)キジバト (Turtur gelastis, *Tem.*)

(四八)アオバト (Treron sieboldii, *L.*)

(四九)ヤマドリ (Phasianus soemmeringii, *Tem.*)

(五〇)キジ (P. versicolor, *Viellot.*)

(丁)涉禽類

(五一)タゲリ (Vanellus cristatus, *Mey.*)

(五二)タマシギ (Rhynchaea bengalensis, *L.*)

(五三)ボトシギ (Scolopax rusticola, *L.*)

(五四)ウヅラシギ (Tringa acuminata, *Horsf.*)

(五五)バン (Gallinula chloropus, *L.*)

(五六)オホバン (Fulica atra, *L.*)

(五七)シロチドリ (Aegialtes cantianus, *L.*)

(戊)水禽類

(五八)カモメ (Larus tridactylus, *L.*)

(五九)アジロガモ(方言) (Querquedula, *sp.*)

(六〇)オシドリ (Aix galericulata, *L.*)

(己)猛禽類

(六一)ハイタカ (Accipiter nisus, *L.*)

(六二)コミヽヅク (Asio accipitrinus, *Pall.*)

編者曰ク島根縣下松江ニ鳥學熱心ノ人ノ現ハレ出デタルハ飯島魁(否全世界ノ鳥好キ)ノ大悅ビニ喜ブ所ナリ、抑モ我山陰道ノ地方タル鳥學上ニハ全クノTerra incognita(未ダ曾テ知ラレザル地)ナリ、余ハ常ニ東京ニ居ルすゞめの山陰道ニモ居ルナラントハ思ヘリ然レ𪜈只推察ナリシノミ、又該地ノ人ニ此事ヲ糺シタルニ之レアリト答ヘリ然レドモ是レ只ニ素人ノ話タルニ過ギザリシ而シテ山陰ノすゞめノ果シテPasser montanus ナルヿハ今回渡邊氏ノ報告ニテ始メテ確乎知リ得タリト云フベシ、此報告ノ如キハ鳥學ニ取リテ大利益アルヿ曰フモ愚ナリ、渡邊氏ハ此報告ヲ以テ第一回トセリ去レバ余ハ讀者ト共ニ第二第三、第四ト續々報告ノ達スルヲ頸ヲ長クシテ待チ居ルベシ、希クハ各種ノ多寡、籔ニ居ルカ森ニ居ル

(一四)キセキレイ (M. boarula, *T & S.*)

(一五)シマムクドリ (Sturnia pyrrhogenys, *Müll.*)

(一六)ヤマガラ (Parus varius, *T & S.*)

(一七)シジウガラ (P. minor, *T & S.*)

(一八)モズ (Lanius bucephalus, *T & S.*)

(一九)タヒバリ (Anthus japonicus, *Tem.*)

(二〇)エナガ (Acredula trivirgata, *Tem.*)

(二一)メジロ (Zosterops japonica, *Tem.*)

(二二)ヒバリ (Alauda japonica, *Tem.*)

(二三)スヾメ (Passer montanus, *L.*)

(二四)アトリ (Fringilla montifringilla, *L.*)

(二五)マヒハ (Chrysomitris spinus, *L.*)

(二六)ベニマシコ (Uragus sanguinolentus, *L.*)

(二七)キクマシコ (?)

(二八)ウソ (Pyrrhula griseiventris, *Lafr.*)

(二九)ホヽジロ (Emberiza ciopsis, *Bp.*)

(三〇)ミヤマホヽジロ (E. elegans, *Tem.*)

(三一)カシラダカ (E. rustica, *Pall.*)

(三二)アオジ (E. personata, *Tem.*)

(三三)クロジ (Fringillaria variabilis, *Tem.*)

(三四)小カハラヒハ (Chloris sinica, (L) *Sharpe.*)

(三五)シメ (Coccothraustes japonicus, *Bp.*)

(三六)イカル (C. personata, *Schleg.*)

(三七)ツバメ (Hirundo gutturalis, *Scop.*)

(三八)アマツバメ (Cypselus pacificus)

(三九)オニツバメ (?)

(四〇)ヨタカ (Caprimulgus jotaka, *T & S.*)

(四一)カハセミ (Alcedo bengalensis, *Gm.*)

(四二)カシドリ (Garrulus japonicus, *Bp.*)

(乙)攀木類

(四三)アカケラ (Picus major, *L.*)

(四四)コゲラ (P. kisuki, *Tem.*)

(四五)アオゲラ (Geinus awokera, *T & S.*)

(四六)ホトヽギス (Cuculus poliocephalus, *Lath.*)

第一開墾ノ進歩ヨリ他ニ移轉セシコト
第二森林ノ開墾ヨリ深山ヲ去テ近郷ニ捿家ヲ撰ミ手輕ニ捕獲セラルヽコト
第三捕獲ト保護ノ平均ヲ失フコト
第四海外ニ輸出スル鳥類剝製品ノ增加スルコト

第四ノ件ヨリ捕獲者益ス增加スルノ勢ナリ吾靜岡市ノ如キハ一村百戶ニ滿ザル近在サヘ十八以上ノ捕獲者アリ其內四五人ハ營業トスルモノ各村皆之レナリ茲ニ於テ製造人ハ四隅ニ人ヲ馳セ鳥類捕獲ノ注文ヲナス塲合ナレバ一匹タリトモ吾勝チニ賣ラント思ヒ之ヲ製造塲ニ持參スベシ是以テ秋ヨリ春ニ至ル二期間捕獲シテ製造塲ニ運搬スル人員ハ近在ノミ二百有餘人其內二十有餘人ハ四季常ノ如シト各府縣ハイザシラズ今其製造塲ノ摸樣ヲ聞クニ其魁タルモノ一軒一日六百ノ多キヲ占メ其他一日一軒二百以上ノ製造ニ掛カルヽト云フ其內最モ低キ製造塲ト雖モ商業上ノコトナレバ百以下ノ鳥類ヲ製造シテ今日ノ活路ヲ營ム能ハサレハ競フテ仕入レ爭フテ多量ノ製造ヲ占メントス斯ノ如キ商買上ノ人員靜岡市ノミ九人アリ此製造塲ヨリ橫濱ヘ向ヘ輸出スル高ハ一年幾万ト云計算ナリ其外見習製造人卽チ他日商業的ノ運動ヲ試ミントスルモノ夥多アリ嗚呼此有樣ニテハ遠カラス鳥類ノ亡族作用ヨリ植物ニ害蟲ノ慘毒ヲ漂ハシ吾人人民ノ頭上ニ其成果ヲ見ルコト必然ナリ然レドモ嘗ヘ幾多ノ保護論ヲ伸張スルモ一般野蠻ノ人民ハ植物ニ及ボス鳥類ノ有益無益ノ判決ニ乏シキガ故ニ些々タル目前ノ私利ヲ取テ間接ノ不利益ヲ顧ミサルハ豈恐レテ且ッ懼レサルベケンヤ其不利益ヲ暗々裏ニ覺レルモ眞ノ學理ニ沐浴セザルガ爲猶ホ眼前ノ利ニ走テ未來ノ結果ニハ冷淡ナリ茲ニ於テ間々二三ノ論客出デヽ囂々利害得失ヲ論ズルモ馬耳東風一片ノ神經ダモ針先ノ刺激ヲ受ルヿアランヤ故ニ一般ノ生靈開化ノ域ニ進ミ果シテ鳥類ノ有害無害ヲ實驗シ各人之ヲ保護スルニ至レバ之レカ亡族憂フルニ足ラズ亡族ヨリ起ル害蟲ノ慘毒モ又恐ルヽニ足ラザランヤ余ハ特ニ保護ノ手段ニ苦ミ策已ムヲ得ザレバ鳥類全体ノ亡族ハ干涉ヲ捨置キ單ニ益

カ田ニ居ルカ、何月居リテ何月居ラナイカ、等習性ノ一斑ヲ記入サレンニハ此上ナシ、少クモ渡邊氏ノ獲ラレタル標品ノ月日ハ記入セラレンヿヲ乞、又何個所有セラルヽカヲ記サレタナラ（但シ他人ノ欲シガリソウナ種ニ限リテ）交換ヲ申入レル人ノ爲メ甚ダ便利ナラン

## ●静岡縣ニ發見スル鳥類目録

丹羽甲子郎

余ハ從來博物學ヲ好ミ多年ノ星霜山川ヲ跋渉シ常ニ實物ヲ採集シ之ヲ研究スルヲ一大快樂トシ秋ハ山ニ高妙ノ景色ヲ望ミ春ハ野外ノ美妙ヲ樂ミ人跡東西ニ織ル繁忙都會ノ不潔空氣ヲ呼吸シ耳目ヲ樂マシムルハ現來好マヌ道ナレハ野外ヲ涉獵シテ萬花ニ戯ル昆蟲ノ其特性習慣ヲ實驗スルコソ快樂ナリ益々當時ニアリテハ校務ノ有餘アレハ星ヲ戴キ月ヲ蹈ミ旱天終日炎熱ヲ往來シ頭腦ハ熱風ニ暴露シテ亞弗利加黒奴ノ親族タルコト疑ヒナシ朋友ハ余ガ熱心ヲ冷笑シ野外ノ農夫ハ採集奔走ノ勞ヲ馬鹿ラシク思フノ有様ナレハ共ニ博物ノ美ヲ語リ共ニ害蟲ノ驅除ヲ談スル能ハス獨身獨行之ニ志スコト今春ヲ向ヘテ忽々十有一年未タ聞見タラス遂ニ此會員ノ末席ヲ汚スヲ得ル幸榮ハ箕作先生ノ厚意預テ力アルトコロナリ爾來諸先生ノ御教授ヲ辱フセラルヽ地位ニ遭逢セシハ一増余カ研究ノ強氣ヲ高ムルノ塲合トハナレリ故ニ入會早々静岡縣ニ發見セル鳥類分布ノ目録ヲ記シ卑見ヲ述ベ各國鳥類ニ幾種ノ分布アリヤ概算ヲ待ツコト急ナリ抑モ余カ之ヲ調査スルハ單ニ鳥類ノ分布ヲ研究シ後來ノ亡族ヲ恐レテナリ今ヨリ八九年前屢バ發見スル鳥類ハ當時未タ嘗テ發見スルコトナシ反テ他縣ニ見ルモ本縣ニハナク從前多キ種類モ今ハ減少シテ偶發見スルニ過ギズ故ニ余ハ鳥類採集ノ折柄捕獲者ニ質シ老農ニ問フニ誰レ彼レモ二十年前ト今日ヲ比較スレハ鳥類ハ非常ニ減少シ全ク影サエ見エヌモノ枚擧ニ遑アラズト云フ之ヨリ考フレハ全ク四ノ原因アリ

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (30) | Aegialtes placidus | クビタマチドリ | (47) | Emberiza rustica | カシラダカ |
| (31) | Strepsilas | ギヤウシヲシギ | (48) | Emberiza elegans | ミヤマホヽジロ |
| (32) | Rhynchaea bengalensis | タマシギ | (49) | Fringilla montifringilla | アトリ |
| (33) | Scolopax rusticola | ボトシギ | (50) | Passer rutilans | ニウナイズヾメ |
| (34) | Gallinula chloropus | バン | (51) | Passer montanus | スヾメ |
| (35) | Fulica atra | オホバン | (52) | Chloris sinica | 小カワラヒハ |
| (36) | Gallinago scolopacina | ヂシギ | (53) | Chloris kawarahiba | 大カワラヒハ |
| (37) | Rallus indicus | クヒナ | (54) | Coccothraustes japonicus | シメ |
| (38) | Vanellus cristatus | タケリ | (55) | Eophona personata | イカル |
| (39) | Gallinago australis | ヤマシギ | (56) | Uragus sanguinolentus | ヘニマシコ |
| (40) | Numenius phaeopus | コジヤクシギ | (57) | Pyrrhula orientalis | ウソ |
| (41) | Alauda japonica | ヒバリ | (58) | Corvus macrorhynchus japonensis | シブトガラス |
| (42) | Emberiza ciopsis | ホヽジロ | (59) | Corvus corone | ハシボソガラス |
| (43) | Emberiza fucata | ホヽアカ | (60) | Corvus pastinator | ミヤマカラス |
| (44) | Emberiza personata | アオジ | (61) | Cyanopolius cyanus | ヲナガドリ |
| (45) | Emberiza variabilis | クロジ | (62) | Garrulus japonicus | カケス |
| (46) | Emberiza sulphurata | ノジコ | (63) | Garrulus brandtii | ミヤマカケス |

鳥保護ノ爲メ剝製ヲ商業スル社會ニ益鳥ノ分類ヲ說明シ嚴ニ製作スルコトヲ禁スルニ至レバ至然保護ノ手段トモナリ間接ニ萬分ノ一ダモ功ヲ奏スルコトアランカト確信シテ疑ハザルトコロナリ

## 靜岡縣ニ發見スル鳥類目錄

(1) Aquila chrysaetus　オホワシ
(2) Spizaetus orientalis　クマタカ
(3) Falco peregrinus　ハヤブサ
(4) Tinnunculus japonica　マグソダカ
(5) Milvus melanotis　トビ
(6) Hypotriorchis subbuteo　チゴハヤブサ
(7) Astur palumbarius　オホタカ
(8) Accipiter nisus　ハイタカ
(9) Lempijius semitorques　ミミヅク
(10) Otus rufescens　コミヽヅク
(11) Syrnium rufescens　フクロ
(12) Lempijius stictonotus　コノハヅク
(13) Aix galericulata　オシドリ
(14) Anas boschas　カモ
(15) Anser albifrons　カリガネ
(16) Querquedula crecca,　コガモ
(17) Phalacrocorax carbo　ウ
(18) Puffinus tenuirostris　ウミガモ
(19) Diomedea derogata　クロアホウドリ
(20) Diomedea brachyura　アホウドリ
(21) Larus marinus　オホセグロカモメ
(22) Brachyramphus *antiquus*　ウミスヾメ
(23) Larus glaucus　シロカモメ
(24) Ciconia boyciana　コウノトリ
(25) Nycticorax griseus　セグロゴイ
(26) Herodias garzetta　シラサギ
(27) Ardetta　ヨシゴイ
(28) Ardea cinerea　アオサギ
(29) Aegialtes cantianus　シロチドリ

(99) Zosterops japonica メジロ

(100) Halcyon coronandeliana ミヤマセウビン

(101) Alcedo bengalensis カワセミ

(102) Iynx japonica アリスイ

(103) Picus major アカゲラ

(104) Picus martius クマゲラ

(105) Picus awokera アオゲラ

(106) Cuculus poliocephalus ホトトギス

(107) Phasianus versicolor キジ

(108) Phasianus soemmeringii ヤマドリ

(109) Coturnix japonica ウヅラ

(110) Turtur gelastis キジバト

(111) Columba livia domestica ドバト

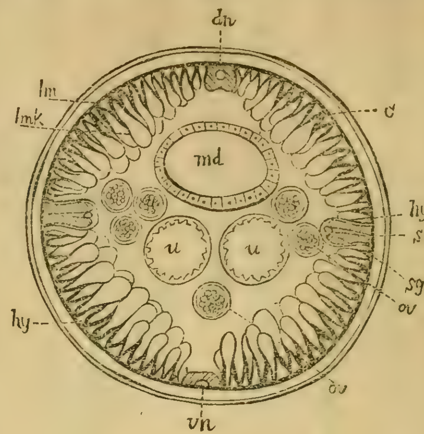
(112) Columba sieboldii アオバメ

以上皆實際手ニ掛ケタルモノト實見セシモノノ外記載セズ最早既ニ靜岡縣下ノ鳥類御實驗ノ諸君余ガ實驗ノ足ラザルトコロアラバ御注告ヲ希望ス

編輯人曰ク(1)ハ和名いぬわしト云フ、果シテおほわしナラバ學名ヲ Haliaetus pelagicus ト云フ、(63)みやまかけす及ビ(104)くまげらガ靜岡縣下ノ鳥トハ甚ダ珍シ、縣下ニテ獲タルモノナリトノ確證アラバ是非其標品ヲ會員飯島魁ニ一覽ヲ許サレタシ、(80)あかひげガ靜岡縣ニ産ストハ少々受ケ取レ難シ、尙ホ取調ベアリテ報道ヲ乞フ、(69)ハ和名ヲちごもづト云フ、しまもづハ M. latirostris ナリ、二種共ニ靜岡縣下ニ産ス、(108)本邦やまどりニ二種アリ、Ph. scintillans 及ビ Ph. soemmeringi 是レナリ、甲ハ主トシテ本州ノ産ニシテ肩並ニ腰ノ邊ニ白斑アリ、乙ハ主トシテ九州ノ産ニシテ白斑ナク總身赤色ナリ、靜岡縣産ノモノハ果シテ乙種ナル哉、將タ兩種共ニ在ル哉觀察アリタシ、關東ニ産スルハ皆甲種ナリ然シ伊豆地方ニハ稀ニ乙種ヲモ見ルコトアリト云フ○靜岡縣下殊ニ富士近傍ヘハ從來鳥採集ニ行キタル者三四人モアリテ他縣ニ比シテハ隨分能ク知レアルモマダ〳〵不充分

明治廿四年六月十五日

| | | |
|---|---|---|
| (64) | Sturnus cinereus | ムクドリ |
| (65) | Ampelis phœnicoptera | ヒレンジヤク |
| (67) | Ampelis garrulus | キレンジヤク |
| (68) | Lanius bucephalus | モヅ |
| (69) | Muscicapa sibirica | シマモヅ |
| (70) | Parus varius | ヤマガラ |
| (71) | Parus trivirgata | エナガ |
| (72) | Parus palustris japonicus | コガラ |
| (73) | Parus atriceps minor | シジウカラ |
| (74) | Pratincola maura | ノビタキ |
| (75) | Tarsiger cyanurus | ルリヒタギ |
| (76) | Erithacus cyaneus | コルリ |
| (77) | Erithacus akahige | コマドリ |
| (78) | Accentor rubidus | シヾモグリ |
| (79) | Erithacus calliope | ノゴマ |
| (80) | Calliope komadori | アカヒゲ |
| (81) | Anthus japonicus | タヒバリ |
| (82) | Motacilla boarula | キゼキレイ |
| (83) | Motacilla japonicus | セクロセキレイ |
| (84) | Cettia cantans | ウグヒス |
| (85) | Regulus cristatus orientalis | キクイタヾキ |
| (86) | Troglodytes fumigatus | ミソザヾイ |
| (87) | Hypsipetes amaurotis | ヒヨドリ |
| (88) | Merula cardis | クロツグミ |
| (89) | Geocichla varia | トラツグミ |
| (90) | Merula fuscata | チヤウマ |
| (91) | Merula chrysolaus | アカハラ |
| (92) | Terpsiphone princeps | サンコー |
| (93) | Acrocephalus orientalis | オーヨシ |
| (94) | Acrocephalus bistrigiceps | コヨシ |
| (95) | Montifringilla bruneinucha | ハキマシコ |
| (96) | Hirundo guthuralis | ツバメ |
| (97) | Cypselus pacificus | アマツバメ |
| (98) | Caprimulgus jotaka | ヨタカ |




第一圖 線蟲（蛔蟲）ノ體ヲ橫斷シタル圖

dn 中央背神經 vn 中央腹神經 sl 側線、c 硝子膜 hy 下皮、sg 排泄管 hn 縱筋、hnk 筋細胞 u 子宮、ov. 卵巣管 md 消化管

ナリ（第一圖hy）

下皮ノ内面ニ縱筋肉層アリ明ニ四郡ニ分カル（第一圖）即チ背及ヒ腹面ノ中央線及ヒ兩側ノ中央ニ下皮ガ内面ニ向ヒ突出スル線アリ此等ノ四線ノ間ニ縱筋ハ一面充滿スルヲ以テ四郡アルニ至ルナリ」縱筋ハ稍固有ニシテ非常ニ大ナル細胞ノ變化シタルモノヨリ成ル第二圖ハ筋細胞ノ一個ヲ示ス一方ニ長キ紡錘狀ノモノアリ其内ニ縱ノ纖維ヲ見ルベシ此部分下皮ノ内面ニ附着シ卽チ筋細胞ノ收縮スル部ナリ此部ノ内面ニ向ヒタル所ニ不規則ナル原形質ノ塊附着シ居リ其内ニ細胞核ヲ見ルベシ此部分ハ線蟲ノ體腔ニ突出スルモノナリ要スル細胞ノ一部ハ變シテ筋ノ




第二圖 筋肉細胞

甲全体 乙橫斷圖 e收縮部 n核 P原形質部

作用ヲナシ他ノ部分ハ元ノ原形質ノ儘ニテ存シ居ルナリ此種ノ筋細胞ハ無脊椎動物ニテ數見ル所ナリ

縱筋層ノ内ニハ廣キ體腔アリテ内臓（消化器及ヒ生殖器）ヲ含有ス

消化器第三圖ハ前端ニアル口孔ヨリ後端ニ近キ肛門ニ至ルマテ直線ニ走リ彎曲ナドナスヿナシ口邊ニハ小突起或ハ鉤アルヿアリ口孔ヨリ食道ニ入ル食道ハきちん質ノ硬キ細キ三角錐形ノ管ニシテ後方ニ進ムニ從ヒ漸々大トナリ多クハ其末端ニテ球形ノ構造ヲナシ（Pharynx）其内ニテきちんハ齒ヲ作ル食道及ヒ球形部共ニ多ノ筋纖維附

ナリ、依テ余輩ノ丹羽君ニ囑スルノ望ハ大ナリ、ドーカ絶ヘズ觀察ヲ下シテ今回ノ如キ報告ヲ續々寄セラレンヿヲ乞フ、鳥名ノミナラズ何鳥ハ多ヒトカ少ヒトカ或ハ何月ニ來テ何月ニ去ルトカ些細ノ事柄ニテモ書キ加ヘラレンニハ日本學鳥發達ノ爲メ著大ノ益ナルベシ

## ●普通動物學講義第貳拾四

### 第八章（第五門蠕蟲ノ續キ）　箕作佳吉述

### 第二綱　圓蟲類（まるむし）　Nemathelminthes

圓蟲類ノ體ハ平扁ナル扁蟲（ひらたむし）ノ體ト大ニ異ナリ皆ナ圓筒形或ハ紡錘（ツムナリ）形或ハ絲狀ニシテ關節アルヿナシ體ノ前端ニハ小突起(papilla)或ハ鉤ヲ有ス廣キ體腔アリ、循環系或ハ關節器ヲ有スルヿナシ、雌雄ノ兩性ヲ分ツヲ通常トス

圓蟲類ヲ分類シテ左ノ二目トス

第一目　線蟲（いとむし）　Nematodes

第二目　鉤頭蟲（かぎあたま）　Acanthocephali

此外ニ圓蟲類ニ附屬セシムル一郡ノ動物アリ之ヲ箭狀蟲（やむし）類ト云フ

#### 第一目　線蟲（いとむし）　Nematodes

線蟲トハ蛔蟲、はりがね蟲、とりひな等を含有スル目ナリ

線蟲ノ體ハ概子延長ニシテ圓筒紡錘或ハ絲ノ狀ヲ有シ體ノ兩端ニ至リテハ細ラグヲ常トス長サハ一み、め、ヨリ一めーとるノ間ニアリ前端ニハ口孔アリ其周圍ニ唇。小突起或ハ粗毛ヲ有スルヿ稀ナラズ後端ハ雌雄ニヨリテ大ニ異ナルヿ數ナリ雄蟲ハ全體雌蟲ヨリ小ナルガ其後端ハ甚ダシク渦卷（うづまき）ヲ爲シテ曲リ居ルヲ以テ之ヲ知リ得ルヿ數ナリ肛門ハ後端ノ尖ヨリ多少前ニアルヲ常トス

體ノ全面ハ外皮或ハ硝子膜(Cuticula第一圖C)ヲ以テ蓋フ是ハ細胞ヨリ成立セズ其內面ニアル下皮(Hypodermis)ノ分泌セルモノナリ下皮ハ粒（つぶ）ノ多キ原形質ノ層ニシテ細胞ノ境界ヲ見ルベカラスト雖モ幼時ハ明瞭ナル細胞ノ層

ニ向ヒテ支出スル神經モ亦數本アリ中ニ就キテ背及ヒ腹面中央線ニアル二枝ハ前ニ記シタル背腹ノ下皮突起線ノ中ヲ沿フテ走リ體ノ後端ニ至ル此二條ノ神經ハ左右ノ横枝數本ニヨリテ相連結ス左右ノ枝ハ全一ノ處ヨリ出デスシテ少シク前後スルヿアリ

〔感官〕寄生セズシテ自在生活ヲナス線蟲ハ眼ヲ有ス」口邊ノ小突起及ヒ粗毛モ感觸ノ作用アルモノカ

線蟲ハ概子皆兩性ヲ分ツ雄蟲通常雌蟲ヨリ小ニシテ其體ノ後部ハ渦卷ヲナシテ彎曲ス雌蟲ニアリテハ其生殖孔ハ体ノ中央ノ前後ニアリテ稀ニ肛門ト合スルノミ(Gordius)之ニ反シテ雄蟲ノ生殖孔ハ常ニ肛門ト共ニ外ニ開キ且ツ肛門内ニ一個乃至二個ノ刺ヨリ成ル交尾器ヲ備フ(第三圖)内部生殖器第三圖ハ雌雄共ニ一個乃至一對ノ盲管ヨリ成ル其管ノ盲端ニ多數ノ核ヲ含有スル原形質ノ塊アリ卵或ハ精蟲ハ之ヨリ起リ管ヲ沿フテ下ル故ニ管ノ下端ハ輸卵管或輸精管ノ作用ヲナス線蟲ハ多ク卵生ナレドモ胎生モアリ

線蟲ハ淡鹹水中ニ自在生活ヲナスモノアレドモ多クハ寄生スルモノナレバ他ノ寄生ノ如ク甚タ複雜ナル變化ヲナシ中間宿主等ノ助ケニヨリテ最後宿主ニ達シ漸クニシテ成熟スルヲ得ルモノ少シトセズ

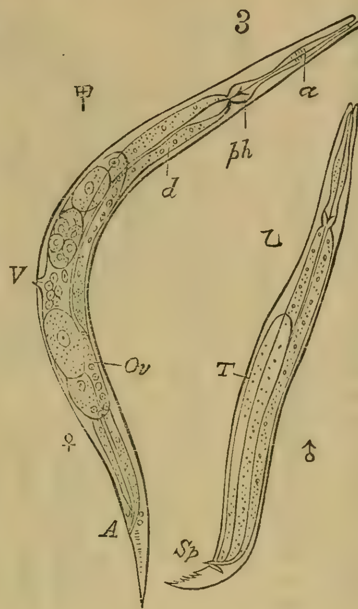
(線蟲ノ種類ハ次號ニテ述ブベシ)

## 雜錄

●鳥信り　在島根縣松江ノ本會々員渡邊盈作君ヨリノ來信中ニ曰ク當地ハ鳥類至テ安ク小鳥類平均一錢野鷄ノ類十錢内外鴨ノ類十四五錢位ニ御座候間鳥類蒐集ニモ充分見込有之候ニ付竊ニ悅居リ候○過般御通報申上候ベリカンハ决テ山師ノ持チ來リタルニハ無之全ク飛ヒ來タルヲ打チ留メタル次第ニ御座候云々

●又鳥　本會ノ飯島魁ハ大ノ鳥好キニテ此節ハ暇サヘアレバ鳥ヲ捻クリテ居リ日本鳥名ノ取調ハ大分捗取リタル樣子ナルガ近來諸方ヨリ本會ヘ鳥ニ關スル通信ノ續々ト來ルヲ非常ニ悅ビ居レリソコデ同人云ヘラク誰デモ鳥

着シ居リテ收縮スル時ハ食道及ヒ球形部ノ孔ヲ大ニシ以テ滋養液ヲ口孔内ニ吸收スルノ便ニ供ス球形部ニ次キテ腸アリ直線ニ肛門ニ至ル腸ノ壁(第一圖)ハ細胞層ヨリ成ル」或種類(Mermis)ニハ肛門ナシ又Gordius屬ハ其成長シタル時ハ消化管ノ前部退歩シテ消失ス



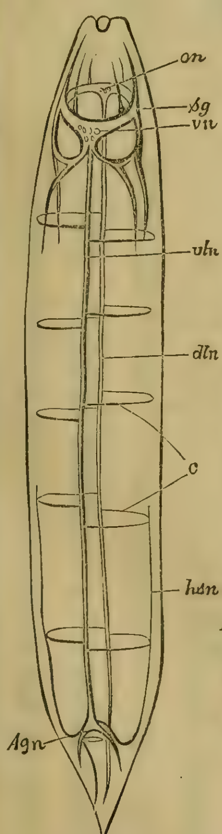

第三圖 甲乙 Rhabditisノ雌雄

ov卵巢 T.睪丸、 V雌生殖孔 sp.交尾刺 oe食道 ph食道ノ球形部、 d腸

背及ヒ腹面ノ中央線及ヒ兩側ノ中央ヲ沿フテ都合四條ノ線下皮ヨリ體腔ニ向ヒ突出スルヿヲ前ニ述ベタリ(第一圖ヲ見ヨ)此等ノ線ハ下皮ト全シク矢張粒類多キ質ヨリ成ル

〔排泄器〕 此四條ノ線ノ内兩側ノ二條ヲ側線(Lateral line)ト云フ各側線ノ内ニ縦ノ管アリ透明ナル液ヲ含ム體ノ前部ニ近ツクニ從ヒ二條ノ縦管ハ漸々中央腹線ニ近ヅキ遂ニ合シテ一本ノ管ヲナシ腦ノ近傍ニシテ中央腹線ニアル一ノ孔ヲ以テ外界ニ開ク此等ノ管ハ通常排泄器ト見做サルヽモノナリ

〔神經系統〕 (第四圖)線蟲ノ神經系統ハ甚ダ固有ナル點アリ食道ヲ圍繞シテ一ノ神經環アリ其兩側ノ部ニ神經細胞ヲ含ミタル神經節アリ(sg)環ヨリ前方ニ向ヒ數本ノ神經ヲ支出ス中ニモ口邊ノ小突起ニ至ルモノ四本アリ後方




第四圖 線蟲神經系統ノ圖式

on. vn. 神經環ノ背及腹點、 sg側部ノ神經節
vln. 中央腹神經、 dln中央背神經 c横神經
hsn. 後側神經 Agn肛門神經節

(23) Nisoniades montanus, *Brem.*

埼玉縣 大西 靜

●静岡縣下蝶類 左ノ表ハ四五兩月間静岡地方ニテ採集シタル蝶類ナリトテ會員丹羽甲子郎氏ヨリ報告セラレタルモノナリ

Papilionidæ

18 Papilio maacki, *Men.*
19 Papilio macilentus, *Ganson.*
20 Papilio sarpedon *L.*
21 Papilio demetrius, *Cr.*
22 Papilio alsinous, *Klug.*

Nymphalidæ

23 Vanessa cardui, L
24 Neptis aceris *Lep.*

Lycædidor

25 Lycæna argiolus, *L.*
26 Lycæna boetica, *L.*

Satyridæ

27 Neope gaschkevitschii, *Men.*
28 Lethe diana, *Butt.*
29 Lethe sicelis, *Hew.*

Nympholidæ

30 Argynnis adippe, L.
31 Argynnis nerippe, *Full.*
32 Apatura ilia, *Schiff.*
33 Euripus charonda, *Hew.*
34 Euripus japonica, *Fild,*
35 Limenitis sibylla, *S.*

Hespeuræ

36 Dainio tethys, *Men.*
37 Pamphila pellucida. *Murray.*

Sycrinidæ

38 Amblypodia turbata, *Butl.*
39 Amblypodia japonica, *Macsay.*

ノ標品サヘ送リテ呉レナバ驗査ノ上學名及ビ和名ヲ附シ直チニ返送スベシ但シ同人ノ手ニテ解カラザルモノアラバ數月間借用シテ外國學者ノ鑑定ヲ乞フベシト、讀者諸君ノ中若シ名ノ不確ナル或ハ全ク知レザル日本鳥アラバ遠慮ナク本會ヘ御送リアリテ一番飯島ヲ困ラセヤランニハ定メテ一興ナルベク且ツ本邦鳥學進歩ノ一助トモナランカ

●**川越ノ蝶類**　余ガ本年五月下旬迄デニ捕ヘシ川越地方産蝶類ハ

Papiliodidæ.

(1) Papilio macheon, *L.*
(2) P. xuthus, *L.*
(3) P. helenus, *L.* ?
(4) P. macilentus, *Janson.*
(5) P. maaki, *Men.*
(6) P. alcinous, *Klug.*

Pieridæ

(7) Colias hyale, *L.*?
(8) Terias multiformis, *P.*
(9) Pieris napi, *L.*
(10) Anthocaris scolymus, *P.*
(11) Pieris rapae, *L.*

Lycænidæ.

(12) Dipsas lutea, *Hew.*
(13) Polyommatus plæas, *L.*
(14) Lycæna argiolus, *L.*
(15) Amblypodia japonicam.

Nymphalidæ

(16) Euripus japonica, *Feld.*
(17) Neptis lucilla, *Schiff.*
(18) Neptis aceris, *Lep.*
(19) Vanessa v—aebum, *Hübn.*
(20) Vanessa c—aureuem, *L.*
(21) Vanessa charonia, *Drury.*
(22) Argynnis niphe, *L.*

中斯學ニ篤志ノ人々ハ遺テ見玉ヘ隨分興味アルヿト思ハル、　（松井敬勝）

●ビュチュリー氏ノバクテリヤ及ビ是ニ類似シタル生物ノ構造ニ就キテノ研究　ヘッケル氏ガ始メテモ子ラト稱スベキ無核ノ單細胞生物アリト唱ヘテヨリ其ノ進化理論ニヨク符合スルヲ以テ暫時ハ大評判ナリシモ其ノ後原蟲類ノ研究漸次精細ニナルニ從ヒヘッケルノモ子ラト稱セシモノニモ核ノ存在スルヿ發見サル丶ニ至リモ子ラト稱スベキ生物ノ區域漸ク迫リ遂ニバクテリア類ノミガ有核ナルヤ無核ナルヤ判然セザリキ然ルニビュチュリー氏ノ一昨年來ノ研究ニ由レバ是等ノ生物ニモ矢張核ノ存在スルガ如シ氏ハ主トシテ所謂硫黄バクテリアニ屬スル Chromatium Okenii 及ヒ Ophidomonas jenensis ヲ精シク研究シ且比較ノ爲メ下等藻類ナル Oscillaria 及ビ Spirochæta ナゾヲ研究サレタリ

前ニ掲ゲタル二種ノバクテリヤハ鞏固ナル膜ヲ有シ含有物ニハ二ノ部分ヲ判然區別スベシ第一直ニ膜ニ接スル所ノ皮ノ部分ハヘマトキシリン及ビ其ノ他染核色素ヲ以テ少シモ染マラズ是ニ反シテ中央ノ部分ハ濃ク染マリ且其ノ中ニ一層濃ク染マル所ノ蜂巣狀ノ構造ヲ觀察スベシ硫黄バクテリアニ固有ナル硫黄ノ粒ハ是ノ中央ノ部分ニアリ是ニ反シテ其固有ナル色ハ前ニ記シタル皮ノ部分ニアルナリ中央ノ部分ハ硫黄粒ノ外又小ナル特異ノ粒ヲ包含ス是等ノ粒ハヘマトキシリンヲ以テ少シ赤ク染ルナリ即チ中央ノ他ノ部分ハアルカリ反能ノヘマトキシリン色ヲ呈セドモ是等ノ粒ハ酸性反能ノヘマトキシリン色ヲ現ハスト云フ中央部ヨリ四方膜ニ向テ棒ノ如キヨク染マルモノ放射ス前記ノ色素ハ皆此ノ棒ニ存シテ他ノ部分ハ全ク無色ナリ且又赤色ノ粒ハ主トシテ中央部ニアレドモ時トシテハ又皮ノ部分ニモ存スルヿアリト

以上簡略ニ述ベタルガ如キ部分ハ他ノバクテリアニモ存シ又藻類ニモ證明スルヲ得ベシ固ヨリ前記ノ色素ト硫黄粒ハ硫黄バクテリアニ固有ノモノナリ今是等ノ構造ヲ Euglena ノ如キ原蟲ト比較スルトキハバクテリア及ビ藻類

●ヒオドシノ發生 ―在靜岡丹羽甲子郎氏ヨリ某氏ヘノ通信中ニ「偖今年ハヒオドシ非常ニ發生致シ或ル部分ニテハ木枝ヲ打テハ十五六匹程モ飛出ス其仔蟲ハ小枝ニ十四五匹モ附着シ居リ實ニ近年稀ナル發生ニ御座候故ニ仔蟲ノ植物ニ及ボス慘毒モ亦タ非常ナルモノニ御座候小生ハ明治十四年非常ノ發生ヲ實見致シ候得共今年ハ其年ヨリモ甚シカラント存候」云々トアリ

●桃酸漿(もゝほうづき)　人若シ溝渠ノ水面ヲ望ムトキハ三三五五此所彼所ニ赤塊ノ蠢動スルヲ見ルベシ是即チ金魚ノ餌トスル俗ニ所謂ユルわかこ又ぼうふら又或ル地方ニテハもゝほうづき(色赤クシテ球狀ノ塊ヲナセルヨリ此稱アリ)トモ云フ所ノ虫ナリ一寸肉眼ニテ見ルトキハ只赤キ糸ノ如クナレ𪜈之ヲ顯微鏡下ニ照シ能ク視ルトキハ百以上ノ關節ヨリ成リ頭モアレバ尾モアリテ關節毎ニせーちート云フ硬毛ヲ有セリ此硬毛ハ背二列腹二列都合四列ニ並ビテ其末端ハ二股ニ裂ケ鈎狀ヲナセリ体ノ後方三分一ニアル硬毛ハ其末端ニ五六ノ糸條相集リテ成レル總ヲ有セリ此蟲ノ水中ニアルヤ頭ヲ泥中ニ衝キ込ミ尾ヲ水中ニ出シテ振リ回ハセリ又此蟲ト同居セル能ク相似タル虫アリ是モ矢張リ頭ヲ泥土ノ中ニ隱シ尾ヲ出シテ絶ヘズ振リ回ハセリ硬毛ハ四列ナレ𪜈鈎狀ヲナサズ其外ニ背列ニ細長ナル糸狀硬毛雜レリ又体ノ後方四分一程ハ背腹各一列ノせらヲ有セリ肉眼ニテ見ルトキハ毛糸ノ如ク顫動セリ血管此中ヲ通過シテ呼吸ノ作用ヲナスヿ猶魚ノせらニ於ケルガ如シ前者ノ体長ハ最長ナルモノハ七セメ程アリ後者ハ遙カニ大ニシテ最長ノモノハ二十セメ程モアリテ大サモ又之ニ稱フ、兩者𪜈丘蚓ノ種類ニシテ卽チ Ord Oligochætæ, Subord. Limicolæ, Fam. Tubificidæ ニ屬セリ、前者ハ Limnodrilus sp., ニシテ後者ハ Tubifex sp., ナリ、產卵期ハ八九月頃ニシテ卵ハ母体ノ割合ニ大ナリ皆殼ノ中ニ包マレ大抵一殼ノ中ニ二箇或ハ三箇時トスルト五箇モ在ルヿアリ又一箇ノ時モアリ、卵ノ分裂ハ不規則ナレバ數回分裂シタル後ハ何レノ細胞ガ如何ニ分裂シタルカヲ知ル能ハズ然レ𪜈最初三四回ハ之ヲ尾スルヲ得ベシ暑中休暇

ハ此段併セテ御通知致シ置候也

●會員彙報

入會

農科大學生徒　中村　鼎君
靜岡縣靜岡市　丹羽甲子郎君

●寄贈交換書目　先月中本會ニ領收シタル者左ノ如シ

東京醫學會雜誌第五卷九十號　東京醫學會
植物學雜誌第五卷五十一號　植物學會
大日本農會報告第百十八號　大日本農會
擴農會雜誌第二十二號　擴農會
牧畜雜誌第五十七號　牧畜雜誌社
東洋學藝雜誌第百十六號　東洋學藝社
日本蠶業雜誌第三十九號　日本蠶業雜誌社
大日本水產會報告第百九號　大日本水產會
北水協會報告第六十三號　北水協會
北海之殖產第九號　勸農協會
成醫會月報第百十二號　成醫會
日本植物志圖篇第一卷八集　牧野富太郎
明治廿四年節用集壹部　明治生命保險會社

ノ所謂中央ノ部分ハ正シク細胞ノ核ニシテ赤色ノ粒ハ即チクロマチンナルコ明ナリト云フ極細小ノバクテリアニ至リテハ前記中央部分ニ相當スル部分ノミ存シテ皮ノ部分ヲ證明スルコ能ハズ故ニ是等ハ膜ヲ有スル核ト見做スベシト是ノ事實ハ理論上ヨリ曰フモ然ルベキコナリトビュチュリー氏ハ主張セリ即チ近來ノ研究ニ由レバ核ハ細胞ノ生活作用及ビ其ノ官能ニ必要ノモノナルコ明ナリ若シ然ラバ無核ノ細胞トハ實ニ解シ難キコナリ始ニ起リタル生物ハ無核ノ細胞ニ非ズ正シク核ニシテ原形質ハ後ニ加ハリタルモノナリト考フル方解シ易シト然レ𪜈核ナルモノハ隨分複雜ナル構造ヲ有スルモノナレバ是ガ始メテ起リシモノナリトハ又解シ難キ所ナリ然シ極始ニ生ジタル核ハ極々簡單ノモノニシテ殆ンド核ト稱ス可ラザル程ノモノナリシナラム故ニ到底ヘッケル氏ノ所謂モチラト考ハ餘リ異ナリタルモノニ非ザルベシ　（五島）

●地方諸君ニ望ム　本號ニハ地方ノ諸君ヨリノ投稿殊ノ外多ク何レモ有益ナル論文ニシテ我國動物學進歩ノ一徴トシテ實ニ祝スベキ事ナリ然レ𪜈動物學ニ熱心ナル人ハ尙ホ此外ニ數多アルベシ我輩ノ切ニ希望シテ已マザル處ハ何事ニテモ其大小輕重ヲ問ハズ同好ノ人ニ報知スベキ事アル人ハ遠慮ナク本誌ニ投稿シ本誌ヲ以テ我學ヲ進ムル一大機關トセラレンコヲ

## 東京動物學會記事

●例會　去明治廿四年五月十六日午后二時ヨリ帝國大學動物學教室ニ於テ月次會ヲ開ク五島清太郎君ハ Distoma, Polystoma, Cestodes 三類ノ交尾法ニ就テ飯島魁君ハ對馬產鳥類ニ就テ演說セラレタリ當日出席員十七名午后四時散會ス

●會員ヘ通知　丘氏稿海產動物保存法別摺出來シ居レバ兼テ公告シタル如ク會員中右御望ノ諸君ハ自ラ理科大學動物學教室內動物學會ヘ來ラルヽカ或ハ郵便切手二錢ヲ添ヘ請求アレバ一揃宛御渡シ申ヘク候也

追テ飯島氏稿日本產蝸牛類別摺モ不日相揃申ベケレ

動物學雜誌第參拾參號
明治廿四年七月十五日發兌

# ●蚯蚓ノ解剖

## 總論

松井敬勝

此一章ハ「ハックスレー」氏及ヒ「マーチン」氏ノ物セラレタル動物實驗書ヨリ譯述セシモノニシテ重モニ Lumbricus terrestris. ニ就テ論述シタルモノナレハ我邦ニ産スル蚯蚓（東京ニハ今日知レタル處デハ四種アリ Perichoeta 二種 Lumbricus 二種ナリ是等ハ甚通常ノモノニシテ我邦大抵ノ地ニハ居ルコト思ハル肉赤色ニシテ甚大、撥剌地上ニ跳ルモノ及ヒ帶綠橄欖色ノモノ是二種ハ Perichoeta ニ屬シ黄赤ノ兩輪互ニ相次ギ之ヲ切ルトキハ黄色ノ汁ヲ出スモノ及ヒ帶(clitellum)甚タ著ルシクシテ帶暗黑肉赤色ノモノ是二種ハ Lumbricus ニ屬ス）トハ異ナル點アルベケレ圧今逐一之ヲ撿査スルノ暇ヲ得ザレバ假リニ原文ノ儘ヲ譯述セリ他日各機關ノ條目ヲ逐テ解剖ノ方法ヲ記述スル際符合セサル處ハ其都度訂正スベシ

蚯蚓ハ常ニ濕地ニ住ス濕氣ハ其生存ニ欠クベカラザルモノナリ晝間ハ土中ニ竇穴ヲ穿チ其中ニ隱レ夜間出テヽ食物ヲ求メ又早朝ニ出テヽ孳尾ス冬期及ヒ夏期土用中ハ竇穴ノ中ニ隱レ出ツルコトナシ

竇穴ノ裡面ハ通例平滑ナレ圧屢々細礫ヲ以テ被ハルヽコトアリ穴口ハ屢々其糞塊ヲ以テ圍繞サレ又自ラ引來リタル木葉ヲ以テ擁塞サルヽコトアル又恰モ蓋ノ如ク時ニハ比較的大且重キ石ヲ以テ蔽ハルヽコトアリ

蚯蚓ハ全長通シテ一樣ノ太サヲ有シ左右相對ニシテ口及肛門ハ其兩端ニアリ蝦蟹ノ腹部ニ見ル所ノ關節相對（メタメリックシンメトリー）ハ蚯蚓ニ於テハ全體ニ存ス體ノ外部ハ夥多ノ關節ニ綁緊サレ其數ハ生殖機ノ熟シタルモノニハ小ニシテ六十八大ニシテ二百以上ニ達セリ或ル內臟ハ各關節ニ反覆シテ排列セリ各關節ノ表面ハ少ナク圧二小部分ニ區畫サル然圧

バ此段併セテ御通知致シ置候也

●會員彙報

入會

農科大學生徒　中村　鼎君
靜岡縣靜岡市　丹羽甲子郎君

●寄贈交換書目　先月中本會ニ領收シタル者左ノ如シ

| | |
|---|---|
| 東京醫學會雜誌第五卷九十號 | 東京醫學會 |
| 植物學雜誌第五卷五十一號 | 植物學會 |
| 大日本農會報告第百十八號 | 大日本農會 |
| 擴農會雜誌第二十二號 | 擴農會 |
| 牧畜雜誌第五十七號 | 牧畜雜誌社 |
| 東洋學藝雜誌第百十六號 | 東洋學藝社 |
| 日本蠶業雜誌第三十九號 | 日本蠶業雜誌社 |
| 大日本水產會報告第百九號 | 大日本水產會 |
| 北水協會報告第六十三號 | 北水協會 |
| 北海之殖產第九號 | 勸農協會 |
| 成醫會月報第百十二號 | 成醫會 |
| 日本植物志圖篇第一卷八集 | 牧野富太郎 |
| 明治廿四年節用集壹部 | 明治生命保險會社 |

ノ所謂中央ノ部分ハ正シク細胞ノ核ニシテ赤色ノ粒ハ即チクロマチンナルヿ明ナリト云フ極細小ノバクテリアニ至リテハ前記中央部分ニ相當スル部分ノミ存シテ皮ノ部分ヲ證明スルヿ能ハズ故ニ是等ハ膜ヲ有スル核ト見做スベシト是ノ事實ハ理論上ヨリ曰フモ然ルベキヿナリトビュチュリー氏ハ主張セリ即チ近來ノ研究ニ由レバ核ハ細胞ノ生活作用及ビ其ノ官能ニ必要ノモノナルヿ明ナリ若シ然ラバ無核ノ細胞トハ實ニ解シ難キヿナリ始ニ起リタル生物ハ無核ノ細胞ニ非ズ正シク核ニシテ原形質ハ後ニ加ハリタルモノナリト考フル方解シ易シト然レ𪜈核ナルモノハ随分複雜ナル構造ヲ有スルモノナレバ是ガ始メテ起リシモノナリトハ又解シ難キ所ナリ然シ極始ニ生ジタル核ハ極々簡單ノモノニシテ殆ンド核ト稱ス可ラザル程ノモノナリシナラム故ニ到底ヘッケル氏ノ所謂モネラト考ハ餘リ異ナリタルモノニ非ザルベシ　（五島）

●地方諸君ニ望ム　本號ニハ地方ノ諸君ヨリノ投稿殊ノ外多ク何レモ有益ナル論文ニシテ我國動物學進歩ノ一徴トシテ實ニ祝スベキ事ナリ然レ𪜈動物學ニ熱心ナル人ハ尚ホ此外ニ數多アルベシ我輩ノ切ニ希望シテ已マザル處ハ何事ニテモ其大小輕重ヲ問ハズ同好ノ人ニ報知スベキ事アル人ハ遠慮ナク本誌ニ投稿シ本誌ヲ以テ我學ヲ進ムル一大機關トセラレンヿヲ

## 東京動物學會記事

●例會　去明治廿四年五月十六日午后二時ヨリ帝國大學動物學教室ニ於テ月次會ヲ開ク五島清太郎君ハ Distoma, Polystoma, Cestodes 三類ノ交尾法ニ就テ飯島魁君ハ對馬產鳥類ニ就テ演説セラレタリ當日出席員十七名午后四時散會ス

●會員ヘ通知　丘氏稿海產動物保存法別摺出來シ居レバ兼テ公告シタル如ク會員中右御望ノ諸君ハ自ラ理科大學動物學教室內動物學會ヘ來ラルヽカ或ハ郵便切手二錢ヲ添ヘ請求アレバ一揃宛御渡シ申ヘク候也

追テ飯島氏稿日本產蝸牛類別摺モ不日相揃申ベケレ

動物學雜誌第參拾參號
明治廿四年七月十五日發兌

# ●蚯蚓ノ解剖

## 總論

松井敬勝

此一章ハ「ハックスレー」氏及ヒ「マーチン」氏ノ物セラレタル動物實驗書ヨリ譯述セシモノニシテ重モニ Lumbricus terrestris. ニ就テ論述シタルモノナレハ我邦ニ產スル蚯蚓（東京ニハ今日知レタル處デハ四種アリ Perichoeta 二種 Lumbricus 二種ナリ是等ハ甚通常ノモノニシテ我邦大抵ノ地ニハ居ルコト思ハル肉赤色ニシテ甚大、撥揃地上ニ跳ルモノ及ヒ帶綠橄欖色ノモノ是二種ハ Perichoeta ニ屬シ黃赤ノ両輪互ニ相次ギ之ヲ切ルトキハ黃色ノ汁ヲ出スモノ及ヒ帶(clitellum)甚タ著ルシクシテ帶暗黑肉赤色ノモノ是二種ハ Lumbricus ニ屬ス）トハ異ナル點アルベケレ𪜈今逐一之ヲ撿査スルノ暇ヲ得ザレバ假リニ原文ノ儘ヲ譯述セリ他日各機關ノ條目ヲ逐テ解剖ノ方法ヲ記述スル際符合セサル處ハ其都度訂正スベシ

蚯蚓ハ常ニ濕地ニ住ス濕氣ハ其生存ニ欠クベカラザルモノナリ晝間ハ土中ニ竇穴ヲ穿チ其中ニ隱レ夜間出テ、食物ヲ求メ又早朝ニ出テヽ孳尾ス冬期及ヒ夏期土用中ハ竇穴ノ中ニ隱レ出ツルコトナシ

竇穴ノ裡面ハ通例平滑ナレ𪜈屢々細礫ヲ以テ被ハルヽコトアリ穴口ハ屢々其糞塊ヲ以テ圍繞サレ又自ラ引來リタル木葉ヲ以テ擁塞サルヽコトアル又恰モ蓋ノ如ク時ニハ比較的大且重キ石ヲ以テ蔽ハルヽコトアリ

蚯蚓ハ全長通シテ一樣ノ太サヲ有シ左右相對ニシテ口及肛門ハ其兩端ニアリ蝦蟹ノ腹部ニ見ル所ノ關節相對（メタメリックシンメトリー）ハ蚯蚓ニ於テハ全體ニ存ス體ノ外部ハ夥多ノ關節ニ緋緊サレ其數ハ生殖機ノ熟シタルモノニハ小ニシテ六十八大ニシテ二百以上ニ達セリ或ル內臟ハ各關節ニ反覆シテ排列セリ各關節ノ表面ハ少ナク𪜈二小部分ニ區畫サル然𪜈

理的作用ニ至テハ了解サレタル點ハ實ニ僅少ナリ

咽喉ト膆窩トノ中間ニ三對ノ食道嚢横ハレリ冬期ニハ最モ小ニシテ其一個又ハ數個欠乏スルヿ屢々アリ時有テカ食道トノ連係抹却シ又稀ニ連係ノ痕跡ヲモ止メサルヿアリ

此食道嚢ハ非常ニ脉管ニ富ミ帶乳白色ノ物質ヲ含メリ此物質ハ細微ノ粉末ニナリタル又時ニハ直徑一ミメニ達スル凝結塊ヲナセル炭酸石灰ヨリナレリ故ニ是ヲ名ケテ石灰腺ト云フ然𪜈ソハ如何ナル目的アリテ存スルモノナルカハ未タ充分説明スル能ハサルナリ

体壁ハ一層ノ長キ外皮細胞ニ由テ被胞サレ其細胞ノ多クハ細小ナル一列細胞ヨリナル外皮腺ニ變化セリ此被包セル外皮及ヒ其汾泌ニ由テ生シタル薄層(クユテクユラ)ハ口及肛門ニ於テ榮養管ノ内皮及ヒ其汾泌ニ由テ生シタル薄層ト相連接セリ然𪜈体壁ノ大部分ハ二樣ノ筋肉纖緯ヨリ成レリ即外方ニハ繞環筋纖緯アリ直ニ之ニ次キ縱走筋纖緯アリ此樣二ノ筋纖緯ハ体ノ兩端ニ於テ榮養管壁ノ組織ニ入リ其環縱兩筋纖緯ト相連接セリ

体壁ト榮養管壁トハ体腔ニ由テ相離隔セリ蛙ノ如キハ其腸ヲ支吊スルニ中央縱走ノ腸間膜ヲ以テスト雖𪜈蚯蚓ニ至テハ關節間ノ隔膜ヲ以テ之ニ代フ繞環筋纖緯此隔膜ノ中ニ發達シ放射狀ヲナセルモノハ体壁ヨリ榮養管壁ヘ横過セリ体壁ノ裡面ハ体腔膜ヲ以テ被ハレ体腔膜ハ碁盤目ヲナセル内皮ヲ以テ包マレ關節隔膜及内臓ノ表面迄追行スルヲ得ヘシ已ニ記述シタル黄褐色組織ハ即是ナリ、斯ノ如ク体壁及榮養管壁ハ判然タル少ナク𪜈三層ヨリ成レルヿ明ナリ即保護薄層、皮層及筋肉層是ナリ是等三者ハ皆口並ニ肛門ニ於テ相連續シ其三者相接スルノ序次ハ異ナルヿナシ只体壁ノ薄層ハ外面ニアリ榮養管壁ノ薄層ハ内面ニアルノ差アルノミ

体腔ハ關節隔膜ニ由テ互ニ相別カル斯クシテ生シタル關節相對ハ排泄器ニモ伴ヘリ即一對ノ排泄器ハ只前三關節ヲ除ク外各關節隔膜ニ付着セリ斯ノ如ク關節毎ニ排列セルヲ以テ關節器ノ名稱アリ又腎臓トモ名ツク各器ハ紆曲

此區分ハ只外皮ニノミニ止リテ内臓トハ少シモ相關スルコトナシ蠕體ハ非化石灰質ノ虹色ヲ有スル薄軟皮層(クユチクユラ)ヲ以テ一面ニ被包サル一ノ手肢ト稱スベキモノナシト雖𪜈四列ノ硬毛(シーチー)ニ由テ移動ヲナス此硬毛ハ前數節ヲ除ク外各關節ニアリテ強力ノ筋肉裝置ニ相連レリ硬毛其物ノ外皮ノ陷沒ニ由テ生スル嚢中ニ深ク包埋サルヽ縱令ヒ硬毛ヲ失フコトアルモ又再ヒ生スルモノナリ

後部ノ數關節ハ生活中上下ニ平遍シ其蠕行スルニ當テ一種特有ノ箆形ヲ現ハス其末端ニハ肛門ノ開ケルヲ見ルベシ通常地上ニ出ツルトキハ此開張シタル末端ニ由テ以テ其體ヲ竇穴中ニ保テリ

蚯蚓ハ雜食動物ナレ𪜈重モニ木葉ヲ食シ其中ニモ嗜好ニ適スルモノヲ撰擇ス土ト共ニ榮養管ヲ通過スル動植有機物ヨリ榮養ヲ取ルコト甚少シ榮養管ハ體ノ全長ヲ走レル一ノ直管ナリ口ノ次ニ外方ニ向テ反翻シ得ベキ薄壁ヲ有スル口腔(バツカルカビチー)アリ廣キ筋肉性吸啐的咽喉(フワリンクス)ニ開ケリ咽喉ハ長キ食道ニ連リ其後五分一ハ廣濶ニシテ開大シ得ヘキ膆窩(クロツプ)トナレリ之ニ次キ普通ノ蚯蚓ニテハ白色厚膜ヲ有スル器械的舂擣作用ヲナス胃(ギツザード)アリ胃ハ長キ腸ニ開キ終ニ左右ニ壓セラレタル肛門ニ由テ外界ニ通セリ腸ノ内面ハ其背面ニ於テ瓣積著ルシク發達シ其吸取面ヲ增大セリ之ヲTyphlosole ト云フ

腸壁ノ周圍ニ肝臟ノ名ヲ付シタル黃褐色ノ物質アリ腸ノ内腔ト些少ノ連係アルヲ見ズ然𪜈大血管ト相密接シシカモ之ニ由テ全ク被包サルヽ血管甚多シ由是觀之體腔ニ射出スル排泄物ヲ製出スルニアラズンバ血液ノ或ル成分ヲ製スルモノナラン

蚯蚓ノ腸液ハ消化作用ヲ有シ又口腔ニハ唾液腺ノ名ヲ付シタル小腺開ケリ、然𪜈消化作用ハ全ク榮養管內ノミニアルニアラズ如何トナレハ蚯蚓ノ食スルニ當テ消化液ヲ吐出シ生餌ヲシテ暫時其作用ヲ受ケシメ然ル後之ヲ口中ニ取レバナリ

今述ベタルモノヽ他ニ消化腺ノアルコトハ未タ知ラレサルナリ今述ベタル如キ榮養管ノ盲枝ハ稍々著明ナルモ其生

系ハ食道ノ上ニ位スル梨形ヲ有スル二箇ノ神經節ヨリ成リテ前方中央ニ於テ相合シテ腦ヲナセリ是二節ヨリ二條ノ聯鎖起リ蝦蟹ニ於ケル如ク全腹面ニ沿ヒ兩々相並ビテ後方ニ向テ走レリ而メ毎關節ニ於テ稍々張大セリ又是二節ハ神經纖維ヲ口腔及體ノ前端ニ分布セリ此後者ハ第一關節ニアル變性感觸性細胞ニ終レリ此細胞ハ此蠕蟲カ感觸機ヲ有スルヿヲ現表スルモノナリ此動物ノ神經系ニ關スル最モ緊要ナル事實ノ一ハ神經細胞ノ排置是ナリ蝦蟹ニ於ケル如ク神經細胞ハ神經節ノミニ止マラズ全軸ヲ通シテ正シク散布セリ(神經節張大及縱走聯鎖共ニ)

神經軸鞘ハ著ルシキ筋肉性ノモノニシテ殊ニ縱ニ排シタル三管纖緯ヨリ成ル背神經髓ニ關シテハ其効最モ著ルシ蓋シ此纖緯ハ非常ニ彈力性ノモノナル故筋肉性鞘ハ最モ効力アル保護機トナレバナリ生殖機ハ前七關節ニ限レリ其稍々復雜ナルハ重モニ精囊(セミナルベシクル)ノ成熟ノ狀体ニ歸ス、生殖腺ハ非常ニ細小ナレ𪜈能ク辨知スルヲ得ヘシ、成熟シタル卵ハ圓形有核細胞ヨリナリ可量ノ蛋黃ヲ含ミ蛋黃膜(ビテリンメンブレーン)ヲ以テ被包セラル、精蟲ノ母細胞ハ數々變遷シテ遂ニ幾多ノ糸狀精蟲トナリ各延長シタル有核頭ヲ有セリ斯ノ如キ特種ノ形狀ヲ有スル故ニ成熟シタル精蟲ヲ目擊スルヿハ甚容易ナリ

蚯蚓ハ兩性動物ナレ𪜈單獨ニテ成孕スルヿ能ハサルナリ其孳尾スルニ當テヤ(通例曉天ニ於テス)相方ノ頭尾ノ方向互ニ反對セリ斯クシテ成熟シタル精蟲ヲ交換ス而其精蟲ハ竟ニ受精囊ニ溜止ス之ニ次テ暫時間ニ帶ハ卵殼ヲ汾泌シ其中ニ精蟲ト𪜈ニ產卵ス、受精シタル卵ハ全分裂(ホロブラスチツク)ヲナス其當初細胞ノ二層生ス其一層ハ他層ヨリ速ニ分裂シ蛙ノ卵ノ如ク色素ヲ有セズ他層ハ分裂スルヿ遲クシテ蛋黃ヲ含メリ細胞ハ速ニ延生シテ大細胞ヲ蔽ヒ遂ニ單ナル二層ノ囊即「ガストルラ」トナリ外面ハ顫毛ヲ有スルニ至ル、幼蟲ハ早ク左右相對メ占得シ体ノ延長スルニ從ヒ重モニ原腸壁(アーケンテリツクウオール)ヨリ相對ノ細胞堆生シテ關節的ニ排列ス体ノ關節ハ其首ヲ此中層關節ノ現出スルニ起基ス、此中層中ニ生シタル中央腔ヨリ体腔起リ其腔壁ノ前後合シ

シタル管ヨリ成リ之ヲ三部分ニ別ツヲ得ヘシ其中部ハ血管ニ富ミ內部ハ薄壁精微ニシテ曲狀ヲナシ隔膜ヲ貫通シ顫毛漏斗ニ由テ前關節腔ニ開ケリ外部ハ室孔多キ筋纖緯ヨリ成リ腹列硬毛ノ近傍ニ於テ外界ニ開ケリ紆曲管ノ內面ハ一面ニ顫毛ヲ以テ被ハレ內ヨリ外ニ向テノ流動ハ職トシテ之ニ由ル體腔ト外界トノ間ニ存スル此間接通路ニ加フルニ直接ノ通路アリテ每關節ノ背面ノ中央ニ存ス之ヲ中央背孔ト云フ然モ其作用ノ精細ニ至テハ未タ充分ナル說明アラサルナリ

關節ノ隔膜下方ハ不完全ナルヲ以テ體腔ヲ畫然區封スルコトナシ體腔ハ生活中無色ノ液ヲ含メリ其中ニハ無數ノ有核アメーボイド球ノ存スルヲ見ル

眞正赤血液ハ一ノ脉管系ニ由テ循環シ體腔ト直接ノ通交アルヲ見ズ脉管系ノ大幹ハ六條アリ即チ腸上脉管、腸下脉管、腹髓上脉管、腹髓下脉管及二條ノ小髓側脉管是ナリ是等脉管ハ關節的ニ相連接シ大ニ有能ナル毛細管系アリテ之ト相接續セリ

第六ヨリ第十二ニ至ル關節ニ於テ相合セサル二樣ノ脉管アリ即其一ハ腸上及髓上ノ二幹ヲ連接スル六對ノ繞食道脉管ナリ其二ハ只第十二關節ニ於テノミ腸上脉管ト相連接スル一對ノ側食道脉管是ナリ此第二ノ脉管ノ血液ノ要ハ食道ノ前部及ヒ其石灰腺ニ供給ヲ與フルニアリ帶(クリテラム)ノ脉管ニハ動物界裡稍格外狀體ヲ呈セリ蓋シ上表毛細管茲ニ來リテ外皮細胞間ニ枝分シテ外皮血網狀(エピダーマルブラツドプレキサス)ヲナセハナリ

蚯蚓ノ呼吸作用ヲ經營スル正座ハ充分判明ナラズト雖モ赤血液カ直ニ其作用ヲナスハ殆ンド疑ナキガ如シ血液ハ水樣漿液ヨリナリ極メテ微細ナル透明無核ノ血球其中ニ浮ヘリ此血球ハ大小、形狀稍々變易ク通例一インチノ三千分ノ一ノ長ヲ有セリ其構造ノ性狀ハ脉管ノ內皮ノ細胞ノ核ト甚能ク類セリ

蚯蚓ノ赤血液ト蛙ノ赤血液ト最モ著ルシク異ナル點ハ前者ハ其色料ノ血漿中ニ洽ク散布シ血球ト些少ノ關係ナキニアリ

神經系ハ非常ニ簡單ニシテ且面白キ狀體ヲ見ハセリ神經

端ヲ羽ノ生際(ハヘギハ)ニテ壓シ入レ最長尾羽ノ末端マデヲ測ルベシ

四）嘴峰或ハ單ニ嘴　ハコンパスニテ額羽ノ生際或ハ嘴ノ始メテ裸出スル點ヨリ嘴端マデノ直徑ナリ、決シテ嘴峰ニ沿フテ測ルベカラズ

五）走脚或ハ單ニ脚　ハ全長全ク裸出シ鱗ヲ以テ覆ヘル足部ニシテ必ズ前面ニ於テ、上ハ脛ト關節スル凹ミヨリ下ハ中趾ノ根本ナル關節ノ凸マリ（趾ヲ曲ゲタル時生ズル）マデヲ測ルベシ

六）趾　ハ内、中、外、後、トモニ各自根基ノ關節ヨリ爪ノ上面ナル生際若クハ爪端マデヲ測ルベシ、但シ其都度「爪ヲ除ク」或ハ「爪共ニ」ト記載スルヲ要ス

---

## ○本邦產さぎ科 Ardeidae

目下中夏ノ候ニ際シ青々ト豊年ヲ告グル稻田ニ或ハ水邊ニ生繁ル葦ノ中ニ或ハコンモリシタル樹ノ上ニ種々ナルさぎ族ノ群リ居ルハ國中何ヅレノ地方モ同ジナルベシ、此際愛鳥家ハ遠眼鏡モテ其イトモ優美ナル形狀動作ヲ觀察シ無限ノ樂ミト利益ヲ享クルナルベク又地方ニヨリテハ其標品ヲモ集ムルヿ難カラザルベシ、左レバ今爰ニ參考ノ爲メさぎノ種類ヲ記スルハ時ニ適ヘルナランカ、余ノ編纂シタル鳥ノ目錄中亞綱 Herodiones ニ屬スルモノ十六種ヲ擧ゲタルガ中一種即こうのとりハ自ラ一科ヲ爲シ而シテ爾他ノ十五種ハ皆さぎ科ニ屬スルモノナリ、其十五種ハ之ヲ左記ノ三屬ニ入レ纏ムルガ最モ穩當ノ分類法ナル樣ニ覺ユルナリ、即チ

さぎ科
- 尾羽十二枚、内趾ハ外趾ヨリモ短或ハ同長ナリ
  - 裸出セル脛ノ下端部ハ後趾(爪ヲ除キ)ヨリモ長シ……甲) Ardea. さぎ屬
  - 裸出セル脛ノ下端部ハ後趾ヨリモ判然短シ……乙) Nycticorax. ごゐさぎ屬
- 尾羽十枚、内趾ハ外趾ヨリモ判然長シ……丙) Botaurus. よしごゐ屬

---

### 甲、Ardea さぎ屬

此屬ニ少クモ七種アリ（別ニ變種ト看做シタルモノ二アリ）、今各種ヲ記スルニ先チ人爲的ニ製調シタル索引ヲ掲ゲ實物ト種名トヲ同定(アイデンティファイ)スルノ便ニ供ス

關節隔膜ヲ生スルナリ

神經系ハ被包セル所ノ外皮ヨリ起リタルモノナリ腸上脉管ハ其初ハ相對ナリ幼蟲ハ後端ニ於テ新關節ノ增加スルニ由テ延長ス其特性ナル搆造ノ簡單且一樣ナルヿハ成長ニ至ルモ些少ノ變化ノミニテ其大体ヲ保テリ

帶ハ生長シタル蚯蚓ニハ常ニ辨別シ得ルモノト考フベカラズ蓋シ帶ハ定時ノ張大ヲナシ又二イ、チ位ノ若蟲ニアルヿアリ六或ハ八イ、チニモナリタルモノニナキヿアレバナリ

## 鳥雜記(二)

飯島魁

○鳥體ノ寸方ヲ取ルヿニ就キテ

或學友ノ忠告ニ曰ク鳥體ノ寸方ヲ取ル一定ノ法ヲ世ニ示シ置カザレバ人々思ヒ々々ノ方法ヲ用ユルガ故ニ往々不都合ヲ感ズルヿアルベシト、是レ甚ダ尤モノヿニテ不都合ヲ覺ヘタルヿ實際屢々アリ、故ニ余ハ既ニ此雜誌ニテ剝製法ヲ記述シタル片ニ其方法ノ概畧ヲ述ベタルニ拘ラズ今又爰ニ重複ヲ厭ハズ實地ニ於テ必要丈ケヲ記シ置クベシ

尖鋭ノ端アルコムパスハ寸方ヲ取ルニ欠ク可ラザル品ナリ且又尺度ニハ必ズ日本ノ金尺カ左ナクハ佛ノミリメートルヲ用ユルヲ要ス

一)長　ハ鳥ヲ仰向ケニ置キ無理ヲ爲サズニ頸ヲ延バシ前方ニ向ケタル嘴ノ端ヨリ尾羽ノ端マデヲ測ルナリ

二)翼長或ハ單ニ翼　ハ腕關節ヨリ最長翼羽ノ末端マデノ直徑ヲ測ルナリ、腕關節トハ翼ヲ折曲シタル片前ニ向ヒタル角ヲ指先キニテ觸リ見ル片ハ二骨ノ間ニ必ズ小キ凹ミノ在ルモノナリ、是即チ腕關節ニテ小鳥ナレバ此所ニコンパスノ一脚端ヲ置キ他ノ一脚端ヲ置キ最長翼羽ノ末端ニ置キ、其コンパスヲ尺度ニ當テヽ測ルナリ、大鳥ナレバ紐ヲ用ユルノ必要アルガ必ズ翼ノ裏面ニ於テ彼ノ二ケ所ノ間ニ眞直グニ引張リテ測ルベシ、决シテ表面ニ密着セシムベカラズ

三)尾長　ハ尾羽ヲ正中ニテ左右ニ分ケコンパスノ一脚

ナリ、胸前ニ灰白ノ簑羽ヲ垂ル、頭上並ニ冠羽黒シ（但シ幼鳥ニテハ頭上銹赤ナリ）、頸部茶色ニテ左右及ビ後ニ黒條ヲ縦走セシム、股亦茶色ナリ、嘴ハ綠黄色、足ハ黒赤ナリ

此種ハ廣ク歐洲、亞弗利加、及ビ亞細亞ニ產ス、本邦ニテハ從來只沖繩群島中宮古島ニ產スルヲ知ルノミ、明治二十二年ニ該島役所長西常央氏美麗ナル二標品ヲ我ガ理科大學ニ寄贈セラル、氏ノ言ニ此鳥ハ三四月頃麥畑ニ數多居レリト云ヘリ、上野帝國博物館ニモ同氏ノ採集ニ係ル一標品アリ、九州邊ヘモ此鳥ノ來ルヿアルナランカ、鳥學家ノ注意ヲ要ス

三）**A,** alba, Lin.

通常本邦人ノ大さぎ又ハもゝじト稱フル鳥ニハ二種族（レース）アリ、甲ハ標式的ノ A. alba ニシテ乙ハ其一變種ト看做スべキ A. alba modesta ナリ、甲ニハ在來ノ俗名ヲ殘シ置キ乙ニハ新ニ小もゝじろノ名ヲ附セナバ後來ノ混同ヲ防グニ足ルベシ、左ニ甲乙ヲ別々ニ記載ス

甲）もゝじろ又大さぎ（學名前出）

是ハ本邦ニ見ル純白ナルさぎ中ノ最大ナルモノニシテ翼ノ長サ一尺三寸二分餘ナリ、歐洲南部、亞弗利加、亞細亞等ニ產シ、頭及ビ胸ニハ簑羽（ミノゲ）ヲ生ズルヿナキモ兩肩ニハ生殖季節ニ能ク發達セリ、嘴ノ色ハ夏黒ク冬黄ナリ、本邦ヘハ冬ノ間ニ限リ時々渡リ來タルモノヽ如シ左レバ本邦ニテ獲タル標品ニハ其嘴皆黄色ナリ、足ハ黒色、但シ脛ノ裸出セル部分ニハ汚キ黄白ノ斑アリ、此故ニもゝじろノ通稱アルナラン

乙）小もゝじろ（A. alba modesta, (J. E. gray.)）

是ハ形狀、色取リニ於テ甲ト毫モ異ナラズ唯體軀ノ少シク小ナルノミ、即チ翼長必ズ一尺三寸以下ナリ、併シナガラ又本邦ヘ渡リ來ル時ニ於テ異ナレリ、即チ夏ニ來ルモノニテ東京灣ヘハ既ニ四月中ニ着スト云フ、眞もゝじろヨリモ稍々多ク來リ、長崎ニテ獲タル人アリ又千島エトロプニテ見タル人アリ、西比利亞ノ南部、支那、印度、びるま等ニモ居リテ生殖ス

A)羽色總身純白ノモノ
　a)下嘴ノ根基側面ニ生ズル羽ハ額ノ生際ヨリモ判然前
　ニ至ル、翼ハ一尺〇九分ヨリ長シ
　　a′)翼一尺三寸二分以上……………………(三ノ甲)
　　b′)翼一尺三寸二分以下……………………(三ノ乙)
　b)下嘴ノ根基側面ノ羽ハ額ノ生際ヨリモ前ニ達セズ、
　翼ハ一尺〇九分ヨリモ短シ
　　a′)嘴峰ハ中趾(爪ヲ除キ)ヨリモ短……………(四)
　　b′)嘴峰ハ中趾(爪ヲ除キ)ヨリモ長
　　　a″)嘴峰二寸二分ヨリモ短ニシテ黄色
　　　ナリ……………………(六ノ幼或ハ冬羽)
　　　b″)嘴峰二寸五分ヨリモ長
　　　　a‴)嘴黒色……………………(五)
　　　　b‴)嘴黄色……………………(七ノ乙)
B)羽色純白ナラザルモノ
　a)走脚ノ前面ハ一列ノ横鱗板ヲ以テ覆フ、翼一尺〇
　八分以下
　　a′)總身殆ド純白ナルモ頭、頸、及ビ背ニ赤茶色ノ
　　羽毛アリ……………………(六)
　　b′)喉邊ノ小部ヲ除キ總身灰黒色……………(七ノ甲)
　b)走脚ノ前面下部ハ六角鱗網狀ヲナシテ覆フ、翼一尺〇
　八分以上
　　a′)走脚ハ中趾ヨリモ遙カニ長シ、主ナル羽色ハ灰、
　　白、及ビ黒ナリ……………………(一)
　　b′)走脚ハ中趾ト凡ソ同長、主ナル羽色ハ黒、灰、
　　赤茶及ビ栗色……………………(二)

一)**A. cinerea, Lin.**　あをさぎ一名みとさぎ

是ハ大形ノ鳥ニシテ脊ハ銀灰色、翼黒シ、腹部ハ白シ、頭及ビ頸モ白ケレド頭上兩側並ニ後頭ハ黒ク黒色ノ長キ冠羽アリ、頸ノ前面ニハ黒點ヲ縦列ス、嘴ハ黄色、足ハ赤黒ナリ」幼鳥ハ頭上白カラズシテ灰色而シテ翼モ亦灰黒ナルガ故ニ、成鳥ト識別スベシ

此鳥ハ本邦中九州ヨリ北海道ニ至ルマデ見ル、但シ數多ナラズ、多分夏渡リ來リテ生殖シ冬ハ大陸ノ方ニ去ルモノナラン、歐洲、西比利亞ノ南部、支那及ビ印度ニテモ此鳥ノ營巣スルヲ知ル

二)**A. purpurea, Lin.**　むらさきさぎ(新稱)

是ハあをさぎト殆ド同大ノ鳥ニテ腮ト喉ノ外ハ羽色ニ白ミ少ナク、上部ハ翼ト共ニ灰黒ニシテ兩肩ニ灰色ト茶色ノ箕羽(ミノゲ)アリ、下部モ亦黒ズミテ胸ハ紫ガヽリタル銹赤

ベシ、此種ハ印度ノ海岸、馬來諸島、濠洲、南洋諸島ヨリシテ北ハ日本本島ニ至ルマデ產シ、通常黑白ノモノ相混ジテ棲息スト雖モ白色ノ者ハ稍々稀ニ屬ス、左ニ二種族ヲ別々ニ記ス

甲）くろさぎ（學名前出）

是ハ腮ヨリ喉ニカケテ縱走セル細キ白條ノ外總身灰黑色、嘴ハ黑ズミタル黃色ナリ、脚ハ少シク綠色ヲ帶ビ足底ハ黃色、爪端鈍ナリ」曾テ琉球、對馬、五島、等ニテ發見セラレ又理科大學ニ下總ノ國佐倉ニテ獲タルト云フ一標品アリ

乙）しろくろさぎ（A. jugularis greyi, gray.）

しろくろさぎトハ余ノ新ニ附シタル誠ニ可笑キ名稱ナルガ本トくろさぎナル名アリテ其くろさぎノ白キモノナルガ故ニ敢テ不當ノ名ニハ非ザルベシ、從來尋常ノしらさぎ若クハ中さぎト混同サレ居リタルモノト見ヘ別ニ和名ナカリシガ如シ」體形、脚ノ色、爪ノ有樣等くろさぎト同一ナルモ只羽色純白ニシテ嘴黃ナリ、大サト云ヒ中さぎノ冬羽ニ彷彿タレドモ嘴峰ノ中趾（爪共ニ）ヨリモ長キガ故ニ直チニ識別シ得ルナリ、本邦ニテハ曾テ沖繩諸島ニ之ヲ發見シタリ

乙、Nycticorax ごゐさぎ屬

A）走脚ノ前面下部ハ網狀鱗ヲ以テ覆フ
- a）嘴峰ハ中趾（爪共ニ）ヨリモ判然長シ （十一）
- b）嘴峰ハ中趾（爪共ニ）ト同長或ハ短シ
  - a′）嘴峰ハ一寸四分ヨリ短シ （十）
  - b′）嘴峰ハ一寸四分ヨリモ長シ
    - a″）翼羽灰色ニシテ白斑アリ或ハナシ （八）
    - b″）翼羽栗赤色ナリ （九）

B）走脚前面ハ趾ノ根基ニ至ルマデ橫鱗板ヲ以テ覆フ （十二）

八）**N. nycticorax.**(Lin.) せぐろおゐ、なべかぶり

中大ノ鳥ニシテ下部ハ一般ニ白ク又淡灰色ノ所アリ、翼及ビ尾ハ灰色、頭上及ビ脊ハ綠色ヲ帶ビタル黑ナリ、後頭ニ二三本ノ細長キ白羽ヲ生ズ」幼鳥ハ上部一般ニ灰茶色ニシテ翼ニ一白斑點アリ、俗ニ之ヲはしごひ（初年）又ハはんなべ（二年メ）ト稱ス、決シテ別種ニハ非ズ、三年メニ至リテせぐろごゐト成ルモノナリ」此種本邦ニ最モ普通

四）**A. intermedia,** Wagl. 中さぎ一名しまゝわり

總身純白、大サ小もゝじろト尋常しらさぎノ間ナリ、夏ハ脊及ビ胸ニ長キ簑羽ヲ生ジ就中脊ノ簑羽ハ尾先キヨリモ長キ事五寸程ナル事屢々アリ、嘴ハ冬ノ間ハ全ク黄色ナルガ夏ハ根基ノミ黄ニシテ餘ハ黒シ、翼長九寸七分乃至一尺〇五分、足趾共ニ黒ク、趾ハ甚ダ細長ク二寸五分（爪ヲ除）餘ノモノアリ

夏中ハ本邦何ヅレノ地方ニモ見、往々數多群ヲ爲セリ、南方ニハ冬モ止マルナランカナレド北地方ヨリハ去ルガ如シ、亞弗利加、印度、支那、馬來諸島及ビ濠洲ニモ此種ヲ產ス

五）**A. garzetta,** Lin. しらさぎ、小さぎ、いッぱらさぎ

北海道ニハ此種アリヤ未ダ該地ヨリ此種ニ係ル報道ナケレバ知ル能ハザレト本島並ニ以南ニハ四時止マリ居リテ最モ普通ノ純白ナルさぎナリ、中さぎヨリモ小體ナレド嘴ハ之ニ比シテ長シ而シテ其色ハ夏冬共ニ黒色ナリ、翼長八寸四分乃至九寸二分、夏ハ頭ニ二三本ノ長キ紐ノ如キ羽毛ヲ生ズ、趾ハ黄色ナルモ走脚ハ黒シ

此種ノ生殖地ハ南歐ヨリぺるしあ、印度、びるま、支那ヲ經テ日本ニ達ス

六）**A. coromanda,**（Bodd.） せうせうさぎ、あまさぎ

是ハしらさぎヨリモ稍々小形ニシテ翼長七寸六分乃至八寸四分、夏ハ頭、頸、胸及ビ脊ニ赤茶色ノ羽毛ヲ被ムル故ニ直チニ識別スルヲ得ベシ、冬ハ此赤茶色ノ羽毛落チテ全身全ク或ハ殆ド純白トナレド嘴ノ色ハ四季共ニ黄ナルガ故ニしらさぎト見別ケル事又難事ナラズ、勿論此鳥ノ日本ノ地ヘ來ルハ夏ノミニテ冬ハ居ラザルガ如シ、東京近在ヘモ來レドモ多クハ見ズ、北海道マデモ行クカ未ダ定カナラズ、元來此種ハ熱帶地方ノ者ナリトス

七）**A. jugularis,** Wagl. くろさぎ

くろさぎノ名ヨリ考フレバイツデモ黒色ノ樣ニ思ハルレド然ラズ純白ノモノモアリ、即チ同一種ナガラモ黒色ノ種族（レース）ト純白ノ種族アル鳥學上甚ダ面白キ鳥ナリ、時トシテハ斑（ブチ）ノモノヲ見ルガ恐ラクハ相交尾シテ生ズルモノナル

本鳥ハ南支那及ビ交趾支那等ニ常居スル鳥ニシテ夏月滿州ニ至ルマデ行クモノアリ而シテ本邦ニテ之ヲ發見シタルハ從來唯一回ニシテ我國ノ鳥學上功績アルブラキストン氏ガ明治十二年十月十二日ニ箱館ニ於テ幼鳥一羽ヲ獲タルヿアルノミ好鳥家ノ宜シク此鳥ニ注意アランヿヲ希望ス

丙、Botaurus よしごゐ屬

A)中趾(爪ヲ除キ)ハ嘴峰ヨリ遙カニ長ク、翼ハ八寸二分ヨリ長シ (十三)

B)中趾(爪ヲ除キ)ハ嘴峰ト凡ソ同長或ハ短ク翼ハ八寸二分ヨリ短シ

a)脛ハ關節マデ羽ヲ被リ、尾ハ中趾(爪ヲ除ク)ヨリ長シ (十四)

b)脛ノ下端ハ裸出セリ、尾ハ中趾(爪ヲ除ク)ヨリ短シ (十五)

十三) B. stellaris,(Lin.) さんかのごゐ

大形ノ鳥ニシテ翼長一尺許、嘴峰二寸三分許、走脚三寸許、中趾(爪ヲ除キ)モ亦三寸許」總身黃茶色ニシテ種々黑斑アリ、頭上黑ク、翼ノ大羽ハ赤茶色ニテ黑ノ鷹生(タカブ)アリ

此種ノ棲息地ハ西ハ英國ヨリ歐亞ヲ横切リテ東ハ日本ニ至ル、本邦中或地方(例ヘバ常州)ニハ中々多シト云ヘリ

十四) B. sinensis,(Gm) よしごゐ、ぢんのうさぎさぎ中ノ最小ナルモノニシテ翼長四寸二分乃至四分、嘴一寸六分許、走脚一寸五分許、中趾(爪ヲ除キ)一寸二分許リ、脛ハ必ズ關節ニ至ルマデ羽毛ヲ以テ覆フ

成鳥ハ頭上灰黑、頭側及後頸ハ赤茶色、下部一體ニ淡白ナル黃茶色ニシテ胸ノ邊ニ黑色ノ羽アリ、脊一樣ニ垢ジミタル暗茶色ナリ、雨覆ハ黃茶色、尾ハ翼ノ大羽ト共ニ灰黑ナリ」幼鳥ノ成鳥ト異ナルハ頭上ヨリ脊ニカケ上部一般ニ黃茶ニシテ黑茶ノ幅廣キ斑條アリ又下面ノ黃茶ハ成鳥ヨリモ濃ク黑茶ノ細キ縱條アリ

此種ハ印度、馬來、支那等熱帶ノ鳥ニシテ本邦ヘハ夏ノ初メヨリ來リテ子ヲ産ス夏月東京ノ近傍ノ葦ノ中ニ少カラズ

十五) B. eurythma,(Swinh.) 大よしごゐ

前種ニ比シ少シク大ナルカト思ハルナレド殆ド同大ト云フテ可ナリ、翼長四寸二分乃至六分、嘴一寸五六分、走脚及ビ中趾(爪ヲ除キ)ハ各々一寸五六分ナリ、通常前種

ノごゐさぎナリ、南歐、南亞細亞、日本、北亞米利加等ニ棲ミ且ツ生殖ス

九）**N. crassirostris,** Vigors　はしぶとごゐ（新稱）

是ハ小笠原島ニ產シ、其以外ニハ未ダ發見シタルコトナシ、体ハ前種ヨリモ大ニシテ嘴太ク鼻孔ノ所ニテ竪幅七分半乃至八分半アリ、嘴峰三寸六分ニシテ走脚ヨリモ長シ、翼長九寸、走脚三寸三分半、上嘴黑ク、下嘴白ク端黑シ、頭上黑ク白キ眉線アリ、後頭ニ三條ノ白長羽ヲ生ズ、其外上部栗色、下部ハ白シ

十）**N. goisagi,** Temm.　みぞごゐ、やまえぼ、えぼさぎ

中大ノ一種ニシテ頭上及ビ下頸ハ栗色或ハ黑茶色、脊及ビ翼ノ雨覆ハ灰茶或ハ黑茶ニテ暗色ノ小斑點アリ、翼ノ大羽ハ暗色ニテ端ハ灰茶色ナリ、尾ハ暗色、下面ハ茶色ニシテ黑栗、白、等ノ生アリ、嘴ハ暗綠色ニテ長サ一寸三四分許、翼長此種ハ日本ト臺灣ニ固有ナルモノニシテ餘リ多クハ居ラザレド時々山林中ニ見掛クルコトアリ

十一）**N. javanicus staguatilis,**（Gld）　みのごゐ、さゝごゐ

さぎ類中ノ稍々小形ナルモノニシテ頭上及ビ冠羽ハ綠黑ナリ、其他上部ハ灰黑ニシテ所ニヨリ多少ノ綠色ヲ帶ビ、雨覆羽ノ緣白シ、兩肩ニ生ズル羽ハ笹ノ葉ノ形狀ナリ、喉ハ白ク其他下面ハ一般ニ灰白ナリ、嘴ノ長サ二寸二分許、翼六寸三分乃至九分、走脚一寸七分許リ

此鳥ハ濠洲邊ニモ棲ム、日本ヘハ夏月來リテコンモリシタル樹上ニ巢ヲ營ミ鳴聲「キヤウ」トヒヾク、七月頃關東ニ稀ナラズ」標式的ノN. javanicus（Horsf.）ハ印度せろん、まれい半島、南支那等ニ在リ

十二）**N. prasinos celes,**（Swinh.）　おかくびごひ（新稱）

前種ト畧ボ同大、翼長六寸七分乃至七寸五分、嘴峰二寸許、走脚及ビ中趾（爪共ニ）ノ長モ亦二寸許リ

成鳥ハ純白ノ部多シ但シ頭、後頸、及ビ頸側ハ栗色ニシテ脊及ビ胸ノ分離シタル羽毛ハ綠色ヲ帶ブ」幼鳥ニテハ成鳥ノ栗色ナル部分黑茶色ニシテ茶色ノ線條アリ、胸ハ白ク黑茶色ノ線條アリ、脊ハ黑茶色、雨覆ハ灰茶色、肩ニ茶色ノ不判然ナル線條アリ

迷ヒ來ラズトモ曰ヒ難ケレバ茲ニ記シ置ク

## ●動物解剖手引草（鳥類ノ部）（承前）

岩川友太郎

第十三項　前肢ニ就テ査察スヘキモノハ左ノ如シ

（九三）前肢ハ次ノ三部ヨリ成レリ即チ上部ヲ上腕（Brachium）ト名ツケテ上膊骨ナル一長骨ヨリ成リ中部ヲ前腕（Antibrachium）ト稱シテ橈骨及尺骨ナル大小二骨ヨリ成リ下部ヲ手（Manus）ト呼ヒテ數小骨ヨリ成レリ

（九四）前肢ノ靜止スル時ハ右ノ三部互ニ屈折重疊シテZ字ノ狀ヲ爲シ之ヲ擴張シテ飛翔スル際ハ一直線ヲ爲ス且ツ此時橈骨ハ前肢ノ前側ニ位シ尺骨ハ其後側ニ位ス又靜止ノ位置ニ在リテハ上膊骨ハ之ト肩胛骨トノ關節ヨリ後方ニ擴カリ同時ニ少シク廻旋スルヲ以テ其背緣ハ內上方ニ向ヒ前緣ハ外上方ニ向ヒ前腕ハ其背緣ヲ外向シ前緣ヲ上向シ而シテ手ノ背緣ハ上向シ前緣ハ下前方ニ向フ

（九五）上膊骨ハ一長骨ニシテ骨幹（Shaft）ト上下ノ兩端トヨリ成ル上端ハ膨大シテ上膊骨頭（Head）ト成リ其前面ニ三角狀ノ突起ナル大結節（Greater tuberosity）ヲ具ヘ其後面ニ不正形ノ隆起部タル小結節（Lesser tuberosity）ヲ具フ小結節ノ末端ニ一條ノ深溝アリテ氣孔（Pneumatic foramen）ニ續キ以テ骨幹ノ內部ニ存スル氣腔ニ開通ス上膊骨ノ末端ニ二個ノ突隆セル關節面アリテ滑車狀ヲ成セリ之ヲ上膊骨滑車（Trochlea）ト云フ二個ノ關節面ノ中一ヲ橈骨結節（Radial tubercle）ト名ツケテ上膊骨端ノ前緣ニ斜走シ一ヲ尺骨結節（Ulnar tubercle）ト稱シ其後緣ニ位シテ前者ト殆ント直角ヲ爲セリ橈骨結節ノ上外方ニ粗糙ナル一小突起アリ之ヲ橈骨髁（Radial condyle）トイヒ尺骨髁（Ulnar condyle）ナルモノハ尺骨結節ト同前ノ位置ヲ爲セリ

（九六）橈骨ハ一長骨ニシテ其皿盤狀ヲ爲セル骨頭ハ上膊骨ノ橈骨結節ト關節シ其下端ハ斜長形ノ突起ヲ有シテ腕骨ノ關節ニ供フ

（九七）尺骨ハ橈骨ニ比スレハ頗ル厚強ノ弓狀骨ニシテ其

ト混同スト雖モ脛ノ下端五六分ハ羽ヲ被ラズシテ裸出スルガ故ニ一目シテ差別シ得ルナリ

成鳥ハ頭上黒ク、頭側、後頸及ビ脊ハ黒ズミタル栗赤色ナリ、雨覆ノ一部ハ脊ト同色、一部ハ灰メキタル黄茶ナリ尾及ビ翼ノ大羽ハ灰黒ナリ下部一般ニ黄茶ニシテ胸前ニ黒ズミタル羽アルコ前種ニ同ジ、又喉下ニ黒茶色ノ斑條縦ニ走ル」幼鳥ニテ喉腹ニ黒茶ノ幅廣キ斑條數多ク且ツ上面ノ栗赤中ニ多クノ白斑點ヲ散布ス

此種ハ北支那及ビ黒龍江地方ニ在リテ生殖シ、秋ニ至リテ南支那及ビ日本ヘ渡ルト云フ、余嘗テ九月下旬東京近傍ニテ老幼ノ標本(前種ト共ニ)チ數多獲タルコアリ、北海道ニテモ屡々採集シタル人アリ

---

○こうのとり (Ciconia foyciana, Swinh.)

前項ニさぎ科ヲ記シタレバ序ニこうのとり科(Ciconiidoe)ヲモ記サナケバ片付キハ悪ルシ、本邦ニ此科ニ屬スル者ハ只こうのとりノ一種アルノミ、甚ダ大ナル鳥ニシテ肩羽及ビ翼ノ大羽ハ黒色(但シ風切數枚ノ外瓣ハ銀灰色)ニシテ自餘ノ羽色純白ナリ、嘴ハ黒、眼周圍ノ裸出部及ビ脚ハ赤シ」翼長二尺一寸二分乃至二尺二寸八分、尾羽ノ長サ八寸乃至八寸五分、嘴峰七寸六分乃至八寸六分、走脚八寸一分乃至一尺、中趾(爪共ニ)三寸二分乃至三寸七分」

此種ハ烏蘇利、朝鮮北支那及ビ日本ニ產スルモノニシテ歐洲ノ種トハ別ナリ、日本ニ此鳥ノ追々ト減少スルハ遺憾ナリ、二十年前程マデハ東京近傍ニ普通ニ見タルモノニテ農夫ノ語リニ彼ノ木又ハ此木ニ年々歳々こうノ來リテ巣ヲ懸ケタル覺ヘアレド今ハ何所ヘ行キシニヤアランナド昔シ忍バル丶語ヲ聞クコ度々アリ、余モ又明治ノ初年ニハ淺草ノ觀音、門跡等ノ屋根ニ或ハ又本所五百羅漢ノ邊ニこうノ巣ニ就キ居ルヲ親シク目撃シタルガ今ハ影ヲダニ止メズ成リ行キヌ

北支那及ビ東しべりあニ又くろこうヲ產ス、學名ヲC. nigra,(L.)ト云フ下部胸ヨリ以下ハ白ケレド其外ハ全ク黒褐色ニシテ殊ニ頭頸ニ金屬樣ノ光澤アリ、日本ノ土地ヘ

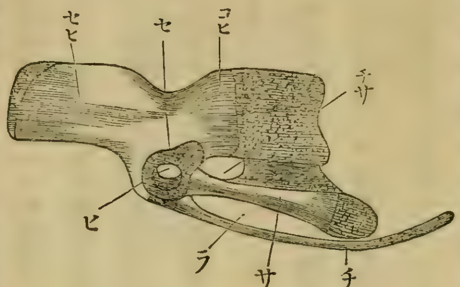
骨後髀部ノ腹側緣ヲ形成シ卵圓孔(Obturator fissure)(ラ)ト名ツクル長形ノ裂孔ニ由テ無名骨ノ他部ト分離ス

(一〇六)坐骨(サ)ハ無名骨ノ後髀部ノ搆成ニ與カリテ卵圓孔ノ上部ハ腸坐骨孔ノ下後部ニ位シ髀臼ニ於テハ恥骨ノ前端ト密着ス

(一〇七)無名骨ノ他部ハ腸骨(セヒ、コヒ)ニ由テ搆成セラレテ腸骨ハ更ニ前髀部ト後髀部トヨリ成レリ前髀部(セヒ)ハ髀臼ノ腹側ニ於テ恥骨ト密着シ後髀部(コヒ)ハ髀臼ノ後背部ト腸坐骨孔ノ後ニ當リテ坐骨ト相結合ス

(一〇八)雛ノ無名骨ハ全成骨ト同形ヲ呈セル一塊ノ軟骨ニシテ腸恥坐ノ三骨ハ各々特別ノ化骨點ヨリ生シ後來ニ至リテ互ニ相結合ス

第五圖




大凡二週間ヲ經タル雛ばさノ左手ヲ背面ヨリ見テ之ヲ二倍セルモノナリ

第十五項　後肢骨ニ就テ檢スベキ諸點ハ左ノ如シ

(一〇九)後肢ノ上部ハ大腿骨ナル一骨ヨリ成リ中部ノ脚ハ脛跗骨(Tibio-tarsus)ト名ツクル一大骨ト腓骨ナル不完全ノ細小骨トヨリ成リ下部ノ足ハ跗蹠骨(Tarso-metatarsus)ナル一ノ圓筒狀骨ヨリ成リテ其末端ニ四趾ヲ附着ス

(一一〇)大腿骨ハ骨盤ノ關節ヨリ下前方ニ傾向シ脚ハ下方ト少シク後方ニ向ヒ跗蹠骨ハ下方及少シク前方ニ向フ四趾ノ中三趾ハ前向シテ其下面ハ全ク地ニ觸レ跏趾ハ獨リ後向シテ其礎部ハ少シク地上ニ浮ベリ

(一一一)後肢ヲ體ト直角ニシテ外方ニ伸張スレハ背腹兩面ト前後兩緣ヲ現ハスコト前肢ト同一ナリ天然ノ位置ニ在リテハ前面ハ內側ニ當リ背面ハ大腿骨ニ於テハ上前方ニ向キ脚ニテハ前方及稍下方ニ向キ跗蹠骨ニ於テハ前方及少シク上方ニ向ヒ趾ハ上方ニ向フ

(一一二)大腿骨ハ圓筒形ニシテ骨幹ト骨端トヨリ成リ上端ハ球圓ノ骨頭ト爲リテ內方ニ突出シ其中軸ハ骨幹ト直

彎側ハ橈骨ニ向ヒ其上端ニ半月狀窩(Sigmoid cavity)ト名ツクル凹形ノ關節面アリ骨幹ト傾斜シテ上膊骨ト關節シ此關節面ノ後緣ニ於テ上方ニ突出セル鈍頭ノ一突起アリ之ヲ鷲嘴突起(Olecranon)ト名ツク亦其前上部ヨリ發出セル一小突起アリ以テ橈骨頭ヲ啣ム

(九八)腕骨ハ手ノ上部ニ當リテ大小二個ノ短骨ヨリ成リ其小ナル者ハ(第四圖フ)橈骨ニ接シ大ナルモノハ(コ)尺骨ト關節ス

(九九)掌骨ハ手ノ中部ニシテ長短不同ノ三骨ヨリ成レリ第二掌骨(タ)ハ最大ニシテ圓筒形ヲ成シ第三掌骨(レ)ハ細キ弓狀骨ニシテ其兩端ハ前者ニ密着シ骨幹ハ全ク分離セリ第一掌骨(ヨ)ハ第二掌骨上端ノ前側ニ在リテ一小突起タルニ過キス

(一〇〇)指骨ハ手ノ下部ニシテ第一掌骨ニ附着セル一尖骨(オ)ハ第一指即チ拇指ヲ代表セル一指骨ナリ第二指(ナ)ハ二個ノ指骨ヨリ成リ第三指(ク)ハ亦一小尖形ノ指骨ヨリ成レリ

第四圖

此木版印刷ノ際過テ毀損致シ早速彫刻ノ間ニ合ヒ兼候ニ付無據此儘印刷ニ付シ候ニ付テハ次號ニ於テ別ニ印刷ノ上御配布可申候也

(一〇一)雛ノ際ハ掌骨ハ悉ク獨立ノ骨ニシテ各々軟骨質ノ培生突起ヲ有ス

第十四項　骨盤即チ腰帶ニ就テハ左ノ撿査ヲ爲スヘシ

(一〇二)骨盤ハ一對ノ無名骨(第五圖)ヨリ成リテ全成ニ至レハ多少薦骨ニ密着スト雖モ雛ノ時ニハ容易ク分離ス

(一〇三)髀臼(ヒ)ハ各無名骨ノ外側ニ存スル圓形ノ關節窩ニシテ其底ニ一孔ヲ開キ以テ後肢ヲ關節セシム其後背緣ハ突出シテ特別ノ關節面ト成レリ之レヲ前轉子(Anti-trochanter)(セ)ト名ツク

(一〇四)腸坐骨孔(Ilio-sciatic foramen)(チサ)ハ髀臼ノ直後ニ存スル一大孔ナリ

(一〇五)恥骨(チ)ハ一ノ細長骨ニメ髀臼ノ腹側部及無名

| | |
|---|---|
| 稚根村 | 二、二八、〇五 |
| 小茂田村 | 三、一一、五三 |
| 上槻村 | 三、三一、― |
| 久根田舍村 | 三、二〇、四八 |
| 豆酘瀬村 | 三、三三、五五 |
| 久根濱村 | 四、〇一、三四 |
| 佐須瀬村 | 四、〇一、三四 |
| 豆酘村 | 四、二〇、五七 |
| 阿連村 | 四、二四、二七 |
| 加志村 | 四、二二、三一 |
| 今里村 | 五、〇二、一五 |
| 賀谷村 | 七、二九、一五 |
| 横浦村 | 八、一一、四一 |
| 鎗川村 | 九、〇二、〇五 |
| 曾村 | 九、三二、四〇 |
| 糸瀬村 | 一〇、一八、三二 |
| 嵯峨村 | 一一、〇三、三五 |
| 佐志賀村 | 一一、〇七、三五 |
| 貝鮒村 | 一一、一四、四二 |
| 志多浦村 | 一一、〇七、五五 |
| 佐保村 | 一〇、三〇、― |
| 唐洲村 | 一三、〇七、〇二 |

| | |
|---|---|
| 島山村 | 四、一二、― |
| 黒瀬村 | 四、一一、二七 |
| 晝ヶ浦村 | 五、一三、五五 |
| 大船越村 | 四、〇七、五七 |
| 久須保村 | 四、二八、四四 |
| 緒方村 | 五、〇五、三六 |
| 犬吠村 | 五、三四、四五 |
| 大山村 | 六、〇六、四五 |
| 小船越村 | 六、一八、五五 |
| 鴨居瀬村 | 七、一二、三一 |
| 蘆ヶ浦村 | 七、〇〇、五五 |
| 濃部村 | 八、〇一、三八 |
| 和板村 | 八、二四、― |
| 仁位村 | 九、二四、五三 |
| 千尋藻村 | 九、三五、五五 |
| 田村 | 一〇、二七、三二 |
| 銘村 | 一一、一〇、四七 |
| 小綱村 | 一〇、三四、〇九 |
| 大綱村 | 一〇、二七、四八 |
| 卯麥村 | 一〇、二三、五六 |
| 貝口村 | 一二、〇九、五四 |
| 廻リ村 | 一三、二三、五九 |

上縣郡

| | 里町間 |
|---|---|
| 櫛村 | 一〇、二三、三〇 |
| 佐賀村 | 一一、二四、五〇 |
| 志多賀村 | 一二、三〇、五〇 |
| 小鹿村 | 一四、三一、― |
| 一重村 | 一五、二五、三〇 |
| 葦見村 | 一五、三五、一五 |
| 狩尾村 | 一五、〇四、一二 |
| 久原村 | 一四、一八、五三 |
| 女連村 | 一四、一九、一三 |
| 鹿見村 | 一四、二四、五七 |
| 樫瀧村 | 一六、二二、三七 |
| 瀬田村 | 一六、二三、二六 |
| 飼所村 | 一六、二五、三〇 |
| 丈ヶ浦村 | 一七、〇三、五七 |
| 御園村 | 一七、一一、四一 |
| 越高村 | 一七、二六、〇六 |
| 伊奈村 | 一八、一〇、二三 |
| 志多留村 | 一八、二四、二七 |
| 佐護村 | 二一、一四、一五 |
| 佐須奈村 | 二一、三〇、三〇 |
| 西津屋村 | 二三、〇二、五五 |

| | 里町間 |
|---|---|
| 賀佐村 | 一一、一四、三五 |
| 吉田村 | 一一、二〇、― |
| 三根村 | 一二、三三、四七 |
| 津柳村 | 一三、三五、五五 |
| 青海村 | 一四、一四、五五 |
| 木坂村 | 一四、一五、五一 |
| 攀村 | 一六、二二、四三 |
| 五根緒村 | 一八、〇五、二四 |
| 中原村 | 一八、三〇、〇五 |
| 舟志村 | 一八、三五、三五 |
| 大増村 | 一九、一九、〇五 |
| 玖須村 | 二〇、〇四、四五 |
| 濱玖須村 | 二〇、〇四、四五 |
| 唐舟志村 | 二一、一八、三五 |
| 富ヶ浦村 | 二一、二〇、四五 |
| 網代村 | 二一、二二、五五 |
| 西泊村 | 二一、三五、四四 |
| 比田勝村 | 二一、〇八、二八 |
| 古里村 | 二一、一八、三五 |
| 泉村 | 二二、一三、〇四 |
| 豐村 | 二二、三五、四七 |

角ヲ成シ以テ髀臼ト相關節シ外方ニ大轉子ト名ツクル不正形ノ一大突起ヲ具ヘ之ト骨頭トノ間ニ一ノ關節面アリテ彼ノ前轉子ト相對ス（一〇三ヲ見ヨ）大腿骨ノ下端ハ滑車狀ニシテ内外二髁ヨリ成リ外髁ノ腹面ニ腓骨湟（Fibular fossa）ナル一條ノ深キ溝アリテ腓骨ノ關節ニ供ヘ其餘ノ部分及内髁ノ全部ハ脛跗骨ト關節ヲ爲ス

（一一三）脛跗骨ハ其長サ大腿骨ノ半ハニ過キサル圓筒骨ニシテ其骨幹ハ骨頭ト共ニ脛骨ニ匹敵シ其末端ハ跗骨ノ一部ヨリ成レル者ニシテ實際ハ足部ニ屬ス上端ハ大腿骨ノ髁ニ應スベキ稍々凹陷セル二個ノ關節面ヲ有シ其前方ハ突隆シテ脛骨櫛（Cnemial crest）ト爲リ以テ二分岐面ヲ成ス下端ハ滑車狀ニシテ其横軸ハ上端ノ横軸ト一角度ヲ爲シテ相傾向シ此滑車ヲ搆成セル内外兩髁ハ脛跗骨ノ後面ヨリモ前面ニ著シク突隆シテ大腿骨ノ兩髁ト正ニ相反セリ

（ツヾク）

第四及五圖ノ解（ト）橈骨（シ）尺骨（フ）橈腕骨（コ）尺腕骨（ヨ）（タ）（レ）第一第二及第三掌骨（オ）拇指（ナ）第二指（ク）第三指（ヒ）髀臼（セ）前轉子（セヒ）前髀部（コヒ）後髀部（チサ）腸坐骨孔（ラ）卵圓孔（チ）耻骨（サ）坐骨

## ●對馬採集日記（ツヾキ）

波江元吉
土田兎四三

今左ニ村名ト里程表ヲ掲ケテ以テ全好諸君ノ不時ノ需ニ供セントス

### 巖原支廳ヨリ上下縣郡各村ニ至ル里程表

下縣郡

| 村名 | 里 町 間 | 村名 | 里 町 間 |
|---|---|---|---|
| 久田村 | 一九、三〇 | 南室村 | 三二、三〇 |
| 尾浦村 | 一、一四、三三 | 小浦村 | 一、〇一、二〇 |
| 安神村 | 二、〇五、一六 | 曲り村 | 一、一〇、二〇 |
| 久和村 | 二、三一、五三 | 根緒村 | 一、二六、二七 |
| 與良内院村 | 三、二二、—— | 鷄知村 | 二、三五、一五 |
| 豆酘内院村 | 三、二五、五五 | 洲藻村 | 二、二六、五六 |
| 内山村 | 二、二二、〇五 | 箕形村 | 三、二四、二〇 |
| 下原村 | 二、二九、五〇 | 竹敷村 | 三、三五、三二 |
| 樫根村 | 二、三二、—— | 吹崎村 | 四、〇八、一〇 |

め汀ニ群聚セリ又うのとり、あび等ヲ目擊ス
ドレヂヲ用ヰテ灣内各所ヲ採集セシカ磯近クハ巨石散在シテ自由ニ引ク能ハス波止場ヨリ十町程ノ沖即チ久田浦ニ面スル近邊ハ三十尋以上ナルベシ繩近クシテ達セザリシ少シク地方ニ寄レバ十二三尋ノ所多シ海底ハ中央ヨリ西岸ハ沙泥ニシテ東岸ハ白沙多シ時季ノ尚寒冷ナルタメカ蝦蟹ノ類甚タ尠シ貝類ハ蝦蟹類ニ比スレバ較〻多キモStrombus, Conus ノ如キハ空殼モ見ザリキ市街ノ東北ヲ流ル丶小川アリ立龜浦ヨリ灌入ス又久田浦ニモ小川アリ故ニ灣内常ニ淡水ヲ混入スルヲ以テ海產動植物ノ生育上ニハ多少ノ影響ヲ及ボス可シ
左ニ嚴原近傍ニ於テ採集セルモノ目擊セルモノ及市中ニ於テ購求セルモノヲ列記スベシ

1 野猫又山猫　毛皮ヲ市中ニテ購フ村民ノ話シニ晝ハ山中ノ朽洞岩窟ニ棲ミ夜中村里ニ來リ家雞ヲ害ス害セラルモノ必ス陷穽ヲ作リテ之ヲ捕ヘザレバ止マズ故ニ時々活物ヲ獲ルコアリト云フ額上ヨリ背上ニ數條ノ暗褐色ノ線アリ背腹部ニ褐色ノ小斑點アリ尾部ニ褐色環狀ノ斑紋アリ全体ノ毛灰褐色ヲ帶ブ外耳ニ立毛ナク背面黑色ニシテ根ニ白點アルハ虎耳ノ如シ村民ノ說ニ腹部ノ斑點虎斑ヲナスモノアリト余等巡回中毛皮ヲ見ル四回遂ニ虎斑ヲナスモノヲ見ザリシ若シ虎斑ノ如ク橫斑ヲ呈スルモノアレハ小斑點ハ橫斑ノ切レテ斑點ニ變ジタルニハアラザル歟 Felis catus ニ異ナル處ハ特ニ此橫斑ト小斑點トノ差違アルノミ

2 鹿　市中ニ鹿ヲ畜養スルモノアリ內地產ノモノト異ナラス島中甚タ多シト云フ元ハ人ノ移殖セシニアラザルカ

3 オホワシ　Haliætus pelagicus ノ尾羽ヲ以テ團扇ヲ作リシヲ見ル本島ニ於テ獲タルモノナリト云フ

4 トビ Milvus melanotis 甚タ多シ

5 シマフクロ?　夜中鳴聲ヲ聞キ遂ニ其形ヲ見サリシ併シ、フクロ、ミヽヅク、アヲバヅク、ノ鳴聲トハ

河内村　二三、二一、一九　鰐浦村　二三、二六、三五
大浦村　二三、二八、五五

因云伊能氏ノ大日本沿海實測錄ニ巖原ヨリ仁位ヲ歷テ鰐浦ニ至ル街道通計二十四里三十五町二間半又仁位ヨリ志多賀ヲ歷テ豐村ニ至ル街道通計十四里三十四町九間半トアリ又下島沿海周廻五十里十四町二十一間半上島沿海周廻一百三十五里三十一町十九間半トアリ

二月十九日ヨリ仝月廿八日マテ嚴原ニ滯在シ近村ヲ巡回採集ス嚴原ハ元國府（又府中）ト稱シ舊宗氏ノ城下ニシテ戶數二千餘戶島中ノ一都會ナリ長崎縣ノ支廳アリ分營アリ其他電信郵便局裁判所警察署監獄署病院等ノ設アリ小學校ハ高等、尋常二校ニ分レ樓屋相駢列ス又神社佛閣ノ壯麗ナルモノ尠シトセス近年滊船ノ定期航海開ケショリ關西朝鮮等ヨリ旅客ノ出入較頻繁ナリ從ツテ文化ノ度モ他村ノ比ニアラズ市街ノ東北ニ后山飯盛山白木山ノ數峯アリ西ニ有明ノ高嶺アリ南ハ即チ灣ニシテ東北ノ海隅ヲ立龜浦ト云ヒ西北ノ海隅ヲ夷浦ト云フ湊口ノ廣サ六七町ニシテ東岸ヲ耶良崎ト云ヒ西岸ヲ虎ケ崎ト云フ波止場マテ凡十三四町ナルベシ西岸深ク入込ミテ小灣ヲナス之ヲ久田浦ト云フ斯ノ如ク嚴原ハ三方山ニ圍マレ一面ハ海ニ濱スルヲ以テ地形ヨリ觀察スレハ海陸ノ動物ヲ採集スルニ屈强ノ塲所ナリ然ルニ當地モ亦銃獵行ハルヽヲ以テ近傍ノ山谷ニ鳥類甚タ稀レナリ

海岸採集ハ如何ト云フニ沿岸概チ斷崖絕壁或ハ怪岩錯出シ跋涉甚タ危險ナルノミナラス怪力ニアラサレハ巨石ヲ起シテ石下ノモノヲ採集スルヿ難シ且當地ハ野菜ニ乏シキヲ以テ農家ノ兒女干潮ノ際籠ヲ荷ヒ手鎌ヲ携ヘ三々五々隊ヲナシテ海岸ヲ搜索シ石ニ附着セル貝類ハサラナリウニ海藻ニ至ルマテ較大ニシテ食シ得ベキモノハ悉ク之ヲ捕拾シテ食料トナス習慣アリ故ニ彼等ノ容易ニ至リ得ザル所ニアラザレハ成熟セルモノ幾ント稀ナリ嚴原灣內ニ於テハ虎ケ崎近傍ニ至レバ多少成熟セルモノヲ收集シ得ベシ久田村海岸ハ砂濱ニシテ海岸採集ニ適セス併シ冬季ハ水鳥多ク此灣ニ聚リ來ルト云フ余等巡回セルトキかも

スルヿヲ得ルナリ

25 カモメ Larus canus 久田村海濱ニ於テ獲タリ嚴原埠頭ニモ多シ

## ●みづくらげ（第七版）

**Aurelia japonica,** nov. sp.

岸上鎌吉

BY

K. KISHINOUYE.

Aurelia ニ屬スルくらげハ地球上到ル處ノ海ニ產シ、常ニくらげノ摸範ト〆記サルヽモノナリ、今日迄ニ知ラレタル此屬ノくらげハ凡テ九種アリ。本邦ニモ此屬ノくらげ非常ニ多クアリテ且ツ何レノ處ニモ見ル、みづくらげ、よつめくらげ、もちくらげ等ノ名ニテ知ラル、遠州灘ヲ航行スルトキ水面ニ白色透明ニシテ中央ニ四個ノ淡紅色ノ環狀體アル圓盤狀ノ塊ヲ見ル、是レ此くらげナリ。此くらげハ既ニ知ラレタル九種ノ何レニ屬スルヤ、本邦ニハ此屬ノくらげハ只一種ヨリナキヤ、予ノ知ル所ニテハ此等ノ質問ニ對シテ今日マデ誰モ答ヘタル人ナキ樣ナリ、只西洋ノ書籍ニ常ニ Aurelia aurita ノ記シアルヲ見且ツ Aurelia ハ到ル處ニ產スルヿヲ聞キ本邦產ノモノモ亦 A. aurita ヨリ外ノモノニ非ズト思ヒ誤リ居ル者モアル如シ。予モ委シキヿハ一向知ラザレドモ品川沖ニテ過日採集セシみづくらげハ外國ノモノト同種ト覺ヘズ、新種トスル方適當ナリト考ヘタレバ爰ニ新種トシテ記ス、然シ本邦ノみづくらげハ皆此新種ニ屬スルヤ否ヤ則チ爰ニ記スルくらげノ外 Aurelia ニ屬スルくらげハナキヤ否ヤハ今予ノ斷言シ能ハザル所ナリ。

みづくらげハ多ク外洋ニ群游スルモノヽ如シ、然レドモ風潮ノ模樣ニヨリテ時々內海ヘ澤山群集シ來リ小舟ノ進路ヲ妨グル程ニ至ルヿアリ。內海ニテ常ニ多少ノみづくらげヲ見レドモ多クハ損所アリテ完全ノモノハ甚ダ稀ナリ、且ツ多クハ既ニ死シ居ルナリ。

みづくらげハ Semostomæ, Ulmaridæ ニ屬ス、八個ノ感觸體、八個ノ廣キ（時ト〆二分サレタル）邊瓣ヲ有ス、

音調全ク異ナレリ

6 スヾメ　Passet mont anus　市街ニ多ク村里ニ尠シ

7 ホヽジロ　Emberiza ciopsis　村落ニ多シ

8 シロハラ　Turdus pallidus　村落ノ林中ニ多シ

9 チヤウマ　Turdus fuscatus　田圃ニ多シ

10 アカジナイ　Turdus naumanni　（チヤウマト一群ヲナス）本島村民ハつくみノ類ヲ總稱シテくわつちやうト呼フ如シ

11 ヒヨドリ　Hypsipetes amaurotis　甚多シ咽喉部ノ栗色較ヽ多キ如シ本島モ伊豆七島ノ如クつばき澤山ニテ當時恰モ花盛リナレバひよどりノ喙邊ハ花粉ニテ黄色ヲ帶ビ一見スルト斑紋ノ如キ觀アリシ

12 ジヨウビタキ　Ruticilla aurorea　甚タ多シ

13 ルリビタキ　Janthia cyanura　甚タ多シ

14 ミソサヾイ　Trogrodytes fumigatus　（溪流ノ近邊ニ見シ）

15 セクロセキレイ　Motacilla lugens　久田村海邊ニ於テ獲タリ

16 タヒバリ　Anthus japonicus　久田村海邊ニ於テ獲タリ

17 ヤマカラ　Parus varius　久田村ヨリ尾浦ニ至ル谷間ノ雜木林中ニ於テ獲タリ

18 シヾウカラ　Parus minor　松林中ニ多シ

19 カケス　Garrnlus japonicus　內地ノ山林ノ如ク多カラス本島ニテハかゑヽヽト云フ

20 ハシブトカラス　Corvus macrorhynchus japonensis　市街田野共ニ甚タ多シ

21 メジロ　Zosterops japonica　山野ニ尠ナカラズ

22 コゲラ　Iyngipicus kizuki　山林ニ多シ

23 キジバト　Turtur gelastes　山野ニ甚タ多シ

24 コウライキヂ　Phasianus torquatus　嚴原近村ニテハ尾浦村ニ多シ津島紀事及津島紀略ニ本島元雉ナシ之ヲ朝鮮ヨリ得テ海栗島（ウニシマ）ニ放ツ爾來繁殖シテ全島ニ棲息スルニ至ル（但シ海栗島ハ鰐浦ノ灣前ニアリ）ト云フ彩色ノ美ナル內地產ニ數倍ス頸ニ環狀ノ白斑アルヲ以テ容易ニ判別

各邊瓣ノ邊緣ヨリ少シ背部ニ數多ノ觸手ノ列ヲナスヲ見ル、口腕ハ簡單ナリ。

かさハ白色透明ニシテ隨分堅シ故ニあるこーるニテ保存スルヿ容易ナリ、上面ハ平滑ニシテ中央部少シ隆起シ其形殆ンド菅笠ニ似タリ、直徑ハ高サニ五倍ス、中央部最モ厚ク邊緣ニ近ヅクニ從ヒ漸次厚サヲ減ス。邊緣ヨリ少シ上ニ細小ナル觸手數多アリ。觸手ト入リ違ヒニ數多ノ小サキ葉狀片アリ。

口腕ハ四個アリ、中央口腔ノ周圍ニテ合ス、其長サかさノ半徑ヨリ短カシ、邊緣ハ褶襞多ク、附着部ニ近キ所ハ幅廣クシテ横ヘ曲リ居ル、下ヨリ見ルトキハ四個ノ口腕ノ基部ニ卐ノ形ヲナシタル口腕ノ緣ノ合セ目ヲ見ル。

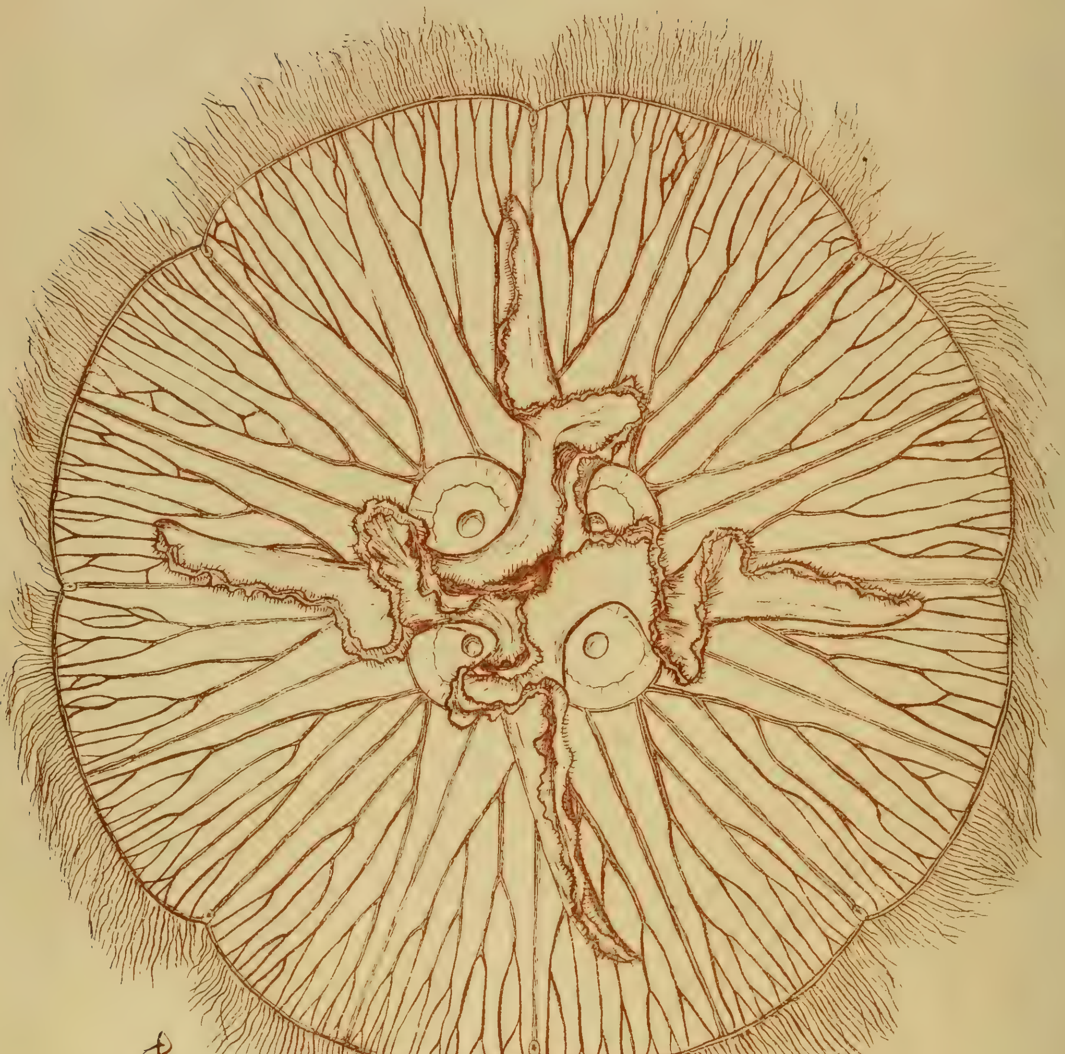
生殖腺ハ四個ノ口腕ト入リ違ヒニアル四個ノ圓形ノ腔洞ヲ圍ム環形ノ淡紅色帶ナリ。圓形ノ腔洞ハ口腔ト連ナル、此腔洞ノ下ニ之ト連絡ナキ腔洞アリ、圓孔ヲ以テ外界ニ通ズ。生殖腺ノアル圓形腔ノ長サハかさノ半徑ノ凡ソ四分ノ一ニ當ル。

消化循環系ノ放射管ハ十六アリ、内八本ノ Adradial ナルモノハかさノ周邊ニ至ルマデ分枝セズ、Perradial 及ビ Interradial ノ放射管ニ生殖腺腔ノ高サニ於テ三叉ニ分タル。故ニ生殖腺腔ノ周邊ニテ合スル放射管ハ五本ナリ、則チ Adradial ノ二本ト Interradial ノ三本ノ枝トナリ。Interradial ノ左右二本ノ枝ハ又數回分枝ス、然シ此等ノ枝ハ互ニ結合スルヿ少ナク網ノ目ノ如キヲ作ルヿ稀ナリ。中央ノ枝ハ分枝セズシテ眞直ニ周邊ニ到ル。周邊ニハ一ツノ環狀管アリテ凡テノ放射管及ビ其枝ヲ結合ス。

かさノ直徑十五せ、め程アリ。

みづくらげハ北米ニ產スル A. flavidula ニ甚ダ能ク似タリ、然シ放射管ノ分枝、生殖腺ノ大サ、及ビ全體ノ色等ニ於テ異ナレリ。又歐洲ノ A. aurita ニモ似タリ、然シ口腕、色等ニ於テ差違アリ、北米ノ A. marginalis ハ生殖腺大ナリ。A. hyalina ハ口腕長ク、放射管ノ分枝數多ノ網ノ目ヲ作ル。A. labiata ハ少シ紫色ヲ帶ビ、かさノ邊緣十六ニ分タレ。A. clausa, A. limbata, A. cœrulea ハ皆かさ

みづくらげ



*Aurelia japonica.*

ノ邊緣十六ニ分タレ皆觸手或ハ全體ニ色アリテ本邦ノみづくらげト異ナレリ。故ニ予ハ本邦ノモノヲ新種トナス。

**Species-diagnosis:** Umbrella flat, a little vaulted, 4-5 times as broad as high. 8 velar flaps of the umbrella-margin not protruding, divided by slight, shallow ocular incisions only. Mouth-arms a little shorter than the radius of the umbrella, their margin much curled, and their proximal halves with broad and strongly folded lobes. Umbrella-radius 4 times the radius of the gonads. At every genital bay 3-5 canal-roots. 16 dendritically branching canals form a few meshes only.

**Colour:** Transparent and white, the gonads only are very slightly rose-coloured.

**Size:** Diameter of the umbrella 150 mm. Height 30-35 mm.

**Ontogeny:** Unknown.

**Locality:** Tôkyô Bay, Japan.

附言　予ハ一兩年前ヨリ本邦ニ產スルくらげ類ヲ取調べンコヲ思ヒ立チ先ヅ Scyphomedusæ(眞正水母類)ヨリ手ヲツケ始メタリ、是レ此類ノくらげノ形大ニシテ數少ナキヲ以テナリ。然シ貧乏書生予ノ如キモノ一人ニテ本邦ノくらげヲ盡ク取調ベンコハ非常ノ難事ナリ。今日迄ニ自身ニ採集シタル眞正くらげハ僅カニ九種ニ過ギズ、是レ主トメ此種類ノ動物ハ一年中アルコ少ナク又一地方ヘ採集ノ爲ニ旅行スルモ僅々二三週間ノ滯在ニテハ其時期ニアル其地方ノくらげノミニテモ充分知ルコ能ハズ。此等ノ困難アルニ拘ハラズ予ノくらげヲ硏究セント欲スルハ其形ノ驚ク可ク奇麗ナルト其構造ノ外國ノモノト大ニ異ナルヲ以テナリ。

地方諸君ニシテ常ニ海濱ニ住セラルヽ方、或ハ採集ノ爲、或ハ保養ノ爲ニ海濱ニ滯在セラルヽ方ニテ何處ニ何時如何ナルくらげアリトカ又其構造等ヲ調ベラルヽ方ハ本誌ヘ御報知アランコヲ切望ス。

大吸盤ニハ極細牙僅少ヲ有スル者ノ如ク見エ夫モ甚ダ不分明也雌雄ハ外見ヨリ之ヲ認メ知ルコト甚ダ難シ併ナガラ能々之ヲ見レバ雄ニ於テ左第四脚ニ其交接器ヲ具ヒ居ル如ク見ユ石灰質介売ハ全形宛モ鎗尖ノ如ク背腹両面共ニ凸シ然レ㞮腹面ノ中央線ハ凹クシテ一個ノ溝狀ヲ爲ス也而シテ腹面ノ圓滑面ト波紋面部トノ割合ハ二ニ對スル三ニシテ右両部ノ相接スル處ハ介売ノ最モ厚ク且ツ巾廣キ所也然リ而シテ介売両側縁ハ各一種半透明ノ角質膜ヲ有ス又棘狀突起ヲ其末端ニ具備ス

標本第一　相州小田原產明治十八年十月購買ス雌雄合セテ十二個何レモ同大同形ニシテ躰長十せめ躰巾最モ濶キ處ニテ五せめ位頭部ト第四脚ノ總長五せめ位内三せめ半ハ第四脚ノ眞長也呼出水管ハ長サ一、五せめ巾中途ニテ一せめ第二脚ノ長サハ實ニ三十六せめ位也而シテ介売ハ長サ九せめ位其巾ハ最モ廣キ處ニテ一、五せめ位末端ニ在ル棘狀突起ハ長サ四せめ位アリテ少シク背面ノ方ニ折曲ス

標本第二　同十八年十月坂本福治ヨリ買ヒ上グ矢張相州小田原邊ノ產ナラン雌雄合セテ十一個内大ナル者ハ躰長十一せめ小ナル者ニテ同シク躰長八せめ半位也

## ●遺傳（承前）

石川千代松譯述

何故ニ敵ヲ見テ懼レ逃クルカ如キ本能ハ始メヨリ事物ニ懼怖スルノ性質ヲ具フルモノヽカ懼レサルノ性質アルモノヨリモ多ク生キ殘ルヿニ依テ生セシモノナラサルヤ人跡ナキ島嶼ニアリテ人類ヲ見テ少シクモ恐レサリシ鳥類カ二三代ノ後ニ既ニ人ヲ恐ルヽノ本能ヲ得ルヿハ實ニ淘汰ノ力ニ依リテ起生セルニ非サルヿ明白ナリト云フヲ以テ或ハ余ノ說ニ反スルモノアリ然レ㞮此事實ハ新ナル本能カ發生シタルモノナルヤ或ハ從前ヨリ鳥類カ具有セル恐怖本能ヲ唯タ人類ニ及ホシタルモノナラサルヤ甚タ疑ハシ、又誰レカ此等ノ鳥類ノ二代或ハ三代目ノ雛兒カ人ヲ見テ直チニ恐怖スルヤ或ハ此ノ恐怖心ハ一個ノ鳥類ノ經驗ニ依テ起因セルモノナラサルヤ、余ノ考ニテハ人類カ敵トナリテ鳥類ニ對スル時ハ既ニ一代中ニ之レヲ恐怖

## ●理科大學標本日本頭脚類目錄(第七回)

池田作次郎

### 2. Sepia peterseni, *Appl.* (かみながいか)

所載書 (Literature).

Appellöf, p. 23, pl. II, Figs. 1-6, p. III, Fig. 1.

此種ノ特性トシテ最モ見易キ點ハ第二對脚ノ非常ニ長キ一事也實ニ之ヲ體長ニ比スレバ四五倍又之ヲ他脚即チ他ノ腕脚ニ比スレバ殆ンド十倍位或ハ其以上ニモ達スルコトアル也然レ𪜈此處ニ尚ホ余ガ目ニ觸ル丶所ニシテ此種ノ概況ヲ陳スレバ則チ左ノ如シ

體形長卵狀ニシテ背線ニハ巾稍ヤ廣キ紫色ノ縱條ヲ有ス而シテ體後端ハ細マリテ遂ニ尖リ居ル外套膜ノ遊離緣ニメ其背中線ニ當ル處ハ延長シテ前ノ方兩眼ノ間ニ突出ス肉鰭ハ寧ロ巾狹ク體兩側面ノ其全緣ニ附着ス頭部ハ通常ニシテ眼球モ亦異狀アル無シ呼出水管ハ概形圓筒狀ナレ𪜈少シク扁平ッ其巾前端ニ於テ狹ク基部ニ於テハ廣シ且ツ長キ方ニテ第四脚ノ基部ヲ超過シテ其間ニ挾マレ居ル也腕脚ハ第二對ノ外何レモ短キ方ニテ長順式ハ二、四、三、一也第四對ハ能ク發達シ居レ𪜈短ク且ツ扁平ク外緣ニ一種肉鰭樣膜ヲ具フ第一對ハ其發達ノ程度最モ早クシテ細ク且ツ圓ルシ而シテ第三對ハ實ニ其中間ニ位ス也第二對脚ハ啻ニ長キノミカ凡テノ點ニ於テ全ク他脚ニ異リ居ル則チ基ノ方凡ソ四せめ位ハ太ク丸ルク二列(他脚ニ於テ不分明ナガラ四列也)ノ眞形吸盤ヲ有スト雖𪜈其處ヨリ以上漸々末端ニ及ブニ隨ッテ吸盤其形ヲ變ズ其變形スルヤ始メハ單ニ全形ヲ縮少スルノミナレ𪜈遂ニハ一種球形ノ突起ノ如ク又楕圓形ノ突起ノ如クナル也然ノミナラズ始ヤ二列ナレ𪜈漸々末端ニ進ムニ隨ヒ側面ヨリ壓迫サレテ全ク一列トナル然リ而テ此脚ハ末端ノ方ニ及ブニ從テ次第々々ニ細クナリ居ル有樣實ニ最末端ヨリ凡ソ七八せめ位ハ宛モ細キ絲ヲ見ル觀アル也觸脚モ亦寧ロ細ク長サ第二對脚全長ノ五分ノ二位アリテ長楕圓形ノ脚頭ヲ有ス脚頭ニハ一列ニ並ビ居ル吸盤ニテ大ナル者四五個ヲ有ス吸盤角質環ハ何レモ殆ンド全邊ノ如ク見ユ但シ脚頭

或ハ水底ニアル石ノ下面ニ附着セシメ或ハ確定セル植物ニシテ又其確定セル部分ニ附着セシメ加之之レヲ爲スニ於テ又非常ニ込ミ入リタル本能アリ、其内ニモ實ニ驚愕スヘキハRhodites rosæ(ろぢてす ろぜい)ト稱スル小形ナルふし蟲カ甚微小ナル卵ヲ薔薇ノ新芽ニ産ミ附クルヿナリ！只其産卵スルニ當リ小蟲ハ實ニ注意シテ新芽ヲ四方八方ヨリ驗査シ其觸肢ト歩肢トヲ以テ之レニ觸レ遂ニ其長キ産卵管ヲ以テ芽苞ノ新葉間ニ差入シ幾度モ試ミ或ハ好塲處ニ達セサル片ハ又引キヌキテ新タニ又試ミ若シ的當ナル塲處ヲ發見セル片ハ靜カニ穿チ入レ芽ノ中心ニ達セシメ卵ノ發生ニ必要ナル境遇ニ逢フテ始メテ茲ニ産卵ス、

固ヨリ該蟲ハ幾度モ十二度モ續ケテ前ニ述シ如ク込ミ入リタリ仕方ヲ以テ産卵スルモノナレハ其之レヲ遂クルニ於テ或ハ練習ニヨリ多少ノ熟練ヲ得ルヿアルヘシ、然レ圧又他蟲ニ於ケル産卵ノ仕方モ全ク該蟲ト全シク錯雜セルモノニシテ練習ニハ少シクモ關係セサルモノナリ、例之ハ我Vanessa levana(ばねつさ ればな)ト稱スル蝶カ綠色ノ卵ヲいらくさノ莖ニ一々一列ニ並ヘテ附着セシメ該草ノ蕾ト同樣ナル觀ヲナサシムルカ如キヿハ如何シテ練習ヨリ來リタル本能ナリト云フヿヲ得ルヤ

固ヨリ此ノ塲合ニ於テハ蝶ハ少シクモ自己ノ爲ス所ヨリ益アルヿヲ知ラサルナリ故ニ智力ハ此塲ニ於テ少シクモ關係スルヿナシ、而シテ該蟲ノ此ノ本能タルモノハ固ヨリ其生レツキノ構造及ヒ作用其卵巣及ヒ輸卵管ノ成立多クノ卵ノ一時ニ成熟スルヿ並ヒニ確定セル植物ノ確定セル塲處ニ産卵セシムルニ於テ非常ニ込ミ入リタル反射的作用等ニ依ルモノナリ實ニしゅないでる氏カ此ノ込ミ入リタル反射的作用ヲ以テ其産卵スル所ノ植物ノ全部或ハ一部カ有スル所ノ外貌或ハ其生スル所ノ香氣或ハ其他ノ現象ヨリ蟲ノ注目ヲ引キ起スヨリ生スルモノナリトスルハ正當ナルヿナリト思考ス而シテ此ノ如キ本能ハ實ニ練習及ヒ夫レヨリ得タル所ノ結果ノ遺傳ヲ以テ説明シ得サルモノニシテ之レヲ解明スルニ當リテハ唯タ淘汰ノ一法アルノミ

スルヿヲ知得スルナラン、誰レモ知ルヿナレモ前ニ少シクモ驚カスニ目前ヲ飛行スル鳥群カ一度銃聲ヲ聽キタル後ハ非常ニ憶病ニナルモノナリ別シテ鳥類ハ多ク智力ヲ有スルモノナルニ於テヲヤ、然レモ決シテ一代ニ得タル所ノ經驗カ次代ニ遺傳スルモノナルヿヲ證スルニ足ラスシテ弱幼ニシテ未タ經驗ニ乏シキ鳥カ人ヲ見テ恐怖シ逃飛スルノ本能ヲ得ルハ實ニ久シキ年月ノ間ニ淘汰法ニ因リテ次第ニ得タルモノナルヘシ、此ノ點ヲ證明スルカ如キ實驗ハ未タ實ニ僅少ニシテ且ツ確實ナルモノ、乏シキヲ以テ不幸ニモ未タ明カニ此疑問ヲ決スルヿヲ得ス、又通常多ク遊フル所ノ幼少ナル獵犬ニシテ「未タ一度モ教馴ヲ受ケシヿナク且又手本モナシニ熱帶地方ニ於テ蜥蜴ノ前ニ於テ起立スルヿハ恰モ其親犬カさんと、だにす、ノ平原ニ於テれいぶみんニ於ケルカ如ク」或ハ又一度モ銃丸ノ慟力ヲ知ラサルニ始メテ砲聲ヲ聞クニ於テ吠鳴シテ前ニ進ミ恰カモ餌食ニ近寄ラントスルカ如キ狀ヲ示スカ如キハ獵犬カ覺ヘ得タル力ノ遺傳ニ非スシテ反射的作用ノ遺傳ナリト信ス卽チ幼少ナル獵犬カ砲聲ヲ聞キテ前進飛走スルハ其親ヨリ思考ノ繼續ヲ遺傳シ得タルニ非スシテ全ク驚愕シテ前進スルカ如キ反射的ノ作用ヲ遺傳セルカ故ナリ、然レモ如何ニシテカ此等注目カ(Wharnehmungstriebe) 始メテ起リシヤハ新ナル實驗ヲナシタル後ナラテハ之レニ答フルヿ能ハス然レモ此等ノ場合ニ於テハ或ハ人爲淘汰カ大ヒニ働キテ覺エタルヿノ遺傳ニハ非スシテ生殖細胞内ニ既ニ具リ居ル處ノ形質ノ淘汰ニヨリテ增加セルニ依ルナラント思考スルヿヲ得ルナラン、吾人ハ練習ヨリ遺傳シ來リタル結果ナリト確定スルニ於テ如何程迄注意ニ注意ヲ加ヘサレハナラヌト云フヿハ、一生中僅カニ一度ノミ起ル所ノ本能卽チ練習ハ少シクモ無キモノニアリ、例之ハ女蜂ハ一生中唯一度ノミ空中ニ飛翔シテ婚禮ヲ營ムモノナリ然レモ其之レヲナスノ本能及ヒ反射的ノ諸作用ハ如何ニ錯雜セルモノナルヤ－又昆蟲類ノ產卵スルモ多クハ一生中僅カニ一度ノミナルニ各蟲類ハ能ク其產卵スルヿヲ知リ或ハ單ニ卵ヲ水中ニ下落シ

丑年該郡加茂村ナル名和川ノ水源ニテ一尺ニ滿タサル山椒魚ヲ捕ヘタリ時ニ其量四五拾匁ナリシガ之ヲ自家庭內僅々壹坪程ノ瀦水中ニ飼育シ時々蟹又ハ蛙等ヲ與ヘシニ追々成長シ廿二年ノ七月ニハ丈ケ四尺二寸餘量目凡八貫目餘ニ及ヒ本年ハ尙ホ之ヨリ長セリト云フ此種ニ就テハ理學士佐々木忠二郎氏ノ記文大學紀要ニ載セアレ𪜈成長ノ度合ヲ知ルノ參考ニ供セン爲メニ一報スルヿ爾リ

編者曰ク、佐々木氏ハ八月中旬ニ大山椒魚ノ卵ヲ得タリト云ヘリ、而シテ此通信ニヨレバ四月以前ニ產卵スル樣ニ思ハル、七八分ノ幼蟲ヲ去年生レシモノト思ヘザレバナリ。兩氏共ニ正シキカ或ハ孰レカ誤マレルカ、竹田氏後ノ報導ヲ待ツ。

## ●北海道鰊漁場ノ概況

頃日北海道ノ知己ヨリ報セル信書中ニ全道天塩ニ於ケル鰊漁ノ概況ヲ記セリ因テ左ニ之ヲ抄錄ス蓋シ該地鰊漁ノ一斑ヲ窺フニタランカ歟」

去五月下旬ヨリ天塩北見地方ヘ旅行致シ候處當時天塩ハ鰊漁ノ最中ニテ何レノ村落モ人烟稠密ニメ賑カニ之レ有リ其レ故ニ滿空ほしかノ臭氣充滿致シ隨分ムセカヘル程ニ之レ有リ候、併シ是レカ本道第一ノ產業ニテ此臭氣モ黃金香ト申居ルガ通情ニ之レ有リ僅カニ三四里ノ海濱ニテ四五兩月中ニ收得スルモノ五六十万圓實ニ一攫千金ハ此ノ鰊漁ニ之レ有リ候漁具ハ建網（蚊帳ノ如キ網）捕サシ網（曳網ヲ建テタル如キモノ）ノ兩樣ニテ大仕掛ノモノハ皆建網ニ之レアリ捕網ハ小前ノ者多ク使用致シ候先ツ開キカ三月末ヨリ追々群來（クキルト方言）致シ獲ラルヽ丈ケ取リ揚ケテ小屋ニ山ノ如クニ積込ミ其レヨリ稍々閑ニ相成リタル處デ大釜ニテ煮テ之ヲ木匡ニ詰メテ絞リ玉（タマ）トナス其目方三十貫餘其レヨリ之レヲ額シ蓆ニ擴ケテ乾上ケ俵ニ詰メテ內地ニ輸送ス目下其相場百石ニ付六百四五十圓ニテ七百圓モ致ス事尠シトセス又當初取リ初メニ生鰊ヲ腹ト脊ニ刀ヲ入レテ裂キ乾燥メ積出スモノ之レヲ身欠キト稱シ東京市中ノ露店ニ於テ砂鉢ニ煮揚ケアルモノニテほしかヨリハ價格モ餘程貴キモノナレ𪜈何分手廻リ兼ヌルヨリ多クハ粕ニ製シ候まこしらこヲ乾シテ回送スル迄ニハ隨分繁忙ニ之レア



97

# 雜録

## ●島根縣松江市近傍に於て採集せし蝶類

當市近傍に於ける蝶類の發生は至極遲き樣に考へらる二月三月の両月間より殆ど蝶類の飛翔するを見ざる位なり(尤も小生の探索行届かざるに因るかも計りがたければ確言し出來ず來年は能々穿鑿すべし)又蝶種も少なき樣に覺ふ左に五六月間に於て採集せし蝶類の名稱を報告致し候

會員渡邊盈作報

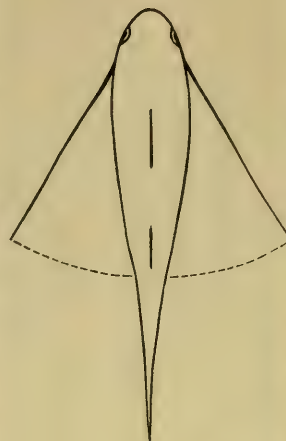
(一)あげはのてふ (Papilio xuthus, *L.*)
(二)からすばあげは (P. maackii, *Mén.*)
(三)くろたひまい (P. Sarpedon, *L.*)
(四)すぢぐろてふ (Pieris napi, *L.*)
(五)もんしろてふ (P. rapæ, *L.*)
(六)おつねんてふ (Colias hyale, *L.*)
(七)きてふ (Terias multiformis, *H. P.*)
(八)つまきてふ (Anthocaris scolymus, *But.*)
(九)べにしゞみ (Polyommatus phlaeas, *L.*)
(一〇)やまとしゞみ (Lycæna argia, *Mén.*)
(一一)ひをどしてふ (Vanessa xanthomelas, *Schiff.*)
(一二)もんがらてふ (V. Collirhœ, *Fab.*)
(一三)ひめじやのめ (Ypthima baldus, *Fab.*)
(一四)こじやのめ (Mycalesis perdiccas, *Hew.*)
(一五)さまだらてふ (Neope gaschkevitschii, *Mén.*)

## ●鳥取縣下ノ大山椒魚

在鳥取會員竹田氏ヨリ左ノ如ク通信アリタリ

鳥取縣下ニハ多クノ山椒魚 Giant Salamander, アリテ山間地方ニハ其ノ大ナルモノヲ皮ヲ剝キ食スルコトアリ其住處ハ溪水中ニシテ又堀池ニモ住ス鳥取縣廳舍内ニモ小池アリ一尺四五寸ノモノ生活シ又鳥取尋常中學校構内ノ水溜等ニモ居ルコトアリ同處ニハ蚪子ト同形ニシテ葉胚(鰓?)ヲ備ヘタル長サ七八分ノモノヲ四月ニ於テ多數ヲ蚪子ト共ニ捕獲シタリ而シテ六月中旬ニハ既ニ一寸五六分ニ成長セリ此後ノ模樣ハ追テ報スベシ玆ニ汗入郡名和村(名和長年ヲ祭リアル同郡御來屋ヨリ一里許ノ地)ニ森田某ナルモノアリ嘉永六年

り、極めて近くへ來りし時之を熟視するに大なる鰭は非常に早く且中々廣く運動するを見候想像圖なれど大抵右の點線位は運動致す樣なり船の側へは度々落ちたれど不幸にして船の中へは一疋も落ちざれは一疋も獲る事ハ出來ず候又浪形に三ッ位山を造りて飛ぶ時は登る時のみ鰭を動かし降る時は鰭を體に密着させ居り候山の數は一番多くて四ッ位に候此事は先達ての Zool. Jahrbücher に有つたかと存候が眞實の事と存候



●Limnæa pervia ニ就テ　Limnæa pervia ヲ採集シ來リ數匹ヲ瓶中ニ蓄ヘ六日間其擧動ヲ實驗セリ聊カ茲ニ記載スヘシソモ此種ハ淡水産ノモノニシテ大サドングリヨリヤヽ小サク殼ノ色ハ淡黑ハ極ク稀薄ノ褐色ヲ帶ブ數匹ノ内別ニ呈色ヲ注意セザレハ通常差異ナキモ棲息ノ位地ニ因テ呈色ニ微々タル差異アランカト疑フ其棲息スベキ溝ノ不潔ニシテ水色不透明ノトコロニテハ淡黑色ヲ帶ブト雖モ別ニ保護同化ノ理ニハアラズト信スレドモ熟々觀察ヲ下セハ棲息ノ位地ニ因テ必ス多少ノ殼色ヲ異ニスベシ之トテ全ク一個ノ觀察ナレハ數回ノ結果トハイエ斷言スベカラズ又清水ノ溝渠池中ニ棲息スルヨリハ反テ落葉腐敗臭氣蒸發ノ溝渠池中ニハ常ニ採集スルモ清水ノ溝渠池中ニ於テハ實ニ稀レナリ之全ク清水ノ溝渠ニ棲息スルヨリハ反テ種々ノ食物ニ富メルナガシ下ノ溝ハ己レカ食物ノ供給ヲ得ル便ナルトコロニ多キカト信ズ之ヲ採集スルハ至テ易シ溝邊ニ行キ附着ヲ注意スベシ若見當ラザルトキハ音聲ヲ聞キ探求スベシ必ズ棲息ノ多寡ニヨリ聞ク音ノ大小アレドモ多少パチパチスル音ヲ發スベシ此音ハ氣孔ヨリ空氣ヲ吸收シタル後又空氣ノ內ヨリ氣孔外ニ出ヅルトキ泡ヲ出ス音ナリ故ニ淡水産ト雖ドモ鰓ニヨリ呼吸スルモノノミニアラス此法ニヨリ採集スルトキハ夜間ト雖モ溝渠ニ臨テ其存在ヲ知リ採集スルヿ容易ナルベシ氣孔ハ介殼ノ附ケ根右側ニ一個ノ小孔アリ常ニ水面ニ上昇シテ空氣ヲ吸收シ肺ニ送ル之即呼吸孔 Pulmonata ニ編入スル所以ナリ呼吸孔ハ貝ノ大小ニヨリ差アリト雖モ其介殼ニ比シテ大キケレハ一目觀察シ易シ觸鬚ハ球形ノ末端ヲ有セズ少シク三稜形ニシテ短カク濶廣シ眼ハ其基根ニ黑色ノ點ノ如ク見ラルベシ腹足ハ毫モ Helix ニ異ナラスト雖モ水中又ハ水面ヲ匍匐スルコト巧ニシテ其際介殼

リ候漁夫ハ多ク南部青森秋田地方ヨリ期節中雇ヒ來ルモノニテ通常之レヲ雇ト稱シ又「ヤンシウ」抔ト申シ一種ノ風儀習俗之アリ種々笑フ可キ話柄モ之レ有リ候先ツ多クハ北海道ヘ米ノ飯ヲ食ヒニ來ルガ樂ミ位給金ハ一期十五圓ヨリ廿五圓位迄之レ有リ候得共萬事萬端雇主ノ世話ニナル故給金ノ大方ハ差引カレ手取リ僅カナル上ニ皆場所ノ買女等ニ取リ揚ケラレ三四ケ月命懸ケデ取ッタ金ヲ一二夜ニ奪ヒ去ラルヽ抔隨分憐レナ始末ニテ夫故彼等モ種々奸計ヲ回ラシ中途ニ逃亡スルアリ或ハ二三漁場ヘ契約シ前金ヲ借リテ其儘逃匿スル等双方共ニ悪弊アリ此ノ使用法ニ就テハ本道漁業上ノ一大問題ニ相成居候鰊ガヨレバ雇ガヨル雇ガヨレバ買女ガヨル鰊ガ雇カ雇ガ鰊カ取ルノカ取ラレルノカ實ニ大キク見ルキハ妙ナ者ト一笑致シ候何レモ漁場ト申セハ遊廓飲食店盛ニテ期節中ハ矢張リ出稼致シ景氣ヲ添ユルガ双方ノ利益ノ如ク相成居候呵々

●飛魚ニ就テ　丘淺次郎氏ヨリ社友ノ許ヘ送リ越シタル信書中ニ飛魚ニ就テ氏ノナシタル觀察ヲ載セタリ、此魚ノ飛翔スルヿニ就テハ種々議論アリ、一體魚ノ空中ヲ飛ブヿハ面白キヿナレバ爰ニ掲載ス。

小生航海中飛魚の飛び具合を目撃する機會數多有之候其時々記し置きたる事實を日記の中より拔き書すれば先づ其種類ハ二種之あり第一ハホンコンよりシンガポール邊へ行くまで毎朝數百も見たるもの他の一種ハ同所よりアデンまでの間にて見たるものに候甲は船の甲板上より目鏡にて見たる事故手に取る如くとは行かねど乙の方ハアデンの港内を土人の小船にて漕廻る際常に頭の近くを飛び過ぎたれハ充分に見る事出來たり甲の大いさ凡そ一尺五寸位と思ハれ候が船の進むに隨ひ船首を中央として前左右へ非常なる數にて飛ぶ尾の端だけハ始終水に浸し居り候唯浪一山を飛びこしたる時丈は少時空中にあれど又次の浪に尾を浸し候青色にてイナの様な形に見へたれど詳しくは云はれず

第二の方ハ非常に能く見る事を得たり高さ一間或ハ尚高く飛ぶ事あり體の大サは二尺より三尺近きものあ

動物學雜誌第參拾四號
明治廿四年八月十五日發兌

## ●相州三浦三崎近傍に於て獲たる Hydroidea.（第一三頁の續き）

稻葉昌丸

22. Plumularia Sp.（第六十三、四圖）

Troph.――軸部甚ダ細小、枝ナク、少シク前方ニ彎シ、匍匐根ヨリ叢生ス。關節ニ二種アリ、互ヒ違ヒニ列ス。其一ハはいどろせかヲ擔フ。はいどろせかハ淺キ椀狀、比較上大形ナリ、其緣直ク。其位置互ニ相遠カリ、二箇ノはいどろせか間ニ二結節アリ。ねまとふぉーるモ細長。はいどろせかノ上背後ニ一對アリ、各〻特別ノ柄突起ノ上ニ立テリ。はいどろせかノ下ニ當リ一直線ニ三箇相繼ギ、中ニ就キ一ハ椀ノ直下、他ノ二箇ハ次ナル關節ニアリ。




第六十三圖。Plumularia Sp (22) ノ結合体、自然大。
第六十四圖。仝上ノ一部、廓大。

Gon.――未詳。

色。黃褐色。

場所。三崎ノ西手、三ひろ許。海草ノ枯根、いのうひ等ニ附着ス。

軸の高さ一セメに及ばず、介殼などに叢生せるを見るに、茸毛と誤認し易し。其造搆上より謂へば、無枝と云はんよりハ無軸と云ふ方適當なるを覺ゆ。ハイドロセカ背後に立てる一對のネマトフォールが特別の柄を有せるハ珍らしき事とす。明治廿二年一月に採集したるなれども、生殖器を具へず。

23. Plumularia Sp.（第六十五、六、七、八圖）

Troph.――軸部强硬ニシテ甚ダ大形、數多ノ小管結束ヨリ成リ、數多不整ニ枝ヲ出ス。最終ノ軸ハ多少不整等ナル關節ヨリ成リ、每關節ヨリ一箇若クハ二箇ノ小枝整等ニ互生ス。每枝ハ整等ノ關節ヨリ成リ、每節ニ一箇ノはいどろせかヲ擔ヘリ。はいどろせかハ小形、深キ椀狀ニシテ

ハ水面ト反對ノ位地ニヨリ充分水面ニ出テ匍匐ヲ始ムルトキハ其觀察實ニ奇ナリ徐々トシテ恰モ大海ニ一片ノ甲鐵艦ヲ浮漂スルガ如シ此水面匍匐ハ空氣ヲ吸收スルヨリ起リ自然水底ヨリ浮キ上カル作用ニアラズシテ水面上迄來リ空氣ヲ吸收シテ其作用ヲ行フ故ニ或ル部分ヲ攣ジ水面近ク上昇シ空氣ヲ呼吸スルニアラサレハ決シテ水面匍匐ニ掛カルコト能ハス或ル時ハ水面ヲ離ルヽ五六寸ノ處迄上昇シ靜息スルアリ或ル時ハ水面ヨリ境角ニ匍匐ヲ始ムルコトアリ一定セズト雖モ等シク空氣ヲ呼收ス此ニ擧動ノ委細ヲ左ニ記サンニ

(1)白晝ハ活潑ニシテ能ク水底幷ニ水面ヲ匍匐ス

(2)夜間ハ十一時頃迄ハ活潑ナラザレ𪜈ヤヽ匍匐ス

(3)夜間一時頃ヨリ三時頃迄ハ殆ント睡眠ノ有樣ニテ毫モ匍匐セズ體ヲ縮メテ靜息ス各夜然リ之ヲ燈下ニヲクモ又暗處ニ置キ燈下ニ持來リ置クモ睡眠ノ有樣ニテ毫モ匍匐セザリキ

(4)空氣ヲ吸收シテ後ノ吸收迄ハ一分前後概ネ然リ

(5)空氣ヲ吸收スル爲メニ開口スル時間ハ四十秒前後概ネ然リ

(6)步行ノ際ハ必ズ口ヲ開キ赤色ノ舌ヲ出シテ水アカヲ食フ

(7)觸鬚ハHelixト比較スルトキハ刺激サルヽモ鈍ブシ

(8)空氣ヲ吸收セシトキハ如何ニ刺激ヲ與フルモ決シテ水底ニ沈マズ

(9)空氣ヲ出ストキハ必ズ水底ニ沈ム(10)水面迄上昇セザル途中ニ於テ刺激ヲ與フレハ必ズ沈ム以上皆充分成長シタルモノヽ成績ナリ

(8)(9)(10)ノ擧動ニヨリ觀察ヲ下セハ彼レカ水面匍匐ハ全ク空氣ノ吸收ヨリ體重ヲ輕クシ恰モ輕氣球ノ作用ニ異ナラザルカト信ズ

丹羽甲子郎

# 東京動物學會記事

●例會　明治廿四年六月二十日午后二時ヨリ帝國大學動物學教室ニ於テ月次會ヲ開ク中村粲太郎君ハやつめうなぎノ胚葉ニ就テ其發育ノ狀態ヲ松井敬勝君ハLimnodrilusノgeneral morphologyニ就テ演舌セラレタリ出席會員拾名午后四時散會ス

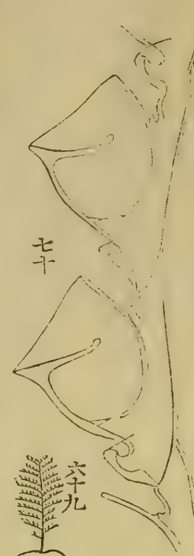
●本會々員箕作佳吉君ハしよふがくぼふノ產卵地等探究ノ爲遠州相良地方ヘ又飯島魁君ハ菊地松太郎君ト共ニ信州濃州地方ヘ鳥類採集ノ爲中村粲太郎君ハ福岡縣下志賀島ヘ藤田經信君三本貞守君ハ三崎帝國大學臨海實驗所ヘ五島清太郎君ハ房州地方ヘ旅行セラレタリ

●本月本會ヘ入會者左ノ如シ

理科大學簡易科卒業生　長濱兼吉君

大坂市北區若松町　高松榮太郎君

一箇宛、互生ニ枝ヲ出ス。毎小枝モ整等ノ關節ヨリ成リ、一箇ノはいどろせかヲ擔フ。はいどろせかハ椀狀、其腰部ニテ折レテ外ニ變シ、折レ目ヨリ外方ニ褶襞ヲ出シ、椀內ヲ二部ニ分ツ、口緣直シ。ねまとふぉーるハ甚ダ短クシテ、はいどろせかノ直上ト直下トニアリ、上背ノモノハ殊ニ短クシテ、僅ニ穴ノミアルガ如シ。




第六十九圖。Plumularia Sp.(24) ノ軸一本、自然大。
第七十圖。仝上ノ小枝、はいどろせか側面、廓大。

Gon.——未詳。

色。無色、殆ンド透明。

場所。三崎。

軸部甚だ羸弱、長さ二セメ許。此種の特徴ハベール氏の記述を讀むに甚だ善く符合せり、唯一事異なるハ、ハイドロセカ背上に在るネマトフォールをベール氏記せず。此れ甚だ小にして、單に穴あるに過ぎざる程ゆゑ、隨分見落シ易し、或はベール氏ハ乾燥したる標品を驗したるにハ非さる歟 而して氏の圖を見るに此ものあるが如し。姑らく疑を存す。兎に角此種ハ Plumularia 屬の奇品と稱すべし。

明治廿一年七月岡田信利君之を採集す。

25. Halicornaria Sp.　（第七十一、二、三圖）

Troph.——軸ノ高サ十セめニ達ス。小枝ハ互生ニシテ、毎關節ニ二箇宛、軸ノ一面ニ附着ス。はいどろせかハ稍壺ニ類シテ、口濶ケリ、五十度許ノ角ヲナシテ枝ニ附着ス。前面ノ壁ノ半途ヨリ厚キ横行ノ隔障出デ、斜ニ後方ニ上リ、椀內ヲ上下部ニ分ツ。はいどろせかノ口緣前部ハ直ク、側部ニ二箇ノ大齒アリ、背部ハ直クシテ軸ニ接セズ。小枝ノ關節ニ窪線ナシ。正面ノねまとふぉーるハ長クシテ、椀側ニ接着シテ、其口緣ニ至リ、其ヨリ前上方ニ突出セル部ハ溝形ニシテ、長ク、次第ニ狹小トナリ、其端尖レリ。側面ノモノハ小形ニシテ囊狀、椀側ニ接着シ、終端ノ圓口ト側面ノ孔ト癒合シテ、其口裂ケタル如シ。軸ニ於

上ニ潤キ、口緣左右ニ一箇宛ノ大形鋭齒アリ、外上方ニ突出ス。ねまとふほーるハ細長、はいどろせかノ上背後ニ




第六十五圖。Plumularia Sp (23) ノ軸ノ上部、自然大。
第六十六圖。仝上ノ枝一部、廓大。
第六十七圖。仝上ノ小枝、はいどろせかノ側面。廓大。
第六十八圖。仝正面。廓大。

一對、其直下正面ニ一箇アリ。軸部ニ於テねまとふほーるノ配置ハ充分整々ナラズ。一箇ノ枝ヲ擔ヘル短關節ニテハ、其下端ニ二箇相並ビ、枝ノ基部ニ二箇相繼ギ、上端ニ一箇アルヲ通常トス。又二箇ノ枝ヲ有セル長關節ニテハ、上端中途下端ノ三所ニ二箇宛相並ビ、枝ノ基部ニ二箇相繼ゲルヲ以テ尋常トス。

Gon.——未詳。

色。濃キ黃褐色。

塲所。獅子鼻、三ひろ許。

此種は甚だ大形にして、高さ三十セメにも達し、甚だ丈夫なり。軸の下半にも概ね枝なく、大樣杉樹の如し。通常 Plumularia 屬ハ被膜薄弱にして、ハイドロセカの口緣直し。然るに此種ハ椀の口緣に二箇の大齒あり、被膜は著しく厚し、Plumularia 屬中稀に見る所なり。明治廿一年十二月採集、生殖器を具へず。

24. Plumularia producta, Bale?（第六十九、七十圖）

Troph.——軸部細小、整等ノ關節ヨリ成リ、毎關節ヨリ

起ル。正面ねまとふぉーるハ溝管形ニシテ、はいどろせかト殆ド同長、其多部ハはいどろせかニ接着シ、先端椀ヲ離レテ少シク突出ス。側面ねまとふぉーるモ溝管形ニシテ著シク突出セズ。軸部ノねまとふぉーるハ側面ノモノニ等シク、毎關節ニ三箇アリ、即枝ノ腋ニ一對、其下ニ一箇ナリ。

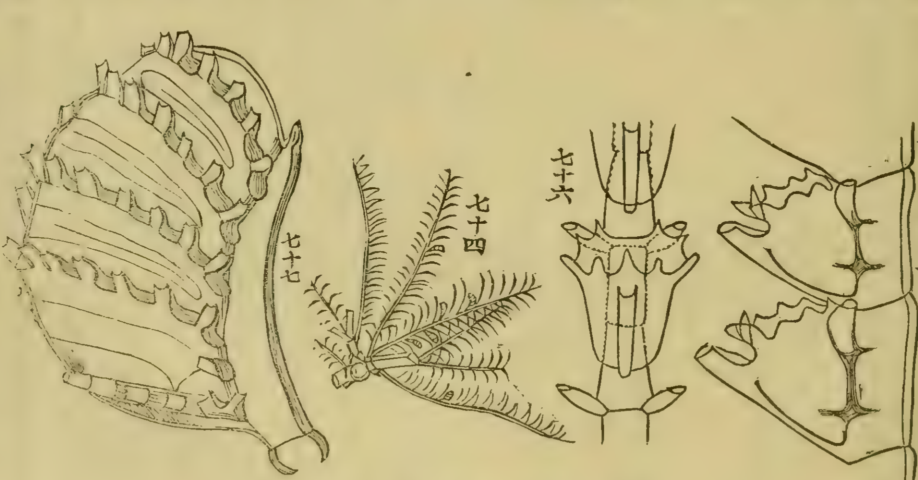
Gon.——ごのせうハ楕圓形、六七對ノ扁平ナル變枝之ヲ相圍テ、完全密閉シタルこるびゅらヲ成ス。毎薄葉ノ上緣ニ短ク、丈夫ナル、管狀ノねまとふぉーる並列セリ。

色。被膜ハ濃キ黄褐色。

場所。三崎町ノ西手、三ひろ許。又房州小湊、志州和具。

時日。明治廿一年八月(和具)。

此種は三崎に於て明治廿二年一月に採集したるものなるが、生殖器を有せず。甚だ普通の種なると見へて、歐洲、亞米利加、濠州の海岸、皆之を產すと云ふ。我國にては、余の檢したる丈にても、三崎の外、廿一年八月中志州和具村に於て、十八年四月房州小湊に於て採集せられたり、三所の標品小異同あり。小湊產のものハ最も大に、軸の高さ彼是




第七十四圖。Aglaophenia pluma. ノ結合体一部、自然大。
第七十五圖。仝上ノ小枝、はいどろせか側面、廓大。
第七十六圖。仝正面、廓大。
第七十七圖。仝上ノこるびら廓大。

テハはいどろせか側面ノモノト同ジク、毎小枝ノ基部、後面ニ一箇、其前面ニ當リ軸ノ上ニ二箇アリ。

Gon.——未詳。

色。黄褐色。

場所。三崎ノ西手、三ひろ許。




第七十一圖。Haricornaria Sp. ノ結合体自然大。
第七十二圖。仝上ノ小枝、はいどろせか側面、廓大。
第七十三圖。仝　正面、廓大。

此珍らしき種は明治廿二年一月の採集に係れとも、惜くな生殖器を有せず。Halicornaria 屬の特徴は多分 Aglaophenia 屬のに似たるなれども、唯〻大に異なる所ハ、彼の生殖器はコルビュラに被はるゝも、此のものは裸出して、變形せざる軸又は枝の上にありと云ふ。余の標品ハ生殖器を具せざれバ、其果して Halicornaria なりや否や不詳なるが如くなれども、既に發見せられたる種と、大に其特徴を同じくするが故に、此屬に収めて大過なかるべきを信ず。

26. Aglaophenia pluma, Lamx.（第七十四、五、六、七圖）

Troph.——軸ノ高サ四せめニ達ス。軸ノ一面ニ、毎關節ニ一箇宛、互生ノ小枝ヲ出ス。はいどろせかハ椀狀ニシテ上部廣ク口濶キ、四十五度許ノ角ヲナシテ軸ニ附着ス。椀ノ下部ニ横行ノ窪線アリ。椀ノ口縁ハ深ク缺刻セラレ、齒ノ數九箇、側面ニ四箇宛、前面ニ一箇、皆稍〻外ニ開ケリ。小枝ノ關節ニ二箇横行ノ窪線アリ、一ハはいどろせか下部ノ窪線ニ接續シ、又一ハ側面ねまとふぉーるノ基部ヨリ

短ク、丈夫ニシテ、毎關節ニ二箇宛、枝ノ上下ニ附着セリ。

Gon.——ごのふぉーるハ楕圓形。之ヲ擔ヘルこるびゅらハ開放セリ、小枝ハ概チ三關節ヨリ成リ、末端二節ニ三箇ノねまとふぉーるヲ擔フ、軸ノ毎節ニ小枝ノ外一箇ノねまとふぉーるアリ。

色。被膜ハ淡褐色。

場所。三崎ト城ガ嶋トノ間、二ひろ許。

時日。明治廿二年七月。

此種ハ三崎に於て採集せらるゝハイドロクラゲ類中最も見事なるものゝ一なり。漁夫ハ通常之をカヤと稱せり、されどカヤの名稱は必ずしも此種に局らざるに似たり、次に記載するAglaophenia. 種も亦カヤと稱せらる、但し此ハ彼に比して稍繁殖熾なるが故に、採集し得ること多し。此種大形なるに比しては、被膜甚た薄弱なり。コルビュラハ密閉せず、又小枝甚た短くしてゴノフォールと共に長せざるが故に、成熟したるものにありては、無枝の短軸に少數のゴノフォールが粒々附着せるが如く見ゆ。第八十一圖は幼稚のものを撰び圖せるなり。

28. Aglaophenia Sp. （第八十二、三、四、五圖）

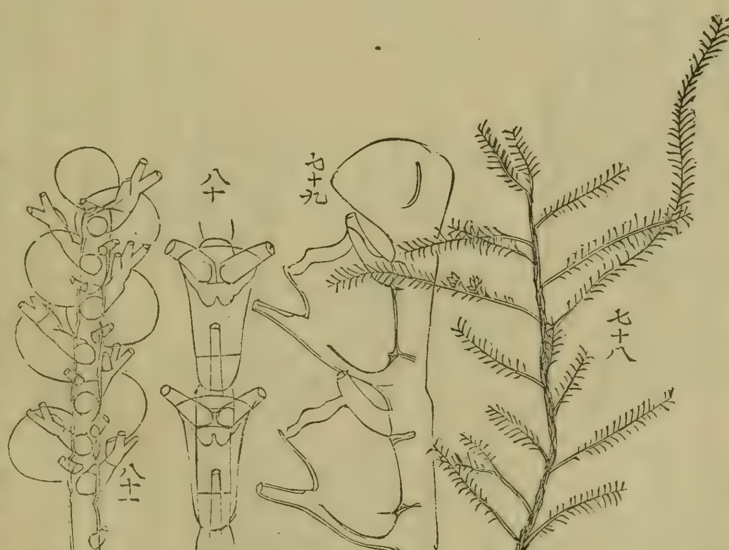
Troph.——軸ノ長サ二十せめニ達ス、數多不整ニ枝ヲ出ス。小枝ハ互生ニシテ、一節ニ一箇宛、軸ノ一面ニ附着ス。はいどろせかハ深椀狀ニシテ、三十五度許ノ角ヲナシテ軸ニ附着ス。口縁深ク缺刻セラレ、兩側ニ四箇宛ノ齒アリ、前正面ニ一齒アリ甚シク内ニ曲レリ、背後緣ハ直クシテ軸ニ接着セリ。椀ノ下部ニ當リ横行ノ薄壁アリテ椀内ヲ上下部ニ分ツ。小枝ノ關節ニモ横行ノ隔壁二アリ、一ハ椀ノモノニ接續シ、又一ハ側面ねまとふぉーるノ基部ヨリ起ル。正面ノねまとふぉーるは管狀ニシテ、其多部ハ椀ニ接着シ、上端少部ハ椀ヲ離レ、稍々狹小トナル。側面ノモノハ圓錐ニ似テ、長ク、上外方ニ彎出ス、其多部ハ椀ニ接着シ、椀ノ口縁ヨリ少シク突出セリ。軸ノねまとふぉーるハ短クシテ、丈夫、枝ノ上下ニ當リ毎關節ニ二箇アリ。

Gon.——こるびゅらハ櫛形ニシテ、密閉セズ、十五乃至二十對ノ變枝ニ圍マレテ成ル。變枝ハ不明ノ關節ヲ有シ、

五セメにも及び、和具のものは僅に三セメ許、三崎のものは其中に在り。和具、小湊の者は共に生殖器を具せり。されば四月より八月に至る間を此生殖時期と定むべき歟。和具の漁人は此種を稱してモジラと云へり、蓋し藻蝨の義にして、之に觸るれば、クシャ〳〵刺すを以て名けたる歟。若し然らばモジラの語は此種に局らず、Aglaophenia 屬の總名なるに似たり。彼等漁人も然らく用ゐ居れる樣にも見ゆ。

27. Aglaophenia Sp.(第七十八、七十九、八十、八十一圖)

Troph.——軸ノ高サ二十せめニ達ス、不整ニ數多ノ枝ヲ出ス。軸及ビ大枝ハ數箇ノ小管結束ヨリ成ル、最終ノ枝ニ至リテ始メテ一本ノ軸ヨリ成ル。小枝ハ毎關節ヨリ一箇宛互生シ、皆軸ノ一面ニ附着ス。はいどろせのハ壺形ニシテ、中部廣ク、上下端ハ窄シ、三十五度許ノ角ヲ以テ軸ニ附着ス。椀ノ下部ニハ横行ノ窪線アリ。椀口ハ開ケリ、口縁波線ヲ畵キ、前正面ニ一箇ノ鋭齒アリ。小枝ノ毎關節ニモ二箇ノ横行ノ窪アリ、一ハはいどろせかノ窪線ニ續キ、又一ハねまとふぉーるノ基部ヨリ起ル。正面ノねまとふぉーるハ管狀ニシテ、椀ト殆ンド同長、其下半ハ椀ト接着シ、上半ハ離レテ遠ク前方ニ突出ス。側面ノモノモ管狀ニシテ長ク、上外方ニ彎出ス。軸部ノねまとふぉーるハ、




第七十八圖 Aglaophenia.(27)ノ軸ノ先端、自然大。

第七十九圖 仝上ノ小枝ばいどろせか側面、廓大。

第八十圖。仝正面、廓大。

第八十一圖 仝上ノころびゅら若キモノ、廓大。

第八十四圖。仝上ノはいごろせが正面、一層廓大。
第八十五圖。仝上ノてるびゅら若キモノ、廓大

## ●鳥雜記（三）　飯島魁

### ○日本產へらさぎ科　(Plataleidae)

余ノ編纂シタル日本鳥目錄中亞目へらさぎ類中ニ二屬四種ヲ出ダセリ皆相共ニ同一科ニ編入スベキモノナリ、此科ヲ前號ニ記シタルさぎ科ト識別スル主ナル目標ハ上嘴ノ兩側ニ鼻孔ヨリ嘴端ニ至ルマデ走レル狹キ溝ノアルコナリ、さぎ科ニモ此溝アレド決シテ嘴端ニ達スルコナシ、又嘴端ハ甲ニテハ鈍ナレド乙ニテハ尖レルヲ常トス」嘴幅廣ク扁平ニシテ箆形ナルヲ Platalea 屬トシ、殆ド圓筒狀ニシテ端ノ方ニ漸々ト細クナリ且ツ下ニ曲レルヲ Ibis 屬トス

甲、Platalea.　へらさぎ屬

A、額及ビ頰ノ羽ハ眼ヨリモ遙カ前ニ至ルマデ生ズ、顏ノ裸出皮ハ黃色ナリ……………………（一）

B、額及ビ頰ノ羽ハ眼ヨリモ前ニ達セズシテ止ム、黑色ナリ（二）

一）P. leucorodia, Lin.　へらさぎ

羽色白シ、老鳥ハ黃ヲ帶ビタル羽冠ヲ戴ク、幼鳥ニハ之レナク而シテ翼端黑シ、喉及ビ眼ノ周圍ナル裸出皮ハ黃ナリ、嘴黑ク末端黃ヲ帶ブ、脚黑シ」翼一尺三寸許リ、嘴六寸六分許リ、走脚四寸六分許リ、中趾（爪ヲ除キ）二寸五分許リ

此種ハ北亞米利加及ビ印度邊ニテハ留鳥ニシテ冬ハ歐州南しべりあ、日本等ニ至ルマデ渡リ來ル、東京近傍ニハ今極メテ稀レトナレリ

二）P. mincr, Tem. &Schl.　くろつらへらさぎ

前種ヨリモ稍々小形ナリト云フ、嘴及ビ顏ノ裸出部ハ暗褐色或ハ黑色ナリ且ツ又喉ノ正中ノ裸出部前種ニ於ケルガ如クニ後方ニ延ビズ

本邦ニテハ此種ハ僅カニ兩三回長崎邊並ニ五島ニ於テ獲タル人アルノミナレバ後來ノ注意ヲ要ス、朝鮮及ビ臺灣ニモ此種アリ其他ニテハ未ダ見ズ

乙、Ibis.　とき屬

其兩側ニねまとふほーるヲ擔フ、ねまとふほーる對生ニシテ、其形ハ椀ノ側面ニアルモノニ同ジ。變枝ノ基脚ニ一箇ノはいどろせかアリ、其背後ニ一對ノねまとふほーるヲ負ヘリ、椀軸ハ變枝ト殆ド直角ヲナセリ。椀及ビ變枝共ニ、一本ノ短柄ニ擔ハル。

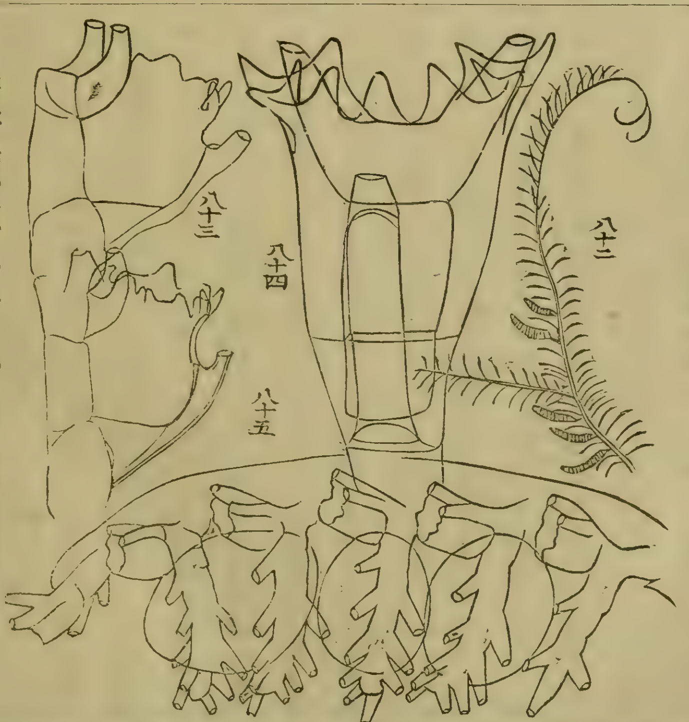
色。被膜ハ殆ド黒シ。

場所。三崎城ヶ島ノ間、二ひろ許。

時日。明治廿二年七月。

此種も見事なり、色黒ければ認め易し。コルビユラ大形なり。之を組成せる變枝がハイドロセカを負へるとは稍ゝ珍らしき事とす。或る枝の末端卷て、植物の卷鬚の如く成れるものあり、圖せるが如し。此部は軸管のみが螺旋を成せるまて、ハイドロセカもチマトフォールもなし。

已上記載せる Aglaophenia 三種のコルビユラを比較するに其造搆皆異れり。何れも共に枝の變形して成れるなれど、其變化ニ淺深あり。この種(28)のものハハイドロセカ及びチマトフォールを負ひ、尤モ尋常ニ近し。前のもの(27)にてハ椀なく、チマトフォールのみあり。已上二種にてハコルビユラ開放せる儘なり。第一種(26)に至りてハ、變枝旣に棒狀を失して、扁平なる薄葉となり、密閉したるコルビユラを成せり、是れ變化の最も至れるものなり。




第八十二圖。Aglaophenia sp.(28) ノ軸ノ先端、自然大。
第八十三圖。仝上ノ小枝、はいどろせか側面、廓大。

余ハ此種ノ和名ヲ知ラズ、やぶさめ一名しをさゞいト云ヘルモノ是レナランカトハ思ヘドモ余ノ知レルやぶさめノ標品ハ去年以來米國ノ一鳥學家ノ許ヘ洋行中ニテ坐右ニナキ故果シテ此種ナルカ或ハ余ノ目錄中ニ出デザル一種ナルカ差當リ決定スルヿ能ハズ、C. squamiceps ハ冬臺灣、南支那等ニ居リテ夏日本ヘ來ルモノヽ由ニテ曾テ函館及ビ富士山近傍ニテ之ヲ採集シタル洋人アリ、其形質ハ左ノ如シト云フ

小鳥ニシテ翼長一寸七八分、尾羽九分許リ、即チ短キコト凡ソ翼ノ半ナリ、嘴峰四分五厘許リ、走蹠六分許リ」上面ノ色ハ一体ニ白赤茶ナリ、白赤茶ノ判然シタル眉アリ、又眼ヲ通過セル黑赤茶ノ條アリ、下面ハ一体ニ白茶色ニシテ胸及ビ腹側ニテ濃シ、腋羽ハ白茶ナリ、第一ナル小形ノ風切リハ長五分程ニテ第二風切リノ半ヨリモ少シク短シ、第三、第四及ビ第五風切リハ最長ノモノニシテ相共ニ殆ンド同長ナリ、第二風切リハ略ボ第八ト同長ナリ

47）C. diphone,(Kittl.) 小笠原うぐひす（新稱）

是ハ小笠原島特產ノうぐひすニシテ色ニ於テハ內地產尋常ノうぐひすニ類似スト雖モ尾羽（六三乃至六五ミメ）、走脚（二三乃至二五ミメ）及ビ嘴（一八ミメ許）ハ一層長シ、余ハ未ダ此種ヲ見タルヿナシ又鳴聲ノ如何ヲ知ラズ、小笠原ニハ內地產ト同ジうぐひすハ全ク居ラヌモノニヤ

45.）C. cantans.(T.&S.) 尋常うぐひす

46.）C. cantillans.(T.&S.) 小うぐひす（假稱）

右二種共ニ日本及ビ琉球ノ特產ニシテ北海道ヘハ夏渡リ行キ、ソレヨリモ南ノ地方ニハ四時共ニ居ル鳥ナリ、棲息地ノミナラズ亦格好、羽色ニ於テ二者全ク同一ナレド唯身体ノ大小ニ於テ異ナレリト、此差別ヲ立テタルハテムミンク及ビシュレーゲル兩氏ニシテシーボルトノ Fauna japonica ニ始メテ記セリ、鶯ハ本邦人ノ大ニ愛玩スル所ニシテ此鳥ニ付キ經驗ヲ積ミタル人尠カラズ、余屢々斯ル人ニ大小二種アル哉否哉ヲ尋ヌルニ皆曰ク大ハ雄、小ハ雌ナルノミ決シテ別種ニアラズト、今試ニ理科大

A、顔部ノミ裸出ス……………………………(三)
B、頭及ビ頸ハ全ク裸出ス……………………………(四)

三) I. nippon, Temm. とき

大鳥ニシテ羽色純白、鮭肉色ヲ帯ブ、所謂とき色是ナリ、幼鳥ニテハ頭、冠羽、頸及ビ脊ハ灰色ナリ、嘴黒ク長サ五寸六分乃至六寸三分、顔ノ裸出部ハ全脚ト共ニ赤シ、翼長一尺三寸四分許リ、走脚二寸八分許リ、中趾(爪共ニ)二寸七分許リ、

此種ハ四時本邦ニ居ル但シ冬ハ南方ニ移リ行クモノアルナラン、支那寧波ニテモ生殖スルヲ知ル又冬ノ間朝鮮及ビ南支那ニテモ出會スルヿアリ

四) I. melanocephala, (Lath.) くろとき・かまさぎ、

前種ヨリモ稍々小シ、頭ヨリ頸ニカケテ裸出シ皮色黒ナリ、嘴及ビ脚モ亦黒シ、羽色純白ニシテ成鳥ニ在テハ肩ニ灰色ノ箕羽ヲ生ス」幼鳥ニテ　此箕羽ナク而シテ極ク幼キモノニテハ頭頸モ短キ羽毛ヲ以テ覆ヒ始メ暗褐色ニシテ次ニ白色トナル」翼長一尺九寸乃至一尺二寸五分、嘴五寸六分乃至六寸三分、走脚三寸四分許リ、

是ハ支那等ニハ四時居ル鳥ニシテ日本ヘハ夏來ルモノナリト云フ、北海道ヘハ行カザルガ如シ

ときノ二種ハ往時東京近傍ニ普通ナリシヿハ中年ノ人ノ記臆シ居ル所ナルガ今ハ見掛ケルヿ更ニナシ、とき並ニくろつらへらさぎノ標品ハ理科大學ニナシ依テ此等ヲ獲ラレタル人ハ寄贈アランヿ希望ニ堪ヘズ寄贈者ノ名ハ其標品ト共ニ永久ニ傳フベシ

## ○日本産うぐひす屬

鳥ノ目録中うぐひす屬(Cettia)ニ四種ヲ擧ゲタリ(44ヨリ47ニ至ル)、今其種別ヲ記載シ而シテ通常ノうぐひす及ビこうぐひすハ果シテ別種ナル乎ノヿニ付キ諸君ノ攻究アランヿヲ推薦セントス

うぐひす屬ハ尾羽ノ數必ズ十枚ナリ、めぼそ屬等ハ形狀甚ダ相似タレド尾羽ノ數十二枚ナルガ故ニ直チニ識別シ得ベシ

44) C. squamiceps, (Sw.) (頭ニ付シタル數字ハ目録番號ナリ)

言ノ眞正ノ意味ハ一番子ニハ大ナル者多ク二番子ニハ小ナル者多シト云フニアリ、何ゼナレバ此人ハ大ハ皆雄、小ハ皆雌ノ説ヲ誤認スル人ナレバナリ、ソハ斗モアレ此點ニ付キテモ事實ノ研究アランヿヲ地方ノ諸君ニ望ミ、吾邦うぐひすハ一種ナルカ將タ大小二種アルカヲ決定センヿヲ期スルナリ

セーボーム氏モ元ト大ハ小ノ雄ニ過ギストノ説ヲ取リタル人ナルガ大小共ニ雌雄ノアルヿ且ツ又不充ナガラモジウイ氏ノ幼鳥ノ脚色ニ關スル言アルニヨリ近著ノ「日本帝國ノ鳥」中ニ大小ヲ別種トシテ記載サレタリ且ツ又説ヲナシテ曰ク斯クノ如ク相近似セル二種ガ全ク同一ノ地方ニ分布スルハ少シク奇態ナルヲ免レズト雖モ併シナガラ此事タル又説明ヲ加フルニ難カラザルナリ、大種ハ多分 C. canturians ノ北海道ノ方ヨリシテ日本ニ浸入シ生ジタルモノナラン、此種ハ烏蘇利地方、アスコルド島、及ビ北支那ニテ生殖シ冬ハ南支那及ビ台灣ニ渡リ往クモノニテ日本ノうぐひす（大ナル方）ヨリモ稍々大形ニシテ尾ハ比較的ニ短ク色ハ殊ニ頭ニ於テ赤茶ヲ帶ビタルモノナリ」小種ハ多分 C. minuta ノ臺灣琉球ノ途ヨリシテ日本ニ入込ミタルノ結果ナラン、此種ハ南支那及ビハイナン島ノ産ニシテ臺灣ニハ此レト日本ノ小うぐひすト中間ノ種族アルナリ」即チ日本うぐひすノ現狀ヲ説明スルニハ左ノ二件ヲ假定スルヲ要ス、第一、大種ハ北ヨリ小種ハ南ヨリシテ兩種共ニ漸々日本全群島中ニ擴ガリタルヿ、第二、日本ノ氣候及ビ其他ノ事情ハ入來シタル兩種ノ上ニ一樣ノ影響ヲ及ボシ、体ヲ小ナラシメ、尾ヲ長カラシメ而シテ赤茶色ノ羽毛ヲシテ橄欖色ニ變ゼシメタルコト是ナリ」此説果シテ當レルヤ今知ルベキニ非ズ唯參照ノ爲メ記シ置キヌ

## ○大せつかニ就テ

鳥ノ目錄第四十九番 Lusciniola pryeri ニハ和名ヲ附セザリシカ近頃之ヲ東京大塚ニ住メル牧野茂十郎ト申ス鳥知リ老人ニ尋ネタルニ大せつかナリトノヿ、且ツ又甚ダ適當ノ名前ト思ハシキ故、以後ハ此名ヲ與フルヿニ決意セ

學所藏並ニ余ノ私藏スル二十二個ノ雌雄判然シタル標品ヲ測リ大小ニヨリ甲乙二部ニ分チ見ルニ左ノ如シ

| | 翼ノ長サ | 雌 | 雄 | 總數 |
|---|---|---|---|---|
| 甲 | 翼長六四ミメ乃至六六ミメ | 二 | 五 | 七 |
| 乙 | 翼長五四ミメ乃至五七ミメ | 十四 | 一 | 十五 |

甲ノ者ハ只翼長ノミナラズ亦全体ノ大サ並ニ脚ノ太サニ於テ一目シテ乙ノ者ト識別スルヲ得

甲ハ皆 cantans ナルニ相違ナシ、然レモ乙ハ皆 cantillans ナル乎ノ問ニ對シテハ疑ナキヲ得ズ、雄ノ數ノ餘リニ少キ(十四ニ對スル一)ヲ以テ見レバ本邦養鳥家ノ雄ハ大、雌ハ小ナリトノ言ヲ思ヒ當リテ cantans ノ雌モ此乙部中ニ雜リ居ルナランカ(乙部中一雄ダケハ cantillans ト看做シテ宜シケレド十四雌ハ皆 cantillans トハ云ヒ難シ)、余ノ信ズル所ニテハ養鳥家ノ雄大、雌小トハ必ズ土臺アルヿニテ一般ニハ左樣ナルベシ、左レド破格ノ塲合往々アルハ疑フベカラズ斯ハ右ノ表中甲部ニ二雌、乙部ニ一雄アルヲ以テ明ナリ

テムミンク及ビシユレーゲル兩氏ノ二種ヲ區別シタル理由ヲ察スルニ大ナル者ノ中ニモ亦小ナル者ノ中ニモ各々雌雄アルカ故ナラシ」又米人ジウイ氏ハ曾テ富士山並ニ越中立山ニテ鳥ヲ採集シタル人ナルガ矢張リ大小別種ナリトノ結果ニ至リタリ曰ク初年ノ幼鳥ニテハ脚ノ色大種ハ小種ヨリモ暗色ナリ、然シ羽色ニ於テハ兩種ノ幼老トモニ區別スルヿ能ハズト」ジウイ氏ノ此脚色ニ關スル言ハ二種ヲ區別スルニ甚ダ重ミアルヿナガラ氏ハ充分許多ナル材料ニ就キテ觀察シタルニテハ無キ樣ニ思ハル、脚ノ色ニハ隨分變化アルモノナレバ後來尚ホ此點ニ深ク注意スルヿ肝要ナリ

要スルニうぐひす大小二種ニ別ツハ其證據未ダ完全セズ假リニ一種ナリトセンカ、中間ノ大サナル者ヲ獲タル人未ダ一人モナキハ甚ダ訝シキ次第ナリ

或捕鳥家ノ說ニ一番子ハ雄多ク二番子ニハ雌多シト、此

京近傍普通ニ見ル所ナリ

## ○せんにうハ如何ナル鳥乎

俗ニせつか、せんようトテ並ベ稱スルヲ聞クヿ往々アルガ余ハ未ダ此せんにうナル鳥ヲ知ラズ、或人ハせつかトせんにうハ同一物ナリト云ヒタレド余ハ信ゼズ、プライエル及ビブラキストンハ兩氏合著ノ目錄中せつかノヿヲ誤テせんにうト記名シタルモノヽ如シ」日本ノ書物ニ就キ見ルニ形狀ヲ知ラシムルニ足ル記述更ニナシ又鳥屋ニ就キテ尋ルニ未ダ此レガせんようナリト云フニ出會セス捕鳥ノ名人牧野老父ニ尋ヌルニ曰クせつかトせんようハ本ニ別物ダヨ、せつかハイツデモ居ルガせんにうハ薬種ノ花ノ咲ク時分ニ來テ夏イルギリダヨ、國（尾張）ヘハターント來ルガコツチ（東京）デハ見タコトガナイ、木曾ニモ居ルヨ、アンタ木曾ヘ行ツタラ網デ取ツテ見ッセー、キット取レズニヨ、ナンデモみそさゞゐト同ジニ家ノマハリノ木ノ中バカリヲ匐テアルイテ金聲デッーツーツーツー……………トナガークヽ鳴ク小サナ茶色ノ丈ノ高ヒ鳥ダヨ」余ハ此老人ニ大學並ニ博物館ニアラユルせんにうラシキ鳥ヲ示シタレドイツカナ「ナーニコンナ物ジヤナイヨ」トノ斷答ヲ得タリ、地方ノ好鳥家此せんにうナルモノニ意ヲ注ギタランニハ大ニ鳥學ノ爲メ益アルベシ、思フニ此鳥ハ余ガ鳥ノ目錄中ニ漏レ居ルモノナラン

## ○しませんにう

しませんよう(Locustella ochotensis 鳥ノ目錄四十二番)ハ本邦ノ諸蒐集中ニハ稀ナルガ元來此種ノ生殖地ハ東しべりあ、千島等ニシテ日本及ビ支那ノ海岸ヲ經テ馬來群島ニ至リテ冬ヲ過ゴスモノナルガ故ニ春秋ニ本邦ヲ通過スルノ際求メナバ隨分獲ラルナルベシ、今余ノ眼前ニ二標品アリ、一ハ成鳥ニシテ帝國博物館ノ所藏ニ係リ波江氏ガ本誌第一卷三六八頁ニ記載シタルモノニシテ三宅島ニテ明治二十年五月三日ニ獲タル標品ナリ、又一ハ理科大學所藏ニテ下總ヨリ來レル月日不詳ノ幼鳥ナリ、全体ノ形狀、嘴及ビ尾ノ有樣等ハ大よしきりニ能ク似タレドモ

リ、目錄ノ所有者書キ入レラレンヿヲ望ム、抑モ大せつかノ標品ハ諸蒐集中甚ダ稀有ニシテ世ニ四個アルノミ即チ英國ニ三個（皆プライエル氏橫濱近傍ニテ採集シタルモノ）又我ガ上野ノ帝國博物館ニ一個ヲ藏ス、理科大學ニハナシ故ニ若シ寄贈者アランニハ悦ビ云ハン方ナシ、今採集家ノ爲メ博物館ノ一標品ヲ借受ケ之レガ記載ヲナスヿ左ノ如シ

此標品ハ雄ニシテ明治廿一年四月織田信親氏ノ靜岡ニ於テ採集スル所ナリ、体ハ尋常ノせつか（四十八番）ヨリモ大ニシテ、翼長五三ミメ、尾羽五七ミメ、最外ナル尾羽ノ正中最長ノ尾羽ヨリモ短キコト二六ミメ、走脚一九ミメ、中趾（爪共ニ）一八ミメ、嘴峰一〇ミメ」体狀羽色共ニせつかニ似テ上面ハ赤茶ヲ帶ビタル橄欖色ニシテ頭上、後頸及ビ脊上ニ黑斑條アレドせつかニ於ケル如ク大ナラズ、尾羽ハ一樣ニ赤茶橄欖色ニシテ黑斑若クハ白キ所ナキガ故ニせつかト大ニ異ナレリ」下面ハ淡白ク胸ニテ少シク茶色ヲ帶ビ、脇腹、股及ビ下尾筒ハ茶色ナリ」下嘴ハ上嘴ヨリモ色白ク、鬚ハ甚ダ短ク二本ヅヽアリ」脚ノ色ハ乾燥シタル有樣ニテハ黃色ナリ、走脚前面ハ明カニ鱗板ヲ示ス（せつかニテハ不分明ナリ）、羽式ニ於ケルモ二種大ニ異ナレリ即チ大せつかニテハ翼ハ尾ヨリモ短ク第一風切ノ長ハ第二ノ半分程ナリ而シテ第二ハ最長ノ風切ヨリ短キコト凡九ミメナリトス、尋常せつかニテハ翼ハ尾ヨリモ長ク或ハ同長ニシテ第一風切ハ第二ノ凡ソ三分一而シテ第二ハ最長風切ヨリ短キコト僅ニ一ミメ許リナリ

比較ノ爲メ尋常せつかノ特徵ヲ擧ゲンニ大せつかヨリモ小形ナルノミナラズ赤腰ノ邊ハ黃茶色ニテ黑條ナク而シテ尾羽ハ（殊ニ裏ヨリ見レバ）末端白メキタル色ニテ次ニ黑色ノ幅廣キ橫帶アリ、頭上ハ冬ハ黑條ヲ交ヘ夏ハ一樣ニ黑メキタル茶色トナル、尋常せつかハ北海道ニ在ル哉未ダ知ラザレド其レヨリモ以南ニハ四時居リテ初夏ノ頃蘆ノ中ニ巢ヲ作リ、飛ブトキハ尾ヲ團扇ノ如クニ擴ゲヒラ〲ト舞ヒ行クヿ蝶ノ如ク、ヒーヒーヒー……ト鳴ク、東

前々號ニ附シタル鳥ノ目錄中第百十八番ノ著者名 Savi. ハ（　）ノ中ニ入レベキモノナルガ誤テ之ヲ脫セリ、依テ訂正アランヿヲ乞、（　）ノ有ルト無キハ大ニ意味アルヿナルガソハ他日記スベシ、又第百八番ノ Sinica ニハ a ガ一ツ餘計ナレバ消サルベシ、尙ホ注意シタキヿハ此鳥雜記ナル欄ハ號ヲ逐フテ續々出ダシ日本產諸鳥ノ特徵ヲ記シ盡スツモリナレバ其記載ノ出デ次第ニ本雜誌ノ頁數ヲ目錄中當該種名ノ傍ニ書キ入レ他日各種記載ノ所在ヲ索引スルノ便ニ供セラルベシ

## ●東京市民ノ食膳ニ供スル動物ニ就テ（第參卷第二八號七二頁ツヾク）

波江元吉

### Reptiles

*Summer* 夏季

31. Trionyx japonicus, Schleg. スッポン

嗜好者ハ四季共ニ食スレ𪜈夏季ハ最モ多シ西備地方ニテハ Clemmys japonica, Gray「イシガメ」ヲ食スレ𪜈當市民ハ之ヲ食料ニ供セス又伊豆諸島小笠原島近海ニ棲息スル Chelonia viridis, Temm.「アヲウミガメ」ハ該諸島住民ノ有用ナル食料品ナレ𪜈當市民ノ之ヲ嗜ムモノ稀レナリ

又 Amphibians 中 Rana temporaria, Dinn.「アカヾヘル」及ヒ Salamandra unguiculata, Temm. Schleg.「サンセウヽヲ黑魚」ノ二種ハ藥品トシテ用ユルモノアルモ之ヲ食料ニ供スルモノ幾ンド稀ナリ

### Fishes

*Winter* 冬季

**Acanthopteri**

△32. Niphon spinosus, Cuv. & Val. アラ

△33. Scombrops chilodipteroides, Bleek. ムツ

△34. Serranus moara, Schleg. モアラ

此屬ノモノ尙數種アリ概子產額ノ多カラザルヲ以テ略ス

△35. Splyraena obtusata, C. & V. カマス

体軀小ナリ、左ノ表ニテ比例ヲ知ルベシ

| | 体長 | 翼長 | 尾羽 | 走脚 | 中趾（爪ヲ除キ） | 嘴峯 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| しませんにう成鳥（三宅島） | 一七〇、ミメ | 七〇、ミメ | 六〇、ミメ | 二四、ミメ | 一七、ミメ | 一五、〇ミメ |
| 大よしきり成鳥（東京） | 二〇〇、ミメ | 八六、ミメ | 七二、ミメ | 二九、ミメ | 一七、ミメ | 一七、五ミメ |

羽色ハ成鳥ニテハ上面（頭上ヨリ脊、翼、尾ニカケテ）殆ド一様ニ黒茶色（大よしノ色ヨリモ黒メキテ黄昧少シ）ナリ、眉アリ、尾羽ノ末端白メキタル色ナリ、下面ハ腮ヨリ腹ニカケ淡灰ヲ帯ビタル白色、胸ノ邊淡ク灰茶ヲ帯ビ脇腹ハ灰茶ニシテ大よしノ如ク黄茶ナラズ」幼鳥ニテハ下面淡黄ヲ帯ビ胸ニ黒メキタル小斑點アリ其他成ニ異ナラズ鬚ハ幼老トモニ少ク且ツ短ク大よしニ於ケル如ク著明ナラズ

## ○山陰地方ノ好鳥家ニ望ム

石州ヨリ出ヅルいはみせきれいト云ヘルハきせきれいニ似テ胸ニ三日月形ノ黒キ所アリテ尾ヲ横ニ振ルモノナリトハ諸書ニテ讀ミタル所ナルガ余ハ未ダ實物ヲ見タルヿナシ隨テ余ノ鳥目錄中ニハ入テ居ラズ、早ク見セテ貰ヒ度キモノニコソ

又しまごま（目錄ノ十六番）ト云ヘル鳥ハ籠鳥トシテ多ク見ル所ナルガ其出所未ダ詳ナラズ、二三ノ鳥好キ先生ニ糺シタルニ或ハ石州ヨリ出ヅルト云ヒ或ハ出雲ノ産ナリトモ云フ、又一説ニナンデモ島モノニテ琉球ノ方カラ來ルノデハナイカト云ヘリ、余ハ寧ロ山陰地方ノ産ナリト云フ方ニ加擔シ度キ心地スルナリ、其産地ニ住ハルヽ人ハ必ズ能ク此鳥ヲ知ルナルベケレバ實際ノ報道ヲ受ケタシ、抑モ此鳥ハ凡ソこるりト同大ニテ形こまどりニ似タレド色ハ上面黒茶色ニテ尾羽ハ栗赤ヲ帯ビタリ、下面ハ白メキタル色、但シ喉及ビ胸ノ羽ハ各々淡黒茶モテ縁取リアリテ鱗狀ニ半圓形ノ斑紋ヲナセリ、脇腹ハ淡黒茶色ナリ、翼ノ長サ二寸二分許リ、Erithacus 屬ニハ違ヒナケレド種名目下取調中ニテ解ラズ恐ラクハ日本ニ固有ナル一新種ナルベシ

## ○鳥ノ目錄所有者ニ告グ

△61. Pseudorhombus olivaceus, Schleg. ヒラメ

**Plagiotomi**

○62. Lamna glauca, Gthr. アヲザメ

○63. Zygaena malleus, Shaw. シユモクザメ

*Summer* 夏季

**Acanthopteri**

△64. Percalabrax japonicus, C. & V. スヾキ

△65. Sillago japonica, T. & S. シラギス

△66. Uranoscopus asper, Schleg. ミシマヲコゼ

△67. Pristipoma japonicum, C. & V. イサキ

○68. Thynnus albacora, Lowe. キハダマグロ

○(53) Thynnus pelamys, C. & V. カツヲ

△69. Caranx muroadsi, Schleg. ムロアジ

△70. Caranx maruadsi, Schleg. マルアジ

△71. Caranx equula, Schleg. ヒラアジ

△72. Trachurus trachurus, Linn. マアジ

△73. Hoplognathus fasciatus, Schleg. イシダヒ

△74. Diagramma cinctum, Schleg. コショウダヒ

△(54.) Ditrema Temminckii, Bleek. ウミタナゴ

△75. Chrysophrys hasta, Bleek. クロダヒ カイヅ

△76. Pelor japonicum, C. & V. オニヲコゼ

△77. Chirus hexagrammus, Pall. アイナメ

△78. Platycephalus insidiator, Forsk. コチ

**Physostomi**

×79. Cyprinus carpio, Linn. コヒ

×80. Misgurnus anguillicaudatus, Cantor. ドヂヤウ

○81. Exocetus agoo, Schleg. トビウヲ

△82. Clupea melanosticta, Schleg. イワシ

△83. Muraenesox cinereus, Forsk. ハモ

□84. Anguilla bostoniensis, Les. ウナギ

**Anacanthini**

△85. Parophrys cornuta, Schleg. メイタカレイ

△86. Plagusia japonica, Schleg. ウシノシタカレイ

**Plagiostomi**

△36. Thynnus macroptens, T. & S. ビンナガ

○37. Thynnus sibi, Schleg. シビノ若キモノ? メジマグロ

○38. Cybium niphonium, C. & V. サワラ

○39. Seriola Dumerilii, Riss. シヲガンパチ

○40. Seriola quinqueradiata, Schleg. ブリ

△41. Cypselichthys japonicus, Steind. & Dödrl. タカベ

△42. Latilus argentatus, C. & V. アマダヒ

△43. Prionurus scalprum, Langrd. ニサダヒ

△44. Lepidotrigla microptera, Gthr. カナガシラ

△45. Sebastes marmoratus, C. & V. カサゴ

此屬ノモノ尚數種アリ産額多カラザルヲ以テ略ス

△46. Lophius setigerus, Wahl. アンコウ

**Physostomi**

△47. Saurida argyrophanes, Richard. エリ

×48. Carassius auratus, Linn. フナ

□49. Chatoessus punctatus, Schleg. コノシロ

**Anacanthini**

△50. Pseudorhombus olivaceus, Schleg. ヒラメ

△51. Gadus Brandtii. Hilgd. タラ

*Spring* 春季

**Acanthopteri**

△52. Megaperca ishinagi, Hilgd イシナキ

△(33.) Scombrops chilodipteroides, Bleek ムツ

○(37.) Thynnus sibi, Schleg. シビ

○53. Thynnus pelamys, C. & V. カツヲ

△54. Ditrema Temminckii, Bleek. ウミタナゴ

△55. Pagrus cardinalis, C. & V. カスゴダヒ

△56. Pagrus major, Schleg. マダヒ

**Physostomi**

×57. Oncorhynchus Perryi, Hilgd. マス

×58. Hyponesus olidus, Pall. ワカサギ

△59. Salanx microdon, Bleek. シラウヲ

○60. Hemiramphus sayori, Schleg. サヨリ

**Anacanthini**

△(98.) Mustela manazo, Bleek. ホシザメ

△ハShore Fishes ○ハPelagic Fishes

×ハFresh-water Fishes, □ハBrackish-water Fishes

右ハ日本橋魚肆ニ於テ四時ニ販賣セル魚類ノ一斑ヲ掲クルニ過ギス素ヨリ詳細ニ調査セルモノニアラズ乞フ之ヲ諒セラレンコヲ

(ツヾク)

## ●動物解剖手引草(鳥類ノ部)(承前)

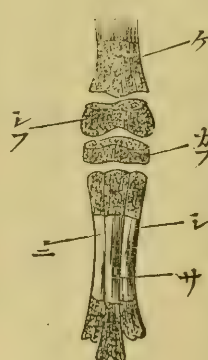
岩川友太郎

(一一四)孵卵期ノ終リニ臨ミ雛ばとノ有スル脛跗骨ノ末端ハ上跗軟骨(Proximal tarsal cartilage)(第六圖シフ)ト名ツクル獨立ノ軟骨ニシテ脛骨末端ノ培生突起ト全ク特別ノ化骨點ヨリ成リ之ト相分離セリ

(一一五)膝蓋骨ハ膝關節ノ前面ニ存スル小扁骨ニシテ靱帶ニ由リ大腿骨ト脛跗骨トニ結合セリ

(一一六)腓骨ハ脛跗骨ノ外側ニ附着セル細長骨ニシテ其上端ハ大腿骨ノ外髁ニ存スル腓骨關節窩ニ關節シ其末端ハ漸次細小ト爲リテ終ニ脛跗骨ニ密着ス

第六圖




(一一七)跗蹠骨(Tarso-metarsus)ハ脛跗骨ノ末端ニ關節セル圓筒狀骨ニシテ其上端ハ脛跗骨ノ兩髁ニ應スル二個ノ凹面ヲ有ス此凹面ノ後方ニ當リ突出セル一ノ強櫛アリテ其左右各側ニ跗蹠骨ノ稍々凹陷セル前面ニ貫通セル一小孔ヲ具フ其末端ハ三分シ中部ハ最長ニシテ各々滑車狀ヲ成シ以テ各趾ノ關節ニ供ス二小孔ノ上方ニ位セル跗蹠骨ノ部分ハ下位ノ跗骨ヲ代表スル者ニシテ此小孔及三分セル末端ハ元來跗蹠骨ノ第二第三及第四蹠骨ノ結合ヨリ成レル其分界ヲ表示セリ脛跗骨ト跗蹠骨トノ關節ハ上下兩位ノ跗骨間ニ成立セルモノナルヲ以テ便宜上之ヲ中跗關節(Mesotarsal articulation)ト稱ス

△87. Trigon pastinaca, Linn. アカヱヒ

*Autumn* 秋季

**Acanthopteri**

○88. Scomber saba, Bleek. サバ

○89. Histiophorus orientalis, T. & S. バショカヂキ

○90. Xiphias gladius, Linn. メカヂキ

△(42.) Latilus argentatus, C. & V. アマダヒ

△91. Trigla kumu, Lacep. ホウボウ

○92. Auxis tapeinosoma, Bleek. ソウダカツヲ

○93. Thynnus pelamys, C. & V. カツヲ

△(66.) Pristipoma japonicum, C. & V. イサキ

△(40.) Cypselichthys japonicus, Stein. & Dödrl. タカベ

△94. Gobius flavimanus, Schleg. ハゼ

**Physostomi**

×95. Oncorhynchus Haberi, Hilgd. サケ

×96. Plecoglossus, altivelis Schleg. アユ

△97. Clupea zunasi, Bleek. サツパツナシ

**Anacanthini**

○98. Sombresox saira, Brevoort. サンマ

**Plagiostomi**

△99. Mustelus manazo, Bleek. ホシザメ

*All seasons* 四季

**Acanthopteri**

△100. Sciaena sina, C. & V. イシモチ

□101. Mugil haematocheilus, Schleg. メナダ

□102. Mugil cephalotus, C. & V. イナ

△(55) Pagrus cardinalis, C. & V. カスゴダヒ

△103. Centronotus nebulosus, Schleg. ギンポ

**Physostomi**

△(81.) Clupea melanosticta, Schleg. イワシ

×104. Silurus asotus, Linn. ナマズ

□105. Anguilla bostoniensis, Les. ウナギ

△106. Congramuraena anago, Schleg. アナゴ

**Plagiostomi**

瞬膜ハ眼ノ内眥ノ中ニアリテ眼球ノ前面ニ伸張セラルベキ白色半透明ノ膜ナリ

(一二八)眼ノ少シク下後部ニ位セル耳孔ハ圓形ニシテ外聽道(External auditory meatus)ナル一條ノ溝道ニ開通セリ生鳥ノ耳孔ハ羽毛ヲ以テ全ク陰蔽セラレ外部ヨリ之ヲ認ムルヲ得ス

(一二九)頸部ノ皮膚ノ嫋々タルハ嗉嚢(Crop)(一五〇ヲ視ヨ)ノ多少空虚ナルニ歸因ス

(一三〇)鳥ノ胸部ハ胸骨ヲ被覆セル筋肉ヨリ成リテ胸骨(八七)ノ龍骨突起ハ外部ヨリ探知スベク此突起ハ胸部ノ中央線ニ沿ヒ頸根ノ邊ヨリ始マリテ末ヲ距ル一「インチ」半ノ處ニ終レリ

(一三一)胸骨末端ノ後部ニ存スル柔軟ナル腹壁ハ外側及後側共ニ恥骨ヲ以テ疆界セラル

(一三二)肛門ハ腫脣ヲ以テ界セラレタル横裂孔ニシテ体ノ末端ノ側腹ニ開在セリ

(一三三)尾錐ノ背面ニ一ノ小ナル乳頭狀ノ突起アリテ其頂端ニ尾錐腺(Uropygial gland)ノ導管ヲ開在セリ

(一三四)前肢(Fore-limb)即チ翼(Wing)ハ上腕(Arachium)前腕(Antibrachium)及手(Manus)ノ三部ニ區分セラレ翼ノ靜息スルトキハ此三部互ニ屈折シテZ形ヲ成セリ手部ノ上端前側ニ附屬セル拇指ノ外ニ獨立ノ指ヲ有セス

(一三五)前腕ノ上端ト手ノ前側上部トノ間ニ擴張セラレタル皮襞ヲ翼膜(Alar membrane)ト稱ス

(一三六)後肢(Hind limb)モ亦腿(Thigh)脚(Crus)及足(Pes)ノ三部ニ分レ足ハ更ニ跗蹠骨ト四趾トヨリ成リテ其内趾即チ蹠趾ハ特リ後向シ其他ハ前向シテ各趾ニ鉤爪ヲ具フ

(一三七)羽毛ハ体面ニ密生スル者ニアラスシテ羽生部(Pterylae)ト裸出部(Apteria)ハ交互一定ノ排置ヲ爲セリ羽生部ハ拔キ去ラレタル羽毛ノ痕跡ニ由テ之ヲ明視スベク*而シテ脊羽生部(Spinal tract)ハ背面ニ擴カリ其頸ニ接スル處ハ最モ明瞭ニシテ後方ニ至レハ二分シ腹面ニハ腹羽生部(Ventral tract)アリ軀幹部ニ於テ左右ニ分レ中央ノ下面裸出部(Inferior space)ニ由テ互ニ相隔離セリ以上ノ

(一一八)孵卵期ノ終リニ至リ雛ノ後來跗蹠骨ト成ルベキ上端ハ下跗軟骨(Distal tarsal cartilage)(カフ)ト名ツクル獨立軟骨ニシテ自餘ノ部分ハ第二第三及第四蹠骨(ニ、サ、シ)ニ相當セル三長骨ヨリ成リ此長骨ハ末端ノ外互ニ相密接セリ

(一一九)踇趾ハ跗蹠骨末端ノノ内側ニ靭帶ニ由テ結合セラレタル蹠骨ト二個ノ趾骨トヨリ成リテ末端ノ趾骨ハ鈎爪ヲ有ス

(一二〇)前向セル三趾ハ第二第三及第四趾ヲ代表シテ其蹠骨ハ互ニ結合シ以テ跗蹠骨ヲ成セリ第二趾即チ三趾中最内ニ位スル者ハ三趾骨次者ハ四趾骨第四趾即チ最外ノ者ハ五趾骨ヨリ成リテ各趾ノ末端ニ鈎爪ヲ具フ

（乙）　柔軟部

第十六項　一羽ノはとヲ有スルトキハ體ノ一側ヨリ羽毛ヲ悉ク抜キ去リテ他ノ一側ハ其儘ニ存シ置キ更ニ便利ヲ計ラハ比較ノ爲ニ二鳥ヲ取リ一羽ヨリ全ク羽毛ヲ抜キ去リ他ノ一羽ハ其儘ニ存シ以テ預メ左ノ查察ヲ爲スベシ

(一二一)體ノ區分ハ頭、頸、幹、肢ノ四部ニシテ頸ハ割合ニ長ク眞正ノ尾ヲ缺キ體末ハ鈍頭圓錐狀ノ突起ナル尾錐(Uropygium)ヲ以テ終レリ

(一二二)體ノ外形ハ大ニ翼(Contour feathers or pennæ)ノ被覆物ニ因ルモノニシテ羽毛ヲ拔去レル者ト否ラサル者トハ全ク形狀ヲ異ニセリ

(一二三)單毛(Filoplumes)ハ獸毛狀ニシテ翼間ニ生シ翼ヲ拔取セル者ニハ之ヲ明視スベシ

(一二四)頭蓋部ハ圓形ヲ呈シ顏面部ハ突出シテ嘴(Beak)ト成リ嘴ハ羽毛ヲ缺キテ堅牢ナル角質ノ鞘ヲ被ムリ其礎部ノ左右各側ニ蠟膜(Cere)ト名ツクル皮膚ノ膨起セル裸出部アリ

(一二五)口ノ上下ハ共ニ嘴ノ上下両片ヲ以テ界セラル

(一二六)鼻孔ハ一對ノ傾斜セル裂孔ニシテ蠟膜ノ直前ニ開在セリ

(一二七)眼ハ口角ノ稍々後方ニ位シテ各眼ニ羽毛ヲ有セサル上下眼瞼ノ外一ノ瞬膜(Nictating membrane)ヲ具フ

脚頭扁平ケレﾄﾓ差程濶大シ居ラズシテ五列ノ小吸盤ヲ有ス其内中央列ノ半途ニ在ル三四個ハ甚ダ大也腕脚第四對ハ甚ダ能ク發達シ居テ扁平ク外緣ニ肉鰭樣膜ヲ具フ吸盤ハ他腕脚モ共ニ四列ニシテ角質環ハ全邊ナル者ノ如シ呼出水管ハ短キ方ニテ且ツ細ク形ハ一寸圓錘狀ヲ爲ス介殼ハ殆ンド前種ト同形ニシテいんでツくすハ四ニ對スル二、五也

標本二個（共ニ雌） 明治十七年四月駿州江ノ浦ニ於テ箕作石川諸先生ノ採集ニ係ル體長六せめ巾廣キ處ニテ二、五せめ厚サ一、八せめ位頭部並ニ第四脚ノ總長三せめ觸脚ハ六せめ也

他書所載產地 丹後舞鶴、東京市場、房州勝山、鹿兒嶋、長崎、神戶トス

**4. Sepia andreanoides**, *Hoyli.* （すじいか）

所載書目 (Literature).

Hoyle, Chall. Ceph. p. 139, pl. XXI. Figs. 11—19, pl. XXII, Fig. 11.

Ortman, Zool. Jahrb. B. 3, H. 5, S. 653.

此種ノ特性其大體ニ於テ前記わしながいか（S. peterseni）ニ髣髴ス然レトモ體形ハ中央ニ於テ巾少シ廣ク脚長順式ハ一、四、三、二ニシテ第一脚ハ雄ニ於テ特ニ長ク且ツ常ニ二列ノ吸盤ヲ有ス雌ニ於テハ長サ割合ニ短カク吸盤ハ他脚ノ如ク四列也觸脚ハ常狀ナレﾄﾓ脚頭ニハ極メテ小クシテ同形同樣ノ吸盤五六列ヲ有ス交接器ハ左第四脚ニ在リ然レﾄﾓ第一脚ノ末端時ニ或ハ雄ニ於テ脚頭形ヲ爲シテ一種肉柱樣體ニ依リテ保持サルヽ所ノ……而テ巾キ……膜ヲ具備スル者アリ是レ何ノ用ヲ爲ス者ナル乎食物ヲ捕獲スル時ニ用ユル乎但シハ交接器ノ一助ヲ爲ス乎何ニシテ二重ノ者タルヲ免カレザル也介殼ハ巾狹クシテ厚ク特ニ其內面ノ圓滑面部ト粗剛面部ト相接スル處ハ甚ダ厚シいんでツくすは六ニ對スル三位也而シテ介殼背面ノ中央線ハ特ニ著ルシク凸ク其兩側ニハ分明ニ見認ム可キ溝各一個宛アリ

標本六個（雄四個雌二個） 何レモ殆ンド同大ニシテ体長

脊腹兩羽生部ハ其全長ニ沿ヒ軀幹ト頸ノ左右ニ於テ側面裸出部 (Lateral spaces) 出テ互ニ相分離セリ

＊羽生部ノ排列ヲ明視スルニハはとヨリモすゞめヲ至便トス是レはとノ羽生部ハ互ニ連合セントスルノ傾向アレトモすゞめニハ否ラサルヲ以テナリすゞめノ脊羽生部ハ狹長ニシテ腹部ニ於テノミ擴張シ腹羽生部ハ二條ノ細長帶ヨリ成リテ胸部全長ニ沿走セル下面裸出部ヲ以テ互ニ分界シ而シテ側面裸出部ハ甚タ濶大ナリ

（一三八）尾翮 (Rectrices) ハ十二枚アリテ尾錐ノ末端ニ列生シ裸体ノ鳥ニハ其位置甚タ著明ナリ尾翮ノ礎部ハ尾錐ノ背腹兩面ヨリ生スル小翮ヲ以テ被覆セラル之ヲ覆尾翮 (Tail coverts) ト名ツク

（一三九）前腕及手ノ後緣ニ沿生セル二十枚許ノ大翼ヲ翮翼 (Remiges) ト名ツケ中ニ就テ手ヨリ生スル者ハ手翮 (Primaries) 前腕ヨリ生スル者ハ之ヲ腕翮 (Secondaries) ト云フ翼ハ上下兩面共ニ覆翼翮 (Wing coverts) ヲ以テ被覆セラレ上面ノ覆翼翮ハ上膊羽生部 (Humeral tract) ト翼膜羽生部 (Alar tract) トヨリ生スルモノニシテ特ニ拇指ヨリ生スル一叢ノ小翮ヲ角翮 (Basterd wing) トイフ

（一四〇）腿ノ背側ニ大腿羽生部 (Femoral tract) アリ脚ニハ亦脚羽生部 (Crural tract) アリテ共ニ是ヨリ小翮ヲ生ス

（一四一）足ハ羽毛ヲ有セスシテ角質ノ鱗片ヲ以テ被ハレ而シテ跗蹠骨及足ノ前面ニ存スル鱗片ハ殊ニ大ナリ

（ツヾク）

## ●理科大學標本日本頭脚類目錄（第八回）

池田作次郎

### 3. **Sepia kobiensis**, *Hoyle.*

所載書目 (Literature).

Hoyle, chall. ceph. P. 142, pl. XVIII. Figs. 7—14,
Applöf, p. 20, Pl. III. Fig. 7.
Ortman, Zool. jahrb. B. 3, H. 5, S. 654.

此種體形ハ稍圓柱形ニシテ後端丸クシテ尖リ居ラズ頭部ハ寧ロ小サキ方ニテ腕脚モ短ク體長ノ五分ノ一以下也脚長順式ハ四、一、二、三腕脚ハ長サ體長ニ殆ンド等シク

基部凡ソ四五せめ位マデハ通常ノ吸盤四列ヲ有スレ𪜈其ヨリ以上末端ノ方ニ進ムニ従ヒ脚ノ漸々細ク遂ニ絲ノ如クナルト同時ニ吸盤モ漸々減少シテ遂ニ二列トナリ又タ始メヤ突起ノ如ク後漸々末端ニ進ムニ従ヒ單ニ細小キ點ノ如ク變形シテ而モ粗遠ニ散在ス觸脚ハ扁平ク長サハ體長ノ一倍ト四分ノ一位ニシテ濶大シ居ル所ノ脚頭ヲ有ス脚頭ニハ吸盤五列アリテ中央ノ四五個ハ甚ダ大也角質環ハ何レモ全邊ナル如ク見ユ介殼ハ鎗尖狀ニシテいんでツくすハ九ニ對スル六、五巾廣キ處ニテ全長ノ六分ノ其一位厚サハ最モ厚キ處ニテ十二分ノ一位兩側ノ角質縁ハ三みめ位也雄ハ左第四脚ニ交接器ヲ具フ

標本第一(一個雄)　明治十八年十月廿二日江ノ島體長十八せめ巾八、五せめ厚サ四、五せめ頭部並ニ第四脚ノ總長十五せめ第一脚ノ長サハ實ニ三十五せめ也

標本第二(三個内雄二個)　明治廿二年二月二十日房州かち山ノ產坂本福治ヨリ買ヒ上グ雌ノ一個ハ體長十二せめ半頭部並ニ第四脚ノ總長六、五せめ觸脚十三せめ第一脚ハ之ヲ雄ニ比シテ甚タ短カク長サ他脚ト敢テ大差アルナシ雄ノ一個ハ小ニシテ體長十四せめ半頭部第四脚ノ總長七せめ第一脚十七せめ觸脚十五せめ半也殘ル一個ノ雄ハ其概形ニ於テ他雄ト異ナル點ナケレ𪜈第一脚ハ差程長カラズ唯右第一脚ノ末端ニ五せめ位ノ細長部ヲ有スルノミ又觸脚頭ニモ別ニ大吸盤無ク五列共同形同大ニシテ寧ロ小サキ方也此ノ如キ差異果シテ如何ナル理由ニ依リ生ジタル者乎取テ以テ別種トス可キ歟今此處ニ判決シ難シト雖𪜈正シク前記あんどれゥのいですト此種トヲ連接セシルム形ニシテ共ニ同一せびあ、あんどれゥのいですニテ之レアル可ク信セラル然レ𪜈尚ホ疑ナキ能ハザレバ世ノ識者ノ敎ヲ待ツコト件ノ如シ其大サハ体長二十せめ半ニシテ頭部第四脚ノ總長十せめ觸脚十八せめ半也

標本第三(雄一個)　明治十六年十月十五日房州深浦ノ產体長十八せめ半巾廣キ處ニテ九せめ頭部ト第四脚十一せめ半第一脚十九せめ半觸脚二十二せめ半此奴体形他ノ標本ヨリ巾少シク廣ク且外套膜腹面遊離ノ入リ込ミ淺ク殆

九せめ巾最モ廣キ處ニテ三せめ半頭並ニ第四脚ノ總長四せめ第一脚雄ニ於テ九せめ雌ニ於テ四せめ位也十八年九月東京市塲

他書所載產地　横濱市塲トス、

5. **Sepia** *sp.*　（すじいか又ハきいか）

此種其全體ニ於テ前種ニ甚ダ能ク相似ル也實ニ余ハ同一種ナル可ク信ズ然レ𪜈淺學敢テ必ズ然ル者ト斷言シ得ザレバ暫時ラク名稱不明ニ置ク唯其異ナル點ハ要スルニ左ノ二個條ニ過ギズ曰ク

（第一）體形ノ凡テ大ナルコト

（第二）觸脚脚頭ニハ中央ノ處ニ三或ハ四個ノ一列ニ附着スル大吸盤ヲ有スルコト

是也尚此處ニ此種ノ概況ヲ記スレバ左ノ如シ曰ク……體形ハ長楕圓形ニシテ前端ヨリ凡ソ三分二位入リタル處巾最モ廣ク後端ハ細ク尖リ背面ハ梢ヤ凸ク腹面ハ稍ヤ扁平ク肉鰭ハ寧ロ巾狹キ方ニテ體前部ニ當ル處ハ特更ニ狹シ後方ノ巾廣キ處ニテモ僅カニ體巾ノ四分若シクハ五分ノ一ニ過ギル無シ而シテ體前端ヨリ凡ソ一せめ位入リタル處ヨリ始マリ後端ニハ左右ノ者各二みめ位互ニ相隔テヽ終ル也外套膜前端ノ遊離縁ニシテ背中線ニ當ル處ハ甚ダ強ク（三せめ位）前ノ方ニ突出ス而シテ其腹面ハ中央巾二せめ位後方ニ入リ込ミテ凹形ヲ爲ス頭部ハ小サケレ𪜈眼球ハ割合ニ大キク降リ側面ノ方ニ突出ス後頭背面ノ中線ニシテ前述外套膜背中線突起ノ直下ニ當リテ是レト相觸ルヽ面ニハ古金判形ノ斑紋トナリ居テ中央ニ細キ縦溝ヲ有ス呼出水管ハ寧ロ短キ方ニテ稍ヤ壺形ヲ爲ス腕脚ハ長順式一、四、三、二ニシテ四列ノ吸盤ヲ有ス吸盤ハ球形ニシテ全邊ノ角質環ヲ有ス第四脚ハ能ク發達シ居テ扁平ク外縁ニ肉鰭樣膜ヲ具フ且ツ各脚間ニハ多少ノ傘膜ヲ有ス傘膜モ第三脚ト第四脚トノ間ニ在ル者最モ能ク發達ス第一對脚ハ雌ニ於テ差程長カラザレ𪜈雄ニ於テハ非常ニ長ク實ニ體長ノ一倍半或ハ其以上ニ達ス而シテ其末端ハ觸脚ノ如ク脚頭形ヲ爲ス此脚頭ニハ一種肉柱樣筋帶ニテ保持サルヽ薄膜アリテ能ク濶大ス可ク見ユ又此第一脚ノ其

頭ハ稍ヤ扁平ク長卵狀ニシテ極メテ細小カク長キ柄ヲ有スル吸盤四五列ヲ有ス介殼ハ略ボあんゞどれゝのいですニ近似スレトモ少シク扁平ク且ツ其中央ノ處巾割合ニ廣クシテ能ク發達シ居タル內圓錘ヲ有ス兩側ノ角質緣ハ後ノ方三分ノ二位巾割合ニ廣シ是レ此ノ種ヲ他ノ類似ノ種ト區別スルニ當リ最モ要點トスル個處ナル如シ雄ハ左第四脚ニ交接器ヲ有ス其形他脚ト異ナルナシト雖モ末ノ方二分ノ一程ハ吸盤縮小シテ遂ニ消失シテ更ニ溝形ヲ爲ス

標本第一拾二個（♂五個♀七個） 十八年九月東京市場大ナル者體長五せめ半頭部第四脚ノ總長三せめ半觸脚九せめ小ナル者體長三せめ半頭部第四脚ノ總長二せめ半觸脚六せめ位也

標本第二（雌三個） 廿四年二月十四日相州三浦三崎ノ產坂本福治ヨリ買上グ何レモ同大ニシテ體長六せめ位頭部及ビ第四脚ノ總長五せめ半觸脚ハ十せめ位也

ちやれんぢあノ產地 Ki, Arafura Sea. トス

## 8. Sepia Kiensis, *Hoyle.* （あらはりいか）

所載書 (Literature).

Hoyle, Chall. Ceph. p, 141, pl. XVII, Figs. 6—11.

此種モ亦其概形ニ於テ前種ト甚ダ能ク近似ス然レ𪜈尙精細ニ彼是ヲ對照スレバ種々ノ點ニ於テ大小差異無キニ非ズ要スルニ体形少シク細クシテ外套膜遊離緣ノ背中線ニ當ル處前種ヨリモ一層銳ク尖ル特ニ介殼形狀最モ相異ナル也則チ介殼ハ細ク厚クいんでっくすハ五ニ對スル一、五ニシテ兩側ノ角質緣ハ甚ダ狹ク殆ンド全ク欠除セルガ如シ而シテ背面ハ殆ンド扁平ナレ𪜈腹面ハ却テ甚ダ隆ク凸形ヲ爲ス要スルニ介殼ハ前記こびぃんしすニ能ク相似居ル也然レ𪜈こびぃんしすトハ体形其他種點ニ於テ相異ナリ居也

標本第一（拾六個內雄五個） 十八年九月東京市場大ナル者体長五せめ半小ナル者同四せめ頭部並ニ第四脚ノ總長大ナル者ニ於テ四せめ半小ナルニ於テ三せめ觸脚は甲者八せめ半乙者七せめ也

ンド全邊也

標本第四(雄一個) 廿四年二月廿四日三浦三崎ノ產坂本福治ヨリ買上グ体長十二せめ半頭部第四脚十一せめ半第一脚十せめ觸脚二十八せめ

標本第五(雄一個) 十八年九月東京市場体長十二、五せめ頭部第四脚八せめ半觸脚二十せめ也

### 6. **Sepia eliptica,** *Hoyle.* (あかはりいか)

所載書 (Literature).

Hoyle, Chall. Ceph. p. 131, pl. XIX, Figs. 14—24.

此種ノ特性前述でもういか (S. esculenta) ニ甚ダ能ク近似ス然レドモ各脚吸盤ノ角質環ハ何レモ全邊也且其介殼ノ形ヲ異ニス則チ腹面ハ寧ロ凹クシテ稍ヤ扁平クいんでッくすハ五ニ對スル二内圓錐(Innercone)ハ後方三分一位ノ處ヨリ始マル角質緣ハ其巾後半ニ於テ漸々增巾シ後端ハ腹内方ニ彎曲ス今ヨリ追考スレバ彼ノはりいか (S. sp. トシタル者)標本中亦此種ニ存セシヤモ知レズト思フ

標本一個(雄) 明治廿四年二月十四日相州三浦三崎坂本福治ヨリ買上グ體長五せめ余頭部並ニ第四脚ノ總長六せめ觸脚ハ十せめ位也

ちやれんぢやノ產地 Arafura Sea, south of Papua.

### 7. **Sepia salcata,** *Hoyle.* (あかはりいか)

所載書 (Literature).

Hoyle, Chall. Ceph. p. 137, pl. XIX, Figs. 1—13.

此種體形前ノ方四分ノ一位ハ圓筒形ナレトモ後方四分ノ三ハ漸々後端細マリ遂ニ尖リテ鋭角ヲ爲ス外套膜遊離緣ハ背面腹面共あしながいかニ類似ス頭部モ亦然リ然レドモ腕脚ハ凡テ短カク各脚間ニ多少ノ傘膜ヲ具フ而シテ長サハ何レモ相等シケレドモ第四脚ハ能ク發達シ居テ且ツ扁平ク其外緣ニハ肉鰭樣膜ヲ具フ第一脚ハ基ノ方凡ソ二分ノ一位迄ハ單ニ二列ノ吸盤ヲ有ス(或ハ第二第三脚モ同樣ノコトアリ)然レドモ末ノ二分一並ニ他脚ハ全ク四列ノ吸盤ヲ有ス角質環ハ何レモ全邊也觸脚ハ長サ體長ニ比メ脚

S. microcheirus, Gray.

" Affinis, Sau.

" Tauranensis, Sau.

*Order, II.* **Tetranchiata,**

*Family.* **Nautiliadae.**

*genus,* **Nautilus.**

**Nautilus pompilius.** *Linn.*

所載書(Literature).

Tryon, p. 215, pl. 99, Figs. 507—508.

Hoyle, Chall, Ceph. P. 199,

標本第一(一個) 明治十七年四月箕作石川等諸先生ノ駿州江ノ浦ニ於テ得ラレタル者

標本第二(一個) 明治廿年四月岡田信利氏ノ伊豆七島中大島ニ於テ得ラレタル者也

標本第三(一個) 廿一年田代安定氏琉球八重山ニ於テ得ラレタル者也

標本第四(三個) 産地年月共ニ不明形完全ナレモ装飾用ニ供シタル者ト見ヘ介売上皮層ヲ磨キ脱セリ

他書所載産地 Matuku, Fije island.トス

（終リ）

○正誤並ニ補欠

從來揭ゲ來リシ文中正ス可キ誤リ隨分少ナカラザレバ今一々此處ニ擧ゲ難シ是レ全ク余ガ成稿ノ粗忽ニ依ルコトト切ニ謝ス今其内ノ甚シキ者ヲノミ正ス

(一)、 本年一月發行第二拾七號ノ三拾頁ト二月發行第廿八號ノ六拾頁トニ loligo bleekeri, Keferstein.ヲ重揭セリ

(二)、 六月發行第三拾二號二四二頁ニ揭ゲシ Sepia esculentae Hoyle ノ他書所載産地ハ東京市場、横濱、長崎トアリ

(三)、 七月發行第三拾三號二九二頁ノ Sepia peterseni, Appl. ノ他書所載産地ハ長崎トアリ

## 雜錄

### 明治廿四年夏期三崎帝國大學臨海實驗場ニ在リテ研究セル摸様ヲ報シ併セテ地方臨海ノ同好諸君ニ一言ス

大作宗次郎



明治廿四年夏期三崎帝國大學臨海實驗場ニ在リテ研究セル摸樣ヲ報ジ併セテ地方臨海ノ同好諸君ニ一言ス

標本第二(二個) 廿四年二月相州三浦三崎ノ産一ハ雄ニシテ体長五せめ頭部ト第四脚ノ總長三せめ半余觸脚ハ九せめ小ナル者ハ雌ニシテ体長三せめ頭部ト第四脚ノ總長二せめ余觸脚七せめ也

ちやれんじあノ産地　Ki, Arafura Sea.

*genus*, **Sepiella.**

**Sepiella maindroni** *De Rochebrune.*

所載書 (Literature).

Hoyle, Chall. Ceph. p. 149, pl XXII, Figs. 1—10.

De Roch, Mon. Sepiad. p. 89.

体形長楕圓肉鰭ハ後方ニ巾廣クナル腕脚ハ何レモ殆ンド同長ナレ𪜈或ハ精密ニ比較セバ其長順式四、三、二、一トナル可キ乎何レモ互ニ相密接シタル球形吸盤四列ヲ有ス吸盤角質環ハ前縁ニ於テ細牙十四五個ヲ有ス觸脚ハ長サ体長ニ比シテ細長キ脚頭ヲ有ス脚頭ニハ極細小カキ吸盤十四五列ヲ有ス介殻ハ長楕圓形ニシテ全縁ニ巾廣キ角質縁ヲ有ス而シテ其後端ハ丸ルクナリ居テ敢テ刺棘ヲ有スルコト之レナク全ク角質半透明ノ膜ヨリ成ル

標本第一(雌二個) 廿四年二月八日相州なたぎりノ産坂本福治ヨリ買上グ體長二個共十二、七せめ頭部及ビ第四脚ノ總長同十せめ觸脚ハ二十七せめ

標本第二(雌三個雄一個) 十八年十月一日東京市場ニテ得標本甚ダ不完全ナレ𪜈體形第一標本ヨリ巾少シク廣クシテ卵狀形ヲ爲ス大ナル者體長七、五せめ小ナル者ニ於四せめ大ナル者ノ頭部並第四脚六せめ半觸脚十八せめ

ちやれんぢあノ産地 Mland Sea, Japan トス

此種ニ付テ未ダちやれんぢあヲ手ニセザル前ハ全クせぴしあ、いねるみす(Sepiainermis, Hasselt. Tryon, Conchology ぺーヂハ失念 Pl. 91, Fig. 423, Pl. 92, Figs. 424-429) ナル可シト信ジ居タリ實ニ其記事並ニ圖版モ誠ニ能ク相適合スレ𪜈今ちやれんぢあヲ見ルニ別種トス其故如何ナル可キカ詳ニセズト雖𪜈余ハ之ヲ異名同種トナシタク存ズとらいをんノ産地ハ支那トアリテ左數種ヲ皆ナ同種異名トナセリ

S. sinensis, Gray.

崎ニ向フ一躍二十里正午着ス

實驗場ニハ既ニ先輩波江元吉君藤田經信君三本貞守君及學友山崎治太郎君中西準太郎君長濱兼吉君アリテ研究セラル實驗場ハ三崎ノ極南海ニ臨ンテ建テリ前ニ城ケ島アリ東南ハ遙ニ總房ノ山ヲ霞ノ中ニ見ルヘク西南ハ遠ク豆駿ノ山々ヲ見風光頗ル佳良ナリ其氣候夏時清涼ニシテ三伏ノ暑ト雖モ華氏九十度以上ナルコ殆ント無シ實ニ研究ニハ好適地ナリ

廿二日

早天三崎ト城ケ島間ノ灣内ニ於テ上曳(Surface collection)ヲ爲シ櫛水母類(Ctenophora)及ヒ蝦ノ幼虫(Nauplius)等ヲ得之ヲ研究ス

午前十時城ケ島ニ渡リ(Shore collection)ニ因リDoris, Turbo, Pollicipes mutilla. カメノテ、Stelleridea ヒトデ、赤色及ヒ綠色ノ磯巾着(キン)(Actinia)ヲ得

廿三日

早天三崎城ケ島間ノ灣ニ於テ上曳ヲ爲シ夜光虫(Noctiluca)櫛水母類ヲ得

午前十一時城ケ島ニ渡リ(Shore collection)ニ因リイトマキヒトデPentagonaster, Terebella, Doris 三種ヲ得

廿四日

早天三崎城ケ島間ノ灣ニテ上曳ヲ爲シ Phyllopoda 及ヒ Balanus ノ幼虫等ヲ得

廿五日

早天上曳ヲ爲ス(場所仝前獲物仝前)

廿六日

午後三時城ケ島ニ渡リ Shore collection ニ因リテ「アクチニア」及ヒ介類等ヲ得介類ハ其身ヲ煮テ拔出シ其齒舌(Lingula Ribbon)等ヲ能ク解剖シ及ヒ其介殼ノ形狀ヲ見テ其種類及ヒ命名チ定ム

廿七日

午後二時第二高等中學校敎授宍戸一郎君及ヒ學友濱田俊三郎中西準太郎兩君ト共ニ諸磯(三崎チ去ルコ一里許西方ニアル小港)ニ至リ Shore collection ニ因リ且ツ trawl

時ハ是盛夏炎威甑中ニ在リテ熔ラルヽカ如ク蒸暑ク熱風袂ヲ掠メテ恰モ湯ニ浴スルカ如ク發汗シ此長日ヲ徒ラニ暑シ暑シト言續ケテ苦悶ニ消スハ百万ノ大家高樓甍ヲ列テ軒ヲ幷ベ建テタル市都ノ常况ナリ

仰望スレハ高ク空天ヲ貫キ遙ニ世外ニ屹立シ動カス搖ガス陶然自ラ嚴肅ナルハ山嶽ナリ山ニハ高キアリ低キアリ圓キアリ方ニシテ屛風ヲ立タルニ似タルアリ崎嶇參差シテ鋸齒ニ似タルアリ凹凸自然ニ風致ヲ得突屼風流士ヲ樂マシムルモノアリ白扇倒ニ繋ルカ如キアリ噴々蒸々火氣衝動シ恰モ中天ヲ啖クカ如キモノアリ一トシテ壯且偉ナラザランヤ此ニ登レハ峻嶮峨々犯ス可ラス森林蓊鬱晝猶暗ク草華青々ノ中往々美花ノ燃出ルカ如キアリ風籟高ク嘯キ鳥鳴囀聲耳ヲ奪ヒ猿猴ノ叫號腸ヲ斷タシム蝶蛾戲レ舞ヒ蟬兒能ク吟ス風物總テ新ナルヲ覺ヘ山氣膚ニ透リテ夏猶寒キハ山ノ狀態ナリ

渺茫其際ヲ極メス滄浪徐ニ興リテ岸ヲ洗ヒ奇巖躍リ怪嵒峙ツ波濤之ヲ衝ク時ハ激シテ泡ヲ生シ怒聲竹ヲ割ルカ如シ帆船風ヲ孕ンテ行クヿ悠々タリ汽船鯨鯢ヲ蹴リテ進ムヿ速ナリ漁舟波間ニ出沒シ櫓聲風ニ和ス人若シ此光景ヲ見ハ當ニ目ヲ括シテ壯快愛スベシト爲ス一朝風伯荒レ强風猝然潮ヲ捲テ吹キ驟雨篠ヲ束ネテ投クルカ如ク落シ來ル時ハ天地一變咫尺爲ニ濛々タリ怒濤天ヲ突キ地ヲ動カシ囂々ノ聲將ニ耳ヲ聾セシトス慘憺タル其景轉タ心膽ヲ寒カラシム人之ヲ目シテ恐ルヘク忌ムベキモノト爲ス噫海洋心アリテ此慘ヲ爲サハ知ラザルナリ元ヨリ天地ノ變ニ依リテ爲ス所豈恐ル可ンヤ奚ソ忌ム可ンヤ蓋シ盛ナリト謂フ可シ

此三景ヲ見ルニ市都ハ勿論俗ニシテ論スヘキ所ニ非ス山海ヲ取リテ譬ヘン山ノ壯快ナル海ノ清冷ナル俗人ハ將ニ山ヲ以テ最ト爲スヘシ吾人理學海ヲ涉ルモノ就中動物學ヲ修ムルモノハ大喝シテ海ヲ以テ最ト爲スベシ如何トナレバ動物界ノ大半ハ海洋ニ棲息スルヲ以テナリ是レ予ノ煩雜ナル市都ト愛ス可キ山トヲ捨テヽ海ヲ望ム所以ナリ

七月廿一日午前六時學友濱田俊三郎氏ト共ニ輕裝シテ三

ニ注意スベキハ硅角質海綿 Halichondria ノ針骨手指ニ立チ大ニ困難スル事アリ故ニ小刀ノ廢用ニ屬スルモノ又ハ鋭利ナル尖端ヲ有スル長釘等ヲ用ヒテ剝スベシ

(3) ホヤ Cynthia

海岸岩石ニ時トシテ大塊ヲ爲シ無數ニ集會シテ附着シ其色黑キカ故ニ一見恰モ岩石ニ異ナラス此カ爲ニ見殘スノ恐アリ能ク注意セラルヘシ万一如此岩石ヲ見ハ試ニ手ヲ以テ之ニ觸ルヽ時ハ忽地水ヲ發射ス以テほやノ居ルヿヲ知ル

(4) テレヘラ Terebella

海岸岩石ノ横面或ハ割目ノ所ニ堅ク附着シ居リ潮水之ヲ覆フ間ハ無數ニ其絲狀觸手ヲ放散ス其色紫紅識別シ易シゴルゴニア Gorgonia 一名イソノ花(三崎地方ニテ云フ)

海岸岩石ノ横面ニシテ潮常ニ干サル所ニ多ク附着セリ其色紅色及ヒ黃色ニシテ網ヲ廣ケタルガ如シ水中ニ有ル故一寸目ニ掛リ難シ

(5) 海盤車類 Asteroidea

此類ハ大概海岸岩石ノ割目ニ隱レ居リ又ハ岩ノ破片ノ下等ニ存在ス或ハ深海底ニ存スルモアリ

(6) 海膽類 Echinoidea

此類モ亦海濱岩石ノ破片ノ下等ニ附着ス然レモ Clypeaster タコノマクラ一名マンヂウハ海濱ノ砂中又上ニ存ス潮水清澄ナル日海底ヲ透シ見レハ容易ニ認ムルコトヲ得

(7) 沙噀類 Holothroidea

此類ハ淺海底ニ産スルモノナレハ其居所ノ如キモ大概淺海ニシテ潮ノ干ル時ハ岩ト岩トノ間等ニ延長シテ横タハルモノナリ其色岩石ト識別シ難シ故ニ見殘スコトアリ

此等ハ沿岸採集ニ關シ己レノ實驗シタル事ノミヲ記載シタルモノナリ万一仝好諸君ノ參考トモナラハ幸甚

## ●相州三浦三崎採集動物

相州三崎ト云ヘバ志想ノ聯合ヲ以テ海產動物ニ富ムトノ念慮ヲ惹起サシムル

ヲ曳ク潮高キガ故ニ充分ノ獲物無シ只タツノオトシゴ Hippocampus 外二三ヲ得

廿八日

城ケ島ニ行ク獲物無シ

廿九日

午前九時小網代（諸磯港ヲ去ル一半里許ニアル小港）ニ至リ Shore collection ヲ爲ス別ニ獲物無シ潮高クシテ岩石ヲ覆ヒ充分採集シ難キ故ナリ

卅日

城ケ島ニ渡リ(shore collection)ヲ爲シ惡鬼介(Murex)ノ一種 Polma Rosae 及ヒ(Pileolus plicatus)(Trochus)三種(Nassa)一種ヲ得

午後一時城ケ島東ノ沖ニテ trawl ヲ曳キ數多ノ介類コマツラ二種クモヒトデ(Ophiuroidea)二種ヲ得タリ

以上ハ單ニ小生カ十日間ニ採集シ且ツ研究シタル僅數ノ種類ノ概況ヲ記セルノミ

清夜月ニ對シテ閑坐シ琴ヲ彈シ笛ヲ弄スルハ予其快ナルヲ知ル間居茗ヲ煑杯ヲ擧クルハ予其慊ヲ知ルナリ然レ圧是等ノ樂ヤ快活ナリト雖モ一時心身ヲ慰シ鬱ヲ去ルノミ反之海岸ヲ涉獵シ山河ヲ跋涉シ以テ生物ヲ採集シ之ヲ研究シ珍奇ナルモノハ藏メテ標本ト爲シ保存スル時ハ其利益ノ多キ愉快ヲ增スヿ徒ニ霄壤ノ差ニ非ス且ツ又身體ノ健康ニモ著ルシキ效アル可シ今ヤ盛夏ノ候動物採集ニハ好時期ナリ地方臨海ニ住セラルヽ諸君ハ奮テ採集ニ從事セラレンヿヲ希望ス

採集ニ關シテノ御注意

(1)ドーリス海牛(ウミウシ)

海岸ヲ步スル時海藻類ノ表裏ヲ能ク御注目アルベシ往々 Eoris ノ附着スルヿ有ル故ナリ又海岸ニ散亂スル小巖石ニシテ手ヲ以テ轉ガスヲ得ルモノハ可成裏反シテ見ルヘシ Doris ノ附着スル故ナリ又大ナル岩石ノ罅隙ヲ見殘シ無キ樣御注目有ルベシ

(2)海綿 Spongida

海岸ニ有ル岩石ノ横面或ハ裏面ニ許多附着スル之ヲ取ル

28. Pagurs ヤドカリ
29. Panulirus japonicus イセエビ
30. Brachyura カニ
31. Pollicipes mutilla カメノテ
32. Balanus フジツボ
33. Cladocera ミジンコ
34. Cyclops シクロプス
35, Ligia フナムシ

**Mollusca 軟体動物**

36. Chiton ヒザラガイ
37. Aplysia ウミシカ
38. Dòris ウミウシ
39. Peronia イソアハモチ
40. Patella ギンガサ
41. Ranella マキガイノルイ
42. Aeolis イヲリス
43. Turritella cathedralis マキガイノルイ
44. Pleurobranchus マキガイノルイ
45. Fusus ナガニシ
46. Turbo cornutus. サヾエ
47. Conus イモガイ
48. Avicula シンジユガイ
49. Onunastrephes スルメイカ

**Echinodermata 棘皮動物**

50. Clypeaster マンヂウ
51. Echinocardium ブンブクチヤガマ
52. Echinometra ウニ
53. Peronella クハシパン
54. Pentagonaster イトマキヒトデ
55. Comatula ウミシダ
56. Stichopus japonicus ナマコ
57. Asterias ヒトデ
58. Ophiura chinensis クモヒトデ

**Ascidiae Simplices 單海鞘類**

59. Cynthia ホヤ

先ツ此位ニテ fortnight ノ採集動物モ概略臚列シ盡セリ併シ尚ホ表面採集ニ於テ以上ノ顯微鏡的動物ヲ除クノ外海豆芽藤壺鰕水母及海膽等ノ幻虫ヲ見受ケタリ

魚類ニ就テハ實視セシモノ夥多ナリト雖モ惜哉皆漁夫ノ獲物ニシテ予ノ採集ニ罹リ予ノ有トナリシモノ甚ダ鮮シ故ニ記セズ併シ左ニ記スル三種ハ余ニ甚ダシク刺戟ヲ與ヘシモノニシテ其内二種ハ自ラ生擒リシモノナルヲ以テ茲ニ擧グルコトセリ

1. Tetraroge rubripinnis, *Schleg.* オコゼ
2. Centronotus nebulosus ギンポ
3. Thynnus Pelamys, *C. & V.* カツヲ

をこぜ、此惡魔ハ海底採集ノ時(ツロールネツト)ノ内ニ多

ハ一度該地ニ動物探究ヲ企テシ人ノ常ニ唱フル處ニシテ三崎ノ地名ハ今ハ殆ンド海産動物ノ代表者トハナレリ夫レ然リ三崎ノ地タルヤ帝國大學臨海實驗場ノ在ル處ニシテ實ニ東洋ノ「チープルス」ナリ

余ヤ本年夏期休課ニ托シ始メテ此地ニ採集ヲ試ム日數僅カニ二週日獲ルモノ少シトセズト雖モ判然其學名ヲ知ラザルモノ多ク加フルニ之ヲ書冊ニ照シテ穿鑿スルノ暇ナク唯々水面採集ニ限リ僅カニ之ヲ顯微鏡ニ照セシノミ故ニ多クハ屬名ヲ知ルニ留マリ種名ニ及ブモノ蓋シ尠シ同好ノ士後日若シ始メテ此地ニ採集ヲ企ツルアラバ數日ナラズシテ余ノ採集ノ不充分不完全ナルヲ知ルト同時ニ余ノ前言ノ虚ナラザルヲ知ルヤ疑ナシ

**Protozoa** 原生動物

1. Foraminifera ユウコウルイ
2. Radiolaria ホウサンルイ
3. Noctiluca ヤコウチュー
4. Vorticella ツリガネムシ

**Porifera** 海綿動物

5. Tetilla japonica. *Lampe.* グミ
6. Petilla *sp.* トウナス
7. Reniera レニエラ
8. Chalina? カリナ

**Coelenterata** 腔腸動物

9. Aurelia aurita, *Lam.* ミヅクラゲ
10. Pilema. タコクラゲ
11. Actinia イソギンチャク
12. Actinia *sp.* ウミナス
13. Gorgonia ヤギ
14. Pennatula ウミエラ
15. Ctenophora クシクラゲ
16. Velella カツヲノカムリ
17. Ephyra クラゲノルイ
18. Oculina ビワガライシ
19. Madrepolacea サンゴノルイ

**Vermes** 蠕形動物

20. Lingula シヤミセンガイ
21. Polyzoa コケムシ(アミガイ
22. Terebella テレベラ
23. Spirorbis スピロルビス
24. Nereis ゴカイ
25. Nereis *sp.* ゴカイノルイ
26. Polyclada? ウミプラナリ
27. Sagitta ヤムシ

**Crustacea** 甲殼類

種ヲ左ニ誌スヘシ（未タ其種類ヲ盡サヽル遠シ）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | Zygaena malleus, *Shaw* | しゆもくざめ | 稀 |
| 2 | Mustelus manazo, *Bleek* | ほしざめ | 普 |
| 3 | Lamna glauca, *Mulle & Hrnle* | あをざめ 方言かうざめ | 普 |
| 4 | Alopecias vulpes, *Mulle, & Henle.* | 方言おながざめ | 稀 |
| 5 | Selache maxima, *Gunner* | 方言ふかざめ | 稀 |
| 6 | Notidanus, indicus, *Cuv* | あぶらざめ | 稀 |
| 7 | Acanthias vulgatis, *Risso* | つのざめ | 普 |
| 8 | Rhina squatina, *Linn* | かすざめ | 稀 |
| 9 | Pristiophorus japonicus, *Gthr* | のこぎりざめ | 普 |
| 10 | Raja kenojei, *Meulle & Henle.* | かすべ | 普 |
| 11 | Trigon pastinaca, *Cuv* | あかえい | 稀 |
| 12 | Myliobatiscornuta, *Stele* | とびえい | 稀 |
| 13 | Dicerobatis japonica, *Mulle & Henle* | | |
| 14 | Chimæera monstrosa, *Linn,* | ぎんざめ | 稀 |

本表中四號及ヒ五號ハ未タ本誌ニ誌サヽル所ナルヲ以テ左ニ其形狀ヲ譯述ス

Alopecias. *Muelle & Henle.*

前脊鰭ハ胸腹兩鰭ノ間ニ對シ剛刺ヲ有セス小サキ後脊鰭及臀鰭アリ尾鰭ハ非常ニ長ク尾鰭底ニ凹處アリ尾ノ側面ニ龍骨形ノ突起ナク瞬膜ナク排水孔ハ眼ノ後ニアリテ小クロハ三日月形ニシテ齒ハ兩顎共ニ同形ニ且ツ普通ノ大ニシテ平ク三角形ヲナシ鋸齒ナシ鰓孔ハ通常ノ大サナリ

Alopecias vulpes Mulle &Henle.　をながざめ

上顎ノ左右第三ノ齒他ノモノヨリ少ク胸鰭ハ大キクシテ鎌形ナリ多ク地中海大西洋カリホルニヤニ產ス北海道後志國高島ニ於テ採收サレタル該標品ハ藏メテ札幌博物場ニアリ猶其他渡島國福島ニ於テモ本魚ヲ實見セリ

Selache Cuv

前脊鰭ハ胸腹兩鰭ノ間ニ對シ剛刺ヲ有セス後脊鰭臀鰭ハ小サク尾鰭底ニ凹處アリ下葉ヲ備ヘ尾鰭ノ側面ニ龍骨形ノ突起アリ瞬膜ナク小サキ排水孔ハ口角ノ上ニアリ鰓孔ハ廣ク齒ハ小サク數多ク圓推形ニシテ鋸齒ナシ

Selache maxima, *Gunner*　ふかざめ

ク入ル所ノ小魚ニシテ外貌美ナリト雖圧鰭ニ毒刺アリ余ハ揣ラズ此毒刺ニ觸レ爲メニ數時間劇痛ヲ感ジタリ此外ニ一種惡ムベキごんずいト稱スル鯰狀ノ醜魚アリ一增鋭キ毒刺ヲ具フ之レ亦吾人ノ蛇蝎視スル所ノモノナリ後日此地ニ採集ヲ試ムルモノ能ク注意シテ余ノ轍ヲ蹈ム勿レ

ぎんぽ、這ハあなご科ニ屬スル鰻樣ノ魚ニシテ全皮黑色其習性奇ナリ乃チ干潮ノ際數時間身ヲ大氣中ニ暴露シ能ク生活ヲ持續シ以テ滿潮ノ到ルヲ俟ツ余ハ學友濱田氏ト共ニ該魚ヲ遊ケ崎ノ水ナキ岩穴中ニ獲タリ時ニ假ニ戯レテ日本產 Dipnoi（肺魚）ト云ヘリ

かつを、此魚群ヲ三崎ノ西南海上里許サバナワ實行ノ時卒然目擊セリ知ラズ其幾萬ナルヲ、漁夫ノ言ニ該魚ハ一定ノ季節ニ於テ一定ノ潮ニ乘リテ來リ暫ク去ラズト余等不幸ニシテ一モ捕獲ニ要スル漁具ヲ携ヘズ魚ハ余等ヲ觀テ躍テ追捕ヲ請フモノヽ如シ殘念止ムナク漂然順風ニ乘ジテ三崎ニ歸ル

サテ前記ノ表ニ依テ各門（Subkingdom）ヲ通觀スルニ我三崎四近（殊ニ諸磯ノ油壺）ニ於テハ棘皮動物汀ノ覇權ヲ握ルガ如シ今之ヲ現世界ニ生活スル該動物種數ノ二千三百七十ノ多キニ比スレバ實ニ九牛ノ一毛ニ過ギズト雖圧其至要性質ヲ具有セル所謂標式的ノモノニ至リテハ完美シテ更ニ不足ヲ覺ヘズ則チ Crinordea ニテハこまつらアリ Ophiuridea ニテハくもひとでアリ Stelleridea ニテハひとで、ひとまきアリ Echinoidea ニテハうに、ぶんぶくちやがま、まんぢう、アリ而シテ Holothuroidea ニテハなまこアリ此ノ如ク類緣ノ近キモノ一定ノ場所ニ群棲スルハ動物學上毫モ怪シムニ足ラズト雖モ余ハ特ニ油壺ニ向ヒテ一言セン一門擧テ磯邊ニ宿ルト記シ畢テ筆ヲ投ジ爰ニ讀者ノ倦厭ヲ謝ス（長濱兼吉）

●**北海道沿海產板鰓類**　曩キニ本誌ニ於テ（九號ヨリ十四號）宍戸一郎君カ本邦近海產さめ類ノ當時知ラレシ種類ニ就テ記述サレ余輩魚類ヲ研究スルモノヽ爲メニ大ナル利益ヲ與ヘラレシハ深ク謝スル所ナリ而シテ余モ亦茲ニ今日マテ採収シ實見シタル北海道產種類ノ十四

れ落てより後偶然に他種のものと結合せしものなれども乙種のものに至りては初め別々のものが後互に融着せしにあらずして只單に母体出芽の結果なり而して獨り終りの塲合に於てのみ一群体の各動物互に搆造上隨て生理的の共通をなすものなり故に異種動物間に偶然に起れる結合と比較するときは其起原其仕組其作用等一も並行せるものなしヂュジャルダン氏が言へることゝて本書に譯出しあるを見るに曰く初め別々にありし動物が後に至りて体(チル)制上(ガニッシュ)(生理的)の融合をなしたるは未だ嘗て見ざる所なりと

斯く生理的の連絡を以て團結せる動物は甚だ多し且つ間には極めて錯雜なる塲合ありて形態學上の理解に苦むら如きことも往々これあり彼の水螅水母の關係の如きに至りては碩學大家を苦めたることも尠からずまた珊瑚團体の如きに至りては大陸をも作る程の群團に至ることも殆んど常なり今此形を以て生活する動物を下より段々見て上るに第一、原生動物、第二、海綿動物、第三、腔腸動物第四、蠕虫、第五、類軟体動物中に在り其一二の塲合は追々記述すべし

●とんぼトか(一三三頁のつゞき)

新に蛹と成りたる者は數時間を經過せるものより其色淡きを常とす、且其大さも次第に增大するものゝ如し。羽化するの時に至れは腹部の環節は水面に於て後方に伸張し頭胸部に裂目を生し內なる成蟲も其長き後脚を以て蛹皮を推し前中兩脚を以て體の平均を保ち急に這ひ出るなり。夫より皮膚の硬固となるまでに十分或は十五分間を要するを以て其間水面に靜止しをる者なれは水面の極て平滑なると最も必要にして强風の時は勿論漣の起る時と雖も危險なる作用なりとす。又水面に靜止する間成蟲は一本一本脚を上け之を乾し終に飛ひ去るに至る。此は廣開せる池面或は水桶等にありて見る處なれども水草其他の存する所にありては莖葉等に這ひ上りて容易に啓發作用をなすを得へし。予輩は C. damnosus に於て雜草等の無き所にて蛹皮を脫せし後四分半にして飛ひ去りさるを

鰓孔咽ハ背部ヨリ喉ノ中央ニ達シ躰ノ丈ケ三十尺以上ニ及フモノアリ産地ハ北氷洋ナレ𪜈時トシテボルトカル沿海ニ認メラルヽ事アリ北海道ニ於テハ火山灣及小樽近海ニ於テ嘗テ該魚ヲ實見セリ

●**北海道ニ新種ノ蝶**　昨年札幌農學校學生松村氏カ是マテ北海道ニ知ラレサリシ蝶類ノ二種ヲ採収セラレタリ其一ハ（Papilio sarpedon, *Linn*）ニテ札幌ノ西方ナル圓山ニ於テ六月中採収シ其一ハ（Authocharis Scolymus, *But*）ニテ札幌ノ東方ナル豊平ノ平地ニ於テ七月中採収シタリ北海道ノ蝶類ハ從來八十八種ナリシカ今ヤ二種ヲ加ヘテ九十種トナレリ

●**あひるトかもノ躰重ト腦量トノ割**　「ブラオン」氏ハ二十ノかもト二十ノあひるノ躰重ト腦量ノ比例ヲ實驗セラレタリ同氏ノ說ニ依レハかもノ腦量ハ其躰重ノ比例ニ於テ恰カモあひるノ腦量ノ其躰重ニ於ケル比例ノ倍數ヲ見ル即チ

| | 躰重 | 腦量 |
|---|---|---|
| あひる | 一八一六、七六八グラム | 五、三七〇グラム |
| かも | 一一五五、八一四グラム | 六、四三三グラム |

あひるノ腦量ヲ一トスレハ其躰重ハ三三八、三一八ニ當リかもノ腦量ヲ一トスレハ其躰重ハ一七九、六六九ニ當ルカ故ニかもハあひるノ倍數ニ及フト　（S.N.）

●**動物の群体**　動物の五体を解剖し構造形態を考究するの樂みは蓋し大なり然れども動物生活の方法形式の規律を観察せし結果も敢てこれに劣らず此等のことを記述せしものまた世に乏しからず今アルフレッド、エスピナスなる人の著述に係はる動物の社會（A. Espinas' Die thierischen Gesollschaften.）といへる書を讀みて凡そ其中央なる部分の記憶に止まる丈けのことを記すべし

動物界を通覽するときハ一疋ヅヽ自由に運動し廻りて生活するものと互に相接着して集合の一体をなすものとありこの集合体を一々観察するときはまた異種動物の團結と同種動物の結合との二類を見るべし甲種の形式に屬するものは常に一の完全なる動物箇体として母体を離れ生

ある時予と予の室内に壺にさしたる植物を置きたり、而して夜中ふとランプを持て其近傍を通行せしに葉上蚊の群集せるを發見し熟視せるに植物の液汁を啐吸するものの如し、玆に於て予は蚊の本性を探知するの端緒を得たりと信す、予の考ふる所にては蚊の成蟲は夜中植物液を吸收して生活するものなり、……斯の考察によれば Bur-mah の藪地旅行者米國、カナダ地方の森林中に獵を爲す者等の報告を説明するを得へし。

Dr. Dimmock 氏は數日間雄蚊を捕へきて濕りたる中より自由に吸飲するを實驗せり予は數度靜に爲しをる手上に飛ひ下り或需要品を捜索するも發見する能はさるを以て飛ひ去り、水壺に至り縁邊の水滿中に其吻を浸入するを見たり。予は又雌蚊の密壺より自由に之を飲みをるを見たり。此他玆に枚擧す可からさる數多の事實及ひ決して人類を發見し或は之に接近し能はさるか如き所にも蚊群の無數に棲息しをる等の事を考ふれは、人血を吸ふは雌蚊にのみ限れる慣性にして、これとても第二段の方法たるに過ぎざるなり。

蚊に啐れたる後焮衝を起すは何故なりや、とは種々議論のありし問題なり。殊に通俗書にては蚊の刺針を恐しき利器に畫き時に有害なる毒液を裝置せる實際の皮下注射器の如き者を畫く事あり。Westwood 氏の著書を見るに左の記事あり。

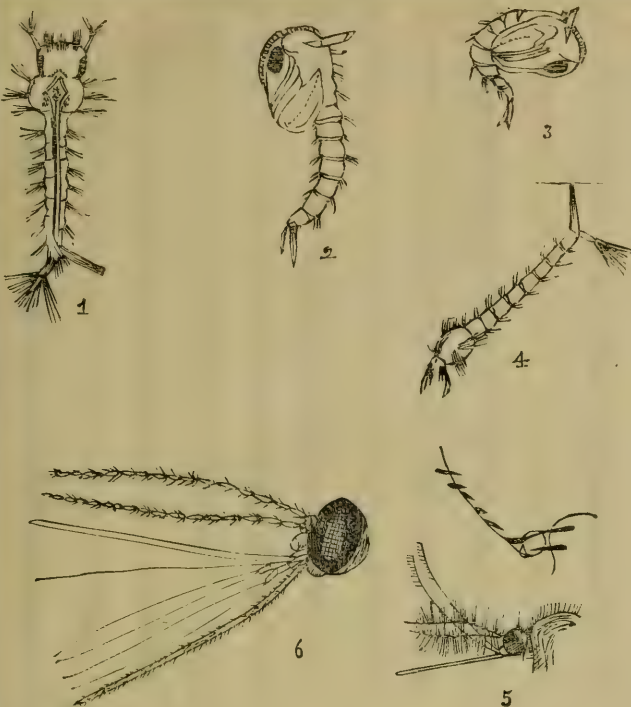
同時に有毒なる液を傷口に注入し以て血液の流通を迅速ならしむ、是れ吾人の煩悶を感する主源なり。

Packard 氏は上文を引用し其後に附記して

吾人の今日知り得たる所にては蠅其他六足蟲の頭部に毒嚢を發見したる者あるとなし、すれは傷所に毒液を注入すへきや否又鬚を有する下顎は其皮を貫刺するに當り通常吾人の感するか如き焮衝を生するに充分なるに非さるか是れ一問題なりとす。

我米國の博物學士 Dr. George Dimmock 及ひ Prof. Maclo-skie の兩氏は其忍耐と勉强とを以て蚊の吸刺器に就き有要なる事實を多く發見せられたる人々なるか、Macloskie

實驗せり。爾後蚊の生活上主眼とする所其生殖にあり。人類を惱ましむるは蚊の生存上重大必要なる事なりとの考察は正しき誤謬なりとす。吾人を煩す者は只雌蚊のみにして數百の蚊を捕へて度々調査したりしも人血を以て擴張したる腹部を有する雄蚊は一疋も發見すると能はさりし、猶ほ顯微鏡下に驗するに雄蚊の口部は血液を吸入するに適せさるを知れり。Dr. Bonavia 氏は Do mosquitoes Live on Animal Vegetable Juices? と題せる有要なる論說中に左の如く記されたり、




(1) Culex damnosus の幼蟲
(2) 同　前　の蛹
(3) 同　前　蛹の自然態度
(4) 同　前　幼蟲の呼吸の態度
(5) 同　前　成蟲の頭 ♂
(6) Culex rufus成蟲の頭

なるか此は蚊の久しく飛揚するに堪へ且風に逆て進行し得可へしとの推測より來りたる説にして全く誤謬なりと云ふ可し。蚊ハ羽の脆き者にて輕くいきを吹きかくるも吹き飛さるゝ者なれハ若し安全なる地位を得るあらハ再び直ニ飛び去らんとするの勇氣なきを見ても推知すべきなり。陸風の多き時に當りて蚊の多き所以を説明せんは左程困難なる事に非す。蚊の多く飛揚するは通常風の最も靜なる間に限るものなれは弱き風の吹く時即ち陸風の吹く時にのみ出て來る亦當然の事と云ふ可し。當地方にありてハ海風ハ常ニ強劇なるを以てトンボ類強壯にして大膽なる Tabanidae 類も家屋、砂丘、或は樹間の風かげを徘徊しをるものなり、

Atlantic city, New Jersey の南部なる草地にありては蚊群の砂丘の風下なる密草或ハ樹草間に潛伏しをるを見る可し、かゝる常ニ強風に曝さるゝ地方ニありては樹木ハ總て其生長を害され梢は風に吹かれて平になり下方よりも縱横亂雜に枝を出し葉も密に繁茂する者なれは蚊は皆其間にありて其數實ニ夥しく初心の實驗者ハ爲ニ膽を冷す可し。海陸の別なく強風の間は蚊群皆なかゝる密樹の間ニ潛伏し僅々數十間を隔て家屋棟を並へ其好飼料充滿すと雖も出て來ることなけれとも遙に内地鹽風の達せさる邊に住する者と想像しをるのみ、されと暴風の後ハ常に極て靜なるものなれは風の止みたる時は雌軍久しく味はさりし血液を得んとて續々くり出し來るなり。

蚊屬の逍遙する所ハ常ニ定りたるものにして、注意して觀察したる人々は皆其年々高き圓柱形を作りて飛び廻り又毎年同一の所ニ於て生殖の爲め群飛をるを見たるよしを記述せり。E. L. A. 氏此等の群を記して曰く

其群集したる所は實に夥しく軍營中のかゞり火より立ち上る烟の如く又其小さき羽より生する音も少くとも三十ヤルド位の距離を隔て聞くを得べし

Magis 氏も亦同一なる慣性に就て記述せり。

吾人の爲ニハ不幸にも此の如き蚊群の飛揚するハ疲勞することなきトンボ類の既に其寢所ニ入りたる後にして僅に

氏は終に蚊のプロリラックス前下部に一種の腺の存在せるを發見し其性質を研究せられたり、此腺には一箇の輸出管ありてヒポフアリンクスの基底部に存する貯藏嚢に開通す。同氏曰く「始めヒポフアリンクスの尖端に黃色の油の如き液汁の滴下するを認めしかハ夫より終に此管を發見するに至りしなり」と、此の事實ハ Dimmock のさきに「未た解剖上の確證を得るに至らさと雖とも蚊のヒポフアリンクスには細管ありて有毒なる唾液を灌漑する者なるへしと信す」と云はれたる大膽なる考案を確定せる者なり。今左に發見者の揭けられたる圖を寫し出す可し圖下の圖解と對照せは更に說明を要せさる可し（本誌卷第第一四四五號二四頁參照）

第五圖 此木版未ダ出來セサルニ付次號ニ讓リ揭ク

雌蚊若し充分血液を吸ひ滿腹して靜に飛ひ去る時は其毒に感すると甚た少く或は全く之を感せさる者なり其甚しく痒みを感するは蚊の作業を妨くるを以てなりされハ能く人の口にする所なるか此も左の理由によるなる可し。若し蚊の故障なく其食を終る時ハさきに出したる有毒唾液を再ひ吸收し去ると雖も急に口管をぬき去る時は毒液筋肉中に殘留し以て苦惱を起す者なり。

蚊軍はたゞ折々出て來る者ならは其驅除方にさほと盡力するにも及はさる可れとも其數の非常なるは實に吾人を恐怖せしむる一因なりとす。其孵化發育の神速なるのみならず其移住せさる事冬を越すの傾向あると等とは殊に其非常なる數を來す所以なる可し。

Westwood及び Young 兩氏は蚊屬數種の屋內に於て冬を越す事に注意を加へられたれハ予も實驗を試みたりしよ地窖中よて三種の蚊を夥多發見せり。

蚊の移住に就ては世人多く誤會せり。陸風は內地より蚊軍を吹き來るとは海邊よ住する人々の間々口よする所

判決ヲ下ス能ハズト雖モ多少其成績ノ善良ナルヲ認識シタルヲ以テ今左ニ著者ノ所説ヲ摘記ス可シ

著者藥液使用法ニ序シテ曰ク凡動物保存ノ方法ニ收縮、組織ヲ具フル動物例之收縮性ノ纖毛ヲ有スルらつぱむし、つりかねむし、すいろをとめん等ノ如キ又ハ收縮組織ニ富ムひとらいそきんしやく、ぷらなりや、くるまむし等ニ在リテ最モ困難ナル技術トス是レ此等ノ動物ニ多クハ施藥後其身体萎縮シ狀態異變スレハナリ故ニ實驗用幷ニ敎授用ニ要スル完全ノ標本ヲ需メンヿ蓋シ稀ナリ玆ニ於テ學者種々焦慮究研スト雖モ其結果僅ニ實驗用或敎授用ノ一方ノミヲ滿足セシムルニ足ルノミナリシカ遂ニ動物ヲシテ充分其體ヲ伸長セシメ突然奪命スルノ方法ヲ案出セシモノアリ次イテ Lang 氏液ヲぷらなりわニオスミツク酸ヲ原生動物ニ醋酸猛汞其外ノ藥液ヲ熱シテ種々ノ動物ニ使用スルニ至レリ是等元來保存液トシテ其効能ハ著シト雖モ動物ヲシテ其体ヲ凡自然ノ狀態ニ伸長セシムルヿ稍ヤ難キヲ以テ尙一層深ク研究シ動物ヲシテ其組織ヲ伸長麻痺セシ儘固メンヿヲ期シ寒熱ヲ急變シコラール、コカイン、アンチフイブリン、アンチピクリン等ノアルカロイドヲ使用シタリ此如シテ製シタル標本ハ其體形部位ノ關係ハ依然變更セザルモ其組織ハ已ニ中毒セラレルヲ以テ元形質ハ膨脹損傷シテ組織學的ニ半錢ノ價値ナキモノナリ

以上陳ブルガ如キ至難ナル動物ヲ恰好ニ麻痺セシメ實驗用幷敎授用孰レニモ適當ナル完全ノ良標本ヲ調製センヿ予（著者）カ實驗セシ處ニヨレハ譬ヘ施藥シタル動物ノ數ハ僅少ナルモ其成績ヨリ推考スルニ第一此藥ハ麻痺劑トノ効能アルヿ第二其力ヲ標本調製ニ利用シ得テ組織收縮ノ至難ヲ制シ得ベク因テ以テ容易ニ多數ニ善美ナル標本ヲ製造シ得ヘキ故予ハ此 Hydroxylamin ヲ以テ無比ノ良藥ト思惟ス

### 藥液使用法

結晶 Hyx ヲ井水又池水等ニ一%ニ溶解ス可シ而メ此藥多クハ硫酸塩酸ト化合シタルモノ故之レヲ中和セン爲メ炭

燕、ガスイドリの襲撃を試るあるのみ。此はトンボ類の蚊を絶滅するに有効なりや否やを論定するに當りて記臆せさる可からさる事なり、此両者ハ其飛揚する時と性とを同する所少し。――一日中の飛揚時間のみならす毎年其發生の時期をも亦考究せさる可からす。大西洋に面したる地方の中央部よありてハトンボ類の既よ減少し、或は全く其跡を絶ちたる後に至りても二三代蚊の羽化する事あり。

蚊の發育史に就て予輩の陳述せんと欲せし處玆に盡きたれハ此より其有害物なるとに就き一言せん、されと其人畜を噛傷するとは玆に事新しく論するまても無く、又其醫學上の事に就ては別章に於て述ふ可けれは玆に之を略す。

蚊の非常に夥多なるか爲め屢々工業技藝に大なる損害を及す事あるハ J. W. Clarke 氏其他の記述せし所にして其最も驚く可きハ Murray の記する所なる可し、氏は水面に浮び出てたる幼き鰤の頭上に蚊の止りて其逃れ去らさる中に無邪氣なる小き腦を吸ひ取りたるを實驗せりと云ふ。

以上の文を草せし後に至りて Macloskie 氏の記載されし毒液ハ點滴を實見し之を針頭に移し取るを得たり、而して之を吾人の身體よ種へ試みたりしか終に好結果を得るに至らさりし、注射器の針頭ハ蚊のヒポファリンクスの細小なるに及はさると遠きを以てなる可し。

●Hydroxylamin ノ収縮組織ニ對スル麻痺力ニ就キ　Dr. Bruno Hofer 氏ハ先ニ Zeitschrift für Wissenschaftliche Microscopie u. für microscopische Technik 紙上ニ其効能及使用論一般ヲ論述セリ此薬液ニ付キテハ嘗テ佐々木忠二郎氏ノ通信(動物學雑誌第　號參照)ニモ一言アリシカ其使用法ノ詳悉ニ至リテハ余リ判然セザルヲ以テ未タ今日迄使用セザリシ予等先月ヨリ三崎臨海實驗所ニ滞留スルヲ以テ此薬ヲいそぎんちやく、うみうし等ニ使用シテ實際効能ノ有無ヲ調査セントセシモ時日ノ僅少及經驗ノ淺薄等ニヨリ容易ニ目的ヲ遂クル能ハザルヲ以テ遽カニ

すぴろすとまむ(Spirostomunteres)〇、一%ヨリ〇、二五%溶液ニ浸ケ置クヿ半時間乃至一時間位トス其他ノ方法大略前者ニ同シ

かるけしうむ(Carchesium polypinum) 此等ノつりかねむし類ハ〇、二%溶液中ニ浸ス時は一二分間、唯時々柄筋收縮シ毫モ刺激ニ感動セズ尚五分ヲ經レハ口緣ノ纖毛運動不規則ニ緩慢トナリ十分ノ後ハ全ク麻痺スルヲ以テピクリン醋酸ヲ注射シテ殺スベシ其後ノ方法らつぱむしニ同ジひどら(Hydragrisea)〇、二五ニ浸スヿ動物ノ体量ニヨリ異ナレ𪜈大略十五分乃至一時間位ナレハ身體充分麻痺シ伸長シ極メテ善良ナル標本ヲ得ベシ

いそきんしやく(Bunodes gemmacea) 體量半セメヨリ一セメノモノハ〇、二五%ノ海水溶液中ニ浸スヿ十五分乃至一時間ニシテ動物ノ諸收縮筋伸長シ刺激ニ感セサル機ヲ伺ヒピクリツク酸ヲ注射ス可シ生長シタル動物ヲ如此保存センニハ少シク困難ナルモ此法ヲ酌セハ満足ノ標本ヲ得ベシ

でんどろしぃらむ(Dendrocoelum Laeteum,) 從來使用セシラング氏保存方法モ組織學的卽實驗用ニハ適當ナレ𪜈教授用トシテ動物ノ全態ヲ保存センヿ此法ニテハ頗ル困難ナリトス何ントナレハ稍完全ノ標本ヲ得テ爲施藥後ハ其身體容易ニ萎縮スルニヨリ其前多少ノ壓迫ヲ加ヘサル可カラズ然ルニ壓迫ヲ加フレハ器官ノ形狀ハ異變スベシ反之若シ此動物ヲ〇、五%ノHy.溶液ニ浸スヿ十分乃至十五分間位ナレハ動物其運動ヲ停止シ身體ハ自然ノ儘々伸長ス其時ピクリン醋酸ヲ注射シテ殺セハ壓迫ヲ加ヘサルモ充分身體ノ諸器官ヲ觀ルヲ得ヘシコレモ全ク永ク麻痺セザルヲ良シトス

ひる(Hirudo medicinalis) 一%ノ溶液中ニ半時間乃至二時間モ浸セハ其體適宜伸長ス此時酒精又ヒクリック酸中ニ投入シテ殺ス可シ

ないす(Nais Proboscidea) 〇、一%溶液ニ浸セハ二三十分ニメ上皮下ノ筋麻痺スルヲ以テ隨意ノ狀態又位置ニ移シピクリン醋酸ヲ以テ固ムルヲ得如此有樣ニアリテモ動

酸曹達ヲ加ヘリットマス紙ヲ以テ溶液ノ中性ヲ確定シタル上保存ス可シ是ハ一時ニ多量ニ製スルモ良トス海産動物實驗ニハ勿論海水中ニ同量溶解シ决シテ蒸溜水等ヲ用ユ可カラズ炭酸曹達ヲ混用ノ利ハ單ニHyxヲ硫酸塩酸等ヨリ遊離スルニ在リ故ニ誤リテ之レヲ多量ニ用ヘハ液質原基トナリ動物ヲ急激ニ殺スノ恐アレハ務メテ注意スベシ

此中性溶液中ニ適宜ノ時間動物ヲ浸シ其組織ヲ麻痺セシムレハ直ニ之レヲ硬固スル藥液ヲ注射スルカ又ハ其中ニ投入ス可シHyxハ强盛ナル還元性ノモノ故ニオスミック、クロミック猛汞ゴルドクロリッド、プラチンクロリッド等弱キ還元性ノ溶液ハ决メ併用ス可カラズ若シ誤リテ用ヰタル時ハ宜シク水ニテ洗ヒ落ス可シ之レニ反シ酒精ピクリック酸、醋酸幷ピクリック酸及醋酸ノ混交液ノ如キハ併用シテ差支ヘナク組織學善美ナル標本ヲ得ベシ

藥液ノ溶解ス可キ分量ハ固ヨリ動物ニヨリ大ニ異ナルモトス因テ左ニ今迄實驗セシ動物數種ニ付キ藥液分量幷使用ノ方法ヲ略記スヘシ

らつぱむし(Stentor coernleus)〇、二五%溶液中ニ十分乃至十五分間モ浸セハ最初五分時ヲ經テ体ハ刺激ニ感動セズメ自然ニ伸長シ十分ノ後ハ纎毛ノ運動漸々不規則トナリ終ニ停止スルニ至ル此時ハ實ニ動物ヲ殺スノ好機故實驗者ハ時ニ顯微鏡ニテ動物ノ運動ヲ視察シ此機ニ到レハ突然ピクリック醋酸(飽和ピクリック酸、五%醋酸ノ混交液)ヲ注射シテ殺ス可シ如此シテ死シタル動物ハ能ク自然ノ狀態ヲ存シテ洋梨形ヲ爲ス左レモ若シ浸スコト十五分ヲ過ギレハ動物体中ノ元形質中毒シテ膨脹シ其本質ヲ激損スルノ恐アリ死シタル動物ハ能ク卅五度ノ酒精ニテ洗ヒ同度ノアシヂユレーテッド酒精中薔薇色位ニ溶解シタルボラックスカーミン中ニ移シテ染ムルヘシ斯クスルコト半時間乃至一時間ナレハ核ノミ十分ニ染ムソレヨリ高度ノ酒精ニ移シ無水酒精ヨリクローブ油ニ移ス時此動物ノ體内ニハ空泡多キ故最初薄ク油ヲ入レ順次濃クスベシクローブ油ニ移シ終リシ後ニバルサムニテ封ス可シ

而シテ又余輩ハ左樣ニ思考セサルヿヲ得ス——乙者ノ本能モ一生中ニ得ラレタル熟練ノ遺傳ヨリ生シタリト云フ理論モナケレハ又權利モナク且ツ之レニ類スル數多ノ他ノ本能ニ於ケルモ皆同シ、

或ハ又上ニ述ヘシ所ニ不同意ヲ唱ヘ人類ニ於テハ個々皆具フル所ノ本能ノ他ニ又時々別ニ非常ニ能ク發達セル本能ニシテ決シテ一個人ノ生殖細胞内ニアルあんらわげカ急ニ變化セシヨリ生セシト思考スルコトヲ得ザルモノニシテ又淘汰ヨリモ起リタリトスルヿヲ得サル所ノ天才ト稱スル所ノモノアリテ其生シ方ハ實ニ一代一代ニ得タル熟練ノ疊積ヨリ起レリトスルノ他ニ說明ノ方法ナキ樣ニ見ハルヽモノアリ、此ノ如場合ニ於テハ余輩ハ故ニ一世代ニ得レタル形質カ次代ニ遺傳スルト云フコトヲ信セサルヲ得サルカ如シ、

固ヨリ如何樣ナルあんらわげト雖モ使用ニ依リテ一生内ニ强大ニナルモノニシテ時ニ依ルト非常ニ强大ニナルモノナリ而シテ音樂、彫刻、數學等ノ天才ハ單ニ腦内ニナル特別ナル機官ノ有無ニヨルモノナレハ淘汰法ヲ除去スレハ其發達ハ全ク一代ヨリ次代ニ用不用ノ結果カ遺傳スルアリ、然レトモ天才アルモノハ特殊ノ腦部ヲ有スルニ源因スルモノニ非ス且ツ又簡單ナル智力ニ非スメ非常ニ複雜セル智力ノあんらわげノ混合結果ナリ、然リ而シテ其發達ハ唯タ腦ノ特殊ノ神經線路カ特別ニ能ク感應スルニヨリ且ツ又腦ノ或ル部分ノ强ク發達スルニモ幾分カ因ルナラン、余ハ天才カ數世代ヲ經過シテ其使用ニヨリ能ク發達セルト云フ證據アリト思ハス、固ヨリばつふ家ノ代々音樂ニ長スルヿべるのうれい家ノ代々數學ニ長シ各々其天才ヲ遺傳シタル例ハアレトモ其始メノ起ハ如何ナルヤ少クモ明白ナラス加之此二家ニ於ケルモ其天才ノ最モ强ク發達セルモノハ其使用ニヨリテ遺傳スルナレハ最後ノ代ニアルヘキニ反テ中頃ニアリ、又屢々平々凡々ノ家ニアリテ不意ニ非常ナル大家ヲ生スルヿアリ、

ダうすハ數學者ノ子息テハナク、へんでるノ父ハ外科醫ニシテ音學ノ才ヲ有セシヤ否ヤハ世人ノ知ラサル所ナ

物ハ未タ死シタルニハアラズ試ミニ清水ヲ以テ其體ヲ洗ヘハ十分ヲ經テ纖毛ノ運動復活溌トナリ腹ノ收縮運動モ回復シ筋ノ收縮モ終ニハ復活ス此時ピクリック酸ノ代リニ醋酸等ヲ以テ殺スヲ得

くるまむし（Rotatorien）Hydatina senta, Noteus quadri-cornis, Squamella bractea, salpina spinigera 等ハ〇、一%溶液中ニ浸スヿ十分乃至十五分間ナレハ前體盤狀部ノ纖毛及諸部ノ收縮筋麻痺ス

なんたいどうぶつ（Mollusken）からす貝まひ〳〵ノ類ハ半又ハ一%溶液中ニ十分乃至廿分間浸セハ動物ハ毫モ刺激ニ感動セサルノミナラズまひ〳〵ノ如キハ殊ニ其殼ヨリ匐出シ觸角ヲ延バシ恰モ前進スル如キ容態ヲナス此時酒精ニテ固ム可シ　（完）

（ふ、つ、）

●遺傳（承前）

石川千代松譯述

多クノ昆蟲カ蛹化スルトキニ製ル所ノ護身嚢ノ如キモ一生中僅カニ一回ノミアルヿナレハ同シク熟練ナルモノハ全ク無キヲ以テ以上ニ述ヘシ諸例ト同一スヘキモノナリ然リ而シテ此護身嚢ナルモノハ屢々非常ニ込ミ入リタルモノナリ余輩ハさたるにお類ノ蛾ノ堅固ナル梨子形ノ繭ヲ製リ其一方ノ入口ニ内面ヨリ多ク粗毛ヲ付生セシメ自己体ハ繭外ニ匐出スルヿヲ得レ𪜈敵ノ之レニ入ルヿヲ得サルカ如キモノヲ見テモ其非常ニ込ミ入リタルヿヲ知ルニ足ル、固ヨリ此ノ如キ込ミ入リタル繭ヲ製ル所ノ本能ナルモノハ唯々淘汰法ニヨリテノミ出來得ルモノナリ然レ𪜈無論此種一種ノ發生時間ニ起リシモノニ非スシテ該種ヲ生セシ所ノ多クノ他ノ種カ漸時ニ變遷セシ際ニ於テ次第々々ニ生セシモノナラン、實ニ今日ニ於テモ余輩ハ他ノ多クノ此レニ近キ蛾ニシテ同樣ナル繭ノ猶オ粗ナルモノヲ製スルモノアルヲ知リ且ツ又此ノ類ノ繭ノ極メテ始メトモ云フ如ク自己ノ体外ニ單ニ絹糸ヲ卷キ付ケタルカ如キモノアルヲ知ル、

さたるにお蛾ノ繭ヲ製ル本能ハ其複雜セルヿ恰モこじよろぐもカ巢ヲ張ル本能ト異ナル所ナカルヘシ故ニ若シ甲者ノ本能カ一生中ノ熟練ナシニ發達スルモノナレハ――

動物學雜誌第參拾五號

明治廿四年九月十五日發兌

## ●三崎ノ櫛水母

理科大學簡易科卒業生　中西準太郎

櫛水母ハ腔腸動物ナル門内ニ在テ珊瑚水母等ト共ニ三綱ヲナスモノナリト雖其体制ヨリ見ルトキハ其消化管ヲ有スルノ故ヲ以テ就中他二綱ノモノニ優ルコト明白ナリ体ハ透明膠質ニシテ櫛齒狀ノ繊毛板ニ依リ常ニ海洋ノ面ニ漂泊セリ余三崎ニ滯在中嘗テ城ケ島迄泳渡リシコトアリシガ時恰モ天清氣朗海潮將ニ滿ヲ報セントスルノ頃ナリシカバ數千ノ櫛水母ハ海流ニ浮沈シテ連々タルノ群ヲナシ彼處ニ一帶此處ニ一帶ト前進後來引モ切ラザリケレバ若シ此海面ヲ圖ニ取リテ其浮游セルガマヽニ印セハ如何ニ面白キ播布ヲ見ルナラント思ヒシ程ナリキ則チ機失フベカラズトテ直ニ表面集メヲナシ其研究ニ取掛リシガ何分透明膠質ニシテ破損シ易ク海流ノ急ナルニ逢テ自ラ破壞シテ存スルモノサヘアル程ナルト研究者ノ無學無識ナルトニテ少シモ其如何ヲ知ルニ由ナシ唯浪江氏ニ聞ク所アッテ漸ク其概形ヲ想像スルヲ得ルニ至リシノミ故ニ今述ベントスルノ說ニ就テハ元ヨリ附會ト信スル所ナリト雖此動物ニ就テハ又頗ル奇妙ト感スル所ナレハ唯城ケ島泳渡ノ印迄ニ其牽强ノ說タルヲモ省ミス聊カ强記スル所以ニシテ少シク識者ノ顯微鏡ヲ煩ハサントスルナリ

古來櫛水母類ヲ說クモノ必ス先 Cydippe ヲ推ス蓋シ標式的ノモノナレバナリ故ニ余モ亦其例ニ依リ初メニ標式的ノモノヲ說キ三崎產ノモノヲ以テ之ニ比照セントスト雖甲ハ已ニ箕作先生ノ載セテ本誌第二卷第十五號ニアルコトナレバ今玆ニ之ヲ贅スルコトヲ厭ヘリ讀者希クハ此心セヨ」挿圖ノ對照ニ依テ三崎產ノモノモ其概畧ハ明晰トハナリシナラン其体無色透明膠質ニシテ形態ニハ球形ニシテ徑三四分ヨリ五六分ニ至ルヲ以テ通例トスルモノト「コップ」形ニシテ其徑寸餘ニ至ル者トノ二種アリ是多分其時代ヲ異ニスルヨリ然ルモノニシテ其球形ノ者成熟スルトキハ變シテ

リ、ちゝわんノ父モ祖父モ代言人ニシテ氏ト氏ノ兄弟ナルふらんせすこ、べせるりをハ同族中最初ノ畫人ニシテ後七人ノ畫人ヲ出シタレ𪜈其畫才ハ漸次ニ劣等トナリタリ此ノ事實ヲ以テ見レハ畫才ヲ發表スル所ノ腦ノ神經系ハ新タニ此等ノ畫人ニ於テ顯出セルモノニ非スシテ其先代ニ於テ外面ニハ現ハレサリシ𪜈業ニ已ニ備リ居リタルモノナリト云フヿヲ證明スルニ足ラサレ𪜈人智ノ特別ナル方向ニ働作スルヿ卽チ余輩カ天才ト名クルモノハ先代ニ於テ此ノ方向卽チ此ノ特別ナル方向ニ向ケ腦ヲ使用セルカ爲メニ生スルモノニ非サルヿヲ證明スルモノナリ

余ノ思考ニ依レハ天才ナルモノハ一方ニ傾キタル智力ノ特別ナル好合物ニシテ一般ニ智力ノ進ミタルモノヽ遺傳ニ因ルモノナリ、生理學上ヨリ此組合方ハ如何ナルモノナルヤハ今日ニ於テ未タ解明スルヿヲ得サルモノナリ然レ𪜈彼ノげいてカ自己ノ天才ニ就キ斯ク美ニシテ且ツ確乎タル語ヲ發セシ如ク父母ノ性質ノ合一ハ發達ニ大關係ヲ有スルモノナラン

（ツヾク）

外観上ノ異點ハ先大畧如此今進テ其内部ノ構造ニ及ハンニ通例ノ櫛水母ニ於テハ其口ノ存スルノ方ヲ口極之ニ反スルノ方ヲ尾極而シテ其中間ヲ中間部ト稱ス故ニ余ハ亦三崎産ノ者ニ於テモ之ヲ説明スルヿ全名稱ニ依ラントス」

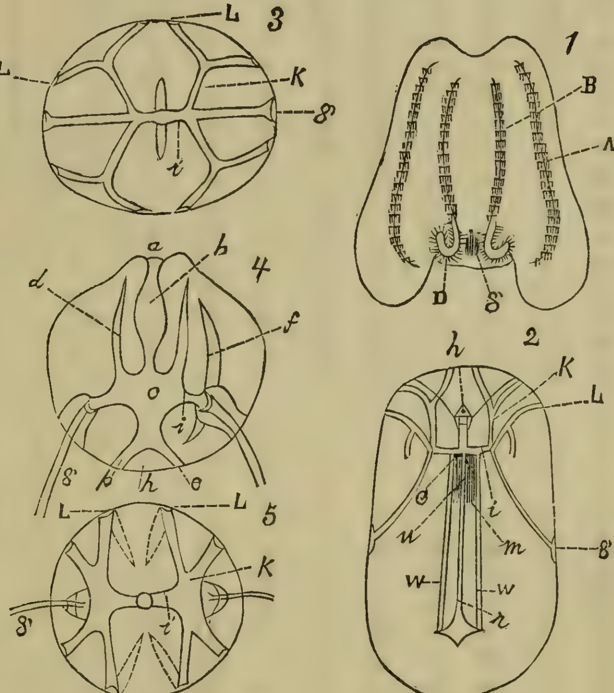
然ルニ余三崎ニ於テ見シ所ノモノハ口極ヲ見ルニ口極ノ如クナラズ尾極ヲ見ルニ又尾極ノ如クナラス却テ口極ハ尾部ノ如ク又尾極ニ口アルモノヽ如シ然レ圧其尾極ニ於テ最モ明ニ見ユル所ノモノハ第二圖hノ如キ一黒色點ノ其極端ニ存スルヿニシテ猶細胞塊ノ如ク以テ彼 Cydippe ニ於テ球形ノ細胞ヨリ成リ纖毛アル外皮ヲ以テ被ハレ清白ナル液(多分炭酸石灰ナラン)ヲ以テ充滿シ一個ノ小神經ノ如キトコロノ Ctenocyst (四圖h)ト稱セラルヽモノト同一ナルモノナリ故ニ神經微糸ノ多數此部ヨリ四走セルヿ百四十倍位ノ顯微鏡下ニテ明ニ見ルヲ得ベシ是神經系原的ノ狀態ト稱セラルヽモノナリ

之レヨリ口極ニ向ヒ漸ク消化管ノ續ク所ヲ追從スルニ Cydippe ニ於テ見ル如キ二個ノ肛門(四圖c)及ビ Apical canals (四圖p)等ハ更ニナク其尾極ヲ去ルヿ少許ノ所ニシテ一腔(二圖c)(四圖cト相當セリ)ニ會フ漏斗ト稱セラルヽノ部ナリ此部ヨリシテ口極ニ至ルノ間胃食道及口ニ相當スル部分ハ變ﾒ一大ノ腔トナリ恰モ Cydippe ニ於テ其口胃(四圖ab)ノ部ヲ Paragastric canals (四圖d)ト共ニ穿出シタルモノニ比スベシト想像スルヲ得ベキモノトナレリサレ圧腔ハ横裂ニシテ口孔菱形ヲナシ常ニ開閉自在ニシテ其收縮スルヤ常ニ漏斗部ヨリ口極ニ至ル中央部(二圖r)ノミヲ殘スヲ以テ恰モ漏斗部ヨリ口極ニ續ク一消化管ノ別ニ存スルモノヽ如キ觀アリ

其他漏斗部ヨリハ一對ノ枝管ヲ出ス此枝管ハ少許ニシテ灣曲シ下方ニ向フヿ口極ヨリ体ノ三分ノ一許ノ處(二圖g)ニ至リテ其表面ニ近ツキ觸糸狀突糸ヲ其部(二、三圖gg)ヨリ出ス是 Cydippe ノ内部(四、五圖gg)ヨリスルモノト大ニ異ナル所ナリ

然ルニ其灣曲部ヨリハ又一對ノ管(二、三圖kk)ヲ分出シ其各分管ハ各又二分(二、三圖LL)シ都合八個ノ管トナリ以テ八縱

「コップ」形ノモノトハ成ルナリ（第一圖ハ其成熟シタルチ示シタルモノナリ）觸糸ハ一對アリテ球形ノモノニ在テハ通例ノモノヽ如ク口部ヨリ体ノ三分ノ一許ノ處ニ位シ寸許ニ延長セルヲ見ルコアリト雖其「コップ」形ノモノニ在テハ其處チ尚下方（一圖g）ニ移シ収縮シテ存スルヲ常トセリ繊毛帶八個アリト雖其長サ一様ナラス即チ相對スル二對ハ長クシテ繊毛板ノ數多ク（一圖N）他ノ二對ハ短クシテ纖毛板ノ數少シ（一圖B）サレド其短キ方ノ末端ハ變シテ一葉ノ片トナリ常ニ体ノ兩邊ニ飜々タルコ第一圖Dニ於テ見ルガ如シ



圖解

1 成熟体チ横面ヨリ見タルモノ

2 他ノ横面ヨリ其部内ノ構造チ見タル模形圖

3 尾極ヨリ縱ニ内部チ見タル模形圖

4及5ハ Cydippe ノ部内チ縱及横ヨリ見タル横形圖

# ●鳥雜記(四)

飯島魁

## ○てうせんめじろ

てうせんめじろ一名こめじろノヿニ付キテハ本誌第三十二號ノ鳥雜記中ニ記載シタルヿアルガ此鳥ハ彌々本邦ノ鳥ト看做シテ可ナリ、去ル八月中岐阜ニ到リテ或籠鳥家ニ就キ糺シタルニてうせんめじろハ越中及ビ加賀地方ヨリ持チ來ルヿアリテ近日マデモ越中ニテ捕リタル一疋ヲ養ヒ居リタルガ既ニ或方ヘ賣渡セリト云ヘリ、爰ニ又東京九段坂ニ鳥屋ヲ業トセル山田文吉ナル老人アリ、此人ハ鳥屋中間ニテハ鳥知リトノ評判アル男ナレバ就テ尋ネタルニ曰クてうせんめじろハ日本ニテ取レルニ相違ナシ然シ稀ナリ、東京ヘハ主ニ大坂ヨリ送リ來ルナリ尤モ東京ニテモ五年ニ一度カ十年ニ一度位ハ取レルヿアリ、今幸ニ店ニ上方ヨリ參リタル二頭ヲ飼ヒアレバ見ラルベシト、余之ヲ檢スルニ按ニ違ハズZosterops erythropleurus, Swinh.ナリ、依テ此種モ「日本の鳥目錄」中ニ入レザル可ラズト斷定セリ、目錄ノ所有者ハ宜シク此種ヲ$34\frac{3}{4}$ノ番號ニテ書加ヘラルベシ(大めじろハ既ニ$34\frac{1}{2}$ノ番號ニテ書入レアル筈ナリ、本誌三十二號二三四頁ヲ見ヨ)

てうせんめじろハ尋常めじろニ能ク似タル色取リナルガ腹ノ色純粹ノ灰白ニテ脇腹ニ濃キ柿色ノ羽アルニヨリ直チニ識別スルヲ得ルナリ、鳴聲尋常めじろニ異ナラズ、余ハ未ダ親シク寸方ヲ取リタルヿナケレド普通ニ小めじろトモ云フ由、上品ニシテ稀ナルガ故ニ價低カラズ余ハ一疋ヲ一圓二十錢ニテ買得タリ

## ○本邦產ノ Passeridæ.

Passeridæ ハ本邦鳥類中最モ種數ニ富メル一科ニシテ余ノ目錄中第一ヨリ第百三十五ニ至ル諸種是レナリ以後此等諸種ノ記載ヲ逐號ニ揭ゲ以テ初學者ノ用ニ供セントス

本邦ニ在ル Passeridæ 科ノ者ハ十三亞科ニ分屬スルモノナリ(目錄ヲ看ヨ)、今先ヅ左ニ亞科若クハ種屬ノ便利的索引ヲ出ダスベシ(但シ此索引タル未ダ充分完全ナル能ハズシテ幼鳥ノ場合ニハ用ユルヲ得ザルヿアルベシ)

帯ノ下ニ従行セリ於是テカ其最初ノ枝管（二、三圖 i i）之ヲ第一水管ト云ヒ其次（二、三圖 KK）ヲ第二水管ト名ケ尚ホ其次（二、三圖 LL）ヲ第三水管ト呼ブノ稱アリ是 Cydippe ニ見ル各相當部（四、五圖 i i KKLL）ト全一ナルモノナリト雖其管ノ分出明ナルト觸糸ニ連ル管ノ灣曲セルカ如キニ至テハ大ニ異ナル所ナリ加之其第一水管ノ根部ヨリ出テヽ横裂腔（漏斗部ヨリ尾極ニ及ベル腔）ノ前後ノ壁ニ添ヘル二本ノ水管（二圖 WW）アリテ二對ノ長縱帯下（一圖 N）ナル水管ノ歸路ヲナシ以テ他二對ノ短縱帯（一圖 g）下ナル水管トハ別々ナル循環ヲナセリ又大ニ異ナルノ點ト云ハザルベカラズ

如此ク漏斗部ハ幾多ノ管ト通スルヲ以テ常ニ渦流ヲ起シ以テ其循環ヲ規則正シクスルモノヽ如シ漏斗部ヨリ稍下リテ腔ノ収縮ニ依テ生シタル管ノ上部（一圖 n）時ドシテ薄紅色ヲ帯ブルヿアリ是或ハ生殖物ナラン尚其兩側ニ第二圖 m ノ如ク薄褐色ノ嚢状物アリ恐ラクハ肝藏ノ作用ヲ爲スモノナラン

口ハ前述ノ如ク菱形ニシテ開閉自由ナレバ食物ハ口ヨリ入リテ横裂腔ノ左右ノ邊ヲ通リ其漏斗部ニ入ルヤ其部ニアル繊毛ノ如キモノヽ繊動ニ依リ又其排洩物ハ尾極ノ極孔（二圖 h ノ部）ヨリスルヲ以テ常ニ其部ヲ伸縮セリ

如此ク三崎ニ産スル櫛水母ハ其外貌ヨリノミ見ルトキハ全ク Cydippe トハ口尾所ヲ反對ニスルガ如シト雖深ク其内部ノ構造關係ヲ尋ヌルトキハ又敢テ怪ムニ足ラザルヲ知リ且 Naple 近海ニ産スル Bolina ナルモノタルヲ知レリ研究ノ面白シトハ蓋シ此謂乎

博士 Greene 氏ハ嘗テ Cydippe ヲ以テ Actinia（イソギンチヤク）ニ比論セシヿアリシガ之レハ何レノ櫛水母ニモ通スルヿト思ヘハ玆ニ附記スルヿトナセリ曰ク Cydippe ノ消化管ハ全ク Actinia ノ消化嚢ニ比適スベキモノナリ故ニ甲ノ漏斗部若クハ Apical canals 及水管ハ乙ノ腔腸房ノ側部ニ相當スベク又甲ノ縱帯下ノ管ハ乙ノ腔腸房ニ比スベシト要スルニ其主要ナル差ハ甲ハ管状ヲ爲シテ外壁膠質ノ厚層ヲナスト雖乙ハ体腔廣クシテ分レテ數房トナレルノ點是ナリ

幼ノ一番羽(是ハ初メテノ秋ニ脱スルモノナリ)ニテハ下部ハ必ズ斑點、縦條或ハ横條ヲ有ス而シテ上部モ亦大概然リ、第一翼羽ハ必ズアレド次羽ト同長ニ達スルヿナシ、

## Geocichla まみじろ屬

此屬ハ羽裏ニ判然ト區畫サレタル白色(稀ニ淡茶色)ノ區域アルヲ以テ近似ノ諸屬ト異ナレリ(以下各種ニ附スル番號ハ目錄ノ番號ト符合ス)

一) G. varia, (Pall.)　ぬゑじない

ぬゑ、ぬゑじなひ、とらつぐみ、おまつぐみ等ノ和名アリ、本邦ニ在ルつぐみ類中ノ最大ナル者ニシテ翼長五寸乃至五寸四分ナリ、尾羽ノ數十四枚アリ(近緣ノ諸種ニハ十二枚ナルヲ常トス)、上部暗黄色ニシテ羽毎ニ純黑ナル三日月形ノ紋アリ下部ハ白色ニ富ミ殊ニ胸部及ビ腹側ニ半月形ノ黑斑紋アリ而シテ此斑紋アル羽ハ少シク淡黄ヲ帶ベリ、此種ハ雌雄著色ヲ異ニセズ」幼鳥ノ形狀ハ未ダ世ニ知ラレズ

東しべりあ及ビ北支那ニテ營巢シ冬ハ日本、南支那及ビふひりぴーん群島ニ渡ル、本邦中所ニヨリ随分多ク捕獲スルヿアリ、歐洲ヘハ甚ダ稀ニ迷ヒ行クモノナリ

二) G. sibirica, (Pall.)　まみじろ

まみじろ、まゆつぐみ、こんなへ等ノ俗名アリ、翼長三寸八分乃至四寸許リ」雄ハ總身灰黑ニシテ判然(ハツキリ)シタル純白ノ眉アリ且ツ下尾筒ト或尾羽ノ末端ハ少シバカリ白シ」雌ハ上部橄欖茶褐色ニシテ眉ハ淡茶色ナリ、下部喉ト腹ハ白ク、脇腹ハ茶褐色、胸ハ淡茶ヲ帶ビ各羽ノ末端ハ脊ト同色ニテ數多ノ横條ヲナセリ、

此種ハ東しべりあ及ビ日本ノ高山ニテ營巢シ、冬ハ支那、びるま、すまとら、じやば等ニ行ク、歐洲ヘモ偶然迷ヒ行クヿアリト云フ、サヘヅリ好キ鳥ナリ

三) G. terrestris, (Kittl.)　小笠原ぐわびてう

是ハ又しまぐわびてうトモ云フ本邦中小笠原島ニ特有ナル鳥ニシテ諸蒐集中甚ダ稀レ随テ貴重ナルモノナリ、翼長三寸二分許、上部ハ橄欖茶褐色ニシテ腰ヨリ以下尾ニ至ルマデ栗茶褐色ナリ、背上黑ノ縦條アリ、淡白ノ眼條(眉)アリ、下部ノ喉及ビ腹ハ畧ボ白ク其他ハ茶褐色ニシ

A)翼ノ第一羽(Primary)ハ長クシテ最長羽ノ三分二ヨリ短キ丁決シテナシ
b……a)嘴端ハ相交叉セリ……Fringillinæ (九九番)
b)嘴端ハ交叉セズ
$b^1$……$a^1$)嘴ハ頭ト殆ド同長而シテ尾羽甚ダ短シ……Pittinæ (七三)
$b^1$)嘴ハ判然ト頭ヨリモ短ク而ソ尾羽ハ餘リ短カラズ
$b^2$……$a^2$)嘴ハ圓錐形ナリ
$b^3$……$a^3$)走脚ノ後面ハ若干ノ鱗板分界ヲ示ス……Alaudinæ (九四、九五)
$b^3$)走脚ノ後面ハ連綿タル一板ヲ以テ覆ヒ鋭稜ヲ成セリ
$b^4$……$a^4$)嘴ハ太ク、走脚ハ略ボ中趾(爪共ニ)ト同長……Fringillinæ (九九ヲ除ク)
$b^4$)嘴ハ細ク、走脚ハ中趾(爪共ニ)ヨリモ長シ……Motacillinæ (自八六至九三)
$b^2$)嘴ハ極メテ短ク且ツ扁平、開口濶大ナリ……Hirundininæ (自一三一至一三五)
B)翼ノ第一羽ハ最長羽ノ半ヨリ長カラズ時ニ頗ル微小ナリ
b……a)嘴ノ根基ニ於ケル高サハ幅ニ超過スル丁判然……Laniinæ (自七五至七九)
b)嘴ノ根基ニ於ケル高サ幅ニ及バズ或ハ略ボ同長
$b^1$……$a^1$)鼻孔ハ前方ニ向ヘル羽毛ノ爲メニ多少隱蔽サル
$a^2$)翼長二寸八分ニ及バズ……Parinæ
$c^2$……$b^2$)翼長二寸八分以上四寸以下 (五八及五九ヲ除ク)
$b^3$……$a^3$)尾羽ハ翼ヨリモ短ク、末端紅或ハ黄ナリ……Sturninæ (八四、八五)
$b^3$)尾羽ハ翼ヨリモ長ク、或ハ略ボ同長……Laniinæ (八〇、八一)
$c^2$)翼長四寸以上……Corvinæ (自六一至七二)
$b^1$)鼻孔ハ羽毛ノ爲メニ隱蔽サレズ
$b^2$……$a^2$)羽色ノ主ナル者ハ黄ニシテ頭ニ黒ノ鉢卷キアリ……Oriolinæ (七四)
$b^2$)右ノ色取リヲ示サズ

$b^3$……$c^3$……$a^3$)翼長二寸一分以下
$b^4$……$a^4$)羽色ノ主ナル者ハ草緑……Crateropodinæ (三三、三四)
$b^4$)羽色右ト異ナレリ
$b^5$……$a^5$)嘴細ク、鬚ナシ……Parinæ (五八、五九)
$b^5$)嘴稍太ク、鬚アリ……Sylviinæ (一部分)
$b^3$)翼長二寸一分以上三寸一分以下
$c^4$……$b^4$……$a^4$)羽色ノ主ナル者ハ暗緑及ビ淡黄ニシテ眼ノ周圍黒シ……Crateropodinæ (三二)
$b^4$)白色、黄色或ハ其他淡色ノ眉スジアリ
$b^5$……$a^5$)尾羽ノ數十……Sylviinæ (自四四至四七)
$b^5$)尾羽ノ數十二
$b^6$……$a^6$)第一翼羽ハ至テ小ニシテ五分ニ及ブ丁ナク、眉ハ純白、純黄ナラズ……Sylviinæ (一部分)
$b^6$)第一翼羽ノ長サハ五分或ハ以上……Turdinæ (一部分)
$c^4$)眉ナシ……Turdinæ (一部分)
$c^3$)翼長三寸一分以上
$b^4$……$a^4$)尾ノ長三寸二分以下
$b^5$……$a^5$)尾ハ翼長ノ半ヨリモ短ク或ハ略ボ同長……Sturninæ (八二、八三)
$b^5$)尾ハ翼長ノ半ヨリモ判然長シ……Turdinæ (一部分)
$b^4$)尾ノ長三寸六分以上……Crateropodinæ (三〇、三一)

## 亞科 Turdinæ　つぐみ類

此亞科ニ屬スル者ハ雌雄羽色ヲ異ニスルヲ一般ノ例トス、

那ニ渡ル、本邦ニハ此鳥稀ニシテ得ルコト困難ナリ、但シ對馬ニハ冬間隨分多ク在ルガ如シ

七) M. pallida, (Gm.)　しろはら

しろしない、やぶつぐみ、ちやじない、ちやつぐみ等ノ名稱ハ皆此種ニ當レルガ如シ、翼長四寸許、上部ハ一樣ニさび赤ヲ帶ビタル橄欖褐色、眉ハナシ、腹白ク、腋羽ハ灰白、尾羽ノ最外ナル二枚ハ末端白シ」雄ニテハ喉、胸、及ビ脇ハ灰黑色、雌ニテハ喉白ク、胸ト脇ハ灰茶色ナリ

此種ハ黑龍江下流ノ地方ニテ生殖シ冬間日本、南支那、台灣等ニ至ル、冬東京近傍ノ藪中ナドニ稀ナラズ、コヽヽト鳴キ飛行スルトキ尾ノ兩側ニ白キ所アル故直チニ分別スルヲ得、北海道ニハ稀レナル由

八) M. chrysolaus, (T.)　あかはら

あかしないトモ云フ、翼長四寸一分許、上部ハ一樣ニ少シクさび赤ヲ帶ビタル橄欖褐色ニテ前種ニ似タレドモ尾ニ白キ所ナク而シテ胸ヨリ兩腹側ニカケテ赤茶色ナリ、腹ノ正中ハ白シ、腋羽ハ灰白ナリ、雄ニテハ腮喉トモニ黑メキタル色ナレド、雌ニテハ此邊白色ナリ、眉ハナシ

此種ハ本邦ノ深山ニテ生殖シ冬ハ平原ニ出ヅルモノアリ又南支那、台灣等ニ渡ルモノアリ」北海道ニハ普通ニシテ冬間無數ニ群ヲナスト云ヘリ、余ハ去ル七月中信州大野川近傍ニテ此種ヲ多ク目撃シ其幼鳥ヲモ採集シ得タリ、親鳥ハ朝夕立樹ノ頂上ニトマリ「ピリヽーピリ、ピリヽーピリ」ト高ラカニ鳴キ遠方マデ聞コユ、土人ハ「チロンチロン」ト鳴クト云ヘリ、東京ニテハ冬ノミ藪ナドニ多ク見ル、其時ハしろはらト同樣ニ「コヽヽ」ト鳴キ居ルモノナリ

九) M. obscura, (Gm.)　まゆじろしない

形狀前種ニ彷彿タリト雖モ白キ眉アリ而シテ胸及ビ脇ノ赤茶色ハ一層淡シ、腋羽灰白、最外尾羽ノ末端ニ近キ所ニ小形ノ白點アリ」雄ニテハ喉ハ暗褐色ナルモ雌ニテハ白ク暗褐色ノ條アルノミ

此種ハ東しべりあニ生殖シびるま半島及ビ馬來群島ニテ冬ヲ越ス、冬本邦ヘ渡リ來ルハ甚ダ僅數ナリ、歐洲ヘモ稀

テ胸ニ暗色ノ斑點アリ、下尾筒ノ羽ハ末端ニ菱形ノ白點ヲ有ス

此種ノ標品ハ未ダ我ガ理科大學ニナシ故ニ之ヲ獲ンヿ余ノ切ニ希望スル所ナリ

## Merula　つぐみ屬

まみじろト殆ド同大ナルガ翼裏ニ分界判然シタル斑紋ナシ

### 四）M. cardis, (T.)　くろつぐみ

是ハ又くろしない或ハこけトモ云フ翼長三寸八分許」雄ハまみじろニ似テ黒色ナルモ腹及ビ下尾筒ハ純白、而シテ眉幷ニ翼裏ノ白斑ナシ、胸後及ビ腹側ニ僅數ノ黒點アリ、腋羽ハ灰黒ナリ、雄ノ幼鳥ハ羽色雌ニ似タリ」雌ハ上部一様ニ橄欖茶褐色、下部ノ中、腹及ビ下尾筒ハ白ク脇ニ黒メキタル斑點アリ、喉及ビ胸ハ淡茶色ヲ帯ビ同ジク黒メキタル斑點アリ、腋羽ハ茶色ナリ

此種ハ本邦ノ山地ニテ營巣シ而シテ秋頃ヨリ南ニ渡リ南支那ニ至リテ冬ヲ過ゴスト知ラル

### 五）M. fuscata, (Pall.)　つぐみ

關東ニテちやうまト云フ、冬間本邦ノ各地ニ甚ダ普通ナル鳥ニシテ別段記載ヲ要セズト雖モ、腋羽ノ赤茶色ナルヿ、翼ノ大雨覆ノ栗茶色ナルヿ、及ビ上部ノさび赤ヲ帯ブル事等ニヨリ他種ト識別シ得ルナリ。羽色ハ幼老、雌雄ニヨリ少シク異ナレリ、

此種ハ東しべりあノ高山（森林區域以上ノ地）ニテ生殖シ十月末頃ヨリ無數ニ本邦及ビ南支那ニ至ルマデ渡リテ冬ヲ越スモノナリ、歐洲ヘ行クハ至テ稀ナリ

### 六）M. naumanni, (T.)　八丈つぐみ

一名ヲしまつぐみト云フ、大サ形狀トモニ前種ニ能ク似タレド喉ノ茶色ナルヿ、胸及ビ腹側ニ黒ナクシテ栗茶色ナルヿ、尾羽ノ内瓣栗茶色ナルヿ、上部ノさび赤ヨリモ寧ロ橄欖茶褐色ナルヿ、等ニヨリ識別スルヲ得、下部一体ニ赤茶色ニ富メルナリ、純粋ナル八丈つぐみハ尋常つぐみト著シク異ナレド余ハ又孰レノ種ナルヤ疑ハシキ中間ノモノアルヲ知ル、雌雄ノ色ハ餘リ異ナラズ

本種ハ前種ト同ク東しべりあニテ生殖シ冬ハ日本及ビ支

續報」(Further Studies on the Formation of the Germinal Layers in Chelonia) ナル文ヲ草シ現今印刷中ニシテ大學紀要第五冊第一號ニ掲載スルノ都合トナリ居レリ抑有脊椎動物ノ發生ハ我々人類ノ發生ニ最モ直接ナル關係アルモノナレバ多年歐米學者ノ研究スル所トナリ既ニ學術世界ニ於テ知リ得タル事實夥シトス而シテ最モ多ク此等研究ノ材料トナルモノハ哺乳類中ノ家畜獸(特ニ兎、コマ鼠等ノ如キ小ナルモノ)鷄、あひる等ノ鳥類、兩棲類(蛙、蠑螺)及ヒ魚類ニテ胚子及ヒ卵ノ得ヤスキモノナリ然ルニ爬蟲類ノ發生ニ至リテハ固リ多數ノ研究ナキニアラザレドモ材料ノ得難キ爲メ其研究ハ案外ニ不充分ナリ龜鼈類ニ付キ大ナル研究ハ先ツ Rathke 及ヒ Agassiz and Clarkノ二著述ニ止ルガ如シ然レドモ此等ノ二著述ハ數十年以前ノモノニシテ其研究方法ノ不充分ナルハ云フ迄モナク其論スル所ハ陳腐ニ屬シ誤謬少シトセズ例ヘバ Agassiz and Clark ノ二氏ハ當時ノ大家ニシテ最モ觀察ノ力ニ富ミタル人ナルニ關ラズ最初期ノ胚子ニ於テ尾端ヲ頭端ト誤認シタル事アリ是實ニ當時發生學ノ幼稚ナルヲ證スルニ足ル爬蟲類特ニ龜鼈類ノ發生ニ付キ吾人ノ知識ハ此ノ如ク不充分ナリ然レドモ此等ノ動物ハ有脊椎動物中胚膜ヲ有スル最下等ノモノナレバ若シ其發生ヲ知ルヲ得バ比較研究ノ材料ヲ造リ有脊椎動物一般從テ吾人々類ノ發生ニ付キ吾人ノ知識ヲ增シ是迄ハ五里霧中ニアリシ問題モ爲ニ明瞭トナルモノアルベシ余ハ我邦ニ在リテ實ニ他ニ得難キ材料ヲ得ルノ好機會ヲ得タレバ之ヲ利用シテ不肖淺學ノ許ス限リハ此點ニ付キ吾人ノ知識ヲ擴ムル事ニ盡力セント決シ此ノ如ク數年間此事ノ研究ニ從事スル次第ナリ是迄既ニ公ニシタル論文ニ續キ以後漸次出版スベキ論文ハ總テ Contributions to the Embryology of Reptilia ト名付ケ一ノ Series トナシテ世ノ學者ノ批評ヲ乞フ積ナリ

鼈ノ後ニいしがめノ胚子ヲ得テ比較シ大ニ益シタル事アルハ前ニ述タリ余ハ漸々ニ此研究ニ深入リスルニ從ヒ尚ホ他ニ比較スベキ材料ヲ望ムノ念頻ナレバ多少石龍子等ノ胚子ヲ得タルガ本年尚ホ我邦ニ於テ余リニ困難ナク得

ニ行クヿアリト云フ

十) M. celænops, (Stejn.)　　あかまっこ

是ハ伊豆七島(三宅島、八丈島等)ノ特產ニシテ內地ノあかはらニ最モ近シ、但シ胸及ビ脇ノ赤茶色ハ一層赤ミ深ク、雄ノ全頭及ビ頸部ハ眞黑ニシテ眉ナシ、雌ハ下部ノ赤茶ノ濃キ外ハあかはらノ雌ニ等シ、此種ハ或ハ伊豆地方ヘ迷ヒ來ルヿアルナランカ

(以下次號)

〇前號ニ出ダセル鳥ノ目錄中訂正補增ヲ要スル件

一六五番ノ和名ニあまつばめヲ加フベシ

一六六番ノ和名ハはりをあまつばめト爲スベシ

一七三番ハかきはづくヲ消スベシ

一七八番ニかきづくヲ加フベシ

一九九番、二〇〇番ノ雌雄ノ印ヲ入レ交ヘルベシ、即チ♀ハ♂ニ、♂ハ♀ニ變ズベキナリ

二〇一番ノ和名二ツトモニ消シテ更ニのわつトナスベシ

二〇二番ノ和名二ツトモニ消シテ更ニしまつトナスベシ

---

## ●うみがめノ産卵ニ就キテ

箕作佳吉

余ハ數年前石川千代松氏ト共ニ鼈(スツポン)ノ發生研究ヲ始メ仝氏ト共ニ「龜鼈類ニ於テ胚葉ノ出來キ方ニ就キテ」(On the Formation of the Germinal Layers in Chelonia) ト題スル論文ヲ草シテ之ヲ倫敦刊行 Quarterly Journal of Microscopical Science (Vol. 27) 及帝國大學紀要理科第一冊ニ掲載シタリ幾許モナクシテ石川氏ハ獨國ニ留學シタルヲ以テ余一人ニテ尚ホ業ヲ續ケ尋テいしがめノ胚子ヲ多ク採集スルノ機ヲ得テ鼈ノ發生ト比較スルヲ得タルヲ以テ益シタル所實ニ少カラズ鼈ノ發生ノミヲ研究シテハ到底解スル能ハザル現象モいしがめト比較シテ研究スル時ハ其意味明瞭トナリタルヿ少カラズ余ハ實ニ比較方法ノ大切ナルヿヲ感シタリ此比較方法ノ結果トシテ余ハ龜鼈類ノ胚膜 (On the Foetal Membranes of Chelonia) ト題スル論文ヲ草スルヲ得テ之ヲ帝國大學紀要理科第四冊第一號ニ掲載シタリ又尋キテ「龜鼈類胚葉ノ出來方ニ就キ研究

經過シ居リタレ圧幸ニ此八日間ノ溫度高カラザリシヲ以テ未タ余リ進ミ居ラザリシガ固ヨリ此一腹ノミニテハ足ルベキニアラザレバ一漁夫ヲシテ靜波ヨリ御前岬マデ四五里間海濱ヲ沿フテ漁夫一般ニ傳言セシメタルハ若しうみがめノ產卵シタル場所ヲ認メ之ヲ報スルモノニハ褒賞トシテ金一圓ヲ與ヘント然ルニ此事新聞紙ニ廣告シタルト仝シ效力アリシモノト見ヘ仝海濱ニ產卵シタル場所ハ大抵之ヲ知ルヲ得タリ余ノ滯在中前後購入シタル數ハ總テニテ九腹ナリキ

此ノ如ク充分ナル材料ヲ得タレバ是ヨリ日々貯藏ニ從事シ最初期ヨリ實ニ見事ナル胚子ヲ得タリ之ニ就キ土田氏ノ余ヲ助ケタルヿ實ニ少ナカラズ後甚タ不幸ナル出來事ノ引續キタル爲メ此研究一時中絕シタレ圧最初期ヨリ孚化前マテノ胚子ハ相應ニヨク調ヒ先ツ最初余カ遠州ニ赴キタル目的ハ充分ニ達スルヲ得タリ余ノ最後ニ歸京セシハ九月一日ナリキ

遠州ニテ採集シタル胚子ノ研究ハ是ヨリ大學實驗場ニ於テ爲シ其結果ハ漸次大學紀要ニ揭載シテ報知スベシ然レ圧其前ニ產卵ニ就キ知リ得タル事實ヲ玆ニ列記シテ仝好諸君ニ質ス

〔產卵ノ時期〕 余ノ確ニ知リ居ルモノニシテ最モ早キハ六月廿七日最モ後キハ七月三十日ナリ然レ圧八月ニ入リテモ產卵シタルヿハ數聞キタリ鼈及ヒ龜ハ五月卅日頃ヨリ八月十日頃マテ凡ソ二ケ月半ノ間產卵スルモノナルガうみがめモ之ト大同小異ニシテ先ツ六月中旬ヨリ八月中旬マデヲ產卵期トスレバ余リ間違ハナカルベシ

〔產卵ノ時刻〕 ハ龜鼈ト異ナリ余ノ經驗ニテハ日中ニテ、產卵シタルヲ聞カズ皆ナ夜中ナリ但シ人ナキ嶋ナドニテモ仝樣ナルヤハ知リタキモノナリ

〔產卵ノ場所〕 うみがめハ夜中海ヨリ砂濱ニ上リ來リ水線ヨリ稍距リタル所（概子砂丘Sand-dunesノフモト近ク）マデ來リ多少產卵ニ適シタル場所ヲ搜索シ產卵シタル後ハ直ニ再ヒ水ニ入ルモノヽ如シ此ノ如ク思フ理由ハ元來うみがめノ足跡ハ甚タ明瞭ナルモノナルガ卵ノアル所ハ

べキモノアルニ心付キタリ則チあかうみがめ (Chelonia caouana俗ニ正覺坊ト云フ)ノ胚子ナリ余同僚飯島魁氏ハ遠州ノ人ナルガ氏ノ話ニ氏ノ故郷ニテハうみがめノ卵ヲ雜物店ニテ賣ルモノナリト聞キ仝氏ニ托シ濱松邊ノ實況ヲ聞合セモラヒタリ又在靜岡動物學會々員小笠原利孝丹羽甲子郎ノ二氏ニ乞ヒ三保邊、知人近藤直達氏ヲ經テ在遠州相良村上幸英氏ニ乞ヒ相良地方ニ於テうみがめ産卵ノ景況ヲ取調べモラヒタリ三君共ニ勞ヲ惜マズ余ノ爲ニ取調べラレタルヲ以テ余ハ産卵ニ付キ多ノ事實ヲ確ムルヲ得又卵モ左程ノ困難ナク得べキモノナルヿヲ知ルヲ得タリ是實ニ三君ノ賜ニシテ余ハ玆ニ三君ノ好意ヲ鳴謝ス

右ニ依リうみがめノ卵ハ得べキモノナルヿ明瞭トナリタレバ余ハ鼈及ヒ龜ニ於ケル如ク最初期ヨリ孚化スル迄ノ胚子ヲ日ヲ逐フテ漸次ニ貯藏シ研究ノ材料ヲ造ラント欲シ産卵ノ報知アリ次第ニ其地ニ出張シ此事ニ從事セント決シタリ然ルニ七月一日ニ至リ相良ノ村上氏ヨリ仝處近傍御前岬村字女岩(メシヤ)村ニテ一頭ノうみがめ産卵シタリトノ報知ニ接シタレバ余ハ取ルモノモ取リ敢ヘス積リ居ル用事モソコソコニ片付ケ七月三日相良ニ趣キタリ土田兎四造氏モ余ト共ニ行ク

翌日女岩村ニ至リ産卵シタル塲所ヲ一覽シタリ元來此村ノ住民ハうみがめハ氏神樣ノ御使ヒナリ若シ之ヲ捕ヘ殺ス時ハ不漁ヲ來タスト信ジ決シテかめヲ殺ス事ナシト云フ現ニ此日沈沒船紀伊丸ヲ破壞スル爲ニ用ヰタルだいなまいとニ當リ負傷シテ弱ハリタルモノカ一頭ノうみがめ陸ニ上リ來リタルヲ村民ハ酒ヨ藥ヨト介抱スルニ遇ヒタリ此ノ如キ次第ナレハ此度卵ヲ採ルヿヲ許スヤ否ヤト大ニ掛念セシガ余ノ仝處ニワザヽヽ來リタル理由ヲ懇ニ語リ聞カセシニ快ク承諾シ呉レ余ニ卵ヲ採堀スルノ自由ヲ與ヘタリ此後モ余ハ數此邊ノ住民ニ接シタルガ生馬ノ目ヲ抜クト自負スル東京社會ニ棲息スル余ニ取リテハ其質朴温順ナルヿ夏日ノ曉天今開キタルバカリカト思ハルヽ牽牛花ヲ見ルノ感ヲ得タリ

此女岩村ノ卵ハ初メテ之ヲ開キタルハ産出後既ニ八日ヲ

ル場所ヲ知ラルヽ方ハ余ニ一報ヲ賜ラハ幸甚シ
〔卵ノ數〕一腹中ノ卵ノ數ハ余ノ確ニ知ルモノニテハ百二十一、百二十九、百四十五、百四十五、百六十九（小笠原氏報）ナリ故ニ先ツ百廿ヨリ百七十マデノ間ヲ平均數トスベシ
〔卵ノ形チ、大サ、及殼質〕卵ノ形ハ球形ナリ大サハ直徑卅八ミ、メヨリ四十二ミ、メノ間トス即チ平均四十ミ、メナリ卵殼ノ質ハ柔軟ニシテ革ノ如シ最モ其柔サノ度ニモ多少ノ差異アリテ或卵ハ石灰質多ク殆ント鷄卵ニ近シ或ルモノハ甚タ柔キモノアリ
〔卵ノ孚化日數〕余ノ試驗シタル卵ノ内未タ孚化シタルモノ一粒モナシ故ニ今日ニテ確ナルヿヲ云フヲ得ズト雖モ六月廿七日ニ產レタルモノニシテ今日マテ孚化セザルヲ見レバ六十日以上ヲ要スルヿ明白ナリ尤モ卵ノ孚化スルハ全ク大陽ノ温度ニヨルモノナレバ日當リノヨキ所ニアルモノハ孚化早シ又初夏ニ生ミタルモノハ同シ日數ヲ經過スルモ土用中ニ生ミタルモノホド進マズ龜及ヒ鼈ニテハ五十日ヨリ七八十日ヲ經テ孚化シ先ツ六十日ヲ平均トスうみがめモ之ト大同小異カ」胚子ハ未タ孚化セサレ𪜈かめノ外形ハ充分ニ備ヘ丁度天保錢位ノ大サノモノハ既ニ多ク得タリ
〔卵ヲ運搬シ得ベキ時〕概メ卵ハ產ミタル直ニ後ハ注意メ運搬スレバ害ナシ一日以上モ經過スレバ最早運搬スルヲ得ズ此理由ハ產卵ノ時ハ卵ヲ如何ナル位置ニ置クモ胚盤ノ處比重少キ故必ズ最上點ニ來リ止ル故ニ別ニ害ナシ然ルニ孚化ノ始ルヤ否ヤ胚盤直下ノ卵黄ニ變化起リテ液体ニ變シ胚盤ハ此液ノ上ニアルニ至ル若シ此時卵ヲ動搖スレバ胚盤近傍ノ膜ハ極メテ脆キ者ナレバ液上ノ位置ヲ保ツヿ能ハズ立ニ破レ卵ハ遂ニ發達スルヲ得ザルニ至ル又今少シク進ム時ハ胚盤上ノ卵白ハ消失シテ胚盤ハ殼ニ直着ス而メ前ノ液ハ益多量トナルヲ以テ卵ヲ動カセバ如何ニ注意スルモ胚盤邊ノ膜動搖劇シク立ニ破ルヽニ至ル故ニ卵ヲ移スヿハ到底出來ザルナリ」然レ𪜈尚一層時日ヲ經過シ產卵後四五十日ヲ經尿膜ガ全ク卵殼ノ下ニ擴ガリ了リタル頃ニ至レバ注意メ運搬スレバ再ヒ害ナキニ至ル現

通常歸ル足跡ノ始マル處ニ近ケレバナリ、土地ノ人ノ説ニハかめハ產卵シタル後其邊ヲ踏ミ散シ卵ノアル所ヲ匿サントスト余ハ未タ此言ヲ信ズル能ハズ踏ミ散ラシタル跡アルハ產卵スル前ニ適宜ナル塲所ヲ索ムル爲メナリ上ニモ述ヘタル如ク歸ル足跡ハ通常卵ノアル所ノ近ニ始レリ」又鼈龜ニ於テハ產卵了リタル後ニハ後チモ見ズニ水ニ入ルモノナリ」うみがめノ砂面ヲ步行シタル處ハ四足ノ跡判然トシテ一度之ヲ見ル時ハ三才ノ童子モ之ヲ誤ラザルベシ

〔產卵ノ方法〕うみがめノ產卵ハ余之ヲ目擊シタルコナシ然シ其產ミタル跡ヨリ判スルニ龜或ハ鼈ト大同小異ナルベシ此二種ニ於テハ產卵ノ際ハ前足ヲシカト大地ニ踏ミ付ケ產卵ノ終リマテ決シテ之ヲ動カスコナシ而メ左右ノ後足ヲ以テタガヒチガヒニ穴ヲ穿ツ穴ノ深サハ二種共ニ足ノ屆クヲ限リトスルガ如シ充分ニ掘レタル時ハ卵チ其穴ニ產ミ落ス但シ卵ハ余程ノ高サヨリ落スモ害ヲ受ケザル樣ナル構造ニナシテアルモノナリ產ミ了リタル時ハ再ヒ後足ヲ以テ交ニ砂ヲカキ寄セ埋メ了リタル時ニ踏ミ付ケテ幾分カ堅カラシム鼈ハ產卵ノ際人近ツケバ產卵ヲ止メテ水ニ逃ケ入ル龜ハ產卵ヲ始メタル後ハ如何ニ近クニ往クモ逃グル事ナシうみがめハ何ニ似テ居ルヤ知リ度モノナリうみがめノ穴ノ深サハ凡ソ一尺五六寸直徑七八寸モアルベシ最モ上ニアル卵ヨリ地面マテ通常凡ソ一尺トス

〔產卵ノ地方〕余ノ經驗ニテハ遠州ノ內大洋ニ近キ方則チ御前岬近傍ヲ產卵最モ多シトス御前岬ニテモ外海ニ面シタル濱ノ方內海ニ面シタル濱ヨリ多キガ如シ御前岬ヨリ漸々北ニ至リ靜波ヨリ駒越三保ニ至レバ產卵塲ノ數減スルガ如シ」我邦ニテハ遠州ガ產卵ノ最北點ナルガ如シ相模江ノ嶋ヨリ大磯ノ間ノ如キハ產卵ニ適シタル砂濱ノ如ク見ユレ𪜈此處ニ產卵シタルコアルヲ聞カズ遠州ヨリ以南ニハ砂濱ニテ產卵ニ適シタル塲所サヘアレバうみがめハ上リテ產ムカ如シ淡路(岡田)、土佐、薩摩ノ如キハ余ノ知ル二三ノ塲所ナリ本誌讀者中確ニうみがめノ產卵ス

枝ノ前後各側ニ一行ニ附着シ其羽枝ヨリ發スルノ狀ハ羽枝ノ羽軸ニ於ケルト同一ナリ而シテ一羽枝ノ小羽枝ハ直前ノ羽枝ヨリ發スル小羽枝ヲ覆ヒ且ツ一鋭角ヲ爲シテ之ト相交叉セリ

(一四七)小鈎(Hooklets)ハ下位小羽枝ニ於ケル細微ナル鈎突起ニシテ隣位ノ羽枝ヨリ發生スル上位小羽枝ト鈎着スルノ具タリ總テ上位小羽枝ハ此突起ヲ有セス

第十九項　翮ヲ拔キ取リ前ト同樣ニ之ヲ檢スベシ

(一四八)翮ノ羽莖ハ細弱ニシテ翮ト羽軸ノ區別ヲ有セス

(一四九)翮モ隨テ不完全ニシテ僅少ノ羽枝ト簡單無鈎ノ小羽枝ヨリ成レリ

第二十項　羽毛ヲ拔キ去リタル後口ニ吹管ヲ挿シ込ミ嘴ノ礎部ニ於ケル蠟膜ノ直後ヲ緊縛シテ空氣ノ逸出ヲ防クベシ次ニ吹管ヨリ充分ニ空氣ヲ吹キ入レ嗉囊及氣囊ノ膨脹スルニ及ンテ吹管ヲ拔キ取リ同時ニ絲ヲ以テ堅ク之ヲ結縛スベシ

此方法ニ依テ嗉囊及諸氣囊ハ共ニ膨脹スルモ後ニ檢セラルベキ構造ニハ毫モ損害ヲ與ヘサルベシ蓋シ解剖施術ノ間ニ其孰レカ萎縮スルハ早晩免レサルヲ以テ此際ニハ氣管ヲ切離シ以テ嗉囊ト氣囊ヲ別々ニ膨脹セシメ同前緊縛ヲ施シテ空氣ノ逸出ヲ防クベシ

次ニ胸骨ノ龍骨突起上ノ皮膚ニ縱截ヲ施シテ前方ハ咽喉ニ達シ後方ハ肛門ニ至ラシメ皮膚ヲ左右ニ反轉シテ全腹面ヨリ之ヲ剝離スベシ此際皮膚ハ嗉囊ニ密着スルカ故ニ嗉囊ヲ破損セサルヤウニ注意ヲ要ス

(一五〇)食道ハ濶大ナル薄壁管ニシテ頸ノ腹面ニ沿走シ其末端ハ二分岐狀ニ膨大シテ嗉囊(Crop)ヲ成セリ食道及嗉囊ハ此際共ニ著シク膨脹セリ

(一五一)氣管ハ數多ノ骨環ヲ以テ圍繞セラレタル細長管ニシテ外觀連環狀ヲ呈ス食道ノ前方ニ於テハ其腹面ニ位スレトモ早晩嗉囊ノ左側ニ屈曲シテ其背面ニ移行ス

(一五二)頸靜脈ハ致死直後ニハ通常血液ヲ以テ充張セル大脈管ニシテ嗉囊ノ背面ニ當リ頸ノ左右ニ行走ス各頸靜脈ハ食道及嗉囊ヲ始メ頸ノ皮膚ニ於ケル大小ノ靜脈叢

ニ余ハ先日此發達ノ度ニ達シタル卵凡ソ二百粒ヲ遠州ヨリ東京マテ沙ニ詰メ持歸リタレモ何ナル害モナカリキ若シうみがめノ產卵スル地方ニ住スル方ニテ之カ孚化ヲ試ミントスレバ產卵後一日ヲ經過セザル內ニ之ヲ桶、箱、或ハ籠ノ內ニ移シ砂ノ多量ノ內ニ埋メ日當リノヨキ處ニ置クベシ而シテ桶或ハ箱ノ中ニハ決シテ雨水ノ溜ラヌ樣ニ注意スベシ濕ルヨリ乾燥スル位ノ方宜シ余リ乾燥スレバ細キ霧ヲ吹キ掛クベシ水ノ滴ガ卵ノ周圍ニ行クヿアリテハ卵ハ立ニ腐敗ヲ始ムベシ

余遠州滯在中研究上便利ヲ與ヘラレ又其他ニ付キテモ非常ナル好意ヲ表セラレタル方甚タ多シ此等ノ諸君ニ對シ余ハ此處ニ其好意ヲ鳴謝ス

## ●動物解剖手引草(鳥類ノ部)(承前)

岩川友太郎

第十七項　一片ノ大題ニ就テ其諸部ヲ撿スベシ蓋シ實際ニ於テハ本項ヨリ第十九項マテヲ軟部解剖ノ後ニスルヲ至便トス

(一四二)羽莖(Scapus)ハ其礎部ナル翮(Calamus)ト其末部タル羽軸(Rachis)ヨリ成リ翮ハ圓筒狀ニシテ殆ント空虛ナレトモ羽軸ハ其內側ニ一條ノ縱溝ヲ存シ斷面方形ニシテ中ニ白色海綿狀ノ物質ヲ保含ス

(一四三)羽枝(Barbs)ハ羽片ノ長軸ト直角ニ扁平ト爲レル細尖ノ突起ニシテ羽軸ノ各側ニ二列ニ附着シ以テ一面ノ翈(Vexillum)ヲ構成ス

(一四四)下臍(Inferior umbilicus)ハ翮ノ末端ニ於テ羽毛乳頭起ヲ受容スル處ノ小孔ナリ

(一四五)上臍(Superior umbilicus)ハ翮ト羽軸ノ疆界部ニ於テ翮ノ內腔ヲ外界ト交通セシムル一小斜孔ナリ

第十八項　翈ノ一小片ヲ切除シ其背腹兩面ト上下兩端ヲ區別シテ適度ナル顯微鏡ノ下ニ之ヲ撿スベシ其前途ニ暫時酒精ニ浸シテ空氣ヲ驅除シ「リスリン」ニ浸シテ撿スルヲ至便トス

(一四六)小羽枝(Barbules)ハ更ニ細尖ナル突起ニシテ羽

(一六一)大網膜(Great omentum)ハ脂肪ヲ以テ覆ハレタル一膜片ニシテ內臟諸器ヲ被覆ス之ヲ提擧スレハ後腹氣囊ハ更ニ明亮ナリ

(一六二)內臟諸器中肝臟及腸等ハ此解剖中ニ認視スルヲ得ベシ然レトモ尙ホ後段ニ撿スルヲ便トス

第廿二項　鎖骨間氣囊及氣管前氣囊(一六四)ヲ損傷セサルヤウ注意シテ嗉囊ヲ胸骨ノ前面ト諸胸筋ヨリ分離シ龍骨突起ニ沿テ大胸筋左右ノ一ヲ縱截シ此截口ノ深サハ龍骨突起ノ前部ニハ半「インチ」許ナラシメ後方ニ至ルニ從ヒ鎖骨下筋(一六八)ヲ損セサルヤウ殊ニ意ヲ用ヒテ漸次其深サヲ減スベシ此切截ヲ前方ニ續ケテ大胸筋ヲ叉骨ヨリ分離セシメ截口ノ後端ヲ更ニ外方ニ續ケテ胸骨体ヨリ此筋ヲ分離スベシ胸筋ノ起始ヲ作セル附着點ヲ斯ク切離スレハ胸筋ハ在下部ヨリ容易ニ分離スベシ是ニ於テ血管及腋下氣囊(一六五)ヲ損セサルヤウ注意シテ之ヲ外方ニ反轉シ以テ左ノ部分ヲ撿スベシ

(一六三)食道ノ後端ハ嗉囊ヨリ更ニ後方ニ延ヒテ体腔ニ進入ス

(一六四)鎖骨間氣囊(Interclavicular air-sac)ハ側面ハ叉骨及諸胸筋前面ハ嗉囊及龍骨突起ニ由テ彊界セラレタル窩底ニ位ス此氣囊ハ二個ノ氣管下氣囊(Sub-bronchial air-sacs)相合シテ成リタル者ユヘ明カニ二分岐狀ヲ成シテ食道ノ兩側ニ擴張セリ其各葉ノ直背部ニ氣管前氣囊(Pre-bronchial air-sac)アリ

(一六五)左右ノ各腋下ニ向テ分出セル鎖骨間氣囊ノ延長部ハ烏喙骨ノ直外ニ位シ而シテ大胸筋ニ由テ直ニ隱蔽セラル

(一六六)鎖骨下筋(Subclavius)一名小胸筋(Pectoralis secundus)ハ龍骨突起ノ背部及胸骨体ノ中部ヨリ起レル一大濶筋ニシテ其形ハ双羽狀筋(Bi-pinnate muscle)ナリ即チ中央ハ一條ノ縱扁腱帶ヨリ成リテ左右ノ纎維ハ之ニ向テ輻輳シ其前端ハ叉骨ト鎖骨間氣囊ノ腋下部トノ間ヲ潛行シテ前外方ニ移行ス

(一六七)烏喙膊長筋(Coraco-brachialis longus)ハ鎖骨下

(Venous plexus)ヨリ血液ヲ受容セリ

(一五三)大胸筋ハ胸側ノ大部ヲ成セル大筋ニシテ其纖維ハ直ニ龍骨突起及鎖骨ヨリ起リ前外方ニ向ヒ斜走シテ上膊骨ノ腹面ニ至リ是ニ停止ス

(一五四)腹筋ハ胸骨ノ後端ト恥骨ノ間ニ於テ柔軟ナル腹壁ヲ搆成ス

(一五五)直腹筋(Rectus abdominis)ハ縱行筋纖維ヨリ成レル一對ノ狹長筋ニシテ腹壁ノ中央部ヲ成シ胸骨ノ後端ト恥骨ノ間ニ緊張シテ其後端ハ腱質ナリ

(一五六)外斜腹筋(Obliquus externus)ハ腹壁ノ側部ヲ成セル濶大筋ニシテ其前部ハ後位ノ肋骨上ニ擴張セリ此筋ノ固有部ハ後下部ノ方向ヲ取レル纖維ヨリ成リテ胸骨ノ後端ト恥骨トノ間殆ント中央部ニ擴張スト雖モ一片ノ强靱ナル結組織即チ腱膜(Aponeurosis)ニ由テ尙ホ後方ニ走リ恥骨ニ至リテ停止ス

(一五七)内斜腹筋(Obliquus internus)ハ外斜筋ノ直下ニアルヲ以テ之ヲ切除スルニ非サレハ認ムルヲ得ス其廣狹モ亦之ト相符合シテ後端ハ同シク腱膜質ナリタヽ其纖維ハ悉ク縱行セリ

(一五八)横腹筋(Transverse abdominis)ハ内斜筋ノ直下ニ位シ横走纖維ヨリ成リテ斜腹筋ノ後端即チ腱膜質ヨリ之ヲ透視スルヲ得ベシ

第廿一項　胸骨ノ後端ヨリ肛門ニ至ルマテ腹壁ノ中央線ニ縱截ヲ施シ此截口ノ前端ヨリ胸骨ノ後端ニ沿ヒ左右ニ向テ之ヲ横截スベシ蓋シ此際ハ刀ヲ深入シテ氣囊ヲ損セサルヤウ注意ヲ要ス而シテ斯ク切截セル筋肉ハ之ヲ左右ニ反轉スベシ

(一五九)後腹氣囊(Posterior air-sacs)ハ此際暴露セラレタル體腔ノ左右ニ位シ透明ナル薄膜ヨリ成リテ空氣ニ由テ著シク膨脹シ而シテ大網膜(一六一)及内臟諸器ニ由テ其大部ハ陰蔽セラル

(一六〇)中腹氣囊(Posterior-intermediate air-sacs)ハ各後腹氣囊ノ直前ニ位ス之ヲ認定スルニハ胸骨緣ヲ少シク提擧スルヲ要ス

たる其聲、蟋蟀の唧々たる其聲、蚊蚍の蚍々たる其聲は如何なる機官により如何なる作用によりて此の如き聲をなすやに至ては種々煩多にして一言以て之を名狀し難し隨て其聲にも長短、緩急、高低、清濁の差異を生じ各種、各屬により異樣の聲をなすも亦勢の免かれがたき處なり然れども予の今玆に載する處は發聲の機官及ひ作用を詳記せんとの主意にもあらず一向(ひたすら)其發聲は口より出るにあらさるを證明し得るまでにて十分なれば可成簡短に蟬、蟋蟀、蚊蚍の發聲につき其始末をのべん

甲は有力の筋もて腹部の兩旁にある皷膜を屈伸するにより其聲を發し乙は其蓋翅(イリトラム)を相摩して其聲を發し丙は有力の筋もて中胸をせはしく屈伸し隨て其翅を顫動するにより其聲を發するものなり漢土にも亦此說あり旁鳴ハ蜩蟬屬又云ク蟬ハ喙在二腋下一 翼鳴ハ蟋蟀屬となり又蚍以レ翼鳴 其聲 蚍々故名ともありされば漢土にても泰西の所謂六脚虫(分節虫)は其聲口より出るにあらさることは實驗に徵して古より知りし者なるへし此等を考合せは蜩蟬屬を除き雙翅類、膜翅類、直翅類を論せす凡六脚蟲は發聲の方法こそちがへ多くは其聲翼にあり又唐詩に陰虫切々不レ堪レ聞などゝ見え蟋蟀、促織類の鳴聲に切々といへるは切歯の切と同く摩(きし)るの義なり蓋し蟋蟀、促織類は蓋翅を相摩して其聲をなすが故に切々と名けしなるべし字典によれば相摩以成レ聲謂二之切一ともあり

右の段(くだり)にいへるが如く予の玆に記する處は主(おも)に翼聲に在りされども均しく翼聲にして其蟲の喜怒如何によりて其聲を異にするものなり例之(たとへ)は一蠅にして人手の之を妨くるとなく自から適意に飛ふときは其聲清聒なるも一たび之を手中に握むときは其翼を搖して止まず其聲激急悲叫するものゝ如し此等の聲につきては今玆にかゝぐるの必要なし又強て此等の聲をかゝげんと欲するも甚だ難き業(わざ)なり總て虫自ら適意に飛翔する塲合に生ずる翼聲若くは草樹の間に隱れて嚶(すだ)く際におこる翼聲を揭ぐるまでにして人手の之を妨げ或は他物の害に罹り悲叫する如き聲は爰(こゝ)には省きつ

筋前部ノ外側ニ位セル小筋ニシテ鎖骨間氣嚢ノ腋下部ノ背側ニ當リ前外方ニ移行ス（目下ノ位置ニテハ其下側ニ位ス）

（一六八）胸動脈及靜脈ハ諸胸筋ニ分布セル大脈管ニシテ目下ハ大胸筋ノ反轉繼續ヲ妨止ス

はとノ脈管系ノ注射ハ左ノ方法ニ從フヲ最良トス「クロ、フォルム」ヲ以テ致死セシムルヤ直ニ胸部ノ羽毛ヲ拔キ去リ第廿二項ノ示導ニ從テ一方ニ胸脈管ヲ暴露シ之ヲ切離シテ出血セシムベシ鳥類ノ血液ハ頗ル凝結シ易キヲ以テ以上ノ施術ハ最モ敏捷ヲ要スヘク而シテ可及的充分ニ出血セシムルヲ要ス次ニ同側ノ胸骨体ヲ切除シテ心臟ヲ露出シ胸脈管ノ起始ヲ認メ既ニ施シタル截口ヨリ胸動脈ニ嘴管ヲ挿シ入レ固ク緊縛シテ心臟ニ向ヒ注射スベシ靜脈系ハ胸靜脈ヨリ注射スルヲ得ベシト雖モ尾骶腸間靜脈（一九七）ヨリ腎門靜脈系ニ向テ注射スルノ良法ニ如カス蓋シ切離セラレタル諸胸靜脈ハ預メ結縛セラルヽヲ要ス上行大靜脈ハ個々特別ニ注射セラルヽヲ要スベシ而シテ之ヲ完成セントスルニハ頸靜脈ノ一ニ切截ヲ施シ其起始部ノ邊ヨリ前方ニ向テ注射スルヲ良トス門脈系統モ亦尾骶腸間靜脈ヨリ前方ニ向テ注射スルヲ最良トス

（ツ、ク）

# 寄書

説ノ可否ハ本誌編輯者其責ニ任セズ

## ●動物聲音考第十六

### 蟲類　總論

野村彦太郎

淮南子ニ曰蟬無口而鳴と夫れ蟬口なくんば何以て夏日緑樹の間に在て風を吸ひ露を飲むを得ん之を解さゝる者の説に所謂無口而鳴とは獸類や鳥類の聲と全く相異なり其肺臟より出で喉頭を過ぎ舌にて調和せしむる聲にあらざるをいふと彼蟬や口あるも聲なければ口なしといふと雖虚説となさず凡口なくして鳴くものハ獨り蟬のみ然るにあらず蟋蟀、蚊虻に於るも亦然り獨り蟋蟀、蚊虻のみ然るにあらず百般の有聲蟲に於ける亦然り然らば夏蟬の嘒々

位せし如く羅馬當時の貴女は其衣服は言ふまでもなく全身眞珠を以て飾り殊に耳環には名珠を三ッ四ッも連ね懸けて衆中に誇れりと云彼のジリュス、シーザーはマーカス、ブルータスの母に贈物として今の英貨四万八千四百十七「ポンド」の價有るものを以てせり又爰に一話あり所は名高きクレオパトラはマーク、アントニーが驕奢を極め設けたりし大饗に對して己れの饗宴は尚多額の費を要せしを示し之に誇らんが爲め賓客の目前に於て己れの耳より大なる眞珠を取り離し之を酷の盃中に投し直に飲下せりこの馬鹿氣たる一飲は實に八万〇七百二十九「ポンド」餘を價せりと云ふ古に在ては驕奢の人民中に眞珠を溶かし之を飲下するの風ありたり即俳優の如きも常に其贅澤を表する爲め高價のものを飲みしこと珍しからざりしなり古代の「ペルシャ」人は眞珠の價値を附するに純金の同し目方の價を以てせり嘗て東方旅人の手に得たるものにて後「ペルシャ」王の所有に屬せしものは十一万「ポンド」の値あり而して西暦千五百八十七年「マーガリタ」島より採獲したるものは二百五十「カラト」の重あり其價十五万弗にて之は西班牙の「フイリップ」二世の有に歸せりと云ふ古より東洋眞珠産地の著名なるは「ペルシャ」灣、「セイロン」島及紅海等なりとす而して紅海にては以前こゝに最大なる眞珠を獲し所なるに係らす濫獲の爲めに殆んど種を絶つに至り竟に其重立たる市場「ダハラク」「サーキン」の如きも其後大に零落に陷り今は些かに貧困なる漁民の殘り住するのみなりと云ふ「ペルシャ」灣に於ける「バーレイン」島并「セールン」島の「マナアー」灣及「コンダッチー」入江は實に莫大の産額ありし所なり次に「コロマンデル」海岸に沿ふて印度洋各所亦産地少からずと云ふ尚最近の報（去る五月新聞通信）に由るに近時西濠洲の北部に於て眞珠貝採取の業頗る盛大となり該海濱に業を營む漁船總數は千八百八十九年中の調査には凡そ百三四十艘（風帆船并眞珠採り船）もありて其持主は大概英人なれとも亦支那人馬來人の有に歸するものもあり而して其潛水者の如き本邦人の之に傭はるゝ者多く又た同地にある本邦人中近頃相約し漁船を購入し此業を營めるものもありと云ふ

# ●眞珠の說　　二宮生

余ゟ鄕國志摩の海產物に豐富なるハ心有る人の已に說く所なり啻其漁獲製法等の稍や完美ならざると未た其名を世に廣布するの機會を得す否な之を爲す程の大熱心家の出てさるとハ窃ゟに有志者の慨歎する所なり夥多の海產物中其眞珠の如きハ近來に至り漸く世人の知遇を得たるものなり乃ち嘗て某氏より
皇后陛下へ献納の事あり又昨年の第三回內國博覽會へ出品し同時箕作博士珠母生體の開剖等ありて當時新聞紙上の記事ハ以て世人に志摩眞珠を紹介せしなり頃ろ聞く同地有志者ハ水產會なるものを組織して大に製造等改良を謀り合せて販路を導くの計を講し尙眞珠採取の如きも近來技師を聘して漁獲保育等の術を諮問し後來の繁殖を謀せりと遠からすして志摩海產物の名を天下に轟ゟその曉あらむ余ゟ此眞珠の說ハ嚮に聊か爲にする所ありて學暇エンサイクロピーディヤ等諸雜誌類より摘譯編述し同鄕會誌へ記載所のものなり今再ひ之を改寫添削し貴會雜誌に投せんするの念を起せり若し幸に餘白を借さるゝの賜もの有らハ是蓋し余一人の榮のみに非るなり

世人ハ眞珠なるものゝ形貌を親ふせさる者恐らく之無かるべし然れとも或ハこのものゝ貴寶品たることを知らさる者ハ甚た尠しとせさるなり宜矣之を通常金石類と同視して其成生の如き深く之を窮むる者有らさるや

眞珠は或る貝類の腹中に含み存すると云へることハ普通人の開ける所にして尙之か採獲に從事する者ハ實驗之を知ることなり然れとも今試に貝類ハ何故に之を含有するゟ如何にして之か貝類の內部に生するやの問を起されハ其採獲者と雖とも未た容易に之に答ふる能はさるべし

必竟我邦人の眞珠說に暗くして之か貴重せらるゝものたることを知らさるハ抑も爰に理由あるなり夫れ眞珠を貴重する風習ハ遠く歐人間に傳來せし所以にして其歷史ハ實に舊く彼の經典中早く已に之か記事あり降て羅馬の太盛を極むる榮華の日に在て此ものハ貴寶珠玉中其最上に

造構ニ注意セザルベカラズ抑モ海岸上下的限線ハ變化窮リナキモノニシテ一方ニ於テハ其傾斜緩慢低夷ニシテ海水淺ク所謂浪擊濱(Beach)ヲナスアリ他方ニ於テハ懸崖絶壁屹然トシテ海面ヨリ隆起シ激浪之ヲ擊ッテ息マザルアリ甲ハ潮汐ノ退却著シキガ故ニ海底ノ出現面積廣シト雖モ生物棲息ニ適スル箇所ニ乏シキヲ以テ從テ其種數甚ダ尠ク唯海水ノ爲メニ運搬サレシ遺骸ノ細砂ト倶ニ堆積スルヲ覩ルノミ乙ハ之ニ反シテ海水深ク潮汐ハ僅ニ垂直退却ヲナスノミニシテ其露出面積狹隘ナリト雖モモト營養物ニ富ムヲ以テ生物ハ之ヲ喫ヒ此隱現常ナキノ岩崖ニ其基礎ヲ固メ悠然自活セリ若シ後ノ採集者不幸ニシテ實地ニ熟達セズ因ッテ猥リニ濱砂ヲ堀鑿ヲ以テ得ルナキノ歎アラバ余ハ慫ロニ奇崖兀立ノ巖下ヲ指シ悦ンデ共ニ自然ノ美術ヲ探ラン

然リト雖モ動物界ニ於テハ適者生存(Survival of the fittest)ノ爲メニ保護同化行ハレ巧ニ敵眼ヲ晦マシ以テ其身ヲ隱匿スルコヲ認知セズンバアルベカラズ抑モ保護色ハ雪ニ皚々タル寒帶雪野ヲ横行スル極熊白狐等ノ白色ヲ摸擬シ或ハ鬱蒼タル熱帶樹蔭ニ跋扈スル諸動物ノ綠色ヲ假飾スルノミナラズ昆蟲爬蟲鳥類ノ如キ空氣生活ノモノハ勿論水中棲息ノモノニ於テモ亦等シク履行サルヽモノナリ蓋シ保護色ハ動物學的性質即チ自然淘汰法ヨリ進化發達セシモノニシテ動物ノ體色ハ即チ周圍ノ色ナルガ故ニ採集者若シ鷲鷹鋭利ノ眼アラバイザ知ラズ吾人普通不練ノ鈍眼ヲ賴リテ崖下ヲ搜索スルニ於テハ往々容易ニ動物ノ居處ヲ發見スル能ハザルコアリ

余ノ本年夏期相州沿岸ヲ逍遙スルヤ未ダ素人的採集ヲ免レズシテ唯尋常普通ノモノヽミ視覺ヲ刺戟シ新奇動物(余ニ取リテ)ヲ保持スル巨岩ヲ擁スルモ尚且ツ其群居ノ妙處ヲ探知スル能ハズ茫然トシテ沈思之ヲ久フス偶々沸々微音ヲ發シテ耳朶ヲ襲フアリ余ハ之ヲ動物ノ行爲ニ歸シ耳ヲ欹テ眼ヲ張リ探索到ラザルナク終ニ保護色ヲ識別シ稍々其目的ヲ果スヲ得タリ斯ク發音器ヲ具有セザル磯邊動物ノ一種ノ音響ヲ發スルコニ就テハ余ノ未ダ聞知セ

# 雜錄

## ●臨汀採集者ニ寄語ス

火龍赫々トシテ三伏ノ炎熱堪ヘ難ク宛ガラ一大熔鑛爐ノ內ニ在リテ灼カルヽガ如キハ是レ夏月都下蟄居ノ常態ナリ東都先輩諸氏ハ皆此期ニ乘ジテ或ハ山野ヲ跋陟シ或ハ河海ヲ蹂躙シ以テ自然界ニ於ケル美妙調和ノ在所ヲ探知シ只管理學ノ進步ヲ圖リ傍ラ以テ英氣ヲ養ヒ依テ其身ノ健全幸福ヲ希望セザルナシ今飜ツテ動物界ノ現狀ヲ窺フニ概子夏月ハ生殖啓發殊ニ盛ニシテ從テ玆ニ生存競爭與リ到ル處トシテ優勝劣敗ノ劇裡トナラザルナシ豈ニ夫レ志アルノ士此屈強ノ好時節ヲ措イテ何ヲカ他ニ需メンヤ然リト雖モ海ニ山ニ採集探究ヲ企ツルニ當ツテハ豫メ相當ノ理屈ヲ心得ヘテ而シテ事ヲ果スヲ得ベシ是レ余ヲシテ初メテ臨汀採集(Shore collection)ヲ試ムル者ニ向ヒ海邊ノ模樣ヲ吐露セシムル所以ナリ

サテ海岸採集ヲナスニ先ダチ第一着ニ考察ヲ要スベキハ潮汐ノ干滿如何ヲ知ルニアリ世人ノ夙ニ記臆スル如ク潮汐ハ約十二時間每ニ一漲一落ヲナス海水ノ動搖ニシテ職トシテ大陰及大陽ノ引力ニ因テ起ルモノナリ其高潮ト高潮低潮ト低潮トノ間隙ハ各平均十二時廿四分ニシテ高潮及低潮共ニ一日每ニ前日ヨリ後ルヽヿ平均凡ソ四十八分ナリトス故ニ今午前第十時ヲ假ニ低潮ノ極點ト定ムレバ翌日ハ午前第十時四十八分ニ其極度ニ達スルヤ明ケシ這ハ每日起ル所ノ潮汐顯象ニシテ干滿高低ノ差著ジカラズト雖モ玆ニ大潮ト稱シテ一ヶ月中ニ二回起ル處ノ潮汐アリ即チ新月及滿月ノ時ニシテ此時ニ當リテハ大陰大陽共ニ一直線ニ在ルガ故ニ其合同ノ引力ヲ以テ海水ヲ引クヿ著甚ナリサレバ此機コソ採集者ノ爲メニ最モ貴重ナルノ時ナルヲ以テ決シテ空シク經過スベカラズ若シ夫レ潮汐ノ如何ヲ慮ラズ時ノ適否ヲ顧ミズシテ徒ニ濱汀採集ヲ企ツルハ識者ノナサヾル所所謂骨折損ノ疲レ儲ニシテ必ズヤ臍ヲ嚙ムノ悔アラン

採集者干潮ノ時刻ヲ知リタル後ハ沿岸ノ形勢即チ地質的

一日全簡易科卒業生濱田俊三郎大作宗次郎着ス廿四日工科大學教師ウエスト所有ノ帆船(ヨット)ニテ來港ス廿六日第二高等中學校教授宍戸一郎着ス廿七日中西準太郎去ル廿八日山崎治太郎長濱兼吉去ル八月六日藤田經信去ル全日ウエスト再ヒカピテン、ジヨンヽト來訪ス七日宍戸一郎三本貞介去ル八月八日滯在人員濱田俊三郎波江元吉全日限リ一先閉塲セリ

○實驗所室內ノ水族館　昨年夏季設置セラレタル水族館ハ長サ五尺幅四尺高サ五尺(但シ臺二尺)せめんと製ニシテ兩面ニ玻璃ヲ用井魚鰕ヲ側面ヨリ觀察シテ諸鰭ノ運搖觸鬚ノ作用等各種ノ慣性ヲ實驗スルニ便ス試ミニ飼養セルモノ拾餘種各々其慣性ニ隨ヒ或ハ舘底ニ匍匐シ或ハ絕ヘス舘中ヲ游泳シ或ハ海藻又ハ岩石ノ下ニ潛匿スルモノアリ一目シテ能ク其動物ノ海中ニ在ルトキノ狀態ヲ知ルヿヲ得テ頗ル面白シ就中ゑまぎん又ごんぜい(Plotosus anguillaris, Bloch.)カ其身海中ニ在ル如ク軀幹ヲ海藻ノ下ニ潛クシテ唯口部ノミヲ露出シ口圍ニアル八本ノ鬚ヲ伸張シ水流ニ任シテ之ヲ動搖セシメ得意顏ナルハ又一興ナリシ(漁家ノ兒女カ往々此魚ニ刺衝セラルヽハ蓋シ彼等カ此魚ノ斯ノ如キ狀態ヲナシ海藻ノ間ニ潛ミ居ルヲ知ラズシテ採藻游泳等ノ際手足ヲ妄ニ投シテ刺衝セラルヽナラン且此魚ハ生殖期(六、七月)ニ際シ磯邊ニ來リ岩礁ノ間ニ產卵スルヲ以テ特ニ危害ヲ蒙ムルヿ多シトカヤ夏季海濱ニ採集スルモノハ戒心スベキヿナリ)海水ノ新陳交代充分ナラザル爲メカ鰕、蟹、海栗等ハ永ク生存セズいそぎんちやく、ごるこにやあノ如キモ亦生活シ得ザリキ

○ウエスト氏ノ厚情　氏ハ本年モ昨年ノ如ク(七月廿六、七兩日)余等ヲ誘ヒ氏カ所有ノ大名丸ニ乘シ城ケ島沖(凡ニ哩)ニ至リ三十乃至七十尋ノ塲所ヲ Tangle 或ハ Dredge ヲ引キ珊瑚、海栗、蠕蟲、貝殼、無慮數十種ヲ採集セラレタリ採集品中 Goniocidaris 海栗一種 Wardheimia picta, Schemnitz はふすきかいノ如キハ稀レニ漁夫ヨリ得タルヿアルモ吾人カ親シク之ヲ城ケ島北岸、諸磯、小網代等ノ沿岸ニ於テ採集セシヿ嘗テナカリキ然ル

ザル所ナルヲ以テ聊カ疑ナキ能ハズト雖𪜈蓋シ夏期炎熱ノ候ハ動物ノ生活諸作用盛ナルヲ以テ活潑ニ諸機官ヲ使用シ或ハ体ニ縮張運動ノ起ルアリ或ハ徐々ニ移動ヲナスアリ恐ラクハ此等運動ノ結果トシテ微音ヲ起スニ因ルナラン採集者深ク玆ニ注意シテ其眞僞ヲ試メサンガ爲メ耳ヲ磯邊ニ傾クルアラバ余ガ望ミハ其レニテ圓滿ナリ

長濱兼吉

●**あさけとんぼ**　其大サ殆ド八丁とんぼノ如クナレ𪜈其腹部ノ彼ヨリモ太クヤヽ扁クシテ赤色ナラザルヲ以テ兩者ハ一見判別シ得ルナリコレハ予ガ本年七月中旬北伊勢朝明郡大矢知村ニ近キ田畔ニテ採集セルモノニテ始メハ自ラモ八丁とんぼナラムト速了シ居リシガ遂ニ其然ラザルヿヲ發見セリ予ハ假リニあさけとんぼノ俗稱ヲ附シテ記臆ニ便セリ

●**蛙が蛙を呑む**　兩棲動物ニハ兎角共食ヒヲナス者多キ由ハ曾テヨリ聞ク處ナリシガ予ハ本年七月伊勢ニテ甲ノ蛙ガ殆ド己ト同大ナル乙ノ蛙ヲ呑ムヲ見タリ其始メ予ハ甲ノ蛙ガ乙ノ腹ノ上ニ登リタル如クナレバ定テ甲ハ雄ニシテ雌ノ裏面ヨリ變則ニ精液ノ注射ヲ試ムルモノナラムト思ヒ居リシニ其實ハ然ラズシテ甲ハ乙ヲ呑ミタルモノナリ斯クテ時ヲ經ルヿ一時間計リニシテ甲ハ一タビ之ヲ吐キ出シ更ニ手段ヲカヘテ敵ノ頭部ヨリ呑ミ掛リ更ニ三時間計リニシテ遂ニ之ヲ全ク呑ミ下セリ是ニ於キテ予ハ蛙ガ呑ムニモ亦自ラ方アルヿヲ知レリ

●**福島近傍産蝶目錄ノ正誤**　動物學雜誌第十二號ニ報告セシ同目錄中(44)Danais tytia, Gray ヲ除キ其代ハリニ Neope sp. 及ビ Euripus Japonica, Feld. ヲ同目錄中ニ加フ可シ

右三件　　會員　梅村甚太郎

●**相州三崎帝國大學臨海實驗所概況**　本年當臨海實驗所ハ七月七日ニ開場セリ來場諸氏ノ人員幷ニ出入ヲ報ス可シ七月七日理科大學々生藤田經信着ス九日理科大學々生三本貞介着ス十二日波江元吉着ス十七日理科大學簡易科卒業生山崎治太郎長濱兼吉中西準太郎着ス廿

ス

ナ、　モ、

●いとひきぼて　學友宍戸一郎君ノ厚情ニヨリ陸前釜前灣ニテ本年四月下旬君ノ採集セラレタルいとひきぼてノ標品ヲ得タリ。いとひきぼてハ曩ニ予ノ記載セシいうれいくらげニ近似ノくらげナリ、且ツ疑モナク Cyanea 屬ノモノナリ、然シ Nozakii トハ異ナレリ。宍戸君ノ言ニ因レバ此くらげハ其數餘リ多カラズ然シ形ハ非常ニ大ニシテ直徑二尺以上ニ達スト云フ、かさノ中央ハ美麗ナル桃色、周邊ハ黄褐色、生殖線ハ黄色、觸手ハ濃キ桃色ト黄褐色ノ兩色アリト。又釜前灣邊ノ漁夫ハ細長キ觸手ヲ有スルくらげヲ總テぼてト稱スル由。君ノ贈ラレタルぼてハ直徑八せめニテ幼稚ノモノト鑑定セリ、色及ビ構造ヨリ考フルトキハ新種ト思ハル、先ツ假ニ Cyanea itohiki ト名ツケ置カン、本年ハ多分時期ニ後レタリ、明年出現ノ期ニ委細ノ構造ヲ取調ベテ報導センヿヲ期ス。

岸上鎌吉

●くらげノ子供　雌雄ノ親くらげノ子供ハ親くらげノ如ク浮游セズシテ他物ニ附着シ Gastrula embryo ヨリ漸々變化シ Scyphistoma ト云フ時代ニ達シ、此 Scyphistoma ノ無性生殖ニヨリテくらげノ出來ルヿハ人ノ皆知ル所ナリ、昨年予ハ讃州ニテいうれいくらげヲ得其下ニ附着シ居ル數多ノ Scyphistoma ヲ見タリ、當時多分 Scyphistoma ナラント思ヒ居タリシガ歸京後諸書ヲ探索セシニ Scyphistoma ノ母体ニ附着シ居ルヿヲ見當ラザリシカバ本誌第貳卷四一三頁ニハ Actinea ノ如キ動物ト記シ置キタリ、近頃買求メタル書中、似寄リノ事實アルヲ見出シ予ノ初メノ考ノ正シカリシヲ知レリ。Phyllorhiza Punctata ノ子供ハ母ノ口腕ノ糸ニ附着シ居リ Cyanea annaskala ノ子供ハ母ノ口腕ニ掛リ居ルト云フ。予ノ見タル Cyaneanozakii ニテハ子供ハ母ノかさノ下面ニ吸ヒツキ居タリ、故ニ此くらげノ成長ノ變化ヲ居ルヿハ容易ナルベシ

（き、か）

●いぼくらげ　本誌ノ古キ所ニ Cephea ト云フくらげノ名前ヲ三崎動物表中ニ見タカト思フ、予ノ憶ニ Cephea

ニ昨年以來此等ノ標品ヲ城ケ島沖一二哩ノ所ニ於テ採集シ得ルニ至リシハ特ニ氏カ厚情ノ然カラシムル所深ク謝セザル可カラス

○ぺんたくらいなす採集法　相洋ノ名産揶子貝、鳥ノ足ノ採集法ニ就テハ吾人ノ常ニ工夫シテ怠ラザル所ナリ既ニ昨年八月ノ誌上ニ記載セラレシさゞなわノ試驗モうみなす、わきざし、あみ貝等ノ珍種ハ捕獲セラレシカモ主眼ノ二品ハ破片ダモ獲ル能ハザリキ然レモ吾人ノ精心ハ未タ挫折セス本年モ亦七月廿五日藤田經信三本貞介濱田俊三郎長濱粂吉ノ四氏乘船セラレ昨年ト全シ塲所ニ於テさゞ縄ヲ使用セラレシニ獲物ハ昨年ト異ナルナシ唯Velella ノ大ナルモノヲ獲ラレシハ稍〻眼新ラシク覺ヘシ兩三日ヲ經テ熊吉ナル漁夫（此者ハ漁業ニ巧者ナル者）一個ノ鳥ノ足ヲ携ヘ來リ今日此品ヲ仝業ノ者カ釣獲ヨ一如何ニメ捕ヘシカト問フニだはなわ（さゞ縄ト大同小異唯之ヲ用ユル塲所ノ沖ナルノミ）ノ餌ニさゞ、あじ等ノ活魚ヲ其儘尾或背ニ釣針ヲ貫キテ投ズレハ其魚ハ遁レントン欲シテ縱横ニ游泳スルヲ以テ鳥ノ足等ニ綸糸ヲ纏繞スソヲ引揚クレハ綸糸ノ斷ツヿアルモ容易ニ脫離スルモノニアラス此品ハ偶然ニ獲タレ共右ノ方法ニ因テ試ミナバ必ズ好結果ヲ得ント云フ其說話スル所事實ニ近キヲ以テ八月六日宍戸一郎氏ノ催シニテだは縄ヲ用井テ試ミント城ケ島ノ南三里許ノ沖ニ至リ（深サ二百尋）試ミシニぎんざめ、げどふざめ、外ニさめ二種とうじん、のどぐろ、あこなし（三崎方言）あしちあん、ぽりそわ、とふなす、はいどろいど、ぺんなつら、くもひとで等ヲ獲タレモ揶子貝鳥ノ足ノ如キモノハ影タモ視ルヿ能ハザリキ蓋シ其棲息セル塲所ニ當ラサルモノナラン偖余カ默々ニ附スル能ハザルモノハ次ノ吉報ナリ

八月十四日五島清太郎氏ハ房州行ヲ變シテ三崎臨海實驗所へ赴カレシ處十六日だゞな船ニテ三崎西ロ二里半程沖ニ至リ試ミラレシニ頗ル好結果ヲ得テ鳥ノ足大小四品ヲ獲ラレタリ當時ノ模樣ハ他日氏ノ詳細ナル報告アランナレトモ余ハ不取敢爰ニ此嘉報ヲ記シテ氏ノ勞ヲ謝セント

シテナイト思ハル、以上ノヿニ關係アルカナキカ知ラザレ𪜈左ニ掲グル事實ハ幾分カ諸君ノ參考ニナルベシ。一日藍色模樣ノ敷布團ヲ庭前ニ曝セリ、此布團ノ上ニ印ノ爲ニ小キ方形ノ赤キ切レヲ縫ヒ附ケタリ、一匹ノ Vanessa 飛來リテ此赤キ切レノ上ニトマレリ。又一匹ノ Vanessa ノ來リテ室内ノ赤けツとノ上ヲ頻ニ口吻ヲ以テツヽキ居ルヲ見タリ。或日 Papilio sarpedon 來リテ室内ノ赤けツとノ上ニアル白色ノ瀬戸燒茶器ニトマリ須臾シテ飛去リタリ。Papilio sarpedon ノあぶらせみ或ハみんみん〳〵ノ一二間上ヲ飛ビ行クヲ見テ追カケ行クヲ度々見タリ。

一日はへとりくもニ將ニ死ナントスル蠅ヲ與ヘタルニ蠅ノ少シ動クヲ見テ飛カヽリタルモ其後蠅ノ少シモ動カザルヲ以テ遂ニ之ヲ捨テヽ去レリ。又一日障子ノスミヲ巡リテ頻リニ食餌ヲ求ムルはへとりくもヲ見タリ。此くも圓形ノ袋ヲ作リ居ルくもノ所ニ到リ足ヲ以テ之ニ觸レ中ニ居ル動物ヲ追ヒ出サントス、此時中ニ居ルくも力ヲ極メテ巣ヲ振ハス、はへとりくも之ニ恐レテ少シク退キ巣ノ振動止マリシ𪜈又初メノ如ク之ニ近ヅケハ巣ハ又再ビ振動セリ、之ニ因リはへとりくもハ再ビ退ク、此ノ如クスル𪜈三回ニシテはへとりくもハ遂ニ見限リテ去レリ、此時予試ニ巣ノ中ノくもヲ追出サントシテ誤リテ之レヲ傷ク、依テ其頭胸部ヲ切リテ先キノはへとりくもニ與フ、くも喜ビ之ヲ吸フ、又後ニ蠅ノ屍体ヲ與フ、之ヲモ喜ビ取リテ吸ヒ了レリ、後ニ飯粒ノ乾キテ石ノ如ク堅キヲ與フ、之ニ觸レテ後ニ去レリ、濕ヒタル飯粒ヲ與ヘタレバ之ニ觸レ暫ク吸ヒタル後捨テヽ去レリ。第一ノはへとりくもハ蠅ノ將ニ死セントスルヲ嫌ヒ第二ノくもハ乾キタル飯粒ヲモ觸レテ試ム大ニ其差アルヲ見ル、第二ノくもハ餘程饑ヘタルモノカ或ハ意地ノキタナキモノカ。

●**三崎ニ於テ獲タル外部寄生吸蟲** 余ハ去ル八月十四日ヨリ主トシテ外部寄生吸蟲ノ採集及ビ研究ノ爲メ三崎實驗所ヘ赴キ是マデ見ザル種ヲ得タリ其内五種ハ Tristoma 屬ニ屬シ一ハ Hexacotyle ノ種ナリ而シテ宿主ハ總テ五(1)かぢきニハ二種ノ Tristoma 寄生ス一種ハ重

屬ノくらげト思フハ昨年讚州デ只一度一ツ見タ外、他處ニテ見ズ、其くらげハ稀ナル由ニテ漁夫ニ問フモ別ニ名ハ無イト答ヘタリ、依テ予ハいぼくらげノ新稱ヲ與ヘタリ、かさノ上部中央ノ所ニ數多ノ小キ突起アルヲ以テナリ、本誌第貳卷四一三頁ニ此くらげニ就テ一寸記シ置キタリ。　（さ、か）

●脚氣病人日記拔萃　上總鹿野山ニ籠リタル脚氣病人ノ日記中ヨリ動物ニ關スル事項ヲ拔キテ左ニ掲グ、手足共ニシビレタル病人ノ記事ナレバ區域極メテ狹ク、筆モ亦達者ニ動カズ切レ〳〵ノ事實ヲ無茶苦茶ニ並ベタルモノナリ。

蜂類ノ己レガ子供ノ食物ニ供スル爲ニ他ノ蟲類ヲ取リ來リテ巣ノ中ヘ入レ置ク事ハ人ノ能ク知ル所ナリ、其食餌ヲ求ムルノ非常ニ綿密ニシテ且ツ巧ナルハ次ニ記スル一二ノ例ニテ察スルヿヲ得、しやくとりむし等ノ如キ螟蟲ヲ求ムル爲ニハ枝ヨリ枝ニ移リ或ハ昇リ或ハ降リ葉ヲ一々調ブル等ノ如キ根氣ヨキニ驚ク、かすかけぐもノ巣ヲ見テハ直チニ其中心ヲ目カケテ飛ビカヽリ其處ニ位置ヲ占ムル蜘蛛ヲ襲フガ如キ中々能ク心得タルモノナリ、蜘蛛ノ巧ニカスヲ掛ケテ自分ノ居ル所ヲ晦マシ居ルモ其手ヲ喰ハヌハ感心ナリ、然シ蜘蛛ノ色等ノ非常ニ能ク護身ノ目的ヲ達スルハ斯クモ蜂ノ爲ニ謀ヲ見破ラレテ襲撃サルヽニ拘ラズ多クハ蜂ノ見當ヲ誤マル爲ニ蜘蛛ノ安全ニ逃レテ巣ヨリ落チルニテ知ラル○或日一匹ノ蜂ノ松ノ枝ヨリ一條ノ蜘蛛ノ糸ヲ傳ハリテ屋根ノ方ヘ行クヲ見ル、須臾ニシテ蜘蛛ノ屋根裏ニ達スルヤ否ヤ一匹ノかみなりぐもノ糸ヲ引キテ小石ノ落ツル程ノ速力ヲ以テ降ル之ニツヾキテ蜂モ早ク追ヒタレドモ蜘蛛ハ其時吹キ來リシ風ヲ幸ニ糸ヲ延バシテ虛空遙ニ逃レ去リ遂ニ見ヘズナリタリ、かみなりぐも等ハ曉ニ大概巣ヲ破リ二三ノ大切ナル糸ヲ殘シテ暗キ所（通常巣ヨリ高キ所）ヘ退キ居ルモノナリ、蜂ノ之ヲ知リ居ルニハ驚クベシ。

昆蟲類ノ眼ハ物體ノ形ヲ見ルヿ能フカ、或ハ只色ノ濃淡位ヲ區別シ得ルニ止マルカ、此邊ノヿハ未ダ能ク研究

爬蟲類三二種鳥類四〇〇種獸類八一種通計一一三〇種今日知ラレタル本邦產有脊椎動物ハ殆ンド網羅シテ遺漏ナカラントス其撰擇ノ精覈ナルハ素ヨリ辨ヲ俟タス且氏カ例言中ニ誌サレシ如ク多年筆記セラレタル備忘錄ヲ上梓シテ以テ同好ニ頒タレタルモノナレバ坊間射利ノ爲ニ輯錄スル所ノ書ト伍ヲナスモノニ非ス抑〻斯學ニ從事スル吾人ノ斯ノ如キ書ヲ渴望セルヿ大旱ノ雲霓モ啻ナラサリキ今此發刊ニ遇フ恰モ時雨ヲ悅フ民ノ若シ將來吾人ノ此書ノ爲ニ禆益ヲ得ル蓋シ鮮少ナラザル可シ唯惜ムベキハ此目錄ニいんできすヲ缺キタルハ白璧ノ微瑕トモ評ス可キカ

## ●遺傳（承前）

石川千代松譯述

余カ父ヨリ受ケシ氣質ハ一生ヲ確實ニ經過スルヿニシテ母ヨリ受ケシモノハ想像ニ富メル嬉シキ氣質ナリ

天才ハ實ニ特別ニ能ク發達セル智力ノ特別ナル結合ニシテ其あんらわげナルモノハ何レノ腦ニモアルモノナルヿハ一個人ニシテ往々數種ノ天才ヲ有シ或ハ一家族ノ人々ニシテ種々異ナリタル天才ヲ具フル人物ヲ現出スルヿヲ以テ明カナリ、多クノ畫人ハ同時ニ又有名ナル音樂者タリシ而シテ又一個人ニシテ双方ノ才ヲ有スルモ共ニ特別ニ秀テタルヿナキ人モ多ク之レアリ、ふをゑるばっふ家族中ニハ有名ナル法學者、有名ナル哲學者幷ヒニ拔群ノ畫人ヲ出シめんでるすそんノ一家內ニ哲學者ト音樂者ヲ出シタリ、天才ノ出ツルモ亦時勢一般ノ腦力作働ノ傾向ニ依テ大ヒニ影響ヲ被ムルモノヽ如シ、彼ノ感動多キ前紀ノ末年ニ當リテ獨逸國ニ現出セル詩人ノ數ハ實ニ以テ驚クヘク又三十年間戰時ノ間ニ至リテ他ノモノト共ニ其又全ク消滅セシヿハ余輩ノ能ク知ル所ニシテ又かんとノ後ニ至リテ無數ノ哲學者ヲ現出シ其之レト全ク反對シテ空論ヲ嘲リ笑フ所ノ確實ナル自然ノ研究ノ時代ニ至リテ殆ンド皆消失セルノ勢ナリ、

藝術研究所等ノ設立アルニ於テ從來美術上ノ天才ヲ現出セサリキ人民中ヨリゑゆわんたあれる、でふれがる、れゑんばふ等ノ名士ヲ出セリ、今日ノ博物學者ノ多クモ昔時

ニ口腔内ニ寄生シ其色白ク形ハ楕圓形後端ノ吸盤ハ大ニシテ体ノ腹面ニ數多ノ突起アリ他ノ種ハ鰓板ノ内面ニ寄生シ色赤ク止靜ノ位地ニ於テハ圓形ナレドモ運動ヲナスキハ長延シテ木葉狀ヲナス後端ノ吸盤小ニシテ背面ニ小突起アリ(2)めかぢきニモ矢張トリストマノ一種鰓ニ寄生ス其形狀ヨクかぢきノ赤色種ニ肖タレドモ体ノ背面ニ突起ナキガ如シ(3)さわだニモトリストマ一種寄生セリ是ハ直接ニ鰓ニ附着セズシテ是ニ寄生セル橈脚類ノ背ニ附着セリ色純白形長楕形後端及ビ前端ノ吸盤甚ダ小ナリ(4)はざらノトリストマハ形及ビ色合ヨク前者ニ肖タリタヾ少シク異ナレル點アルノミ(5)めばちニハヘキサコチリノ一種鰓ニ寄生スヘキサコチリニテ是マデニ命名サレタル者一アルノミ即チ H. thynni, De la Roche 是ナリ余ノ先年菽ニテ獲タルモノハ或ハ是ト同種ナラムカト思ハル今年獲タルモノハ形狀少シク前者ト異ナル所アルガ如シ若シ果シテ然ラバ是ハ新種ナラム且又前記ノトリストマノ種モ多數新種ナラムト思ハルレドモ委細ノ點ニ就キテハ研究ノ後報ズル所アラム　（五島）

## ●新刊書一二三

An Introduction to the Study of Mammals Living and extinct. By W. H. Flower and R. Lydekker.

是ハ有名ナル Günther ノ魚編ト全樣ナル書物ニシテ僅ニ一冊ノ中ニ哺乳類ヲ纏メタル便利ナル書ナリ

Zoological Articles. By E. R. Lankester.

是ハ Lankester 氏ガ Encyclopedia Britannica 中ニ投稿シタル論文ヲ改正增補シテ別冊トナシタルモノニシテ一ノ良好ナル書ナリ

Hypnotism. By Albert Moll. Contemp. Sci. Ser.

是ハ催眠術ニ付キテノ事實ヲ一纏ニシテ一小冊トナシタルモノナリ

○日本動物總目録　豫テ我カ動物學社會ニ其人アリト知ラレタル岡田信利氏カ頃日世ニ公ニセラレタル該目録ハ洋裝ニテ紙數一二五頁有脊椎動物ヲ綱目族ニ分類シ學名和漢名產地ヲ列記ス魚類ノ數五九六種兩棲類二一種

タル形質ノ遺傳カ茲ニ於テ又關係アリトハ信シ得サルモノナリ、

余カ知ル所ニテハ茲ニ唯タ生物體上ニ一種ノ變化アリテ其說明ノミハ生殖物ノ變化ヨリ生セシトシテ說明スルニ於テ困難ヲ感スルモノアリ、此類ノ變化ハ即チ外界ノ變遷ヨリ直接ニ起ル所ノ生物體ノ變化ナリ然レトモ此類ノ變化ニ就キテハ未タ判然セサル所多クアリテ其事實トナス所ノモノニ就キ判決ヲナスヲ得ル如ク未タ實ニ充分ニ知レ居ラサルモノナレハ余ハ茲ニ又此類ノ事實ニ就キ委ク語ラサルヘシ、

世人ハ常ニ異ナリタル氣候ニヨリ生セル所ノ變化カ一代ヨリ次代ニ遺傳スル者ナリト云フヿヲ前以テ腦中ニ信シ置キテ此レ等ノ事實ヲ觀察スルヲ以テ其觀察ハ常ニ不充分ナリ、又或ハ此ノ氣候變化カ第一ニ先ツ生殖細胞ニ變化ヲ生セサルヤヲモ明カニ觀察セルヿナシ然レトモ若シ果シテ生殖細胞ヲ變スルニ於テハ其世代ヲ經ルニ從ヒ漸次ニ疊積スルヲ以テ生物體ノ變セルヿハ之レヲ說明スルニ於テ別ニ困難ヲ感セサルモノナラン例之ハ一個ノ植物體ニ多ク肥料ヲ與フルトキハ該植物ヲシテ單ニ長大ナラシムルノミナラス又幾分カ之レヲ變スルヿハ既ニ余輩ノ熟知スル所ナリ而シテ其生スル所ノ果實カ同時ニ大ニシテ且多ク滋養分ヲ含有セサレハ實ニ以テ驚ク可キ事實ナルナラン、該植物ニ續ヒテ又多ク滋養物ヲ與フルニ於テハ其果實ハ次第々々ニ肥大トナリ遂ニ之レヨリ生スル所ノ植物ヲモ變スルニ至ラントハ必スアラネハナラヌ事ナラザレトモ又左樣ナルヘシト思考シ得ルモノナリ、然レトモ之レ決シテ外界ノ刺擊ヨリ得タル所ノ形質ノ遺傳ニ原因スルニ非スシテ全ク生殖細胞カ發育ノ際ニ能ク養ナハレタルニ原因スルモノナリ、

右ノ事實ト反對セル例ニシテ同樣ナル說明ヲ附シ得ルモノ又茲ニアリ、歐洲ニ於ケル通常ノ馬ヲふあるくらんど嶋ニ移ストキハ食物ノ惡キト濕氣ノ爲メニ該島ニテ產スルモノハ第一代目ニ於テ既ニ其體形倭小トナリ「二三代ノ後ハ全ク惡キ馬トナルナリ」、此ノ場合ニ於テハ氣候ト惡

うぃらんど或ハしゑりんぐ時代ニアリシナレハ詩人又ハ哲學者タリシナラン、博物者ニアリテハ他ノモノニ於ケルカ如ク判然タラサレ圧亦特別ナル天才ヲ要スルモノニシテ余輩ハ實ニ博物學者中ニ於テモ物理學者或ハ化學者ハ動物學者或ハ植物學者ト腦部ノ異ナリタル結合ヲ要スルモノナリト迄云フヿヲ得ヘシ、然レ圧誰モ生レナカラニシテ物理學者ナルモノハナク又植物學者ナルモノハナシ而シテ其わんらわげカ一方或ハ他方ニ向フテ發達スルハ多クハ時機ノ然ラシムルモノナリ

らふぃゑるハ手ナクシテ生レタルナル時ニ於テモ亦彼ノ如ク高名ナル畫士トナリタリヤトれっしんぐハ問フタルヿアリ、余輩ハ又問ハントス、若シらふぃゑるカ畫術ノ盛時ニ於テ生活セシ代リニ音樂ノ非常ニ隆盛ナル時ニ於テ生レ音樂ヲ研究スルノ好時機ニ逢フタランニハ拔群ノ音樂者トナリタルナランカ、藝術者ノ大家ハ何時モ大家ナレハ一方ニ向ツテ其技術ノ發達ニ故障アルニ於テハ他ニ之レヲ現出スルノ進路ヲ取ルヘシ、

上ニ述ヘシ諸例ヲ以テ余カ証明セント欲スルモノハ天才ハ練習ニ因リテ特殊ノ腦質カ疊積セルニ原因スルニ非スシテ一般ニ能ク發達セル人智ヨリ生セルモノニシテ云ハヽ次手ニ出來タルモノナリ、

然レ圧此ノ天才ナルモノハ實ニ長キ人世代ニ於テ得ラレタル所ノ人智發達ノ高點ニシテ或ハ練習ノ世々代々遺傳セシ結果ニ非サルヤト余ニ問フモノアレハ余ハ人智ト云フモノハ概シテ云ハヽ生存競爭ニ於テ人類ニハ最モ要用ナル手段即チ武器ニシテ今日モ猶ホ同樣ナリト云フヿヲ記臆スルヿヲ忘レサランヿニ注意セントス、余輩今日ノ如ク人工的ニ屈曲サレ人工的ノ有樣ナル開化人ノ社會ニアリテモ人々ノ智力ノ度ハ概シテ其生死ニ大關係ヲ有スルモノニシテ自然人種ノ社會或ハ半開社會ニアリテハ其關係スル所實ニ莫大ナリ、

茲ニ至リテ余輩ハ又左ニ述ヘシ現象ヲ少クモ其大部ニ於テハ自然淘汰ノ働力ニ依リテ我々ノ助力ヲ求メサルヿヲ得ス而シテ自然淘汰ノ他ニ又一生内ニ外界ノ刺擊ヨリ得

ルモノナリト說明セサルヲ得ス又体形ノ變化モ動物自身ノ意ヲ以テ左右セルモノ丶他ハ同樣ナル說明ヲ要スルモノニシテ多數ノ應化即チ動物ノ卵、其斑紋、其敵ノ蠶食ヲ防ク爲メノ莖、及ヒ其乾干或ハ濕氣ヨリ害ヲ受ケサルカ爲メニ有スル所ノ込入タル構造ノ被囊等ハ全ク動物ノ意思ノ働作ニ無關係ニ出來セルモノニシテ動物カ知ルモ知ラヌモ出來セルモノナリ、余ハ又此ノ點ニ就キ全ク意思ヲ具ヘサル植物ニ就キテハ一言ヲ云ハザルベシ何ントナレハ余ノ專門外ナレハナリ、玆ニ於テハ又此淘汰ハ一生物体內ノ諸部間ニ行ハル丶所ノ競爭(ろを氏)ニ原因スルモノニシテ例之ハ一個ノをじんこ類(例之ハあぷす)ノ卵殼ヲ形成スル細胞內ニアル競爭ノ爲メニ生スルモノニ非ス何トナレハ其產ム所ノ個体ニ取リテハ堅固ナル卵殼ヲ生シテ寒暖ニ堪ユル所ノ卵ヲ生スルモ生セサルモ少シクモ關係ナキモノニシテ其結果即チ殼ノ強弱ニヨリ生存死滅ノ淘汰ハ其次代ノモノニ至リテ始メテ現ハル丶モノナレハナリ、

此等ノ事實ニ就キ余輩ハ淘汰法ノ他ニ之レヲ解明スルノ道ヲ知ラサルヲ以テ若シ之レヲ信セサル片ハ自然ノ法則ニ依リテ解明スルヿヲ止メサル可ラス、又淘汰說ヲ以テ不充分ナリトスルモノモアレモ是又少シクモ理由ナシト思考ス、尤モ近世ニ至リテ又多ク生物界ニ於ケル驚ク可キ應化ノ現象ヲ以テ悉ク皆個体々々ノ淘汰ニ原因スルモノトナス片ハ非常ニ多クノ個体ト非常ニ長キ年月ヲ要スルカ上ニ生物ノ變体中好ミ通リニ外界ニ能ク應化スルノ變化ヲ見ルヿハ實ニ僅少ニシテ數萬ノ個体中彼處此處ニ唯一二アルノミナレハ實ニ以テ考フ可カラサルモノナリトスルモノアリ、

此ノ最後ノ反對論ハ今日迄世上ニ論スル所ノ淘汰ノ思考ニテハ幾分カ理窟アルカ如クニ見ユルモノナリ何ントナレハ實際ニ生存上ニ好都合ナル變化ノ大ナルモノハ餘リ多クアラスメ數代間ニ於テモ現出セサルヿアリ、故ニ若シ種類ノ變化ヲ以テ大步ヲナシテ進ミ且其變化ハ形質上ノモノトシテ思考スルニ於テハ或ハ淘汰說ノ不足ナルヿ

キ食物カ唯タニ馬ノ全體ニ影況ヲ及ホセシノミナラス其生殖細胞ニモ爲メニ大變化ヲ起セシヲ以テ茲ニ於テハ又馬ノ體カ發育スルノ際ニ於テ食物ノ惡キカ爲メニ生殖細胞ノ發達カ不完全トナリタルニ因ルモノニシテ決シテ馬ノ體カ氣候ノ爲メニ變セシヿカ生殖細胞ニ依リテ次代ノ馬ニ遺傳セルニ非ス、

トハ云フモノヽ蝶類ノ氣候上ノ變種ノ如キ例ハ實ニ此類ノ遺傳アリトシテ說明ヲ要スルカ如キモノナリ而シテ此事ニ就キテハ余自カラモ數年前ニ其然ルヘキヿヲ實驗上ヨリ證明シ其解明ニ付キテハ余ハ先年明言セシ通リ氣候ノ變化ヨリ生セシ所ノ變化カ遺傳セルヨリ生セルモノナリト云フノ他ニ今日トナリテモ未タ別ニ解明スルノ仕方ヲ知ラス、然レ圧余ノ實驗モ其後ゑいち、ぅいりあむ、ゑどわるづカ米國產ノ他ノ種類ニ於テ多ク實驗ヲ施サレ余ノ實驗ノ重ナル點ノ正確ナリシヲ證明サレタレ圧未タ余カ今日論スル所ノ點ニ付キ充分ニ硏究シタルニ非ス故ニ此ノ點ニ付キ確定ナル結果ヲ得ント欲スレハ猶ホ新タニ他ノ仕方ニ依リテ實驗ヲ施スヿ必要ナリ而シテ余ハ既ニ此等ノ實驗ヲ始メタリ、

右ニ述ヘシ如キ未タ疑ハシクシテ猶確實ナル硏究ヲ要スルノ例ヲ除ク片ハ余輩ハ充分ニ成長セル生活物ニ外界ノ變化ヨリ變化ヲ生シだるうゐんノぱんじゑねしすノ意味スルカ如ク其生殖細胞ヲ經テ次代ノ生物ヲ變セシムルカ如キハ事實ヲ說明スルニ當リ無用ノ論說ナリト云フヿヲ得ヘシ、然レ圧余ハ此ノ如キ遺傳カ決シテ無シトハ云フニ非スシテ事實ノ多數カ淘汰ニ原因スルモノナリト云フモ又或ハ一二ノ例外アリテ或ハ此等ノ遺傳アルヤモ知ル可カラス、

然リ而シテ此類ノ遺傳說ニ反對シテ充分ニ其存在セサルヿヲ示ス所ノ證ハ只今茲ニ陳述スルヿヲ得ス、然レ圧此レヲ信スルニ於テハ余輩カ未ダ全ク知ラサル所ノ新ナル蒙昧ノ力ヲ借ラサルヿヲ得ス然ルニ非常ニ多クノ事實ハ外界ノ刺擊ノ變化ノ遺傳ノ助力ナシニ說明スルヿヲ得レバナリ、生物體ノ色ノ變化ハ殆ント皆適者ノ生キ殘リタ

部ノ大小ニ變化アルカ如シ、

斯ノ如ク此等諸部ニ個々ノ異同アルヲ以テ自然淘汰ハ此ノ異同アル材料ヲ用ヒテ特別ナル方向ニ向ケ強大ナラシムルヿヲ得ヘシ、

此等ノ事實ヲ思考スル𪜈ハ生物ノ諸部カ好キ勝手ナル生活ノ有樣ニ依リテ變化スルモノニシテ生活物ハ何ニカ柔軟ナル物質塊ノ如ク時ヲ經ルニ於テ自由ナル形狀ニ變シ得ルモノヽ如クナルハ別ニ驚クヘクモ亦考ヘ得ヘカラサル事柄ニモ非ズ、

然レ𪜈此ノ變異ノ原因ハ何處ニアリヤト問ハヽ其既ニ生殖細胞內ニアルヿハ疑ナキ事實ナルヘシ、即ハチ卵細胞ハ最初ニ二分裂球トナラントスルニ當リ其卵ヨリ如何ナル生物カ生スルヤ、其之レヨリ生スル所ノ生物ハ小ナルヤ將タ大ナルヤ、父ニ似ルヤ母ニ似ルヤ等細微ナル點ニ至ル迄既ニ確定セルモノナリ、トハ云フモノヽ生存上外界ノ有樣カ生長スル所ノ生物体ニ影響ヲ及ホスヿハ固ヨリ幾分カアルヘキヿナレ𪜈此レ等ハ皆僅少ノヿニシテ其働作スル所ハ遺傳ニテ與ヘラレ來リシ所ノモノヽ上ニ僅カニ影響ヲ及ホスノミ、例之ハ滋養多キ食物ハ一生物体ヲ強大ニナシ得ルモノナリ然レ𪜈之レ決シテ小人ノ生殖細胞ヨリ大人ヲ生セシムルヿ能ハス汚埃多クシテ不健康ナル生活ハ職工ヲシテ青色ニシテ衰弱ナル形貌ヲ生セシメ愉快ニシテ体動多ク且ツ清良ナル潮風ヲ呼吸スル漁夫ハ強クシテ壯健ナル容貌ヲ呈スル𪜈其父或ハ母或ハ兩親ニ能ク類似スルノ點ハ既ニ生殖細胞內ニアリテ決シテ生活ノ方法ヲ以テ變シ得ルモノニ非ス、

若シ一生物ノ形質等カ悉ク皆生殖細胞ニアル者ナレハ余カ只今申セシ所ノ分量的個体上ノ變異モ其特別ニ委細ナル點ニ於テハ如何ニアレ其大体ハ既ニ生殖細胞內ニ備具サレ居ラサレハナラヌ理由ナリ、何ントナレハ自然淘汰ハ單ニ外形上ヨリ既ニ成長セル生物ノ形質上ニ働作スルカ如ク見ハルヽモノニメ實際ハ生殖細胞內ニ隱レ居ル所ノ此等形質ノあんらわげニ働クモノナレハナリ、生殖細胞內ノあんらわげヨリ出來セル諸機官ハ不絶多少ノ變異

ニ感スヘシト雖𪜈畜養動植物ニ於テ見ルカ如キ非常ナル變異ハ自然ニ於テノ種類ノ變異ニハ全ク望ム可カラサルヿニシテ自然ニ於ケル動植物ノ個体間ニハ形質上ノ變異アルニアラスシテ數量上ノ變異ノミアリ而シテ此數量上ノ變異ハ不絶幾多モアルモノナリ!

余カ只今述ヘタル事ニ就キ一ツノ簡單ナル例ヲ掲クレハ容易ニ其意ヲ解ス可シ、例之ハ玆ニじらふ(麒麟)ノ先祖アリテ其体ノ一部即チ頸カ延長スルヿヲ要スルトキニハ其需要カ割合ニ短時ニ得ラルヽモノナリ何ントナレハ其種類ノ個体内ニハ既ニ種々樣々ノ頸長ヲ有スルモノナルヲ以テ自然淘汰カ働ク所ノモノハ既ニ備ハリ居レハナリ、而シテ就レノ機官ニテモ皆多少變異ノアルモノナレハ何レノモノナリ𪜈生存上ニ必要アルトキハ續ヒテ大ニナリ得ルモノナリ、然レ𪜈一機官ナルモノハ唯全体ニ大ニナルノミニ非スシテ其一部々々ノ部分モ其大小幷ヒニ數量ニ於テアル者ナレハ時機ニ依リ淘汰サレテ或ハ大ニナリ或ハ小ニナリ或ハ增加シ或ハ又減少スルヲ得ルモノナリ、然ルニ形質上ノ同差ハ余ノ說ニ依レハ常ニ唯タ一ツノ全体ノ一部ノ數或ハ大小ニノミ因ルモノナリ例之ハ一個動物カ裸ナルカ如ク現ハルヽモ其實ハ微小ナル毛カ生シ居ルヿアルモノニシテ此等ノ微毛カ長大トナリテ大ヒニ其數ヲ增加スルニ於テ余輩ハ呼ンテ毛皮ト云フヘシ、此レト同シク多ノ蠕蟲及ヒ甲殼類ノ皮膚ハ余輩ノ肉根ニハ全ク無色ナルカ如クニ見ハルヽナレ𪜈顯微鏡ニテ之レヲ驗スルトキハ其細胞中ニ多ク美麗ナル色細胞アルヲ見ルモノニシテ唯タ其數ノ非常ニ增加スルニ於テ余輩ハ始メテ其有色ナルヿヲ知ルヘシ、故ニ此場合ニ於テハ皮膚ノ有色或ハ無色ナルヿハ其之レヲ成立スル所ノ小部分ノ數及ヒ之レヲ見ル處ノ距リニ因ル者ナリ、然レ𪜈又色素ノ始メテ現出スルヿ或ハ綠色ノ變シテ黄色又ハ紅色トナルカ如キハ此等各色ニ特別ナル化學的ニ結合スル酸素おとーむノ位置或ハ數ノ變化ニ因ルモノニシテ例之ハ單細胞生物ノ分子ノ化學的結合ニ變異アルヿハ實ニ色細胞内ニアル色素粒ノ數或ハ一ツノ体部ニアル色細胞ノ數或ハ又其体

形質ハ同一ナルモノニシテ種ノ變遷ニアリテハ生殖原形質幷ヒニ個体ハ次第ニ變異シ簡單ナル單細胞ノ根足蟲ヨリ最高等ノ人類ニ至ル迄常ニ新ニシテ猶複雜セル形狀ヲナスモノナルヿヲ知ルヲ得ヘシ、

余ハ此問題ニ付キ充分ニ說明シ能ハサリシ余ハ又多ク肝要ナル點モ捨テ置カサルヿヲ得サリシヲ以テ此問題ヲ研究スルニ當リ一步々々ニ現出スル所ノ諸疑問ニ付キテハ固ヨリ今日ニ於テ既ニ確カニ答ヘタリト云フヿヲ得ス然レ氏該疑問中ノ最モ肝要ニシテ最モ深キ疑問ハ明白ニ之レヲ引キ出シ之レヲ記載セリト考フ何ントナレハ斯ク爲スニ於テノミ確乎タル解明ヲ望ムヲ得ベキヲ以テナリ、遺傳ノ現象ヲ明カニセンニハ余輩ハ單ニ生殖原形質ノ繼續ニノミ依ルヿヲ得ルモノナレ氏疑點多キ實驗等ニ依ラスシテ確實ニ集蒐サレ正シク順序ヲ付ケラレタル事實ヲ以テ生殖原形質ノ繼續ハ何幾程成長セル生物体上ニ外界ノ刺擊ニテ受ケタル形質ノ變異カ其生殖物ニ遺傳スルヤヲ明カニセスンハアラサルナリ、然リ而シテ此ノ如キ遺傳ハ今日迄ハ事實上ニ於テ證據ノナキノミナラス又之レヲ信セサルヲ得サルノ理由モナシ、

（終リ）

# 東京動物學會記事

●例會　七、八兩月ハ例ニ因テ例會ヲ開カス

●會員彙報

入會者

理科大學簡易科卒業生　中西準太郎君

第一高等中學校醫學部　山田小太郎君

退會者　矢田部良吉君

●寄贈交換書目　去六、七、八月中本會ニ領收シタルモノ左ノ如シ

地理歷史敎授用世界全圖　理學士　金田楢太郎

東京醫學雜誌第五卷十一、十二、十三、十四、十五、十六號　東京醫學會

植物學雜誌第五卷第五十二、三、四號　植物學會

大日本農會報告第百十九、二十、一號　大日本農會

攝農會雜誌第廿三、四號　攝農會

アルト同シクあんらわげ自カラモ變異アルモノナレハ其淘汰ニ因リテ發達ヲ要スルトキハ發達シ得ルモノニシテ此あんらわげヨリ生スル所ノ機官モ從テ發達スル者ナリ、右ノ如ク世代ヲ續ケテ遺傳スル所ノ變異ヲ〆皆生殖物ノ分量的ノ變異ヨリ來ルモノトナストキハ此生殖物ノ變異ハ何處ヨリ來ルヤト問ハサル可ラス、此ノ疑問ニハ余ハ別ニ深ク入ラサルヘシ何トナレハ余ハ既ニ前ニ一度此點ニ就キ述ヘシヿアリタレハナリ而〆余ノ考ニテハ此變異ノ本原ハ生殖物カ個體發生ヲ始ムル前ニ其外界ヨリ受クル所ノ刺擊ニヨルモノナレハ結極其系統上ノ發生ニ大關係ヲ有スル所ノ成長セル動物ニ及ス所ノ外界ノ刺擊ニ因ル者ナリ何ントナレハ生殖細胞ハ成長セル動物ノ體內ニアリテ之レニ働ク所ノ外界ノ刺擊ハ其之レヲ具フル所ノ生長セル動物體ノ有樣ニヨルモノナレハナリ、例之ハ成長セル動物ヲシテ多ク滋養物ヲ取ラシ〆ハ其生殖細胞モ亦能ク滋養分ヲ受クルヘク生長セル動物ヲシテ少ナク滋養物ヲ取ラシ〆ハ其生殖細胞ハ又弱小ナルヘシ而シテ前ニモ既ニ述ヘシ如ク外界ノ刺擊カ或ハ又生殖細胞全體ニ働カスシテ其特別ナル部分ニノミ働クヤモ實ニ考ヒ得ヘキヿナリ、斯クノ如ク成長セル生物カ外界ノ刺擊ノ爲〆ニ變シ其變異カ其生殖細胞ニ及スト云フモ決シテ前代ノ生物ニ生シタル變異カ次代ノ生物體ニ至リテ前代ニ於ケルト同時同處ニ生スルト思フ可カラス、一生物ノ總テノ遺傳質ノ遺傳ナル者ハ余輩ハ唯タ生殖細胞ノ原形質ノ繼續ニ因リテノミ出來スルヿヲ知ル、而シテ若シ此地球上ニ現出セル最初ノ生物ヨリ余輩カ信スル如ク生殖細胞ノ原形質カ不絕繼續シ居リタルモノニシテ若シ又生殖細胞ノ原形質カ体軀細胞ノ原形質ト離別シテ存在シ体軀ニ起ル所ノ變異カ常ニ先ツ生殖細胞ノ變異ヨリ生スルモノナレハ余輩ハ遺傳ノ現象ヲ幾分カ解明シ得ル者ナリ何ントナレハ余輩ハ遺傳ヲ以テ長大ニナルヿノ現象ニ迄戾リ見ルヲ得ヘシ即チ余輩ハ明カニ生殖ヲ以テ個体ノ增大シテ其生存シ得ルノ量ヲ越タルモノト考フルヿヲ得ヘク個体ノ連繼ト種類ノ連繼トノ區別ハ前者ニ在リテハ生殖細胞ノ原

動物學雜誌第參拾六號
明治廿四年十月十五日發兌

## ●日光產さんせうをノ卵並ニ產卵期

池田作次郎

回顧スレバ十九年ノ事ニテアリタル也其年ノ五月下旬余ハ越後ヨリ八十里越シテ福島縣下會津國南會津郡叶津ニ出テ只見ヲ經テ只見川岸ヲ泝洄リ遂ニ山口、田島ヲ過ギ下野日光ニ到リ昆虫採集旁々あまがいる及ビさんせうをノ卵ヲ探索セシニ温泉場ヨリ十町計リ入リタル所ノたてがうみ湖中並ニ中宮祠湖中ニ於テ圖ニ示ス如キ卵ヲ夥多シク發見シタリ尤モたてがうみニテハ却テ寒カル可キニ卵ノ樣子ヲ見ルニ產卵後凡ソ二週間位經タリケン子虫既ニ成長シ中ニハ体長四五分位トナリタル者アリ能ク々々見ルニ其形狀宛モいもりノ子虫ニ髣髴ス故ニ是レ必ズさんせうをノ卵ナル可シト思ヒ心甚ダ打チ悅ビ急ギ勢ソデ桶ニ入レ歸京ノ途ニ登リタルハ實ニ其月二十九日也然レ𪜈少シク云々ノ事件出來日光近ク持チ來リテ其桶ヲ途上ニ轉覆サセケレバ不得已再ビ中宮祠マデ立チ戻リ翌三十日朝疾ク早ク中宮祠湖水ノ磯邊ヲ徘徊シテ稍ヤク數多ノ卵ヲ見附ケタリ其水ノ冷カサ仲々湯本ノたてがうみノ比ニ非ズ故ニ中ニハ尙ホ產ミ立テノ者ニシテ未ダ分裂ヲ始メザル者アリタリ特ニ愉快ニ感ジタルハ此卵ノ多ク水中ニ浮沈シ居ル石ノ下ニあかがへる及ビ稍大形ナルさんせうをヲ採集シタル內あかがへるニシテ二疋重リ相ヒタル者ノ其後脚近邊ニ白キ粘質ヲ附着シ居タルヲ發見セシコト是也其樣宛モ方リニ產卵シツヽアル者ノ如ク見レバ是レ必ズあかがへるノ卵ニシテ昨日マデさんせうをノ卵ニテ之レアル乎ト思ヒタルノ非ヲ悟リ此ニ於テ世ノ中ハ何ガ仕合ニナル哉モ知レヌ者也ト心密ニ悅ビケリ去リナガラ同シクあかがへるニシテ東京邊ニ在ルあかがへるトハ產卵ノ摸樣並ニ卵群ノ形狀少シク異ナリ特ニ其子虫ハ東京邊ノいもりノ幼虫ニ甚ダ相似居ルハ果シテ如

| | |
|---|---|
| 牧畜雜誌第五十八、九、六十、一、二、三號 | 牧畜雜誌社 |
| 東洋學藝雜誌第百十七號 | 東洋學藝社 |
| 日本蠶業雜誌第四十、一號 | 日本蠶業雜誌社 |
| 大日本水產會報告第百十、一、二號 | 大日本水產會 |
| 仝會會員姓名錄　號外一、 | 仝　會 |
| 北水協會報告第六十四、五號 | 北水協會 |
| 北海之殖產第十、一、二、三號 | 勸農協會 |
| 成醫會月報第百十三、四號 | 成醫會 |
| 日本植物志圖篇第一卷九、十集 | 牧野富太郎 |
| 日本園藝會雜誌第二十五、六、七號 | 日本園藝會 |
| 藥劑誌第二十七號 | 東京藥劑師會 |
| 北海道移住問答一部 | 北海道廳 |

シク大ナル方ナラン)色ハ帶綠泥褐色ニシテ卵黃極(Vegetative pole)ハひき卵ノ如ク白色ナラズ凡テノ狀況いもりノ卵ニ近似ス而シ各粒必ズ球狀ニシテ半透明ナル粘質物ニ圍繞サレ其中心ニ位スレバ卵ト卵トハ決シテ互ニ相觸レズ一卵群中少キハ三十個位多キハ五六十個ノ卵粒ヲ有ス而シテ親動物ノ卵ヲ產附スルハ日中ナルヤ夜間ナルヤ未タ之ヲ明ニセザレモ多分夜間ナル可シト思ハル

## ●うみがめノ產卵ニ付キ續報

箕作佳吉

前號ニ於テうみがめノ產卵ニ付キ報道シタル後尙ホ左ノ事實ヲ得タリ

うみがめガ產卵スル時ノ景況ニ付キ遠州相良秋野要藏氏ヨリ次ノ如ク報知セラレタリ

うみがめ產卵之際既ニ產落ヲ始メタル以上ハ何程多クノ人之ニ近ツクモ決シテ動クヿナシ或人ハ兩手ヲ開キ其卵五六個ヲ掌上ニ受ケタルヿアリ又卵ハ一呼ニ六七個ヅヽヲ落シ暫ク休ミ又甚シクイキミテ六七個ヅヽヲ產ス其時かめハ兩眼ヨリ小豆大ノ淚ヲホロ〱ト落ス如此シテ百個以上ヲ產出スルナリ

右ハ御前崎村字下岬下村勝次郎ナル者ノ實地目擊セシ談話中ノ一節ナリ

之ニヨリテ見レバ前號ニ於テ余ガ疑ヲ存シ置キタル點ハ大ニ明瞭トナレリ

(孚化日數) 余ガ東京ニ携ヘ歸リタル卵ハ先月下旬ヨリ本月上旬ニカケ數個孚化シタリ其日數ハ產卵ノ時ヨリ六十七日乃至七十五日ヲ經過ナシ居レリ余ガ遠州相良ニ殘シ置キタルモノハ六十二日乃至六十七日ニテ孚化セリ今尙ホ孚化セザルモノ余ノ手ニアリ又在靜岡小笠原利孝氏ヨリ左ノ如キ報道アリ

七月廿八日產卵ノ「ウミガメ」卵子ヲ大里村下島(當地ヲ距ル壹里)ヨリ廿九日夕持參リ翌三十日午前八時頃產卵後大凡五十六七時間ヲ經過シタリ)砂中ニ埋メ置候處去ル(九月)廿四日夕(產卵ヨリ五十九日目)一頭孚



何アル乎或ハ東京邊ノ者ト種類ヲ異ニセル故乎（尤モ親蛙ハ其形狀ニ於テ少シク異ナル點ナキニ非ズ）ト未ダ其疑ヲ解クニ及ハズシテ本年ニ至リ春四月廿五日再ビ日光行キヲ思ヒ立チ其日中宮祠ニ泊翌廿六日ノ朝中宮祠湖中ヲ伺ヒタレ𪜈尙氣候寒ク先年ノ如キ卵更ニ無シ依テ湯本ニ到リ廿七日たてがうみニ行キ探索セシニ卵群數個ヲ得タリ尙產卵後幾日モ經ザル者ト見ヘ多クハ分裂ノ四個細胞トナリ居タリ依テ之ヲ東京ニ持チ歸リ爾後飼育シタルニ氣候水温ノ差異ニ依リ發育甚ダ不充分ニテ爾來死セシ者不少レ𪜈數疋ハ稍ヤク前後兩肢ヲ具備スル迄ニ至レリ能ク之ヲ見ルニ全クわかゞへるニテハ無クさんせうをノ卵ニテ之レアリタリさんせうをモ一ナラズ今岡田氏ノ總目錄ニ從ヘバ日光ニ產スル者二種ヲ擧グ（Hynobius nebulosus, Schleg; H. nævius schleg）其內何レナルカ未ダ老成期ニ達セザレバ詳カナラザレ𪜈多分後者ナル可シト思ワル

今此處ニ卵群ノ摸樣ヲ序センニ其形宛モあけび果ノ如ク水中ニ横ハル石又ハ樹枝ノ表面ニ附着シテ常ニ深カラザル所ニ在リ產附後未ダ日經ザル者ハ形小サク色純白ナレ𪜈日經ルニ從ヒ漸々吸水シテ粘質物ハ透明トナリ且ツ其容積ヲ增大ス卵粒ハ大サひきがへるノ卵ノ如ク（或ハ少

ふるまひ見まくほりせど夕方までは姿もみせず蠅一ッを大鯨に見立てゝ蟻王の御幸を煩はせしかとそゞ同心協力も珍らしからねば見も果てず蚊の小便の觀察も第一我身が痒ければ唯一たびにて我を折りぬ詮方なさのうたゝねもおやよくの蟬の聲にゆりをこされて ほと〳〵困じはてたるまゝにふといふかしく思ひつきしは彼の蟬なり鳴くは妻こふさを鹿のたぐひか扨はをしいほしいとなくうゑ人の仲間がそれ見きはめんもれもしろからんいでや今より蟬の觀察をとげんずと名和ぬし氣取にて庭下駄引づりそめたるはこゝにきてより丁度三日目ゟしましさに松さらはれやと思ふ比によろありける

實地觀察

種類　全身黒色　羽茶褐色　腹の外部青白粉を散せし如く白し方言之を油蟬といふなるへし雌は雄より肥たり外形の他の特徴は未た十分に知らす

所在　主として樹林中木の幹枝にあれとも一定せす時としては人家の物干竿軒柱などに來鳴くことあり

常習　かと思はるゝものを擧くれは左の如し

一鳴く聲は鈴の如くクリン〳〵といふか如し此時最朗々ときこゆ然れ共始と終はクリ〳〵といふか如し恰も鈴を握りて振るに似たり又第一の鳴と第二の鳴との間はギーギッツクリギーキクリと云ふか如し

一適宜なる大樹には長く止り鳴くと雖とも人家近き所の樹木又は杭竿なとに來る時は長く居ること稀にて大底二度つゞけ鳴けば直に飛び去るなり

一樹木繁茂して風すき惡き所よりは風の能く通ふ所を好むねとし是れ其始羽化せし時節風すきのよき所（多分水に近き所）より出しと二つには雌も亦多く風すきよき邊にあるが爲ならんかいかん

一松杉樫椎なとよりは柳榎なとに多し是亦前項の理由によるものか如何

一林中に於ける東方の樹木よりは西方の樹木に多し是亦前同理にて說明し得へきか如し

化廿五日夕三頭孚化廿六日夕三頭孚化本日（九月廿七日）正午二頭孚化都合九頭孚化致シ何レモ健全ニ生育致居候云々

右ノ内奇ナルヿハ全腹ノ卵ガ孚化スルニモ三四日甚シキハ殆ント十日間ノ差アルヿナリ若シ卵ヲ親がめノ産ミタル儘ニ其處ニ存シ置クモ此ノ如キノ差アルモノナルヤ余ハ之ヲ信ズル能ハズ如何トナレハ卵ヲ採掘シテ桶籠等ニ入レ置ク時ハ大陽ノ熱ノ當リ加減等ハ個々ノ卵ニヨリ大ニ違フト雖モ自然ニ産ミ落シタル處ニテハ砂中深クニ埋メアリテ大抵皆ナ全シ有様ニ當リ孚化日數モ全シク殆ント同時ニ皆ナ孚化スルモノナラント思フ故ナリ龜鼈ニテハ一腹ノ卵ハ全時ニ孚化スルヲ通常トス」前號ニモ述べシ如ク孚化日數ハ六十日前後トシテ大ナル誤ナキガ如シ」又桶籠等ニテ本年孚化セシメタル卵ハ多ク腐敗セリ是ハ種々ノ原因ニヨルべシ少シク研究スレバ卵ヲ移スモ腐敗セシメズ反リテ自然ノ産ミ場所ニ於ケルヨリモ健全ニ孚化セシムルヿハ難キニアラザルべシト信ズ

余ノ手ニテ孚化シタル幼がめハ淡水或ハ少シク鹽ヲ溶解シタル水中ニ飼養シ始メハ健全ナリシガ一週間程ニシテ不幸ニモさぷろれぐにやノ爲ニ侵サレ皆斃レタリ」魚籠ノ中ニ入レ海中ニ投シ置カバ養成スルヲ得べシトハ兼テヨリ余ノ信ズル處ナリ

## ●蟬に付きて　岐阜　田中勝之丞

今年八月事ありて安八郡大藪村に二週間ばかり滯留するうち日々同村なる渡邊時彌氏方の離れ坐敷に起臥したり炎暑甚しき折から午後はいつも無事にて此比打つゝく鬱陶しさにいとゞ慰めかねては訪ふ人なき日のつれ〴〵さ云はん方なし書よむ心はとうく重き頭にたゆみがちなれどつくねんと獨り坐せんもさすがに口惜くて何をがな友とすべきものをと打見めぐらしたる庭は夏木立の蔭いと青く秋草の花は秋をもまたでいろ〳〵に咲きいてたれどものいはねば言葉がたきになるへくもあらず動かねば見る目さやかなる心地もせず蜘蛛の

其他尚色々觀たる所もありしやに思へと忘れたり然し其重なる點は上に漏さゝりし筈なり

羽化の時の有様及び生卵と死亡等のことは見ず故ゝ知らず

一つ書き落したり人家の軒又は家根うらなどには雄よりも雌の方多く來ることとし其理由は考へ難し

因云余日々蟬のこゑに聞きほれて樹下にたゞずみ仰ぎ見るさまいかにもをろかげに見へさるゝや或人（田紳士）來り見てあなたは蟬が左程珍らしく候やとまじめに問へり一笑すへし

## ●鳥雜記

飯島魁

### ○本邦產ノ Passeridæ（前號ヨリ續ク）

#### Erithacus こまどり屬

十一）E. akahige, (T.)　こまどり

此種ノ命名者ハこまどりトあかひげノ和名ヲ取違ヒこまどりヲ E. akahige ト爲シタリ、今更取替ヘルヿハ出來ザルヿ故イツマデモ此種名ヲ固守セザル可ラズ、鳴聲ノ駒ノイナヽクニ似タル所アルガ故ニこまノ和名アルナリ、籠鳥中最モ上品ナルモノヽ一ニシテ東京ニテハ並品ニテ一圓五十錢位ヒ價スルモノナリ

雄ハ顏部及ビ喉部赤茶色ナリ、尾モ又畧ボ同色ナリ、頭上ヨリ脊上ハ少シク赤茶ヲ帶ビタル橄欖色ナリ、胸ハ灰黑ニテ腹部白シ」雌ニテハ頭部ノ茶色々相ワルシ又喉ノ茶色ハ胸ノ方ニ漸々ト消ヘ雄ニ於ケルガ如ク喉ノ赤茶ト胸ノ灰黑トノ境界分明ナラズ、雄ト雖モ幼キ片ハ雌ノ羽毛ナリ」翼ノ長サ二寸一分乃至二寸三分、尾羽ノ長サ一寸五分許

此鳥ハ北海道ニモ見ルヤ未ダ確乎知ル能ハズ、津輕海峽以南ノ地ニハ餘リ稀レナル鳥ニ非ズ、夏ハ深山ニ在リテ繁殖シ冬ハ平原ニ出ヅ、曾テ冬月東京ニテ捕ラヘタルヿアリ、伊豆七島及ビ長崎ニテモ採集シタル人アリ、北支那ニモ四時居ル鳥ナリ」日光でま、吉野でまナド稱ナヘ所々ヨリ籠鳥トシテ都會ヘ持來ル、余ハ昨夏中信州安曇

一雄の一疋止まり（鳴かずに）居る樹に他の雄來り鳴く時ハ前の雄奇異（恰も捕へたる時の聲の如し）なる聲を發して之を妨くるが如きことしバ〳〵なり但し是ハ其聲の最鮮明朗々たる時に限るもの丶如し鳴きの前後又ハ其中間に於ける時に妨をなすことを未聽

一默して雄の止り居る近邊をば他の蟬（雌雄不知）の飛び過くる時は聲を發して之を呼ふか如し數間を隔るも能く友を認め得

一雄の聲を聽けバ雌飛び來りて其傍に止まる然れ共雄ハ敢て動かず雌の來り接するを待つもの丶如し

一雌は雄に近くに多く後もどりして後なる雄と相ならぶ然る時は雄は徐々に雌の背に上る是迄は常にギー、ギツクリ、ギー、ギツクリト鳴きつゞくれども雌の背に上りし後は無言なり

一若し雌始より雄の後にあれは先づ進みて雄の傍を過ぎ而後更に後もどりすること前述の如し

一雄若し來りて偶然に雌の傍に止るときは暫く鳴く間に雌より來り接することあり若し雌より來り接せさる時ハ雄ハ其足にて樹皮をたゝきつゝ鳴く（是は眞の鳴にあらず所謂キーキツクりにて眞の鳴きの間に於る鳴きなり）而る時は雌徐々に近き進むを見る

一交尾の時間も一定せさるが如し余か觀たる所にて最短きハ凡そ三分最も長きハ二十分餘の後喫烟の爲め室に歸り又二十分許を經さる後行き見しに尙其まゝなりき

一蟷螂の襲擊を受くること數々なれども來り打つまてハ知らさるが如く打たれて始めて驚き叫びて逃ぐ敵余程大ならされば擒にせらるゝこと稀なり

一手近に來りて止るとき平手にて急に之を掩はんとせしに常に捕ふる能はず若し背後より指をのべて其羽を抑ゆれば頗る捕へ易し

一同一の樹に一時間以上つゞけ鳴くことあり或は一度鳴きて原因なしに（外のより）鳴き止むことあり

一前に述へたる點に就て余は蟬の鳴くも單に雌を呼ふ爲の手段のみにあらす幾分か本性となれるものならんかと考へたり

黒ク縁白シ（彼種ニテハ一様ニ灰色ナリ）、又雌ニ在テハ喉胸ノ羽ハ白メキタル色ニテ縁ノミ灰色ナリ（彼種ニテハ此部一面ニ灰褐色ナリ）、而シテ下尾筒ハ白色ナリ（彼種ニテハ灰色ナリ）、

十四）E. calliope, (Pall.)　のごま

のごとりトモ云フ」雌雄共ニ上部ハ一様ニうぐひす茶ニシテ淡色ノ眉アリ、腹ハ白ク胸、腹側及ビ下尾筒ハ淡茶色ヲ帯ベリ」雄ニテハ喉ハ照リアル美シキ朱色ニシテ其兩側ニ黒條アリ、此黒條ノ上ハ白ク而シテ眼前及ビ眼下ハ黒色ナリ」雌ニテハ喉ハ白メキタル色ニテ眼前及ビ眼下ハ眞黒ナラズ一般ニうぐひすノ如キ質朴ナル色取リナリ」翼長二寸五六分、尾ノ長サ二寸一分許」鳴聲頗ル良クシテ貴重ノ籠鳥ナリ

此種ハしべりあ中西ハうらる山脈ヨリ東ハかむさつかニ至ルマデノ地ニ於テ生殖シ、吾ガ千島及ビ北海道ニハ夏月來ルト云ヘリ、東京近在ヘハ冬來ルコアルガ如シ又曾テ長崎並ニ琉球ニテ獲タル人アリ、冬月ハ南支那、ふひりぴーん群島、びるま、印度等ノ地ニ至ルマデ渡リ行ク

十五）E. cyaneus, (Pall.)　小るり

雄ハ額ヨリ尾根ニ至ルマデ紺青色、翼ハ黒茶色、尾ハ黒色但シ其一部ハ紺ヲ帯ブ、下部ハ喉ヨリ下尾筒ニ至ルマデ白色、而シテ眼前及ビ頸側ハ黒シ」雌ハ上部うぐひす茶ニシテ上尾筒ハ紺ヲ帯ブ、下面ハ一体ニ淡茶色ナリ」翼長二寸五六分、尾ハ一寸六分許

此種ハ本邦深山ニテ生殖ス、他ニモ産地アルベシ、北海道及ビしべりあ（黒龍江地方ヨリばいかる湖ノ邊ニ至ルマデ）ヘハ夏月渡リ行キ冬月ハ支那、びるま、印度北部、まれい半島及ビぼるねを等ニテ超過ス、是又籠鳥トシテ愛スベキモノナリ

**Monticola.**　いそひよ屬

十六）M. cyanus solitaria, (Müll.)　いそひよどり

一名ヲいれつぐみト云フ、純粋ノ M. cyanus ハ歐州南部ヨリ中央亞細亞ヲ通ジ支那ニ至ルマデ見ル所ニシテ其雄ノ腹ニハ栗赤色ナリ他ノ部ト共ニ青色ナレド其一亞種ト

郡ノ山中所々ニテ此鳥ノ聲ヲ聞ケリ、信州ト飛州ノ界ナル野麥峠邊リニハ殊ニ多クシテ深林中其鳴聲ノ絕ユルヿナカリシ

十二) E. namiyei, (Stejn.)　本島あかひげ

次種(即チ尋常ノあかひげ)ニ甚ダ能ク似タル鳥ニシテ上部ハ照リノアル濃キ赤茶色ナリ、雄ハ尋常あかひげノ如ク額及ビ喉ハ眞黑而シテ腹白シ、左レド之レト異ナリテ腋羽及ビ腹側ハ(眞黑ナラズシテ)灰色ナリ、雌ハ尋常あかひげノ雌ニ彷彿タルモノナレド胸ハ灰茶褐色ナリト云フ、尙ホ次種ノ條ヲ比照シテ識別スベシ

此鳥ハ曾テ波江元吉氏琉球沖繩島名護ケ岳ニテ採集ス、其因ニヨリテ Namiyei ノ種名アリ、左レド本邦ノ籠鳥家ニハ古クヨリ知レ居リタルモノヽ如ク、其琉球諸島中沖繩島ヨリ持チ來ルガ故ニ本島ト名ヅクト或書ニ見ヘタリ、此種ノ標品ハ甚ダ稀レナルガ故ニ在沖繩ノ好鳥家ハ宜シク其採集ヲ心掛ケラレンヿヲ望ム

十三) E. komadori, (T.)　あかひげ

初メ赤イ毛ノ鳥ト名狀シタルガ終ニあかひげト轉ジ名稱ト成リタルニテ赤鬚ニハ非ズ、又テムミンク氏ハ誤テコマドリノ種名ヲ此ニ附シタリ

雄ハ上部頂ヨリ尾端ニ至ルマデ照リアル濃キ赤茶色ニシテ額及ビ喉ハ腋羽並ニ腹側ト共ニ眞黑ナリ、而シテ腹ハ白シ」雌ハ上部ノ色雄ト同ジ、但シ額ハ黑カラズシテ矢張リ赤茶色ナリ、喉モ黑カラズシテ白メキタル色ナリ、胸ノ羽モ白メキタルガ各々灰色ニテ緣取ラレアリテ此部爲メニ鱗狀ヲ呈ス、腋羽及ビ腹側モ亦眞黑ヲ欠キ灰褐色ナリ」凡ソこまどりノ大サニテ翼長二寸三四分許

此種モ亦琉球諸島ノ產ナリ、肥前五島ニモ居ルト云フ人アレド確カナラズ、本邦產籠鳥中最上品ノ一ニシテ、こまどりヨリモ鳴音高クツヤアリ從テ價モ一層貴シ

本種ハ前ニモ述ベタル如ク前種ニ殆ンド彷彿タルモノナレド其別種ナルヿ明カナリ、即チ此種ニテハ雄ノ腹側ハ黑ク(彼種ニテハ灰色ナリ)、翼裏ノ小羽ハ黑クシテ白緣アリ(彼種ニテハ灰色ニテ淡茶色ノ緣アリ)、腋羽ハ中央

大サつぐみヨリモ稍々小サク、頭、頸及ビ胸ハ灰ジミタル色ニテ喉ニハ白メキタル色ト灰黒ノ斑紋アリ、脊ノ色つぐみニ似テ翼ノ中大羽ハ末端白シ、尾先キハ茶ト白ナリ、下部腹ノ中央ハ灰茶、腹側ハ栗茶色ナリ、雌雄共ニ羽色畧ボ同シ、翼長三寸二分許、尾羽二寸許

北海道ニ此鳥アルヤ未ダ知ラズ、本島諸高山ニ四時棲息ス、富士、御嶽、乘鞍等ニテ採集セリ、曾テ乘鞍岳ニテ此鳥ヲ觀察シタルニ頂上ニ近キ岩石多キ所ニ（雷鳥ノ居ル所）ニ普通ニシテ巣ヲ地上岩ノ下ナドニ營ミ其鳴聲ひばりニ似タル所アリ

十九）A. rubidus, (T. &S.)　かやくぐり

大サゞいトモ云フ、凡ソほゝじろノ大サニシテ上部頭、頸及ビ尾ハ黒茶色、脊上ハ赤茶ト黒茶ノ斑ナリ、下面ハ一体ニ灰茶色、但シモヽノ邊赤茶味ヲ帶ブ、翼長二寸三分許、尾羽一寸八分許

是ハ本邦ニ固有ナル一種ナリ、多分全國ニ在ルナラン、常ニ山中ニ棲ミ、夏月富士山八千尺ノ所ニマデ登ル、籠鳥家之ヲ愛弄ス

## Pratincola.　のびたき屬

二十）P. maura, (Pall.)　のびたき

籠鳥家ノこわがりト稱スルモノ多分是ナルベシ、色合わとりニ似タルガ嘴ノ根基幅廣クひたき類ノ嘴ニシテ鬚ノ能ク發生シアルヲ以テ直チニ識別シ得ベシ、其羽色ハ老幼、雌雄、季節ニヨリテ大ニ異ナリテ黒ミ多キ𪜈アリ又茶ミ多キコトアリ、喉ハ眞黒ノコトアリ又淡茶或ハ白ジミタルコトアリ、上尾筒モ白キコトアリ又茶色ナルコトアリ、左レドイツデモ肩ハ純白而シテ腹ハ淡茶色ナルヲ以テ此種ヲ見定ムルコト又難事ナラズ、小形ノ鳥ニシテ翼長二寸三分許、尾羽一寸六七分

此種ハ歐洲東部ヨリ玄べりあヲ通ジかむさつか日本ニ至ル地ニテ生殖シ、秋ハ南支那びるま、印度等ニ渡リテ超冬ス、曾テ本邦千島ニテモ長崎ニテモ富士ニテモ信州ニテモ獲タリ、余ハ昨夏七月三十一日ニ信州ト飛州ノ境ナル野麥峠ニ近キ所ニテ草原ニ數十羽ノ群ニ出會セリ、小

看做スベキ C. cyanus solitaria（即チ我ガいそひよどり）ノ雄ニテハ腹部必ズ栗赤色ヲ呈ス、支那ニハ彼ト是トノ中間ナル色取ノモノアリト云フ

いそひよどりハ凡ソつぐみ大ノ鳥ニテ翼長四寸乃至四寸三分位、尾ノ長サ二寸八九分ナリ」雄ハ上部頭ヨリ上尾筒ニ至ルマデ汚キ青色ニテ脊上ニ少シ許リノ黑白斑點アリ、翼ノ大羽及ビ尾羽ハ黑シ」下部喉ヨリ胸ニ至マデハ上部ト同色、以下下尾筒ニ至マデハ栗赤色ニテ僅少ノ黑白斑點ヲ雜ユ」雌ハ純粹種ノモノト同一ノ色取リニテ上部ハ汚キ灰黑ニテ極ク微ニ青ヲ帶ビ脊上ニハ少シ許ノ三日月形ノ黑斑點アリ、翼ノ大羽及ビ尾羽ハ略ボ雄ニ同ジ而シテ下部ハ喉ヨリ尾根ニ至ルマデ汚白ニシテ密ニ黑メキタルノ三日月形斑紋アルガ故ニ鱗形ヲ爲セリ

此亞種ハ本邦、東しべりあノ烏蘇利地方、臺灣等ニテ生殖シ冬ハ支那ノ東南部、まれい諸島等ニ行ク、本邦ニハ冬ト雖モ殘リ居ルモノ尠カラズ主トシテ海濱ノ岩多キ所ニ在リ、曾テ之ヲ北海道、銚子、三崎、長崎、無人島、琉球、對島等ニテ採集セリ

## Cinclus.　　かはがらす屬

十七）C. pallasi, T.　　かはがらす

かはがらすハ總身黑メキタル色ニテ他ノ色ヲ雜ヘズ、大サ殆ンドつぐみノ如シト雖モ翼及ビ尾ハ著シク短シ、即チ翼長三寸許、尾長一寸九分許

此種ノ播布ハ北ハかむさつか、ありうと諸島ヨリ西ハばいかる湖、南ハ中央支那ニ至ル、本邦ニハ四時深山ノ溪流ニ棲ミ能ク水中ニ沒入シ食ヲ求ム、北海道ニテモ亦長崎ニテモ之ヲ採集シタル人アリ、其他日光、秩父、富士、天城山木、曾等ニ此種ヲ產スルヲ知ル

## Accentor.　　かやくぐり屬

十八）A. alpinus erythropygius, (Swinh.)　いはひばり

純粹ノ A. alpinus ハ歐州ノ產ナルガ玆ニ本邦、東しべりあ及ビ北支那ニ產スルモノハ少シク異ナリテ其一亞種ト看做スベク之ヲ A. alpinus erythropygius トハ云フナリ、是レ本邦ノいはひばり一名いはすゞめ一名くらどりナリ

はヽじろヨリモ少シク大ナル鳥ニテ、雄ハ上部一体ニるり色ニテ美麗ナリ、面側、喉及ビ胸ハ眞黒ニシテ腹ハ純白ナリ」雌ハじみナル色ニテ上部一体ニ鶯茶、而シテ尾ハ赤茶ヲ帶ブ、下部ハ一体ニ白メキタル色ニテ胸ノ邊淡鶯茶ヲ帶ベリ」翼長二寸八分乃至三寸一分、尾羽二寸許

鳴聲好キ鳥ニテ上品ナル籠鳥ナリ、本邦諸部ノ深山ニ夏中在リテ生殖ス、滿州ノ烏蘇利河口邊ニテモ營巢ス、秋支那ノ沿岸ヲ渡リ行キぼるねをニ至リテ超冬ス

### 小つばめ屬
### Siphia.

廿四）S. luteola (Pall.)　こつばめ

むぎまきトモ云ヒはヽじろヨリハ稍ゝ小ナル鳥ナリ、雄ハ上部一体ニ灰黑、白キ眼條アリ、肩ニモ白キ所アリ、又尾羽ノ根基白シ、喉及ビ胸ハ茶色ニシテ腹ノ方ニ漸々白メキタル色トナル」雌ニテハ上部一体ニ鶯茶ニシテ眼邊及ビ肩ニ白キ所ナシ(?)、但シ尾羽ノ根基ハ雄ト同ク白シ、其他下部ノ色ハ雄ニ等シ」翼長二寸五分許、尾羽一寸七分許

是ハ亥べりあ東部（ばいかる湖ヨリ黑龍江地方）ニテ生殖シ秋ニ及ビ支那、臺灣ヲ經過シぼるねをニ至リテ超冬ス、日本ヘハ其移行ノ時ニ當リ偶然渡リ來ルモノナルガ如シ

### きびたき屬
### Xanthopygia.

廿五）X. narcissina, (T.)　きびたき

きびたきハ雄ノ名ニテ雌ハばかびたき（或ハめだいびたき？）ト云フ」雄ニテハ上部眞黑、但シ兩肩ハ白ク、腰部ハ黄ナリ、黄色ノ眉アリ、喉胸ハ黄ニテ腹ノ方ニ白ク成ル」雌ハ一体ニ鶯茶ニテ下部ハ色淡シ、眉ナク又肩ニ白キ所ナク、腰ハ黄ナラズ、此邊ハ明ニ綠ヲ帶ビ而シテ尾ハ赤茶ヲ帶ブルガ故ニ類似ノ種ト直チニ識別スルヲ得」翼長二寸四五分、尾羽一寸五六分許

本邦山中ニテ生殖シ冬月平原ニ出ヅ、北海道ニハ夏多ク居レド冬ハ居ラズト云フ、此種ハ又南支那ニテモ生殖スト知ラル、夏月本邦ノ深山ニ少カラズ其鳴聲頗ル好シ

玆ニ色取リ全クきびたきニシテ眉ノ白キ一種アリ之レヲX. tricolor ト云ヒ朝鮮及ビ支那ニ在リ、吾國（殊ニ琉球）

木ノ頂上ニトマリ之ヲ追立ツレバ、ギー〱ト鳴キナガラヒラ〱飛ビ行キ時ニ空中一ケ所ニ舞ヒ居リテ進行セザルヲ見タリ

**Ruticilla.**　じやうびたき屬

廿一）R. aurorea, (Gm.)　じやうびたき

又てりびたきト云フ、是ハ雄ノ名稱ニテ、雌ハばゝびたき或ハちやびたきト云フ（きびたき〔二十五〕ノ雌ヲモばかびたきト云フ人アリ）、雄ニテハ頭上及ビ後頸ハ灰メキタル色、脊ハ黒、腰ヨリ尾ハ茶色、翼ノ大羽ニ白キ所アリ、面側及ビ喉ハ黒、胸ヨリ腹ハ茶色ナリ」雌ニテハ頭ノ全部及ビ脊ニ黒ナク一体ニ灰茶色、而シテ腹ハ淡灰茶色ナリ其他雄ニ等シ、ほゝじろ大ノ鳥ニシテ翼長二寸三分許、尾羽二寸二分許

此種ハ本邦至ル所ニアリ、夏山中ニテ生殖シ冬平原ニ出ヅ、多分秋ノ頃南方ニ渡リ行クモノモアルナラン、同種ハ又しべりあノ東南部、滿州ノ東部、北支那等モ在リテ生殖シ冬ハ臺灣、南支那、海南、時トシテハあツさむ、まれい半島、じやば及ビちもーる邊ニ至ル

**Tarsiger.**　るりびたき屬

廿二）T. cyanurus, (Pall)　るりびたき

ゆきびたきトモ云フ、雄ハ上部一面ニ黒青色、白キ眼條アリ、下部ハ喉ヨリ下尾筒ニ至ルマデ白メキタル色ニテ腹側ハ茶色ヲ帶ブ」雌ハ上部うぐひす茶ニシテ白キ眼條ナシ、下部ハ雄ニ同シ、其腹側ノ茶ヲ帶ブルコト尾羽ノ青ヲ帶ブルコトハ雌雄ニ通ズル性質ナレバ之ニヨリ此種ヲ識別スルコト易シ」、凡ソほゝじろ大ノ鳥ニシテ翼長二寸六七分、尾羽二寸一二分許」幼鳥ノ物羽ハうぐひす茶ニシテ黄色ノ斑點アリ、尾ハ是又青ヲ帶ブ

此鳥ハ北海道ヘハ夏ノミ行キ其他本邦ノ諸部ニハ四時居リテ山中ニ營巣シ冬月平原ニ出ヅ、琉球ニモ在リ又同種ハしべりあ中うらる山ヨリかむさつかニ至間ニ在リテ生殖シ支那、臺灣等ニ渡リテ超冬ス

**Niltava.**　大るり屬

廿三）N. cyanomelæna, (T.)　おほるり

線ニ附着シ內臟器官ヲ通過シテ背側ニ移行セル腹膜ノ縱直片ナリ此靱帶ハ腹壁ノ中央線ニ沿テ更ニ後方ニ移行ス

第廿六項　胸骨ノ他側ヲ同前ニ切離シテ龍骨突起ヲ提擧シ左右ノ截口ヲ適宜骨剪ヲ用ヒテ漸々前方ニ進メ以テ胸骨中央ノ全部ヲ除取スベシ次ニ各烏喙骨ノ中央ヲ切リテ其腹側端ヲ除キ其他叉骨及ヒ胸肋ノ附着セル儘胸骨ノ側部ヲ除取シ以テ內臟諸器ヲ暴露スベシ

（一七一）紅褐色ノ肝臟ハ体腔ノ中央部ヲ領シテ大ナル右葉（Right lobe）ト小ナル左葉（Left lobe）トヨリ成レリ

（一七二）心臟ハ肝臟ノ前面中央ニ位シ体ニ比スレハ巨大ニシテ薄膜ヨリ成レル心囊ノ中ニ保藏セラル

（一七三）十二指腸ハ淡紅色ナルU字形ノ腸彎部ニシテ右肝葉ノ末端下部ヨリ起リ腹腔ノ後端ニ移行シテ左右ノ兩腕ヨリ成レリ

（一七四）膵ハ緻密ナル赤色腺ニシテ十二指腸兩腕ノ間ニ位セリ

（一七五）廻腸ノ一二彎（小腸ノ主要部）ハ腹腔ノ右方ニ存在ス

（一七六）砂囊（Gizzard）ハ体ノ左側ニ存セル楕圓狀ノ堅硬体ニシテ肝ノ直後ニ當リ且ツ稍〻之ニ由テ隱蔽セラル

（一七七）氣管ノ末端ハ嗉囊ノ左側ヲ迂廻シテ食道ノ腹面ニ至リ直ニ岐レテ二氣管枝ト成リ各〻外後方ニ移行シテ肺ニ達ス

（一七八）氣管ノ末端及ヒ氣管枝ノ占領セル腔窩ハ即チ鎖骨間氣囊ニシテ其腹壁ハ胸骨除去ノ際既ニ破損ス

（一七九）胸骨氣管筋（Sterno-tracheal muscles）ハ動モスレハ動脈管ト誤認セラル丶一對ノ細長筋ニシテ氣管ノ腹面ヨリ起リ外後方ニ向テ胸骨ノ內面ニ移行ス

（一八〇）前腹靜脈（Anterior abdominal vein）ハ大網膜ヨリ血液ヲ受取シ肝ノ前緣ニ向ヒ劔狀靱帶ニ沿テ前方ニ移行セル小脈管ナリ

（一八一）肺ハ心臟ヲ側方ニ反轉スルニ及ンテ現出スル暗赤色ノ海綿狀体ニシテ体腔前部ノ背壁ニ密着ス

（一八二）腎臟（二一四）及ヒ生殖器（二〇九）ハ腹腔後部ノ

ニ此種モ又アランカナレド未ダ充分ナル證ヲ得ズ好鳥家宜シク注意スベシ

（以下次號）

## ○からむくどりニ付キテ

からむくどりトハ余ノ付ケタル俗名ニシテ學名ヲ Sturnia sinensis (Gm.) ト云ヒ支那ニ在ル鳥ナルガ近頃其日本ヘモ渡リ來ル實證ヲ得タリ其雌雄ノ標品ハ理科大學ノ蒐集中ニアリ、是ハ明治廿一年二月十日ニ坂本福治氏ガ東京ノ或ル鳥屋ニテ買求メタルモノニテ當時新鮮ニテ鐵砲ノ彈跡アリタリト云フ、亦頃ロ此標品ヲ或老練ナル捕鳥家ニ示シタルニ時々しまむくどりニ雜リテ渡リ來ルト斷然答ヘタリ、依テ日本鳥中ニ算入スベキモノアルコ余ハ疑ハズ、讀者宜シク此種ヲ「日本ノ鳥目錄」中ニ83½ノ番號ニテ書キ入レラルベシ

からむくハしまむく（一名小むく）ニ能ク似タルガ雄ハ肩ニ大ナル白所アリテ頭ヨリ脊ニカケテ一樣ニ灰色ナリ（しまむくニテハ脊ハ素ノ光澤アル黒ナリ）、其雌ハ殊ニしまむくノ雌ニ彷彿タレド尾ヲ下ヨリ見レハ白メキタル所アリ（しまむくニハ之レ無シ）且ツ翼ノ中大ナル羽ニ白色ノモノアリ

## ●動物解剖手引草（鳥類ノ部）

岩川友太郎

第廿三項　注射ヲ施サヾル標品ニテハ預メ諸胸脈管ヲ結紮シ鎖骨下脈管ノ起始ヲ切離シテ之ヲ反轉シ其他上肢ニ移行スル諸脈管ヲモ同前切離スベシ但シ上肢ニ附着セル各脈管ノ一端ヲ充分ニ遺留シテ後來ノ搜索ニ便スルヲ要ス左右共ニ斯ノ如ク解剖シテ胸骨ノ全部ト鳥喙骨及ヒ叉骨ノ大部トヲ露出スベシ是ニ於テ胸骨ノ一側ニ沿ヒ龍骨突起ト並行ニ胸骨ノ大半ヲ縱截シ是ヨリ徐ニ胸骨体ノ殘部ヲ切除シ以テ次ノ構造ヲ撿スヘシ

（一六九）前腹氣囊（Anterior-intermediate air-sac）ハ各中腹氣囊ノ直前ニ位ス

（一七〇）鎌狀靭帶（Falciform ligament）ハ胸骨内面ノ中央

ヘル縁邊ハ遊離シ前面ハ心臟ヲ受容スルノ凹窩ヲ現ハシ後面ハ右葉ニ十二指腸ヲ受容スル二溝ヲ存シ左葉ニハ砂嚢ヲ容ルベキ一深窩ヲ存ス

(一八七)胃肝網膜(Gastro-hepatic omentum)ハ砂嚢ト左肝葉トヲ結合セル腹膜片ナリ

(一八八)臍網膜(Mesogaster)ハ砂嚢ヲ背壁ニ結合セル腹膜ノ一片ナリ

(一八九)腸間膜ハ腸ノ彎部ヲ支持シテ之ヲ背壁ニ結合スル腹膜ノ重襞片ナリ

(一九〇)腸ノ後部ハ背壁ノ中央線ニ沿テ肛門ノ方ニ移行シテ直腸網膜(Mesorectum)ニ由テ支持セラル肛門ノ前方一「インチ」許ノ處ニ當リ腸壁ヨリ起出セル二個ノ小ナル盲腸アリ以テ大小兩腸ノ疆界ヲ成ス

(一九一)排泄溝(Cloaca)ハ稍〻膨張セル一室ニシテ肛門ニ由テ外界ニ開キ前方ハ直腸ニ連通セリ其形狀ト他部ニ相關係スル狀ヲ撿スルニハ肛門ヨリ空氣ヲ吹込ミテ之ヲ膨張セシムルヲ便トス

第廿八項　大網膜ヲ切離シ肝葉チ前方ニ反轉シテ左ノ搆造ヲ檢スベシ

(一九二)右肝管(Right bile duct)ハ淡白色ノ細管ニシテ右肝葉ノ後面ヨリ起リ十二指腸肝網膜ニ沿テ後方ニ移行シ十二指腸離心腕ノ中程ニ開在ス

(一九三)左肝管(Left bile duct)ハ右管ヨリモ短大ニシテ亦右肝葉ヨリ起リ後方ニ移行シテ幽門ヲ距ルヿ半「インチ」許ノ求心腕部ニ開在ス

(一九四)門脈(Portal vein)ハ十二指腸肝網膜ニ沿ヒ左右二肝管ノ間ニ在リ常ニ血液ノ充滿セル大脈管ニシテ腸胼及ヒ砂嚢ノ右側ヨリ血液ヲ受容シ二條ニ岐レテ各〻肝葉ニ進入ス

門脈ハ三條ノ主脈管ノ結合ヨリ成レリ即チ砂嚢ノ右側十二指腸及ヒ小腸ノ末彎ヨリ血液ヲ受容スル所ノ胃十二指腸靜脈(Gastro-duodenal)小腸ノ主部ヨリスル所ノ上腸間靜脈(Superior mesenteric)及ヒ小腸ノ後部、直腸幷ニ排泄溝ヨリスル所ノ下腸間靜脈(Inferior m.)是

腸ヲ側方ニ反轉スルニ及ンテ認視スルヲ得ベシ

第廿五項　頭部背面ノ皮膚ヲ縱切シテ頭骨ヲ露出シ眼ノ少シク後方ヨリ小刀ヲ以テ薄弱ナル頭蓋骨ヲ切除スベシ但シ頭腦ハ頭骨ト密接スルカ故ニ之ヲ損傷セサルヤウ注意スルヲ要ス斯クシテ頭蓋ノ全部及ヒ最初ノ二三椎骨ノ神經弓ヲ切除スベシ頭腦ノ背側兩面暴露スルニ及ンテ腦ノ少シク後方ニ當リ脊髓ヲ切斷シ次ニ小刀ノ柄ヲ以テ腦ノ前部ヲ提擧シテ其下面ヨリ派出セル諸腦神經ヲ順次ニ切離シ全腦ヲ除去シテ之ヲ強度ノ酒精又ハ「クロール」亞鉛ノ飽合溶液ニ浸シ以テ後來實驗ノ用ニ供フヘシ(五十項ヲ參考セヨ)

第廿六項　尚ホ時間ノ餘裕アラハ更ニ皮膚ノ切開ヲ後方ニ續ケ各椎骨ノ神經弓ヲ切除シテ脊髓ノ全部ヲ暴露スベシ此解剖ヲ爲シ得サル場合ニ於テモ左右兩股ノ間ニアル背側ノ皮膚ヲ截リ中央ノ薦推骨ノ神經弓ヲ切除シ該部ニ存スル脊髓ノ一「インチ」許ヲ露出シ次テ左ノ部分ヲ檢スヘシ

(一八三)脊髓ノ腰叢(Lumbar enlargement)及ヒ菱竇(Sinus rhomboidalis)ト名ツクル長斜方形ノ腔窩ヲ成セル脊髓背柱(Dorsal columns)ノ分散セル狀ヲ視ルヘシ菱竇ハ實際脊髓中心溝(Central canal)ノ擴張セル者ニシテ軟腦膜(Pia mater)ノミヲ以テ被覆セラル

(一八四)脊髓ノ全部ヲ露出セル場合ニハ兩肩ノ間ニ存スル腕叢(Brachial enlargement)及ヒ脊髓頸部ノ過長ナル狀ヲ併視スルヲ得

第廿七項　標品ヲ再ヒ仰向ケニシ切開ヲ用ヒスシテ單ニ內臟器官ヲ四方ニ反轉シ以テ左ノ諸點ヲ檢スベシ

(一八五)劍狀韌帶ノ關係(一七〇ヲ參考セヨ)　此韌帶ノ前端ハ心囊ニ附着シ背緣ハ分レテ二片ト成リ互ニ分行シテ右片ハ十二指腸ヲ橫行シ右肝葉ノ後面ニ附着シテ十二指腸肝網膜(Duodeno-hepatic omentum)ト成リ左片ハ砂囊ヲ包メル腹膜ニ附着シ兩片後方ニ移行シテ大網膜ヲ形成ス

(一八六)肝臟ノ形質　右大左小ノ兩葉ニ分レ其後方ニ向

Megalocephala, Cloquet. ハ馬（及ヒ牛）ノ小腸中ニ寄生ス」 **A. Mystax**, Rud. 猫及ヒ犬ノ小腸中ニアリ頭ノ兩側ニ矢羽ノ如キ隆起アルヲ以テ知ルベシ

**Oxyuris Vermicularis**, L. 蟯蟲ハ蛔蟲ヨリハ余程小ニシテ人類（特ニ小兒）ノ大腸ニ寄生シ無數存在スルヿアリ雌蟲ハ長サ十み、め、雄蟲ハ余程小ニシテ四み、め、位トス其經過ハ中間宿主ナク卵ハ直ニ人ノ口ニ入リテ發達スルモノナリ

FAM. STRONGYLIDÆ. **Eustrongylus Gigas.** Rud.（第四、五圖）腎蟲、犬、狐、馬、牛等（稀ニ人類）ノ腎臟内ニ寄生スル大ナル線蟲ナリ雌蟲ハ一めーとるニ達スルヿアリ雄蟲ハ其三分一トス体ノ前端ニ六個ノ唇突起アリ雄刺ノ交尾刺ハ唯一本トス雄蟲ノ後端ニハ鐘狀ノ交合嚢アリ（第四圖）**Dochmius Duodenalis**, Dubini. 十二指腸蟲（第六圖）ハ其名ノ示ス如ク重ニ人類ノ十二指腸内ニ寄生ス熱帶或ハ暑キ温帶（ぶらしる、えじぷと、以太利）等に多シトス我邦ニ於テモ見ル處ナリ其寄生スルヤ其強キ齒アル口ヲ以テ腸壁ノ血管ヲ破リ其血ヲ吸ヲ以テ出血ヲ起スヿアリ之ヲ埃及萎黄病（Egyptian chlorosis）ト稱ス重症ナル時ハ人之カ爲ニ斃ル其形ハ第六圖ニ示ス如シ雌蟲ハ二セ、め、雄蟲ハ一セ、め、ノ長サアリ口邊ニハ強キ齒アリ雄蟲ノ後端ハ廣カリ居リテ固有ナル形狀ヲ呈ス卵ハ宿主ノ腸ヲ出テ水中或ハ濕地ニテ孚化シ仔蟲トナル此仔蟲飲料水或ハ其他ニ依リ人腸ニ入レバ成蟲トナル

**Strongylus Ornatus**, Rud. 馬ノ大腸（盲腸）ニ寄生ス雌五み、め、雄二乃至三み、め、口邊ニきちん質ノ刺一列ヲナシテ口孔ヲ圍繞ス幼時ハ水中ニテ自在生活ヲ爲スモ飲料水ト共ニ馬ノ体内ニ入リ或ル動脈ニ寄生シテ著シキ病理的ノ變化ヲ起サシム暫クシテ腸内ニ入リ生殖器熟ス、血脈中ニアリテ其害ハ重ニ血液ノ循行ヲ妨グルニアリ」S. Filaria, Rud. 綿羊ノ氣管及ヒ肺中ニ寄生ス

FAM. TRICHOTRACHELIDÆ. **Trichocephalus**

ナリ

(一九五)三條ノ膵管(Pancreatic ducts)中一ハ膵ノ前端ノ右側ヨリ發シ前右方ニ移行シテ十二指腸離心腕ノ末端ヲ超ルヿ少距離ニシテ腸ニ開在シ他ノ二條ハ通常膵ノ中央ヨリ發シ多少互ニ並行シテ稍〻前方ニ移行シ終ニ離心腕ノ中央部ニ至リテ十二脂腸ニ開在ス

(一九六)左胃靜脈(Left gastric veins)ハ胃肝左網膜ニ沿走セル二條ノ小脈管ニシテ砂嚢ノ左側及ヒ前端ヨリ左肝葉ニ向テ血液ヲ運搬ス

(一九七)下腸間膜靜脈(第九圖チカ)ハ直腸網膜ニ於テ腸ト並行セル大靜脈ニシテ排泄溝及直腸ヨリ血液ヲ運輸シ而シテ其後端ハ腎門靜脈ニ連合シ前端ハ門脈ト接續セリ

(ツヽク)

## ●普通動物學講義第貳拾五

第八章(第五門蠕蟲ノ續キ)　附圖第八版　箕作佳吉述

### 第二綱圓蟲類第一目線蟲(Nematodes)ノ續

線蟲構造ノ大畧ハ前講義ニ於テ既ニ之ヲ述ベタリ(第參拾貳號ヲ見ヨ)是ヨリ普通ナル數種ヲ擧ケテ其例ヲ示スベシ前ニモ述ベシ如ク線蟲ハ寄生スル種甚タ多シトス

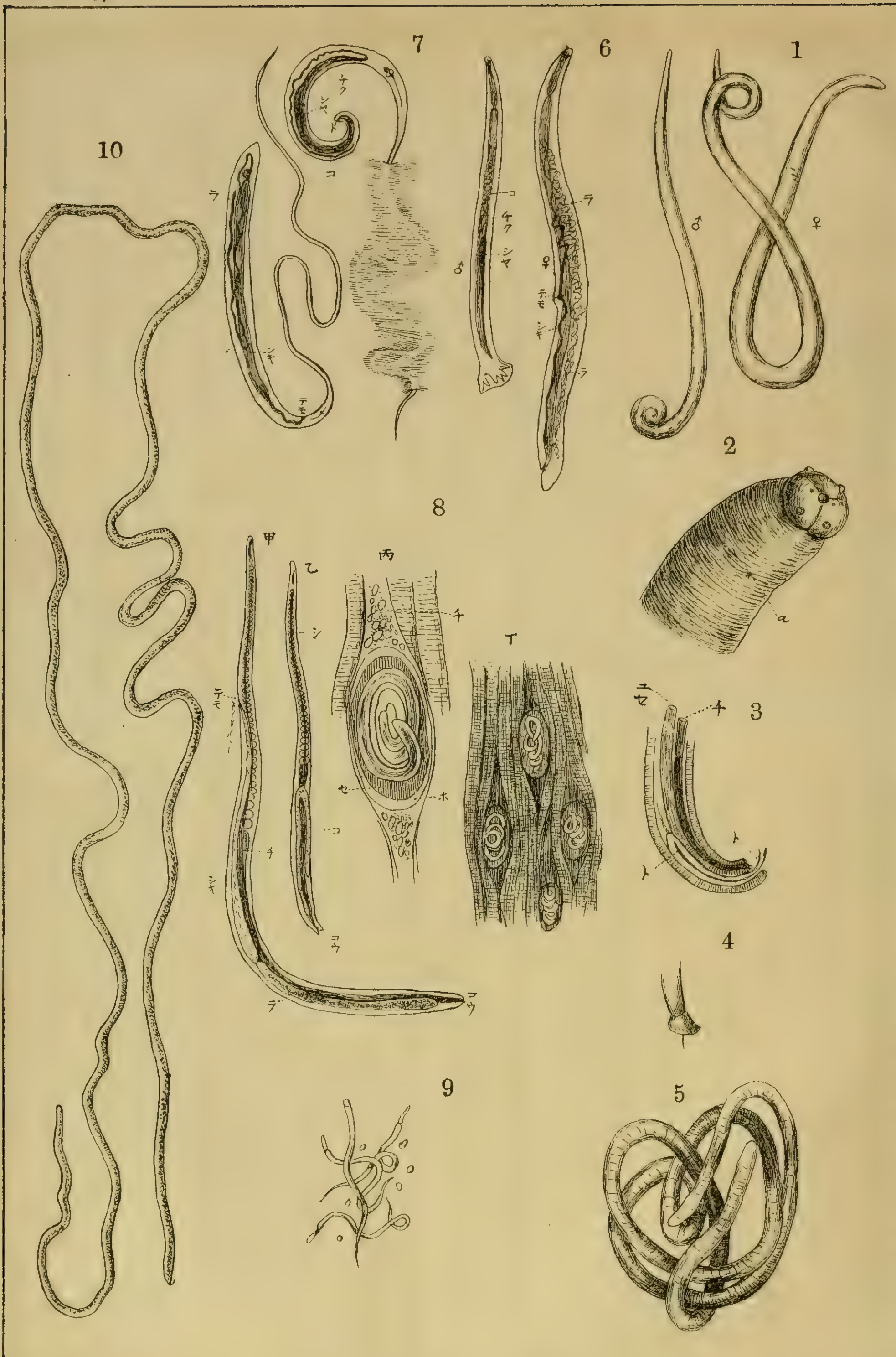
FAM. ASCARIDÆ. **Ascaris Lumbricoides, L.** 蛔蟲(第一、人類ノ小腸ニ寄生スル甚タ普通ナル種ナリ雌蟲ハ雄蟲ヨリ余程大ナリ雄蟲ハ廿五せ、め大ニ達シ其直徑三、二み、め、アリ雌蟲ハ四十せ、めノ長サアリテ五、五み、めノ直徑アリ雄蟲ハ其尾端生殖孔ノ處ニ二本ノ刺アリ(第三圖)蛔蟲ノ前端ニハ三個ノ圓狀唇突起(Papillæ 第二圖)アリ其内一個背ニ當ルモノ二ツノ其他ハ各一ツノ小感觸突起アリ蛔蟲ハ小腸ニアルヲ通常トスレ𪜈胃食道ニ至リ或ハ大腸ニモ出ツルヿアリ而シテ多クハ三四個共ニアルモノトス其經過ハ未タ詳ナラズ卵ハ寄生主ノ大便ニ混シテ外ニ出デ水中或ハ濕地ニテ發達シ仔蟲トナルマデハ明ナレトモ此ノ仔蟲ハ直ニ人ノ腸ニ入ルモノナルカ或ハ中間宿主ヲ經テ後ニ人類ニ入ルモノナルカ未タ我々ノ知ル能ハザル所ナリ」A.

Dispar, Rud. 毛頭蟲或ハ鞭蟲　人類ノ盲腸ニ寄生ス其体ノ前端非常ニ延長シテ細長キ糸ノ如キ形狀ヲ呈シ此部ヲ腸ノ粘膜內ニ埋伏ス」五せ、めノ長ニ達ス」

Trichina spiralis, Owen. とりひな或ハ旋毛蟲（第八圖）雌ハ三乃至三半み、め、雄ハ一半み、め、ノ小蟲ナレ𪜈恐ルベキ寄生蟲ノ一ナリ成熟シタル蟲ハ人類及ヒ其他ノ哺乳動物（特ニ豕及ヒ鼠）ノ小腸內ニ寄生ス非常ニ多數ノ蟲共ニ在ルヲ常トス此等成蟲ノ雌ハ交尾ノ後ニ非常ニ多ノ胎生幼蟲ヲ生ム（各雌凡ソ千五百ノ幼蟲）幼蟲ハ腸壁ヲ破リ体腔ニ入リ或ハ循環系ニ依リテ体中所々ノ筋肉ニ至リ筋纖緯ニ侵入ス筋纖緯ノ質ハ爲ニ粒狀ニ變シ其纖緯膜（サーコレンマ）ハ幼蟲ノ成長スルニ從ヒ膨脹シ遂ニ幼蟲ノ周圍ニ石灰質ノ囊（第八圖丙等）ヲ造ル幼蟲ハ此內ニとぐろヲ卷キテ安息ス此等幼蟲ノ數ハ實ニ夥多ニシテ宿主ノ筋肉一寸立方ノ內ニ數十万モ石灰囊ヲ造リ居ルヿアリ人若シ此ノ如ク多數ノ幼蟲ヲ含有スル肉（人ノとりひなヲ得ルハ幼蟲ヲ含有スル豕肉ヲ食フニ依ル）ヲ食フ時ハ胃液ノ作用ニ依リ石灰囊ヲ溶解シ數十万ノ幼蟲ハ自在トナリ腸ニ入リ數日ニシテ其生殖器成熟シテ交尾シ雄蟲ハ久シカラズシテ死スト雖モ雌蟲ハ五六週間モ生活シ其間無數ノ胎生幼蟲ヲ生ム幼蟲ハ腸壁ヲ破リ前ニ述ベシ經過ヲ經テ筋肉內ニ入リ石灰囊ノ內ニ安眠ス此際ニ宿主ハ熱ヲ發シ容易ナラザル症ヲ呈シ斃ルヽ者少シトセズ此病ヲ稱シテ旋毛虫病（トリヒイシス）ト云フ患者若シ幼蟲ノ石灰囊ヲ造ル迄死セザレバ其筋肉內ニ數百万ノ幼蟲アルニ關セズ漸次快復スベシとりひな幼蟲ヲ含有スル豕肉ヲ食シタル爲メ一時ニ多數ノ人ノ旋毛蟲病ニ罹リタル塲合少シトセズ」豕肉ハ此ノ理由ニ因リ屠殺所ニ於テ顯微鏡的ノ撿査ヲ爲スヿ必要ナリ尤モ有蟲ノ豕肉ニテモヨク燒煑セバ害ナキハ勿論ノ事ナリ

FAM. FILARIADÆ ハ我邦ニテ通常はりがね蟲ト稱スル寄生蟲ヲ含有ス」其体糸ノ如ク長ク其寄生スルヤ宿主ノ腸內ニアラズシテ体中ノ所々（特ニ結組織中）ニ

第八版




神田區東松下町十六番地小柴英侍印行

寄生ス **Filaria sanguinis-hominis,** Lenis. 人血ふいらりや其成蟲ハ是マデ人ノ見タルコト甚タ少シ雌蟲ハ三四いんちノ長サニ達シ皮下結組織或ハ血液中或ハりんぱ系中ニ住ムモノカ其幼蟲(第九圖)ハ母蟲ノ如ク稀ナルモノニアラズシテ熱温地方ニテ人ノ血液中ニ生活シ其長サ僅ニ〇、二乃至〇、四み、め、ニ過キズ多數存在シテ恐ルベキ病ヲ起ス中ニ象皮病(Elephantiasis arabum)トテ体ノ下部(下肢幷ニ陰嚢等)非常ニ膨脹シテ象大トナルモノナリ我邦(特ニ九州地方)ニモアリト云フ」**F. inmitis,** Leidy 成蟲ハ犬ノ心臓内ニ寄生シ雌ハ廿五せ、め、雄ハ十七せ、め、ニ達ス幼蟲ハ全シク犬ノ血液中ニ住ス東洋ニ多シトス」 **F. medinensis,** Gmel.(第十圖)熱、温地方(特ニ東半球ノ)ニテ人類ノ皮下結組織或ハ筋肉中ニ寄生ス雌ノミ人ノ見タル所ニシテ其長サ八十せ、め、ノ大ニ達ス其幅ハ僅ニ半み、め、ナレバ眞ニ糸ノ形狀ナリ体中消化器消失シ巨大ナル輸卵管中ニ數百万ノ幼蟲ヲ含有ス、蟲充分ニ成熟シタル時ハ皮膚ニ厥衝ヲ起シ其塲所ヲ破リテ外ニ出テ幼蟲ヲ外界ニ放ツ幼蟲ハみじんこう(Cyclops)ノ内ニ入リテ生長シ飮料水ト共ニ人体ニ入ルモノナラント云フ」尙ホ此外ニはりがね蟲ノ種類甚タ多シトス鯉ノ皮膚外ニ大ナル赤キ腫物ヲ成スモノアリ」鰻ノ体内ニ寄生スルはりがね蟲ノ一種ヲ見テ鰻ハ胎生ナリト主張スル人ハ我邦ニ甚タ多シ

FAM. MERMITIDÆ. 昆蟲類ノ体腔ニ寄生スルはりがね蟲ナリ肛門ナク体ハ絲ノ如ク六個ノ唇突起ヲ有ス中ニ **Sphærularia bombi,** Leon. ト稱スル種ハやまばちノ体腔内ニ寄生シ其子宮非常ニ大トナリ蟲ノ体ヨリ推シ出デ蟲ハ死ストモ子宮ノミ別ニ生活スル奇ナル現象ヲ呈スルモノナリ

FAM. GORDUDÆ. **Gordius aquaticus,** Duj. (?) はりがねむし、かまきりノ体内ニ大ナルはりがねむしアルハ人ノ知ル所ナルガ是ハ此種ノ幼蟲ニシテ後ニ出テ丶水中ニ入リ成熟ス

信翁が日本釋名に蟬はせんなりむとみと通ず音をもて訓とす此類多しとあり前曉晴翁が簾葭堂雜錄にも蟬をせみといふは吾邦にある物なれども和名ならて漢語を用ゐたりとあり楫取魚彥翁か古言梯標注にも亦此説あり此の如く字音を和訓とせし例少しとせず蘭をらに錢をせにといふが如き是なりこれらを考ひ合せバせみは蟬の音轉なるとしるしさて字音のんをみに轉用すると其例なきにあらず例之は燈心をトウシミといひ文をフミといひ衣魚一名蟫をシミといふ（貝原篤信翁が大和本草に衣魚一名蟫ニ音アリシミトハシンノ音ヲ和訓トセシ也とあり）が如し

詩學大成に鳴入二水中一統、蟬於二樹上一緇の句あり又盛齋が詩に柳梢一殼玆緇滓、屋角ノ双斑谷古狐ともあり此等は能く蟬の聲をうつせるものといふべし

### 寒蟬

つくつくぼうしは其鳴聲をもて名けしものなり或はくつくぼうしともいふ俊賴朝臣の歌にうつくしよしと蟬の鳴らんと詠し玉ひしは此つくつくぼうしにやあらん蜻蛉日記にうつせみの羽よりもうすき身を持てつくしよしといかゞ云べきともあり大和本草に此蟬夏は不レ鳴八九月晚景になく俗につくしよしともなくといへり

### みんみん

みんみんは其鳴聲をとつて名けしものなり本草綱目啓蒙に漢名蛁蟟にみんみんを充てたり楊子方言曰蟬楚謂二之蜩一宋衛之間謂二之螗蜩一（鳴聲淸亮江南即螗蛦也）陳鄭之間謂二之蜋蜩一秦晉之間謂二之蟬一海岱之間謂二之蛥一（齊人呼爲巨蛥音技）其大者謂二之蟧一或謂二之蝒馬一其小者麥蚻（音截而靑）とあり此蝒は支那音に Mëen とあれバ蝒馬といへるは我邦のみんみんならんもしるへからず爾雅曰蝒馬蜩註蜩中最大者爲二馬蟬一とあるによりてムマセミ或ハクマセミと訓せりさらば蝒はみんみんにあらさるが記して後の考をまつ

### かなかな

かなかなは漢名を茅蜩といひ秋日、日暮の頃より鳴く聲寂寥にしてかなかなと呼ぶ故にかなかな或ハひぐらしともいふ

FAM. ANGUILLULIDÆ. 自在生活ヲ成ス然レモ植物ニ寄生スルモノ多シトス（Rhabditis ハ動物ニ寄生ス）

**Tylenchus tritici,** Necdli. 小麥ノ粒ニ寄生ス

**Heterodera schachtii,** Schm. 種々ノ野菜物（赤大根、かべーじ、小麥等）ノ根ニ生活ス」 **Anguillula aceti,** O.F. Müll. 酢ノ内ニ生活ス

線蟲ニ付キ尚ホ委シキハ飯島氏著人体寄生動物編ヲ見ルベシ

### 第八版圖解（飯トアルハ飯島氏著書ヨリ引用ス）

1. 蛔蟲ノ雌雄（縮圖、飯）
2. 蛔蟲ノ前端 *a* 排泄孔（Leunis）廓大圖
3. 蛔蟲雄ノ後端縱斷圖（ト交合刺、チ腸、ユセ輸精管、飯）
4. 腎蟲（Eustrongylus gigas）雄ノ尾端、交合囊及ヒ交合ヲ刺示ス（飯）
5. 仝　雌ノ全体縮圖
6. 十二指腸蟲（Dochmius duodenalis）ノ雌雄（廓大圖、飯）
7. 毛頭蟲（Trichocephalus dispar）ノ雌雄（廓大圖、飯）
8. 旋毛蟲（Trichina spiralis）ノ甲雌、乙雄、丙幼蟲（廓大圖、飯）
9. 住血絲狀蟲（Filaria sanguinis-hominis）ノ幼蟲（廓大圖、飯）
10. Filaria medinensis ノ雌（Boas）

雄　チ腸、コウ肛門、シ食道、ト交合刺、コ睪丸、チク蓄精囊、シマ射精管

雌　ラ卵巣、テモ管、シ腟門、シキ子宮

## 寄書

說ノ可否ハ本誌編輯者其責ニ任セズ

## ●動物聲音考第十七

野村彥太郎

### 蟬（セミ）

和漢三才圖繪ニ今稱蟬者淺褐色羽薄如紗背似蜻蛉之羽五月始鳴聲如言世美世美（せみ〳〵）とあるを見れば蟬を和名せみと呼ひしは其鳴聲をもて名とせしものゝ如し抑も蟬の種類や多し随て其鳴聲も一様ならすといへとも和漢三才圖繪の所謂るせみ〳〵と鳴とはいかなる蟬の種類にやあらん予も未だかゝる蟬の聲をきゝしとなしらく實濟にもとりたる鳴聲をもて此虫の名とするは甚た心得がたきとなり本居大人が玉可都萬に蟬はせみ〳〵となけバ其聲によれる本よりの名か字音をとれるかこれらはわきまへかたしとあり大槻文彥翁が近ごろ著せし言海によれバ蟬の條に鳴聲ヲ名トス蟬（セヌ）ノ音轉ナリトイフハ非ナリとあれとも前にのべし如く蟬をもて鳴聲に基くとするものは却て疑なきにあらず予は寧ろ蟬の音轉なりとするものなり貝原篤

たる口を少しく水面に出して空より充分に露點を飲み其分量の加減によりて遂に眞珠を孕むなりと

夫れ舍密の學ハ其事實の鎚擊を以て光榮ある金剛石をして一片の炭塊と化せしめたり同く又貴重なる眞珠は膜質の菍層にして單に炭酸石灰質より組織せるものたることを宣告せり然れとも斯くも異形のものを產すること並に或介殼には之を生し或ものにハ之を生せすと云ふことハ尙當時の一疑問として存せりされハ多くの博物學者は眞珠は病の成生物たりとの事を唱ふるに至れり乃ち之を產する動物に疾病ありて斯るものを生するとの事なり然れとも是れ妥當なる說とは云ふ可からすして實に眞珠は或軟体動物の石灰質分泌物に他ならざるものなり即ち之を以て介殼を造り之を增大し行くものにて其內側にハ爰に滑かにして美麗なる光輝あるを見るへし是れ其表皮にして化學家の「ネークル」(Nacre)と稱ふるものこれなり試みに眞珠を開剖し之を撿せは甚た美しき膜層の互に重疊せしものより成り其搆造恰も葱根の層皮を見るか如くならむ而して眞珠ハ介殼の內側に固着して存し或ハ動物体中に夾まりて自由に橫はり見出すべし如斯其存する位置に由て之か形体に搆造及種々のものあれとも隨て其成長の模樣の如きも自ら異りたる說明を要することなり

必竟するに此動物か此の如き美觀ある物体を成生するは只た刺擊の原因を免れんとして爲す所なり即ち偶然砂粒若くは他の小さき物体か外套膜と介殼との間に徐々推入りて其位置を占むることあれは動物ハ之か爲めに困障を感するを以て之に滑かなる皮膜を被ひ置けるもの遂に漸々「ネークル」の層を擴大するに至りて遂に眞珠と成るなり尙他の一法は介殼に住む敵者ありて其食を得るの欲望を以て內部に向て孔を穿ち進擊を試むるあり故にこゝに「ネークル」を以て栓を造り該敵を防遏し其極惡を逞ふせざらしむ此栓より起元して眞珠を成生することあり而して前二法を以て成れるものは通例皆介殼の內面に固着し見出す所のものなり然るに最上の價値ある眞珠に至てハ一般に之を動物体中に得るなり此塲合に於て最初刺擊の

## ●眞珠の説（承前）　二宮生

眞珠を出す動物ハ通常二枚貝（Bivalve shells）即ち双殼類にして珠母（Avicula〔Mother of Pearl〕）淡菜（Unio anodonta〔fresh water mussel〕）牡蠣（Ostrea）玉珧（Pinna〔wing shell〕）貽貝（Mytilus〔common mussel〕）蛤仔（Tapes）等是れなり又單殼類に屬する石决明（Haliotis gigantea）よりも殊に大なる眞珠を得ることあり而して就中珠母より得るもの最多く且最上品にして通常商品のものなり乃ち眞珠に「あこやのたま」なる通稱ある所以なり倫動に於ける「プリチス、ミユーゼアム」に珍しき大形の眞珠を藏せり殆んと介殼内面の二分の一を占むるならんと思はる程にして之ハ牡蠣より得しものなり然し其色生白くして形不正に且凹凸ありて觀飾にも價値なしと云ふ尙一種同所に藏する著大なるものは貽貝より得たるものにて之ハ格恰好く形作られ如何にも大なれとも惜かな其色ハ母貝の内面の色を繼續したるものにて黒みかゝりたる濃藍を呈し爲めに美觀を欠けり

凡て介殼に於て其内側眞珠質に富み且つ光澤を有するものにして之に眞珠を生出するを望むは至然の理あり而して其構造及色彩の如きも之を產する母貝の種類に由て各差異あるものとす純粹白色の眞珠歐羅巴及亞米利加に於て通例最も珍重せられ又其黄色を帶ふるものハ殊に印度人及亞刺比亞人に依て大に尊重せらるゝと云ふ

爰に眞珠の成生に就き古來東洋間に如何の考說ありしや幷は吾輩未た耳にせさる所なれとも西洋に在ても以前ハ大に迷想に沈みありしなり名高き羅馬博物家プリニーは大膽にも說ける樣牡蠣は蒼空の露滴を養ひて眞珠を產すると即ちドラモンドの譯せし句あり

'With open shells in seas, on heavenly dew
A shining oyster lusciously doth feed;
And then the birth of that ethereal seed
Shews, when Conceived, if skies look dark or blue.'

尙英國の如きも古へ之と殆んと同樣の考へを有せしに似たり即ち某記者の蘇格蘭河中の淡菜を記述せしものゝ中に言へるあり此貝ハ空晴れ渡りて日和の時ハ朝蚤く開き

の方向は何れの場合に於ても普通の像影と色彩ある像影とを結付る線に直角に向ひ居れり故に若し母殼の面不正に形作らるゝ時には其凹線環狀を爲し色彩ある像影ハ普通像影の周圍に點在し存することありこれに眞珠を生せし時には母殼のもの直に之に顯はるへし良好なる眞珠に於てハ色彩ある像影ハ普通像影の外圍なる小區域に積集し且諸種の色か如斯して白き部に混しあれは實に觀飾として此物に貴き價値を與ふる所以なり

扨說人工の眞珠と其自然の物とを區別するは容易なるか如く其固有のなる光ハ種々の工夫ありしにも係らす之を作ること能はす遂に人工の企及すへからさる所とせり

前述へし如く羅馬人は非常に眞珠を貴重せしなれと未た人工を以て之を製造するに至らさりしも其後間もなく此企を起すもの出來れり即耶蘇紀元後殆と百年の頃紅海濱に於ける亞剌比亞人こそは歐洲にて人造眞珠の法を傳へし創意者なり其法の如き今より詳知するに由なけれとも彼の支那人の久しく傳へ來れる法と稍や似たるものゝ如しと云ふ（支那人の眞珠製造談ハ名高きものにて殆んと之を耳にせさる者あらさるへし尙其大略ハ動物學雜誌第八號雜錄欄内に記載あり故に余ハ茲に之を贅せす）後十六世紀の初に當り意太利人は輕捷なる一法を以て擬眞珠を造れり即ち眞珠色の假漆（ワニス）を以て塗みある小珠の内側を充たせるものにて之を以て當時の人を欺き一時非常の製出高たりしか終に政府の禁する所と爲れりとそ又た同世紀の終りの頃威内斯人は他の法を以て最も盛に擬珠を出し當時著名たりし亞米利加海岸の產地を壓倒せるの勢ありしと云ふ但其製法ハ今傳へさる所之を想像する能はす然も此業永續せさるに非すとす續て千六百五十六年の頃巴黎に於て小珠製造人は最も精巧に眞珠と僞造するの法を發明せり其製品たる殆んと東洋產最上品と區別するに難き程なりしと云此發明は初め偶然に得たるなり即ち或時河魚を洗ひしに後其水中銀色の光輝を以て充たされ頗る美觀ありけれは之を視て自得する所あり遂に河魚の鱗を聚め乾かして造れる細粉を以てエナメル（眞珠質）となし之を蠟、石膏、玻璃等にて造れる小球の外表に覆ひ製し出せるなり此法永く秘密に附しありしか千

源因となるものに就ては或ハ体中に殘留する不熟なる卵たるべしとの說あり是れサー、エベラード、ホーム（Sir Everard Home）と云へる學者の精密なる觀察より證せし所なり然るにサンディアス氏（Sandius）の如き尙以前に在て此事實を察知し丸を唱道せしことあるなり其は千六百七十三年十二月一日の日附を以て氏より「ローヤル、ソサエチー、オフ、ロンドン」に迄贈りし書中記事に就て明かなりと云ふ乃ち結局倶に論すらく卵の流產すべきもの偶然体中に止りて遂に眞珠の起元即ち核と爲ることあり乃ち動物か之を覆ひ膜を作る故年と共に新しき層を得て遂に增大し行くなりと

此說や大に其實有るもの丶如し即覆ひもの丶附着することハ其介殼に偏在して生するものより一層速かなる理なり此体中に生する眞珠ハ通常球狀なれとも又時として三尖塔の形を爲すものあり是れ蓋し卵の未た柄（Pedicel 即植物學上花梗と稱するものに同し初より卵に附着せるものなり）と離れさるものか「チークル」の被包する所となり以て成形せるなりと云ふサテ眞珠採獲に親しき人民の證する所に由れハ此等の物は動物が四歲に達する迄ハ現れる丶ことなく又其生熟に至るには七年乃至九年を要すへしと云ふ

眞珠の著しき特質ハ一般人の知る如く其優美なる顯光（Lustre）を有することと是なりこの靈妙不識なる顯光は抑も如何にして生するやに就ては同く「サー、エベラード」氏の說あり曰く此顯光ハ膜層の最も光輝ある部分に裏せらる丶中心の所に存する細胞より起るものとせり乃ち知る眞珠の体質たる容易く光線を通過し得る透明体なることを然るに此學說の未た出てさる以前に在てハ顯光を以て偏へに表面より投射する光の結果と想像して眞珠の透明体なることを信する者有らざりしなり

尙像影（Image）に就きサー、タビッド氏（Sir David）に由て論せらるるものあり即ち珠母の殼裏に見る如く爰に溝の如き凹線の構造あり恰も赤兒指頭の柔軟なる皮の組織の如く細密なる皺ありて之か全しく眞珠の体に見らる丶なり此凹線

て此採獲所は嘗て和蘭人の有せしものなるが千七百九十六年以來英國の領する所となれり後此處に漁獲せしもの非常の額にして爲めに繁劇なる一大市場を出現せり此地にて「コンダッチー」沿岸殆んと二十哩の邊に於て盛に漁するなり

前記せし如く眞珠は珠母体中に在りて七年乃至九年に於て全く成熟するか如く而して其期の後は尚著しく增大し終に介殼の外に噴出せらるゝものなり故に之を漁するには其成熟の期を計り之に年を假すこと最も緊要とす嚮きに蘭人の如きは思慮なくして只た貪欲を恣まゝにせしを以て一時殆んと絶種に至らしめたり其英領となりし以來ハ制規を用ひて大に濫獲することを防遏するを務め先つ漁地を數區に劃し一季間に於て之か二或三區の外は決して漁獲を許さす斯くして毎年順次に輪轉するか故に其成育と發生とを增すへく珠母をして充分の時を得せしむるなり尚漁期の如きも時を限り之れを行ふことにて即ち二月に始まり四月の初に終る所の只た六週日或二ヶ月間に止まり隨時擅まゝに採獲せしめす而して漁舟の出るも一齊に發航し與倶に歸るの例にて殆と夜の十時に於て砲聲を相圖に總ての漁舟は陸風に帆を揚け未た爽昧に及はすして皆其地に達し稍や登旭と共に漁獲を始め此に於て忙しく働作すること正午に至る少焉沖風の吹起るや皆相戒めて歸裝するなり

今此説を終ふるに當り附言せんとするものあり蓋し眞珠を採收するは取りも直さす其介殼を捕獲することにして或は只た介殼を目的として之を漁する地も尠からすと云へは爰に之を言ふ決して蛇足に非さるへし元來此介殼の商品として現はるゝハ小板と爲されたるものにして或は厚きあり又薄きあり即ち觀飾の目的を以て諸種器物に貼附し或は小刀の柄となし、釦を製し其他玩具等に造るなり本邦の如き之を產出する例證多し(三州渥美郡の如き著名なり)而して重もに清國輸出品に供すと云ふ之に就き聞ける所のものあり介殼一二年生の製品百斤の價は三圓に過きす然るに五年若しくハ六年を隔て之を採る時は

七百六十年佛蘭西のアカデミーに於て博物學者レオマー氏(Reaumur)の説明あり以て世に知らるゝに至れり依是彼の眞珠の顯光を成せるものは實に魚鱗の下面に於て現はるゝ銀樣のものと同質たることを明かにするを得たりこの物質は即佛にて 'Essence d'Orient' と云ひ英の Essence of Pearl (眞珠の本質) 是れなり

こゝに尚數言を陳して讀者諸君の記憶を喚起せんとするものは吾人與に俱に仰望する高名なる博物學者リンチアス氏(Linnaeus)か眞珠に就て觀察せしことと是れなり諸君の記憶にある如く氏のナイト、オフ、ゼ、ポーラル、スターなる爵を受けて貴族に列し以て Carl von Linné の稱を用ふるに至りしは偏へに眞珠の品質を改良するの方法を發明したるに歸せりと云卽ち千七百四十八年の頃氏は眞珠に就き大に研究を遂け前記せし如き或る他の小動物の爲めに介殼より穿入せられて其孔を栓する爲めに眞珠の內側に成生する樣を實驗し得且又氏は夙に行はるゝ支那人の製造法を察知して之を自身の説に向け考査を施せり而して其友なるハレル(Haller)に贈れる書中言へることあり「余は介殼中に眞珠の起元し而して其成長する所以の理を盡く知得せりされは余は指定されたる或珠母をして必然五年乃至六年を經て通例豌豆の大さ有る珠を生せしむるを得へしとなり」

氏の此發明ハ最初瑞典國に於て大に賞賛せられ同政府ハ直ちに千八百弗の賞金を與へたり是當時此國に於て著しき金額たりしなり尚日ならずして貴族に列せらるゝ命有りたり瑞典政府ハ先つこの發明を秘し而して盛に其製造所を設け專ら之れに從事せしが僅かに數年の後にして之を見棄るの運とはなれり开は收失相償はさるの一事の爲なりと云實に製し得たる多くの品ハ其貴き價値を與ふる所の完全なる体形、美麗なる顯光とを與に具ふるもの甚た稀なることこそ是非なけれ嗚乎眞珠表面の顯光ハ此物をして價値あらしむる所以其靈妙なること亦謂れなきにあらさるなり

既に知る如く「セイロン」島ハ眞珠產地の著名なる所にし

産地ニヨリテ其俗稱一ナラス陸前ノかば因州ノうみやなぎ石州ノうみばせう三崎ノわきざし等ノ如シ

以上各地ノ産悉ク全種ナリヤ否ハ未タ之ヲ研究セズ日本海ノ産ト太平洋ノ産トハ或ハ自ラ異種ナラン聊カ記憶ノマヽヲ擧ケテ後ノ參考トナス(松原新之助)

●ひがひノ説　ひがいハこひ科ノ一種ニシテ Pseudogobius variogatus; Gthr. ト稱ス從來本邦ニ於テノミ知ラレタルモノニシテ本邦亦獨リ近江ノ琵琶湖ニノミ産スルカ如シ(他ニ之ヲ産スト云フモノアレ𪜈就テ之ヲ見ルニ皆もろこ即チ Leuciscus elongatus; Kirtland. ナリ)

該魚ハ從來生活シテ京都大津等ニ販賣シ此等地方人ノ頗ル嗜好スル處ナリシガ去ル明治十七年宮内省御料局ニ於テ之ヲ近江ヨリ取寄セ新宿御料地ノ池中ニ放養セラレ本年内國勸業博覽會水族室中ニ出品セラレタルニヨリ其生活ノ狀態ヲ實驗スルヲ得タリ由テ左ニ之ヲ畧述スベシ

琵琶湖中ひがいノ産スル處ハ大津以東ニシテ以西ニハコレナシ而カモ能登川尻ヨリ沖ノ島邊ニ最モ多ク膳所(ゼゼ)浦ヨリ勢多川之ニ次ク但勢多川ニ上ルニハ時期ニ定マリナシ其棲息ノ饒多ナル一人ノ漁夫一日能ク數千尾ヲ捕フ好ンテ砂礫ノ所ニ棲息スレ𪜈沖ノ島邊ノ泥沙ノ處ニモ亦之レアリ冬期ニ至レハ石塊又ハ樹枝等ノ間ニ潜蟄ス故ニ春夏ノ候ニハ網獲スレ𪜈冬期ハ筒ヲ沈メテ之ニ入ラシム好ンテ昆虫介肉ヲ食フ

五六月ノ頃砂礫ノ間ニ産卵ス現ニ博覽會開場中其雄魚ハ美麗ナル婚姻服ヲ被ムリ(体色ノ變シテ美麗トナルヲ云フ)雌魚ハ産卵管ヲ延ケリ然レ𪜈産卵ハナサヾリシ

該魚ハ成長殊ニ速カニシテ五六月ニ孚化シタルモノ翌年三四月ニ至レハ二寸トナリ二年ノモノ已ニ孕卵ス此圖ハ其成長シタル實大ナリ

其産卵期ニ於ケル裝飾ヲ見ルニ雄ハ目赤クシテ金色ヲ帶ヒ全体美麗ナル黄褐色ヲ呈ス雌ハ目赤カラスシテ背鬣ニ暗色帶狀ノ斑ヲ露ハシ臀鰭ノ前ニ長キ産卵管ヲ延ケリ

(松原新之助)

●本邦珊瑚ノ産地　珊瑚ニ三種アリ其一ハ古來世

百斤の價格十九圓に達し而して初年生の介殼凡二百四十個、七八年生は僅かに二十五個を以て一斤の量に充つへしと以て知る今ま初年生のもの一万斤を採收製造し之を輸出するとせは、時價些々に三百圓に過ぎさるも輪採法に依り順次を追ひ五六年生以上のものを漁獲するときは同一の斤數にして一千九百圓の價格を得る理あることを由て是等は六七年の歳月を假して採收するものを最も斤量も多く最價格高き期とするなり然れとも十年以上のものに至ては反て斤量價格共に輕減し收益少し之れを老貝と稱せり即老衰したるものにして肉瘠せ色赤黒を帶べり最後に至り敢て本邦眞珠產地に向て余の企望する所のものは第一に其繁殖並に保育の法宜しきを得て益々其產出の多額ならんことを次きに漁地には規律を設けて濫穫を防ぎ動物に時期を假し其完成せるものを採收し所謂勞少く利多きの主義に則らんことと是れなり以て國家富强の源を開き竟に吾日本帝國を眞珠の光と共に歐米人をして尊重するに至らしむることも亦善からすや

# 雜録

●**越王餘算** ハ Pennatula ノ一種ナラン此屬本邦各沿海ニ產ス現ニ昨年夏期相州三崎ノ沖ニ於テ箕作君ノ鯖縄ニテ獲ラレタルわきざしト稱スル者モ亦此一種ナリ此產地ノ最モ著名ナルハ鳥取縣因幡地方ニシテ時々仝國岩井郡網代村ニ於テ採收シタルモノヲ近傍ノ浦留町ニ輸リ之ヲ杖或ニ箸等ノ器具ニ製シテ販賣ス土人之ヲ白珊瑚ト稱ス仝地方名產ノ一ニ算セラル

仝地方ニ於テハ陸ヲ距ル五里乃至十里又石見ニ於テハ十里乃至廿里ノトコロニアリ深サハ共ニ五十尋乃至百五十尋其海底ハ泥濘ニシテ根ハ深ク泥中ニ入リ莖ハ底面ニ沿フテ横臥ス

此外山形、宮城、千葉縣等ノ沖ニ於テモ之ヲ採收セシヲ見タリ之ヲ概評スルニ日本海ノモノハ長サ四尺乃至六尺ヲ常トスレモ太平洋ノモノハ長キモ三尺ヲ越ヘス且其色日本海產ハ悉ク黒褐色(軸ノ色ハ白シ)ナレトモ太平洋產ハ淡紅色又ハ黒褐色ノモノアリ

に七種 Lycaenidæ に十種 Lemonidæ に一種 Nymphalidæ に二十一種 Danaidæ に一種 Satyridæ に十二種 Hesperidæ に四種都合六十五種なりしが本年八月の採集にて Hesperidæ に四種を増加せしを以て合計六十九種となれり而して新發見の種は

Syrichthus sinicus.

Pamphila lamprospilus, Feld.

Hesperia rikuchina, But.

Hesperia flava, Murr.

（高知尋中、黒岩恒）

●伊勢菰野山ノさんせうを　動物學雜誌第三十二號ニ鳥取縣下ノ大山椒魚(Giant Salamander)ノ通信アリシガ予ハ本年七月廿六日菰野山採集ノ節伊藤篤太郎君ト共ニ同山八幡ノ宮ノ左手ナル小サキ谷川ニ於テ黒魚ノ長一寸前后ニテ外鰓ヲ有シタル斗蝌狀ノモノ數疋ヲ捕ヘタリ土人言フ此魚長ズルモ數寸ニ止リ皆地上ニハ出テヽ木葉ノ下ニ蟄スト、此モノハ右ノ大山椒魚トハ異ル可ケレド參考ノ爲メニ茲ニ報ズ

●同山ノかはがらす　菰野山青瀧ノ傍ニハ川がらす居ル、去ル六月ノ動物學雜誌第三十二號ノ記事ノ過半島ノ記載ニカヽル而メ地方ヨリハ島根縣、靜岡縣ノ鳥通信アレ𪜈其中ニ、此ノモノ記載ナシ、果シテ產ゼザルヤ予ハ今伊勢ニ產ズルヿヲ知リタレバ之ヲ報ズ

●蠵龜(Chelonia)ノ產卵　蠵龜ハ三重縣ニテハ志摩南北牟婁及ビ南島邊ニ少カラザレ𪜈伊勢內海ニハ常ニ稀ナリ。サレ𪜈產卵ノ爲メ時々海岸ノ砂濱ヘ來ルモノヽ如シ、即チ去ル七月上旬北勢、富田村ノ近海岸ニテ蠵龜ノ產卵スルヲ見認メタル漁夫ハ澤山之ヲ捕獲セリ、其卵ハ所謂卵形ニアラズシテ圓クヤヽ扁ナリ剖キテ之ヲ見レバ其卵黄ニ富ムヿ鷄卵ニ似タリト雖全体彼ガ如ク流動性ニアラズ且ツ鷄卵ノ如ク容易ニ煮熟セズ、土人ハ大ニ痔疾ニ効アリト言ヘリ

右三件　會員　梅村甚太郎

●鮎の食物　此頃中鮎は如何なる物を食する哉とて

ニ知ラレタル地中海産ノ紅珊瑚(Corallium rubrum) 其二ハ伊太利ノ海岸ニ産スル一種ノ珊瑚(C. Lubrani) 其三ハ近時始メテ學士デーナ氏ノ記事ニ上リタル「サンドウヰッチ」島ニ産スル第二珊瑚(C. Secundum)ニシテ本邦近海ニ産スルハ此第三種ニ屬スルモノナリ

今本邦近海産ト地中海産トヲ比較スルニ本邦ノ珊瑚ハ其ノ幹枝ノ偉大ナルハ彼ニ優レトモ色ハ白斑等アルガ爲メ稍〻劣レルガ如シ又本邦珊瑚ハ其枝條左右ニ駢生シテ殆ンド扇狀ヲ成セトモ地中海珊瑚ハ各方ニ生シテ樹狀ヲナス

本邦土佐沖ノ珊瑚ヲ産スルハ其名已ニ久シ而メ近來又珊瑚ノ産出ヲ知リシハ肥前五島近海ニシテ此他鹿兒島縣屋久島、口永良部島、黒島近岸ニ於テハ明治廿年初メテ之ヲ獲是ヨリ二年前牛島、草垣(クサカキ)島近傍ニ於テ之ヲ獲、甑島近傍ニハ白色珊瑚ヲ産スト云フ琉球八重山ト鳩間島ノ間ニ於テ明治廿一年桃紅色珊瑚ノ一枝ヲ獲タリトハ該地出稼豐後漁夫ノ説ク處ナリ

前記ノ事實ヲ以テ見レバ日本近海即暖流ノ通過スル海中ニハ總テ之ヲ生スルモノナルベシ而メ其發生ノ狀ヲ案スルニ海底嵓礁ヨリ暖潮ノ來ル方向ニ對テ其枝幹ヲ發育スルカ如シ故ニ暖潮ノ南來スル土佐沖ニ在テハ珊瑚ハ必ス暗礁ノ南面ニ於テノミ之ヲ獲ベク潮ノ西南ヨリスル五島近海ニ在テハ暗岩礁ノ西南面ニ於テ之ヲ獲スルヲ常トス其水深ハ必ス七十尋ヨリ百三十尋ノ間ニシテ八十尋許ノ處ヲ殊ニ多シトス

從來珊瑚ハ他漁業ノ際ニ偶然之ヲ獲ルニヨリ鱶繩漁業船ニハ多ク珊瑚網ヲモ併セ携フルナリ

珊瑚ノ色澤ニ關シテハ古來含鐵ノ分量ニ依リ濃淡アリトセリ即チ其白色ナルハ鐵分ヲ含マサルニ依ルトノ説アリシガ近來ノ實驗ニテ其色ハ一種ノ有機質ニシテ「りぢん」(lesin)ナルコトヲ證明セリ「テレピンチン」ハ此有機質ヲ溶解スト云フ

（松原新之助）

●**土佐に於て新に發見せし蝶類**　土佐の蝶類にして從來世に知られしものは Papilionidæ に九種 Pietidæ

Monticelli 氏ハトリストマ科ノ感觸器ニ就キテ研究シタル結果ヲ公ニセリ題シテ Dialcuni organi di tatto nei Tristomidi ト曰ヘリ氏ノ著シキ發見ト稱フルモノハ即チトリストマ屬ノ或種ニ於テハ前端ノ両吸盤間ニアル片平ナル体ノ部分ノ前端ノ両隅ニ角ノ如キ突起アリテ筋肉ニ由テ或ハ突出サレ或ハ引止マル而シテ是ノ部分ヲ鹽化金ヲ以テ扱ヒ截斷シテ觀ルトキハ神經ノ數多存スルコ明白ナリト是ノ外トリストマ屬ノ或種ニ於テハ背ノ全面ニ突起アリ是等ノ突起チ前ト同ジ法方ニテ扱ヒ觀ルトキハ明ニ神經ノ是ニ入ルヲ見ルベシ又前端ノ吸盤ガ充分發達セザル種例ヘバ Epibdella Hippoglossi ニ於テハ是等ノ吸盤(Pseudoventose)ガ即チ感觸器トシテ働クモノナリ Monticelli 氏ノ論文ハ前後三十二頁ニ亘リ二枚ノ圖版ヲ附セリ中々面白キ論文ナリ

●**評判ト事實**　新聞紙上散見スル動物ニ關シタル雜報ハ信シ難キモノ甚タ多ク斯道ノ學者ニ取リテ有益ナルコハ殆ント無シト云フテ宜シキ位ナルガ去ル九月廿七日刊行岐阜ノ愛國新報上ニ出タル小蛾ノ群集ト題スル雜報ノ如キハ他ニ比スレバ左迄信シ難キト云フ程ニモアラサレドモ會員名和靖氏ガ現場ニ望ミ探撿セラレタルニ大ニ事實ト相違スル所アリタリトテ九月廿九日ノ仝新聞ニ一書ヲ投セラレタリ今此處ニ元ノ雜報及名和氏ノ投書チ併ヘ載セテ讀者ノ一覽ニ供ス

●小蛾の群集　去る廿一日の日暮れ頃武儀郡關町字萬屋町にて軒前の洋燈を點火せんとする折り何れよりか飛び來りけん無數の小蛾雪の如く散亂して忽ち燈火を消し又往來する者の顔を打ちて一時は通行も困難なりし、如何はせんと人々途方に暮れたるが心利きたる人の言葉に依り早速町内三四ヶ所にて燃火を爲し幾万とも數知れぬ小蛾の幾分を燒殺したるにぞ漸くにして落付きたり近傍を見れば死したる小蛾平一面に地上を覆ひ恰も春の花の風に散りたるが如し人々寄りて掻集めたるに玄米一俵が程有り各々舌を捲きぬ、件の蛾蟲は其名を知る者絶えて無く躰の長さ二三分計かり白色に

少しく調べたる所胃中には極めて多くのダイアトムあり腸に至るも矢張存在し尚尿に於ても現存することを見たり始めはダイアトムを食する樣に考へたれども能々熟思するにダイアトムの如き硅石質の堅硬なる物質は到底消化せざるものならんと愚考し屢々顯微鏡下に照すも半ば消化したる者を見出したることなし依て當地方の俗言に魴は水アカを食すと云へる事より考ふるに水アカともダイアトムの巣窟なれは事實に於ては誤りなきが如しと雖も果してダイアトムを目的として食するや其他の物質を食する際共にダイアトムを取る者なるやは小生の未だ知らざる所なり果してダイアトムの巣窟(ダイアトム幷に其他の物質ありと考ふ)を以て食物とするなれば出水等の爲にダイアトムの繁殖に大關係あれば從て魴の成長にも影響すれば當縣下の如き魴の繁殖地に於ては其食物を研究し置く事は目下の急務なり聊か記して諸君の高説を仰ぐ

但し本年は魴の繁殖極めて少く何れの地にても僅かに捕獲するのみなり(名和靖)

●トリストマ科寄生蟲ノ感觸器　外部寄生蟲ニ於テハ四十年前程ヨリ特別ノ感觸器アルヿ知ラレタリ一千八百四十九年 Köllicker 氏ハ Tristoma papillosum ノ体ノ前端ニ神經ノ數多存スルヲ以テ是ニ感觸ノ官能ヲ歸セリ其後 Fischer 氏ハ Opisthotrema cochleare ノ生殖門ニ近キ邊ニ於テ体ノ表面ニ圓錐狀ノ突起アルヿヲ發見シ又近年ニ至リテ Wright & Macallum 氏ハ Sphyranura Osleri ニ於テ矢張体ノ表面ニ同狀ノ突起アリテ其尖端ニ一個ノ鞏硬ナル毛ノ存在スルヲ發見セリ此機關ヲ截斷シテヨク觀ルトキハ下層ノ結締組織ヨリ極小ノ綿緯以上ノ圓錐狀体ニ入ルヲ見ル是ノ綿緯ハ神經綿緯ナリト斷言スルヿ能ハズト雖ドモ其ノ然ルヿハ甚ダ蓋然ナラムふたでむニモ同狀ノ機關ノ表面ニ存スルヲ見ル而シテ前者ノ如ク鞏硬ノ毛及ビ是ニ入ル所ノ神經ヲ發見スルヿ未ダ能ハズト雖ドモ若シ至當ノ方法ヲ以テ研究スルトキハ多分是等ノモノヲ發見スルニ至ルベシ以上ハ是マデ觀察サレタル特別ノ感觸器ヲ概記シタルモノナリ最近ニ至リテ伊國

澤山發生したりとて在靜岡の小笠原利孝氏より態々現品を郵送されたるを以て今更に比較するに靜岡の種は腹部より二本の長毛を出せも關町の種は全く三本の長毛を出すを以て自から異なる所あり然るに靜岡にては該蟲を正雪トンボ(由井正雪の靈魂なりといふ由)と稱へ居ると云ふ

何地にても奇を好むと云ふ事より隨分誤りを傳ふるに至るは當時一般の有様なれば今茲に不學なるをも顧みす聊か記して世人の參考に供す

九月廿八日　名和靖記

## ●最下等ノ生物

石川千代松

生物學者ノ世界ニ進化論ナルモノ入リ來リテヨリ此ノ方ハ生物學者ハモハヤ單ニ種々樣々ノ生物ヲ集メ其形狀ノ異ナルヲ見テ悅ヒ其彩色ノ美麗ナルヲ見テ樂ムノミニ非スシテ一個ノ生物ト他ノ生物トノ關係ヲ見出シ我々ノ如キ人間ヨリ下リテ最下等ノ生物ニ至ル迄ノ順序ヲ探究シ務メテ我々ノ先祖ヲ知ラント欲スルナリ、然レドモ生物ノ形体ハ實ニ種々樣々ニシテ或ハ之レヲ單細胞生物ト云ヒ多細胞生物ト云ヒ種々樣々ニ分類スレドモ各生物間ノ關係ハ如何ナルモノナルヤ、吾人々類ト猿猴トノ關係ハ如何ナルモノナルヤ、哺乳動物ハ始メ何レノ動物ヨリ發生シ來リタルヤ、鳥類ト爬蟲類トノ關係ハ如何、又或ハ魚ノ鰭ト他ノ脊椎動物ノ四肢トノ中間ニ立ツモノアリヤ、何故ニ吾人及ヒ其他今日ノ脊椎動物ノ多クハ手足ニ僅カニ五本ノ指ヲ具フルヤ等ノ疑問ハ既ニ幾何人ノ研究セシ所ニシテ今後モ亦多ク研究スル所ノ人アルヘシ、然レドモ余カ今日茲ニ論述セント欲スルモノハ此等ノ點ニ非スシテ最下等ノ生物其間ニ存スル所ノ關係幷ヒニ其高等動物トノ關係ナリ

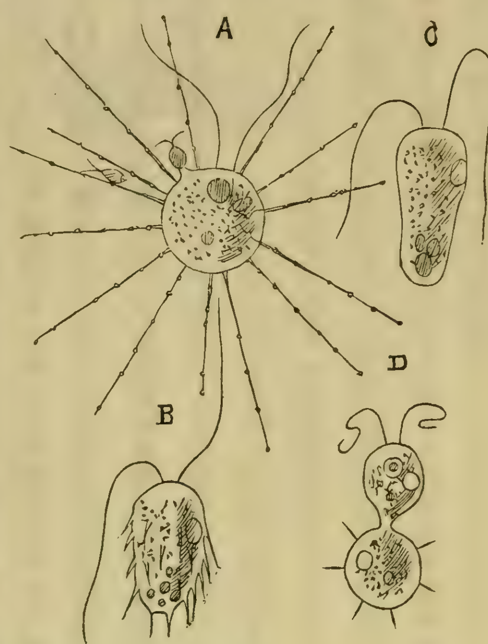
又如何シテ最下等ノ生物カ此地球上ニ現出セルヤ、如何ナル仕方ヲ以テ無機物カ有機物トナリタルヤ、有機物ハ他ノ天体ヨリ來リタルモノナルヤ、或ハ又地球上ニ現出セルモノナルヤ等ノ問題ハ余輩ハ單ニ論究シ得ルモノニシテ吾人今日ノ學識ニテハ實地ニ見聞シ得サルモノナレ

して羽長く蛆一二疋づゝ出して死し居たり、山爲す見物群集の中に物知り顏の老人も禿頭なでゝ「珍らしいと始めて〱」と叫び未だ年代記にも斯る事見當らぬ由物語りけるが實に近來の珍事てふ評判高く翼も足も付け加へて飛び傳ふる話し中々に大きなものとなれり今實見の儘を報ずるにこそと該地よりの通信

●小蛾とは蜉蝣なり　小生一昨廿六日加茂郡加治田村の農談會へ臨席し昨廿七日朝有志者と談話の際圖らず傍にある貴紙(廿七日發行)を一讀するに小蛾群集の記事あるを以て熟讀再考するに別に珍奇とするものとも思へず記事上より推測するに恐くはカゲラウと稱する六足虫羅翅類(トンボウの類)の一種ならんと想像し皈途幸ひ關町字萬屋町にて尋ねたる所每夜澤山燈火に集合する由を聞き得たるも尙ほ現物を得んと欲して所々を尋ぬるに神前の燈明に集り死したる者實に無數是を一見するに果して想像の如くカゲラウなり該地の人の話には每年多少集合するも本年は格別に夥多なる由なり該虫の種類は種々あれども槪してカゲラウと稱へ俗にアイムシと云ふ漢名は蜉蝣と書し英名は May-fly にして學名を Ephemera と云ふ今該虫の性質を聊か述ぶるに「蜉蝣は體軀細長にして前翅は後翅よりも大なり、尾端に二個若くは三個の硬毛を具へ夏時一時に多く發生して溯上若くは河上に群飛し、數時間を經たる後、水に落ちて沒死す、然れども其幼蟲は二年間生活し、水底の泥中石下或は水草間に捿息して、水虫を食とす、其腹部の側面にも葉狀の鰓を具へ、是にて呼吸するものなり(動物通解拔萃)何時も短命と云ふ時には蜉蝣を擧げて例證とする事あり實に成長の後は短命なれども幼虫の時は甚しく長期を要せり學術上隨分面白き蟲類なり」記事中小蛾と稱ふるは穩かならず又蛆一二疋づゝ出して死し居れりとあるは蛆と云ふは實に意外にして全く雌虫の特有物即ち卵子の一塊と成りて産出したるものなれば必ず左右より一個宛出すを以て普通となす而して本年の春期靜岡縣靜岡市に於ても一種の蜉蝣非常に

ルヲ得ルモノナリ、此ノ如キモノ、他ニ又体形ノ全ク鞭毛滴蟲ノ如クシテ只タ其後端ニ於テ原形質ノ虛足ヲ發スルモノアリ、同圖B、又第三圖Cニ示スカ如キモノハ全ク滴蟲ノ形狀ヲ有スレドモ未タ口ヲ生セスシテ只其鞭毛ノ本ニ於テ原形質ヲ出入シ以テ食物ヲ求入スルモノナリ、故ニ余輩ハ根足蟲ト滴蟲トノ間ニ明白ナル關係アリテ根足蟲カ次第々々ニ滴蟲ト變シタリト云フ明白ナル事實アリト云フヲ得ルモノナリ

第四圖




わみいバノ如キ根足蟲ト鞭毛滴蟲トノ間ニ位スルモノト同シク大陽蟲ト鞭毛滴蟲トノ間ニモ多ク異樣ノ蟲類アリテ此二者ヲ結ヒ付クルモノアリ、第四圖ニ示スモノハ此類ノ一蟲ニシテ其全形ハ大陽蟲ノ如ク圓形ノ体ヨリ四方八方ニ漸ヤ固形ナル原形質ノ絲狀体ヲ發スルモノアリ、其靜止スルトキハ若ク立派ナル大陽蟲ナレドモ其体ノ運動ヲ始ムルニ於テ其一端ニ二本ノ鞭毛ヲ發シ其動キニ因リテ游泳シ始ムル時ニ体ハ圓形ヨリ楕圓形ニ變シ射線狀ノ虛足ヲ縮入シ(B)、遂ニ確乎タル鞭毛滴蟲トナル(C)、此ノ蟲ハ又諸方ヲ游泳セル後其運動ヲ終リ變シテ又大陽蟲トナル、又其增殖スルニ於テモ一半体ハ大陽蟲ナルニ他半体ハ滴虫トナリ離別セントスルヿアリ(D)、玆ニ於テハ一体ニシテ半体ハ滴蟲ニ半体ハ大陽蟲ナリ

右ニ述ヘシ如ク鞭毛滴蟲ハ單ニ單細胞蟲類内ニテ他ノモノトノ關係ヲ明カニスルノミナラス又最下等ノ植物トモ大關係ヲ有スルモノナリ、即チ多クノ單細胞植物ハ鞭毛滴蟲ト少シクモ區別スルヿヲ得サルモノニシテ或ハ之レ

ハ是又余ノ今日論スル所ニ非スシテ他日ニ讓リ今日ハ全ク余輩ノ耳目ニ感シ得ルモノヽミヲ說カント欲ス

吾人ハ皆熟知スル如ク原生動物ト單細胞蟲ヲ大別シテ根足蟲及ヒ浸滴蟲トナス

根足蟲ハ第一圖ニ示ス如ク原形質ノ一塊ニシテ別ニ定リタル形狀モナク種々樣々ニ變形シ得ルモノナリ、其食ヲ求ムルモ別ニ定リタル場處ナク、体ノ何レノ部分ヨリモ之レヲ入レ又何レノ部分ヨリモ之レヲ出ス、又其体內ニハ通常一個ノ核ト稱スルモノアリ、又体內ニ溜ル所ノ液体ヲ排出スル所ノ伸縮胞ナルモノアリ（最モ根足ト云フモ皆ナ若クノ如キモノニ非スシテ種々樣々異ナリタルモノアリ然レ𪜈其概形ハ皆大同小異ナレハ他ハ玆ニ畧ス）

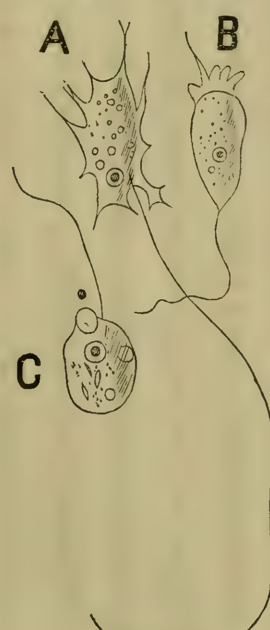
浸滴蟲ノ下等ナルモノ即チ鞭毛滴蟲ノ類ニシテ根足蟲ニ能ク類似スルモノアリ、鞭毛滴蟲ハ第二圖ニ示ス如ク同ク單一ノ細胞蟲ニシテ細胞体ト細胞核ナル主部ヨリ成立ス、圖ニ示スモノハ此ノ蟲類ノ的當ナル例トスヘキモノニシテ体ノ全形ハ長楕圓ニシテ薄膜ヲ被リ其前端ニ一本ノ鞭毛ヲ生シ其運動ニ因リテ水中ヲ游泳シ且ツ鞭毛ノ下ニ位スル所ノ口ニ食物ヲ送入ス、体ノ原形質內ニ又伸縮胞アリ

第二圖



右ニ述ルカ如ク一個ノ滴蟲ト一個ノ根足蟲トノ別ハ實ニ大ナルカ如クナレ𪜈余輩ハ原生動物類ニシテ實ニ以テ此二類ヲ結合スルモノ多クアルヿヲ知ルモノナリ、第三圖Aニ示ス所ノモノハ即ハチ此類ノ一ニシテ其体形ハ能クあみいバニ類スルヲ以テ實ニ他ノあみいば類ト一目シテ混シ誤ルノ恐アリト雖ヘ𪜈其一端ニ長キ鞭毛ヲ生シ以テ時々迅カニ水中ヲ動行スルヲ以テ他ノあみいばト區別ス

第三圖



シ高鳴ヲナスᄀ、等種々面白キ有益ナル演舌アリ終リテ例ニ因リ役員ノ改撰投票ヲ行ヒ左ノ諸君當撰セラレタリ

會頭　箕作佳吉

幹事　飯島魁 編輯擔任　岸上鎌吉 錄事擔任　菊地松太郎 會計擔任

當日出席員十七名午后四時散會ス

●會員彙報

入會者

理科大學專科生　各務多作君

第一高等中學校生徒　宮崎幹之助君

●寄贈交換書　去九月中本會ニ領収シタルモノ左ノ如シ

帝國博物館列品目錄四部 動物標本、植物標本、金石、岩石、及化石標本、農業品標本　帝國博物館

植物學雜誌第五卷第五十五號　植物學會

東京醫學會雜誌第五卷第十七、八號　東京醫學會

成醫會月報第百十五號　成醫會

擴農會雜誌第二十五號　擴農會

牧畜雜誌第六十四、五號　牧畜雜誌社

大日本農會報告第百二十二號　大日本農會

大日本水產會報告第百十二號　大日本水產會

日本蠶業雜誌第四十二號　日本蠶業雜誌社

日本園藝會雜誌第二十八號　日本園藝會

## 社告

動物學會々員諸君

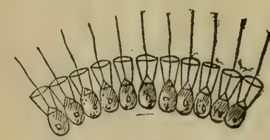
本會經費ノ都合有之候間會費未納ノ諸君ハ至急爲替或ハ早達便ヲ以テ御拂込被下度候

東京動物學會

爲替ハ東京本鄕理科大學動物學室內東京動物學會ヘ宛テ、本鄕郵便局ヘ御振拂被下度候

又會員諸君御移轉ノ節ハ其旨本會ヘ御通知ナシ下サルベク候

第五圖



ヲ植物トナシ或ハ之ヲ動物トナスモノ實ニ多シ、然レモ其最モ余輩ニ關スル所ノモノハ其多細胞動物ト大關係ヲ有スルモノ也、茲ニ鞭毛滴蟲ノ類ニシテこあのふらげらわた(Choanofagellata)ト稱スルモノアリ(第五圖)、其体形ハ一個ノ細胞ニシテ其一端ニこっぷ形ノ搆造物ヲ生シ其内ヨリ一本ノ鞭毛ヲ生スルモノナリ而シテ通常群ヲナシテ棲息ス、然リ而シテ此ノ類ノ細胞ハ海綿蟲ノ内層細胞ニアルモノニシテ其類似スルヿ實ニ以テ驚クニ足レリ固ヨリ此類似ヲ以テ海綿蟲カ直チニこあのふらげらわたヨリ進化シ來リタリト云フニ非ス、然レモ此類似ハ海綿蟲トこあのふらげらわたトノ間ニ密ナル關係アリト云フヲ示スニ足ラン、然レモ茲ニ又多細胞動物カ單細胞動物ヨリ變シ來リタリト云フ直接ノ證據アリト思考ス而シテ此動物ハ即ハチへっける氏ノ發見サレタルまごすふぇら蟲是レナリ

第六圖ニ示スモノハ即ハチ此蟲ノ發生ヲ現スモノニシテ其以テ單細胞蟲ト多細胞蟲トノ間ニ位スルヿヲ知ルヘシ、即ハチ該蟲ハ一時ハあみいば形ヲナシテ水底ヲ匍匐シ一時ハ三十二個ノ滴蟲群体トナリテ水中ヲ游泳スルモノナリ、而シテ此ノ蟲トばんどりな蟲(第七圖)及ヒをいどりな或ハぼるぼくす(第八圖)トヲ比較シ見ルニ於テハ明カニ以テ單細胞蟲ヨリ多細胞蟲ニ變スルノ順序ヲ見ルヲ得ヘシ

(以下次號)

# 東京動物學會記事

●年會　明治廿四年九月十九日午后二時ヨリ帝國大學理科動物學敎室ニ於テ開會ス箕作佳吉君ハ遠州相良海濱ニ於ルうみがめ產卵ノ場所幷ニ該沿岸ハ巨濤常ニ之ヲ洗フヲ以テ汀ニ棲息スル動物ハ自ラ特異ノ性質ヲ具フルヿ等ニ就テ飯島魁君ハ乘鞍嶽採集ノ實況ニ就テ山中野宿ノ模樣、雷鳥ノ棲所ニ區域アルヿ、わかはらノ繁殖時期ニ際

動物學雜誌第參拾七號

明治廿四年十一月十五日發兌

# ●かりぶでぁ屬ノ二種ノ新くらげ（木板圖六個入）

岸上鎌吉

Zwei neue Medusen von *Charybdea*

〔*Ch. brevipedalia* n.sp., *Ch. latigenitalia* n.sp.〕.

von

K. Kishinouye.

かりぶでぁ屬ハ Cubomedusæ トテ眞正くらげ類ノ中ニテ餘程面白キ搆造ヲ有スル綱目ニ屬ス。本邦沿岸ニ産スル此屬ノくらげニシテ予ノ今日迄ニ得タルモノ二種アリ。二種共ニ新種ナレバ爰ニ其形狀ヲ圖シ其搆造ノ大畧ヲ述ベン。

第一種 **Charybdea (Charybdusa) brevipedalia.** (Figs. 1-3).

Schirm vierseitig-pyramidal, oben flach gewölbt, kaum doppelt so hoch als breit. Magen gross, quadratisch, flach, fast so breit als der Schirmbreite, Schlundrohr vierseitig-prismatisch, sehr kurz, mit 4 ganz wenig entwickelten Mundlappen. Mundöffnung sehr breit. 4 Phacellen kammförmig, etwas kürzer als ihre Zwischenräume, zusammengesetzt aus 10-12 gestielten pinsel-förmigen Filament-Büscheln. Abstand der herz-förmigen Sinnesnischen vom Schirmrand etwa $^1/_5$ so gross als der Abstand der Pedal-Basen von einander. Velarium breit, in jedem Quadranten mit 4 spärlich verästelten Velar-Kanälen. Pedalien schmal, halb-mond-förmig, fast $^1/_4$ so lang als die Schirmhöhe. Tentakeln cylindrisch, mehrmals länger als die Schirmhöhe.

*Grösse:* Schirmbreite 16 mm., Schirmhöhe 30 mm.

*Fundort:* Schima.

ニ小サキ圓形ノ管アリ互ニ通ズルノミ。胃腔ノ四隅ニPhacellus トテ能ク發達シタル胃糸ノ叢アリ。生殖腺ハ八枚ノ廣ク薄キ板狀體ニシテ一方ハ隔壁ニ沿フテ附着シ一方ハ自由ニメ放射囊ノ内ニ出ヅ。此くらげニハ Velarium ヲ感覺體ノアル邊マデ内側ヘ釣リ上ケ居ル三角形ノ膜アリ、かさノ下壁ノ襞ヨリナル、之ヲ Frenula ト云フ。又 Velarium ノ内ニ放射囊トツヾク管アリ。

此くらげノ他種ト異ナル點ハ食道管ノ短カキト胃糸ノ總狀ヲナシテ軸ノ上ニアルト(第三圖)弦月狀ヲナセル他種ニ比シテ短カキ Pedalia ヲ有スルト Velarium ノ内ニアル管ハ十六アリテ二三回分枝ス(第二圖)。此くらげノ色ハ今記憶セズ、かさハ無色、觸手ハ鳶色ナリシカト覺ユ、生殖腺ノ色ハ覺ヘズ。

此くらげハヘーけ氏ノ Ch. Rastonii ニ能ク似タリ然レドモ Pedalia ト Phacellus トノ所ニテ異ナレリ。

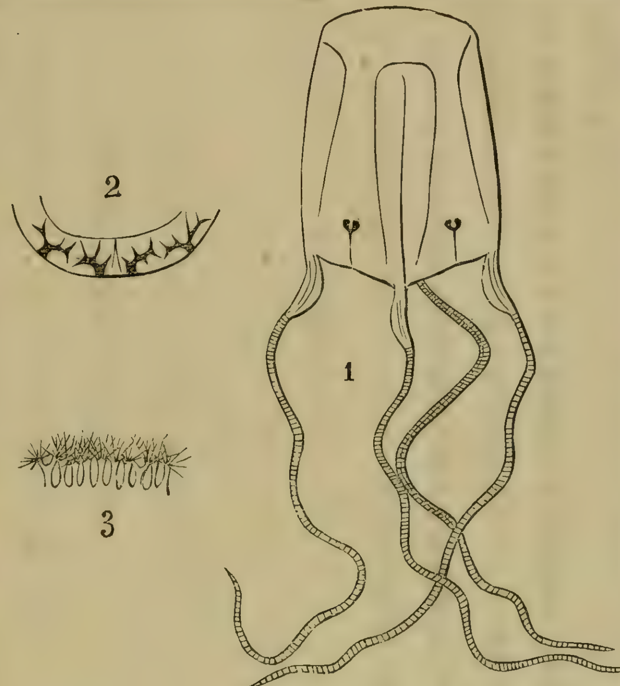
志摩國英虞郡和具村ノ北浦ニテ採集セリ。

第二種 **Charybdea (Charybdusa) latigenitalia** (Figs. 4-6).

Schirm glockenförmig, oben flach gewölbt, etwas höher als breit. Magen gross, quadratisch, flach, wenig breiter als der Schirmradius. Schlundrohr vier-seitig pyramidal, sehr lang, mit 4 grossen Mund-lappen. Mundöffnung breit. 4 Phacellen halbmond-förmig, fast den ganzen Rand der Magenbasis säumend. Abstand der nieren-förmigen Sinnesnischen vom Schirmrand 1/3 so gross, als der Abstand der Pedalbasen. Velarium breit, in jedem Quadranten mit 4 reich verästelten Velar-kanälen. Pedalien lanzetförmig, fast so lang als die Schirmhöhe. Tentakeln cylindrisch.

*Grösse*:—Schirmbreite 15 mm., Schirmhöhe 20 mm.

*Fundort*:—Hitachi.

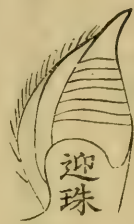



1. Charybdea brevipedalia n.sp. (nat. Grösse)
2. Ein Quadrant der Velariums.
3. Phacellus.

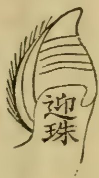
かさハ四角ナ筒ノ如ク上ニ至リテ少シ細シ、幅ヨリモ高サノ方殆ンド二倍程大ナリ。かさノ外面ハ平滑ナリ、只十六ノ縦溝ノ走ルアルノミ、其十六ノ溝トハ四本ノ perradial ナル溝（感覺器ノ入込ヨリ縁膜ニ達ス）ト四本ノ interradial ナルモノ（かさノ四隅ニアル淺キ溝）ト八本ノ adradialナルモノトナリ、最後ニ述ベタル八本ノ溝ハかさヲ四個ノ廣キ側壁ト四隅ニアル四個ノ狹キ柱狀ノ部分トニ分ツ。かさノ内面ノ筋肉ハ環狀ナルモノト縦ニ走ル紐狀ナルモノトアリ、紐狀ノ筋纖維ハ感覺體ノアル所ヨリ上ハ胃腔下壁ノ所ニ終ル。かさノ周邊ニハ四個ノ perradial ナル感覺體ト同數ノ interradial ナル觸手トアリ、かさノ周邊ハ薄クナリテ内ヘ曲ガリはいどろくらげ類ニ見ル Velum（縁膜）ニ非常ニ能ク似タルモノヲ作ル、之ヲ Velarium ト云フ、へっける氏ハ之ト Velum トハ全ク別ナルモノト說ク。Pedalia ト稱スル四個ノ寒天質ノ物ヨリナルかさノ突起ノ如キモノかさノ周邊 interradial ノ所ニアリテ觸手ノ基部ヲ作ル。消化循環系ハ非常ニ簡單ナリ、口ヨリ短カキ食道ニツヾキ其上ニ廣キ方形ノ腔洞アリ、是レ中央胃部ナリ、中央胃ヨリかさノ四壁ニ沿フテ幅廣キ方形ナル四個ノ放射囊出ヅ、各放射囊ハ細ソキ interradial ナル隔壁ニ因テ他ノモノト隔テラル、只隔壁ノ下部

違アラント思ヒ嘗テきくかしらかはほりヲ識別スル際モ体軀四肢ノ大小耳殻ノ角度等ニ多少ノ差違アルハ老少ノ爲メニ然ルナラント誤認シテ居リマシタ所今甲乙二種ノ幼兒ヲ比較シテ視マスニ其大サハ老幼ニ因テ違ヒカアリマスケレモ耳殻ノ形狀ハ幼兒ノ時ヨリ各固有ノ形態ヲ具フルモノニテ譬ヒ耳殻ソノモノカ何程增大スルトモ決シテ變形スルモノデアリマセヌ

甲種ノ耳殻




乙種ノ耳殻



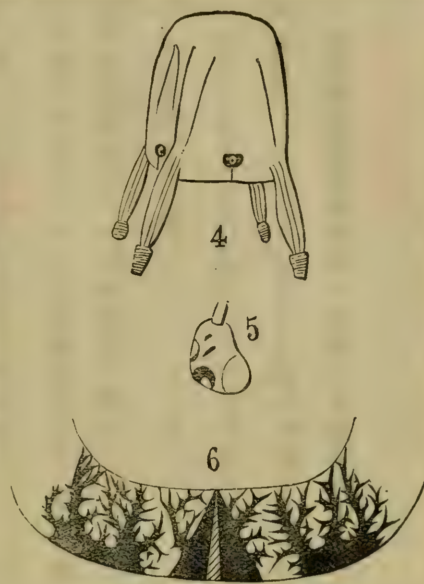

爰ニ甲乙二種ノ耳殻ノ略圖ヲ揭ゲテ其違ヒヲ視マスト迎珠ノ形チト耳殻ノ尖端ニ些ノ相違カアリマス併シ此差違ハ前ニモ申シタ如ク老成ノ標品ニテモ幼稚ノ標品ニ於テモ明瞭ニ其形態ヲ具ヘテ居リマス

私カ是迄各所ニ於テ視マシタモノヤ寄贈セラレタ標品ヲ再ヒ調査シテ甲乙孰レノ種類ニ屬スルカヲ區別シテ見ルト東京、信州大野川、筑前英彥山（高千穗君寄贈）相州小田原產ノ標品ハ甲種ニシテ武州秩父、駿州須走、大和吉野郡產ノ標品ハ乙種ニ屬シマス此兩種ノ大サヲ測リテ其最大數ト最小數ヲ擧ケマスト左ノ如クデス

| | 甲 | 乙 |
|---|---|---|
| 頭 | 27—25ミメ | 19—17ミメ |
| 尾 | 37—30 | 21—13 |
| 耳殻 | 22—17 | 15—12 |
| 下膊骨 | 60—51 | 41—32 |
| 拇指 | 10—7 | 6—5 |
| 第三指 | 94—69 | 60—35 |
| 第五指 | 80—60 | 55—34 |
| 脛 | 29—21 | 18—15 |
| 足爪 | 14—7 | 9—5 |

甲ハ即チきくかしらかはほりニテ乙ハごきくかしらかはほり (Rhinolophus minor, Horsf.) デアリマセウ毛色ハ兩種トモ著シキ差別ナク鼻孔ノ周邊ニアル三部ノ膜瓣ニモ異狀ヲ見マセヌ併シ尙ホ識別ノ標徵トモナル可キハ下唇ニ在ル三ツノ縱溝ニシテ甲種ニ於テハ中央ノ溝著シク深ク左右ノモノ甚タ淺ク乙種ニ於テハ三溝トモニ深ク且ツ明瞭ニ見ヘマス

諸君若シ此種ノ蝙蝠ヲ採集セラルヽコトアラハ試ミニ右ニ述ベマシタ三要點ニ就テ鑑査セラレンコトヲ望ム




4. Charybdea latigenitalia n.sp. (nat. Grösse).
5. Rhopalia.
6. Fin Quadrant des Velariums.

此くらげハ常陸邊ノ産ノ由、前種ヨリ小ナリ、Pedalia長シ、觸手ハ切レタル如ク如何程長キモノカ知レズ、Velarium ニアル管非常ニ數多ノ小枝ヲ出ス(第六圖)、食道管長ク、唇瓣能ク發達ス、Placellus ハ弦月形ヲナシテ殆ンド胃腔ノ四隔ヲ圍ム、色ハ知レズ、感覺體ニハ六個ノ眼ト一個ノ大ナル耳アリ(第五圖)。此くらげノ生殖腺ハ非常ニ幅廣シ、此點ニ於テ Ch. murrayana ニ似タリ。

相州三崎ニモくりぶでおノくらげアレドモ以上二種ノ内何レヘ屬スルカ又ハ全別種ナルカ今標品ナケレバ知ルコト能ハズ。

## ●こきくがしらかはほりニ就テ

波江元吉

私カ嘗テ本誌ニ報道致セシ九種ノ蝙蝠ノ外ニ尚ホ實物ニ就テ識別スベキ種類三種アリテ其中第一 Rhinolophus Cornutus (R. Minor) ハ第壹卷七百七十三葉ニ掲ケマシタ(表中各部ノ大サヲ記ス)駿州須走及大和吉野郡洞川産ノ標品ニ之レナキヤ否ヤヲ疑ヒマシタカラ第貳卷二百〇三葉上欄ニソノコトヲ記シテ居キマシタ然ルニ本年夏季飯島魁菊地松太郎藤井健次郎三君乘鞍岳エ採集ノ爲メ旅行セラレシ際信州大野川ニ於テ蝙蝠三頭ヲ捕獲セラレ土産トシテ私ニ示サレマシタ私ハ先ツ其厚意ヲ謝シ靜カニ其標品ヲ視ルニ一頭ハ老成ノモノ二頭ハ幼兒ニシテ共ニこきくがしらかはほりナリキ其若キ二頭ヲ彼ノ疑カハシキ標品ニ比較シテ視マシタ處左ノ如キ差違ヲ視出シマシタカラ取アヘズ報道致シマセウ

私ハ蝙蝠ノ耳殼ノ形狀ハ老幼ニ因テ其角度等ニ多少ノ差

室トヲ分界ス而シテ撿スヘキモノハ

(二〇四)第一食管諸部ノ排置法ニシテ前胃ハ砂嚢ノ前面ニ續キ十二指腸ハ其右側ノ前縁ヨリ起出シ十二指腸ニ亞キテ小腸ノ一部タル空腸アリ續テ廻腸ノ大部ヲ成シタヽ一片ノ腸間膜襞ニ由テ連綴セラレタル一彎部アリ次ニ廻腸ノ末端ハタヽ一廻シテ其直徑ハ前方ヨリ小サク色ハ通常綠色ヲ呈セリ此部ヲ過クレハ廻腸ハ漸々增大シテ直腸ニ移行ス

(二〇五)第二砂嚢ハ堅强ナル側壁ヲ有シテ其突隆セル左右兩面ノ中央ハ綠色ノ腱ヨリ成リ筋纖維ハ此腱部ヨリ周圍ニ向テ放散ス

第卅一項　腸間膜ヲ切除シ腸ヲ伸張シテ其長サヲ測リ次ニ前胃ト砂嚢ヲ剖開スベシ就中砂嚢ニハ其隆起面ノ中央ニ縱截ヲ施シ又腸ノ一部ヲモ切開シテ左ノ查察ヲ遂クベシ

(二〇六)前胃ノ腺狀質ナル厚壁ハ其內面ニ胃腺(Gastric glands)ノ開口ヲ明亮ニ出現ス

(二〇七)砂嚢ノ側壁ハ頗ル厚ク內面ニ襯展セル上皮ハ黃色若クハ綠色ニシテ角質ニ變シ多クノ砂石ヲ藏ス前胃ノ入口ハ其前端ニアル廣口ニシテ幽門ハ前胃口ノ右方ニ存スル半月狀口ナリ

(二〇八)小腸ヲ粘膜面ニ存スル細微ノ纖維狀突起即チ絨毛(Villi)ハ腸壁ヲ清掃セルノ後水底ニ撿スルヲ便トス而シテ十二指腸及廻腸ノ初部ニアル者ハ比較上長ク密列スト雖モ其末路ニ在ルモノハ短ク粗生シテ最末ニ至レハ縱隆起ニ移變ス

第卅二項　下行大靜脈及殊ニ雌ニ於テハ輸卵管ノ前端ヲ損セサルヤウニ腎臟ト生殖器トヨリ腹膜及後腹氣嚢ノ遺留片ヲ除去スベシ

(二〇九)睪丸(第七圖コ)ハ二個ノ白色ナル楕圓體ニシテ全成セル者ニアリテハ大凡四分ノ三「インチ」アレトモ幼稚ノ者ニテハ甚タ小ナリ互ニ相接シテ腿ノ前端ト殆ント並行ス

(二一〇)輸精管(セ)ハ各睪丸ノ內側ヨリ發スル白色ノ細

## ●動物解剖手引草（鳥類ノ部）

岩川友太郎

第廿九項　門脈ヲ二ケ所ニテ結ヘ其結節ノ間ヨリ之ヲ切斷シ（注射ヲ施セル者ニハ此緊縛ヲ要セス）次ニ胃肝網膜ヲ切離シテ肝臟ヲ右方ニ反轉シ以テ左ノ諸部ヲ撿スベシ

（一九八）前胃（Proventriculus）ハ豐厚ノ腺狀壁ヲ有セル淡紅色ノ楕圓体ニシテ心肝ノ背側ニ當リ砂嚢ノ直前ニ位ス

（一九九）脾臟ハ赤色ノ小楕圓体ニシテ胃脾網膜ト名ツクル腹膜ノ一片ニ依テ前胃ノ右側ニ附着ス

（二〇〇）腹腔動脈（Coeliac artery）ハ右肝葉ト前胃ノ間ヨリ突出シテ前胃、砂嚢、肝及腸ノ一部ニ分布ス其背動脈ヨリ岐出スルノ狀ハ後ニ至リテ更ニ明視スルヲ得ベシ該管ハ二條ノ主枝ニ分レ一ハ胃前動脈（Anterior gastric a.）ト名ツケ前胃ニ小枝ヲ分與スルノ後砂嚢ノ左側ニ移行ス一ハ胃十二指腸動脈（Gastro-duodenal a.）ニシテ砂嚢ノ右側、十二指腸及廻腸最末ノ彎曲部ニ分布ス

（二〇一）迷走神經ノ胃枝（Gastric branch of the Vagus）ハ前胃ノ前面ニ存スル細神經ニシテ動脈ト並行シ以テ砂嚢ノ後方ニ移行ス

（二〇二）腹臟神經（Splanchnic nerve）ハ胃十二指腸動脈ト並行シテ腸ニ分布ス

（二〇三）前腸間動脈ハ腹腔動脈ヲ距ル一「インチ」許ニアリテ腸ノ大部ニ於テ分布ス之ヲ明視セントスルニハ十二指腸ヲ外方ニ引キ其膜腹襞ノ一部ヲ切除スルヲ要ス

第三十項　盲腸ノ少シク前方ニ於テ小腸ニ二重ノ結縛ヲ施シ其結節ノ間ヲ切斷シ心臟ヲ損傷セサルヤウニ可及的前方ニテ前胃ヲ切離シ次ニ腸間膜ヲ切除シテ以上二ケ處ノ間ニアル腸ヲ除去スベシ此際前方ハ心嚢ノ前背面ニ附着シ体腔ヲ横亘シテ天幕ノ如ク擴張セル一枚ノ纎維質膜即チ斜隔膜（Oblique septum）ヲ認ムベシ此膜ノ前端ハ胸骨端ニ附着シ後端ハ体壁ニ附着シテ氣嚢ヲ保藏セル肺下室（Subpulmonary chamnber）ト体腔本

盤及薦骨ニ出テ形成セル腔洞中ニ安置ス

(二一五)下行大靜脈(第九圖カセ)ハ左右腎臟ノ前端ト右肝葉トノ間ニ跨レル大脈管ニシテ肝ノ實質ニ進入シ其前端ヨリ出テヽ心臟ニ達ス該管ハ腎臟、生殖器及左右ノ後肢ヨリ血液ヲ運出スル二條ノ腸骨靜脈(二一八)ノ結合ヨリ成ルモノナリ

(二一六)輸尿管(第七及八圖ユ)ハ各腎臟ノ腹面ニ於テ前中二葉ノ間ヨリ起リ排泄滞ニ向テ後方ニ移行セル一條ノ細管ニシテ雄ニ於テハ同側ノ輸精管ノ内側ニ並行シ雌ニ在リテハ輸卵管ノ背側ニ沿走ス此部ノ解部ヲ行フ際ニハ腎靜脈(二二〇)及腎門靜脈(二一八)ヲ損傷セサルヤウ注意ヲ要ス

(二一七)副腎(第七圖フシ)ハ腎臟ノ前端ニ存スル不正形ノ黄色体ニシテ腸骨靜脈ト密着ス

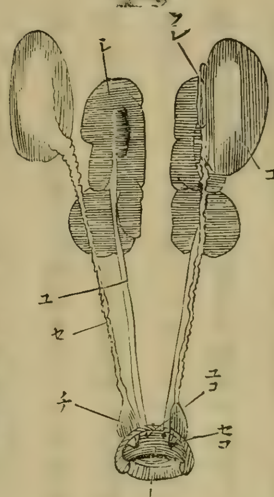
## ●あまがひる(Hyla arborea, L.)ノ卵並ニ産卵期

池田作次郎

あまがひるノ春期農家ノ田植スル頃地中ニ於テ産スルコトハ兼テ余ノ實見モシ又聞キ知レル所也實ニ余ハ去ヌル明治十九年ノ五月中旬(日ハ其節ノ記錄ヲ甲州ニ於テ昆虫採集中遺失シタル爲メ今記臆セズ)磐代國會津郡叶津村ニテ方リニ産卵シ居タルヲ發見セシコトアリ又其年其地ヨリ歸京後五月下旬東京早稻田近傍ノ田畔ニ於テ既ニ發育シテをたまじやくし形トナリ居タルヲ發見セリ而シテ其後本年ニ至ルマデハ常ニ此件ニ意ヲ留メテハ居レド或ハ他事ニ支ヒラルヽカ或ハ好採會ニ乏シク荏苒唯時機ノ至ルヲ待ツノミナリキ然ルニ本年ハ其機モ熟シケン五月十日夕刻駒場近傍ノ田畔ヲ徘徊セシニ數多ノあまがひるハ數日前ヨリ一層聲喧シク鳴キ躁キ徊ハル其鳴聲ハ平常天催雨ノ日又ハ夏ノ日ノ夕刻ニ鳴ク聲ノ如ク高カラズシテ一種異樣ニモまろころ〱〱ト鳴クノミ也故ニ此處ニ奇意ヲ生ジ機失フ可カラズト思ヒ込ミ無我無衷矢鱈ニ田ノ畔ヲ掘リ返ヘシタリ果セル哉卵群五六個ヲ得テ心密カニ欣々然稍ヤク歸思ヲ催タレ𪜈日ハ遂ニ西山ニ沒シ

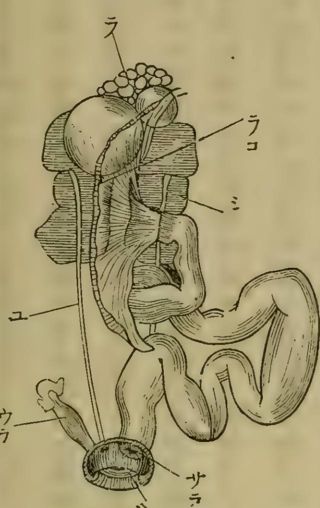
管ニシテ後方ニ直行シ排泄溝（ハ）ノ邊ニ至レハ稍〻膨大シテ貯精嚢(Vesicula seminalis)（チ）ヲ形成ス此管ハ全成者ニテハ巻縮スレトモ幼者ニテハ鉛直ナリ

第七圖




全成セル雄ノ輸尿生殖器（2/3）

第八圖




全成セル雌ノ輸尿生殖器（2/3）

（二一一）卵巣（第八圖ラ）ハ睾丸ト殆ント同位置ニ在リテ少シク左方ニ偏在ス不正形ノ單一体ニシテ各〻一卵ヲ藏セル數多ノ球狀体即チ卵胞（Capsule）ヨリ成リ其卵成者ニ在リテ櫻實大ヨリ以下大小アレトモ幼者ニ於テハ針頭ヨリ大ナル者アラス而シテ卵巣ハ左側ノ者ノミ發育シ右側ノ者ハ稀ニ初的ノ儘ニテ存在スルヿアリ

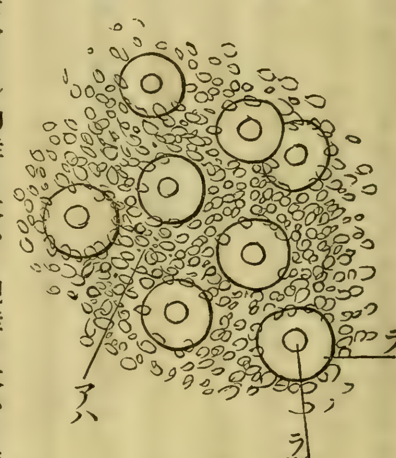
（二一二）輸卵管（サラ）ハ成者ニテハ直徑殆ント三分ノ一「インチ」ニ逹シ稍〻厚壁ヲ有セル廻曲管ニシテ骨盤腔ノ左側ニ位ス其後端ハ排泄溝ノ左側ニ開通シ前端ハ薄膜質ニシテ大ナル喇叭口「ラコ」ト成リ其口徑一「インチ」許ニシテ体腔ト交通ス此喇叭口ト之ヲ支持セル腹膜トヲ區別セントスルハ常ニ困難ナルヲ以テ水底ニ解剖スルヲ良トス（二一三）右輸卵管（ウラ）ノ痕跡ハ殆ント半「インチ」許ナル小盲管ニシテ通常排泄溝ノ右方ニ附着シ存スルト雖モ其大サハ各個体ニ由テ不同ナリ

（二一四）腎臟（第七及八圖シ）ハ肺ノ直後ニ位シ体ノ背壁ニ密着セル暗赤色体ニシテ各〻前後中ノ三葉ヨリ成リ骨

ニテ之レアル乎而シテ産卵スル處ハ常ニ第一圖ノ(イ)ト記セル如ク田畔又ハ池、溜リ水等ノ岸邊ニテ斜ニ水ニ面シタル側面ニ限ル者ノ如シ是レ盖シ卵ヨリ孚化シ出ヅル幼蟲即チをたまじやくしノ亦他ノかわず類ト同シク早晩必ズ水中ニ入ル者ナレバ夫レ之ヲ爲スニ便利ナル個處ヲ撰ムヨリ自然此樣ノ處ニ産卵スル者ト推察サルヽ也

前例ニ依リ此處ニ卵群並ニ卵粒ノ形況ヲ陳スルコト左ノ如シ曰ク卵粒(第三圖ラル)ノ大サハほのがひるノ如シト雖モ色ハ全ク淡黃色ニシテ動物性極(Animal pole)ハ特ニ淡ク殆ンド透明也然レモ既ニ孚化シテ水中ニ出デタルをたまじやくしハ青黑色也是レ漸々体外皮ニ青黑色素ノ出現スルニ依ル各卵粒ノ周圍ハ前號陳ベタルさんしやううをノ卵ノ如ク透明ニシテ球狀ヲ爲セル粘質物ヲ以テ被胞サルヽ(第三回ラ)故ニ決シテ卵粒ト卵粒ト互ニ相觸ルヽノ恐之レアルナシ加フルニ各被胞間ニハ一種特別ノ氣胞(第三回アハ)ヲ以テ充滿シ居ル故ニ卵又幼蟲ノ己ガ發育ニ必要ナル空氣ハ此氣胞中ノ者ニテ既ニ充分ナル可ク信ズ一卵群中ニ含マル卵粒ノ數ハ未ダ詳ニ算シタルコト無シト雖モ少クモ二三百個ハ之アル可

第三圖




ク信ゼラル卵群ノ大小ハ親蛙ノ大小ニ依リテ一定セズト雖モ多クハ五せめノ六せめ位也尙産立テノ者ニ於テハ幾分カ固クシテ且ツ多少ノ彈力ヲ有シ居レモ漸々日經テ內ニ在ル卵ノ發育スルニ隨ヒ柔軟トナル

思フニ雌雄相撰ミ將ニ産卵セントスル時ニハ兩個重ナリタル儘地中ニ入リ入口ハ常ニ下方ニ在ル者ノ如シ豫メ土塊ヲ左右前後ニ壓迫シテ空房トナシ然ル後産卵ヲ始メ産卵果テヽ出ル處ハ矢張入リタル所ニテ下方ヨリスル者ナラン故ニ卵ヨリ孚化シテをたまじやくしノ既ニ發育シテ最早水中ニ出テヽモ差支ナキ有樣トナル頃ニ至レバ彼ノ

テ間ナク空黑天暗トナリタリ特ニ林中ノ正道ニ乏ク遂ニ歸路ヲ失シ一時ハ我ナガラ狐奴ニばかサレタカト心少シク迷ヒタレ𪜈田家ノ燈火ヲ目的トシテ幸ニ道ヲ得テ九時頃採リ得タル卵群ヲバ失モセズ歸宅セリ採集シタル卵群

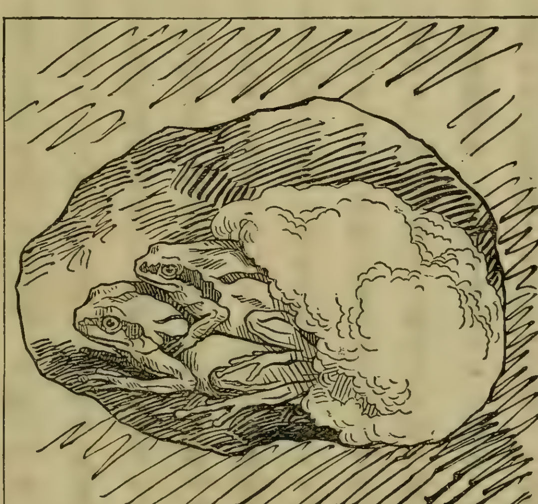
第一圖




（イ）巣ノ在所
（ロ）水田
（ハ）稻株

中ニハ未ダ方裂ヲ始メザル者アリ或ハ漸ヤク二個トナリタル者アリ又或ハ八個若シクハ十六個ニ分裂セシ者モアリ然リ而シテ二疋相重リテ地中ニ潛伏シ居タル者ヲモ發見シタレ𪜈其果シテ產卵ノ爲メナルヤ否ヤ未ダ之ヲ詳ニスルヲ得ザル故翌朝早々其處ニ到リ又候堀リ採リタルニ

第二圖



圖ノ第二ニ示ス如ク地中ニテ方リニ產卵シ居ルヲ採リ得タリ依リテ考フルニ此種ノ產卵スルハ夕刻ヨリ早朝ノ間

り、大杓鷸の類を除きては鷸中の大なるものにて嘴の長さ二寸四五分、兩翼を延べしたるときは端より端まで二尺ほどありて、不熟の人は其羽音して舞揚がるを雉子と見誤まることあり、苟も獵人たるものゝ此鳥の形質を知らざるは無し而て之を知らざるは獵人にはあらドと云ふも可なり、左れど今初心者の爲めくど／＼しからぬ樣其羽色を記載し以て識別の用に供せんに背上はさび赤色多く黑と淡茶の斑紋あり、胸及び腹は一面に淡茶にして黑めきたる橫條線あること大鷹に於けるが如し、腋羽及び翼羽は黑めきたる色と赤茶若くは淡茶の所謂たかぶを示せ、尾羽は必ず十二枚にして皆幅廣く之を下面より觀るときは過半黑色にて末端銀白色なり、一躰にじみなれど頗る上品の色取りなり」時に總身白茶色なる變物あれど至て稀なり、是は雀に白雀あると同一の現象なりとす

此鳥は西は歐洲より東は吾邦に至るまで、トルキスタン、ヒマラヤ地方、南シベリア、滿州、北支那等に通じて在り、或る人の話に支那（淸人大水⿱札鳥（たいすいちや）と名づくる由）には此鳥稀なりと云へり、北米にて獵人の珍重するものは同じく「ウードコック」の俗名あれど自から別種なり」吾邦にてやましぎの生殖期節に付きては未だ確實なる經驗なしと雖も旣に四月の末或は五月始めよりして營巣に取掛るものゝ如し、曾て夏月此鳥の富士の裾野にて產卵せるを實見したる鳥學者あり又武州所澤の近傍、信州の山中等にても營巣するものある山を聞けり、然れども斯く本邦內地に夏中留まる者は極めて小數に過ぎず而して大多數は春の初め頃よりして北方に向ひ津輕海峽を打過ぎて北海道、千島、黑龍江地方、東シベリア等に至り繁殖を爲し秋至りて復び南に移るなり、而して冬中は津輕海峽以北の地（即ち北海道）に此鳥を見ることなしと云ふ、東京近傍へは十月末頃よりして來り始め冬中は所により中々普通なり蓋し北地より追々と到着するに由る又本邦內地の山にて繁殖したる者も寒を避けて平原に出づるなるべし、冬九州にも多く在れど南の方いづくまで渡り行くものにや、余の知れる所にては未だ琉球にて此鳥を見たる人な

粘質物及ビ氣胞共柔軟トナリテ下方ノ出入口ヨリ流レ出デヽ容易ニ水中ニ垂下スル者ノ如シ然レモ其未タ水中ニ垂下セザル前ハ卵群表面ニハ一二分計リ地層ヲ掩ハレ上ニハ草又苔ノ生ジ居ル故ニ外面ヨリ之ヲ認知スルコト甚タ難シ尤モ或ハ表面ニ於テ第一圖ニ示ス如ク割レ目ノ見ユルコトアリ

## ○鷸(しぎ)の話

飯島魁述

吾が邦に四季ともに居り或は季節を異にして渡り來るしぎの族に種類甚だ多し、例へば胸黑、大膳、京女、黃足、赤足、尾黑、大塲、むしばみ、とうねん、はしなが、そりはしぎ、つるしぎ、くさしぎ、うづらしぎ、大杓、小杓等枚擧に遑あらず、然りと雖も銃獵家が獵鳥(ゲーム)として最も貴重する所のものは(一)やましぎ(二)あをしぎ(三)小しぎ(四)ましぎ(五)大しぎ(六)中しぎ(七)はりをしぎ(八)たましぎの他にはあらず、左れば余は今此八種のみに就き見聞する所を書き綴らんとす、先づ當初に右各種の便利識別表を出だすと左の如し

甲、胸及ビ腹ニハ一面ニ細キ横條ノ斑アリテ純白ナラズ
- ○最大、(凡ソ鳩ノ大サ)、尾羽ノ數十二枚…(一)やましぎ
- ○大、尾羽數十二枚……(二)あをしぎ

乙、腹ニ斑ナク純白ナリ、而シテ胸、腹側及ビ其他諸部ハ種々ノ色取リナリ
- ○翼ノ大羽ハ外緣ヲ除キ大部分一樣ニ黑褐色ナリ、黃色ノ圓紋ナシ
  - ○小、尾羽十二枚……(三)小しぎ
  - ○中大、尾羽十四枚…(四)ましぎ
  - ○大、尾羽十八枚(時ニ二十六枚)……(五)大しぎ
  - ○中大、尾羽二十枚…(六)中しぎ
  - ○中大、尾羽廿六枚…(七)はりをしぎ
- ○翼ノ大羽ニ黃色ノ圓形紋ヲ列ス、中大ナリ……(八)たましぎ

右八種中一、二及び八は各特異の羽色にして一見して分別するを得、而して三より七に至る五種(皆俗にたしぎと云ふ)は羽色殆ど彷彿たりと雖躰軀の大小及び尾羽の數は以て種を區別するに安全なる目標なりとす、尚此他にも差別の點あれど、そは後段に記すべし、讀者宜しく獵獲したる實物と照し看て「喰へども其味を知らず、擊てども其物を知らず」の誚りを招く勿れ、又老練家に望む余の記中誤れるは正し闕くるは補充あらんことを

（一）やましぎ　（學名 Scolopax rusticola.）

ほとしぎ又やぶしぎとも云ひ英語の「ウードコック」是な

に付きては格別に好む所なきが如し、但し稍々廣大なる林には小なる者に於けるよりも多く居るものなり、蓋し保護を受くること多きが故なるべし、勿論森林なき地方にては小さやうなるぼさ中或は庭園内にも居らざるを期せず、曾て東京本郷邊の茶園中に見たることあり又赤坂に住める一友人の庭前なる小藪より余の乘りたる車の近づくに駭きて飛立つを認めたることあり、其平居乾燥したる落葉下草杯多くして能く保護せられさる場所を好むと雖も其居所に接近し若くは此れより數丁を出でずして水田或は其他じく〳〵と水の在る場所なかる可らず、如何となれば此鳥も他の鷸類と一般に斯かる濕地に出でゝ餌食を求むるものなればなり、左れば寒氣甚だしくして四隣の水悉く氷結して解くることなき地に此鳥を探求するは徒勞に屬すべし、通例一ヶ所に一羽以上二羽位づゝ居るものなれば若し一羽飛び出でなば必ずもう一羽居るものと心得て近所を探がし見るべきなり、又往々獵犬の鼻先きより二羽一度に舞ひ揚ることありて此時こそ宜しくどん〳〵撃ちの技量を現はすべきなり、勿論必ず二羽づゝ居ると定まりたるには非ず一羽のみのことも少からざるへし又十二月頃草苅の林中に仕事する折りなどにも一寸としたるぼさ中より五六羽も續け樣に飛び出づるに會し、ああ連發銃を持ちたらんにはと齒齕みすることあるなるべし、去りながら追立てられたるやましぎは餘り遠くまで飛ぶものに非ず、僅か十數間にして地に下ることあり而して廣き田畑を越へる場合に非ざれば遠く飛び行くも一丁以上に出づること稀なり、故に若し目を遮ぎる物躰のなきときは大概其の下り先きを察するを得べしと雖林叢中に沒する後尚ほも枝間を飛行する者なれば逐ふ人其心得なかるべからず又た其地に下るや大概直ちに踞まるものならず左りとて決して雉子の如くに遠く馳走するにはあらねど直き近所なる安全と思はしき叢中に馳け入るものなり、地理に明くして林中にて見當を付けるに巧みなる獵人は犬なくとも一疋のやましぎを撃取るまでは幾回となく逐ひ出だすを得ることなきにあらねど又失望すること屢々

しと雖も多分彼の地へも冬渡り行くものなきに非ざるべし

やましぎの秋に北より或は春に南より移行するや靜謐なる霞霧深き或ハ小雨の降る日或は夜に乗ずてするものなり、凡べて他の候鳥と共に風の同じ方向よりも寧ろ風位に反對して渡り行くを好むが如し但し夜の餘りに暗きか或ハ大風雨のときハ飛行せず、又風の起らんとするとき或は天の將に降雪せんとするときは豫め之を知りて出發を躊躇するに似たり、其移行に際しては數羽相伴ふと雖も數に一定の規則なし而して高く空中を飛び休まんとするときハ殆と鉛直に地に下る、其飛翔力の決して弱からざるは本邦内地より伊豆七島に或は歐州大陸よりして北海を越へて英國に或は地中海を横行して北亞弗利加に渡るものあるを以て明なり、斯く長途の旅を爲さんとするとき或は既に爲し終りたる時は多く濱邊の叢林中に集まるものにて此時こそ獵人に取りてハ得難き機なりとす

凡そやましぎの習性は甚だ奇態にして少しく之を知得したる人は一日の出獵に獵嚢を滿たすを得べしと雖も不熟者ハ一も出會すると能はずして歸るとあり、又時に熟達老練の獵人と雖も此鳥の擧動に付きてハ不思議の思をなすとあり、例へば一地方に思ひ當るべき原因なくして或年には非常に多く又或年にハ一も來らざるとありと云ふ、斯は余も聊か實歷したるとあり即ち一昨年のとなりしが埼玉縣下の或地方にはやましぎ中々に多く殆ど藪毎に犬を入れさへすれば一二羽づゝハ出でざるとてなかりしが昨年ハ如何なる具合にや極めて尠く反て一昨年ハ甚だ稀なりし他所にて多く獵獲したりき、又鳥の舞ひ方に注目するハ射擊に頗る肝要の事なるがやましぎの舞ひ方ばかりは測知すると殆ど難し、唯其迅速にして不規則なる屈曲を爲すのみならば銃手ハ久しからずして之に慣るゝべしと雖も殆ど一鳥毎に異なりたる舞ひ方をなすが故に獵人の困じ果つるも理なり

冬の間やましぎの常に居る所は茂りたる藪若くハ森林なり、松林にても杉林にてもはんの木のぼさにても此の點

なり

讀者若し活きたるやましぎの佇立するを見るならば其大なる兩眼のきよろ〳〵していとも馬鹿らしき鳥なりとの思想を起すなるべし、去ど斯は大なる誤にて實際は諸感鋭敏を極め隨分知慧あり、少くとも中々狡猾なりと云はざるを得ず、抑も此鳥の羽色は(他の鷸も亦然り)は居所の色と甚だ紛らはしく、動かずして地上枯葉、枯枝などの中に在るときは熟練の獵人たりとも見當てると難し、强ひて之を發見せんには鳥躰よりも寧ろ其眼のみを探求する方得策なりとは左もありぬべし、右の如き羽色なるは學者の謂ゆる保護同化にして之れが爲め敵に見付らるゝと少しとかや、やましぎは充分其色の以て自身を保護するに足るを知りて獵人の近づくも一向に知らぬ振りして居り犬の餘りに接近するに及びてたまり得ず終に飛び立つと雖も銃擊に都合好き方へ出づるとてはなく必ず反對の方位に舞ひ出で忽ちにして木樹の彼方に回はり或は枝間を潜りて覘を避くるに妙を得たりと云つべし、左れど彈丸には誠に脆き鳥にて之を仕止めるには八號散彈を以て充分なりとす而して少しにても傷つくときは忽ち地に落ち又逃げ隱れするとなし

已に述べたるが如く日中は森林中に隱れ居り日沒後に至り擧動漸く活潑となり而して黄昏の際し始めて自から舞ひ揚がり空中にて「だく〳〵」と聞ゆる鳴聲を發しつゝ數回舞ひ回はりたる後ち常に行くを好める餌場に向て飛ぶ、其餌場に往來する途も亦大概定まりあるが如し、通例やましぎの餌場たる地は林中の濕地、藪林に接したる田圃、泥深き道路等にして其長き嘴を泥中に挿入しては食を求め跡に圓き小穴を殘す、此小穴は往々數多連なり在りて容易に目に付くものなり、時としては牛の糞塊にも之を見るとあり、捕鳥家は此穴を見てやましぎの餌場たるとを知り晩方其邊に網を張り常の如く餌拾ひに來るを待ちて捕獲するなり、餌食は泥中に在るみゝず其他蟲類にして、嘴の被れる皮の軟かにして感覺力に富めるが故に餌となるへきものに觸るゝときは直ちに之を挾み出

あるべし而して之を擊殺さずに置くときは已に翌日は其住み慣れたる元との場所に歸り居るを常とす、時に或は其鳥ハ移行し去りて他鳥の新來するともあるへし、實際或一ヶ所に在るやましぎを一旦取盡くすも往々數日ならずして前と略ぼ同數の新來者あるは獵人の皆確認する所なり、鶉にも亦同じとあるは恰も借家に住人の入り替はるが如し」一說にやましぎは藪林若くは小山の南側よりも寧ろ北側の方に多く在りと云へり、此說たる老練家の言にてもあり又余自らも屢々北向きの崖下なる每日々光の達することなくして霜柱の常に絕へざる林叢中に多く發見したることあれば甚ざ信ずるに足るならんか、此鳥は明かなる日光を忌む性なるは疑を容れざる事實にして草木の爲め光線も亦寒風も強く當らざる靜謐なる場所を好むものにして占者流より見なば陰鳥と稱すべけれ、やましぎは日當りよき所にひなたぼこをして居るなど思ふは大なる誤りと知るべし

此鳥每日の生活ハ之を觀察すること極めて困難なり蓋し今述べたる通り其性陰を好み至て怯怕なるが故なり、日中ハ自ら外飛することは決してなく但し極めて靜謐なる日には少しく林中を步き回ハることあれども必ず淡暗く隱蔽されたる所のみに限り躰を現出することゝてはなし、其佇立するや躰を殆ど直立せしめ頸を縮め嘴を下方に向く、其地上を行くや潜竊にして小膀なり而して餘り疾からず且久しきに堪へず、故に少しく遠行を企つるときは必ず其翼に便るなり、其飛翔の巧なる雉子類の比に非ずして繁茂せる樹林中を能くあなたこなたと身を換はして樾を避へることなく又必要に應じて緩急を自在にし或ひは急に方向を轉じ痛く獵人を迷はしむ、飛行中劇しく羽打ちするに非ざれど迅速矢の如しと云ふも可なり、秋春移行するときは高く空中を行けども日中に逐立てらるゝときは高飛びすること決して無し又餘儀なき場合に非ざれば立樹なき地上に舞ひ出づることなし、其驚きて飛び立つときはばた〳〵と羽音を發するが雉子の羽音よりは遙に低く、少しく經驗あるものは之を聞くのみにて直ちに判別し得る

を營む、親鳥は大概一年に二回產卵するものなるが如し

（二）アヲシギ　（學名 Scolopax solitaria japonica）

アヲシギは前種と同樣に往々山林中に棲むとあるが故に之を山シギと稱ふる獵人あり左れど山シギなる名稱は今後必ず前種に限り用ゆることと定めたらんには兩種混同を防ぐに甚ど便利なるべし、元來アヲシギなる和名は余之を東京の或る老練なる捕鳥家に聞きたるにて古書、禽譜などには未だ曾て見當らず、此種の羽色に別段青色の所とてはなく故に餘り適當の名とは思はざるも他に和名を知らざるを以て姑く之を使用することとせり、其學名（前出）の意義は「日本の單棲鷸」と云ふことにて英人俗ニ Japanese solitary snipe ト稱ス、抑も單棲鷸は亞細亞大陸（ヒマラヤ山、支那等）にも在る種なるが日本諸島に在る單棲鷸（即ちアヲシギ）は体軀稍々小にして色取りに於けるも少しく異なる所あり然しながら其差違たる甚だ些少にして大陸の單棲鷸と日本の單棲鷸とを別種と爲すに足らず、故に同一種たるべきなれど吾邦に產する者は差別の爲め特に「日本の」と形容を加ふるなり、其「單棲」なる稱あるは蓋し平常群をなさずして一ヶ所に一羽或は多きも一雙位しか發見せざるに由るなりアヲシギ（即ち日本の單棲鷸）はヤマシギに比しては小形なるも中々大なる鷸にして翼の前に向ひたる角より最長翼羽の末端に至るまで五寸乃至五寸四分（ヤマシギにては五寸八分乃至六寸二分）あり而して兩翼を擴張するときは端より端まで凡そ一尺七寸程あり、嘴の長さは凡そ二寸五分程なるを常とす、羽色は腹部の純白ならざることに於てヤマシギに同じと雖も全体に於ては一種特別にして一目以て他種と識別するを得べし、即ち下面、喉の邊は白めきて淡き灰茶の斑點あり、胸は灰茶色にて朧に暗紋あり、腹は白めきたるも密に灰茶色の横條あり、上面は黑、茶及び白の細斑なり、翼の大羽は一樣に煤黑にして末端は白く緣取りあり、翼裏の小羽は皆白と黑のたかぶなり、脊上殊に肩の邊に白き點若くは條のあるは此種に特有なりとす、尾羽の數は余は確に十八枚なりと覺へ居りて本誌前號に出したる索引表

だすと云ふ、又一説に此鳥は其鋭敏なる嗅官によりて泥下に蟲の在るを知り得るが故に嘴を挿入する毎に捕獲せざるとなしと云へり、其餌場に在るや時々舞揚がりて近き所に場を變へ、久しからずして飽くに至る而して夜の全く暗くなる頃には已に歸途に就き平居住める林叢の上に至りて前の如く聲を發しながら舞ひ回はりたる後地に下り、此所に靜に踞り居りて翌朝未明の頃には再び餌場に趣く、其時の擧動前宵に異なるとなく、日出前には已に其居所に歸り在り

さかり時に際してはプシー〳〵〳〵と口笛吹くが如き鳴聲を出だし又グルルと聞ゆる胸奥より出ると思はしき太き音を發することありと云ふ、此時雄は近隣の雄と絶へず、爭鬪し、雌の前に來りては其氣に入らんが爲め頻りと羽毛を膨らしひら〳〵と飛び揚がりなどして見せる由、其時の飛び方は疾からずしてみゝづくの舞ふにさも能く似たりと云ふ、交尾後雌は森林中靜かなる叢を撰び、地上に苔蘚、落葉、樹根などを集め粗造なる巣を營みて中に中々大形の卵を三個乃至四個産す、其卵は形狀球圓に近く殼色淡茶にしてさび赤色の斑點あり、母鳥の坐巣すると十七八日にして鷸鳥孵化す、然る上は兩親熱心に之を保護し人の近づくときは頻りと不安の有樣にて、餘儀なく一旦飛立つも直ぐ接近したる所に下り再び鷸の許に立寄らんとし或は殊勝にも跛のまねして人の注意を自身の上に引き鷸をして其間に難を避けしむなど禽獸とて子を思ふ心情の切なるなど吾人に劣らんや、又或る信任すべき實驗家の報道によれば危難に際し親鳥は雛を或は趾にて撮み或は嘴もて胸に壓し當てゝ飛び去ることありと云ふ、爰に又一説によればやましぎは平常其雛を養育せん爲め朝夕に之を趾と腹の間に挾みて餌場に連れ行く者なりと、是れ或は然らん、如何となれば此鳥の親にして其雛の要する水と滋養を餌場よりして持ち運び得るとは到底考へ難ければなり、然れ共此點に付きては尙ほ後來の實見を待つべきなり」雛鳥は孵化後三週間にして舞ひ始め、其飛力未だ全く發達せざる時よりして已に獨立の生活

生殖地は東半球の寒帶地方に在りて冬は歐洲南部、印度、支那、臺灣等に至る而して本邦ハ秋南行するときと春北に歸るときとに過ぎ去るものなるが冬月中も亦留まるものあるならんかなれど未だ曾て十二月及び一月に此鳥を採集しきるとなし

小シギ若し或場所に居を占むるときは氣候の變化により北歸するまでは決して其場所を轉ぜざるハ名高き事柄にして敵の接近するとあるも容易に飛び立つものに非ず、斯は其羽色の保護を頼みてのとならんかなれど又甚だしき恐怖心の爲めに身體の自由を失ふとあるに似たり曾て立留まりたるポインターの鼻先きに踞まりたる小シギを手にて拾ひ上げたる人あり、其漸くにして飛立つや草の上を低く彼方此方へと身をかはしつゝ極めて不規則に且つ迅速に飛行き二十間位ゐしてハタと地に下る、其飛撃ちを爲すは餘程の名人に非ざれば爲し能はず鷸撃ち中にて最も困難のものと知らる、其地に下るハ恰も撃落されたるが如き觀あれバ〱たりと思ひて拾ひに行けば又ひらひらと舞立たれ、最も腹立しき思ひをなすと往々あり、斯くて如何程追回はるも翌日になれバ必定最初飛立ちたる場所に歸り居るものなれバ一度其居所を發見するときハ毎日〱取れるまでハ一疋の鳥にて鷸撃ちの稽古をするとが出來ると云ふ、爰に小シギのとに付き面白き話と云ふは英國の或所に銃獵を好める士官某ありたるが餘り巧者と云ふにハ非ず曾て一羽の小シギの居を占めたる所を發見し之を獲んと欲して毎日運動がてらに行きては銃撃したれども中らばこそ殆ど一獵期中一個の小シギの爲め無限の興を買ひたりしが一日散歩の爲めとて杖を携へ其場所を過ぎたるに彼鳥は例の如く飛立ちければ何心なく手に持ちたる杖を振りたるに哀れや連日幾千彈丸を潜りのけたるヒメシギハ無下なくも散歩杖の爲めに打ち殺されたり、士官は其死骸に取縋り涙數行、鳥の不幸を歎じ且つ以後出獵の樂みを失ひたるをかこちて愁歎ゐ沈みたりとなん

（以下次號）

に其通り出だしたるが後に或鳥學者の二十枚なりと云ひたるを發見せり、今余の座側に充分許多の標品なければ此事は姑く未定に措かんのみ但し尾羽の數確乎ならざるも本種の羽色たる一種特別なるが故に初心者と雖も之を識別するに苦まざるべし各側最外の尾羽三枚は其幅二分を出でず而して黒白のたかぶなり此鳥は四季共に本邦ょ在り、勿論國內にて冬は山中より平原に或は又北部より南部に居を轉ずる者なるべし、北海道札幌近傍にて嚴寒中と雖も氷結せざる淡水の涌く所に居るが故に彼地にては冬鷸と名づくる由或書に見へたり、九州長崎にても此鳥を獲たる人あり又一獵友の話に富士の裾邊にて多く出會したるとありと云へり、其他余は此鳥の美州金華山、武州秩父、深谷邊等にも冬月在るを知る、東京近傍にも來るとあらんりなれど極て稀なり、但し横濱近在には普通なりと云へり

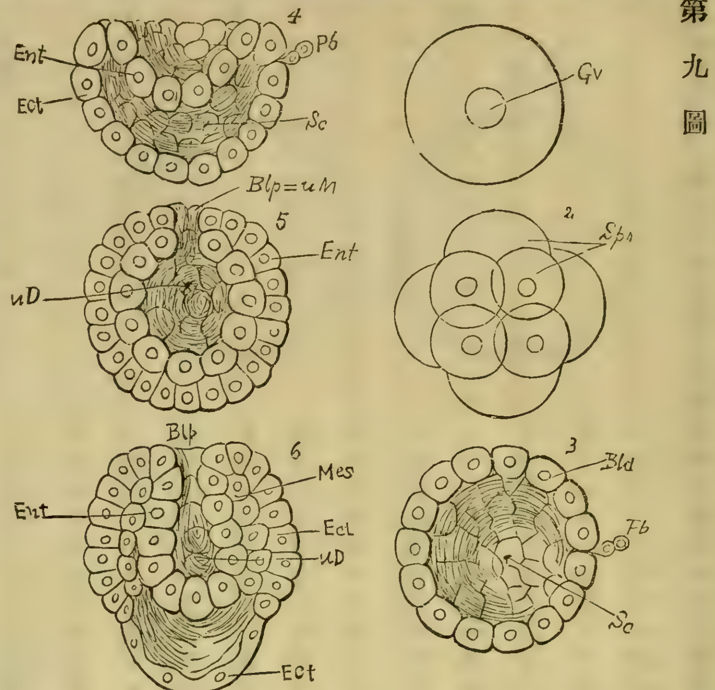
其習性は頗るヤマシギに類似し山中溪流の岸、森林、藪等の濕地に棲むを好み、田シギの如く水田に在るとなし、其他此種の生殖に付きては余は何も知らず

(三)コシギ 一名シメシギ （學名(Scolopax gallinula)）

此種の和名は書中に見當らず又鳥巧者に糺すに只にシギの小さきものなりと答ふ、故に余は自ら之を小シギ又はヒメシギと呼びなし來れり、歐洲にも冬月此鳥居りて英語の Jack-snipe 佛語の Petit Béecassine 獨乙語の Moorschnepfe 是なり、體軀倭小と雖も雲雀よりは稍々大なり、翼角より末端まで三寸五六分に過ぎず而して嘴は一寸三四分の長さなり、羽色は尋常のマシギに似たるも左の數點の差違あり、即ち小シギにては(一)頭上正中に淡茶色の縱條なし、(二)背上黒色の部は紫或は綠なる金屬樣の光澤を帶ぶ(三)尾羽に赤茶色なく煤黒にして綠は淡茶色なり羽色上右の三點と體軀の小なるとを覺へ居らば本種を識別すると極めて易し尾「羽の數は十二枚にして尾端甚だ尖れり

小シギは本邦には甚だ稀有なる鳥にして東京市場に持ち來る數千の田シギ中時たま一羽位混じ在り、抑も此種の

第九圖




りむねうす (Limnaeus ovatus) ノ發生ヲ示ス
(原圖 C. Babl 氏 Jen. Zeits. 1875). 1. ハ分裂前ノ卵 2. ハ卵カ八個ノ分裂球 Sph ニ分レタルモノ、四個ノ球ハ小ニシテ四個ノ球ハ大ナリ 3. ハ卵ノ分裂尙進ミ數個ノ同樣ナル小球ヨリ成立セルモノヲ二分シタル圖、此期ハ調度ごむ球ノ如ク圓球形ニシテ內ハ腔ナリ只ごむ球ノごむハ數個ノ小細胞ヨリ成立スルモノト考フレバ宜シ 4. 5. ハ此球ノ一部分ニ凹ミヲ生シ二葉ノ細胞層ヨリ成ル囊トナリタルモノ 6. ハ此囊ヲ成立スル二細胞層ノ間ニ又一層ノ細胞層ヲ生シタルモノ圖中 Gv ハ卵核 Sph ハ分裂球 Bld ハ分裂球カ一ツノ細胞層トナリタルモノ Pb ハ極球 Sc ハ分裂腔 Ect ハ外層 Ent ハ內層 Blp ハ原口 uD ハ原腸 Mes ハ中層

胞ハ早晩死滅ニ歸スルモノナリ、故ニ高等動植物ニ於テ見ル所ノ死ハ茲ニ於テ始マリタルモノナリ、

次キニ生スル所ノ分業ハ如何ナルモノナルヤト思考スルニ多クノ腔腸動物ニ於テ見ル如キ消化作用ノ細胞ノ分離スルニアルモノナラン而シテ此分離ハ又高等動物ノ發生中ニモアリ、然レドモ如何シテ此分離カ出來セルヤ、數多ノ多細胞生物ニアリテハ其卵子カ受精セル後分裂シテ細胞塊トナル名ケテ桑椹期ト云フ、而シテ此桑椹期ハ卽チ前ニ述ヘシ所ノぱんどりなニ對スルモノニシテ幾分カ同樣ナル細胞群ヨリ成立スルモノナリ、此細胞群ハ通常其內部ニ腔處アリ名ケテ分裂腔ト云フ、故ニ他物ヲ以テ之レニ比スレハ桑椹期ハごむ球ノ如クシテ其內ニアル腔處ハ分裂腔ナリ、而シテ其腔處ヲ取圍ム所ノごむヲ以テ細胞ノ列スルモノナリトナサハ此期ヲ思考スルヿヲ得ヘシ然

## ●最下等ノ生物（前號ノ續キ）

石川千代松

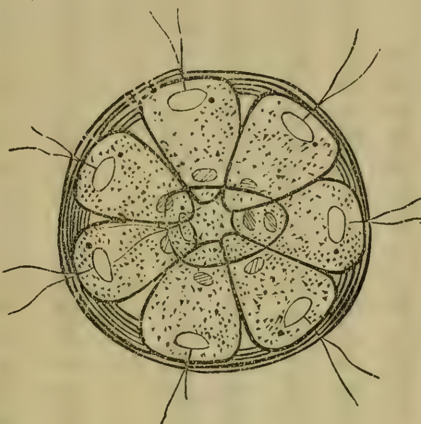
前號ニハ誤テ此編ヲ雜錄中ニ入レヌ又誤テ挿圖第一圖、第六、七、及八圖ヲ脫セリ、茲ニ其粗漏ヲ謝ス

印刷人

ぱんどりな蟲（第七圖）ハ既ニ前ニ述ヘシ如ク十六個ノ同樣ナル細胞ノ群体ニシテ一個体ノ生物ニハ相違ナケレ𪜈

第七圖

ぱんどりなノ圖

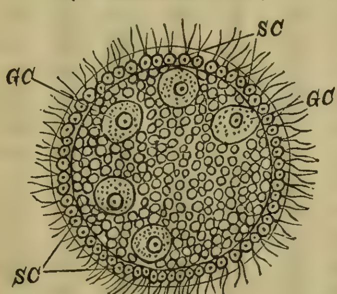


十六個ノ浸滴蟲ノ群ト思考スルモ可ナリトス何ントナレハ各個体ハ一々別々ニ生長シ生殖スルノ力アルモノナレハナリ、ぼるぼくす（第八圖）ニ至リテハ然ラスシテ一個体ヲ成立スル細胞ハ平時ハ相互ヒニ同樣ナレ𪜈其生殖スルニ當リテ各細胞ハ皆生殖スルヿヲ得スシテ單ニ僅少ノ細胞ノミ生殖スルヿヲ得ルモノナリ、而シテ此細胞ハ又他細胞ト異ナリ食ヲ求ムルヲ得ス又運動スルヿヲ得ス、只他細胞カ得タル所ノ食物ノ滋養分ヲ体內ニ傳ヘ得ルノミ、故ニぱんどりなニ於テ未タ見サルトコロノ生理上

第八圖

ぼるぼくす圖

(Volvox minor.)

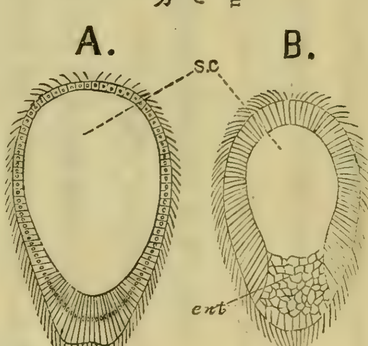



原圖 (Stein) Weismann氏ヨリ寫ス Sc 體軀細胞 Gc 生殖細胞

ノ分業起リ生殖細胞カ他ノ細胞ヨリ分レ來リタルニヨリ次代ニ繼續シテ種類ノ遺傳ヲ掌トルモノハ生殖細胞ノミナルヲ以テ其充分ニ成長シテ母體ヲ離ルヽニ於テハ他細

ニメ多クハ桑椹期ニ於テ其一方ヨリ中央ニ向フテ入リ込ミテ生スルモノナリ、(第九圖456ヲ見ヨ)故ニ此場合ニ於テハ桑椹斯ノ各細胞ハ全ク同樣ナルモノニ非サルヤ明カナリ、何ソト云ハヽ消化作用ヲナス所ノ細胞ハ全体細胞ヨリ生スルモノニ非スメ僅カニ其一部ヨリ生スルモノナルヲ以テナリ、他言ニテ申セハ桑椹期ノ細胞內ニ既ニ生理上ノ分業ヲ生シ消化作用ヲナスヘキモノト他ノ作用ヲナスヘキモノトニ分レタリト云フテ可ナラン、然レ圧如何シテ一樣ナル細胞ヨリ成立スル桑椹期ニ於テ右ノ如キ分業ヲ始メタルヤ、或ハ又何故ニ桑椹期ノ一個々ノ細胞內ニ此分業ヲ始メスシテ細胞ノ群中ニ始メタルヤ抑モ生物体ニ於テ各種作用ノ分業ヲ始ムルハ必ス皆外界ノ刺撃ノ大ヒニ之ヲ助クルモノナリ、あみいば体ノ原形質內ニ外肉、內肉ノ別ヲ生セルモ全ク其外部ノ常ニ外界ニ觸ルヽニ因ルモノナラン、高等動物ノ神經カ外葉細胞ヨリ起ルモ亦外葉細胞ハ常ニ外界ニ直接スルニ因ルモノナリ、然ラバ桑椹期ノ各細胞間ニ分業ヲ起シ其全身ノ細胞中ニ或ルモノヽミヲメ消化ノ用ヲ取ラシメタルハ何等ノ原因ニ基クヤ、多クノ腔腸動物ヲ見ルニ其幼子ノ發生カ母体內ニ於テシ或ハ桑椹期ノ幼兒カ自在ニ水中ヲ游泳セサル者ハ甲種ノ法方ニヨリテがすとるらヲ生シ其發生中桑椹期ノ幼兒カ自在ニ水中ヲ游泳スル者ニ至リテハ乙種ノがすとるら即チ桑椹期ノ細胞內ニ分業ヲ生シ消化作用ヲナスヘキ細胞ハ全身中一部ノ細胞ニアリ、故ニ此分業ヲ生セシモノハ幼子カ水中ヲ游泳スルヤ否ヤニ因ルモノヽ如シ

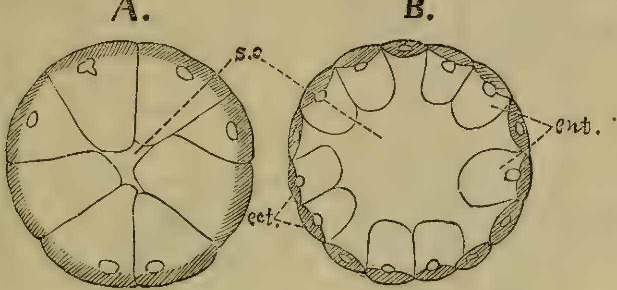
第十二圖 Aequalea ノがすとるらノ出來方ヲ示ス




然レ圧如何シテカ游泳スルニ因リテ此分業ヲ生セシヤト問ハヽ或ハ桑椹期ノ幼子カ一方ニ

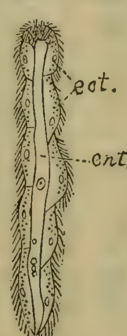
リ而シテ此ごむ球ノ如キ桑椹期ノ生物中ニ消化作用ノミヲ掌トル所ノ細胞ハ如何ソ出來セルヤ、今日ノ高等動物ニ在リテハ卵カ未タ發生セサルノ前ニ於テ既ニ高等動物トナルヘキ傾向アレハ其發生中ニ於テ其說明ヲ得ント欲スルコハ實ニ困難ナルヘシ然レモぱんどりなノ如キモノカ全ク珠形ニシテ其各細胞ヨリ鞭毛ヲ生シ水中ヲ游泳スルモノトナシ其各細胞カ全ク相同シキモノトセハ各細胞ハ二分シテ消化作用ヲ掌トルモノト他ノ作用ヲ掌トルモノトニ分レサルヲ得ス、而シテ此分裂ノ仕方モ亦タおみいば其他多クノ單細胞蟲ニ於ケルカ如ク内外ノ二部トナリ内部ニアルモノハ消化作用ヲナシ外部ニアルモノハ運動、感覺等ノ諸作用ヲナスニ至リシモノナラン、茲ニ於テカ一層ノ細胞ヨリ成立セル動物ヨリ二層ノ細胞ヨリ成レル動物ヲ生シタルナラン、而シテ内ニアルモノヲ名ケテ内細胞層ト云ヒ外ニアルモノヲ外細胞層ト云フ、(第十圖)

第十圖




第十圖 Liriope ノがすとるらノ出來方ヲ示ス、A 桑椹期、B がすとるら、分裂腔、ects.c 外層細胞、ent 内層細胞

第十一圖




第十一圖 でちゑま(Dicyema)ノ細幼蟲 ect 外層細胞、ent 内層細胞

此二層蟲ハ或ハ今世ノでちゑみど(第十一圖)ニ於ケルカ如ク無口ニテ生活スルモノアレハ又此二層ハ或ル點ニ於テ破レテ口ヲ生シ、從前ノ分裂腔ハ直チニ變シテ消化器ノ腔處トナリテ食物ハ口ヨリ入リ内層細胞ノ爲メニ消化サレ其滋養分ハ吸收サレ不消化物ハ又口ヨリ排泄サレタルモノナラン、是所謂がすとるら蟲ナリ

然レモひどら及ヒ多ク他ノ高等動物ノ發生中ニ於テ見ル所ノがすとるら蟲ハ前述ノ如クニシテ生スルモノ甚タ稀

# 雜錄

## ○三浦三崎ニ付テ

服部拾太郎

相州三浦三崎ハ我帝國大學臨海實驗場ノ存在スル地ニシテ近海々産動物ニ富ミ學術上ノ要地ナリト雖モ俗人此地ヲ知ル者少ク山水明媚ナリト雖モ此地ニ遊ブ者稀レニシテ現今ニ在テハ一漁村タルニ過キズ然レドモ古昔ニ在テハ實ニ一大名勝ノ地タリ又兼テ要害ノ地タリシ事疑フベクモアラズ況ンヤ此地ハ我國銅錢ノ鼻祖タル永樂通寶ノ始メテ我國ニ弘リシ地ニシテ加フルニ我々動物學者ニ取テハゼルサレムトモ云フ可キノ所ナレバ聊カ舊記ヲ引用シ以テ此等ノ事ヲ明ニスルハ敢テ徒勞ニアラザルベシ

〔東鑑〕云建久五甲寅閏八月朔右大將(頼朝)家渡御々山莊秉燭之程御臺所若君等以下略渡御翌二日歸御』同九月六日渡御(頼朝)若宮垂髪等翻回袖後有小笠原懸云々』同九年乙卯正月廿五日渡御(頼朝)義澄儲駄餉下略』承久二年戊辰五月廿一日渡御(實朝)舟中管弦催興下略』建暦二年壬申三月九日渡御(實朝)尼御臺并御臺所相州武州以下扈從翌十日入夜還御』建保五年丁丑九月十三日渡御(實朝)爲御覽海歌舞有來迎儀走陽山淨蓮坊依駿河前司請爲結構此儀兼參儲此所浮十餘艘之船其上有件構莊嚴粧映夕陽之光妓樂之音添曉浪響事訖有說法其後島々歴覽廿二日還御』同四月十七日渡御(實朝)於舟中有管弦詩歌左原三郎左衛門相伴遊女等掉一葉向山陰景趣海上眺望於勝地無他類云同十九日還御』寛喜二年庚寅三月十九日渡御(頼經)礒山櫻爲御覽也依領主駿河前司以殊申相州武州以下被參自六浦召御船海上有管弦連歌諸士被献秀句翌二十二日還御

〔三浦志〕云向崎椿之御所跡ハ昔頼朝公椿ヲ植サセ玉ヒ御山莊ヲ建玉フ故ニ椿之御所ト云フ三崎ニ櫻之御所二町谷ニ桃之御所皆遊覽ノ地ナリ

〔相摸風土記〕併舊記云城島ハ元尉島ト云フ頼家公遊覽ノ時城ノ字ニ改メ玉フ」頼朝公遊崎ニ遊覽ノ時實

向ヒ水中ヲ游泳スルニ於テ其前面及ヒ側面ニ於テハ逆流ノ強キカ為メニ幼虫ノ餌食トナルヘキモノハ皆流レ去レトモ其後端ニ於テハ反テ茲ニ集マルヲ以テ此點ニアリシ細胞カ他ノ點ノ細胞ヨリモ多ク食物ヲ得遂ニ全ク他ノ細胞ト生理上ノ作用ヲ異ニスルニ至レルモノナラン、（第十二圖）

右ノ如ク思考スルニ於テハがすとるら蟲ノ甲種ノ起リ方ハ其原始ニシテ乙種ハ甲種ヨリ變シ來リシモノナルヘシ然レ𪜈此生理上ノ分業ト共ニ又各細胞内ニ一大退化ヲ生シタリ何ントナレハ此分業ノ生セシ前ハ各細胞ハ皆消化作用ヲ有セシニ其生セシ後ハ一部ノ細胞ノミ之レヲ有シ他細胞ハ皆之レヲ失ヒタリ、固ヨリ此ノ如キ退化ハ無核、有核二原虫ノ別ノ起レルキ既ニ生シ有核原虫ノ細胞体ハ既ニ無核原虫ノ細胞体ニ比スレハ其生殖力ヲ欠如スルヲ以テ大ヒニ退化セルヤ明カナリ又同様ノ細胞ヨリ成立セル多細胞虫（ぱんどりな）ノ細胞内ニぼるぼくす或ハゑうどりなニ於ケルカ如ク生殖成形ノ二細胞類ヲ生セルニ於テ全身ヲ成立セル生殖細胞モ成形細胞モぱんどりなノ各細胞ニ比スレハ大ヒニ退化セル所アリ何ントナレハ成形細胞ハ生殖力ヲ失シ生殖細胞ハ其獨立スル迄ハ求食ノ作用ヲ失スレハナリ、然レ𪜈全体ヨリ之レヲ論スレハ有核原虫ハ無核原虫ヨリ高等ノ置位ニ位スルモノニシテぼるぼくすハぱんどりなヨリ進化セルモノナリ、何ントナレハ有核原虫ノ核ハ固ヨリ獨立シテ食ヲ求メ生活スルヿ能ハスト雖ヘ𪜈其增殖ノ事ノミヲ掌トルヲ以テ無核厚虫ノ增殖作用ヨリモ猶ホ確然タリ、其原形質モ亦增殖ノ作用ヲ失ヒタルモ其他ノ作用ハ又無核原虫ノ原形質ノナス所ニ比スレハ大ヒニ進歩セルモノナリ、而シテ此二者ノ相互ニ協力シテ一生体ヲナスニ於テハ其個体ハ固ヨリ無核原虫ヨリ高等ナルヿ明カナリ

右ノ如ク生物ハ次第々々ニ高等ナルニ從ヒ其諸部ノ退化スルヿ益々多ク進化ハ常ニ退化ト供ニスルモノナルヿハ既ニおいすまん氏カ有名ナル退化論ニ於テ説カレタルモノヽ如シ　（完）

ノ櫻爛熳タル花ヲ開キ一層風致ヲ添ヘ三崎ハ兼テ花ノ名所トナリシ事頼經ノ櫻遊覽トメ渡御セルヲ以テ知ルベシ降テ永祿年間(頼朝ヨリ三百餘年ノ後)ニ至リ北條氏康父子小田原ヨリ櫻遊覽ノ爲メ三崎ニ至リシヲ見レハ此時尚櫻ノ存在セルヲ知ルベク又此地ノ風景西湖瀟湘ニ勝ルトノ記事アルヲ見レバ景色假令右ニ勝ルトモ劣ル事ナキヿ疑ヒナシ又天正年間ニ入津セル明人ノ此地ノ風景唐國ニ比ナシト云ヘルヲ見レバ尚其絶景ナリシヤ知ルベキナリ左レバ鎌附以來此時ニ至ル迄三崎ノ地ハ天然ノ景ト櫻花ノ美ヲ以テ天下名勝ノ地トシテ鎌倉人士ノ之ヲ愛セシヿ尚今人ノ鎌倉ニ於ケルカ如キヿ史乘ニ徵シテ明ケシ然リ而シテ幕府ノ代ニ至リ此地ノ向井兵庫守ノ菜地トナリテヨリ以後此地ノ風景ヲ賞揚セル記事絶テ書上ニ見ルナシ思フニ德川氏江戸ニ入城セシヨリ江戸トノ交通不便ナルガ爲メ此地ニ遊ヒ其景ヲ賞スル者少ク從テ此地ハ名聲漸ク衰ヘ櫻樹ノ如キモ人知レス枯レ盡クシ遂ニ今日ノ有樣ニ至レルナラム然レ𪜈假令今日櫻花ノ美觀ヲ缺キ加フルニ名譽古ノ如ク顯著ナラザルニセヨ其天然ノ景ニ至テハ毫モ古ニ異ナル所ナク思ハズ「湖上美人」ノ句胸ニ浮ビ「赤壁之賦」口ニ出ツル所少カラズ實ニ絶景ト云フノ外ナシ以上述ブル所ハ三崎ヲ勝地トシテノ歷史ナレ𪜈三崎ハ古昔勝地トシテ名アリシ而已ナラズ又鎌府以降兵事交通上樞要ノ地タリシガ如シ彼ノ應永年間ニ明人ノ入港セル又天正ニ入津シテ和漢交通出合賣買セル事蹟ヨリ考フレバ足利時代ニ在テハ一度日本ニ於ケル互市場ナリシト云フモ可ナラム哉而シテ後北條氏相州ヲ領スルニ當テ氏康三崎ヲ關東無双ノ港ナリトシ特ニ兵船數百ヲ此所ニ備ヘ里見氏モ亦此地ヨリ侵入セント企シヲ見レバ當時咽喉ノ海門タリシ事疑フ可カラズ降テ幕府ノ代ニ至テハ假令古ノ如クナラザルトモ尚兵事上ノ樞地タリシヿ此地ニ船藏遠見番所(今ノ所謂砲台ナリ)ヲ置キシヲ以テ知ルベキナリ然レ𪜈天下泰平ノ常トシテ既ニ其頃ニ於テハ實際兵事上ヨリハ寧交通上ノ要地ニシテ就中相摸洋航行ノ船舶ニ取テハ實ニ缺クベカラサル港ナリシナリ开ハ左ノ事蹟ヲ

平左顧拳螺ヲ此所ニ投ゼリ」右大將北條ノ山及城島ニ櫻數千株ヲ植タリ春來好花撩乱興アル詠ナリシトゾ歲月悠々今ハ枯盡タリ」歌舞島ニ桃アリ今ノ見桃寺ハ即チ昔右大將花ヲ賞シ玉ヒシ所ナリ」三崎城ハ古昔北條山（又城山トモ云フ）ニアリ城北ノ界城今知ルベカラズ東鑑ニ云フ三崎山莊三崎御所ハ鎌府盛ナリシ頃此所ニ搆ラレタル山莊ヲ云フナリ

〔北條五代記〕云應永十年八月三日異國船入津永樂錢數万貫積來將軍義滿公御下知ヲ以テ船ヨリ揚サセラル此時永樂錢始メテ弘ル」弘治元年義弘城ヶ島ニ陣ヲ取リ北條氏康ト戰フ」天正七年戊寅七月二日黑船此港ニ入津ス撿使トシテ安藤豐前守來和テ漢交通出合賣買ス異國人稱シテ風景唐國ニモ有ベカラズ

〔北條盛衰記〕云永祿八年三月下旬北條氏康父子三崎城山ノ櫻遊覽ノ催アリ小田原ヨリ舟被召渚ニ傍テ御船漕ク陸地ノ御供ハ汀ニ傍テ續タリ其日ハ三崎ノ城エ入玉フ此三崎ノ景致心言葉モ及バレス唐ノ西湖瀟陽ノ秀タルモ是ニ不過ト云フ翌日城ヶ島エ渡海アリ磯山櫻咲乱レ恰モ錦繡ノ機ヲ脱シテ職姉之ヲ妬ムベシ古歌ニ

磯山の花のさかりは心なき
あまも逆手を打べかりけり

トハ此所ニテノ詠トカヤ頃シモ三月ナレバ遠一町潟入興アリ人々數盃ヲ波ニ浮べテ詩歌ノ宴トス三日御逗留有テ小田原ニ歸リ賜フ」三崎城ハ永正十五年早雲寺殿再興アリ其後北條美濃守規領トナリシガ關東無双ノ港ナルニ依テ梶原備前守ヲ船大將トシテ數百艘ノ船ヲ用意シテ房州里見義弘ヲ防ガス

以上引証セル所ニ因リ按スルニ三崎ハ頼朝時代ヨリ既ニ業ニ其風景ヲ以テ鎌倉八士ノ賞賛スル所トナリ頼朝ノ如キモ山莊ヲ此所ニ設ケ遊覽ノ地トナシ屢々渡御セルナリ而シテ頼朝以后尚風致他處ニ類ナキ地ナリトシ將軍モ亦渡御セシカ寛治年間（頼朝ヨリ三十餘年ノ后）即チ頼經ノ代ニ於テハ先ニ頼朝ノ植エタル磯山（城ヶ島）城山（三崎）

Melanites n. sp.? ハブライヤ氏ノ蝶譜ニ據ルニ仝氏ハ長崎地方ニ産セルモノタ・一疋ヲ他人ヨリ貰ヒ受ケタリトアリテ本邦ニハ極メテ稀少ナルモノヽ如ク記載セリ然ルニ此度太田氏ハ去月十二日安藝國山形郡殿賀村川ニ沿ヘル坂路ニテ之ヲ獲タル由ニテ余ニ其一疋ヲ惠マレタリ

又 Vanessa urtica, L. ハブライヤ氏ノ說ニ依レハ北海道ニハ甚タ普通ニ産スレトモ日本本州ニハ未タ曾テ之ヲ獲タルヿナシトアリ然ルニ余一昨明治廿二年八月飛彈國乘鞍山ヘ登山ノ節其頂上ニ數疋ヲ認メ飛行ノ極メテ快迅ナルニモ係ラス幸ニ一疋ヲ採集スルヿヲ得タリ　（イ、ト）

㊂ちゃたてむし　明リ障子抔ニテちゃっ〳〵ト續ケテ音ヲ出スモノアリ、俗ニ之ヲちゃたてむしト云フ、夜深ク人靜マリテ後殊ニ善ク聞コユ。むしハ果シテ動物ナリヤ、動物ナラバ如何ナル動物ナリヤ、又如何ニシテ音ヲ發スルヤ此等ノ事ハ名和靖氏既ニ調ベラレ二三年前予等ニ語ラレタルヿアルト覺ユ、惜ニハ記憶セザレ𪜈氏ハ小キ昆蟲（何類ノモノト云ハレタルカ忘レタリ）ノ其觸鬚ニテ紙ヲタヽキテ音ヲ發スルモノナルガ如シト云ハレタルカト思フ。本年ノ夏鹿野山ニ籠リタル際澤山ノちゃたてむしヲ見ルヿヲ得タリ、予ノ見タル所ニテハちゃたてむしニ二種アルガ如シ、第一ハちゃっ〳〵ト間短カク早ク續ケテ音ヲ發ス、肉眼ニテ見タル所翅ナキガ如シ、第二ノモノハびりっ〳〵ト間少シ長ク續ケテ音ヲ發ス、音ハ第一ノモノヨリ大ナリ、二對ノ翅ヲ有ス。第一モ第二モ共ニ長キ觸鬚ト强キ顋脚トヲ有シ一對ノ複眼ト三個ノ單眼トヲ具フ、第一ハ体長五厘程、第二ハ体長一分程ナリ。第一ノモノヲ能ク見ルニ翅ノ出カヽリノ如キモノ二對アルヲ知ル、体及ビ翅ノ大小、發音ノ差ノ外第一ト第二ノ間ニ差ナシ、故ニ第一ハ第二ノ幼蟲ノ如ク思ハルレ𪜈第一ノ交接セルヲ實見シ又第一ト第二トノ間ノ大サノモノヲ見ザリシヨリ考フレハ別種ナランカ。如何ニシテ發音スルカト許ス丈ケ近ツキテ見タレ𪜈蟲ノ小ナル爲ニ何處ヨリ音ヲ發スルカ惜ニ知ルヿ能ハザリシガ翅、脚、及ビ觸鬚ハ少シモ動カサヾル樣ニ見ヘタリ、又別ニ發音器トテ持タザレバ多分顋脚ニテ

見以テ其一班ヲ窺フニ足ル

港年々風浪砂石ヲ逡リ海漸ク淺シ商客漁人之ヲ患ヒ官ニ告ヌ依テ南條金左衛門ヲ御奉行トシ數万人ヲ役シ之レヲ疏鑿セシム實ニ寶永年中ナリ自是商客舟人大ニ利ス（相摸風土記）

然ルニ幾多ノ星霜ヲ經過シ明治維新ノ今日ニ在テハ運輸交通ノ便ニ開ケタルト同時ニ此地最早樞要ノ位置ヲ保ツ能ハスシテ僅ニ一小港一小漁村タルニ過キザルニ至レルナリ之ヲ要スルニ三崎ノ地タルヤ我朝將軍政治ノ始メヨリ三百有餘年間其繁榮ヲ極メ絶景ノ地トシテ其名ヲ知ラレタリシモ戰國ノ頃ヨリ漸々衰ヘ遂ニ一小港タルニ過サルニ至レルナリ然ルニ其衰退ニ趣テヨリ玆ニ三百有餘年王政維新ノ今日ニ至リ生物學上ノ勝地トシテ再ヒ其名ヲ擧クルニ至レルハ豈又奇ナラズヤ嗚呼三崎ノ地タルヤ其歷史上ヨリスルモ其天然ノ景ヨリスルモ正ニ江ノ島、鎌倉ト肩ヲ比スベキナリ況ンヤ彼ノ有セサル生物學上ノ富ヲ有スルニ於テヤ學生諸士幸ニ小閑ヲ得ハ以テ此地ニ遊ベ蓋シ得ル所少々ニアラザルベシ

誰もかも遊びて三浦三崎町
學びの道をたどり行く身は

●斷り　箕作氏病氣ニ付キ今回ハ動物學講議休題

●うみがめノ新產地　目下相州小田原ニ滯在中ナル中村榮太郎氏ノ話ニ先頃全地海濱ニテうみがめ產卵シタルヲ聞タリト全地ニハ一ケ年ニ一腹位ハ大抵生ム由ナリ

●ぎふてふ及他二種ノ新產地　Ludorfia puziloi, Ersch ハ是迄岐阜地方ニ固有ノ者ノ如ク考ヘ居リシニ曩ニ安藤氏ハ羽州ニ產スルヲ發見シ今又廣島尋常師範學校ノ敎頭太田義弼氏ハ本年四月十六日周防玖珂郡柳井村琴石ニテ採集セル由ニテ此項出京ノ際携帶シ余ニ示セリ之ヲ岐阜產及羽州產ニ比スルニ毛頭ノ差ナク同種タルヿ判然セリ

ハ此般顯象アリタル後辛ク恢復ス）例之 Echin oderms, Arthropods, Mollusca 等ナリ

又中毒ノ强弱ハ動物神經系統發生ノ良否ニ正比例ヲ爲ス

又Amoeba,Actinosphaerium以上ノ動物ニ在ツテにてちんノ爲ニ最初損害セサル、モノハ運動ノ調節ニシテ Hydra, Hydro-medusæ 等ニ於テ其狀態ヲ目擊スルヲ得可ク又 Asterias, Comatula 及 Palaemon 等ニ於テモ視察スルヿヲ得可シ然シ Ophiuridæ, Comatula, Palaemon, Sepiola 等ニ於テハ運動マズ增進而メ後麻痹ス

●**帝國博物館天產部動物標本目錄** 頃日帝國博物館列品目錄刻成リ世ニ公ニセラル該目錄中動物標本目錄ハ石川博士岩川理學士松浦技手ノ三氏編纂ノ勞ヲ執ラレシモノニシテ上ハ哺乳動物ヨリ下珊瑚海綿類ニ至ルマテ目下該館ニ臚列セラル丶標品ハ盡ク編入セラル且陳列函ノ番號ヲ記入セラル丶ヲ以テ縱覽者ハ實物ト對照スルノ便アリ稱名ハ羅甸名ニ平假名ニテ和名ヲ附シ產地ハ和洋兩体ニ併記セラル紙數百八十六頁標品ノ數千九百四十三種トス

今一覽ニ便スル爲メ右ノ標品ヲ產地ニ因リ內外產ニ二分シ綱目ノ順ニ從ヒ其種數ヲ揭ケ對照セルニ左ノ如クナリキ

| | 外國產 | 內國產 |
|---|---|---|
| 哺乳類 | 48 | 31 |
| 鳥類 | 90 | 119 |
| 爬蟲類 | 20 | 20 |
| 兩棲類 | 3 | 10 |
| 魚類 | 3 | 160 |
| 被嚢類 | 8 | 1 |
| 擔腕類 | 1 | 4 |
| 群棲類 | 7 | 0 |
| 頭足類 | 0 | 9 |
| 翼足類 | 0 | 2 |
| 腹步類 | 3 | 108 |
| 薄鰓類 | 5 | 62 |

紙ヲタヽキテ音ヲ發スルモノト考フ。雌雄共ニ音ヲ發スルカ、何ノ爲ニ音ヲ發スルカ、又前ニ述ベタル大小ノ蟲ハ全ク別種ナルカ、此種類ノ蟲ニ何種アルカ等ハ調ベテ面白キヿナリト信ズ、予ノ述ベタル大小二種ノ蟲ハ共ニOrthopteraノ中 PsocidaeノモノトA鑑定セリ、Stenopsocus屬ニ近キモノト思フ。予ノ觀察ハ甚ダ不完全ノモノナレ𪜈參考ノ爲ニ爰ニ揭グ、委シク調ベラレタル方ハ本誌ヘ御報知アランヿヲ望ム。

き、か

●昆蟲頭部ノ發生　ヲ調べ予ノ先ニ調ベタルくも、かぶとがにノ發生ト比較スルトキハ節肢動物諸類ノ關係ヲ知ル少シノ助ニモナランカト思ヒ暇アル節ニ材料ヲ求メテ少シ貯ヘ置キタリ、其中ヨリ一種ノ蜂ノ幼蟲ノ頭部ヲ取リ細截シテ驗シタルニ三個ノ單眼ハ腦ノ同一ナル部分ヨリ神經ヲ受取ル、又正中線ノ單眼ニハ一對ノ神經通ズ、單眼ハ突起シ居リテ後陷入ス、又觸鬚ヘ通ズル神經ハ一本ニ一對ヅヽナリ、等ノ事實ヲ得タリ。

き、か

●よこちんト下等動物　英國ノくりーんうーど氏ハよこちんト云フ煙草ノ有毒主成物ヲ Amoeba, Actinosphaerium, Hydra, Hydromedusae, Aurelia-Ephyra, Actinia, Lumbricus, Asterias, Ophuridae, Comatula, Palaemon, Sepiola, Acanthodoris 等ノ下等動物ニ試用シテ生理的實驗ヲ爲シタリ

試用シタルよこちんノ分量ハ〇、〇〇一%、〇、〇一%、〇、〇五%及〇、一%ノ溶液ニシテ動物ヲ此液中ニ浸スヿ大凡一時間ニシテ後清水ニテ洗フナリ、勿論稍高等動物ニ在ツテハ〇、一%溶液ノ皮下注射ヲ行ヒタリ而メ溶液ハ最初稀薄ノモノヲ用ヒ漸次濃厚ノモノニ及ホスナリ

此實驗ニ據リ氏ハ左ノ結果ヲ得タリ

にこちんノ中毒反能ニ關シ自ラ動物界ニ二種ノ大別アリト第一ハにこちんノ試用ニ毫モ感覺セサルモノ即チ稀薄ナル溶液ニテハ傷害ヲ受ケサルノミナラス濃厚ナルモノニテモ恢復シ得ルモノ例之 Protozoa, Coelenterata 等ナリ第二ハにこちん固有ノ中毒反能ヲ起シ最初動物身體ノ刺激增進シ次テ麻痺ヲ起スモノ（然レ𪜈高等動物ニアリテ

京教育博物館ノ博物標本ヲ合併セラレタルヲ以テ所藏標品ノ數ハ蓋シ汗牛充棟啻ナラザルベシ故ニ本邦所産ノ動物ヲ所藏セラルヽヿ他ニ比類ナカラントス然ルニ目下陳列セラルヽ所ノ本邦産動物ハ右ノ表ニ示ス如ク僅カニ千四百十六種ニ過キス其品數ノ案外ニ少キハ理由ノ有ルヿニテソハ該目錄凡例中ニ記載セラルヽヲ以テ爰ニ贅セズ然レモ該博物館ハ教育主務ニ屬スル博物館ニ非ラザルヲ以テ標本ヲ蒐集保存セラルヽ主旨モ自ラ其趣ヲ異ニセラルヽハ當然ノヿナラントス果シテ然ラハ本邦版圖內ニ生スル動物ハ悉ク之ヲ網羅シ學士ヲシテ充分調査セシメ北海道ニハ斯々本島ニハ斯々四國ニハ斯々九州ニハ斯々沖繩小笠島群島ニハ斯々ト各々産地ニ因テ之ヲ區畫シ我邦人ヲシテ該館ニ遊ベハ我國所産ノ動物ハ盡ク之ヲ通覽スルヿヲ得テ或ハ殖産興業ノ志想ヲ喚起セシメ或ハ南北所産ノ動物ヲ比較シ其異同ヲ考ヘ其有無消長ヲ鑑ミ或ハ動物散布ノ廣狹ヲ研究スルノ資ニ供スル等ノ如キハ該館ノ方ニ務ム可キ事業ニ非ルナキ歟

●**處カワレハ品カワル**　日本ニテ動物學ノ教科書ヲ編スルニ西洋ノ書籍ニ記載シアルモノヲ其儘ニ取ルト大ヒナル誤リヲ生スルヿアリ、動物ノ習慣ハ處ニ依リテ大ヒニ變ルモノナレハ同一種ノ動物ニテモ彼我ニ在テ大ヒニ異ル所アリ、左ニ記スル所ハ僅ガニ一二ノ例ナレモ取調タランニハ此類實ニ多カル可シ

余カ獨逸國ふらいぶるくニ留學セル頃淡水中ニ住スルわらじむし（Asellus aquaticus）ノ發生ヲ取調ヘント欲シ其産卵時期ニ心付ケシニ四五月頃ヨリ始メタルヿヲ見認メタリ、其後日本ニ歸リテ後又其卵ヲ尋子タルニ四五月頃ニハ東京ノわらじむしハ（種ハ異ナルカモ知レス）産卵セズ十一月ノ始メ頃ヨリ産卵シ十二、一月頃薄氷ノ下ニアリテ夥シク蕃殖スルヿヲ見認メタリ、又今月五日ノ朝余ガ駒場へ出掛ル途中ありまきノ多ク飛翔スルモノアルヲ見タリ試ミニ之レヲ取リテ驗ヘタルニ多クハ皆單性ノ雌蟲ナルヿヲ見認メタリ、例之ハくらうすノ書ニ

"In addition to the usually apterous females, which, as

| 昆蟲類 | 外國產 | 內國產 |
|---|---|---|
| 膜翅類 | ○ | 71 |
| 甲蟲類 | ○ | 203 |
| 鱗翅類 | ○ | 239 |
| 二翅類 | ○ | 54 |
| 有吻類 | ○ | 53 |
| 脈翅類 | ○ | 26 |
| 直翅類 | ○ | 70 |
| 多足類 | ○ | 2 |
| 蜘蛛類 | 18 | 4 |
| 甲殼類 | ○ | 101 |
| 環蟲類 | 27 | 4 |
| 圓蟲類 | 3 | 5 |
| 扁蟲類 | 6 | 2 |
| 砂殼類 | 6 | 2 |
| 芒刺類 | 4 | 7 |

| | 外國產 | 內國產 |
|---|---|---|
| 海星類 | 7 | 3 |
| 海百合類 | 3 | 7 |
| 水母類 | 18 | 2 |
| 珊瑚類 | 34 | 10 |
| 海綿類 | 18 | 4 |
| 哺乳類骨格 | 22 | 8 |
| 鳥類骨格 | 7 | 9 |
| 爬蟲類兩棲類及魚類骨格 | 13 | 10 |
| 有脊動物骨格 | 22 | ○ |
| 無脊動物ノ硝子製模型 | 85 | ○ |
| 楮製人体并諸動物ノ器官模型 | 46 | ○ |
| | 外國產 527 | 內國產 1416 |

抑帝國博物館ハ我國唯一ノ博物館ニシテ其設立以來始ント二十年ノ星霜ヲ經過シ殊ニ博物標品ノ如キハ一昨年東

𪜈此事ニ就キテハ未タ著ハサレタル書ナシト考フレハ余カ實驗セシモノヲ一寸茲ニ記サン、

余カふらいぶるくニ於テ輪蟲ノ卵ヲ取調ヘタル節一日(五月ナリキ)しろっすべるぐナル山上ノ水溜リ中ヨリ多ク Brachionus, sp. ノ群ヲ捕ヘ來リ養蟲器內ニ養ヒ置キタルニ始メノ日ハ皆單性ノ雌蟲ナリシニ四五日ヲ經テ皆雌雄ヲ生シタリ、故ニ余ハ直チニ山上ノ水溜ニ行キ其中ニアルモノヲ取調ヘタルニ之レ又多クハ兩性ナリシ、其他此類實ニ多シ他日又記スルヿアラン、

明治廿四年十一月七日　石川千代松

●**かはがらすノ報**　動物學雜誌第三十六號ニ伊勢菰野山ニかはがらすヲ產スル由記載有之依テ顧ミルニ山口縣玖珂郡六呂師村同郡山代宇佐鄉近傍ノ溪流ニ沿ヒテ飛翔セルヲ見受ケシヿアリ又廣島縣佐伯郡淺原村近傍ニテ之ヲ見受ケ又本月初旬同地ニテ其二羽ヲ購ヒ得タリ云々ト在廣島Y.O君ヨリノ報知アリタリ

●**益鳥保護**　今ノ様ニ無暗失鱈ニ鳥ヲ取ルヿガ許シテアルト遠カラヌ內ニ我々日本人ハ皆蝙蝠ニ變ズベシトハ近頃或鳥好キ先生ガ豫言セラレタル所ナルガ一寸ト譯ガ分リ兼子ル故ソレハマー如何シタ譯カト尋子タルニ此分デ行ケバ日本ハ直キニ無鳥國トナリソウダカラサト云ツテ退ケラレタルガ成ル程ソウ譯ガ分ツテ見ルト尤モノ様デアル、近來其筋ニテモ漸ク此事ニ氣ガ付キ始メ狩獵規則ヲ新定セントテサワイデ居ラレ又農商務大臣ハ本年六月九日付ヲ以テ農作物保護ノ爲メ有益ナル鳥類ハ夫々手續キヲ經テ獵獲ヲ禁止云々訓令セラレタリ、爾來諸多ノ縣ニテハ燕ノ捕獲ヲ禁ジ或ハ燕ト雲雀ノ二種ヲ禁殺鳥トセラレ、誠ニ結構ノ次弟ナルガマダ他ニモ益鳥ガ澤山アルダロウニ、モット充分ナル保護ガシテ貰ヒ度キモノニコソ、茲ニ埼玉縣知事ハ本年九月廿九日附縣令甲第七十二號ヲ以テ縣下ニ訓令メ曰ク「農作物保護ノ爲メ自今左記五種鳥類ノ獵獲ヲ禁ス犯ス者ハ拾錢以上壹圓以下ノ科料ニ處ス」而シテ左記ニハ燕(ツバメ)、雲雀(ヒバリ)、鵙(モズ)、樫鳥(カケス)及ビ啄木鳥(キツツキ)ノ名ヲ書キ列子タリ、以上燕ト雲雀ノ禁獵ハ道理ニ適ヒ

a rule, only appear in autumn with the winged males and lay fertilized eggs after copulation; there are also viviparous, usually winged generations, which appear principally in the spring and in summer, and which produce their living brood without the assistance of males." (Claus-Sedgwick, Text-Book of Zoology. Vol. I. pp. 569). トアルヲ以テ考フルト此頃空中ヲ飛翔スルモノハ有翼ノ雄蟲ナランカト思フニ之レトハ異ナリテ雌蟲ニテ然カモ單性ノモノナリ、

再ヒ甲殼蟲ニ付キテ又余ヲ驚カシメタルハSimocephalus vetulus. ト云フ小形ナルみじんこ類ナリ、此種ハ獨逸國ニ多クアリテ春夏中ニハ單性兩性交順シテ生殖ヲナシ秋月ニ至リ最後ノモノハ兩性ニテ生殖シ所謂冬卵ナルモノヲ產ミ成蟲ハ死滅ス、一昨廿二年ノ十月ノ末頃ヨリ東京本鄉西片町十番地伊香保温泉湯ノ前ニアル水溜内ニ多ク此種ノ蕃殖スルモノアルヲ見タリ、然ルニ皆單性ノ雌蟲ナリキ、其後毎朝數十疋ヅヽ取リテ調ヘタルニ十一、十二、一月ノ末頃迄不絕單性生殖ヲナセリ、然レ𪜈二月ノ始メニ至リ該水溜ヲ掃除セシヲ以テ此殖群ハ全ク跡ヲ絕チタレハ甚タ殘念ナリタレ𪜈別ニ致シ方ナシ、玆ニ面白キヿハ第一獨逸國ニハ冬月中生延ヒ居ルくらどせら（みじんこ類）ハ一種モナシ、第二晚秋或ハ冬月ノ始メニハ何レノ種類モ皆雌雄兩性アリテ所謂冬卵ヲ生スルヿナリ、然ルニ我國ニ於テハ氣候ノ温暖ナルカ爲メカ右ニ述ヘシ次第ノ如シ、此事ヲ記スルニ付キ一寸氣付キタルヿアレハ余カ今日記サント欲スルヿトハ少々異ナレ𪜈序手ニ玆ニ記シ置クヘシ、ソハ別事ニアラス西洋ノ書ニテモ敎科書中ニハ多ク事實ノ誤リアレハ無暗ニ其内ニ記シアルヿヲ信スヘカラス、例之ハ大概ノ書ニハ「みじんこ類ハ夏ハ單性生殖ヲナシ秋ニ至リテ受精ス」トアレ𪜈其大ナル誤ナルヿハわいすまん氏カ既ニ千八百七十六、七、八、九ノ四年間ニ研究サレタルモノニテ明白ナリ、（Weismann, Naturgeschichte der Daphnoiden, Leipzig, 1879-79）又輪蟲モ右同樣ニ記シアレ𪜈之レ又大ヒナル誤リナリ、然レ

カ多イカト云フニ害ノ方遙ニ多シト、去レハ歐洲ニテハ繁殖季節ニハ其捕殺ヲ禁ズルモ秋ヨリ冬ニカケテ根本ノ間ハ其禁ナシトナリ、アー埼玉縣ハ鵙ト橿鳥ノ極樂ナリ、他ノ眞ニ有益ニシテ害ノ一ツモナキ諸多ノ鳥ハ不平心ヨリシテ終ニ該縣ニ跡ヲ留メザルニ至ルモ計リ難キナリ(其跡ヲ絶ツ者ノ中ニハ折角保護シタル燕及ビ雲雀モ加ハヽルナルベシ)

啄木鳥モ亦埼玉縣禁殺鳥ノ一ナルガ其説明ヲ見ルニ左ノ如シ

啄木鳥ハ常時陸地ニ棲息シ常ニ穀類ヲ食スルヿナク樹幹ニ蟄息スル蟲類ヲ啄食シ生活ヲ營ムモノニテ森林ヲ保護スルノ効アリ

啄木鳥ハ穀物ヲ喰ハズ、實ニ其通リナリ、啄木鳥ハ樹幹ニ蟄息スル蟲類ヲ啄食ス、實ニ其通リ、ダガ茲ニ疑ハシキハ樹幹ニ蟄息スル蟲ヲ喰フ𪜈ニ其樹ニ孔ヲ穿チハセヌカノ一事ナリ、オルニソロジーノ云フ所ニヨレバ啄木鳥ハ森林ニ大害ヲ爲スモノナリト、即チ右ノ説明トハ正反對ノ云ヒ草ナリトス

物ゴト何ヲ爲スニモ理學的ニ、學術的ニ爲サヌトトンダ珍事ノ種ト成ルモノ、鳥ヲ保護シ或ハ保護セズト云フ樣ナルヿハ宜シク之ヲ理學的ノ鳥學ニ問フテ然ル後ニ定ムベシ、然ラザレバ鵙或ハ橿鳥ノ捕殺ヲ禁ズルモ眞ノ有益鳥ノ大多數ヲ不問ニ措クガ如キトンチンカンヲ免レザルベシ、到底理學的訓練ノナキ所謂老農ノ云フ所ヲ土臺ト爲シ若シクハ觀文禽譜ヲ參照シタ位ヒデ狩獵規則ヲコシラヘルノデハ失敬ナガラ錄ナモノハ覺束ナカルベシ

序ナガラ一言述ベテ置キ度キヿハ法文中ニ鵙、燕ナドノ如キ俗名ノミヲ擧グルニテハ甚ダ不充分ナリ、幸ニ學名ナルモノアレバ何ゾ之ヲモ並記シテ以テ範圍ヲ明確ニセザル、元來動物ナドノ俗名ハ誠ニ不慥ナルモノニテ平日ノ談話ニハ用ユベキモ少シク精密ヲ要スル塲合ニハ用ニ立ツモノニ非ズ、例ヘバ燕ハ頃日諸多ノ縣ニテ捕殺ヲ禁ジタル鳥ナルガ其燕ニ數種アリ、通常ノ燕ノ他ニこしあかつばめ、すなむぐりつばめ、いわつばめ、おまつばめ、う

タル樣ナルガ他ノ三種ニ至リテハ少シモ保護スルノ價直ナシト本誌編輯者ハ思フナリ、コンナ鳥ヲ保護スルニ於テハ他ノ眞實有益無害ナル鳥(例ヘバひがら、こがら、しゞうから、山がら、うぐひす、めぼそ、ひたきノ類、大るり、さんくわう等、イクラモアリ)ハサゾ不平ニ思フヿナラン、去九月發行ノ岐阜擴農會雜誌ニ埼玉縣ニテ彼ノ五種ノ獵獲ヲ禁ジタル理由ヲ揭ゲタリ、是ハ同會々員長屋四郎兵衞氏ノ問合セニ應ジ埼玉縣内務部第二課ヨリノ返事ニテ其中もず及ビかけす二種ニ關スル說明ヲ見ルニ眼カラ淚ガコボレル樣ニ面白シ、曰ク

鵙、橿鳥ハ鷹ノ類ニシテ當時陸地ニ棲息シ其効用ハ平素穀類ヲ食セズ樹上ノ蟲類ハ勿論偶々田圃ニ出デヽ鵙ハ蝗蟲、尺蠖、蜂、蛙等ノ害蟲ヲ啄ミ常食トシ、橿鳥ハ畑森等ノ毛蟲類又ハ蛙稻子等ヲ啄殺シテ常食トスルノ効アリ又間接ニハ兩鳥トモ鷹ノ種類ナレバ他ノ有害鳥ヲ逐ヒ間々之ヲ捕殺スル、ノミナラズ常ニ稻田ニ群集シテ害ヲ與フル雀ノ如キハ兩鳥ノ鳴聲ヲ聞ケバ忽チ飛散スル如キ間接ニ大ナル利益ヲ與フルヿ尠カラス(〇〇ハ編者カ付ケタルナリ)

鵙及ビ橿鳥ハ鷹ノ類ナリト二度迄云ハレタルハ周到餘ス所ナシト云ベク竊ニ惟ミルニ之ヲ一讀メハカラ〳〵ト打笑ヒ嬉シ淚ニ暮ザル人トテハヨモ在ラザルヘシ、又此二鳥ハ有害ノ鳥ヲ逐ヒ拂ヒ若クハ捕殺ストアリ、其逐ヒ拂ハ有害ノ鳥ノミニシテ有益ノ鳥ハ一切之ヲ逐ヒ拂フヿナシトハ埼玉縣廳識者ノ受合フ所ナルガ如クニ思ハル、如何トナレバ若シ此受合付カズトナラバ一方ニハ燕、雲雀ノ如キ有益鳥ヲ保護シ又一方ニハ此有益鳥ヲ逐ヒ拂ヒ若クハ捕殺スルヿアル鳥ヲ保護ストハ餘リト云ヘバ甚ダシキ自家撞着ナレバナリ、左ハ去リナガライクラ埼玉縣廳ガ此事ヲ受合ヘバトテ理學的ノオルニソロジーハ何ト云フカ曰ク鵙、橿鳥ハ少シク益ヲ爲スヿモアルガ又有益ナル小鳥ノ卵ヲ喰ヒ只ニ鶵鳥ノミナラス又其親鳥ヲモ殺シ害ヲ爲スモノナリ、特ニ橿鳥ハ又菓物ニ大害ヲ加フルモノナリ、二鳥トモニ益モアリ害モアルモノナルガドチラ

# 動物學雜誌第參拾八號

明治廿四年十二月十五日發兌

## ●動物解剖手引草(鳥類ノ部)

岩川友太郎

第卅三項　腎靜脈ヲ損傷セサルヤウニ意ヲ用ヒテ生殖器ヲ其導管ト共ニ腎臟ヨリ分離シ次ニ生殖器及直腸ヲ後方ニ反轉シテ腎臟ト骨盤ノ屋壁ヲ更ニ明ニ暴出セシメ以テ左ノ局處解剖ヲ行フヘシ

(二一八)腎門靜脈(Renal portal v.)(第九圖シモ)ハ一對アリ腎臟ノ直後ニ於テ左右互ニ結合シ此結合點ヨリ發スル一條ノ枝脈幹ハ排泄滞及直腸ヨリ來ル靜脈ト相結合シテ尾骶腸間膜靜脈(ヒチ)ト成ル而シテ各腎門靜脈ノ前端ハ直ニ腎ノ後葉ニ進入ス尾脂腺ヨリ血液ヲ輸出スル細小ノ尾靜脈(Caudal v.)(ヒ)ハ腎門靜脈ノ結合部ニ合流ス各腎門靜脈ハ亦腎臟ニ入ルヤ否ヤ骨盤ノ屋壁ヨリ來レル內腸骨靜脈(Internal iliac v.)(ナチ)ヲ受取ス

(二一九)大腿骨靜脈(タ)ハ後肢ヨリ血液ノ大部ヲ還流セシムル大脈管ニシテ腎ノ前中両葉ノ間ヲ經過シ以テ腸骨靜脈ニ接續シ而シテ其腹腔ニ入ルヤ否ヤ耻骨ノ腹側緣ニ沿走シテ骨盤ノ側壁ヨリ血液ヲ蒐集スル所ノ小脈管ヲ受ク

(二二〇)腎靜脈(シ)ハ腎ノ腹面ニ走レル縱行大靜脈ニシテ腸骨靜脈ト大腿骨靜脈トノ結合部ニ至リ腸骨靜脈ニ連續ス腎靜脈ハ腎ノ中葉及後葉ヨリ數條ノ輸出腎靜脈(Efferent renal v.)(ユシ)ヲ受取シ前葉ヨリ還流スル血液ハ獨立ノ一靜脈ニ由テ直ニ腸骨靜脈ニ合流ス

(二二一)背大動脈(ハト)ハ細キ動脈管ニシテ左右兩腎ノ中間ニ沿走ス

第卅四項　一方ノ腎臟ヲ一小片ツヽ漸々ニ摘去シ其內部ニ存スル血管ヲ遺留セシメ以テ左ノ撿査ヲ遂クヘシ

(二二二)腎門靜脈ハ腎ノ實質ヲ經過シ之ト腎靜脈トノ結合點ヨリ少シク外方ニ於テ大腿骨靜脈ト連續シ其通路中

みつばめ等アルハ人ノ知ル所ナリ、燕ト云フ字サヘ付ケバうみつばめデモ殺スヲ禁ジタルナル乎或ハ只ニ通常ノ燕ニ限リテ近年無數ニ剝製トナシテ外國ヘ輸出スルいわつばめ及ビあまつばめハ殺シテモ搆ハザル乎、學名サヘ付キ居ラバドレガドウダカ直チニ解リ得ベキモノヲ

# 東京動物學會記事

●去月十七日月次小集會定日ノ所大祭日ニ相當致シ為メ休會セリ

●會員彙報

入會者

| | |
|---|---|
| 高知縣尋常中學校敎諭 | 黒岩恒君 |
| 在英國留學 | 六郷政賢君 |
| 山梨縣尋常師範學校訓導 | 坂田寛作君 |
| 理科大學簡易科卒業生 | 稻垣千代吉君 |
| 仝 | 濱田俊五郎君 |
| 理科大學々生 | 大森千藏君 |

●寄贈交換書目　先月中本會ニ領收シタル者左ノ如シ

| | |
|---|---|
| 日本植物志圖篇第一卷第十一號 | 牧野富太郎君 |
| 東京醫學會雜誌第五卷第十九、二十號 | 東京醫學會 |
| 成醫會月報第百十六、十七號 | 成醫會 |
| 大日本水產會報告第百十三號 | 大日本水產會 |
| 植物學雜誌第五卷第五十六號 | 植物學會 |
| 牧畜雜誌第六十六、七號 | 牧畜雜誌社 |
| 大日本農會報告第百二十三號 | 大日本農會 |
| 東洋學藝雜誌第百二十一號 | 東洋學藝社 |
| 擴農會雜誌第二十六號 | 擴農會 |
| 日本園藝會雜誌第二十九號 | 日本園藝會 |

廣告

豫テ廣告致置し頭脚類標本目錄及日本產蝸牛科別摺出來致候ニ付御望ノ方ハ御申込相成度候也

正誤

先月刊行配付致候會員人名簿中左ノ尊名ヲ誤脫致シ候依テ爰ニ正誤シ編輯ノ粗漏ヲ謝ス

| | |
|---|---|
| 落合總彥 | 高橋章臣 |
| 長濱兼吉 | 中西準太郎 |
| 石川一男 | 服部捨太郎 |

小生義去月二十八日大地震の災害に罹り家屋破壞負傷者三人有之候所各地方會員諸君より早速御見舞に預り候得共一々禮狀を發し難く候間不取敢紙上に於て御厚意を奉鳴謝候也

岐阜縣岐阜市
十一月　會員　名和靖

動物學會員諸君御中

ニ移行シテ大腿骨靜脈ト並行ス亦大坐骨神經(二九四)ハ之ニ隨伴ス

(二二五)坐骨靜脈(サコ)ハ脚ノ後側ヨリ血液ヲ還流スル者ニシテ坐骨動脈ノ初部ト並行シ以テ腎門靜脈ニ合流ス

(二二六)後腸間膜動脈(コチ)ハ腎ノ後端ト水平ニ於ケル背大動脈部ヨリ出テ、直腸及排泄溝ニ分布ス其岐出部ヨリ以下ノ大動脈ハ尾動脈(ヒ)ト成リ尾靜脈ト並行シテ後方ニ移行シ又同處ヨリ發スル內腸骨動脈(ナチ)ハ同名靜脈ニ伴フ

(二二七)腎動脈ハ左右各腎ニ甲乙丙ノ三條アリ甲(シ一)ハ大腿骨動脈ノ起始部ヨリ稍〻前方ニ於テ背大動脈ヨリ岐レ以テ腎ノ前葉ニ分布ス乙(シ二)ハ坐骨動脈ノ將ニ腎ニ入ラントスル所ニテ此動脈ヨリ分出シ是ヨリ中葉ニ向テ前方ニ進行ス丙(シ三)ハ乙ノ發スル處ヨリ少シク外方ニ當リテ坐骨動脈ヨリ出テ後葉ニ向テ後方ニ移行ス

(二二八)此際腹腔動脈(フト)(二〇〇)及前腸間膜動脈(セシ)(二〇三)ノ背大動脈ヨリ發出スル狀ヲ視ルヘシ

第卅五項　排泄溝ノ腹壁ヲ切除シテ左ノ諸点ヲ撿セヨ

(二二九)排泄溝ハ不完全ナル隔壁ニ由テ前後中ノ三室ニ分レ(第十圖)前室(セ)ハ之ヲ膨張セシムレハ殆ント球狀ニシテ直腸ノ開口スル所トナリ中室(チ)ハ小ニシテ輪狀襞ニ由リ前室ト分界セラレテ輸尿管及生殖導管ノ開口ヲ受ク後室(コ)ハ前者ヨリモ低キ輪狀襞ニ由テ中室ト分界シ中ニファブリ氏囊(二三二)ノ開口ヲ藏シ此室ハ直ニ体外ニ開在ス

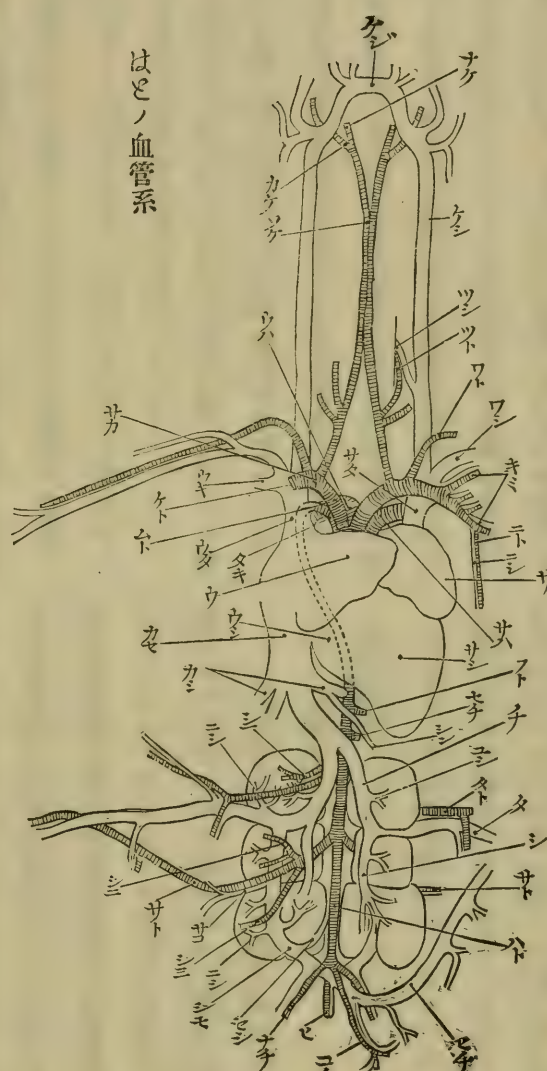
(二三〇)雄ニ於テハ輸尿口ノ直外ニ生殖乳頭起(Genital Papilla)(第七圖セコ)ト名ツクル圓錐形ノ小突起アリテ輸精管口ハ其頂ニ開在ス

(二三一)雌ニ於テハ左側ノ輸卵管口(第八圖サラ)ハ著大ニシテ左輸尿管ノ直外ニ開キ右側ノ輸卵管口ハ微小ニシテ前者ト相對セリ然レトモ此二口ハ雛ノ時ニハ同大ナリ(第十圖ラ)

(二三二)ファブリ氏囊(Bursa Fabricii)(第十圖フコ)ノ開口ハ半月形ニシテ後室ノ背壁ニアリ排泄溝ヲ後方ニ引

第九圖

はとノ血管系




腎門靜脈ハ腎ノ中葉及後葉ニ向テ數條ノ小ナル輸入腎靜脈(Efferent renal v.)(ニシ)ヲ發シ前葉ハ特ニ大腿骨靜脈ノ前面ヨリ直ニ同様ノ靜脈ヲ受ケ腎門靜脈ハ亦腎ノ後端ニ接シテ薦骨部ヨリ入來スル一二ノ小靜脈(セシ)ト結合ス

(二二三一)大腿骨動脈(タト)ハ腎頭ノ間ニ於テ大動脈ヨリ分出シ直ニ外方ニ移行シテ股ノ前面ニ血液ヲ分布ス其体腔ヲ辭スルヤ骨盤ノ腹面ヨリシテ大腿骨神經(二一九三)ト同伴シ又其ノ体腔ヲ出ルヤ(二一一九)ニ説示セル小靜脈ト(二一九三)ニ説示セル鎖筋神經(Obturator nerve)ノ一枝ニ伴フテ骨盤ノ腹側縁ニ沿走セル一小脈管ヲ發出ス

(二二三四)坐骨動脈(Sciatic a.)(サト)ハ腎ノ前中兩葉間ノ邊ニテ大動脈ヨリ分出シ外後方ノ進路ヲ取リテ腎ノ實質ヲ通過シ後中兩葉間ノ邊ニ至リテ腎ヲ辭シ次ニ腸坐孔(一〇四)ヲ經テ体腔ヲ去リ是ヨリ少シク前方ニ且ツ外方

シト雖モ多ク發見スルハ秋ニシテ十月上旬ハ靜岡近傍何レノ田畑ニモ見ザルコトナク多ク野外ニ群集シテ稻田ノ作物中ヲ往來シ昆蟲或ハ穀類ヲ貪食シ或磧ニ群集スルアリ實ニ至ル所ロ少ナカラズ產卵ハ磧ニ至リ砂上ニ巢ヲ營ムコト多ク見受ルトコロナリ又三保村ノ如キハ夏月又多ク其頭ハ十四五間餘ノ空ニ飛翔シツヽ其位置ヲ轉ゼズシテ暫時好聲ヲ發シ又飛翔其位地ヲ轉シテ暫時好聲ヲ發シ屢バ斯ノ如ク空ヲ飛翔シ隨分ヤカマシキ程ナリ產卵期ニハ好鳥家此地渡航シ卵或ハ雛ヲ此地ニ得ルコト多シ元來此地ハ全村砂勝チニテ農產物ハ甘庶、芋、等多キ田畑ニシテ海ニ濱スル所ロハ概子大小ノ松林ナリ何レモ其田畑ニ群居シ生活ス此鳥ハ秋捕獲サルヽコト最モ多キ鳥ナルガ年々其少キヲ覺ヘズ然シテ山ニ見ルコトハ至テ稀レナリ

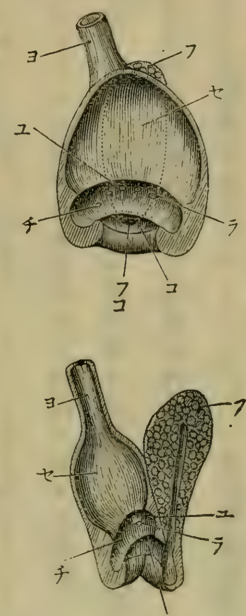
(2) Emberiza personata, T.

此鳥ハ十月中旬頃ヨリ野外ノ河堤ナル樹木竹林等ニ現ハレ十一月中旬頃ハ最モ多ク發見スベシ之モ隨分多キ鳥ニシテ田畑ニ赴ヒテ穀類ヲ啄ム山ノ森林ニモ度々見受ルト雖モ野外ノ多キニ如カズ之ヲ採集スルニハ安倍、高科、等ノ山邊ニ近キ河堤ニ至ル時ハ最モ採集スルニ容易ナリ又此ノ如キ塲所ニハ多ク飛來スルモノナリ隨分田畑ニ飛來シテ穀類ヲ啄ムト雖モ其音聲チ聞クハ堤ノ樹木ニ勝ルコトナシ然シ夜ハ堤ノ樹木或ハ山林ニ飛ビ行ク樣ニ目擊セリ何ントナレハ黃田畑ヲ往來スルモ遂ヒ飛揚スルヲ受ケザルモ堤山林等ニテハ飛揚スルヲ屢バ見受クル所ロナリ此鳥ハ其性敏捷ナラザルガ故ニ之ヲ襲フモ遠ク飛揚スルコト稀ニシテ人ノ之ニ近クモ容易ニ飛翔セザル樣常ニ見受ル所ロナリ之モ人ナキ里ニ棲息スル鳥ナレハ溫順ノ性ヲ固有スルハ勿論ナレ𪜈隨分捕獲ノ多キ地方ニアリテ人ヲ強ク恐レザルハ余ノ觀察スル所ロ鈍ナリト云ハザルベカラズ又之ヲ強ク驚カスモ敢テ遠方ニ飛翔スルコト至テ稀レナリ抑モ是等ノ原因ハ樹木繁茂ヨリシテ逃クルニ便ナル故カト推察スレ𪜈稻田ニアリテモ僅カノ距離ニ飛翔シテ敢テ遠クモ逃ケザルハ全ク其性鈍ナルモノカ

(3) Emberiza ciopsis, Sp.

甲排泄溝ノ腸壁ヲ除キタル圖　乙仝上ノ縦切面

第十圖




キ徐々ニ其附着點ヲ分離スレハ其形楕圓且ツ稍々扁平ニシテ腺質壁ヲ有シ排泄溝ノ背壁ト骨盤腔ノ屋壁ノ間ニ位スルヲ認ムヘシ蓋シファブリ氏嚢ハ幼稚ノ際發育却テ完全ニシテ長サ四分ノ一乃至三分ノ一「インチ」ニ達スレトモ全成ニ至レハ常ニ消滅ス　（ツヽク）

第九及十圖ノ解（ケジ）頸靜脈ノ縫接（ナケ）内頸動脈（カケ）外頸動脈（ソケ）総頸動脈（ケシ）頸靜脈（ツシ）椎骨靜脈（ツト）椎骨動脈（ワト）腕動脈（ワシ）腕靜脈（キミ）胸動靜脈（ニト）乳動脈（ニシ）乳靜脈（サ）左心耳（サハ）左肺動脈（サタ）左上行大靜脈（サシ）左心室（フト）腹腔動脈（セチ）前腸間膜動脈（シシ）上胃靜脈（チ）腸骨靜脈（ユシ）輸出靜脈（タト）大腿骨動脈（タ）大腿骨靜脈（シ）腎靜脈（サト）坐骨動脈（ハト）背大動脈（ヒチ）尾骨腸間膜靜脈（ウハ）右肺動脈（サカ）鎖骨下動脈（ウキ）右胸靜脈（ケト）右胸動脈（ムト）無名動脈（ウタ）右上行大靜脈（タキ）大動脈弓（ウ）右心耳（ウシ）右心室（カセ）下行大靜脈（カシ）肝靜脈（シ一）前腎動脈（ニシ）輸入靜脈（シ二）中腎動脈（サコ）坐骨靜脈（シ三）後腎動脈（シモ）腎門靜脈（セシ）骨盤靜脈（ナチ）内腸骨動脈（ヒ）尾動脈（コチ）後腸間膜動脈（ヨ）直腸（フ）ファブリ氏嚢（セ）排泄溝ノ前室（ユ）輸尿管口（ラ）輸卵管口（チ）中室（コ）後室（フコ）ファブリ氏嚢ノ開口

## ●鳥日記一（留鳥、漂鳥、候鳥等ノ差別ナク山野ニテ目ニ觸レタル月ヲ以テ何月頃ヨリ出ヅルト記載ス）

在靜岡　丹羽甲子郎

（一）Alauda japonica, (T.E.S.)

此鳥ハ常ニ數群飛翔スル鳥ニシテ四季常ニ見サルコトナ

(4) Fringilla montifringilla, L.

此鳥ハ數群十一月下旬頃渡ルコトアリ又僅カ渡ルコトアリテ年々一様ナラズ捕獲チ業トスルモノニアラザレハ渡ル期節ニ野外ニテ調査スルモ見受ケザルコトアリ明治廿二年ノ冬月ハ非常ニ數群飛渡シテ捕獲者ノ網ニ掛カルコト無數廿三年ノ如キハ捕獲者ノ手ニ入ラザルコトアリ余ハ野外ニアリテ捕獲者ノ注意ヨリ彼レガ夫レナリト注意セラレシカ飛翔ノ際初メテ一匹實見セシ位ニシテ果シテ然ルヤ否ハ證シ難キ程ナリ其後野外ニテ一匹モ目ニ觸レザリキ例ヘ渡ラザル年デサヘ多少ハ渡ルモノナルガ至テ稀レニシテ只僅カヲ見ルニ過キザルベシト雖モ降雪ノ冬月ハ非常ニ數群渡來セリ廿二年ノ如キハ靜岡近傍ノ山脈白雪ヲ載キ諸方ノ山々雪ヲ以テ蔽ハレシガ此年コソ數群ノ渡來ヲ實見セリ吾靜岡ノ如キハ温暖ノ土地ニシテ年々ノ降雪モナケレハ從テ渡來モ極ク僅カニ見受ケタリ之モ余ガ一個ノ觀察ナレハ斷言スベカラス温暖ノ國ニテ降雪ノ有無ニ因テ差アルヤ否ヤハ諸君ノ高説ヲ仰カントスル所ロナリ此鳥ハ性柔順且不活潑ニ見受ケタリ何ントナレハ人ノ之ニ近クモ敢テ驚ク氣色モナク驚カサレテモ逃飛スルコト遲ケレハナリ食物ハ田畑ニ飛來シテ穀類ヲ啄ム

(未完)

## ●動植物共棲之話

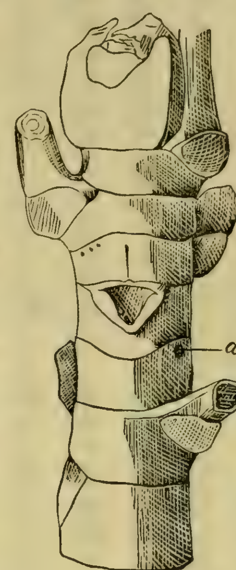
石川千代松

共棲ノ話ハ動物界ニモ植物界ニモ多クアリテ人ノ能ク知ル所ノモノナリ、動物ト動物トノ共棲ニハ本會ノ中村氏モ一度面白キ實驗ニ就キ記ルサレタルやどかりトいそぎんちやくトノ共棲ノ如クいそぎんちやくハやどかりノ介殼上ニ居ヲ占メ自身ハ少シクモ歩行セスシテ――又少シクモ歩行スルヿハ出來子ハ――諸方ヲ見物シ又やどかりカ食事ヲナス時其餘リヲ頂戴シ其替リニ敵カ攻メ來ル時やどかりヲ保護スルノ用ヲナス、らじをらりあノ所謂黄色細胞モ海藻ノ一種ニシテ之レト共棲スルモノナリ又植物ト植物ノミニテモ地錦ノ如キハ藻ト菌トノ共棲ナレハナリ然シ茲ニ最モ面白キ例ハ南米ニアル蟻蟲類ト樹木ト

此鳥ハ Personata ト同ク十月中旬頃ヨリ現ハレ十一月上旬頃ニハ最モ多ク發見ス野ニモ山ニモ至テ多ク秋ハ採集ニ掛カルコト最モ多シ何レモ田畑ニ飛來シテ穀類ヲ啄ミ夜ハ堤或ハ山ニ趣ク樣ニ見受タリ朝ハ明ケノ頃山ノ方向ヨリ追々飛來ス余ハ早朝月ヲ戴ヒテ蒿科堤ニ採集スルコト數回ナリシカ夜ノ引キ明ケ前ハ少シモ目ニ掛カラズ音聲ヲ聞カザリシカ追々明ケ眞近キ頃ロニハ飛翔シツヽ飛ヒ來リ多ク堤ノ樹木ニ集マリ之ヲ採集スルコト常ナリ然シテ之ヨリ田畑ニ飛翔シ穀類ヲ啄ム又山ヨリ直チニ田畑ニ飛翔シテ啄ムアリ其樣種々ナリト雖モ田畑ニ定泊スルハ未タ見受ケザル所ロナリ之ハ Personata ヨリ性頴敏ノ樣常ニ見受ク何トナレハ人之ニ近ツケハ強ク逃ケ一タビ驚ス時ハ必一時速ニ高ク飛揚シ或ハ遠方ノ巨離ニ飛翔シテ逃クルアリ故ニ之ヲ網ニテ採集スルニハ靜ニ追ヒ高ク飛バシメザル樣注意セザレハ容易ニ採集スルコト難シ最モ採集ニハ多分得ラルヽ鳥ナルガ只人ノ之ニ近ツクニ強ク追ハズ逃グル跡ヨリ靜カニ歩ミ行カザレハ十羽ノモノハ一或二ツヲ得ル位ノモノニシテ他ハ皆網ノ上ヲ飛揚シ或ハ堤ノ左右ニ逃ケテ充分ノ採集モ出來難シ故ニ前ノ鳥ト比較スル時ハ一層敏捷ニ見受ク然シテ此鳥ハ概子堪ヘズ音聲ヲ發シ居ルモノナリ其音聲ハ Personata ニ類似スレ𪜈チンノ聲少シク鋭音ナリ又チチントフヲ以テ一目セザルモ何レノ鳥ナルヤ容易ニ知ルヲ得ベシ又他ノ鳥類ニテハ確乎タラザルガ之レハ概子雌雄一對ニテ居ル樣ニ見受ケタリ一雄飛ビ去ルトキハ一雌跡ヲ飛揚スルハ常ニ見ル所ロナリ余ハ嘗テ雄ヲ網ニ掛ケタルトキ雌ノ面白キ有樣ヲ實見セリ雄ハ網ニ掛カルヤ聲ヲ發シタリ此時雌ノ狂氣ノ如ク音ヲ發シ現在余ト六尺離レタル眞近ニ來リ両翼ヲ怒ラシテ恰モ鷄カ交尾ノ時雄ノ羽ヲ怒ス如ク地上ニ近ヅキ來レリ茲ニ於テ共ニ網ヲ掛ケントセシカ飛ビ去レリ斯カル有樣ヨリ推セバ互ニ飛翔シ互ニ居ヲ占ムルナラント想像スル所ナリ如何ニモ雌ノ雄ニ對スル情ハ常ノ擧動ニ見受ケザルモ別段ノ情アル樣互ニ離レノツラキ樣目擊セリ

せくろぴあ樹幹ノ上端 (Cecropia adenopus)
aハ蟻巣ノ出入孔

第一圖




知ラス〳〵ニ觸ルヽ時ハ數萬ノ蟻蟲ハ立チトコロニ現出シ之レニ觸レタルモノヲ直チニ攻擊シ始メ吾人々類ト雖𪜈為メニ大ヒニ困シメラルヽヿアリ、注意シテ此ノせくろぴあ樹ノ幹ヲ見レハ其上端ニ近キ處ニ數個ノ孔穴アルヲ見ルヘシ、又幹ヲ切斷シ見ル𪜈ハ幹內ハ大腔ニシテ本邦ノ竹ノ如ク數個ノ横壁アリテ蟻蟲ハ通常幹內ノ腔處ニ住シ其横壁ヲ破リテ一節ヨリ他節ニ通ス

せんと、かたりな州ニアルせくろぴあ樹ニ棲息スル蟻ハAzteca instabilis, *Smith* ト云フモノニシテ其該樹ニ棲息シ始ムルノ模様ハふりっつ、みうれる氏ノ實驗ニ因レハ一頭ノ雌蟻ハ幼樹ノ尖頭ニ近キ所ニ來リ一小孔ヲ穿チ之レヨリ內腔ニ入ル時ニ孔ノ周圍ハ肪張シテ甘味アル液汁ヲ分泌ス、雌蟻ハ之ヲ食シ內腔ニ產卵ス、卵ハ孚化シテ職蟻トナリ一腔ヨリ他腔ニ孔ヲ穿チ遂次ニ其住居ヲ大トナシ、雌蟲カ穿チタル孔ヲ再ヒ開キ之レヨリ出入スト

ふりっつ、みうれる氏モ既ニ此事實ニ就キ多クノ實驗ヲナシ此類ノ樹木ニシテ蟻蟲ノ棲息セサルモノハ常ニ嚙葉蟻ノ侵害ヲ受ケ蟻ノ棲住スルモノハ其害ヲ受ケスト云ハレタリ、近時此事實ニ就キ多ク學問上ニ之レヲ取リ調ヘタルえんぺる氏ハ一日みうれる氏ト散步ヲナシ猶ホ幼小ナルせくろぴあヲ見タルニ其木葉ノ少シク蟻害ヲ受ケ居ルモノヲ發見セリ然ルニみうれる氏ハ直チニ該樹ノ未タ蟻虫ヲ宿ラサルヿヲ明言シ小刀ヲ取リ該樹ヲ切斷サレ氏ノ言ノ眞ナルヿヲ示サレタリ、後又えんぺる氏ハ幼小ナル樹木ニシテ蟻害ヲ受ケ居ルモノヲ十二三本モ見付ケ其皆蟻種ヲ宿ラサルヿヲ知レリ、而シテ之レニ反シ滿足ナル樹木ニシテ蟻ヲ宿ラサルモノハ一本モ無ク又之レヲ宿ルモノニシテ少シク𪜈嚙葉蟻ノ侵害ヲ被リタルモノハ一樹

ノ關係ナルヘシ

南米ノあまぞんす地方ニアリテ最モ奇トナスヘキモノハ木葉ヲ嚼ミ切ル蟻類ナルヘシ、而シテ此蟻類ハべいつ、べるつ諸氏ノ旅行日記ニモ委シク記載シアル如ク大群ヲナシテ樹木ニ攀登リ其剛强ナル口部ヲ以テ木葉ヲ嚼ミ切リ其巣窟ニ運ヒ行キテ入口ノ道路ヲ修繕スト云フ、故ニ此蟻類ハ該地方ノ樹木ニハ實ニ以テ著ルシキ害ヲ與フルモノナリ、然レ𪜈此地方ニアル樹木モ皆悉ク其侵害ヲ受クルモノニ非スシテ多クハ其害ヲ受ケサルノ法方ヲ具フルモノナリ

而シテ如何ナル樹木カ最モ多ク侵害ヲ蒙ムルヤト問フニ東半球ヨリ運ヒ移シタルモノナリ何ント云ハヽ此等ハ生來此類ノ害ヲ受ケタルヿナキヲ以テ其形質ハ之レニ堪ユルノ力ナキヲ以テナルヘシ、之レニ反シテ南米國ニアル樹木ハ幾千年トナク其侵害ヲ受ケ來リシヲ以テ玆ニ生スル者ハ之レカ爲メ逐次變化シ其葉ノ形質ノ堅固ニシテ其侵害ニ堪ユルヿヲ得ルモノヽミ殘リ之レニ堪エサルモノハ悉ク枯死セルヲ以テナルヘシ或ハ又樹木ノ葉カ蟻ノ侵害ヲ受ケサル如キ構造ヲ有セサルモノハ他ニ其侵害ヲ防クノ手段アルモノナリ、而シテ此手段ナルモノハ即ハチ他ノ蟻ニシテ彼ノ嚼葉蟻ノ來ルヿヲ妨クルモノアルナリ

即ハチ該地方ニアル樹木ニシテ通常ノ柔軟ナル葉ヲ有スルモノハ其幹、根等ニ一種ノ蟻蟲ノ住スルモノアリテ嚼葉蟻ノ來ルモノアレハ必ス之レト戰端ヲ開キテ之レヲ放逐ス

此ノ樣ナル樹木ハ他ノ樹木ニ比スレハ侵害ヲ受ルヿ少ナキヲ以テ其生存上ニ於テ他ノモノニ勝チヲ制スルヿハ至當ノ利ナリ故ニ此類ノ植物ハ次第〳〵ニ此ノ形質即ハチ蟻蟲ニ住ヲ與フルノ形質ヲ得自然淘汰ニ依リ此類ノ形質ヲ次第〳〵ニ發達スルニ至リ遂ニアル樹木ノ特質トナルニ至リタルモノナラン

玆ニ"Cecropia"ト稱スル一種ノ木アリテ其幹ハ地上ニ直立シ多クノ氣根ヲ有ス、而シテ若シ此ノせくろぴあ木ニ

歯モ倶ニ上進シマス、又後退ノ時ハ、前態ニ復シ升ス、舌歯ノ解剖的ノ關係ハ、マズ如斯モノデスカラ、圓形ノ孔ヲ穿ツコトハ、出來ナイノデス、口吻モ舌同様前後運動ノミシカ出來ヌ故、勿論廻轉シテ孔ヲ穿ツ理モアリマセン、今一歩譲リテ、つめた貝ガ、其舌ヲ他ノ貝殻ニ接シタトスレハ、已ニ前述ヘタルヨウニ、舌ハ凹形ニ彎曲スル故、第一ニ殻ニ接スル部ハ、疑ヒモナク側歯デショウ、然ルニ側歯ハ、其關節堅固デナイノデスカラ、斯ノ如キ場合ニハ、外カ又内ヘ開閉シマスガ、然シ前述ヘタル様デスカラ、側歯ハ多クハ内部ニ閉マショウ、ソウスルト孔ガ穿テナイカラ、外部ニ開イタト假想シマショウ、左スレハ、孔ノ形ハ側部ニ深溝ヲナシ、中央部ニハ稍ヤ凹ミヲ為スデショウガ、今試験ヲナシ、又不完全ニ穿タレタル孔ヲ視ルニ其形ハ圓形カ、又ハ卵形デ、其周縁ハ随分急ニ陷入リ別ニ區劃モナク孔底ニナリ升ス、ソウシテ形ノ大小ニ限ラス孔底ニ小床カアリ升スガ、コレモ多クノモノニハ判然シマセン又孔ノ周縁ノ外皮ハ、平滑デ舌ナドテ鋸切シタ様ニ、碎ケ損シタ様ニ見ヘマセンシ、又中央床ノ説明カ付キマセン、何故ナレハ最中央歯ハ、舌ヲ鋸様ニ用ユルモ、廻轉様ニ用ユルモ、其ニ外ノ内歯ヨリ深ク孔ヲ穿タナケレバナリマセン、故ニ側歯カ外開シタト見テモ孔ヲ穿ツヿハ信ジラレマセン、孔ヲ穿ツコト永キ時ニハ、遂ニ堀拔クモノデ、其第一ニ堀カレル場所ハ、何時モ一定シテ、則チ貝殻ノ前方ニ向キタル孔ノ一半デス、ソウシテ其形ハ、多ク腎臓形ニシテ、貝殻ノ後方ニ向テ彎曲シ、其上下部ハ、稍〻不規則ニ鋸歯状ヲ呈シ升ス、ケレドモコレガ舌穿孔説ノ主因トハナリマセン、舌トテモ、決シテ穿孔ニ少シモ預カラナイノデハアリマセンガ、孔ヲ穿ツ主因ハ、他ノ物質デ、舌ハ唯後デ修正補助擴張スルノデスカラ、此鋸歯状ナノモ、全ク舌ノ働作ニハ相違アリマセンガ、決シテ主因ダト言ヒ張ル譯ニハマイリマセン、充分ニ堀穿レタル孔ハ、其形圓ナレドモ、其外徑ハ内徑ヨリ廣クアリ升ス、

第三食道腺穿孔説デ、海産腹足類ハ、酸性ノ唾液ヲ分泌スルヿハ、既ニ知ラルヽヿカラ、つめた貝ナドニモ、何カ酸

モ無シト云フ、此等諸事實ヨリゑんぺる氏ハ左ノ結論ヲナセリ

一、嚼葉蟻ハ好ンデせくろぴあ樹ノ葉ヲ嚼ムモノナリ

二、せくろぴあ樹ノ幹内ニ棲息セル蟻類ハ嚼葉蟻ノ侵害ヲ妨クモノナリ

然レ𪜈茲ニ一考スヘキコハせくろぴあ樹ハ其幹内ニ棲息スル所ノ蟻類ノ爲メニ應化セルモノナルヤ或ハ又せくろぴあ樹ハ其幹ニ腔處アルヲ以テ別ニ意味モナク蟻ノ住居トナリシモノナルヤノ二點ナリ　（以下次號）

## ●ゑーめんつ氏つめた貝穿孔ノ説

藤田生述

海邊ヲ散歩ナサレタル讀者諸君ハ、定メテ御承知デショウ、死貝殼ニ小孔ノ穿チアルコヲ、此事實ハ肉食軟体動物ノ所業トノ、以前ヨリ既ニ知ラレタルコトデスガ、如何シテ生シタルヤ、ノ疑問ニ對シテハ、二三ノ説モ有升カ、皆正鵠ヲ得タリトハ云ヘナイノデスカ、頃日ねーぷるモノしーめんつ氏モ、亦一説ヲ案出シ、幷ニ既ニ世ニ行ハル説ヲ批評致シ升シタ、

二三ノ諸説ノ内、第一ニ世上ニ顯ハレマシタノハ、はんこゝく氏ノ舌穿孔説（らでゆら）デ、氏ノ考ヘニハ、舌上ノ齒ハ、硅酸ヲ含ム故ニ、酸ナトナクトモ、容易ニ孔ヲ穿ツコカ出來ルト云フノデス、コノ説ニ贊成スル人ニハ、うーどわーど、ろいかーど等ノ諸先生カ居リ升ス、

第二ハぶーゑやー、ゑやんてろー氏ノ胃液穿孔説デ、コレハ殼孔ヲ穿ツハ胃ヨリ吐出ス酸ノ腐蝕作用ニヨルノダトテ、其方法ハ頗ルつめた貝ニ似テ居リ升ス、

扨舌ニ硅酸ガアルカト云フニ、へるてる氏ノ研究ニ由リ升レハ、硅酸ハ少シモ無イトノコトデス、又舌ハ帶狀ノ器官デ其上ニ列スル齒モ、定位置ガアリ、定運動ヲ爲スモノデ、假令ヘハ舌全体ニ凹形ヲ爲シテ、内齒ハ、前後ノ運動ヲ爲シ、側齒ハ、つめた貝ナドデハ、其形スコシ長ク且ツ曲レル故、靜止ノ時ハ、外側ヨリ中央ニ向ッテ居升スガ、若シ舌前進デモスル時ハ、其全体ガ、前方ニ隆起シ、側

底ノ中央床モ亦此故デショウ、此腺ハ、然ラハ何ヲ分泌スルカト云フニ種々試驗紙ヲ以テ、撿定セシニ、酸ヲ分泌スルハ判然シマシタ、ケレ𪜈何酸ナルヤハ、斷言ハデキマセン、勿論へるてる氏ハ、孔底ニアル細粉ヨリ、分泌物ヲ硫酸ナリトシ、且ツ此細粉ハ殼ノ炭酸石灰、一度溶解シテ、再ヒ硫酸化合物トナリテ、孔底ニ沈澱シタノダト云ヒマス、實ニ硫酸分泌ハ他ノ前鰓類ニモアルヿデス、

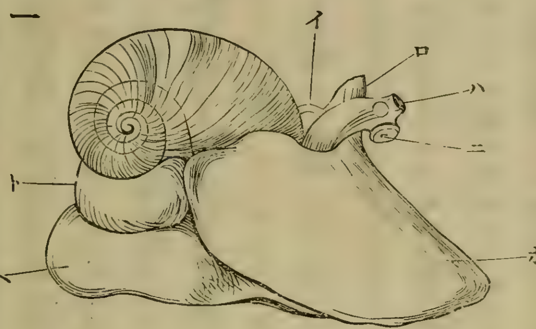
つめた貝カ、他ノ貝ヲ捕獲スルニハ、後足ヲ用ヒテ殼嘴ノ前部ヲ握ミマス、ソウシテ其後緣ハ非常ノ力ヲ有スルモノデ、一度貝ヲ握ンダラ二三度他ヘ移シテモ平氣デス、前足ハ此時前方ニ隆起シ、其口吻ニ接スル部ハ、一層膨脹シテ、恰モ鞍ヲ倒ニシタル樣ニテ、其兩片ノ間ニ口吻ヲ載セ保護シマス、其他ノ部分ハ、後足ト同ジク、獲物ヲ捕フル用ニナリマス、体ノ全態ハ、殼ノ右卷ノ爲メ、少シク右ニ轉シマス、故ニ口吻ハ左ノ殼片ニ多ク達スル理デス、孔ハらいでっひ氏ノ云フ如ク、殼嘴ノ近傍ニ、通常穿ツケレ𪜈、氏ノ云フ樣ニ、故意ニ兩內轉筋ノ中點ヲ擇ビテ、穿孔後直ニソレヲ破裂セントスル爲デモ有リマスマイ、つめた貝ノ口吻ハ敵ノ後部ニ接シテ食ヒ初ム故、是等ノ所業ハ、少シノ益ナキノミナラズ、敵殼ガ漫ニ開ケハ、砂石進入シテ、食スルニ害ヲナスヿモアリ升ス、後足テ嚴ニ貝殼ヲ封スルモ、畢竟ハ貝ノ開クヲ防守スルノデショウ、然シ何故敵殼ノ厚キ部ニ穿孔スルヤノ問ニハ、答ヘ難フ御坐リ升ス、

今七十九箇ノ穿孔セラレタ貝殼中、唯二箇ハ殼嘴ノ中點(此時ハ孔ハ甚タ複雜デス)十四箇ハ其前部、六十一箇ハ其後部デス、六十一箇中二十二箇、十四箇中四箇ハ、介殼ノ合セ目ニ、然シ多少其中點ヲ距リテ孔カ有リ升ス、他ノ二箇ニハ、殼緣ニ孔カアリ一箇ハ殼嘴ヨリ殼緣ニ垂下スル直線ニ前部、一箇ハ後部ニアリマシタ、又試驗シテ見マスト、皿ニ砂カ少ナク自然ノ狀態ヲ失フ時ハ、殼嘴ノ前部ニ穿孔シ、砂ヲ深クスルハ後部ニ穿孔シ外ニ、以上數ノ殼中廿八箇(或ハソレヨリ餘計)ハ、右殼片ニ、四十九箇ハ、左殼片ニ孔ヲ見升、夫レ故ニ貝殼カ前方ヨリ捕獲セラレタルカ分明ニナリマショウ、何故前方ヨリ捕獲セラレ

性分泌腺ハ有リハシナイカト云フ考ヘヨリまらーど氏ハ、食道腺ヲ穿孔器ト云ヒタレモ、別ニ證據モ有リマセン」

第四吸盤穿孔說とろしにる氏ハ、口吻ノ下ノ吸盤ヲ穿孔器トセシモ其考ヘ丈ハ無疵ニシテ、然シ吸盤ナド、ハ、大ナル誤謬デ、是レハ穿孔腺ト名付ケ可キモノデス、コノ穿孔器吸盤ノ位置ハ、圖ニ示シテアル故、別ニ說明シマセンガ、形態ハ常時板狀デ、黄色デス、其組織ハ厚キ表皮ト數多ノ血管アリテ、他ノ酸腺ニ似テ居リ升スモ、コレガ吸盤ダト云ヒマスカラ、今試ミニ之レヲ切リ見升スト、吸盤ニ殊性ノ周環纖維ト垂直纖維ナクシテ、唯僅カニ板狀盤ノ両端ヨリ起リ、斜ニ上進相交叉シテ、放線狀ニ周邊ニ走ル纖維ノミデス、故ニ若シ此等ノ纖維ヲ引締ムレバ、盤ハ吸收ニ於ケル樣ニ内凹セズシテ、反テ外凸スルデシヨウ、左スレバ毫モ吸收ニハ便ナクテ、分泌ニ益アルハ明ラカナヿデス、因テコレハ吸盤テナク腺ダト云ツタモ、誤リハナイデシヨウ、然シコノ腺ハ稍ヤ偏性ナヿハ疑ヲ容レザルヿデス、

一




イ 觸角　ニ 穿孔線
ロ 注管　ホ 前足
ハ 口吻　ヘ 後足
ト 臍ヲ覆フ後足ノ後裂片

二




イ 貝殼ノ前方
ロ 同　後方
ハ 穿タレタル小孔

然ラバ如何シテ、此腺カ、穿孔スルヲ知リタルヤト云フニ、第一孔モ腺モ倶ニ圓形デ、時ニ其大小相適合スルモアリ、第二此腺ノ後部ハ、前部ヨリモ好ク發達スルヲ見ルト、殼孔ノ前半カマズ堀拔ケルハ此故ニハ非ラサルカ、(腺ノ後貝部ハ殼ノ前部ト合ス)、第三盤ノ中央ニハ、皺ヤ窪ナトアリテ、稍他部ヨリ陷落スル處ヨリ見レハ、彼ノ孔

(109.) Turbo cornuta, Gmel. サヾエ

**Summer** 夏季

CEPHALOPODA.

(108.) Ommastrephes sp. スルメイカ

120. Loligo sp. ヤリイカ

GASTROPODA.

121. Haliotis gigantea, Chem. アハビ

LAMELLIBRANCHIATA.

122. Pinna japonica, Reeve. タヒラキ

**Autumn** 秋季

CEPHALOPODA.

(108.) Ommastrephes sp. スルメイカ

123. Sepioteuthis lessoniana, Fer. & Orb. アフリイカ

LAMELLIBRANCHIATA.

124. Arca subcrenata, Lischke. サルボウ

**All seasons** 四季

CEPHALOPODA.

125. Octopus octopodia, Linn. タコ

(108.) Ommastrephes sp. スルメイカ

GASTROPODA.

126. Rapana bezoar, Linn. アカニシ

LAMELLIBRANCHIATA.

(111.) Cytherea meretrix, Reeve. ハマグリ

127. Corbicula sp. シヾミ

(122.) Pinna japonica, Reeve. タヒラキ

(115.) Arca inflata, Reeve. アカヽヒ

Ostrea sp. カキ

# CRUSTACEANS.

**Winter** 冬季

DECAPODA.

128. Panulirus Burgerii, De Haan. イセヱビ

129. ,, japonicus, Gray. 仝

**Spring** 春季

SCHIZOPODA.

タノデスカ、多クノ貝ハ砂中ニ埋沒シ、唯其後方ハ、注管ト倶ニ砂ノ表面ニ露出セラレテ居ルノデスニ、つめた貝ハ、是等ヨリ一層深ク埋マリヲル故、直ニ前方ヨリ襲ヒ、口吻ヲ伸長シ、貝ノ大小ニ從ヒ、殼嘴ノ遠近ヲ穿孔シマス、ソレ故ニ孔ノ前部ハ腺ノ後部ニ適合シ速ニ堀拔カルノデス、

右永々敷述ヘタルハ亥ーめんつ氏ノ研究ノ概略デス

## ●東京市民ノ食膳ニ供スル動物ニ就テ

（第參巻第參四號三一七頁ツヾク）　波江元吉

MOLLUSCS.

**Winter** 冬季

CEPHALOPODA.

107. Octopus ocellatus, Gray. イヒダコ
108. Ommastrephes sp. スルメイカ

此屬數種アレ𪜈販賣上混同スルヲ略シテ擧ケス

GASTROPODA.

109. Turbo cornuta, Gmel. サヾエ

LAMELLIBRANCHIATA.

110. Tapes sp. アサリ
111. Cytherea meretrix, Reeve. ハマクリ
112. Mactra sulcataria, Desh. バカヾヒ
113. Mactra veneriformis, Desh. シホフキ
114. Cardium japonicum, Dkr. トリガヒ
115. Arca inflata, Reeve. アカガヒ
116. Ostrea sp. カキ

**Spring** 春季

CEPHALOPODA.

117. Sepia inermis. Hasselt. カウイカ

GASTROPODA.

118. Paludina sp. タニシ

此屬數種アレ𪜈皆ナ殼ヲ去リテ市場ニ來ル故ニ果シテ何種ニ屬スルヤ識別シカタシ

119. Haliotis supertexta, Lischke. トコブシ

# 鷸(シギ)ノ話（承前）

飯島魁述

（四）ましぎ（學名 Scolopax gallinago.）

ましぎハぢしぎトモ云フ、田しぎト云フ名モ亦此種ニ附スルナルガ普通ノ人ハ何種ニテモ構ハズ水田ニサヘ居レバ田しぎト云フヲ常トス、抑モましぎハ歐羅巴、亞細亞ニ通ジテ見ルモノニテ英ノ Common snipe、佛ノ Bécassine vulgaire、獨ノ Gemeine Schnepfe、淸ノ水鷄兒(スイケル)一名水鶩(スイチヤ)是レナリ、夏ハ北方ノ地（しべりあ）等ニ在リテ冬ハ南ノ方セイロン島、印度、フヒリピーン島等ニ至ルマデ擴ガルモノナリ、我邦ニテ秋冬春ノ三季ニ最モ多數ナル鷸ハ即チ此種ニシテ毎年幾千幾万トナク捕獲シテ食用ニ供ス、秋東京邊ニ初メテ渡リ來ルハ八月末九月始メ頃ニシテ九月中旬ヨリ十月初旬ニ最モ多ク銃獵期ノ初メニハ尙ホ極メテ多シト雖モ一二週間ニシテ大ニ減少ス、是レ多分ハ砲聲ニ驚キ散ズルニハ非ズシテ前ニ多カリシハ南方ヘ移行中通リ掛リノモノアルニ由ルナルベシ去レド後レテ渡リ來リ冬中吾邦ニ留マルモノ決シテ尠カラズ、春至レバ復タ北方ニ歸ルモノニテ銃獵期ノ終リ頃ニましぎノ更ニ數多クナルハ南方ヨリ歸リ掛ケノモノガ一時ニ本邦ヲ通リ過グルニ由ル、而シテ此鳥ノ夏中吾邦ニ留マリ生殖スルモノアリヤ否ヤ未ダ其證跡ナシ、但シ北海道邊ニハ多分夏モ留マルモノアルナラン

ましぎハ秋ヨリ春ニ掛ケ眞ニ普通ノ鳥ニシテ其形狀羽色ヲ詳記スルノ要ナシ、只近似ノ諸種ト識別セン爲メ其特徵ノ大畧ヲ述べ以テ疑惑ノ起リタルトキノ用ニ供センニ嘴ノ長サ二寸二三分、翼角ヨリ最長羽ノ末端マテ四寸一二分、尾羽ノ數ハ必ズ十四枚ニシテ皆幅廣ク最外側ノ者ト雖幅四分ヲ下ラズ、其尾羽サヘ數フレバ識別ニ充分ナレド亦翼裏ノ小羽悉ク皆タカブナラズシテ純白ノモノ多ケレバましぎナリト知ルベシ、（即チ此種ニ最モ紛ラハシキ中しぎ及ビ大しぎニテハ此羽皆黑白ノタカブナルナリ）初秋獲ル所ノましぎ中ニハ頭ヨリ頸ニカケ通常ヨリモ赤茶色ヲ帶ビタル者尠カラズ、是ハ當歲ノ幼鳥ニシテ決シテ雌雄ノ差違ニハ非ズ、元來鷸類（たましぎハ此外ナリ、）

130. Mysis sp. アミ

STOMATOPODA.

131. Squilla oratoria, De Haan. シヤコ

DECAPODA.

132. Portunus pelogicus, Fabr. カザミ

**Summer** 夏季

DECAPODA.

133. Palaemon ? longipes, De Haan. テナガエビ

134. Penacus semisulcatus, De Haan. クルマエビ

135. „ ensis, De Haan. シバエビ

此屬尙三種アリ

**Autumn** 秋季

DECAPODA.

(128.) Panulirus Bürgerii, De Haan. イセエビ

(129.) „ japonicus, Gray. 仝

**All seasons** 四季

DECAPODA.

(134.) Penaeus semisucatus, De Haan. クルマエビ

(135.) „ ensis, De Haan. シバエビ

ECHINODERMS.

**All seasons** 四季

HOLOTHUROIDEA.

135. Stichopus japonicus, Selenka. ナマコ

四時市場ニ來レモ夏季ハ稍々少シ

MAMMALS.

**Winter & Sping** 冬春季

CETACEA.

137. Delphinus melas, Temm. スナメリ

138. „ longirostris, Gray. イルカ

本年二月以來斷續ニ報告致セシ東京市民ノ供膳動物ノ種類モ大略以上ノ百參拾八種トス尤モ右ハ槪子鮮肉ニテ販賣スル所ノ品類ニ係リ乾製若シクハ醃藏セル種類ニ至リテハ他日再ヒ報道セントス

可カラズシテ彼ノ鷸穿キノ如キハ深キ傘ヲ被リ面ハ目ニ付カザル色ノ手拭ニテ覆ヒ眼バカリヲ出シ而メ着衣ニハ總ベテ盲目縞ヲ用ヒ他色ノ下衣ナドハ外ニ現ハレザル樣注意スルトカヤ、銃獵家モ之ニ倣ヒタランニハ獲物多カラントハ曾テ鷸穿キヲ心得タル一獵友ガ鷸ノ飛討チヲ爲シテ樂ムヲ目擊シタル時余ノ胸ニ浮ビタル考ナリ、ましぎハ飛立チタル後數間ヲ行キテ一二聲鳴音ヲ發スルモノナルガ其音ハ「グイ」トモ「ギー」トモ「ヂー」トモ聞コヘ眞似スルニ難ケレト余ノ獵靴ニハ小サキ水拔キ孔ガ穿チアリテ中ニ入リタル水ガ步行ノ具合ニテ噴出スル時發スル音ガましぎノ鳴聲ニサモ能ク似テ之カ爲メダマサレタルヿアリ、キ、或ル鷸穿キノ言ニ舞立タル鷸ハ其末ダ鳴聲ヲ發セザル前ニ此方ヨリ「ホー」ト聲ヲ掛クレハ近所ニ下リルモノナリト果シテ如此キヿアリヤ知ザレド余ノ試ミタル時ハ差シタル効ハナカリシ、其物音ニ驚キテ飛上ガルヤ大概ハ二三間眞直グニ舞ヒ忽チニシテ左右ヘ身ヲカハシ極メテ不規則ナル屈曲ヲナスモノナルガ暫クニシテ又直行スルヲ常トス飛方飽クマテモ疾ク獵鳥中飛切討ノ最モ難澁ナルヿ獵人ノ皆容ルス所ナリ、此鳥モ他ノ多クノ鳥類ト一樣ニ必ズ風上ニ向テ飛立ツト云フ說多ケレド又一說ニ左樣ノヿハナシト云ヘリ、余ノ自ラ觀察シタル所ハ余ヲシテ中裁說ヲ抱カシメタリ即チ風ノ殆ドナキ靜謐ナル日ニハ色々ニ飛行クナレド風ノ稍々强キ日ニハ一旦風下ニ向フヿアルモ大概ハ折レ戻リテ風上ノ方ヘ飛ブモノト云ハントス、時トシテハ人ヲ近寄ラシメズ、遠方ヨリ飛立チ又時トシテハ足元ヨリ立テ其不意ニ驚クヿアリ、或人數羽ノましぎが足元ヨリ一度ニ舞揚ガルヲ見テ「鷸ノ塊リガ破裂シタリ」ト云ヒタルガ實況ヲ寫シ得タル妙言ト云ツベシ、其飛立ツニ遲速ノアルハ之ニ近寄リ樣、物影ノ有無、怖氣ノ多少等種々アルベケレド一說ニ渡リタテノ脂肪ニ乏シキ鳥ハ兎角ニ遠方ヨリ飛立チ易ク冬間ニ見ル肥滿シタルモノハ稍々近寄リ易シト、去ルヿモアルナランカ、其秋ニ北ヨリ又春ニ南ヨリ渡リ來ルモノハ皆瘠セ居ルハ長途ノ旅行後ナルノ故ナランカ、秋渡リ初

ノ雌雄ヲ外部ヨリシテ判別スルコハ甚ダ信ジ難シ、此事容易ナリト主張スル獵師往々アレド試ミニやましぎ或ハましぎヲ示シテ其雌雄ヲ云ハシメ宅ニ歸リテ解剖シ觀レバ事實相違セルコ屢々アルナリ、余ハ此類ノ雌雄ヲ間違ナク別ツニハ体中ニ卵巣若クハ睾丸ヲ認見スルノ外ニ途アルヲ知ラズ

ましぎハ秋ヨリ翌年ノ春ニ掛ケ本邦至ル所ニ見ザルハナク其常ニ在ルハ水田、池、沼等ノ水ノアル場所ニシテ少キハ一二羽、多キハ數十羽群ヲナシ在リ、春ノ頃ハ往々桑圃若クハ菜園等ノ水ノナキ場所ニ出會スルコアリテ獵師ハ之ヲ見テ「鴫ガ陸ニ上リタリ」ト云フ、斯ハ冬中水田ニ在リタルモノヽ將ニ北歸セントスルニ際シ高地ニ聚マルカ或ハ南國ヨリシテ移行ノ途中暫時カヽル所ニ休息スルニ由ルナランカ、地上ニ在ルましぎヲ發見スルニハ中々ノ經驗ナカルベカラズ、其然ル所以ハ羽色ノ保護同化ニアリテ黒ニ黄色メキタル所ノ雜レルハ丁度土上枯草ナドノ横タハルニ紛ハシキコ妙ト云ツベシ、去レド熟レタル人ハ目早ク見出スヲ得ルモノニテ「アレおすこよ居る、そこに、そこよ」ト指サヽレテモ不熟者ニハ中々ニ見當ラズ、彼ノ鷸穿キトテ手網(サデ)ノ如キモノヲ巧ニ投ゲカブセテ鷸ヲ捕フル獵師ハ此鳥ヲ見付ケルニ最モ妙ヲ得タルモノニテ斯ル者ノ話ヲ聞クニ最初目ニ觸レ易キハ鳥ノピカ〱シタル眼玉ニテ之ニ氣ガ付ケバ鳥体ハ忽チ現然トシテ見ユ、大概ハ靜ニ佇ミ居リテ嘴ヲ下ニ向ケ此方ヲ見詰メ我カ行ク方ヘト頭ヲ回ラシ恰モ我ガ擧動ニ注目シツヽアルガ如ク我若シ急ニ立留リ或ハ急劇ニ飛ビタリナドスルトキハ彼ハ必ズ舞ヒ立ツモノナレバ之ニ近寄ルニハ一様ニ歩ムヲ要ス又一直線ニ行カズシテ遠回ハリニ輪ヲナシテ行キ漸々ト近ヅクニ非ザレバ協ハズト云ヘリ、余之ヲ聞キ鳥体ハ見ヘズトモ鳥ノ下リタル點ヲ大概ニ見極メ置キ見ヌ振リシテ云ハレタ通リ遠回ハリニ畔道ヲ行キ段々ト近寄ルコヲ試ミタルニ時タマニハ極ク近所ヨリ飛立チテ射落スノ便ヲ得タルコアリタレドサウ旨クハ行カヌ方多カリキ盖シ本當ニ此事ヲ爲サンニハ服裝等モ宜キヲ得ザル

羽ノ色取リ及ビ尾羽ノ數ニアリ、ましぎヨリモ中しぎノ方ニ一層紛ハシキナレド是又尾羽ノ數ニテ容易ニ見別ケノ付クモノナリ

銃獵者ノ大しぎヲ獲ルハ期節ノ初メニハ至テ稀ニシテ期節ノ終リ頃即チ春ニ最モ多シ、思フニ此鳥ノ大多數ハ銃獵期ノ始マラザル前ニ已ニ吾邦ヲ立去ルナラン、秋ハ支那海岸、ふひりぴーん群島等ヲ經テ冬月ヲ濠洲ニテ超スヿハ確乎知ラレタリ、其濠洲ニ在ルガ故ニ英人之ヲ Great Australian snipe トハ云フナリ、春四月初旬頃ニハ我邦ニ立歸リ始ムルモノニテ所ニヨリテハましぎト共ニ夥多ナレド東京近傍ニテハ餘リ澤山ニ見掛ケタルヿナシ、此種ハ春歸リ來リテヨリ夏中本邦ニ留マリテ生殖ス、彼ノましぎハ主トシテしべりあ地方ニテ營巢シ冬南ノ方印度ニ達スルモノナルガ此種ハ日本ニテ營巢シ冬南ノ方濠洲ニマデ達スルモノナリ

大しぎノ吾邦ニテ巢ヲ作ルハ平原ニ非ラズシテ山中ナルガ如シ、曾テ六七月ノ候ニ富士山近傍ニテ生殖ニ際セル者ヲ採集シタル人アリ、但シ北海道ニテハ低地ニテモ營巢スルガ如シ、其期節ニ際シ雄ハ高ク空中ニ飛揚ガリグル〱舞回ハリタル後急ニ地ニ下ル其時「スー」ト聞ユル太ク高キ音ヲ發スルヿましぎニ等シキ擧動ナリ、此空中運動ハ曇リタル日中其他ハ晩方ニ多ク行ヒ、雨夜ニハ夜中ト雖モ彼ノ發音ヲ聞クト云ヘリ、大しぎハ又樹ノ株上ニ止マルヿアリ、斯ハ他種ニモアルヿナルカ又大しぎニテモ生殖期ノミニ限ルカハ知ラザレド實際北海道ニテ五月ノ候一日ニ二羽ノ大しぎヲ一ハ一丈、一ハ四丈近キ高サノ樹ノ株上ヨリ擊落シタル人アルナリ

(六) 中ぢぎ (學名 Scolopax megala.)

古來本邦ノ好鳥家ニシテ此種ニ氣ノ付キタル人ハ恐ラクハ有ラザルベシ、中ぢぎトハ余ノ勝手ニ命名シタルニテ鳥体ノ前出大しぎヨリハ稍々小ナルガ故ナリ、羽色ハましぎ若クハ大しぎニ彷彿タリ而シテ其特徵トスル所ノ大畧ハ嘴ノ二寸乃至二寸三分ニシテ翼角ヨリ翼端ニ至ル間ハ四寸四分許即チましぎト大しぎノ中間ナリトス、尾羽

メヨリ我邦ニ留マリテ一二ヶ月程モ經タルモノハ脂肪充分ニ附キテ最モ美味ナリト云フ、其常食トスル所ハやましぎト一般ニ軟泥中ニ埋在セル蟲類ニシテ餌場ニハ矢張リ嘴ヲ挿入シタル跡ノ小孔ヲ幾多トナク見ルモノナリ
英國ニハ夏中此鳥ノ留マルモノアル由ニテ其生殖時機ニ於ケル習性ノ記ヲ見ルニ雄ハ雌ノ心ヲ慰メ其氣ニ入ランガ為メ頻リト一直線ニ高ク空中ニ舞揚ガリテ幾回トナク圓ク舞回ハリツヽ「チク〳〵チカ〳〵」ト聞ユル鳴聲ヲ發ス、斯ク在ルヿ隨分永クシテ終ニ地上雌ノ近所ニ下ル其飛揚中「チク〳〵チカ〳〵〳〵」ト聞ユル鳴聲ノ外ニ又羊ノ鳴クガ如キ一種奇妙ノ太キ音ヲ發スルヿアリ、彼ノ「チク〳〵チカ〳〵」ハ口ヨリ出ヅルニ相違ナキモ此太キ音ハ只ニましぎノミナラズ又他鷸類ニモ聞ク所ニシテ其如何シテ發スルカハ種々ノ説アリト雖モ口ヨリ出ヅルニ非ザルヿハ疑ナキガ如シ、其故ハ「チク〳〵チカ〳〵」ノ鳴聲ト同時ニ聞クヿアレバナリ、翼ノ運動ヨリシテ此太キ音出ヅト云フ説最モ信ヲ置クニ足ランカ、巣ハ枯葉ナドヲ聚メ作リタル粗造ノモノニテ地上草ノ影ニ在リ、巣中四個ノ卵アリ、其色薄緑ヲ帶ビタル白色ニシテ鈍端ニ茶褐色ノ斑點アリ、母鳥ノ危險ニ迫ルトキハ鶵ヲ抱ギテ立去リ其難ヲ避クヿアリト云フ、又此鳥ハ之ヲ飼養シテ容易ニ人ニ馴レ其異樣ナル擧動ハ甚タ興アリト云ヘリ

（五）大しぎ（學名 Scolopax australis.）

田しぎニ大小アリト獵師ドモノ常ニ云フ所ニシテ其大ト稱スルハ即チ大概ハ此種ニシテ只ニましぎノ大ナルニハ非ズ種類ノ全ク異ナルモノト知ルベキナリ、羽色ハましぎ或ハ中玄ぎニ彷彿タリト雖モ一見シテ識別スルヲ得ベシ先ヅ此種ノ特徴ヲ云ハンニ、嘴ノ長サ二寸二分乃至四分、翼角ヨリ翼羽末端マデ五寸許、両翼ヲ擴グルトキハ一尺七寸餘アリ、尾羽ノ數ハ十八枚ヲ常トス（ト雖モ余ハ又十六枚ナル一標品ヲ所有セリ蓋シ稀ナラン）、各側最外ノ羽尾二枚ハ至テ狹ク其幅ハ二分五厘位ヨリ廣キヿナシ、翼裏ノ小羽ハ皆黒白ノタカブニテ純白ノモノナシ」其ましぎト異ナルハ只ニ体ノ著シク大ナルノミナラズ又翼裏小

以テ見レバ渡リ來ルニハ相違ナキモ他種ト紛ラハシキガ故ニソレト見別ケラレズシテ過ギルナラン

(八)たましぎ (學名 Rhynchaea capensis.)

此鳥ハはまだらしぎトモ云ヒ前出七種トハ著シク異ナリタルモノニテ鷸中ノ最モ美麗ナルモノナリ、大サましぎヨリモ大ニシテ嘴端少シク下方ニ曲レリ、脊ハ綠色ヲ帶ビ黑ノ小紋ト淡茶色ノ斑條アリ、翼及ビ尾羽ニハ圓形ニテ淡茶色ノ斑點數多アルニヨリ一目シテ識別スルヲ得、腹ハ白ニシテ冬間胸ノ灰茶色ニテ汚キハ雄、キツパリト黑々シタルハ雌ナリ、夏ハ雌ニ限リ喉、頸ノ邊栗色ト成ル、總シテ雌雄羽色ヲ異ニスル鳥ニテハ雌ノ方ジミニテ雄ノ方ハデナルヲ通例トスルナレド獨リたましぎニ在テハ其反對ナリ

本邦中北海道ニテハ只一回此鳥ヲ獲タル人アルヲ聞キタルノミ、其以南ノ地ニハ四季トモニ居ル留鳥ニシテ餘リ普通ト云フニハ非ザレドモ塲所ニヨリテハ數十羽聚マリテ在ルモノナリ、本邦外ニテハ支那、印度、亞布利加等ニ廣ク見ルモノニテ英人ハ之ヲ Painted Snipe ト云フ

たましぎハ冬東京ノ市塲ニテ時々見掛ケ又近在ノ地ニテモ稀ニ其棲所ヲ發見スルヿアリ、多分夏モ此邊ニ居リテ生殖スルナラン、駿州富士ノ裾邊ニテハ確カニ巢ヲ營ムヲ知ル、其棲ム所ハ池、沼、若クハ小川等ニ接シ水ノジク〱在リテ茅、柳ナドノ繁茂スル所ナリ、舞方ハフハ〱トシテくひなニ似タリ、一旦追立テラルヽモ遠クヘハ行カヌモノニテ後又元ヘ歸リ居ルヲ常トス、春ノ頃晩方ニ池沼ノ邊リニテ「モッモッ」ト木魚ノ如キ音ヲ聞クモノナルガ是即チたましぎナリトノヿヲ聞キタルガ果〆然ルカ余ニ實驗ナシ、其巢及ビ卵ノヿニ付キテモ今差當リ云フベキノ材料ナシ

先ヅ〱是ニテ約束ノ遊獵家ニ最モ貴重ナル鷸八種ニ付キ余ノ知ルヿ聞キタルヿ讀ミタルヿドモ搔摘ミテ大畧記述シ卒ハリタリ、此他ニ鷸ノ類數多アルヿ冒頭ニ述ベタルガ如シソハ又他日記スルノ機アルニ任スベシ

ノ數ハ二十枚ニシテ各側最外ノ六枚ハ至テ幅狹ク二分五厘位ヨリモ廣キモノアラズ、翼裏ノ小羽ハ皆黑白ノタカブニシテ只此點ノミナラズ又全体ニ於テ大しぎニ最モ紛ハシキモノナルガ尾羽ノ數サヘ撿スレバ直チニ識別スルヲ得ベシ

此種ハ夏月しべりあノ東南部ニ在リテ生殖シ、支那北京邊ニハ秋九十月(南行ノ時)ト春五月(北歸ノ時)ニ多ク、冬月ハ馬來群島ニ在リ、本邦ニテ獲タル此種ノ標品ハ世ニ五個程アルノミ、其中一ハ秋九月下總行德ヨリ持來リタル數多ノましぎ中ヨリ余ノ撰ミ出シタルニテ又一ハ余ガ春四月ニ埼玉縣下ニテ採集シタルモノナリ、此種恐ラクハ春秋移行ノ節吾邦ニ尠カラザルベシト雖モ他種ト混同セラレ世ニ現ハレザルベシ、宜ク獵人ノ此種ニ注目アランコトヲ希望ス

(七) はりをえぎ (學名 Scolopax stenura.)

はりをしぎトハ英人ノ此種ヲ Pintail snipe ト云ヘルヨリ余ガ縱ニ付ケタル名ナリ、其實物ハ余之ヲ獲ルコトヲ頻リト務メタレド未タ果サズ、此種又世ノ獵人ノ注意アランコト余ノ切ニ希望スル所ナリ

羽色ハ前出三種ニ彷彿タルモノニテ鳥体ハ凡ソましぎノ大サニテ翼角ヨリ翼端マデノ長サハ四寸一分乃至四寸四分ナリ、尾羽ノ數ハ二十六枚ニシテ各側最外ノ六枚ハ甚タ幅狹ク各々橫徑一分ニ過ギザルベシ最外尾羽ノ中央尾羽ノ末端ニ達セザルコト凡ソ五分許ナリトス、如此キ尾ノ有樣ハ他ノ近似セル種ニ决シテ見ザル所ナレバ其識別又難事ナラザルベシ

此種ハしべりあ東部ニテ生殖シ、冬ハ馬來群島、印度等ニ至リ、秋春移行ノ期節ニハ支那北京近傍ニ多ク見ル所ナリ而シテ吾邦ニテ之ヲ獲タルノ記載ハ只ダ米國水師提督ぺルリノ日本航行記(千八百五十六年米國刊行)ナル書中ニ在ルノミ、其記スル所ハ甚タ簡單ニシテニコルソントト云ヘル士官ガ箱館海濱ヲ測量中該灣ノ入口ヨリ西北ニ當レル岩多キ濱邊ニテ多ク此ノ種ニ出會シ採集シタリトアリ、本邦ノ地タル此種ノ生殖地ト超冬地トノ間ニ在ルヲ

ヲ内ニ引入ルモノナリ」吻鞘ノ後部ヨリ一ノ靭帶起リテ体ノ後部ニ至ル(第一、四、圖*lig*)後ニ見ユル如ク是ハ生殖器ニ親密ナル關係アリ

体ノ前部ニ一對ノ甚タ固有ナル昆棒狀ノ搆造アリ(第一、四、圖*l*、第三圖レム)之ヲれむにすかす(Lemniscus)ト云フ前端ニ於テ吻ノ基ニ近ク体壁ト連ナリ後方ニ向ヒテ体腔中ニ垂下ス是ハ一言ニ言ヘバ下皮ガ局所ニ於テ非常ニ膨大シタルモノト見做スベク故ニ其構造モ下皮ト全一ニシテ粒多キ質ニシテ且ツ大ニ發達シタル水管系ヲ含有ス体壁ノ筋肉モれむにすかすノ上ヲ蓋フ此器官ノ作用未タ詳ナラズ或ハ排泄作用ノ爲メト云ヒ或ハ榮養液ノ循環ニ關係アリト云ヒ或ハ消失セル消化器ノ殘跡ナリト云フ

神經系統ノ中心ハ吻鞘ノ後部ニアル一ノ神經節(第一、四圖*g*)ナリ之ヨリシテ前方ニ向ヒ神經ヲ射出シ又後方ニ向ヒテ鞘筋(第四圖*re*)ヲ通リテ後部ニ神經ヲ支出ス

鉤頭蟲ハ雌雄ヲ別ニス」生殖器ハ体ノ後部ニ於テ重ナル器官ニシテ其位置ハ吻鞘ノ後端ヨリ後方ニ向ヒ走ル靭帶(第一、四、圖*lig*)ノ内ニアリ」雄蟲ニアリテハ二個ノ睾丸(*t*)アリ前後ニ幷列ス各個ヨリ一ノ輸精管(*vd*)アリテ後方ニ向ヒ走リ合シテ射精管(*de*)(ductus ejaculatorius)ニ入ル射精管ノ上ニ數個ノ腺アリテ之ニ其分泌液ヲ注入ス射精管ノ後ニ交合嚢(*b*)(Bursa copulatrix)アリ是ハ交合ノ際飜ヘリテ外ニ開ク然ル時ハ射精管ノ口ニアル陰莖(*p*)ハ外部ニ突出スルナリ

雌蟲ノ生殖器ハ幼時ハ全シク靭帶ニアル二個ノ卵巣ヨリ成ルト雖モ生長スルニ從ヒ數多ノ細胞塊ニ分カレ靭帶ヲ破リテ体腔内ニ入リ其液中ニ浮游シ卵細胞ハ成熟ニ至ル」卵ヲ外ニ導ク器官ハ靭帶ノ下部ニアリ第一ニ鐘(第二圖*g*)ト稱スル部アリ非常ニ大ナル細胞ヲ以テ成ル、鐘ニ二種ノ孔アリ一ハ前端ニアリテ大ナリ(第二圖I)開閉シテ体腔中ノ卵ヲ收入スルヿ恰モ之ヲ食フガ如シ今一種ハ鐘ノ後部ニアル(第二圖2)一對ナリ若シ上端ノ孔(I)ヨリシテ未熟ナル卵入リ來ル時ハ此第二ノ孔ヨリ再ヒ体腔ニ戻ル」成熟シタル卵ハ紡錘形ナルヲ以テ下端ニアル孔

# 普通動物學講義第貳拾六　附圖第九版

第八章（第五門蠕蟲第二）（綱蟲類ノ續キ）　箕作佳吉述

## 第二目　鉤頭蟲（かぎがしら）Acanthocephali.

鉤頭蟲ハ脊椎動物殊ニ魚類及ビ水禽類ノ腸内ニ寄生スル動物ニシテ其大サ概子數センチメ、ニ過ザレ圧中ニハ五十センチメ、ノ大ニ達スルモノアリ其形狀ハ多少延長シテ所謂蠕蟲形ト稱スルモノナリ此類ノ特徴トスベキ搆造ハ其体ノ前端ニアリテ後方ニ向ヒタル鉤ヲ植ヘタル稍細キ突起（第一圖r）ナリ之ヲ吻（proboscis）ト云フ以テ己ノ寄生主ニ附着スル器官ナリ此ノ蟲類ハ一切消化器ヲ欠ク蓋シ寄生生活ニヨリ退化シテ消失シタルナルベシ榮養ハ寄生主ノ腸中ニアル液ヲ全体ノ表面ヨリ吸收スルナルベシ

体ノ外面ハ硝子膜（cuticnla）ヲ以テ蓋フ（第三圖シ）此硝子膜及ヒ吻ノ鉤ハ共ニ下皮（subcuticula 第三圖カヒ）ノ分泌ニヨリ生シタルモノナリ下皮ハ硝子膜ノ直下ニアリテ稍厚ク其外部ハ粒多（ツブ）クシテ纎維ヲ混シタル層ヲナシ其内部ハ放射纎維ノ束ヨリ成ル其束ト束トノ間ニ隙間（スキマ）アリテ下皮中ニ散布シ一ノ不規則ナル管ノ系統ヲナス其中ニ顆粒多キ液ヲ含ム蓋シ全皮ヲ以テナス榮養液ノ吸收作用ニ關係アルモノナルベシ」下皮ノ直下ニハ結組織ノ一層アリ時トシテ厚層トナルヿアリ其内ニ筋肉系統ノ發達アリ二層ニ分カル外層ハ環形筋肉ニシテ体ヲ圍繞シ收縮スル時ハ其ノ直徑ヲ減ス内層ハ縱筋纎維ヨリ成リ体ノ伸長ヲ司ル」筋肉系統ノ内ニハ大ナル体腔アリテ諸種ノ器官ヲ納ム

体中吻ノ後方ニ向ヒ筋肉質ノ壁ヲ有シタル袋狀ノ器官アリ（第一、四圖rs、第三圖フ）之ヲ吻鞘ト云フ吻ノ裏面ヨリ四條ノ筋肉起リテ下方ニ走リ吻鞘ノ底ニ附着ス（第一、四圖rm）此筋肉收縮スル圧ハ吻ハ其頂上ヨリ漸次ニ裏返リ吻鞘内ニ陷入ス鞘壁ノ筋肉收縮スレバ再ビ吻ヲ壓出ス」吻鞘ノ後部ヨリ起リ体壁ニ附着スル筋肉數條アリ（Retinacula 第一、四、圖re）此筋收縮スレバ吻鞘及ヒ体ノ前部

（第二圖3）ヲ通リテ下ルヲ得テ子宮（*od*）ニ入ル之ヨリシテ膣（*vg*）ニ至リ外ニ出ツルモノトス

鉤頭蟲ノ發生ハ中間宿主ヲ要ス最後宿主ニアル親蟲ノ生ム卵ハ宿主ノ糞ト共ニ外ニ出ツ其卵ノ發生スルノ狀ハ第五圖ノ*ab*ノ如ク分裂シ尋ヒテ三枚ノ膜ヲ生シ細胞塊ハ中ニ紡錘狀ノ形狀ヲ呈ス（*c*）次ニ其前端ニ有鉤小盤ヲ發達ス（*d*）此形狀ニ達シタル時卵ハ母体ヲ出テ宿主ノ糞ニ混シテ外界ニ出ツ此卵中間宿主（重ニ昆蟲類及ヒ甲殼類）ノ食フ所トナル時ハ其腸中ニ於テ卵ノ諸包膜溶解セラレ內ニアリシ仔蟲ハ自在トナルヲ以テ其前端ノ鉤ヲ以テ中間宿主ノ腸壁ヲ破リ其体腔內ニ入リテ安息シ其体次第ニ成育ス此時迄紡錘狀ノ体ノ中央ニアリシ細胞ノ固塊ハ發生ヲ始メ体中ノ諸器官ヲ成ス但シ仔蟲ノ前端ニアリシ有鉤盤ハ消失シ仔蟲ノ体ニテ成蟲ノ部分ヲナスモノハ唯外皮ノミナリ其他ノ器官ハ悉ク上ニ述ベシ細胞ノ固塊ヨリ生ズルナリ」最後宿主中間宿主ヲ食フ時ハ鉤蟲ハ甲ノ腸內ニ於テ全ク成熟シ再ヒ卵ヲ生スルニ至ル

鉤頭蟲中ニハ唯一族アルノミナリ

Fam. Echinorhynchidæ　此族ハ唯一ノ屬ヲ有ス

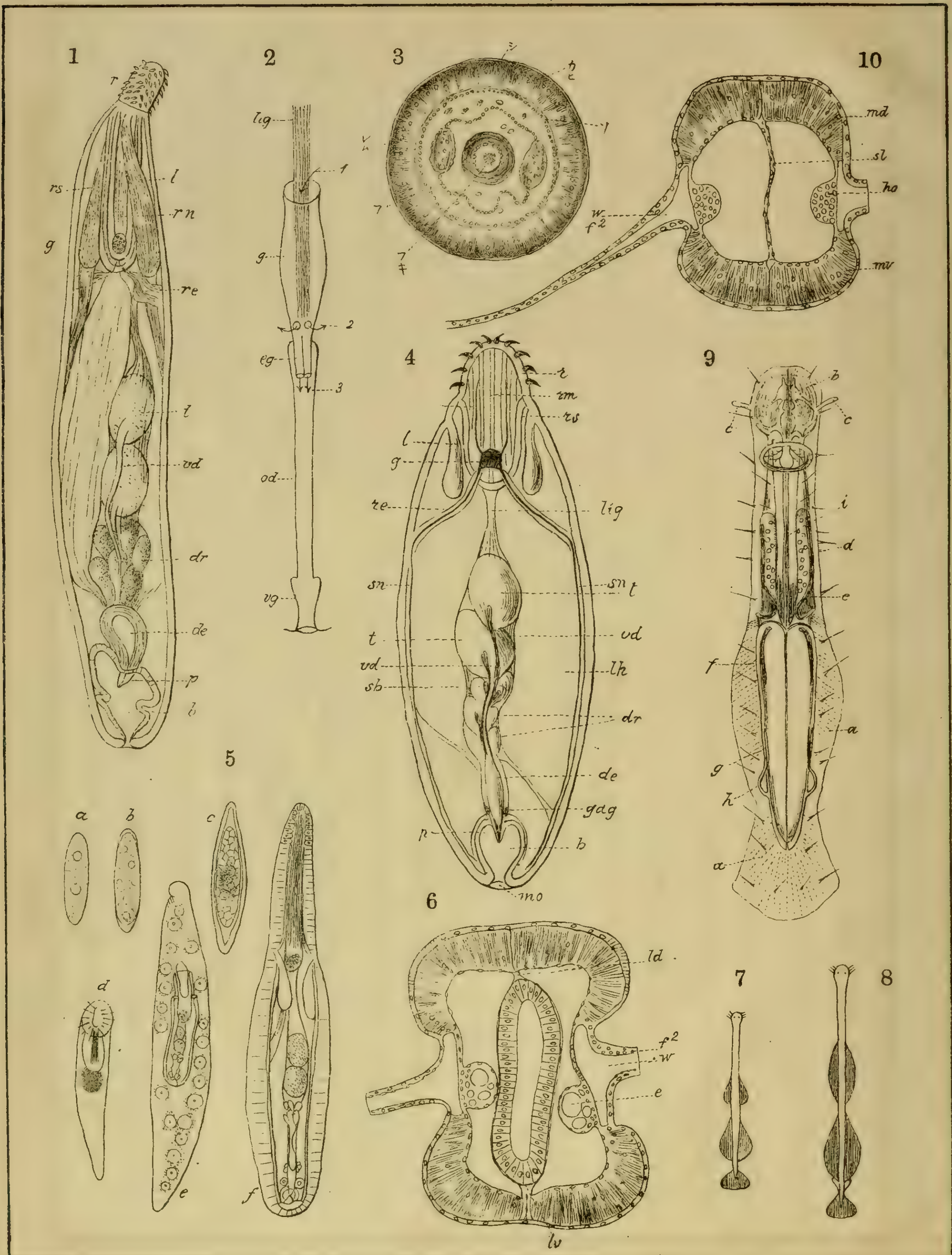
ECHINORHYNCHUS. **E. gigas,** Goeze 巨大ゑきのりんかす豕ノ小腸內ニ寄生ス長サ雄ハ六、半乃至九せ、め、雌ハ五十せ、め、ニ達ス吻ハ鉤ノ六橫列アリ各列ニ八本ヲ有ス中間宿主ハ甲蟲類ナル Melolontha（かなぶんぶんノ一種）ノ幼蟲又ヒ成蟲ナリ

**E. polymorphius** Brems. 長サ二、五せ、め、水禽（例 Fulica atra, Gallinula chloropus）ノ腸內ニ寄生ス中間宿主ハわんひぷだノ一種（Gammarus pulex）及ヒざりがに（Astacus fluviatilis.）　**E. angustatus,** Rud. 吻ニ八乃至廿ノ鉤列アリ種々ノ淡鹹水魚類ニ寄生ス中間宿主ふなむしノ一種（Asellus aquaticus）

## 箭狀蟲（やむし）　Chaetoguathi.

此類ハ線蟲類或ハ鉤頭類トハ全ク異ナレ圧圓蟲類ノ附屬トスルヲ通常トス蓋シ他ニ置ク所アラザレバナリ

箭狀蟲ハ他ノ圓蟲類トナリ寄生蟲ニハアラズ皆ナ僅ニ數


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
rs
l
rn
g
re
t
vd
dr
de
p
b
lig
g
eg
od
vg
md
sl
ho
w
f²
mv
rm
lh
sn
sh
gdg
mo
ld
e
lv
i
d
c
f
a
h

せゝめゝニ通キズシテ海面ニ浮游ス其外見ハ稍魚ニ似タリ(第七、八、圖)但シ其体ハ細長クシテ其後端ニ尾鰭ノ如キモノヲ備フル外ニ体ノ側面ニ一對乃至二對ノ側鰭アルヲ以テナリ箭狀蟲ナル名モ其形狀ヨリ起リタルナルベシ、体ハ透明ナリ体ノ前端ニ頭ヲ區別スベシ而シテ其頭ノ背面ニハ一對ノ眼ヲ備フヲ常トス又稀ニハ一對ノ感觸器ノ如キモノヲ備フ(第六圖 *c*)口孔ハ頭ノ前端ニアリ其周邊ニ大小二種ノ鉤數多アリ消化器ハ口孔ヨリ始マリ直線ニ後方ニ向ヒ体ノ中央或ハ中央ヨリ後(决シテ後端ニ至ラズ)ニテ腹面ニアル肛門ヲ以テ終ル附屬スル腺ノ如キモノアルコトナシ」消化管ハ廣キ体腔内ノ中心ニアリテ背及ヒ腹ノ腸間膜ヲ以テ体壁ニ連結ス(第九圖)

神經系統ノ中叢ハ頭部ノ背ニアル食道上神經節ヨリ成ル是ハ眼及ヒ其他ニ神經ヲ支出スルガ中ニモ体ノ中央ニ近キ腹面ノ一大神經節(食道下神經節)ト一對ノ神經ニヨリ連結ス是ハ体ノ中央ヨリ後方ニ神經ヲ射出ス

箭狀蟲ハふたなりナリ雄生殖器ハ体ノ後端ニアリ睪丸ハ体腔壁ノ細胞ガ或ル一定ノ處ニ於テ殊ニ發達シタルナリ(第六圖 *f*、第十圖 *ho*)此等細胞ハ体腔ニ落チテ其中ニ浮游ス体腔ヨリ外界ニ達スルニハ細キ輸精管(第六圖 *g*)ヲ下リ貯精嚢(*h*)ニ至リ夫ヨリ外ニ出ツ雌生殖器ハ雄生殖器ノ前ニアリテ消化管後端ノ兩側ニアリ(第六圖 *d*)卵巣ハ睪丸ト仝シク体壁細胞ノ發達シタルモノナリ(第九圖 *e*)夫ヨリ体腔ニ入リ輸卵管(第六圖 *e*)ヲ經テ外ニ出ヅ」

箭狀蟲ニ二屬アリ側鰭二對アルモノヲ Sagitta ト云フ **S. bipunctata.** (Quoy and Gaim. 第八圖) **S. hexaptera** (D'Orb. 第七圖)ノ如シ側鰭一對アルモノヲ Spadella 屬トス **S. Claparedii,** Grassi ノ如シ我邦ニモ數種產スルヿハ知レ居レドモ末タ其何種ナルヤ詳ナラズ

## 第九版圖解

引用書 Hatschek, Lang, Leunis. Hertwig. 飯島等

自第一圖至第五圖　鉤頭蟲

1. Echinorhynchus angustatus.　雌蟲

*r* 吻、*rs* 吻鞘、*g* 神經節、*l* れむにすかす、*rm* 吻ノ引入筋、*re* 吻鞘引入筋

*lig* 靭帶、*t* 睪丸、*vd* 輸精管、*dr* 腺、*de* 射精管、*p* 隱莖、*b* 交合囊

〱と音便相似よれりこれより推すときは英語の cricket といひ獨逸語の Grille といひ且羅甸名の Grillus といへるも皆其固有の鳴聲をとつてこれが名とせしにやあらん英國にては其鳴聲に creak を用ふるを見ても之を證し得べし又別にエンマコホロギと呼ぶ一種あり漢名を油胡廬といふ促織志云促織之別種二肥大倍焉色澤如油其聲呦々曰油胡盧とあるをみれは此虫の色黒くして光澤あるが故に油の一字を添へたるものなるべしさるにても如何なる義によつて胡盧と名け玄か定かに知りがたし事物紺珠によれは油葫蘆とかきて胡盧の両字の艸冠あるをみれば虫体肥大にして葫蘆に似たれば斯くは名けしもの歟あるハ胡盧が本よりの字ならんも知るべからず書言故事に掩口笑曰胡盧と見え通雅に盧胡は笑在喉間ともあり和名類聚抄に嘶咽を古路々久（字典に聲破曰嘶又嗄ハ聲破なりともあり）と訓し和訓栞にはころ丶〱ハ聲のかれてころ〱といふよやともあり（胡盧の件につきては本誌第十八號斑鳩の條に詳なり）此等を考合せバ胡盧は其鳴聲をしてこれが名とせしものならん歟

東雅、本艸啓蒙、物類稱呼などによれば古にきり〲すと云しものは今のこほろぎ也といへりいかなるものにや和名類聚抄に蜻蛚和名古保呂木、蟋蟀一名蛬和名木里木里須とありされども和漢の蟋蟀の圖をみるに其狀こほろきに似るもきり〲とは見ゑかたし蔡邕月令章句云蟋蟀虫名謂之蜻蛚とあり又爾雅註疏云蟋蟀蛬郭璞註今促織也亦名青蛚陸璣疏蟋蟀似蝗而小正黒有光澤如漆有角翅一名蛬一名蜻蛚ともあるを見れば蟋蟀と蜻蛚とハ同種の虫たるとしるしるかるに和名類聚抄よ蜻蛚和名古保呂木とありて蟋蟀一名蛬和名木里須木里とあるハ甚た心得がたきとなりかく同一種の虫にして一をこほろぎといふ一をきり〲すといひしより東雅などの諸書には古にきり〲すと云ものは今のこほろぎ也との臆説を立てしものなるべし按ずるに今いふこほろぎもころ〱となくならんには古のこほろきも亦此虫をいひしなり既よ万葉集などにはまゝ蟋蟀をこほろぎと訓するあるをみて知るべし

### 螽蟖　きり〲す　一名ぎす

2. 仝上雌蟲ノ輸卵部（圖式）
*lig* 靭帶、*g* 鐘、*eg* 卵道、*od* 輸卵管（子宮）、*vg* 脉、1. 体腔ヨリ鐘ニ入ル第一孔、2. 未熟ノ卵鐘ヨリ体腔ニ返ル孔、3. 鐘ヨリ輸卵管ニ入ル孔

3. 仝上吻鞘部ノ横斷面（廓大圖）（飯島）
シ硝子膜、カヒ下皮、ソ筋肉、レム れむにすかす、フ吻鞘、フキ吻牽引筋
フラ浮游卵巣

4. 雄蟲ノ圖式
指字第一圖ニ同シ

5. Echinorhynchus proteus ノ發生
*a b* 卵ノ分裂、*c* 包膜 分泌、*d* 幼蟲（有鉤盤筋肉、細胞塊）*c* 中央ノ細胞塊ヨリ体皮ノ外他ノ器官ハ悉ク發達ス、*f* 今少シ發達シタルモノ（雄蟲）

自第六圖至第十圖　箭狀蟲

6. Spadella claparedii　廓大圖
*a* 鰭、*b* 腦（食道上神經節）、*c* 感觸器狀ノ構造、*d* 卵巣、*e* 輸精管、*f* 睪丸、*g* 輸精管、*h* 貯精囊、*i* 消化管

7. Sagitta hexaptera.　（廓大圖）

8. Sagitta bipunctata.　（仝）

9. 仝上ノ卵巣部ノ横斷面（廓大圖）
*e* 卵巣、*f* 鰭、*w* げれー、*ld* 背ノ腸間膜、*lv* 腹ノ腸間膜

10. 仝上尾端ノ横斷面（廓大圖）
*f* 鰭、*w* げれー、*md* 背筋、*mv* 腹筋、*sl* 隔膜、*ho* 睪丸

# 寄書

說ノ可否ハ本誌編輯者其責ニ任セス

## 動物聲音考第十八　野村彥

### 蟋蟀こほろぎ

本艸啓蒙に今のコホロギはオニコホロギ　紀州ホロホロ　勢州コロコロシ　和州コロコロ　備州等ノ名アリソノ鳴ク聲清高ニメ抑揚アリコロコロノ聲六七返モ重ヌルモノヲ上トスとあり又和漢三才圖會にも蟋蟀有二種扁脊者善鳴其聲如曰古呂呂牟（コロロ）、古呂呂牟（コロロン）清美亞于松蟲ともあり齋藤彥麿がかたひさしにもコロコロと聞ゆるかコホロギともあり此等を考合せばコホロギは其鳴聲をとつて名けしとしるし

佛蘭西にてこほろぎを cri-cri といへるは固（もと）其鳴聲より名けしものなりと此クリクリといふコロ

袖中抄につゞりさせてふきり〳〵なくとも世俗にきり〳〵すはつゞりさせかられひろれむとなくといへりとはきぬ布のやれたるなよだもすべくもなきを云也

## 雜錄

●蝙蝠通信　波江先生ハ本誌發兌以來蝙蝠種類辨別法ニ付キ丁寧ニ御教導下サレ余輩其庇蔭ヲ蒙ムルヿ尠小ニアラズ玆ニ先生ノ御高意ヲ謝シ併セテ余輩ガ當時所持セル標品ニ付キ其產地ヲ御通信申上ゲ候若シ御參考ノ一助トモ成ラバ意外ノ幸福ト存候

(1)キクガシラカハホリ（Rhinolophus ferrum-equinum）此ノ種ハ靜岡縣下佐野郡領家村ノ有名ナル古代ノ人類穴幷ニ同郡原田村原里ノ通常人家ノ天井及ビ豐田郡赤佐村岩水寺ノ岩洞中等ニテ採集セリ以上ノ種ハ共ニ明治廿二年中

(2)コキクガシラカハホリ（Rhinolophus cornutus（R. Minor）ハ本年十一月廿九日豐田郡廣瀨村社山ノ隧道ニテ採集セリ（尤モ其以前ニモ採集セシヿアリ）元來蝙蝠類ハ性群棲ヲ好ムトノヿハ毎度聞キ居リシガ余輩ハ此ノ種ノ採集ニ就テ尤モ確實ニ其說ヲ確メ得タリ余輩ノ採集ヲ試ミシ隧道ハ素ト水道ノ目的ニテ穿チタルモノニシテ全長七百餘間ノ長キ隧道ナリ其ノ終工セシハ明治十七年ノ事ナレ𪜈未ダ水ノ流通セルヿ無キヲ以テ斯樣ナル蝙蝠ノ住所トハ成リシナリ然レ𪜈未ダ兩端全ク開通セザル故ニ穴中ニハ炭酸沼氣等ノ有害瓦斯ヲ含ミ加フルニ水ヲ溜存スルヲ以テ充分ニ奧底迄達スルヿ能ハズ余輩ノ探索セシハ穴口ヨリ三百五十間程ノ所ナリシガ此ノ邊ニテハ既ニ皆無ト稱スルモ差閊ナク最モ多ク群棲スルハ二百間位ノ所ニノ天井ニハ二匹或ハ四匹稀ニハ五匹ヅツモ一團ニ聚合シテ懸垂セリ余輩ノ目擊セシハ五十匹餘ニ達セシヿ疑ナシ當時已ニ冬ニ垂ントスルヲ以テ捕獲スルヿ誠ニ容易ナリ玆ニ不思議ノヿニハ「コキクガシラカハホリ」ノ外ハ一頭ダモ他ノ種類ヲ見ザルヿナリ尤モ全穴中ヲ探究セシニ非ザレバ確然トハ申シ難ケレ𪜈「コ

本艸啓蒙、螽斯の條に原野ニ多シ五月ヨリ鳴クギイスチヨト聞ヘテ織機ノ聲ノ如シ兒童樊(カゴ)ニ入レ瓜ノ瓤(サナゴ)ヲ與ヘテ自カラ鳴シメテ玩トス雌ナル者ハ鳴カズ尾ニ曲レルケンアリ緑色、褐色ノ二品アリ褐ナル者ハ岡ニオリテヨク鳴キ聲高シ俗ニアブラト呼ブとあり和漢三才圖會に其聲如レ言二木里木里須一故名レ之一二聲而如二鼓舌(シタウチ)一雌肥大能鳴(ク)ともあり（きり〳〵す索綏すゝろ音すなりゝ句青天白日といへる書に見えたり恐くは鼓舌に似たる聲といふ歟）尤もキイスチヨの音キリ〳〵スの音に稍相似たればキリ〳〵スといへるも固有の鳴聲より名けたるものなるべし北米にて蟲螽に似たる淡緑色の虫あり其名を katydid といふ此虫は秋夜katydid の奇音をなすが故に斯くは名けたるものなりと其狀を圖するものをみるよ我邦のきり〳〵すに似たる所なきにあらず又 ka-ty-did の音ギイスチヨの音に近ければ我邦のきり〳〵すと同虫ならん歟

古今集に秋風にはころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり〳〵す鳴（累塵集にきり〳〵すてゝをさせともなかずとも月もるまじき閨のひまかハともあり）とあるによりきり〳〵すはつゞりさせとなくものなりと思ふ人あり或は又こほろぎをつゞりさせといへる地方ありされどもきり〳〵すもこほろぎもつゞりさせとは予が耳にはきこえかだし又他よりつゞりさせといへる虫ありとも心得がたしつゞりさせは恐くは固有の鳴聲といふにはあらさるべし藻鹽草に世俗にきり〳〵すはつゞりさせ、からはひろはんと鳴と云りからはとはきぬ布のやれて何にもすべくも無きを云也それをばはらうへをつゝるにくはへてつくりたれば強き也からへわらふ心と云也又足あとを物にふみきりたるこそのまいてのはしを縄になひて火をつけてそのきずをあたゝむるをばからは火うつと云也されは此歌は秋風の吹にふちはかまのほころぬるは即ちやれぬる也つゞりはれほやうやれたる物をとりあつめてさせはそのふぢばかまや秋風にやれぬらんつゞりさせあらはひろはんときり〳〵すの鳴はとよめる也又云きり〳〵すの名をばさせと云ふと云ふ其火にさせと云きり〳〵すとはいふをつゞりさせとそへたる也なくを云にはあらすと也しかれどもふるき物にこれをいつれともわかさるなりと云々

カサの外部より見らるゝなり。サレバ瀬戸内海ニモかりぶであアルナリ、春出ヅトアルハ面白シ、志摩及ビ相摸ニテハ夏採集セリ、備前ノ備前くらげト駿河ノモノト異ナルニ同ジキカ、又野崎君ハひくらげハ餘程大ナルモノゝ樣ニ記臆スルト書キ添ヘラレタリ、來春君ノ調ベラレンヿヲ希望ス。

又京都ノ稻葉昌丸君ヨリハ

和具のカリブデアの觸手はたしか無色もし色ありたらば薄茶色と云ふべきところ覺に記臆致候モ一度行て確て來たひと思て居る

ト申越サレタリ。爰ニ兩君ノ厚情ヲ謝シ、先ニ觸手ハ鳶色カト書キシハ全ク誤ナルヿ自分ニモ分カリタレバ是正ス。

岸上鎌吉

●**海哲** ハ清音ニテはいつぇト讀ミくらげノヿナリ、支那ニテ食用ニスルモノ、標品ハ甚ダ不完全ナレモ農商務省ニアリ、之ヲ撿スルニ本邦ノ備前くらげト同一ナルガ如シ、記シテ後ノ敎ヲ竢ツ

き、か

●**石蟶** 又ハいしわり、うつぼ介トシテ目八譜ニ記シアルモノハ先ニ予ガ貝殼中ノ貝ト題シテ載セシモノナリ同譜ノ文ヲ轉載シテ諸君ノ一覽ニ供ス

形即ち鴨の嘴と同種にして菊名石中に生ず殼灰白色の者多し褐色の者あり鴨の嘴と一物二名の者なり、……予菊名石を割て研究するに堅き石には必あり未熟者灰白色にして殼甚だ脆し次第に成長して石中を離れたるもの殼朽葉色にして表裏共に光澤あり裏眞珠の光に似たり此者石中に生ずると河川岸中に小蜆含生し或は高山石中或は海遠き地の岩中より石蛤石蜆等出ると同理なるべし……

又呉器介ト稱スル海底ニ生ズルあはびノ貝殼中ニアリト載セタリ、石中ニ生ズル理ハヨクコジツケタリト云フベシ。

き、か

●**カハ子ズミノ產地ニ就テ** ハ去ル明治二十二年七月發兌ノ本會雜誌第九號質問應答之部ニ宍戸一郎氏ノ記事アリシガ、予ハ本年八月ヨリ當地ニ來リ。諸所採集

キクガシラ」ノ棲居スル模様ヨリ考フレバ已ニ三百間頃ヨリハ住マザルト察セラル何トナレバ已ニ此ノ邊ニテハ蠟燭ノ火モ餘程勢力ヲ失フ程ナレバナリ

次ニ豊田郡赤佐村岩水寺ノ岩洞ニモ「キクガシラ」ト同樣ニ此ノ種ノ棲ムヿヲ見受ケタリシモ當時該所ヨリノ標品無ケレバ確ニ產地トスルヿ能ハス

(3)チヽブカハホリ(Synotus darjelingensis, Hodgson) 此ノ種ハ明治十九年豊田郡野部村ニテ採集セリ耳ノ形狀尾部ノ樣子等ヨリ股間膜ノ裏面ニアル白色ノ毛ニ至ル迄誠ニ第一卷四百十九頁ニ記載ノ記事ニ符合セリ只惜ムラクハ剝製標品ナルヲ以テ各部ノ長サヲ生活ノトキノ大キサニテ計ルヿ能ハズ加フルニ剝製ノ際誤テ皮ヲ破リシヲ以テ隨分不完全ナル標品ナリ然レ𪜈最モ肝要ナル要點ニ就テハ充分此ノ種ヲ辨別スルヿヲ得ベシ是レ余輩ノ大イニ依賴スル所ナリ

(4)カハホリ(Vesperugo noctula) 此ノ種ハ明治廿二年及ビ本年豊田郡野部村幷ニ佐野郡原田村ニテ採集セリキクガシラ屬ノ如ク洞穴中ニテ採集セズ多クハ山野ノ草葉上ニ附着セリ

以上記載セシ四種ノ外尙ホ標品ヲ所持セザレ𪜈豊田郡野部村ニ產スルヿヲ知ルハ「アブラムシ」ナリ有志諸君中若シ「コキクガシラ」ノ標品御望ノ方ハ他ノ標品ト御交換ノ程願度候

在靜岡縣遠江　久松問孝
増田勇次郎

●ひくらげ　予ハ先月ノ誌上ニ於テ二種ノくらげであヲ記載セリ、之ニ就テ備前ノ野崎續太郎君ヨリ左ノ報道ヲ得タリ

弊地に於て方言をヒクラゲと稱するものあり、學兄の稱せる Charybdea brevipedalia なるや如何、多分夫れにてあると心得らる、刺戟の甚だしきものにて本春釣漁に出でたる時、度々釣糸に附着(觸手)し手指をやみたるにあり、其形狀ハ學兄の掲げたる木版圖と同樣なり、カサハ無色、然し少し薄綠色と稱して可なるや海潮の色を(夫れより薄く)帶べり、觸手は黃茶色(? )なり、またカサの內部に濃茶色のもの四個ありたり、其ものは

に於ても前日の通り行ひたるに三十七頭を得たりモンシロテフの蠶豆葉間に翅を収めて睡眠したるものを竪に見る時ハ容易に見出す事ハ出來ざれども若も注意して翅を横より見る時ハ實に見出し易し然れども蠶豆葉とモンシロテフの翅翅とは能く類似したる點あるを以て素人には鳥渡見出し難からん

元來モンシロテフハ十字花科植物に產卵して孚化成長するものなれば蠶豆の栽培したる近傍は廣き間一面に油菜の耕耘したるを以て其間に睡眠する方最も適當ならんとに思ひ付きたれバ能々取調べたるに往々油菜の間にも睡眠するものあるも其數に至りては僅少なりと云ふべし何故に直接に關係ある油菜に僅少にして關係なき蠶豆に夥多なる理由に至りては恐く當時油菜は大ひに成熟し殆んど落葉したるを以て睡眠するに場所の自から不適當と成るに由り其近傍に繁茂する所の蠶豆葉間を需めて睡眠するは自然の道理ならんか尚又其他に正當の理由のあるものにや聊か記して識者の敎へを俟つ

●蚜虫の產卵　本年十一月廿一日の實驗に於て梨桃に生ずる蚜虫の有翅の雄虫と無翅の雌虫と接尾して頻りに木芽の間に產卵するを見たり卵子は始め青色なれども後に至りて光輝ある黒褐色に變ず而して雌虫を解剖したる腹中二三粒宛の青色卵子を保つを見たり

●ミノムシ木芽に類似す　十一月廿一日已に梨樹の落葉したるを以て少しく手入せんと欲して頻りに枝を切り且つ種々の害虫を驅除するの際特に本年孚化して僅か三分許に成長したるミノムシ(Eumeta minuscula, But.)の枝上に附着するものあれば見附次第に驅除したるに由り最早ミノムシは居らざる樣に思ひたる所豈に計らんや今迄梨芽と思ひ居る所のものの往々にしてミノムシなるとを見出したり是れ實に其形狀と云ひ附着の有樣と云ひ一々梨芽に類似するとの正確なるにハ驚きたり元來ミノムシの家は害敵を防ぐに適當なるとは已に承知する所なるが其家の木芽に類似するの事實は小生始めて實驗せり是れ震災後最近の失策なれば聊か記して會員諸君に報ず

ノ途次、九月中旬當村山田川及ビ山邊川ト稱スル幅二間餘ノ谷川ニ就テ、該獸ノ往來セシヲ屢々目撃セリ、而シ最初ノ程ハ果シテカハネズミナルヤ否ヤニ就テハ判然セザリシガ、其后四五日ヲ經過シテ土人ヨリ實物ヲ得、漸クカハネズミナルヲ知レリ、其ノ形狀等ハ、第四高等中學校生徒ガ嘗テ加賀國河北郡田之島村ニテ捕獲シタル者ト少シモ相違セシ所ナキガ如シ、

土人ノ方言ハ一般ニカハネズミト稱ヘ居レリ尚聞ク所ニ由レバ産地ハ當村ニ限ラズ隨分他村ニモ産スル由ナリ、記シテ以テ諸君ノ參考ノ爲メ茲ニ報告ス、

●カハガラスノ産地　會員梅村甚太郎氏ハ本年十月本會雜誌ニ「カハガラス」ハ伊勢ニ産スル由報ゼラレシガ當村大字山邊村ノ內俗稱「ナカンド」ト云ヘル山中ノ谷ノ近傍ニモ之レヲ産スルコヲ予ハ確知セリ

以上二件　在大坂府下能勢郡枳根莊

會員　高松榮太郎

●又かはがらす　毎度かはがらすニ就テノ報知ヲ雜誌上ニテ拜見仕リ候ヒシガ小生モ本月中旬一羽ヲ當村卽チ靜岡縣佐野郡原田村獵師ヨリ買ヒ求メ該種ガ小生地方ニ産スルコヲ確カメ候而シテ毎年五六羽ハ必ズ打チ取ル由獵師ノ話

●さなだむし　同上ノかはがらすヲ剝製ノ際服腔部ヨリ一個ノさなだむしヲ發見致セシモ惜イカナ頭部ハ散彈ノ爲メニ紛失シテ見出スコト能ハズ白色ニシテ一個体ノ幅一セ、メ、長サハ三分ノ一程アリ魚類ヲ食トスル鳥類中ニ多ク寄生スル由ニ聞キ居リシ Bothriocephalidae 科ニ屬スルモノカ　右二件在東遠　増田雄次郎

●モンシロテフの睡眠　小生寓居（岐阜市京町）近傍の田圃間の小徑の傍に於て長さ十七間の所に凡そ四十株の蠶豆を一直線に栽培せり然る所小生本年六月一日の夕刻散歩しつゝ茲に行きたるにモンシロテフ（Pieris rapae, Linn.）の蠶豆葉間に睡眠したるもの丶多きを見出したり今試みに一々二指にて容易にモンシロテフの胸部を捕へて殺したるもの其數實に六十頭なりき又翌二日夕刻

吸收スルコトアリ又花ニ靜止シテ吸收スルコトアリト雖モ概子其他ハ靜止スルコト稀レナリ靜止スルトキハ翅ヲ水平ニスルコト多シパピリヲ中 Sarpedon ヲ除クノ外ハ最モ飛揚速ニシテ活潑ナリ然レ𪜈早朝ハ甚タ不活潑ニシテ飛揚ヲ試ミズ

(2) Papilio Machaon, L. ハ前ノ蝶ト飛揚ノ速力差異ナシト雖モ靜岡ニハ至テ稀レナル蝶ナリパピリオ中 Masilentus ヲ除クノ外殊ニ少ナク概シテ山ニ多ク野外ニ稀ナリ深山又少カラズ駿河ノ龍瓜山ハ可ナリ高山ナレ𪜈此山ハ反テ野外ヨリ多ク又採集スルニモ此山ニシテ終日奔走スルトキハ三四匹位ヒヲ採集スルヲ得ベシ其他ノ處ロニテハ二日ニ一匹ヲ採集スルコト難シ此山ノ頂上或ハ中央ハ森林繁茂スルトコロ稀ニシテ草木繁茂ス多クハ茅繁殖シ其中ヲ採集スルトキハ得ルコト易シ概子靜止スルコト稀レニシテ靜止スルトキハ翅ヲ直立スルコト有レ𪜈水平ニスルコト最モ多シ花密吸收ノ時ハ Xuthus ト異ナルトコロナシ

(3) Papilio Demetrius, Gr. ハ山野兩共多クシテ靜岡地方ニテハ山ノ林ニ多ク野ノ繁茂スル樹木ノ中ニモ多シ然レ𪜈此蝶ハ概子樹木鬱蒼暗影ヲ好ミ飛揚スルコト多シ多ク柑類ニ飛來スルト雖𪜈 Xuthus ノ如ク非常ニ澤山來集スルコトナシ飛揚ハ前ノ蝶ヨリ少シク鈍シ靜止ハ時々見受ルコトアリ花密吸收ノ様ハ前ノ蝶ト異ナルナシ靜止スルトキハ翅ヲ直立スルコト稀ニシテ水平ニスルコト多シ此仔蟲ハ山椒ヲ食害スルコト間々見受ケタリ

(4) Papilio Alcinous, Klug ハ山野兩共多クシテ樹木暗鬱ノ木影ヲ飛揚スルコト多シ山野兩共樹木暗鬱ノ所ロニ多シト雖モ野外ハ禾本植物中ヲ飛揚スルコト多カラズ何レ𪜈川堤ニ樹木ノ多キ所ロ草木ノ充分繁茂スル所ロニ少ナカラズ飛揚ノ速力ハクロアゲハニ同シト雖モ比較上ヤヽ不活潑ノ様常ニ見受ル所ロナリ靜止ヲ見ルコト多シ翅ヲ直立シテ靜止スルコト稀ニシテ多クハ水平ニス

(5) Papilio sarpedon, L. ハ Machaon ニ次テ少ナキ蝶ナリ山ニ多ク野ニ稀レ此蝶ハ高山ニテ度々採集ニ掛カルコト

右三件　在岐阜市京町　名和靖

●Melanites n. sp. ノ新產地　前號雜誌ニ於テ太田義弼君ガ Melanites n. sp. ヲ安藝山形郡ニテ採集セラレタル報知アリシガ余モ亦本年十月十日當山形市近郊ニテ只二疋ヲ採集セリ孰モ其翅大ニ破損シ居レ圧本種タルヿ疑ナシ本種ノ標品ハ尚一個本校ニ在リ稍完全ナリ但採集年月ワカラズ何月頃羽化スルモノニヤ(山形尋、師、ア、キ、)

●靜岡ノ Papilio.　Papilionidae 科中 Papilio 屬ハ吾靜岡ニテ得タルモノハ七種ニシテ其他多年ノ採集未タ得タルコトナシ今其七種ヲ擧クレハ左ノ如シ

(1) Papilio xuthus, L. ハ靜岡ニ最モ多キ蝶ニシテ山野ノ別ナク產セザルトコロナシ然レ圧深山採集ニテ得タルハ至テ稀レナリ凡ソ直立三町餘ノ山ニテハ常ニ採集ニ掛カルト雖モ野外ノ多キニ勝ルコトナシダイダイ、ミカン、ユヅ、カラタチ、キンカン等ノ繁茂スル所ニ多ク又之ヲ採集スルニモ容易ナリ又其他種々ノ草木ニ飛揚シ花蜜ヲ吸收セルモ常ニ輻輳スル所ロハ以上ノ植物ニ多クシテ產卵ノ時ハ終日内ニ數回此植物ニ飛來シ嫩葉嫩芽ヲ撰ンデ必ズ產卵ス余カ數回ノ試驗ニヨレハ飛來時間ハ凡ソ一定セル如ク見受ケタリ朝午前九時前ハ殊ニ飛來スルコト稀レナルモ十一時頃ヨリ午後三時頃迄ハ最モ飛來ノ數多ク雌ハ飛來ノ一回每ニ產卵シテ去リ一日内五六回モ來リ多少ニ係ラズ產卵ス抑モ其產卵スルヤ其葉ヲ撰ブ樣ニ見受ケタリ概ネ葉裏ニ產卵ス最モ葉面ニ產卵スルヿアレドモ余ガ常ニ經見スルニ產卵ノ多寡ハ葉ノ表裏ニ比較上差異アリテ表面ニ產卵スルヨリモ反テ裏面ニ產卵スルコト多シ斯ク以上ノ差アルハ夏月產卵ニ見受ケル所ロニシテ春月ハ未タ充分ノ經見モ行キ屆カザリキ余ガ臆測ナレ圧夏月ハ日光炎熱ノ高キ故孵化シタル仔虫カ直接ノ光線ヲ避クルニ便ナルカヲ信ズ凡テ成虫ハ植物ノ花ヨリ花ニ轉ジ花蜜ヲ吸收スルモ決シテ其他ノ植物ニ產卵スルヲ見ザリキハ果シテ仔虫ノ食フベカラザル植物ノ葉ニシテ生活上ニ關係シテ產卵セザルモノナルベシ此蝶ノ習慣ニツキ注意スルニ花蜜吸收ノトキハ花ニ脚ヲ付ケナカラ翅ヲ振リツヽ

テ見世物ニ供スル両短ノ蛇トハ事變リ双尾ノトカゲナリ頭部ヨリ右ノ尾端迄六寸強左ノ尾迄ハ五寸六分弱他ハ尋常ノモノト異ナラズ最モ通常一本尾ナルニ二本ヲ有スレハ多少生理上何レカ發育不完全ナルモノナルガ両尾ノ大小別段差異ナシ僅カニ左ノ尾ハ少々太ク短カクシテ長短四分ヲ爭フノミ尾ノ裂ケ目ヨリ之ヲ測カルニ右ハ二寸強左ハ一寸四分強餘程深ク裂ケ一寸珍ラシキ不具ナリ然シ此モノ丶生理上モ敢テ不都合ノ出來方ニアラザレハ充分生長シタルモノニ相違ナシ肛門ハ尾ノ裂根ニアリ、ト在靜岡ノ丹羽氏ヨリ報アリ

●**六足蟲類の觸鬚の用**　一二三年前プラトー(Plateau)氏がなしたる此問題に就ての研究の結果は「嚙虫類か餌を取るに當りては其觸鬚あるものは强ち用ゐるものにあらす」と云ふにあり氏が二三の甲虫の常習を觀察し或は觸鬚切斷の實驗よりなしたる決論は元來知られたる事實に新らしき色を加へたるに相違なきも敢て既往諸の學者がなしたる同し研究の結果を弱くするとなきとを此方向の學問に熱心なる彼のワスマン氏は認めたり氏が六足虫類の口部の比較研究と生活常習の觀察とによりて得たる事實は蓋し其證なるへし

六足虫類口部の比較解剖上より見るときは觸鬚は動物が獨立に餌を取りて生活するとき一方の用をなすものなること明なりこれ多少獨立に餌を取り又他の六足虫に養れる丶甲虫及ひ膜翅虫類にありてハ常に其作用の度に從て退化し殆んど全く消失する迄に至れるものあるを以て知るへし其實例として吾人は今第一、黑蟻、白蟻の通常の客として現る丶もの、第二、奴隷を養ふ蟻族に就て述へんとす

彼の決して蟻と同居せさる或ハ僅かに之れと交際する甲虫類例へバ觸鬚類(Pselaphidae)に在りては皆な充分に發育したる四節の顎鬚を有す Pselaphini に在りては其鬚全体長の半に達すること少からす觸鬚甲虫の名を得る遇然にあらさるなり之に反して蟻巣を以て其常棲の所となす族にありては非常に短き顎角を有す Batrisus, Abatri-

常ナリ高サ直立三町餘ノ山々ニハ随分多シ多ク栗樟等ノ森林ニ多ク野外ハ比較上少ナシ飛揚ノ速力ハ Papilio ノ中最モ速力ナルヲ見受ケタリ凡テ擧動活潑ニシテ飛揚ノ際ハ採集ニ最モ困難ナレ圧多ク雌雄ト戯ルヽコト多ケレハ其際雌雄兩共採集スルコト容易ナリ余カ常ニ試ミルニ此特性トシテ最初飛揚スル所ロノ近傍ニノミ往來シ必ズ以前飛揚シ居リタル所ニ毎度飛ヒ來リ飛揚ノ塲所ヲ亂リニ移轉セズ之ヲ襲フモ身体ニタモヲ當ルニアラザレハ概子以前ノ塲所ニ又々飛來スベシト雖モ一タビ身体ニタモヲ當テ逃カス時ハ驚ヒテ再ビ以前ノ塲所ニ容易ニ來ラス全ク來ラザルコトモアリ（以前ノ塲所ニ飛揚ト云フハ飛來シ靜止スルヲ云フニアラズ飛來シ其ノ所ロヲ往來スルヲ云フ）靜止スルコト稀ニシテ靜止スルトキハ翅ヲ直立スルアリ水平ニスルアリト雖モ概子三十五度ノ角ヲナシ時々兩翅ヲ上下ス

(6) Papilio Maaski Men ハ飛揚ノ速力ハ Alcinous ト差異ナシ田畝ニ飛揚スルヿ稀ニシテ何レモ野ニテハ樹木繁茂ノ所ロニ多ク禾本植物ノ繁茂スルトコロニ飛來スルコト比較上少ナシ Papilio 中ニテハ飛揚不活潑ニシテ Alcinous ヨリモ又鈍ニ見受ケタリ随分靜止スルコト多シ靜止スルトキハ翅ヲ直立スルコト稀ニシテ多クハ水平ニス花密吸收ノ時ハ前ニ陳述スル蝶類ト差異ナシト雖モ多量ニ産出セザルト見ヘ多分ノ採集ヲ未タ嘗テセザリキ山野兩共稀ナリ

(7) Papilio Masilentus, Men. ハ飛揚ノ速力ト云ヒ靜止ト云ヒ Demetrius ト類似スレ圧七種ノ内最モ少クシテ一年間途ニ見受ザルコトモアリ之ヲ採集スルハ概子山ニシテ野ニハ稀レナリ靜止スルコト稀ニシテ若シ靜止スルトキハ翅ヲ直立スルコトアレ圧概子水平ニス飛揚ノ速力ハ活潑ナリ以上陳述シ來リタルハ余カ採集中常ニ見受ケタル概畧ノ習慣ナリ

静岡　丹羽甲子郎

●双尾ノ蜥蜴　今回靜岡尋常中學校生徒三角茂喜君カ遠州氣賀ニテ採集シタル爬蟲類ハ余ノ觀察スル所多分アカトカケナラント考フ當節流行ノ山師ガ木戸錢ヲ貪リ

514

發生特に下顎の形狀等是れなり
Atemeles 及ひ Lomechusa の近親なる Dinarda, Myrmedonia Carotoca の近親なる Calodera, Tachyusa Spirachtha の近親なる Homalota は共に狹くして深裂したる舌、强大に發育したる長き顎鬚を有すれとも彼の黑蟻白蟻の常客なる諸屬にありては其下顎の形も甚た之れに異なれり即ち舌ハ唇鬚の縮小と同時に增大す而して其比例宛も生活の獨立の度に準するものヽ如し彼の蟻の爲めに養はるると同時に可なり獨立して生活し得る Atemeles の屬にありてハ廣くして裂目なき舌を有し又た決して蟻の爲めに養れざる Myrmedonia, Dinarda より比較的短き鬚鬚を有せりまた Atemeles より多く蟻に養るヽ Lomechus にありては其舌は比較的これより大にして且つ廣く、唇鬚は彼より短し白蟻の常客なる Carotoca にありては舌及ひ唇鬚ハ Lomechusa に於けると殆ント全一あり Spirachtha にありては其舌甚た大に且つ廣くして下唇の前部に覆ふに至る之に反して唇鬚ハ益〻退却せり

是によりて觀るときは黑蟻白蟻の常客なる短翅類の甲虫にありては唇鬚の發育は其生活の獨立の度と正に正比例するものなり唇鬚の退化は又た舌の增大（特に廣くなること）に比例ずる是れ即ち甲虫は之によりて蟻の下唇を以て與へたる汁蟻を容易く且つ速に舐り盡し得る作用あるを以てなりこれ其食餌を取るに舐るものなるか故に廣大なる丸き舌を有せり故に短翅甲虫中上に述へたる屬の有せる舌の形狀は幾分か其飼主の舌の形狀に似つヽあるを見るへし　（つゞく）

●うみがめ　友人菅村三之氏は久しく宮崎縣に奉職したる人なるが氏の話によれは日向國飫肥の近在金津港近傍海岸宮崎近邊の海濱（共ニ砂濱）に多く產卵する由而して其卵ハ同地に在りては食用の爲め販賣するとか但あかうみがめ（Chrlonia caonana）なるやあをうみがめ（Chelonia viridis）なるやは詳ならされとも仝氏の話の摸樣より察するに多分あかうみがめの方なるへしと思ハる　（な、さ、）

sops, Centrotoma, Chennium 等の諸屬は歐羅巴に於ける其例なりとす Chennium 屬にありては觸鬚は只三節あるのみ此屬の棍棒狀なる觸鬚の形狀と云ひ其觸鬚の退化の狀と云ひ甚た棒角類（Clavigeridea）に近し故に歐洲産觸鬚類中此篇ハ食客生活上最高等なるものなり

棒角類（Clavigeridæ）の目標として見るへきもの三つあり、一、蟻をして舐らしむる汁液を吐出す分泌管の束、二、蟻と觸角交際を得せしむる爲めに變化しゐる奇態なる觸角の形狀、三、肢部に付着する諸器特に觸鬚の退却是なり

棒角類の顎鬚は下顎の本幹上ゟ少し突起したる一節より成るライテル氏に從へハ口部の此形狀は棒角類と觸鬚類とを區別するに甚た緊要なる分類上の徵標なりと云ふ然れとも亦た動物の常習を研究するに小ならさる價ありとす凡て棒角類は蟻の爲めに飼るゝ常客にして食客生活上には最高等の位を有す他の常客と呼ハるゝ短翅類の甲類 Atemeles 及ひ Lomechusa の如きは同時に蟻の仔虫を掠食すれとも棒角類に至りてハ專ら蟻に依りて食客生活をなすものなり蓋し口部の變化恐らくはこゝに起因す棒角類中 Claviger, Aderunes の如き二三屬の共目の盲なることは共盲ならさる近親諸屬よりは却て大なる關係を其飼主より受けたるか如くに全棒角類の常習上より口部（特に顎鬚の退歩）に及す影況ハ甚た著しきに至りしことを見るへし若觸鬚ハ獨立生活上に緊要なる用なしとするときは近親の族なる獨立の生活をなす觸鬚族には强大ゟ發育するにも係らす何故に棒角類には斯く迄顎鬚は退却せしか余ハ理會に苦む

黑蟻白蟻の常客を以て常習とする短翅類(Staphinidae)の甲虫の口部の比較研究は亦た同し結果を與ふ此大なる族中に今まて蟻客として知られたるハ只 Atemeles, Lomechusa の二屬にして又た白蟻の常客として知られたるハ Carotoca, Spirachtha の二屬あり此等諸屬は分類上にハ甚た近親なりとは云ふ可からさるも其飼主と共棲したる決果として得たる奇態なる適應上の一致あり則ち後躰の異常なる膨大、特別なる分泌房、椽狀隆起、關桂狀副器等の

●綠色はいどら蟲 Hydra viridis (?).　日本ニテ此迄見タルはいどら蟲ハ皆褐色ノモノニシテ綠色ノモノハ未タ知ラサリシ然ルニ過日農科大學々生外山氏カ同學構內植物園ノ水草ヲ入レアル水溜リ內ニテ得ラレタルはいどらハ之レヲ檢セシニ皆綠色ノはいどらナリ右ハ歐洲ニ生スル Hydra viridis ト能ク相似タルモノナレハ之ト同種ナラント思ヘトモ暫ク玆ニ疑點ヲ附シ置キ他日悉シク取調ヘタル時又御報道致スヘシ、又理科大學ノ菊地松太郎氏モ數年前三ツ橋通ノ前東京大學門前ノ溝ニ於テ綠色ノモノヲ見ラレタリト余ニ語レリ然シ此種ハ余ハ未タ顯微鏡下ニテ見タルモノニ非ラス又同氏モ悉シク見タルニ非サレハ確實ノヿハ云難ケレトモ或ハ同シク H. viridis ナランカ何レニ致セ學門上面白キヿナリ　石井千代松

# 東京動物學會記事

●例會　去十一月廿一日午后二時ヨリ帝國大學動物學敎室ニ於テ月次會ヲ開ク佐々木忠二郎君ハ曩キニ獨逸國留學中動物學ニ關シテ研究セラレタル鹹水產 Heliozoa（大サ〇、八ミメ、）ニ就テ其研究ノ方法ヨリ其モノ構造幷ニ分裂生殖ノ摸樣等ヲ演說セラレ終テ歐米巡回中ノ珍談逸事等ヲ談話セラレタリ當日出席員十九名午后四時散會ス

●會員彙報　入會者

兵庫縣印南郡曾根郵便局長　入江辰次君

●寄贈交換書目　先月中本會ニ領收シタル者左ノ如シ

| | |
|---|---|
| 東京醫學會雜誌第五卷二十一、二號 | 東京醫學會 |
| 植物學雜誌第五卷五十七號 | 植物學會 |
| 大日本水產報告第百十四號 | 大日本水產會 |
| 北水協會報告 | 北水協會 |
| 仝　總目錄　壹部 | 仝　會 |
| 仝　號外　壹部 | 仝　會 |
| 北海道水產調查區畫圖　壹葉 | 仝　會 |
| 北海道重要水產物分布圖　壹葉 | 仝　會 |
| 北海之殖產第拾四號 | 勸農協會 |
| 牧畜雜誌第六十八、九號 | 牧畜雜誌社 |
| 獵の友第壹卷二號 | 獵友社 |
| 大日本農會報告第百二十四號 | 大日本農會 |
| 日本蠶業雜誌第四十三號 | 日本蠶業雜誌社 |
| 日本園藝會雜誌第三十號 | 日本園藝會 |
| 成醫會月報告第百十八號 | 成醫會 |
| 日本敎育會雜誌第百十一號 | 大日本敎育會 |

●飯島魁氏ノ鳥類目錄別摺出來セリ御望ノ會員諸君ハ御申越シ有之度候

●去ル十月下野國芳賀郡茂木町大字茂木ノ宿所付ニテ大久保正明ト申御方ヨリ本會ヘ二三ノ質問有之候故早速報答致セシ所茂木郵便局ヨリ名宛ノ人更ニ無之ト付箋シテ返却セリ

○正誤　動物學雜誌第三十六號四百三十頁下欄十六行中「二」個宛とあるは「一」個宛の誤なり

（遞信省認可）

編輯兼發行者　神田區錦町三丁目六番地　井上蘇吉

印刷者　京橋區築地貳丁目拾六番地　高木麟太郎

發行所　東京市神田區裏神保町一番地　敬業社

明治廿五年一月十五日發兌動物學雜誌第三十九號附錄